文學士佐成謙太郎著

謡曲大觀

第二巻

東京 明治書院

例言

全般に亘つて

能樂の演奏には、シテ方・ワキ方・狂言方・囃子方等の役柄がありますが、その主體をなすものはシテ方で、一般に行はれてゐる謠本も亦シテ方のものであります。そして、このシテ方には觀世・寶生・金春・金剛・喜多の五流（梅若も一流を樹立しましたが、その謠本は觀世流のものを踏襲してゐます。）がありまして、各流二百十番乃至百八十番を現行曲としてゐます。そして、その大部分は各流共通のものでありますが、その間に多少の出入がありまして、五流現行曲は凡て二百三十五番となるのであります。（最近金剛・喜多の二流で廢曲としたものは、當然これを削除し、金剛流で新しく加へることとしたものも、未だ流布してゐないのでありますから、これを省略しました。）

本書は上述二百三十五番を、〔翁〕は別曲として第一に擧げ、〔鸚鵡小町〕以下を曲名の五十音順に從ひ、毎曲、解說・本文・語釋・口語譯・考異の五部門に分つて、これを掲げました。そして、本文・語釋・口語譯の三項は、彼此對照する便宜を考へて、上中下の三段に、互に相對するやうに記しましたが、その間に自ら繁簡の差異があつて、多少前後するこ

とを免れませんから、一曲を數節に分つて【一】【二】【三】等の符號を附し、識別し易いやうにしました。

なほ、各部門を通じて、謠曲名には必ず【 】の符號を附けてこれを表示し、流名には往々觀(觀世)・寶(寶生)・春(金春)・剛(金剛)・喜(喜多)の略符號を用ゐました。

解說について

解說に於ては、また能柄・人物・所・時・異稱・作者・梗概・出典・概評の諸項に細分して記しました。

イ能柄

能樂五番立の分類、脇能・二番目・三番目等の分類は、確乎たる根據のあるものともいへませんが、その曲柄を知るのには甚だ便宜なものであり、夢幻能・劇能等の名稱は、著者の私に與へたものでありますが、これも脚色の大體を知るのに便宜でなからうかと思ひましたので、兩者とも毎曲にこれを掲げました。

ロ人物

舞臺に登場する毎曲の役柄・人物は、發聲順又は登場順によつて掲げました。

ハ　所

謡曲に描かれてゐる場所は、一曲の中でも多少移動するのが普通でありますが、ここには、その主要な場所を擧げました。前後の二段に於て主要場所の移る場合には、これを表示しました。

ニ　時

謡曲に描かれた時は、明確でないものが少くありません。さうした場合には、能樂實演の取扱上指定してゐる季節を、括弧を施して、(一月)(二月)のやうに記しました。

ホ　作者

謡曲の最も著しい作者が世阿彌であることには疑ひがありませんが、どの曲がだれの作であるかは、明言し難いものが少くありません。本書には、世阿彌の著書によつて明らかなものは勿論これを明示し、なほ後世の書ではありますが、作者目錄として相當有力なものと認められてゐる吉田兼持の能本作者註文、觀世元章の二百十番謡目錄の說をも揭げて置きました。なほこの外、作者、制作時代等を知る傍證となるべき古記錄、金春禪竹の著書、室町時代公卿日記等の所見をも揭げました。この項に就ては、丸岡桂氏の古今謡曲解題から得たものが多いのでありますが、著

者自身も亦同樣の搜索を試みましたので、同書の遺漏を多少補ひ得ました。なは寛文學士の言經卿記に就ての研究に負ふ所も少くありません。

ヘ梗概

一曲を通じた口語譯を試みたのでありますから、梗概は一見してその大要を知り得る程度にとゞめました。

ト出典

謠曲の主材は大部分先進文藝から得たものでありまして、これを知ることは、謠曲作者の創作態度を見る上にも、謠曲を正しく解釋する上にも、必要なことでありますから、典據の索め得たものは、なるべく詳しくこれを引いて、謠曲文と對照する便に供へました。

チ概評

すべて文學藝術の批評鑑賞は、その人々の主觀から出るもので、客觀的な一定の基準は定め難いものだと思ひます。著者の主觀から出發した批評などを述べるのは、誠にをこがましいことではありますが、初心の人々には多少參考になることもあらうかと思つて、敢て卑見を略述しました。

本文について

イ底本の選定

謠曲の本文は、諸流とも大體同一でありますが、その間に多少詞章の出入した所があります。それで、本書の底本には、謠曲の大成者觀阿彌・世阿彌の流系であり、その後引續いて現在も最も流布してゐる觀世流のものを採り、觀世流で行はれてゐないものは、上懸として觀世に最も近いそして現在觀世に次いで廣く行はれてゐる寶生流を採り、上懸二流に行はれてゐないものは、下懸三流の中で流系の最も古い金春流を採り、次いで金剛流を採り、最後に五流の中最も新しい喜多流の文を採りました。

ロ本文の校訂

本文の底本には、その流の現行謠本を採りましたが、漢字・假名遣等は、古謠本及び諸流謠本を參酌して、その穩當なものに從ひました。

用語・用字は各流を通じて、一定の樣式に統一しましたが、句讀はすべてその流現行曲の主張に從ひました。

漢字には、「何々にて候」「何々にて候へば」の外は、「さん候」などと、候を濁音で謠ふ場合も

すべて振假名を施しました。そしてその振假名は字音假名遣、歴史假名遣に從ひましたが、謠曲には特殊な謠ひ方が少くありませんので、さうした場合にはすべてその謠ひ方の發音に從つて、「御字」「青墓」「危く」などと記し、「謠ふ」「榮うる」なども、「うタう」「さカうる」と謠はないことを明示する爲に、「謠ふ」「榮うる」と記し、假名でも、讀み誤る恐れのあるものは、「今日見ずは」などと、特に片假名を傍につけて、これを明示しました。

謠曲では、上の音が字音のタ行又は撥音ンで、その次の音がア行・ヤ行・ワ行、又はハ行「は」である時は、その音がタ行又はナ行或はその拗音に轉じて、「今日は」「御入り候」「陰陽」などと謠ふものであります。かうした場合、漢字の振假名にはその發音假名を記しましたが、假名書きの場合には、これに一々傍訓を施すのは、餘りに煩はしいので、省略しました。それらはすべて、「善神は」「他生の縁ありて」「利物を」などと謠ふのであります。

章句・節附の名稱、次第・道行・下歌・上歌・クリ・サシ・クセ・ロンギ等は、すべて謠本の指定に從つてこれを附し、呼掛・語・待謠等の名稱も括弧を施してこれを記しました。たゞ、カヽル・打切は本書の如き性質のものには、煩はしいばかりで必要のないものと思

つて省きました。

なほ謠がかりの部分と、節をつけないたゞ詞の部分とは、その句頭に、前者には『後者には「の印を附けて、これを辨別しました。(口語譯等に附けた「」は、會話文又は引用文を表示したもので、これとは全く意味を異にしてゐます)

ハ本文の補修

能樂の實演を一度でも觀たことのある人は、誰でもすぐ氣づくやうに、謠本や從來の謠曲註釋書に記してゐる詞章は、能樂詞章の全部ではありません。謠本に記されてゐない狂言詞やワキ詞(時としてはシテ詞をも)を知らなくては、精細に謠曲を理解することが出來ないのであります。たゞこれらの詞は寫本として、役者の家家に相傳してゐるだけで、世間には殆ど出てゐないのでありますが、著者は幸ひにしてこれを見出すことが出來ましたので、すべての曲を通じて、舞臺で述べられるほどの詞は、洩れなくこれを收めるやうに力めました。その中、

シテ詞・ツレ詞　は、その流現行のものに從ひ、

ワキ詞　は、現在家元の存續してゐる唯一のワキ方である脇寶生流の古寫本により、寶生流に求め得なかつたものは、高安流・春藤流などに從ひました。(寶生流以外

に據つた場合は、その都度その旨を斷つて置きます)

狂言詞　は、もと狂言には大藏・和泉・鷺の三流があり、現在はその中大藏・和泉の二流が行はれてゐるのでありますが、その詞は謠曲の他の部分に比べて流動性の多いものでありまして、現在行はれてゐるものでも、同じ流の中にも、例へば大藏流の茂山派と山本派、和泉流の三宅派と山脇派と野村派など、それぞれ可なりの相違があるのであります。それで、本書では成るべく古い原形に近いものに據りたいと思ひ、森川杜園舊藏の大藏流古寫本(推定寛政頃)に據り、大藏流にないものは和泉流に據りました。

二　型附

能樂は一種の劇であり、從つて謠曲は一種の脚本と見られるのであります。それで「ト書き」のない脚本が、舞臺を想像するに不都合であるやうに、型附の記されてゐない謠曲文は、能樂の演奏を想察することの困難な、從つて謠曲として十分に鑑賞することの出來ないものだと思ひます。それで、本書にはこの型附を「ト書き」風に記して見ました。そして、その型附は著者所藏の觀世大夫清親型附本を本とし、帝國圖書館所藏觀世流舞本その他の型附本、木下敬賢氏の能樂蘊奥集、大和田建樹氏

の「能の栞」、池内信嘉氏の「能の見方と謡の聞き方」、謡曲界連載の「うたひ通解」、大觀世連載の「能の型」等を參酌し、殊に著者の觀能手控を參考としました。

尤も、能の型附は極めて些細な點まで嚴密に規定してゐますと同時に、變型の少くないものでありますが、さうした詳細な型附の記載は本書の目的とするところでもなく、又却つて全篇通讀の妨げともなるものでありますから、たゞ演出の大體を想像し得る程度に略記することにとゞめました。

なほ、現行曲二百三十餘番のうち、凡そ百番内外が屢、實演せられるもので、型附本等の參照すべきものも多いのでありますが、他の百數十番は實演せられる機會が少く、型附も殆ど見當らないのであります。 著者はなるべく廣く求めて、その大概を知るに力めましたが、一二の曲に就ては、裝束附及び登場人物の出入を記すにとゞまつたものがあります。

ホ 活字の差別

以上擧げました、謡本以外の狂言・ワキ等の詞及び型附は、謡曲として完全な本文を作る爲に必要な條件であると信じますが、謡本に記されてゐる部分とその他の部分とには、可なり輕重の差がつけられてゐるやうに思はれます。 その上、謡本以外

の部分は、著者が必要と認めて新しく加へたものでありますから、その差別を明らかにする爲に、謠本に記されてゐる部分は十二ポイント、その他の詞は九ポイント、型附は八ポイントとして、活字の大小を以てこれを辨別しました。――狂言詞に、謠本にも時折記してゐることがあります。その場合、その文が實演に使用してゐるものと同樣のものである時にはこれに從ひ、大差ある時には著者の用ゐた狂言底本の文に從ひ、謠本の文を參考として上欄に掲げ、いづれにしても、その都度これを明示して置きますが、その謠本に從つたと否とに拘らず、狂言詞はすべて九ポイントとして、體裁を整へました。

語釋について

謠曲の語句の解釋は、夙く豊臣氏の頃から大仕掛に行はれ、德川末期、犬井恕軒の謠曲拾葉抄に於て一度大成したのであります。その後、明治時代に入つて、大和田建樹氏の謠曲評釋、丸岡桂氏の觀世流改訂謠本(刊行會本)辭解等に於て、更にこれを修補せられて、著者の新しく加へ得る所は甚だ少かつたのでありますが、多少は修正し得たかと思つて居ります。

本書に掲げた語釋は、なるべく煩雜にならないやうに、要領を記すやうに注意しましたが、引歌・引用句などはなるべく洩れなく掲げるやうにし、縁語・掛詞なども一々指摘するやうに心掛けました。

語釋は本文の上段に置いたのでありますが、それではいひ足りない時には、その曲の末尾に「附記」として掲げました。

口語譯について

謠曲の口語譯、謠曲文の全體を通じて、一貫した解釋を施すことは、これまでまだ試みられたことがないと思ひます。否、これまでは、謠曲は「綴れ錦のちやんちやんこ」のやうなものだ、などといはれてゐて、全篇を通じた逐語的飜譯は出來にくいものと考へてゐた人が少くないやうに思ひます。著者は大膽にもこれを試みて、その二三十を謠曲界に連載して、識者の教へを乞うたのでありますが、こゝにすべての曲に亘つて口語譯を試みることとしました。著者自身が讀んでもものの足りない節が少くない、將來大に修正せらるべきものではありますが、從來全くなかつたものだけに、讀者諸君の參考にもならうかと期待してゐるのであります。

考異について

イ　諸流異同

前に述べました通り、五流の詞章には多少の異同がありまして、この差異を辨別することは、各流の主張を見る上にも、謡曲を解釋する上にも、參考となるものでありますが、些細な相異まで一一指摘しますと、非常に煩雜なものとなり、頁數も甚しく増加しますので、些細なものはこれを省略し、やゝ著しい相異は必ずこれを掲げることとしました。

ロ　古謡本異同

謡曲の詞章は、殆ど原形のまゝ傳へられて來たのでありますが、元祿以前とその以後とでは、やゝ著しい差異の認められるものがないでもありません。そして、この古謡本、從つて原形に近いものを知ることは、いづれの點から見ても、大切なことだと思ひますので、慶長光悅本をはじめ元祿以前の古謡本の索め得ましたものは、その最も古いものに從つて、これを現行曲と比較して、その相異は大小となくすべて原文のまゝで指摘しました。

なほ、世子六十以後申樂談儀、金春禪竹の五音次第・五音三曲集等に謠曲の一節を引いてゐますものは、これこそ原形を知る最も大切な資料でありますから、本項の末、又は解説の作者の項に於て、その全文を擧げ又は現行曲との異同を辨じて置きました。

能畫について

毎曲冒頭に掲げました演能圖は、緒言に申し述べました通り、すべて深見坦郎畫伯の揮毫に係るものであります。これまでにも、演能の版畫又は寫眞は數多くありますが、現行曲すべてを網羅したものは、深見畫伯のものが最初であると思ひます。畫伯が本書の爲に苦心して終にこれを完成せられたのは、また一には斯道の劃期的事業であつたと信じるのであります。

謡曲大観第二巻 目次

こ

さ

賀茂（かも）

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】　脇能　複式夢幻能

【人物】　**ワキ**　室の神職、**ワキツレ**　從者（二人）、**前シテ**　里女（賀茂御祖神（靈））、**前ツレ**　里女、**狂言**　賀茂末社神、**後ツレ**　天女（御祖神）、**後シテ**　別雷神

【所】　山城國　賀茂

【時】　六月中旬

【異稱】　古く「矢立鴨」「矢立加茂」ともいつた。

【作者】　能本作者註文、二百十番謡目錄ともに禪竹作としてゐるが、作者註文に「但與は賓生大夫作」と註してゐるやうに、後人の修飾したものであらう。申樂談儀後人加筆の分に、永正十一年十月廿八日南都兩壽びの能に「矢立鴨」を演じたこと、言經卿記に文祿四年二月廿八日「やたてかも」を註釋したことを記してゐる。

【梗概】　播磨國室の神職が、室と御一體である賀茂明神に參詣して　川邊の新しい壇に白羽の矢を立ててあるのを見て、折柄御手洗の水を汲みに

來た女に、その謂れを尋ねると、女は昔秦氏女が川に流れる白羽の矢を拾つて歸り、思はず懷胎して男子を生んだ。その子が別雷神で、その母と矢とともに、賀茂三所の神となつたと物語り、自分はその神であるといつて消え失せる。やがて、天女(母御祖神)及び別雷神が影向せられ、君を守り國を護る樣を示される。

【出典】 賀茂神社の緣起に據つたものであるが、この緣起には諸書數多くあるので、謠曲がその孰れに據つたかは明かにし難い。本曲の內容と相近いもので、最も古いのは、釋日本紀所引の山城國風土記であるが、これよりも更に近似してゐるのは、本朝月令所引の秦氏本系帳で、同書には、

初秦氏女玉依比賣、出二于葛野河一、洗二濯衣裳一、時有二一矢一自レ上流下、女子取レ之還來、刺二置於戸上一、於レ是女子無レ夫懷姙、既而生二男子一也、父母怪レ之責問、爰女子答云不レ知、再三詰問、雖レ經二日月一遂云レ不レ知、父母以謂、雖レ然無レ夫而無二生レ子之理一也、我家往來近親眷屬隣里鄕黨之中、其夫應レ在、因レ茲辨二備大饗一、招二集諸人一、令二彼兒執一レ盃、祖父母命云、父ト思人ニ可レ獻レ之、于レ時此兒不レ指二衆人一、仰觀行指二戸上之矢一、卽便爲二雷公一、折二破屋棟一昇レ天而去、故鴨上社號二別雷神一、鴨下社號二御祖神一也、戸上矢者松尾大明神是也、

是以秦氏奉レ祭二三所大明神一。

とある。或はこれに據つたのでなからうか。

【槪評】 脇能神事物の中でも氣品の高い曲柄である。殊に前段のロンギは美しい文である。たゞ後段のツレ天女は御祖神であることが、稍不鮮明で、普通の天女が御祖神の神德を讚美してゐるもののやうにも解せられるが、人物が高貴の方である場合には、その科白にも敬語を用ゐるのが謠曲の慣用で、これもその慣用に從つたものであらう。

前段

【一】 舞臺は初め揚幕開きて、ワキ室明神の神職、ワキツレの從者を從へて登場、

【二】 後見、注連を張りたる臺に白羽の矢を立てたる作物を正面先に出す。
次第の囃子にて、ワキ室の神職、大臣烏帽子・上頭掛・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキツレ從者二人、ワキと同樣の裝束にて舞臺に入り、向合ひ、

【三】

○清き水上尋ねてや―賀茂川の清き流の水上を尋ねる意と、わが奉仕する室明神の本社を尋ねる意とを兼ねていふ。
○賀茂の宮居―山城國愛宕郡賀茂川の上流にあり、上下の二社あつて、上賀茂の社は賀茂別雷神社と稱へ、賀茂別雷命を祀り、下賀茂の社は賀茂御祖神社と稱へ、別雷命の御母玉依姫及びその外祖父賀茂建角見命を祀る。
○室の明神―播磨國揖保郡室津にある賀茂神社、別雷命を祀る。
○播磨潟―播磨の海。
○室の樞の―室の戸といひかけて、樞と續け、その緣語開けを曙にいひかけた。
○飾磨―播磨國にあり、昔染料の褐を産出した所で、金葉集讀人知らずの歌に「いとせめて戀しき時は播磨なる飾磨に染むるかちよりぞ來る」とあり、旅衣の色を染むるといひかけて、褐を出し「かち」の音を受けて「徒路」といひかけた。徒路は陸路の意。
○上る雲居―雲居は皇居。都に上る意。

ワキ ワキヅレ 次第「清き水上尋ねてや。清き水上尋ねてや。賀茂の宮居に參らん

地取の後、また次第を謡ひ返して、ワキは正面に向き、(ツレは下に居り)、

ワキ「抑もこれは播州室の明神に仕へ申す神職の者なり。さても都の賀茂と。當社室の明神とは御一體にて御座候へども。未だ參詣申さず候程に。この度思ひ立ち都の賀茂へと急ぎ候

ワキ・ワキヅレ向合ひ(ツレ立ち)

ワキ ワキヅレ 道行「播磨潟。室の樞の曙に。室の樞の曙に。立つ旅衣色染むる飾磨の徒路行く船も。上る雲居や久方の。月の都の山陰の。賀茂の宮居に着きにけり賀茂の宮居に着きにけり

ワキ、「上る雲居や久方の」と正面に向き、二三足出で、またもとに歸りて賀茂に着きたる心。道行濟みて、ワキは正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。賀茂の宮居に着きて候。又是なる川邊を見れば。新しく壇を築き。白木綿に白羽の矢を立て。渇仰の氣色見えたり。謂れのなき事は候まじ。人來つて候はば尋ねう

神職「賀茂川の清らかな流れの水上を溯つて、わが本社賀茂明神へ參詣しよう」

と次第を謡つて旅の目的を述べ、

神職「私は播磨國室の明神にお仕へしてゐる神職の者です。さて都の賀茂明神とわが室の明神とは同じ御神體ですが、まだ參詣したことがないので、今度思ひ立つて、都の賀茂へ急いで參るのです」

と見物人に自己紹介をし、

神職「播磨潟の室の津を夜の明方に旅立つて、褐の染料で名高い飾磨のあたりは陸路で行き、それから船に乗つて京に向ひ、美しい都の北方にある賀茂のお社へ着いた」

と旅の樣を述べてゐるうちに、京都に着いた態で、舞臺は京都賀茂の社となる。

○久方の—月の枕詞。
○月の都—月は都を稱へた詞。

【二】
○御手洗—神の社前を流れる川。
○清き心に澄む水の—清き神の御心を顯して澄み渡る水との意。
○直に頼まば—心を正直にして神に祈らばとの意。
○神も糺の道—神が正邪を正し給ふとの意を糺の森にいひかけた。糺の森は下賀茂の社のある地。道は人の通ふ道と神の道とを兼ねていつたのである。
○なかば行く—月の半ば過ぎたことをいふ。
○秋程もなき—秋も間近い
○御祓川—六月晦日川邊にて五十串を立て麻の葉などで不淨を祓ひ清める事を夏越祓又は大祓といひ、その祓をする川を御祓川といふ。從つて川には何處といふ定めもないが、こゝには賀茂川を指していふ。
○心も澄める水桶—心も澄める身を水桶にいひかけた
○もち顏—水桶を持つといひかけた。「もちがほ」のも

するにて候

ワキヅレ「尤も然るべう候

といひて一同脇座へ行き順に竝びて下に居る。

【三】
眞一聲の囃子にて、シテ里女、面增・鬘・鬘帶・襟白赤・着附摺箔・唐織着流の裝束、ツレ里女、面連面・鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・唐織着流の裝束にて、二人とも水桶を持ち橋懸に出で、ツレは一の松、シテは三の松に立ち向合ひて、

シテ ツレ 一聲「御手洗や。清き心に澄む水の。賀茂の河原に。出づるなり

正面に向き、

ツレ二句「直に頼まば人の世も。シテ ツレ（向合ひ）「神ぞ糺の。道ならん

と謠ひて舞臺に入り、ツレは眞中に、シテは常座に立ちて正面に向き、

シテサシ「なかば行く空水無月の影更けて。秋程もなき御祓川。シテ ツレ（向合ひ）「風も涼しき夕波に。心も澄める水桶の。もち顏ならぬ身にしあれど。命の程は千早振る。神に歩みを。運ぶ身の。宮居曇らぬ。心かな

【二】
シテ賀茂御祖神社[illegible]、里女の姿をして、[illegible]の中を作り、手向の水を汲む爲の水桶を持ち、[illegible]社に參る態の趣

女「御手洗川の水が、神の清い御心を顯して澄み渡つてゐる、その賀茂の河原へ、私達は參るのです。
私達が心を正直にして、神にお祈りしたならば、この人間の濁世界でも、神は糺の森といふ名の通り、正邪をお正し下さることでせう。
はや年の半ば六月の月も半分すぎて、秋も程なく近づいて來て、御祓の日も近いうちになつたので、その御祓をする賀茂川のあたりを吹く川風も、一入涼しく、この夕暮に清い水を桶に汲み入れる身には、心まで澄み渡るやうに感じられる。とはいふものの、私達は初音間浦日足した身ではないが、壽命だけは何の障りもなく千年も久しい時を過して、かうして神にお參りすることの出來るのも、思へば神のお慈悲深いお蔭です」

といひながら、二人の女性は社前に近づいて來た態で、

ちは望月の望で、望月の如く圓滿な心を表に現した顏

○命の程は千早振る—命の程は千歳をいひかけて、千早振るとつゞけた。千早振るは神の枕詞。

○よるべの水—神に賴るといひかけた。よるべの水は袖中抄に「よるべの水とは、神社に瓶を置きて奉る水をいふなり」

○御手洗の聲—御手洗川の川音。

○初音ふり行く—時鳥の聲も、四五月の頃は初音で珍しかつたが、今は六月でその聲が古くなつたとの意。

○なほ過ぎがてに行きやらで—なほ聞きすてて通り過ぎ難いとの意。拾遺集源公忠の歌に「行きやらで山路暮らしつ時鳥今一聲の聞かまほしさに」

○今一通り村雨の—もう一度時鳥の鳴くのを聞くとの意を一通りする村雨にかけ、村雨の雲とつゞけた。「村雨の」は文の綾で、實際に村雨が降つたのではない。

○かげろふ—曇つて光のかくれること。

○夏なき・夏の暑さを知らない。

○河隈—川の曲つた所。

○汲まずとも陰は疎からじ

シテ ツレ 下歌「賴む誓ひはこの神によるべの、水を汲まうよ。上歌「御手洗の。聲も涼しき夏陰や。聲も涼しき夏陰や。糺の森の梢より。初音ふり行く時鳥なほ過ぎがてに行きやらで。今一通り村雨の。雲もかげろふ夕づく日。夏なき水の河隈汲まずとも影は、うとからじ汲まずとも影はうとからじ

と謠ひながら、入替りて、シテは眞中に、ツレは脇正面に行き、正面に向く。ワキ立ちてシテに向ひ、

【三】

ワキ「いかにこれなる水汲む女性に尋ね申すべき事の候

シテ「これはこの邊にては見馴れ申さぬ御事なり。いづくよりの御參詣にて候ぞ

ワキ「げによく御覽じ候ものかな。これは播州室の明神の神職の者にて候が。始めて當社に參り

女「さあ、ありがたいこの神樣の御加護を祈つて、手向の水を汲みませう。おゝ御手洗川の水音まで涼しくて、夏の木蔭の生ひ茂つた糺の森の梢に時鳥の聲が聞える。もはや時鳥の聲も初音の珍しさはないけれど、このあたりで聞く風情はほんとに棄てられない。もう暫くこゝに立ち留つてゐて、も一度あの聲を聞きませう。かうして夕日のかげつた、夏の暑さを知らない水際では、水を汲まないでも、たゞ木蔭に休むだけで、離れ難い親しみを感じます」

【三】

室の神職、この女性を見て、

神職「もうし、その水を汲まれる女の方に、一寸お尋ねします」

女「これはこのあたりにはお見受けしない方ですが、どちらから御參詣でございます」

神職「いやよくお分りになりますな。私は實は播磨國室の明神の神職の者ですが、今度始めてこの御社に參詣したのです。

、隈の音を重ねていふ。水を汲まなくとも、森の木蔭は涼しくて、親しみ易いとの意。
【三】
○壇ー祭壇。
○白木綿ー白い幣。
○渇仰ー深い信仰。
○あからさまーここでは、川邊のあらはな所にあるがとの意。
○神祕　神の祕事。
○あざあざしくー鮮やかに開け放しに。
○あらあらーざつと。
○一義ー一通りのわけ。
○秦の氏女　秦氏の女といふべきを誤つたのである。この說話秦氏本系帳に見ゆ解說參照。

て候。まづまづこれなる川邊を見れば（と左の方に向き）。新しく壇を築き（と作物を見）。白木綿に白羽の矢を立て、剰へ渇仰の氣色見えたり。（シテに向ひ）こはそも何と申したる事にて候ぞ

シテ「さては室の明神よりの御參詣にて候ぞや。又これなる御矢は、當社の御神體とも御神物とも。唯この御矢の御事なり。「あからさまなる御事なりとも。渇仰申させ給ひ候へ

ワキ「げにありがたき御事かな。さてさて當社の神祕に於て。樣々あるべきそのうちに。わきてこの矢の御謂れ。委しく語り給ふべし

シテ「總じて神の御事を。あざあざしくは申さねども。あらあら一義を顯すべし。昔この賀茂の里に。秦の氏女といひし人。朝な夕なこの川邊に出でて水を汲み神に手向けけるに。或時河上

とところで、まづお尋ねしたいのは、この川邊を見ると、新しく祭壇を作り、白い幣に白羽の矢を立て、しかも非常に御信仰のやうにお見受けしますが、これは一體どうしたわけなのです」

女「それでは、あなたは室の明神から御參詣になつたのでございますか。それから、今お尋ねのこの御矢は、當社の御神體とも御神物ともお崇めしてゐるものです。このやうなあらわた所にありますが、よく御禮拜なさいませ」

ワキ「なる程ありがたい事です。さて當社の御緣起については、色々尊いお話がありませうが、その中でも殊に、この矢の御謂れについて、委しく話して下さい」

女「すべて神樣の事にあからさまに申すものではありませんが、ざつと一通りのわけだけ申しませう。昔この賀茂の里に、秦氏の女といつた人があつて、朝夕この川邊に出て水を汲み、神樣に手向けてゐましたところ、ある時川上から白羽の矢が一つ流れて來て、その水桶に止まりましたのを、取つて歸り、

○別雷の神―謠曲の文では白羽の矢の神格のやうに解せられるが、實は子の神である。
○母御子―別雷神の御母、秦氏の玉依姫を指す。
○賀茂三所―上賀茂の社別雷神、下賀茂の社玉依姫、松尾の社大山咋神（丹塗矢の神格）をいふ。
○いさ白眞弓―いさ知らずを白眞弓にいひかけ、弓の矢を彌猛にいひかけた。白眞弓は梻檀で作つた弓。
○彌猛の人―武人。
○告げ白羽の―武人の政治となる世を告げ知らすといひかけて、白羽の矢といひ、矢を八百萬にいひかけた。
○弓筆―文武の道。
○上る代―上古。
○あたらぬ―相當しない、値打のない。矢の中らぬといひかけた。

より白羽の矢一つ流れ來り。この水桶に止まりしを。取りて歸り庵の軒に挿す。主思はず懷胎し男子を生めり。この子三歳と申しし時。人々圓居して父はと問へば。この矢を指して向ひしに。この矢卽ち鳴る雷となり。天に上り神となる。別雷の神これなり

ツレ『その母御子も神となりて。賀茂三所の神所とかや

シテ「さやうに申せば憚りの。眞の神祕は愚かなる。シテツレ『身に辨へは如何にとも。いさ白眞弓彌猛の人の。治めん御代を告げ白羽の。八百萬代の。末までも。弓筆に殘す。心なり

ワキ『よくよく聞けばありがたや。さてさてその矢は上る代の。今末の代にあたらぬ矢までも。「御神體なる謂れは如何に

家の軒にさして置きました。すると、この女は自分で知らないうちに姙娠して男の子を生んだのです。この子が三歳の時、多勢の人が集つた席で、『そなたの父はこの中の誰ぢや』と尋ねますと、子はこの矢を指しました。すると、この矢はすぐ雷となつて天に上り神となつたのです。この子が卽ち別雷神です」

連「その母君も神となり、この鳴雷の神、別雷神、母の神、これを賀茂三所の神と申すとかいふことでございます」

女「このやうな事を申すのは恐れ多いことであり、又ほんとの深い御緣起は、私どものやうな愚かな身には辨へられず、いかゞなものであるか存じませんが、この白羽の矢は卽ち武士が御代の政治を掌るといふことをお知らせになつて、千年萬年の後までも文武兩道の大切なことをお示しになつたのでございます」

神職「よくお話を伺へば、實にありがたい事に思はれます。しかし今お話の矢は遠い昔のものであるのに、今時の値打もない矢までが、御神體であるといふ謂れはどこにあるのです」

シテ「げによく不審し給へども。隔てはあらじ何事も
ワキ「心からにて澄むも濁るも
シテ「同じ流れの樣々に
ワキ「賀茂の川瀨も變る名の
シテ『下は白川
ワキ「上は賀茂川
シテ『又そのうちにも
ワキ「變る名の
地上歌「石川や。瀨見の小川の淸ければ。瀨見の小川の淸ければ。月も流れを尋ねてぞ。澄むも濁るも同じ江の。淺からぬ心もて。何疑ひのあるべき。年の矢の。早くも過ぐる光陰惜しみても歸らぬはもとの水。流れはよも盡きじ絕えせぬぞ、手向なりける。下歌「いざいざ水を汲まうよい

「なる程御不審は御尤もです。しかし何事でもさう大きな隔りのあるものではなく、みな心一つから變るもので、例へば水が澄むといひ或は濁ると申しても、結局同じ流れの水に外ならないのです。この賀茂川にしましても、所々によつて色名が變つてゐまして、下の方では白川、上の方では賀茂川といひ、又同じ賀茂川のうちでも、石川とも、瀨見の小川とも申します。さういへば、歌にも——

『石川や瀨見の小川の淸ければ、月も流れを尋ねてぞ澄む』

（賀茂川の水は淸らかなので、月も殊更こゝを撰んで、澄みきつた光を水に映してゐる）

と申して居ります。つまり澄むといつても濁るといつても、昔といつても今といつても、別段變りはないので、この矢の深い意義を決してお疑ひになることはありません。矢と申せば、月日は矢の如くに早く過ぎ去り、一度逝つた水はまたもとへ歸ることはありませんが、水は變つても流れの盡きる時はなく、この神への手向も何時とて絕えた時はないのでございます」

（と話に思はぬ時を過した體で、ツレの女に向き、）

○賀茂の川瀨も變る名の―賀茂川の同じ流れの中でも、所所によつて色々名稱が變つてゐること。拾葉抄に「社家に云ふ、鴨有二七瀨川名一賀茂川、宮川、羽川、石川、瀨見小川、月輪川、御手洗川、大井川」

○下は白川上は賀茂川―しの音、かの音を重ねて綴つた白川は北白川の南禪寺の奧より發し、三條と四條との間で賀茂川に合する川。

○石川や瀨見の小川の淸ければ月も流れを尋ねてぞ澄む―賀茂の川瀨によつて、石川とか瀨見の小川とかいふ名があるといひかけて、新古今集鴨長明の歌を引いた。山城國風土記に賀茂社の事を記して「玉依姫遊二於石川瀨見小川一、丹塗矢自二河上一流下」

○年の矢―年の早くたつ事を弓を放れた矢に喩へていふ。

○返らぬはもとの水―方丈記に「ゆく川の流れは絕えずして、しかももとの水にあらず」とあるを引いた。

【四】
○汲むや心もいさぎよき―以下ロンギの文句は、神に手向の水を汲みながら語り合ふ、水づくしの對話。
○岩根松が根―何處とかいはんといひかけた。
○白玉の音ある―白玉は淸らかな水の迸り散る形容で、白玉の緒を音のおにいひかけた。
○貴船川―愛宕郡鞍馬村の邊を流れる賀茂川の上流。
○水も無く見えし大井河―後拾遺集中納言定賴の歌「水もなく見えこそ渡れ大井河峰の紅葉は雨と降れども」を引いた。大井河は嵯峨松尾の邊を流れる川、下は桂川となる。原歌は「紅葉が雨のやうに降り散るが、その爲に水嵩が増さないばかりか、却つて紅葉の爲に水面が隱れて、水がなくなつたやうに見える」との意。
○嵐の底の戸無瀨―戸無瀨は大井河の、嵐山の麓に落ちる急流。嵐山の麓を雨の緣で空吹く嵐に兼ねて嵐の底といつたのである。
○名に流る―有名な。
○淸瀧川の水汲まば―新古今集西行法師の歌「降りつみし高嶺のみ雪解けにけり淸瀧川の水の白波」を引い

ざいざ水を汲まうよ

ツレ、地上歌の初めに地謠座前に行きて下に居り、ワキも下に居る。シテ次の謠に合せて舞ふ。

【四】
地ロンギ『汲むや心もいさぎよき。賀茂の川瀨の水上は。如何なる所なるらん
シテ『いづくとか。岩根松が根凌ぎ來る。瀧つ流れは白玉の。音ある水や貴船川
地『水も無く見えし大井河。それは紅葉の雨と降る
シテ『嵐の底の、戸無瀨なる波も名にや流るらん
地『淸瀧川の水汲まば。高嶺の深雪解けぬべき
シテ『朝日待ちゐて汲まうよ
地『汲まぬ音羽の瀧波は
シテ『受けて頭の雪とのみ
地『戴く桶も
シテ『身の上と

女「さあ手向の水を汲みませう」

【四】
二人の女は水を桶に汲み入れる心で、
連女「この淸い水を汲んでゐると、心まで淸らかになりますが、一體この賀茂川の水上はどういふ所なのでせう」
女「何處かと尋ねるまでもない、あの岩の根や松の根を潛つて來て、急流となつては、白玉のやうに水の迸り散る、あの貴船川がさうですよ」
連女「さういへば、あの大井河は、水もないやうに見えるが、それは紅葉が雨のやうに降り落ちて、水の面を隱す爲だ、と歌にも詠まれてゐますね」
女「大井河といへば、あの嵐山の麓を流れる戸無瀨も有名な所でせう」
連女「あの上流の淸瀧川は「降りつみし高嶺のみ雪解けぬべし」と歌に詠まれてゐますから、あの水を汲むと、山の雪が解けるでせうか」
女「では、こゝでも朝日の上るのを待つてゐて汲みませうか」
連女「比叡山の音羽の瀧は餘り人に知られてゐませんけれど「落ちたぎつ瀧の水上年つもり、老いにけらしな黑き筋なし」といふ歌がありますね」

た。清瀧川は大井河の上流、栂尾・槇尾・高尾の邊を行く川をいふ。
○朝日待ちゐて―「深雪解けぬべき」を承けて朝日を出し、今自分達も朝日の上るのを待つてゐて、この水を汲まうといつたのである
○汲まぬ音羽の瀧波―「汲まぬ」は今汲まない意と世にもてはやされない意とを兼ねたもの。即ちこゝにいふ音羽の瀧は世にもてはやされる清水の瀧ではなく、比叡山の音羽瀧で、古今集に「比叡の山なる音羽の瀧を見てよめる」と詞書して壬生忠岑の歌に「落ちたぎつ瀧の水上年つもり老いにけらしな黒き筋なし」とあるを引いて「受けて頭の雪とのみ」と續けたのである。
○戴く桶―白雪、白髪を頭に戴くを、水桶を戴くにいひかけた。續拾遺集藤原實定の歌に「老いらくの鏡の山の面影はいたゞく雪の色やそふらん」
○老いらくの暮るる―老の來るを暮るゝにいひかけた
○夢の現―夢の如き現實。
○うつろふ―夕日の西に移ると姿の水に映るとを兼ねていふ。
○水むすぶの神―水をむす

地「誰も知れ老いらくの、暮るるも同じ程なさ今日の日も夢の現ぞと。うつろふ影はありながら。濁りなくぞ水むすぶの神の心、汲まうよ神の御心汲まうよ

「水むすぶの神の心」と作物の前に行き、水桶を下に置きて、坐す。

【五】

ワキ「げにありがたき御事かな、かやうに委しく語り給ふ。御身は如何なる人やらん

シテ「誰とは今はおろかなり。『汝知らずや神慮に趣き。迎へ給はば君を守りの、この神徳を告げ知らしめんと。現れ出でて（と立ち）

地「恥かしやわが姿、恥かしやわが姿の眞を現さばあさましやなあさまにやなりなん。よし名ばかりは白眞弓の。やごとなき神ぞかしと木綿四手に立ち紛れて神隱れになりにけりや。神隱れになりにけり

女「さういへば、この桶を戴く頭が『黒き筋なし』の白髪になるのも、遠いことではありませんね。誰でも皆老がくるのはすぐだのに、昨日も今日も夢のやうに過してしまふのです。
おゝ、はや夕日も西に移つてしまつた。でもこの影の映る水は何の濁りもない、ほんとに清らかなことです。さあ水を汲んで、神様の思召に添ふやうにしませう」

【五】

室[illegible]はこれを見聞きしてゐて、

神職「實にありがたうございました。ところで、そのやうに委しくお話をなさるあなたは、どういふ方なのです」

女「今になつて誰かなどと尋ねるのは、あまり迂遠な。そなたは知らないのか。神の思召に添うて、影向を待ち迎へられゝば、大君を守り給ふこの賀茂明神の御神德を告げ知らさうと思つて現れて來たのだ。……いや〳〵恥かしい、私のほんとの姿を現したならば、あさましいあらはなものになつてしまはう。……まあそれはどちらでもよい、名だけは分らないとしても、とにかく自分は高貴な神なのだ」といふや否や、白い幣の陰に紛れて、神隱れに隱れてしまはれた。

ぶ(汲む)をむすぶの神にいひかけた。むすぶの神は萬物を造化し給ふ神をいふ。

【五】

○迎へ給はば―神の影向を待ち迎へ給はば。

○あさま―明瞭。あらは。

○やごとなき―高貴な。白眞弓の矢といひかけた。

○木綿四手―木綿(楮)から作つた紙又は布の幣。神ぞかくといふを木綿にいひかけた。

【間】

と常座にて開き、來序の囃子にて靜かに中入。ツレも續いて入る。

後見、作物を引く。

【間】 末社來序の囃子にて、狂言末社神、末社頭巾・面登髭・着附厚板・縷水衣・括袴・脚半・腰帶・扇の裝束にて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。賀茂の明神に仕へ申す末社の神にて候。抑も國々在々に靈神あまた御座候中にも。當社明神と申すは。王城の鎭守にて靈驗あらたに御座候により。參り下向は夥しき御事にて候。又當社の古を尋ぬるに。昔この賀茂の里に秦の氏女と申す人。明暮賀茂川に出で。水を掬び神に手向け給ふが。或時水上より白羽の矢一筋流れ來り。掬びたる水桶の内へ流れ入り候間。その儘わが家に歸り庵の軒に挿し置き給へば。氏女程なく懷胎し。十月の苦しみを受け。産の紐を解き給へば。玉をのべたる男子を生めり。その子三歳の時。あたりの人々御身の父はと問へば。軒の矢に指をさし。父はあれよと御申し候へば。その矢鳴る雷となつて天に登り給ふ。これ即ち別雷の神これなり。さる間御母御子も神に祝ひ。上賀茂下賀茂中賀茂とて。靈驗あらたに御座候間。播州室の明神に仕へ給ふ神職の御方。唯今當社へ御參詣なされ候を。明神嬉しく思し召し。古の水を掬び給ふ風情にて。御詞をかはし給ふが。重ねて奇特を見せ申さんとて。神隱れし給ひて候。その間我等がやうなる末社の神にも罷り出で。一曲奏で慰め申せとの御事により。是まで罷り出でて候。何方に御座あるか知らぬ。(ワキを見て)さればこそ是に御座ある。急いで御禮申さう。(ワキの前に出て片膝つき)御禮申し候。是は當社に仕へ申す末社の神にて候。「唯今の御參詣明神嬉しく思し召し。假に古の水をむすび給ふ風情にて。御詞をかはし給ふが。重ねて奇特を見せ申さんとて。神隱れし給ひて候。その間に我等がやうなる末社の神にも罷り出で。一曲を仕り慰め申せとの御事にて候間。是まで出でて候。何ぞ一曲仕らうと存ずるが。何と御座あらうずるぞ。(名乘座へ歸り)はあ〳〵やれ〳〵嬉し

や。一段の御機嫌に申し上げた。よからうと思し召すと見えて。左の頬がにつこと致した。急いで奏で申さう

と囃子座の前へ行き、

狂言『めでたかりける時とかや。〔三段舞〕やら〳〵めでたやめでたやな。かゝるめでたき折柄なれば。我等がやうなる末社の神も現れ出で。諷ひかなでて。是までなりとて末社の神は。是までなりとて末社の神は。本の社に歸りけり

と拍子を踏みて幕に入る。

【六】

出端の囃子にて、後ヅレ天女、面連面・鬘・鬘帯・黒垂・天冠・襟赤・着附摺箔・長絹・白大口・腰帯・扇の裝束にて出で、常座に立ち、

後ヅレ『あらありがたの折からやな。われこの宮居に地を占めて。法界無緣の衆生をだに。一子と思し見そなはす。御祖の神德仰ぐべしやな。曇らぬ御代を。守るなり

地『守るべし守るべしやな。君の惠みも今この時

ツレ『時至るなり時至る

地『感應あれば影向微妙の。相好莊嚴まのあたりに。ありがたや

【六】

○法界無緣の衆生—佛法世界に緣故のない不信心者。
○一子と思し—法華經譬喩品に「今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子」
○御祖の神德—下賀茂の社を賀茂御祖の神と申すので、一子に對して御祖の字を出した。
○時至る—君の惠みが今最も深い時であるといふ意と機緣を結ぶ時が來つてといふ意を兼ねた。
○感應—人感じて神の應じ給ふこと。法華玄義に「感卽衆生、應卽佛也、謂衆生能以二圓機一感レ佛、佛卽以二妙應一應レ之」
○影向—神佛の來臨。
○微妙の相好—妙なる御姿
○莊嚴—善美を以て飾り立てられること。

【六】　後段

後ヅレ御祖神、天女の姿で來場。

天女「あゝありがたい時だ。自分はこの神境に垂跡して、信心のない衆生をさへ、わが大切な一人子のやうに慈しむのである。この賀茂御祖の神の神德を皆仰ぐがよい。わけても今この曇りのない聖代をお守りするのである。今わが大君の御惠みは實に深く、神人結緣の時が來て、神は人間の信仰を感應して、まのあたりに妙なる善美の姿を現すのである。あゝほんとにありがたい時だ」

○映り映ろふ—山と水と互に緑の映りあふをいふ。
○緑の袖—山水の緑を天女の袖にかけていふ。

【七】○別雷の神—君臣尊卑の道を分別するといふを、別雷にいひかけた。
○諸天善神—天部の諸神。こゝにはたゞ天上の神々、實は雷の意。
○國土を垂跡—をは土の母音を長く引いて謠つたのが本文中に混じたのであらう。國土垂跡は佛が衆生を濟度する爲に、種々の形に身を現し、淨土を離れてこの國土に降り給ふこと。
○和光同塵結緣—佛が德光を和らげて、世俗の塵に交はり、衆生と緣を結ぶこと。

〔天女舞〕

續いて次の謠に合せて舞ふ。

地上歌『賀茂の山竝御手洗の影。賀茂の山竝御手洗の影。映り映ろふ緑の袖を。水に浸して。涼みとる（ト扇にて水を汲む形をし）。涼みとる。裳裾を濕す折からに。山河草木動搖して。まのあたりなる別雷の。神體來現し給へり

【七】

ト幕に向ひてシテを迎へる形をして、笛座の上に坐す。

早笛にて、後ジテ別雷神、面大飛出・赤頭・唐冠・色鉢卷・襟花色・着附段厚板・袷狩衣・赤地半切・腰帶・扇の裝束に一幣を持ちて橋懸に出で、一の松に立ち、

後ジテ『われはこれ。王城を守る君臣の道。別雷の神なり

地『或は諸天善神となつて。虚空に飛行し

シテ『又は國土を垂跡の方便（ト舞臺に入り）

地『和光同塵結緣の姿。あらありがたの。御事やな

〔舞働〕

續いて次の謠に合せて仕科。

〔天女舞〕

歡喜に滿ちて舞を舞ふ。

天女「おゝかうして、賀茂の山と御手洗の水と緑の色の映りあつた、この水に袖を浸して、涼を入れ、裳裾をも濕してゐると、山河草木が搖れ動いて、眼の前に別雷神の御神體が御出現になつた」

と幕の方を見る。

【七】

後ジテ別雷神登場。

神「自分は京の都を守り、君臣尊卑の道を正す別雷神である。自分は或時は天上の神として空中を飛行し、又或時は衆生利益の方便として、この國土に垂跡するのである」

といつて、德光を和らげ俗塵に交つて衆生と緣をお結びになる尊いお姿を、こゝに拜することの出來るのは、實にありがたいことである。

〔舞働〕

別雷神、神威を示し給ふ。

○風雨隨時―風も雨も適度に吹き降つて、農事を助けること。
○別雷の雲霧―雲をわけといひかけた。
○ほろほろ―遠雷の聲。
○とどろとどろ―近くに鳴る大雷の聲。
○鼓の時も至れば―昔鼓で時刻を知らせたので、鳴神の鼓を時の鼓にいひかけ、時至ればとつゞけた。

シテ『風雨隨時の御空の雲居
地『風雨隨時の御空の雲居
シテ『別雷の雲霧を穿ち
地『光稻妻の稻葉の露にも
シテ『宿る程だに鳴る雷の
地『雨を起して降りくる足音は
シテ『ほろほろ（と拍子を踏み）
地『ほろほろとどろとどろと踏みとどろかす。鳴神の鼓の。時も至れば五穀成就も國土を守護し。治まる時にはこの神德と。威光を顯しおはしまして。御祖の神は。糺の森に。飛び去り飛び去り入らせ給へば猶立ち添ふや。雲霧を。別雷の。神も天路に攀ぢ昇り。神も天路に攀ぢ昇つて。虛空に上らせ給ひけり

「御祖の神は糺の森に」と、ツレ立ちて幕に入り、シテは「神も

別雷神は平生風雨を適度にお授けになる空の都にお出でになつて、時に應じて、空の雲霧を穿ち、稻妻の光を稻葉の露にも宿るまで閃めかし、雨を起して、雷の音を遠くではほろ〱、近くではとゞろ〱と鳴り轟かされる。そしてその結果、秋の收穫時になれば、五穀が成就するやうに、國土を守護し給ふのであつて、國土の治まるのも、この神德によるのであると、今こゝにその神威をお示しになる。

その中に賀茂御祖の神が糺の森へ飛び去つてお入りになると、別雷神も先程から愈〻立籠めて來た雲霧を分けて、天路に攀ぢ昇り、天にお上りになつた。

ツレ天女まづ退場。諸終つて後ジテ別雷神退場。

天路に攀ぢ昇つて」と幣を後に投げすて、「虚空に上らせ給ひけり」と袖を被いで留拍子を踏む。

〔考異〕

諸流（五流）

著しい異同はない。

古謡本（光悦本）

【一】ワキ「抑もこれは……神職の者なり（光にて候）……當社室の明神と（光ナシ）は御一體にて御座候へども（光の御事なれ共）……都の賀茂へと急ぎ（光参詣仕らはやと存）候　【三】ワキ「げによく御覧じ……新しく（光ナシ）壇を築き……シテ「さては室の……あからさまなる御事なりとも（光れ共）……シテ「總じて……朝な夕なこの川邊に出でゝ（光ナシ）水を汲み……この水桶に（光て）とまりしを取り（光ぬ。求）て歸り……シテ「さやうに申せば……弓箭に殘す心なり（光哉）

賀茂物狂　寶（喜）

解説

【能柄】四番目　一段劇能

【人物】ワキ　都の男（夫）、　ワキツレ　同從者（二人）、
シテ　女（妻）

【時】四月中の酉日

【所】京都　賀茂明神の社前

【異稱】「加茂物狂」又は「鴨物狂」とも書く。

【作者】能本作者註文に作者不明として出てゐるから、室町末期には既に流布してゐたのである。但し寶生流の文は前半を削つてゐる。

【梗概】都の男が東國見物に出掛けて、三年留守にしてゐた間に、その妻は戀慕の餘り心が狂つて、東國に夫を尋ね歩き、二度都に歸つて、今日しも四月中の酉日、賀茂の祭に參詣して、折柄都に歸つて同じく明神に參詣した夫と再會する。

【出典】別段出典といふべきものはない。但しクセは徒然草の文を本としてゐる。――その原文は本曲の末尾、附記に掲げる。

【概評】別離した夫婦の再會を描いたものに、「木賊」「斑女」「水無月祓」があり、夫を戀ふる餘り遂に病狂した曲に「砧」があるが、本曲は類曲のいづれよりも甚しく劣つてゐる。第一、その夫は東國一見の爲に三年の間家を棄てゝ顧みない薄情な男であり、歸洛しても直に家に歸らうとはせず、賀茂の祭を見物してゐるのである。それで、わが妻の狂亂した樣を見ても、直に名乘らうとはせず、思ふ存分物狂を演ぜしめ、その後も人目を恥ぢて、明かに再會の喜びをいひ交はさないで「さらぬ樣に引き別れて」ゐるのである。原曲に近いと思はれる元祿謠本や喜多流現行曲では、前段に「さる事ありて」といつて夫は所用で旅に出たやうに述へ、且歸洛するや直に家路に向つてはゐるが、その旅は十年に及んで居り、從つてわが家をも殆ど忘れてしまつて「このあたりと覺えて候」といつてゐるのである。そして女の方も、前段に神に祈つてゐるのは、夫との再會の願ひではなく「戀せじ」と夫を忘れようとする願ひで、その爲に神の諫めを受けてゐるのである。男女ともに情の切なるものがない。原作改作ともに拙劣なものであるといはなければならない。

【一】

次第の囃子にて、ワキ都の者、着附段熨斗目・素袍上下・小刀・扇の装束にて笠を被り、ワキヅレ從者二人、ワキと同樣の装束（熨斗目は無地）にて舞臺に入り向合ひ、

ワキ
ワキヅレ 次第「歸る嬉しき都路に。歸る嬉しき都路に雲居ぞのどけかりける

地取にワキは笠を脱ぎて正面に向き、

ワキ「これは都方の者にて候。われ東國一見の爲罷り下り。ここかしこに月日を送り。はや三年になりて候。また都の事もゆかしく候程に。この度都へ上らばやと存じ候

【一】

ワキ都の者、ワキヅレ從者二人を連へ、東國より歸洛の旅の體で登場。

男「都へ歸るのだと思ふと嬉しくて、空の氣色までのどかに思はれる」

と次第を謠つて旅の心持を述べ、

男「私は都の者ですが、東國の方を見物する爲に旅に出て、あちらこちらで月日を送つてゐるうちに、はや三年になりました。それで、また都の事もなつかしく思はれるので、今度都へ上らうと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

【一】

○雲居ぞ—都路に來るを雲居のくにいひかけた。

といひて笠を被り、ワキヅレと向合ひ、

ワキ・ワキヅレ道行「雁金の花を見捨つる名殘まで。花を見捨つる名殘まで。古里思ふ旅心。憂きだに急ぐわが方はさすがに花の都にて。海山かはる隔てにも。思ふ心の道のべの便りの櫻夏かけて。眺め短きあたら夜の花の都に着きにけり 花の都に着きにけり

ワキ「海山かはる隔てにも」と正面に向きて二三足出で、またもとに歸りて都に着きたる心。道行濟みて笠を脱ぎ正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。賀茂の宮に參りて候。心靜かに御神事を拜まばやと思ひ候

ワキヅレ「尤もにて候

といひて脇座に行き下に居る。

【三】

一聲の囃子にて、シテ妻、面增・鬘・鬘帶・着附箔・水衣・腰卷箔・腰帶・扇の裝束にて、笹を手に持ちて橋懸に出で、

シテサシ「面白や今日は卯月のとりどりに。千早振るその神山の葵草。かけて頼むやその惠み。色め

○雁金の花を見捨つる名殘まで―雁が美しい花の時節を見捨てて北へ歸るのも、故鄕を戀しく思ふからだとの意。
○憂きだに急ぐ―つらい所でも故鄕の方といへば、足が急がれるとの意。
○道のべの―故鄕を思ふ心の滿つを道にいひかけた。
○便りの櫻夏かけて―櫻の花を眺めて旅の憂さを慰めたいと思ふが、夏が近づいて、早くも花が散つてしまふといふ意であらう。
○あたら夜の―後撰集源信明の歌「あたら夜の月と花とを同じくは心知られん人に見せばや」を引いた。「あたら」は惜しい、大切なといふ意。

【三】
○卯月のとりどりに―賀茂の祭は四月中の酉の日であるから、酉にかけて「とりどり」といつた。「とりどり」は「かけて頼む」にかゝる。
○千早振る―神の枕詞。
○神山―賀茂山。この麓に賀茂上社がある。
○葵草かけて―賀茂の祭には、二葉の葵を鬘などにかけるので、葵草をかけてといひかけて、神かけて頼むとつゞけた。

同「あの空を行く雁が花を見捨てて北へ歸るのも、やはり故鄕が戀しいからであらう。花のない寒い北國、いやな所でさへ、わが故鄕といへば、足が急がれるのであるから、まして、自分の歸るのは、花の都なのだから、海山遠く隔ててゐても、歸りたい心が一杯で、道々盛りの短い櫻の花を眺めながら行くうちに、はや夏も近づいて、短夜の惜しまれる今日、美しい都に着いた」

〽旅の景趣を述べてゐるうちに、都に着いた態で、舞臺に下賀茂の社前となる。

【三】

シテ女（ワキの見物に從ひながら賀茂に參詣する態で登場）

女「ああ面白いことだ。今日は四月の中の酉の日で、賀茂のお祭にお參りしてお願ひをしようと、誰も彼も綺麗な着物を着

○色めきつづく―衣服を着飾つて賀茂の社へ打續いて行く。
○あらぬ身―人並でない身狂女の身。
○誓ひ糺の―人の誓ひ祈る心を正すといひかけた。糺は下賀茂社のある所。
○人やりならぬ―人がさせたのでない、自分でした。自分自分にそれ〲工夫を凝らした。
○道さりあへぬ―參詣の人が多くて、道をさりあへぬ(道を避けられない)意に、物思ひの去りあへぬ意をかけていふ。
○人の心は花染の―古今集讀人知らずの歌「世の中の人の心は花染のうつろひ易き色にぞありける」を引いた。花染は露草の花で染めたもの。
○移ろひ易き―人心の移り變り易い意に、時節の春から夏へ移る事を兼ねて用ゐた。
○涼しき色は花なれや―涼しい綠の色の美しさは花の頃の面白さと變りがない。

きつづく人並に、あらぬ身までも急ぎ來て
シテ一聲「今日かざす。葵や露の玉葛
地「葛も同じ。かざしかな(と舞臺に入り)
〔カケリ〕
を舞ひ、なほ次の謠に合せて仕科。
シテ「かざす袂の色までも
地「思ひある身と。人や見む
シテサシ「面白や花の都の春過ぎて。又その時の折からも
地「類ひはあらじこの神の。誓ひ糺の道すがら。人やりならぬ心々の。樣々見えて袖を連ね裳裾を染めて行きかふ人の。道さりあへぬ物思ふ
地下歌「われのみぞなほ忘られぬその恨み。上歌「人の心は花染の。人の心は花染の。移ろひ易き頃も過ぎ。山陰の。賀茂の川波糺の森の綠も夏木立

飾つて、うち續いて、行くわ〲、その仲間に入つて、自分のやうな氣の狂つた者までが、急いで行くことだ。今日誰もが頭にさす葵を、自分も同じやうにかざしてゐることだ」
といつて、
〔カケリ〕
に物狂の態をなし、
女「でも、この姿形を見ても、自分が思ひに惱んでゐる者だといふことが、人に分るだらう」
女「いや、都のさまは何といつても面白いものだ。花の春が過ぎても、またその時折の眺めが格別で、今日もこのあらたかな賀茂明神のお祭が美しいことだ。糺の森へ行く人達が、皆それ〲意匠を凝らした着物を着て、多勢行き違つて、道も避けられないほとだ。でも、私だけはやはり忘れられない物思ひに惱んでゐることだ。この恨みはどうしても忘れることが出來ない。變り易い人心に譬へられる花の時節は過ぎて、このあたりは、賀茂川の水も糺の森の木々も、綠の色がいかにも涼しさうで、花にも劣らない美しさだ。さう〱、

○忘れめや葵を草に引き結び假寢の野邊の露の曙―新古今集式子内親王が賀茂の齋院にてよみ給うた御歌。
○面影匂ふ涙の―夫の面影を忘れ得ず泣く涙は野邊の露に似てゐるとの意。
○戀路の身は替るまじな―戀する身の果敢なさは露の果敢なさに似てゐるとの意か。
【三】
○結緣―衆生が佛法僧と因緣を結ぶこと。こゝでは神を信仰する意。
○狂もよく念へば聖―狂愚の者でもよく思ひ顧みて過を改めれば、聖人となり得るとの意。書經に出づ。
○正直捨方便―神は正直を主として方便を捨て給ふをいふ。法華經方便品に「於二諸菩薩中一、正直捨二方便一、但說二無上道一」
○塵に交はる和光の影―和光同塵。神佛が衆生を濟ふ爲に、德光を和らげて俗界の塵に交はり給ふこと。
○狂言綺語―狂言は戲れの詞、綺語は飾り立てた詞。次の「讚佛乘」の語釋を見よ。
○この言葉は恥かしや―この立派な言葉を聞いては、聞く者が氣恥かしい思ひがする。
○讚佛乘―狂言綺語も佛法

涼しき色は花なれや。忘れめや葵を草に引き結び。假寢の野邊の。露の曙。面影匂ふ涙の。例なれや戀路の身は替るまじなあぢきなや身は替るまじなあぢきなや（と常座に立つ）

【三】

ワキ（立ちて）「いかにこれなる狂女。今日は當社の御神事なり。心を靜めて結緣をなし候へ

シテ「これは仰せとも覺えぬものかな。これも狂もよく念へば聖といへり。その上神は知ろしめすらん。『正直捨方便の御惠み。塵に交はる和光の影は。狂言綺語も隔てあらじ。あら愚かの仰せや候

ワキ「げにこの言葉は恥かしや。讚佛乘の心ならば。何はの事も愚かならじ。しかもこれなる御社は。當社にとりても異なる垂跡。舞歌を手向けて亂れ心の。望みを祈り給ふべし

賀茂の面白さといへば、――『忘れめや葵を草に引き結び、假寢の野邊の露の曙』（葵を草さ一所に引結んで枕さし、賀茂の社で旅寢した面白さは忘れられない）といふ御歌があるが、私はまた夫の面影が忘れられないで、泣く淚はあの野邊の露に似てゐるとでもいはうか。あゝこの戀は取り戻すことの出來ない、ほんとに情ないものだ」

【三】

こいひながら社前に入る。

男これを見て、

男「おいこれ狂女、今日はこのお社のお祭だ。よく心を靜めて信心なさい―

女「これはお人柄にも似合はぬことを仰しやる。昔の人も『狂人もよく念へば聖人となる』といつてゐます。殊に神樣は方便を嫌つて正直をお喜びになり、われわれを救ふ爲にこの俗世界に御垂跡になつたので、狂人が狂人らしく狂言綺語をいはうと、少しもお隔てにならない筈です。つまらないことを仰しやる」

男「なるほど御尤も千萬な詞だ。いかにも『狂言綺語の誤を以て、佛法讚嘆の因緣とする』といふ意味ならば、何も惡いことはあるまい。殊にこのお社は賀茂末社の

シテ「そもこの社はとりわきて。舞歌を納受ある事の。その御謂れは何事ぞ
ワキ「これこそさしも實方の。宮居給ひし粧ひの。臨時の舞の妙なる姿を。水にうつし御手洗の。その緣ある世を渡る。橋本の宮居と申すとかや
シテ『あらありがたやと夕波に
ワキ『今立ち寄りて
シテ『影を見れば
地『現なや見しにもあらぬ面影の。見しにもあらぬ面影の。衰へ果つる粧ひは。及ばぬ昔のそれのみか。身にも顏ばせの名殘さへ。涙の落ちぶるるこそ悲しき。今は逢ふともなかなかに。それともいさや白露の、命ぞ恨めしき命ぞ恨みなりける
【四】
ワキ「これなる者を如何なる者ぞと存じて候へ

の功德をほめる因緣となるとの意。和漢朗詠集白樂天の句に「願以二今世俗文字之業、狂言綺語之誤一、飜爲二當來世々讃佛乘之因、轉法輪之緣一」
○實方―本曲の末尾に附記した。
○臨時の舞―賀茂臨時祭の舞。
○水にうつし見るを御手洗の―うつし見るを御手洗にいひかけた。附記に掲げた徒然草の文に據つたのである。
○世を渡る―「渡る」は橋の緣語。
○橋本の宮居―上賀茂社の末社。實方を祀る。
○見しにもあらぬ面影の―これまでとは全く變り果てた姿。
○及ばぬ昔のそれのみか―昔の美しい姿を取返すことが出來ないばかりでなく。
○涙の落ちぶる―名殘さへなしを涙といひかけ、涙の落つをおちぶるにいひかけた。
○いさや白露の―いさ知らずを白露にいひかけ、露の命と續けた。
【四】

うちでも、特別な神樣だから、舞歌を手向けて、その心の亂れるばかり思ひつめた望みの遂げられるやうに、お祈りなさい」
女「して、このお社が特に舞歌をお喜びになるといふ、そのわけはどういふ事なのです」
男「これこそ實方をお祀りした所で、實方が在世當時賀茂の臨時祭に、美しい舞を舞つて、舞姿を御手洗の水に映した、その因緣で、こゝに祀られて、橋本の宮と申すのださうだ」
女「あゝありがたいことです」
といつて、御手洗に立ち寄つて、
女「あゝ自分の影を見ると、まるで正氣がない。この變り果てた姿、衰へ果てた姿では、とても昔の姿に取り返せないばかりか、自分が見ても、もとの顏の面影さへないのだ。悲しさに涙の落ちるばかりだ。このやうな有樣では、たとへ夫に出會つても、私だといふことが分りもすまい。このやうなみぢめな樣では、生きてゐるのが恨めしい」
【四】
男は女の姿をよく見て、
男「この女をどういふ者かと思つてゐた

○語らひたる―契りを結んだ。
○人間　人の居ない隙。
○又ぬぎかへて―千載集大江匡房の歌「夏衣花の袂にぬぎかへて春の形見もとまらざりけり」の詞を借りた。
○袖をかへす・舞を舞ふこと。
○山藍に摺れる衣　白地に藍で草木鳥などをすりつけた装束。青摺の衣ともいひ、舞人の装束に用ふ。
○移り舞　位置をあちこち替へて舞ふ舞方の名。賓方の神の御影が映るといひかけたのである。

ば、某が語らひたる女にて候。今は人目もさすがに候間。さあらぬ體にもてなし。人間を待ちて名乗らばやと存じ候。いかに狂女。この社にて舞を舞ひ。思ふ事を祈るならば。『神も納受あるべきぞと
シテ『風折烏帽子かりに着て
ワキ『手向の舞を
シテ『舞ふとかや
地次第『又ぬぎかへて夏衣。又ぬぎかへて夏衣。花の袖をやかへすらん
【物着】シテくつろぎ、水衣を脱ぎ、折烏帽子・長絹を着て常座に出で、（ワキ下に居る）
シテ『山藍に。摺れる衣の色添へて
地『神も御影や、移り舞
「イロハ」
を舞ひて大小前に立ち、

ら、自分が契りを結んだ女なのだ。だが、人の見る目も憚られるから、知らない振をしてゐて、人の居ない隙に名乗りをしよう」
（と独言をいって女に向ひ、）
男「おい狂女、この社前で舞を舞ひ、願ひ事を祈つたなら、神様もお聞き入れになるぞ」
といはれて、女は烏帽子狩衣を借りて着、神に手向けの舞を舞ふのである。
女「では、この夏衣をまた花衣に脱ぎ替へて、舞を舞ひませう」
といつて、舞の装束をつける。
女「山藍で摺つた舞衣を着て、移り舞を舞へば、神の御影もお映りになることでせう」（といひ）
「イロハ」
舞を舞ひ、続いて、

○そのかみに祈りし事は忘れじをあはれはかけよ賀茂の川波―玉葉集藤原俊成の歌。
○玉簾―垂れての縁で玉簾といひ、簾のかゝるを、かかる氣色にいひかけた。
○幣に涙ぞかかりにき―幣を「しでに」(繁くの意)にかけていふ。玉葉集西行法師の歌に「畏るしでに涙のかかるかな又いつかはと思ふあはれに」
○又いつかもと―又いつ逢へるだらうかと。
○信夫摺―「其名もなつかしみ」を承けていふ。信夫摺は岩代國信夫郡の名產。古今集河原左大臣の歌「陸奥の信夫もじずり誰ゆゑに亂れんとぞ思ふわれならなくに」に據つて、「亂れし」、「誰ゆゑ」の詞を用ゐた。
○かこたん―愚痴をこぼさう。
○蜘蛛手―伊勢物語で著名な三河國八橋は蜘蛛手の如く八つ橋がかゝつてゐるといふので、そのやうに繁く多くとの意に用ゐた。
○掛川―遠江國の宿驛。波をかけといひかけた。
○小夜の中山―遠江國。東海道日坂・金谷二驛の中間

シテサシ『げにやそのかみに祈りし事は忘れじを
地『あはれはかけよ賀茂の川波。立ち歸り來て年月の誓ひを頼む逢瀬の末
シテ『あはれみ垂れて玉簾
地『かかる氣色を、守り給へ
シテ次の謠に合せて舞ふ。（舞クセ）
地クセ『われもその。幣に涙ぞかかりにき。又いつかもと。思ひ出でしまま。涙ながらに立ち別れて。都にも心とめじ。東路の末遠く。聞けばその名もなつかしみ思ひ亂れし信夫摺。誰ゆゑぞ如何にとかこたんとする人もなし。鄙の長路におちぶれて。尋ぬるかひも泣く泣く。その面影の見えざれば。なほ行く方の覺束なく。三河に渡す八橋の。蜘蛛手に物を思ふ身はいづくをそこと知らねども。岸邊に波を掛川。小夜の中山なか

シテ「ほんに、――『そのかみに祈りし事は忘れじを、あはれはかけよ賀茂の川波』（賀茂の神様、昔お祈り致しました通り、私を[illegible]て下さい）
と歌に詠まれましたが、私はまた夫がやがて歸つてくるとの堅い約束を信じて、永い年月夫に逢ふのを待つてゐました結果、このやうな姿になつてしまひました。どうか神樣、私をあはれと思し召しお守り下さいませ。――
『畏るしでに涙のかゝるかな、又いつかはと思ふあはれに』
といふ歌のやうに、私も夫戀しさに始終涙を流したことです。そしていつかは逢へるだらうと思つて、涙ながらに都を立出で、都には氣もとめないで、東の涯の陸奥の地も、「夫を忍ぶ」の言葉と同じ信夫の名を聞いては、なつかしい思ひをしました。けれど、知らぬ旅路では、思ひ亂れた姿を見ても「誰か戀しくて」「どうしたわけで」と尋ねてくれる者もありません。たゞ田舍の旅に疲れ果てたが、尋ねて歩く甲斐もなく、夫の姿は見つかりません。それにつけても愈々夫の行方が氣がかりで、三河の八幡を渡るにつけて

○にある坂路。○又越ゆべしと思ひきや—「年たけて又越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」—を引いた。○藤枝—駿河の宿驛。地名を花の藤にかけていふ。○岡部—駿河の宿驛。心置かるを岡にいひかけた。○蔦の細道分け過ぎて—伊勢物語に「ゆき〳〵て駿河の國に至りぬ。宇津の山に至りて、わが入らんとする道は、いと暗う細きに、蔦葛は繁りて、物心細くすゞろなるめを見ることと思ふに、……駿河なる宇津の山邊の現にも、夢にも人の逢はぬなりけり」とあるを引いた。○着馴れ衣—分け過ぎて來を着馴れにいひかけ、衣をうつを宇津の山にいひかけた。○うつの山—駿河國にある○懲りずまの心—ものに懲りない心。○春の日の—思ひの晴るといひかけた。○柳櫻をこきまぜて—古今集素性法師の歌「見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」を引いた。

なかに。命のうちは白雲の又越ゆべしと思ひきや

シテ『花紫の藤枝の

地『幾春かけて匂ふらむ馴れにし旅の友だにも。心岡部の宿とかや。蔦の細道分け過ぎて。着馴れ衣を。うつの山現や夢になりぬらん。見聞くにつけて憂き思ひ。猶懲りずまの心とて。又歸り來る都路の思ひの色や春の日の。光の影も一入の

シテ『柳櫻をこきまぜて

地『錦をさらす經緯の。霞の衣のにほやかに立ち舞ふ袖も梅が香の。花やかなりし春過ぎて。夏もはや北祭。今日又花の都人行きかふ袖の色々に。貴賤群集の粧ひも飜す袂なりけり

と舞ひ上げ、

も、千々に思ひ亂れ、今どこを通つてゐるかも分らず、夢中で旅をつゞけてゐるうちに、岸邊に波の打寄せる掛川を過ぎ、小夜の中山を通つては、もはや生きてゐるうちに二度とこゝを通れないだらうと、果敢ない思ひをしました。それから春咲き匂ふ紫の花と同じ名の藤枝を通り、旅の道連れにも氣兼ねをしながら岡部の宿とかいふ所へ來ました。それからなほ、蔦の生ひ塞つた細道づたひに旅を續けて、宇津の山へ來ては、氣も遠くなるやうでございました。かうして、何を見るにつけても聞くにつけても、辛い思ひをしながらも、なほ性懲りもなく、また都へ引返しますと、やがて思ひの晴れる前兆でせうか、春の光が一入のどかで、都の景色は柳櫻をこき交ぜて錦をさらした樣でありました。時は春のこととて、空には霞が立ちこめて、人の衣も梅が香に匂ふばかりでありましたが、その春も過ぎて、はや夏が來て、今日賀茂の祭となれば又、都の人々は、往き來する人々、貴賤の差別なく、色とりどりに粧ひを凝らして、そよ吹く風に、美しい袂を飜してゐるのです」

と、別離後の述懷を語りながら、舞ひつゞけ、

○北祭―賀茂祭。石淸水八幡の南祭に對していふ。夏もはや來るを北にいひかけた。

【五】
○月にめで花を詠めし―附記に掲げた慈鎭の歌。
○業平―平城天皇御子阿保親王の第五男。勝れた歌人〔杜若〕〔雲林院〕參照。
○結緣の衆生―神佛を信心する衆生。
○結ぶの神―夫婦の緣を結ばしめる神。
○岩本の―岩本の社。上賀茂の末社で、業平を祀る。神とやいはんといひかけた末尾の附記參照。
○本の身なれど―本地は神であるがとの意。次の「月やあらぬ」の歌の詞を引いていふ。
○月やあらぬ―業平の歌「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして」を引いた。
○思へばわれも―思へば自分も「月やあらぬ」の歌と同じやうに、わが身は元のままであるが、夫には逢はれなくなつたとの意。
○そこともも涙のみ―そこともなくを涙にいひかけた。

【六】

【五】地『月にめで

〔中舞〕

を舞ひ、なほ次の謠に合せて舞ふ。

シテワカ『月にめで。花を詠めし。古の

地『跡はここにぞ在原なる

シテ『その業平の。結緣の衆生に

地『契り結ぶの

シテ『神とや岩本の

地『本の身なれど假の世に出でて。月やあらぬ。春や昔の。春ならぬ春ならぬ思へばわれも

シテ『唯いつとなく

地『唯いつとなく。そことも涙のみ。思ひ居りて。わが身ひとつの憂き世の中ぞ悲しき

【六】

ワキシテに向き、

地ロンギ『始めより見れば正しくそれぞとは思へど人目つつましや

【五】

〔中舞〕

を舞ふ。

たゞ月をめで花を詠めた古の歌人、在原の業平は、この地に垂跡して、衆生の爲に緣を結ぶの神となり、岩本の社に祀られて居られる。本地は佛の身であるが、假にこの世に現れて、――「月やあらぬ春や昔の春ならぬ、わが身一つはもとの身にして」

（月も春も昔ながらの姿で變りはないが、私たちの間は、私だけがもとのまゝで、相手はすつかり變つてしまつた）

と詠まれたが、思へば私もこの歌と同じ境遇で、たゞ何日といふ定めもなく、絶えず涙に濡れて、自分ひとりつらい思ひをしてゐることだ。ほんとにこの浮世が悲しい」

といふ意味のことを謠ひながら、舞ふ。

【六】

男はこれをずつと見て居たが、

男「はじめからよく見てゐるのに、確かに自分の妻に違ひないのだが、しかし、どうも人目が憚られる」

と獨言をいふ。

○よしや互に白眞弓―よしや互に知らぬ振りをしてもといひかけて、白眞弓を出し、歸るの緣語とした。

○五條あたりの夕顏―源氏物語の、光源氏が五條あたりの家に夕顏の咲いてゐたのを緣として、夕顏上を見出された物語に擬へていふ。

○心あてにそれかあらぬか―源氏物語夕顏の卷の、夕顏上が扇に記して源氏に贈つた歌「心あてにそれかとぞ見る白露の光添へたる花の夕顏」に據る。

○空目もあらじ―同じく夕顏上の歌に「光ありと見し夕顏の白露はたそがれ時の空目なりけり」とあるを引いて、原歌の意とは反對に、「空目もあらじ」といつた。

○この河島の行末―上賀茂の宮のある所は、河島で、二つの川が一つに出逢つて一つの賀茂川となる所であるから、別れた夫婦の再會に喩へていふ。

シテ「人目をもわれは思はぬ身の行方。心迷ひのあやしくも。さすがにそれぞと知る氣色。恥かしければいひあへず

地「よしや互に白眞弓。歸る家路は住み馴れし

シテ「五條あたりの夕顏の

地「露の宿りは

シテ「心あてに

地「それかあらぬかの。空目もあらじあらたなる。神の誓ひを仰ぎつつ。さらぬやうにて引き別れて。この河島の行末は逢瀬の道になりにけり逢瀬の道になりにけり

と常座にて留拍子を踏む。

女「自分は人目をも憚らず、夫を尋ね歩いた身であるが、この方がわが夫のやうに思はれるのは、心の迷ひであらうか、どうも變だ。いや向ふでもそれと知つてゐるらしい樣子だが、やはり何だか恥かしくていひ出せない」

男「まあよいわ、お互に知らぬ振りをしてゐても、住み馴れた家路に向つて行けば、多分あの妻も……」

女「さうだ、五條の自分の家に歸れば……」

男「わが家へ歸らう」

女「自分の心の迷ひで、わが夫かどうかと見違へたのではない、確かにこのあらたかな神樣の御利益だ。さあわが家へ歸りませう」

とそれぐ\獨言のやうにいつて、

二人ともその場では素知らぬ顏をして別れたが、この神の御在所の河島が二つの川を一つに合はせた所であるやうに、やがて二人は再會したのである。

〔考異〕

諸流（寶 喜）

喜多流は次に擧げる元祿觀世流本に略同じ。

古諸本　(元祿八年本)

觀世流元祿本、寶生流のワキ次第の前に次の一段を加ふ。

ワキ「是は當社賀茂の神職の者にて候。扨も此程いつく共しらす女性一人來り。當社に百の歩みを運ふと見えて。是なる御手洗の表に何事やらん祈誓申候處に。今夜我等新に御靈夢を蒙りて候。今日も參りて候はゝ。此由を申さはやと存候。シテサシ「有難や和光の誓あまねき中にも。分て惠みのかけ高き。妹背の道の中川の。行衞たへぬる契りゆへ。何中々の戀慕の身。思はぬ人を思ひの色。啼してたはせねはしまさと。下歌「此御手洗に書なかす。理り絶ぬ神慮。上歌「さなきたに行水に。〳〵。數かくよりもはかなきは。思はぬ人を思ふと社。詠しも今更に。我身の上にしら雪の。おもひ消ぬと人しれぬ涙つきせぬ心かな〳〵。ワキ「いかに是成女性に申へき事の候。シテ「何事にて候そ。ワキ「此程當社に毎日の歩みをはこひ給ふ事。返々も有難ふ候へ。若し妹背の道を祈り給ふか。私ならぬ神慮におかへかつて御物語候へ。シテ「是は思ひもよらぬ事を承候物哉。仰のことく此御神に祈申事あつて。日毎に歩みを運ひ候去なから是は戀慕を祈るにあらす。左様の心を正させ給へと申のみにて社候へ。ワキ「されは社奇特成御事かな。是なる社は岩本の明神とて。在原の中將業平の御垂跡なり。今夜我等新に靈夢有て。此短册をあたへ申。今日より參申間敷との御示現にて候。なんほう奇特成御事にて候そ。是々御覽候へ。シテ「是はふしきの御事かなと。取上見れは。戀せしと御手洗川にせし御祓。神やうけすも成にける哉〻荒有難の御事や。扨此歌の心にては何とか神慮を定むへき。ワキ「實々是は御理り。然も此歌は御垂跡業平の御詠歌そかし。シテ「心をしるも戀せしと此御手洗に御祓して。當社に祈給ひし事も。妹背の道を守らんとの。誓ひを背心なれは。『戀せしといふも御惠みにもるゝ心の水のみそき。ワキ「受ぬは妹背の道の行衞を。守るちかひの神慮に。逢瀨を祈給ふへし。シテ『扨は悲しや戀せしと。祈るは神の御心に。背く例の言の葉を。をしへの告か有難や。上歌「神によるへの水ならは。〳〵。誓ひをうけて人の世に。すめるかひある御祓して。よしさらは今より。逢瀨をいさや祈らん。逢住うき我心敎への告を賴つゝ。人の行衞を尋んと。足に任せて出にけり〳〵。

【一】 ワキ(元男、以下準之)。ワキ「これは都方の……われ東國一見の爲……月日を送りはや(元吾妻に下り)三年になりて(元及)候。また都の事も……上らばやと存じ候(元餘りに久しく成候程に都へ上り候。サシ「夕されは鹽風越て陸奧の。野田の玉川千鳥なく。心をしるも身の上に。思ふ涙の雨のくれ雪の曙折々の。情忘れぬ都の空。馴にしかたに歸るなり)。道行(元上歌)「雁金の……　**【三】** ワキ「いかにこれなる狂女(元狂人)……心を靜めて結緣をなし候へ(元靜に有て聽聞申せ。荒不便の者や候)……ワキ「げにこの詞(元理り)は恥かしや……異なる垂跡(元御事)……ワキ「今(元いさ)立ち寄りて……　**【四】** ワキ「これなる者を……名乘らばやと存じ候(元ナシ)いかに狂女(元人)……舞を舞ひ

（元謡を諷ひ）思ふ事を……地「神も御影や移り舞（元）、シテ「夫たう〳〵と打鼓の音は。法性眞如の色に聞え。地「颯々とまふ歌の聲。四智圓明の。鏡にうつる）。シテサシ「げにや……　地「幾春かけて……都路の思ひ（元雲井）の色や……　【六】地ロンギ「始めより（元ふしぎやたゞ狂亂のよそ人と）見れば正しく……

附　記

○實方－一條天皇御宇の人。藤原忠平の曾孫、定時の子。中將まで昇進したが、大納言行成と爭論した罪によつて、陸奥に左遷せられた。しかし名高い歌人であつたので、死後、上賀茂の末社橋本の社に祀られた。枕草子に「少將（實方）といひける人は、年毎に（賀茂の祭の）舞人にて、めでたきものに思ひしみけるに、なくなりて、上の御社一の橋の本にあんなるを聞けば」。徒然草に「賀茂の岩本・橋本は業平・實方なり。人の常に言ひまがへ侍れば、一年參りたりしに、老いたる宮司の過ぎしを呼びとゞめて尋ね侍りしに、實方は御手洗に影のうつりける所と侍れば、橋本やなほ水の近ければと覺え侍る。「吉水の和尙（慈鎭）『月をめで花をながめし古の、やさしき人はこゝにあり原』とよみ給ひけるは、岩本の社とこそ承り置き侍れ」とある。

通小町（かよいこまち）　観（寶春剛喜）

解説

【能柄】　四番目　複式夢幻能

【人物】　ワキ　僧、前ツレ　里女（小町の靈）、後ツレ　小野小町、シテ　深草少將

【所　】　前段　山城國八瀬、後段　同市原野

【時　】　（九月）

【異稱】　古く「四位少將」といつた。

【作者】　能本作者註文、二百十番謡目錄ともに世阿彌の作としてゐるが（前書には「觀阿彌作と云說あり」と註す）、世子六十以後申樂談儀に「四位少將」を觀阿彌の作と記し、又「四位少將は根本大和に唱導のありしが書きて、金春權の頭多武の峰にてせしを、後書き直されしなり」と記してゐるから、觀阿彌の改作したものである。寛正五年四月十日糺河原勸進猿樂に「四位少將」を演じたことが同勸進猿樂記に見え、言經卿記文祿四年二月二十三日「通小町」演能のことが親長卿記に見え、言經卿記文祿四年三月廿九日の條に「通小町」を註釋したことが見えてゐる。

【梗概】ある僧が山城國八瀨で一夏を送つてゐると、一人の女性が每日薪や木實を持つて來てくれるので、不審に思つて、その名を尋ねると、市原野の小野小町であるといひさして消え失せた。僧は奇特の思ひをなし、市原野に行つて小町の亡き跡を弔ふと、小町の亡靈が薄の中から現れ出て、僧に受戒を請ふ。すると、深草少將の靈が現れ出て、これを拒み、やがて僧の請ひに應じて、百夜通ひの樣を示し、遂に小町の戒めによつて、二人とも成佛する。

【出典】深草少將が小町の許に百夜通つたといふ傳說と、小町の髑髏に薄が生えて、その中から「秋風の吹くにつけても」といふ歌を詠んだといふ傳說と、二つを結びつけたものであるが、まづ百夜通ひの傳說に就ては、古今集讀人知らずの歌に、

曉の鴫の羽ねがき百羽かき君が來ぬ夜はわれぞ數かく

とあるのが傳說化して、歌論議に、

昔あやにくなる女をよばふ男ありけり。心ざしある由をいひければ、女心を見んと思ひて、常に來て物いひける處に、榻を立てゝこれが上にしきて百夜臥したらん時に、いはん事は聞かんといひければ、男やすきことなりといひて、雨も降れ風も吹け、暮るればまどひ來て、その榻の上に臥しけり。榻の上にぬる夜の數を書きつけたりければ、九十九夜になりにけり。「今宵伏しなば明日よりは何事もえいなび給はじ」などいひ置きて、出でてとく暮れよかしなど思ひけるに、親の俄かに死にければ、それに障りてとゞまりにけり。その時この女の許よりこの歌を詠みておこせたりける。

曉の榻のはしがき百夜かき君が來ぬ夜は我ぞ數かく

この傳說は弘く信じられてゐて、千載集藤原俊成の歌にも、

思ひきや榻のはしがきかきつめて百夜も同じまろねせんとは

これを深草少將と小野小町の事として傳へたのである。

髑髏の歌も、諸書に見えてゐるもので、その最も古いのは、大江匡房の江家次第、右官出車の條に、

或云、在五中將爲レ嫁二伴后一、出家相構、其後爲レ生レ髮、到二陸奧國一留二八十島一、求二小野小町尸一、夜宿二件島一、終夜有レ聲曰、秋風之吹仁津毛天毛阿那目阿那目、後朝求レ之、髑髏目中有二野薄一、在中將涕泣曰、小野止波不レ曰薄生計里。

古事談第二にも、

業平朝臣、二條后を盜み去らんとする間、兄弟達追ひ至りてこれを奪ひ返す時、業平髻を切り云々。仍りて髮を生やす程、歌枕を見ると稱し、關東に發向し、奧州八十島に宿せし夜、野中に和歌の上の句を詠ずる聲あり、その詞に曰く「秋風の吹くたび毎に穴目穴目」音につきてこれを求むれども人なし。唯一の髑髏あり。明旦猶これを見れば、件の髑髏の目の穴より、薄生ひ出でたりけり。風の吹く毎に薄の靡く音、かくの如く聞えけり。奇怪の思ひをなす間、ある者いふ、小野小町この國に下向し、この所に於て逝去す。件の髑髏なり云々。こゝに業平哀憐を垂れ、下の句をつけていはく「小野とはいはじ薄生ひたり」云々。件の所を小野といひけり。

この小野は陸奧であるのを、京都の市原野に移して、本曲を創作したものである。

【概評】 小町物の現行曲は、「鸚鵡小町」「草子洗小町」「關寺小町」「卒都婆小町」と合はせて五番あるが、他の曲はいづれも現在物であるのに、これだけが幽靈物複式夢幻能である。しかし、複式能とはいつても、類型を破つてゐて、前段にはツレ小町の化身が現れるだけで、シテは現れない。しかもこの前ヅレは、ワキ僧に贈る木實の名盡しを述べるだけで、普通の前ジテのやうに、主題についての說明はしてゐない。後段でも、ツレが僧に受戒を請ふのを拒む態でシテの現れるのは、他に例のない、むしろ普通の曲とは逆な行き方で、甚だ面白い手法である。殊に本曲の骨子と見るべき百夜通ひの條は、戀慕・執着・怨恨、優雅と凄壯とを織り交せた、一分の隙もない行文である。たゞ末尾の「衣紋けたかく引繕ひ」から「飲酒はいかに」への一節は、どう見ても文脈が續かない。恐らく脫文があるのであらう。

前段

【一】 名乘笛にて、ワキ僧、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて出で、名乘座に立ちて、

ワキ「これは八瀬の山里に一夏を送る僧にて候。ここにいづくとも知らず女性一人。毎日木の實爪木を持ちて來り候。今日も來りて候はば。如

【一】 舞臺は山城國八瀬の僧庵で、ワキ僧登場。

僧「私は八瀬の山里に籠つて、夏中佛道修業をしてゐる僧です。さて、何處の者とも分らない女が、毎日果物や薪を持つて來るので、今日も來たならば、どういふ素性の者か、名前を聞いて見ようと思ふ

【一】
○八瀬―山城國愛宕郡。比叡山の西麓にあるので山里といつた。
○一夏―四月十六日から七月十五日まで夏季三ケ月僧侶が籠居して精進修業すること。
○木の實―果物。
○爪木―爪で折り取つた枝の意で、燃料とする柴。

【二】

○たき物―爪木を焼物とするを薫物にいひかけた。
○匂はぬ袖―薫物の薫りのしない袖。やつれ果てた身。
○市原野―愛宕郡にある。

【三】

何なる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候

といひて脇座へ行き下に居る。

【二】

次第の囃子にて、ツレ里女、面連面・鬘・鬘帯・襟赤・着附摺箔・唐織着流の装束にて、木葉を入れたる籠を左手に持ちて出で、常座に立ちて囃子座の方に向き、

ツレ次第『拾ふ爪木もたき物の。拾ふ爪木もたき物の匂はぬ。袖ぞ悲しき

地取に正面に向き、

ツレサシ『これは市原野のあたりに住む女にて候。「さても八瀬の山里に。貴き人の御入り候程に。いつも木の實爪木を持ちて參り候。今日も又參らばやと思ひ候

といひて舞臺の眞中に行き下に居て、

ツレ「いかに申し候。又こそ參りて候へ

【三】

ワキ（ツレに）「いつも來れる人か。今日は木の實の數數御物語り候へ

ツレ『拾ふ木の實は何々ぞ

のです」

と見物人に自己紹介して、庵の中にゐる體。

【二】

ツレ里女（實は小野小町の幽靈）市原野から八瀬の僧庵へ來る體で登場。

女「木の枝を拾つて、その日〳〵を暮らしてゐる始末で、着物に薫物をたきしめた、昔の面影のないのが悲しい」

と次第を謡つて、自分の境遇を述べ、

女「私は市原野のあたりに住む女です。また、八瀬の山里に貴いお僧がお出でになるので、毎日果物や薪を持つて行つて差上げてゐますが、今日もお伺ひしようと思ひます」

といつて八瀬僧庵に着いた心で、

女「お頼み致します。私がまた參りました」

【三】

僧「いつも來る人ですか。今日持つて來た木の實はどんなものです」

女「拾ふ木の實かどんなものかとお尋ねでございますか」

○古見馴れし　昔小町の盛年の頃、毎夜見馴れてゐた深草少將の車。

○嵐にもろき―嵐が吹くと落ち易い。

○落椎、垣ほの柿、笹栗、窓の梅、苧生の浦梨、櫟、香椎、眞手葉椎、大小柑子―本曲の末に記す。

○人丸　柿本人麻呂。後世和歌三神の一に崇められた萬葉歌人。

○山の邊の―山部赤人。人麻呂と竝び稱せられた萬葉歌人。「垣ほ」に對して―山の邊―といつた。

○花の名にある―桃より花の字を承けて、櫻といふ美しい花の名を持つ櫻麻を出し、これを苧生の序とした。櫻麻は麻の一種。

○なほもあり―梨を無しの意にとり、猶もありといひ、更に木の實の名をつゞけるのである。

○あはれ昔の戀しきは―柑橘類を連ねた緣で橘を出し伊勢物語の歌に―五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする―とあるので、「昔の戀しき」といつた。

○小野とはいはじ―己の音を重ねて、小野小町といひかけ、更にこれを打消して市原野とつゞけた。

○薄生ひたる―後に出る本曲眼目の歌―小野とはいはじ薄生ひたり―に據つて出した。

地「拾ふ木の實は何々ぞ

ツレ「古見馴れし、車に似たるは嵐にもろき落椎

地「歌人の家の木の實には

ツレ「人丸の垣ほの柿。山の邊の笹栗

地「窓の梅

ツレ「園の桃

地「花の名にある櫻麻の。苧生の浦梨なほもあり櫟香椎眞手葉椎。大小柑子金柑。あはれ昔の戀しきは花橘の、一枝花橘の一枝

ワキ「木の實の數々は承りぬ。さてさて御身は如何なる人ぞ名を御名乘り候へ

ツレ「恥かしや己が名を

地「小野とはいはじ（と立上り）。薄生ひたる市原野邊に住む姥ぞ。跡弔ひ給へお僧とてかき消すやうに、失せにけりかき消すやうに失せにけり

僧「さうです。どんな木の實を拾ふのです」

女「まづ第一に、昔見馴れた人の車に似てゐる、嵐が吹けば落ち易い椎の實でございます。それから、歌人に緣故のあるものでは、人丸の庭に植ゑられたといふ柿、赤人に緣のある山邊の笹栗。その外、梅に桃、花も美しい苧生の浦の産物として名高い梨の實。なほその外にも、櫟、香椎、眞手葉椎、大柑子、小柑子、金柑などございまして、昔の戀しい人の香がするといはれた花橘も一枝折り添へて參りました」

僧「木の實の種類はそれで分つたが、一體あなたはどういふ方なのです、名を明かして下さい」

女「お恥かしながら、私は小野の……、いえ名前など申されません、たゞあの薄の生ひ茂つた市原野に住んでゐる婆でございます。どうぞ私の亡き跡を弔つて下さい」

かういつて、女はかき消すやうに見えなくなつてしまつた。

と仕手柱際に出で、後見座に行きてくつろぐ。

【四】

ワキ「かかる不思議なる事こそ候はね。唯今の女の名を委しく尋ねて候へば、小野とはいはじ薄生ひたる、市原野に住む姥と申しかき消すやうに失せて候。ここに思ひ合はする事の候。或人市原野を通りしに、薄一村生ひたる陰よりも、『秋風の吹くにつけてもあなめあなめ。』小野とはいはじ薄生ひけりとあり。これ小野の小町の歌なり。さては疑ふ所もなく唯今の女性は。小野の小町の幽靈と思ひ候程に、かの市原野に行き。小町の跡を弔はばやと思ひ候

ワキ上歌（待謡三）この草庵を立ち出でて（立ちて正面へ三四足出でゝ）この草庵を立ち出でて。猶草深く露繁き市原野邊に尋ね行き（と下に居り）。座具をのべ香を焼き（合掌し）、南無幽靈成等正覺、出離生死頓證菩

ツレ里女、無言から隠れる。

【四】　後段

ワキは女が見えなくなつたので、

僧「こんな不思議な事はない。唯今の女の名を尋ねると、小野といひかけて、たゞ薄の生ひ茂つた市原野に住む婆だといつて、消えるがやうに居なくなつてしまつた。さうさう、思ひ出したことがある。ある人が市原野を通つた時、薄の生えてゐる草蔭から、

『秋風の吹くにつけてもあなめあなめ、小野とはいはじ薄生ひけり』――

（秋風が吹くにつけても、見るも痛はしいことだ。小野小町の髑髏は、ここへ[illegible]、[illegible]るばかりだ）

といふ歌を詠んだといふことである。この歌は小野小町の歌だから、さては唯今の女は確かに小野小町の幽靈であつたのだ。それではこれから市原野へ行つて、小町の跡を弔はう」

といつて、この僧庵を出て、草深い露の多い市原野へ尋ねて行く。

無言、市原野[illegible]

こゝで僧は敷物をのべ、香を焼いて、

僧「南無幽靈、成佛し給へ、生死の苦しみを脱れて、速かに菩提佛果を得給へ」

○秋風の吹くにつけても――解説に委しく記す。但し「あなめ」は「あな目痛し」の約言で、見るに堪へないといふのが本意であるのを、――穴目――の意にとつてこの傳説を生じたのである。

○小野小町――平安初期の有名な歌人で、小野氏系圖には「出羽守良實、小野篁二男大内記石見守後生の弟也一本當澄、又名二常澄一、有二女二人一、姉名二小町一、歌人也――とある。玉造小町子壯衰書の小説を小野小町の事として、古今著聞集小町落魄の傳説を記して以来、種種の逸話を生じたのである。「委しく」は「關寺小町」「卒都婆小町」にいふ。

○座具――僧侶六物の一で、座衣ともいふ。行く時は疊んで袈裟の下に携へ、習まる時は敷いて坐るもの。

○南無幽靈――以下迴向の文。

○成等正覺――成佛の意。等正覺は如来十號の一。

○出離生死――生死輪廻の迷界を脱れ出ること。

○頓證菩提――速かに菩提佛果を證得せよ。

【五】

○戒—佛法の戒律。これを授かつて佛弟子となるのである。

○二人見るだに—冥途の苦患は二人共に受けてさへ辛いのに、小町が成佛して自分一人となつたならば、なほ辛い。

○重きが上の—新古今集寂然法師の歌「さらぬだに重きが上の小夜衣わが妻ならぬつまな重ねそ」を引いて、「重ねて憂き目」といひ續けた。

○三瀬川—三途の川。冥途にある川。

○沈み果て—沈むは川の縁語。地獄に墮ちること。

提

といひてもとへ歸り脇座の次に坐す。

【五】 一聲の囃子にて、シテ深草少將、面瘦男・黒頭・黒地鉢卷・襟白・着附摺箔・水衣・白大口・腰帶の裝束にて、熨斗目を上に被りて幕より出づ。同時に、後ヅレ小野小町、前と同じ裝束にて後見座を立ちて名乘座に出でワキに向ひ、

ツレ「嬉しのお僧の弔ひやな。同じくは戒授け給へお僧

シテ一の松に立ちて、ワキの方に向ひ、

シテ「いや叶ふまじ戒授け給はば。恨み申すべし。はや歸り給へお僧

ツレ（シテに）「こは如何に適々かかる法に逢へば。猶その苦患を見せんとや

シテ（ツレに）「二人見るだに悲しきに。御身一人佛道ならば わが思ひ。重きが上の小夜衣。重ねて憂き目を三瀬川に。沈み果てなば お僧の。授け給へるかひもあるまじ。はや歸り給へや。お僧た

ご經文を唱へる。

【五】 ツレ小野小町舞臺に現れて、

小町「御回向下さいまして、ほんとに嬉しう存じます。どうかこの上のお願ひには、佛戒を授けて下さいませ」

シテ深草少將追懸けるが如くにして登場。

少將「いやいけない。小町に佛戒をお授けになつては、私はお恨み申す。お僧は早くお歸りなさい

小町「これはいかな事、たま／＼このやうなありがたい回向をお受けしたのに、まだ地獄の責め苦を受けさせようとするのですか—

少將「二人で責め苦を受けてゐた時でさへ悲しかつたのに、そなた一人が成佛したならば、自分一人になつて、愈〻辛い思ひをしなければならない。その結果地獄に墮ちてしまつたならば、そなたもこれに引きづられて、折角佛戒を受けた效もな

ち

と被衣を少し擡げてワキを睥むやうに見る。

地上歌『猶もその身は迷ふとも。猶もその身は迷ふとも。戒力に引かれば。などか佛道ならざらんただ、共に戒を受け給へ

【六】

ツレ『人の心は白雲の。われは曇らじ心の月。出でてお僧に弔はれんと薄おし分け出でければ（とワキへ向き眞中に出づ）

シテ『包めどわれも穂に出でて。包めどわれも穂に出でて（と被衣を脱ぎ）。尾花。招かば留まれかし（とツレを招く）

ツレ『思ひは山の鹿にて。招くと更に留まるまじ

シテ『さらば煩惱の、犬となつて（と歩み出し）。打たると。離れじ（と舞臺に入る）

ツレ『恐ろしの姿や

シテ、つかつかとツレの後へ進み寄り、

【六】○人の心―少將の心。○白雲の　人の心は知らぬといひかけた。○心の月―悟り澄ました心を月に喩へていふ。菩提心論に「我見二自心一形如二月輪一」新古今集僧慈圓の歌に「古の鹿鳴く野邊の庵にも心の月は曇らざりけり」○穂に出でて―穂は薄の縁語。心に包み隱したことが言語顏色に現れること。秘めた戀を現すことと、隱れた亡靈の姿を現すこととを兼ねていふ。○尾花　薄に同じ。○招かば留まれ―招かれて人の足の留まるが如く、御身も佛道に入るを思ひとまれとの意。後撰集伊勢の歌に「宿もせに植ゑなべつゝぞ我は見る招く尾花に人やとまると」○山の鹿―決心の堅い喩。寶物集に「煩惱は家の犬、打てども去らず、菩提は山のかせぎ、繋げども留まらず」○煩惱の犬―前掲寶物集の語による。

いだらう。結局駄目なことだ。お僧に早く歸りなさい」

僧「今だに心迷ひをして居られても、佛戒をお受けになれば、成佛出來ない筈はありません。是非二人一所に佛戒をお受けなさい」

【六】

小町「少將の御心はとうであらうとも、私は心を澄まして居ます。お僧の御回向を受けたいばかりに、薄をおし分けて出て來たのですもの」

少將「自分は、この隱してゐた姿を顯すのも、そなたを留めたい爲だ。自分のいふ通りに思ひとまるがよい」

小町「いえ、私はすつかり佛心となつたのですから、いくらいはれても思ひとまりません」

少將「それならば、煩惱の犬となつて、そなたに附纏つてやらう。打たれても離れはしないぞ」

小町「まあ、あの恐ろしい姿」

○深草の少將—露の緣で深草と續けた。深草少將は傳說人物であるが、仁明天皇が崩御になり深草山に葬り奉つた時、世を悲しんで剃髮した左近衞少將良峰宗貞（僧正遍昭）を指すといふ說が廣く行はれてゐる。これについて黑岩涙香の「小野小町論」に興味のある說が出てゐる。

【七】

○車の榻—車の轅を載せて置く臺。

○百夜通ひ—解說に記す。

○われは白雲の—われは知らずを白雲にいひかけ、雲のかゝる、かゝる迷ひといひつゞけた。

○車の物見—牛車の左右の立板にある窓。これを他人の物見、外出の意に兼ね用ゐた。

シテ「袂をとつて。引き留むる（とツレの肩に手を添ふ）

ツレ「引かるる袖も

シテ「控ふる

地「わが袂も（シテ少し退き）。ともに涙の露。深草の少將

と仕手柱際に退きてワキに向く。

【七】

ワキ「さては小野の小町四位の少將にてましますかや。とても物の事に車の榻に。百夜通ひし所をまなうで御見せ候へ

ツレ「もとよりわれは白雲の。かかる迷ひのありけるとは

と謠ひて脇座へ行きワキの上に坐す。

シテ「思ひもよらぬ車の榻に。百夜通へと僞りしを。「眞と思ひ。」曉毎に忍び車の榻に行けば（とツレへ向く）

ツレ「車の物見もつつましや。姿を變へよといひ

少將は小町の袂をとつて引き留める。かうして引かれる小町も、袂を引く深草少將もともに涙に濡れるのである。

【七】

ワキ僧はこの樣を見てゐて、

僧「さてはこゝに顯れたのは、小野小町と深草少將とであつたのか。一層のこと、車に乘つて小町の許へ百夜通はれた樣をも一度見せて下さい」

小町「私は勿論少將にそのやうな迷ひの心があらうとは知らなかつたのでございます」

少將「いやさうではない、車に乘つて百夜通へと、小町が僞りをいつたのを、自分はほんとと思つて、忍び車で度々通つて行つたのだ」

小町「車で來られては、人目が恥かしいと

○山城の木幡の―この思ひはいつか止まんを山城にいひかけ、拾遺集柿本人麻呂の歌「山科の（河海抄には「山城の」）木幡の里に馬はあれどかちよりぞ來る君を思へば」を引き、徒歩跣足と續けた。

○身のうき世―蓑の音を重ねて、「身の」といひ、身の憂き意で浮世とつゞけ、竹の節をよといふので、世より竹といひ、杖を突きといひかけて、月とつゞけた。

○目に見えぬ鬼―古今集序に「目に見えぬ鬼神の心をもあはれと思はせ」とある詞を借りた。

○鬼一口―伊勢物語に、雷雨の夜密かに連れ出した女を奪ひ返された事を記して「鬼はや一口にくひてけり」とあるを引いた。

しかば

シテ「輿車はいふに及ばず

ツレ『いつか思ひは

地『山城の木幡の里に馬はあれども（シテ正面へ二三足出でて向ふを見）

シテ『君を思へば徒歩跣足（とくつろぎ男笠を持つ）

ツレ『さてその姿は

シテ『笠に蓑（笠を前に出して見）

ツレ『身のうき世とや竹の杖

シテ『月には行くも暗からず

ツレ「さて雪には

シテ「袖をうち拂ひ（と雪を拂ふ形）

ツレ『さて雨の夜は

シテ『目に見えぬ。「鬼一口も恐ろしや

ツレ『適々曇らぬ時だにも

思つて、姿をかへて下さいと申しました」

少將「それで、輿にも車にも乘らなかつた」

小町「私はいつか思ひとまられることと思つてゐましたのに」

少將「いや自分は馬にも乘らず、そなたを思ふばかりに徒歩跣足で行つたのだ」

小町「そのお姿と申せば……」

少將「笠に蓑といふみじめな有樣だ」

小町「辛い思ひをして、竹の杖をお持ちになつたのでございませう」

少將「月の夜は、それでも明るくて行くのに苦しみが少かつた」

小町「でも雪の日には……」

少將「降りかゝる袖の雪を拂ひながら出掛けたのだ」

小町「雨の降る夜はどんなでございましたらう」

少將「目には見えない鬼が一口に喰つてしまひさうで、恐ろしかつた」

小町「曇らない夜は、それでも……」

○涙の雨―古今集小野篁の歌に「泣く涙雨と降らなん渡河水まさりなば歸りくるがに」

○月は待つらん―小町の心を推しはかつて、月をば待つであらうが、自分を待ちはしまいと恨む意。

○曉は―夕暮に對して、曉には色々物思ひをすると。

○わが爲ならば―その物思ひは他人の爲であつて、わが爲には寧ろ鳥も早く鳴け夜明の鐘も早く打て、そして早く立去るやうにと祈るであらうとの意。

○獨寢ならば―少將自らの心持をいふものとも解せられるが、小町の心を推測したものと見た方が穩かなやうに思はれる。

【八】

シテ『身ひとりに降る（と笠を上げ）。涙の雨か（と笠を下し）

〔イロヘ〕

シテ『あらくらの夜や（と笠にて顏をかくし）

ツレ『夕暮は。一方ならぬ。思ひかな

シテ『夕暮は何と（笠を下してツレを見つめ）

地『一方ならぬ。思ひかな

シテ『月は待つらん月をば待つらん（と上を見上げ）。われをば待たじ。空言や（と笠にてツレへさし）

地『曉は。曉は。數々多き。思ひかな（正面へ出で）

シテ『わが爲ならば

地『鳥もよし啼け。鐘もただ鳴れ。夜も明けよただ獨寢ならば。辛からじ

と仕手柱際に退き、安坐して面伏せ。

【八】

シテ『かやうに心を。盡し盡して

地『かやうに心を。盡し盡して。榻の數々（左手にて指

少將「いや自分だけは常に涙に濡れて、晴れた日とてはなかつたのだ」

〔イロヘ〕

にその苦しかつた樣を示し、

少將「あゝ暗い夜だ」

小町「ほんとに夕暮と申すものは、いろいろ物思ひをさせるものでございます」

少將「夕暮が、何だといふのだ」

小町「色々物思ひをさせるものでございます」

少將「そなたが夕暮に物思ひをして待つといふ相手は、空に出る月のことであらう。さうだ、月を待つので、自分を待つてくれるのではなからう。僞をいふな」

小町「夜の明方にはまた色々物思ひのせられるものでございます」

少將「いや、それも自分の爲ではない。自分の爲には、明方を知らせる鳥も早く鳴け、鐘も早く打て。かうして早く夜が明けよと祈つたのであらう。獨寢の方が氣樂だと思つて……」

【八】

少將「このやうに色々心を盡して、小町の許へ通つた日數を、車の榻に書きつけた印で數へると、丁度九十九夜になつた」

を折り數へ)。よみて見たれば。九十九夜なり。今は一夜よ嬉しやとて(と立上り)。待つ日になりぬ。急ぎて行かん(と正面に出で)。姿は如何に

シテ「笠も見苦し(と笠を一寸見て横へ投げ捨て)

地「風折烏帽子

シテ「蓑をも脫ぎすて

地「花摺衣の

シテ「色襲

地「うら紫の

シテ「藤袴

地「待つらんものを

シテ「あら急がしや。すは早今日も(と正面先へ出で)

地「紅の狩衣の(と眞中へ退き)。衣紋けたかくひき繕ひ。飲酒は如何に。月の盃なりとても(扇を盃の心にて出し)。戒めならば保たんと。唯一念の悟りにて。

態。あと今日一夜だ。とう〳〵待つ日が來た。嬉しい、急いで行かう。ここでは何にしよう。晴れの日に、笠は見苦しいと思つて、風折烏帽子を被り、蓑を脫ぎすてて、美しい色模樣の衣を重ね、薄紫の指貫袴をはき、さぞ小町が待つてゐることだらう、あゝ忙しいことだ、はや今日の日も暮れた、急いで出掛けようと、紅色の狩衣を調へたのだ」

少將「酒も飲むなとあれば、どんなに美しい盃に注がれても飲みはしない」

かうして飲酒戒を保つことが、やがて

○風折烏帽子—折烏帽子の一種。常は笠をきて通つたが、今日は最後だから風折烏帽子に着飾つたといふ意。

○花摺衣—草花を摺りつけて染模樣にした美しい衣。

○色襲—色々の美しい衣を重ね着ること。

○うら紫の藤袴—裏は紫、表は薄紫の指貫袴。

○紅の—日の暮れといひかけた。

○飲酒—佛教五戒の一。

○月の盃—月のやうな形をした盃。美しい盃。

○戒め—佛戒と小町の戒めとを兼ねていふ。

○一念の悟り—專心一念、迷妄を脫却すること。

多くの罪を滅して小野の小町も少將も、共に佛道なりにけり共に佛道なりにけり

シテ常座にて留拍子を踏みて幕に入り、續いてツレ・ワキ幕に入る。

一念發起して佛道の悟りを開く基となつて、これまでの多くの罪障も消滅し、小野小町も深草少將も共に成佛した。

〔考異〕

諸流（五流）

【三】ワキ「いつも來れる人か（下懸毎日木實爪木を持ちて來り給ふ御志。返す〳〵もありがたう候）今日は……物語り候へ。ツレ（下懸ホ・ミ「忝き御膳なれどもいかなれば悉達太子は。淨飯王の都を出で。檀特山のさかしき道。菜摘み水汲み薪とり〳〵。樣々に御身をやつし。仙人に仕へ給ひしぞかし。況やこれは賤女の。摘み習ひたる根芹若菜。わが身をだにも知らぬ程。賤しく糧を木實なれば。重しとは持たぬ薪なり）拾ふ木の實は……

古謠本（光悅本）

【一】ワキ「これは（光都ちかき）八瀨の……如何なる者（光何くの人）ぞと名を……【二】ワキ「いつも……今日は（光さて〳〵此程もちきたりたまふ）木の實の數々（光の名を）……【四】ワキ「かゝる不思議の……姥（光にてある）と申しかき消す……【五】シテ「いや叶ふまじ（光思もよらす）……【七】ワキ「さては小野の……とても事に……御見せ候へ（光懺悔に罪をほろほしたまへ。シテ「さらはおことは車の榻に百夜まちし所を申させ給へ。我は又百夜通ひし所をまなふて見せまいらせ候へし）

附記

○落椎―落ちた椎の實。椎を深草四位少將の四位に通はせたのである。また椎の木は實際に東の川村とする。

○垣ほの柿―庭園の柿。姓氏錄に「人丸敏達天皇之後也、家門前有二柿樹一、因云二柿本一」と。今石見の人丸社に筆柿といふのがある。

○笹栗―小粒の栗の一種。古今栄雅抄に「赤人は上總國山邊郡の人なり。かの所の南今にあり。……この所に笹栗とて長さ一尺ばかりあるに栗のなると、かの國の人語りける」と。

○窓の梅—歌人の縁で窓を出した。たゞ梅のこと。大藏卿有家の歌に「山里は嵐にかをる窓の梅かすみにむせぶ谷の鶯」

○園の桃—「窓の梅」に對して出した。藤原俊賴の歌に「誰かまた見て忍ぶらん山賤の園生の桃の花のよそめを」

○苧生の浦梨—苧生の浦は伊勢國にあり、梨の名所。新古今集藤原俊成の歌に「櫻麻の苧生の浦波立ちかへり見れどもあかず山梨の花」

○櫟—栗に似て圓く小さい山栗の一種。夫木抄藤原爲家の歌に「大井河時雨るる秋は櫟だに山や嵐の色をかすらむ」。櫟は「いちひがし」ともいふので、次に香椎を出した。

○香椎—柏のこと。大葉櫟ともいふ。

○眞手葉椎—櫧の一種。葉は櫟に似て厚く、實は櫧よりも大きい。

○大小柑子—大柑子は橙の類、小柑子は蜜柑の類。

邯鄲（かんたん）

觀（寳 春 剛 喜）

解説

【能柄】 四番目 一段劇能

【人物】 **狂言** 邯鄲の宿主、**シテ** 盧生、**ワキ** 夢中の勅使、**ワキツレ** 夢中の輿舁（二人）、**同** 夢中の大臣（二人）、**子方** 夢中の舞人

【所】 支那 邯鄲の里

【時】 （無季）

【異稱】 「邯鄲枕」ともいつた。

【作者】 能本作者註文には作者不明、二百十番謠目録には世阿彌の作とある。歌舞髄腦記、一休頓頌等に曲名が見えてゐる。糺河原勧進猿樂記に寛正五年四月四日音阿彌が演じ、飯尾宅御成記に寛正七年二月廿五日觀世又三郎の演じたこと、言繼卿記に文祿四年三月廿八日本曲を註釋したことが見えてゐる。

【梗概】 蜀國の盧生といふ者が、善知識の教を受けようと思つて楚國に赴く途中、邯鄲の里に泊まり、宿主の貸してくれた邯鄲の枕を

して寢てゐると、勅使が迎へに來て、天子の位に昇り、限りのない榮耀榮華を盡した、と見たのは、粟飯を炊ぐ間の短い夢に過ぎなかつた。そこで、人生そのものが夢であると悟り得て、喜んで國に歸つた。

【出典】この原據は、唐の李泌の枕中記で、同書に、

開元十九年、道者呂翁、經二邯鄲道上一、邸舍中、設レ榻施レ席、擔レ囊而坐、俄有二邑中少年盧生一、衣二短裘一乘二青駒一、將レ適二于田一、亦止二邸中一、與レ翁接レ席、言笑殊暢、久之盧生顧二其衣裝敝褻一、乃歎曰、大丈夫生レ世不レ諧而困如レ是乎。……是時主人蒸二黄粱一爲レ饌、翁乃探二囊中枕一、以授レ之曰、子枕レ此、當レ令二子榮適如一レ志。其枕瓷而竅二其兩端一、生俛レ首就レ之。寐中見二其竅大而明若一レ可レ處、擧レ身而入。遂至二其家一、娶二清河崔氏女一、女容甚麗而產甚殷、由レ是衣裘服御、日以華侈、明年擧二進士一登二甲科一。……凡兩竄二嶺表一、再登二台鉉一、出二入中外一、廻二翔臺閣一、三十餘年間、崇盛赫奕、一時無レ比、末節頗奢蕩、好二逸樂一、後庭聲色皆第一、……盧生欠伸而寤、見二方偃二於邸中一、顧二呂翁一在レ旁、主人蒸二黄粱一尚未レ熟、觸類如レ故、蹶然而興曰、豈其夢寐耶、翁笑謂曰、人生之事、亦猶レ是矣、生憮然良久謝曰、夫寵辱之數、得喪之理、生死之情、盡知レ之矣、此先生所三以窒二吾欲一也、敢不レ受レ教、再拜而去。

しかし、謠曲に近いのは太平記の文であつて、同書卷二十五「黄粱夢事」に、

昔漢朝にして富貴を願ふ客あり。楚國の君賢才の臣を求め給ふ由を聞きて、恩爵を貪らんが爲に、即ち楚國へぞ赴きける。路に歩み疲れて、邯鄲の旅亭に暫く休みけるを、呂洞賓といふ仙術の人、この客の心に願ふ事を暗に悟つて、富貴の夢を見する一の枕をぞ貸したりける。客この枕に寢ねて一睡したる夢に、楚國の侯王より勅使來りて客を召さる。その禮その贈物甚だ厚し。客悦んで即ち楚國の侯門に參ずるに、楚王席を近づけて、道を計り武を問ひ給ふ。客答ふる度毎に、諸卿皆頭を屈して旨を承りければ、楚王斜ならず是を貴寵して、將相の位に昇せ給ふ。かくて三十年を經て後、楚王かくれ給ひける刻、第一の姫宮を客に娶せ給ひければ、從官使令、好衣珍膳、心に叶はずといふ事なく、目を悦ばしめずといふ事なし。座上に客常に滿ち、樽中に酒空しからず、樂み身に餘り、遊び日を盡して、五十一年と申すに、夫人ひとりの太子を生み給ふ。……遊び戲れ舞ひ謠つて、三年三月の歡娛已に終りける時、夫人かの三歲の太子を懷きて、舷に立ち給ひけるが、踏み外して太子夫人諸共に海底に陷り給ひてけり。數萬の侍臣あわて一同にあれや〳〵といふ聲に、客の夢忽に覺めて、枕の上の睡を思へば、僅かに午炊一黄粱の間を過ぎざりけり。客ここに人間百年の樂みも、皆枕頭片時の夢なる事を悟り得て、是より楚國へ越えず、忽に身を捨てて、世を遁くる人となつて、遂に名利に繫かるる心になかり

けり。これを楊鐵山が日月を謝する詩に作つて曰く、

少年力學志須レ張、得失由來一夢長、試問邯鄲欹レ枕客、人間幾度熟二黃粱一。

是を邯鄲午炊の夢とは申すなり。

とある。これには盧生の名は出てゐないが、その他の點は謠曲と甚だ近い。謠曲直接の典據は恐らくこの太平記にあるのであらう。

【概評】 前掲二書を比較して見ても、執拗な支那趣味と淡白な日本趣味との相異を容易に察知することが出來るが、殊に本曲に於ては、室町時代乃至その後の日本趣味——華麗豪奢の裡に幽玄閑寂の情趣を味はうとする日本趣味が甚だよく描き出されてゐると思ふ。そしてまた甚だ手際よくこれを戲曲にまとめてゐると思ふ。まづ前二書に見えてゐる枕の持主を現さないで、たゞこれを貰つた女宿主を狂言として登場せしめるに留めてゐるのは、事件を戲曲的に要約する上から見て、好ましい手法である。それから、夢の場に、前二書では小臣から次第に累進することとしてゐるのに、これでは直に帝王の位に卽くとしてゐるのも、その懸隔が甚しいだけ却つて夢らしくてよい。夢のさめ方も、前二書では自分の欠呻又は夢中の驚きによるものとしてゐるのに、これは宿主が食事を知らせに來た爲としてゐるのも、戲曲らしくてよい。最後の、この夢から悟入することは、前二書も同じであるが、夢幻能の脚色に慣れてゐる、この謠曲では殊に巧みに出來てゐる。これを謠曲の立場から見ても、夢を描いたとはいふものの、一般の夢幻能とは全く趣の異つたもので、多くの夢幻能を夢らしい劇であるとすれば、これは劇らしい夢で、上手の役者によつて演ぜられれば、誠に味ひの深い曲柄となるのである。

【序】

【序】 後見、大屋臺の作物を脇座へ出す。

狂言宿主、美男鬘・着附縫箔・女帶・中啓の裝束にて、邯鄲枕を持ちて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。邯鄲の里に住居する者にて候。妾は往來の御方にお宿を參らせ候が。ある時仙の法を行ひ給ふ御方にお宿を申して候へば。宿の爲とて邯鄲の枕と申すを給はりて候。是を召してまどろみ給へば。少しの內に夢を御覽じ。來し方行末の悟りを御開きある枕にて候。今日も御旅人の御泊りあらば。こなたへ申し候へ。〈

【一】○浮世の旅に迷ひ來て　行末の分らない無常な人間に生まれて來て。人生の旅に實際の旅を含めていふ。
○夢路をいつと定めん―迷ひの心はいつ覺めるであらう。旅の目的地の遠いことを含めていふ。
○蜀の國―支那三國時代の國名。今の四川省を主とした附近一帶の地。
○盧生―枕中記に出てゐる青年の名。解說參照。
○楚國―今の湖北・湖南兩省及び附近一帶の地。
○羊飛山―所在不明。拾葉抄には「大明大統志七十卷に云ふ、四川夔州府羊飛山在二萬縣西南五十里一」と記してゐる。
○知識―善知識の略で、事理を辨へて、善く人を導く識者。高僧をいふ。
○身の一大事―人生の意義法華經方便品に「唯以二一大事因緣一故出二現於世一」
○山又山を越え行けば―風雅集道昭の歌に「わけ來つる山又山は麓にて峯より峯の奥ぞ遙けき」
○そこともなき―これどいふ目當もない。
○野暮れ山暮れ―夫木抄に「道のべの露分け衣ほさずして野くれ山くれ幾夜ぬる

【一】といひて狂言座に着く。
次第の囃子にて、シテ盧生、面邯鄲男、黒頭・黒地鉢卷・標花色・着附厚板・法被・半切・掛絡・腰帶の裝束にて、左手に數珠、右手に唐團扇を持ちて出で、常座に立ちて囃子座の方に向き、

シテ次第「浮世の旅に迷ひ來て。浮世の旅に迷ひ來て。夢路をいつと定めん

地取に正面に向き、

シテサシ「これは蜀の國の傍に。盧生といへる者なり。「われ人間にありながら佛道をも願はず。「ただ茫然と明かし暮らすばかりなり。「まことや楚國の羊飛山に（と右の方に向き）。尊き知識のましますす由承り及びて候程に。（正面に直し）身の一大事をも尋ねばやと思ひ。唯今羊飛山へと急ぎ候

シテ道行「住み馴れし。國を雲路のあとに見て。國を雲路のあとに見て。山又山を越え行けばそこともなき旅衣。野暮れ山暮れ里暮れて。名にのみ聞きし邯鄲の。里にも早く着きにけり里に

【一】舞臺は初め空間で、シテ盧生登場。

盧生「今出る旅が遠い辛いものであるばかりでない、この人生の旅が定め難いもので、われらはたゞ迷ひに迷つて、いつ悟りの開けることか分らない」

と次第を謡つて、わが心持を述べ、

盧生「私は支那蜀の國の片田舍の盧生といふ者です。私は人間に生まれながら、佛道に入ることをも願はず、たゞぼんやりと無意義な月日を送つてばかりゐました。ところが、楚國の羊飛山に貴い高僧が居られるといふ事を聞いたので、自分の將來一生の事をも尋ねたいと思ひ、これから羊飛山へ急いで出掛けるのです」

と見物人に自己紹介をし、

盧生「住み馴れたわが國を遠く後にして、山又山を越え、どこと見當もつかない遠い旅に出で、或は野邊に、或は山邊に、或は町里に夜を過して、旅を續けてゐるうちに、名前だけ聞いてゐた邯鄲の里に早くも着いた」

らん」

○邯鄲―直隷省廣平府の西南にある。戰國時代趙國の都。

も早く着きにけり

「野暮れ山暮れ」と右の方に向きて二三足出で、又もとに歸りて、邯鄲に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

シテ「急ぎ候程に、これははや邯鄲の里に着きて候。未だ日は高く候へども。この所に旅宿せうずるにて候。（橋懸の方に向き）いかに案内申し候

狂言一の松に立ちて、

狂言「案内とは誰にて渡り候ぞ

シテ「これは旅人にて候。一夜の宿を御貸し候へ

狂言「易き間の事。御宿を參らせうずるにて候。まづかうかう御通り候へ

シテ舞臺の眞中へ出づ。狂言床几を持出してシテに腰かけさせ、目附柱際にてシテに向ひ下に居て、

狂言「扨かたがたはいづくよりいづ方へ御通りなされ候ぞ

シテ「これは蜀の國の傍に。盧生といへる者なり。われ人間にありながら佛道をも願はず。たゞ茫然と明かし暮らす處に。楚國の羊飛山に。尊き知識のまします由承り及びて候程に。身の一

と旅の様を述べてゐるうちに、舞臺は邯鄲となる。

盧生「旅を急いだので、思ひの外早く邯鄲の里に着きました。まだ日は高いが、ここで泊まりませう」

シテ盧生、宿の前へ行つた態で、

盧生「お頼みします」

狂言女宿主出て、

宿主「どなたでございます」

盧生「私は旅の者です、一夜お泊め下さい」

宿主「お易い御用でございます。お宿申しませう。さあどうぞこちらへお出で下さいまし」

盧生、部屋に案内せられ、舞臺は宿の一室。

宿主「あなた様は、どれからどれへお出でございます」

盧生「私は蜀國の片田舎に住む盧生といふ者です。私は人間と生まれながら、佛道をも修めようとも願はず、たゞぼんやりと月日を送つてゐましたところ、楚國の羊飛山に貴い高僧が居られるといふ事を聞

○そと—一寸

○身を知る—身の行末を知る。
○門出—出發。旅行の始。
○一村雨の雨宿り—この宿に泊るのも前世からの宿縁であるとの意。「一樹の蔭に宿り一河の流を汲むも是皆他生の緣」といふ語を引いたのであつて、實際に雨宿りをしたといふのではない

大事をも尋ねばやと思ひ立ちて候

狂言「それは遙々の御旅にて候。さて爰は或時仙の法を行ひ給ふ御方に。お宿を申して候へば。宿の爲とて邯鄲の枕と申すを給はりて候。是を召してまどろみ給へば。少しの内に夢を御覽じ。來し方行末の悟りを御開きある枕にて候。御旅人もそと御覽あれかしと存じ候

シテ「さてその枕はいづくに御座候ぞ

狂言「卽ちあれなる大床にて候

シテ「さらば立ち越え一睡見うずるにて候

狂言「さらばそとまどろみて御覽候へ。その間に粟の飯を拵へさせ申さうずるにて候。（名乘座に立ち）やあ〳〵御旅人の御着きありたるぞ。粟の飯を拵へ候へ〳〵

（シテ立ちて作物の方へ行き、臺に上り居立ち枕を見て（狂言は床几を引きて狂言座に着く）

シテ「さてはこれなるが聞き及びにし邯鄲の枕なるかや。これは身を知る門出の。世の試みに夢の告。天の與ふる事なるべし

シテ上歌『一村雨の雨宿り

きましたので、私の一生將來の事をも尋ねたいと思つて、旅を思ひ立つたのです」

宿主「それならば幸ひ、私の家には仙人から戴いた邯鄲の枕といふのがございます。これを枕にしてお寢みになれば、夢で、過去の事も未來の事も分りますから、この枕をして御覽なさいませ」

盧生「その枕はどこにあるのです」

宿主「あの大床にございます」

盧生「では、その枕をして、一ねむり致しませう」

といつて枕を眺め、

盧生「さてはこれが噂に聞いてゐた邯鄲の枕であるか。今度の旅は自分の一生を知りたいと思つて出掛けたのだが、その始めに、夢の告で人生を知ることが出來るとは、全く天の與へといふものだ。——

○中宿―旅の途中の旅宿。

【三】

○そなはる―即く。

○是非をばいかで―その理由は私達に推測が出來ない

○御身代を持ち給ふべき―あなたが天子となつて天下を治めらるべき。

○瑞相―めでたい人相。

地「一村雨の雨宿り、日はまだ殘る中宿に、假寢
の夢を見るやと邯鄲の枕に臥しにけり邯鄲の
枕に臥しにけり

【三】

「假寢の夢を」と仰向になり閉扇を額に當て枕をして寢る。
地謠の未だ終らざる間に、既にシテ夢を見る心にて、ワキ勅使、着附段厚板・側次・白大口・腰帶・扇の裝束にて、續いてワキヅレ輿舁二人、着附厚板・白大口・腰帶・扇の裝束にて輿を持ちて出で、地謠の終る頃、ワキはシテの枕元へ行き、扇にて臺を二つ叩き、少し退き辭儀して、

ワキ「いかに盧生に申すべき事の候

シテ起き直りて、

シテ「そも如何なる者ぞ

ワキ「楚國の帝の御位を。盧生に讓り申さんとの
勅使これまで參りたり

シテ「思ひよらずや王位には。そも何故にそなは
るべき

ワキ「是非をばいかではかるべき（と面を上げ）。御身
代を持ち給ふべき。その瑞相こそましますらめ

まだ日も高いのに、こゝに泊まる心にな
つたのも、やはり前世の宿縁であらう」
といつて、邯鄲の枕をして寢た。

【三】

盧生が假寢してゐると、その夢中に現れた態で、ワキ勅使、ワキヅレ輿舁を隨へて登場。盧生の前へ出て、

勅使「盧生、そなたに御用です」

盧生「そなたは何者だ」

勅使「楚國の王位を盧生にお讓りになる勅使として、こゝまで參つたのです」

盧生「これは意外な話だ。一體どういふ譯で王位に即くのであらう」

勅使「その理由は私には分りませんが、とにかく、あなたが王位にお即きになるべき、めでたい人相をお持ちのことと存じ

○夕露の—いふを夕にいひかけ、露より玉を呼び起した。
○乘りも習はぬ—玉の輿などに乘り馴れない意と、佛法を解し得ない意とを兼ねていふ。卽ち王侯となるのは夢の榮華で、誠の道ではないといふ事に氣づかないでといふ意。
○かかるべきとは—かゝるは露の緣語。
○天にもあがる—意想外な喜びの形容。
○榮華の花も—一時の—佛道を解しないから、浮世の榮華は一時のもので、やがて必滅するといふ事を知らないで。
○白雲の—夢とは知らずを白にいひかけ、雲と續けた。雲の上人は宮廷の人。

【三】

はやはや輿に召さるべし（と辭儀す）
シテ「こはそも何と夕露の光かかやく玉の輿（と輿に目をつけ）。乘りも習はぬ身の行方（ワキへ向き）
ワキ『かかるべきとは思はずして
シテ『天にもあがる（と臺より下り）
ワキ『心地して（と輿舁を見やりて立ち）
地上歌『玉の御輿に法の道。玉の御輿に法の道。榮華の花も一時の。夢とは白雲の上人となるぞ不思議なる

地上歌にシテ舞臺の眞中に出で正面に向くと、ワキヅレ輿をさしかけ、ワキはその後に立つ。宮殿に行く心。「榮華の花も」と一同二三足前へ出で「上人となるぞ不思議なる」とシテ下に居る。宮殿に着きたる心にて、ワキ・ワキヅレは切戸より入る。

【三】

來序の囃子にて、子方舞人、風折烏帽子・襟赤・着附摺箔・長絹・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ大臣二人、洞烏帽子・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて舞臺に入り、脇正面に居並ぶ。この間にシテは宮殿の心にて臺に上り、安坐す。

地『ありがたの氣色やな。ありがたの氣色やな。

ます。どうぞ早く御輿にお召し下さいませ。

盧生　これは一體どうした事であらう—といひながら、これまで乘つたこともない立派な輿に乘つて行かうとは、全く無我夢中で、天にでも昇るやうな喜びで、玉の輿に乘つた。

佛の道を知らない者の悲しさは、この榮華が一時の短いものであらうとは夢にも知らず、宮廷の人となつたのは不思議なことである。

既に宮殿に着いた心で、勅使は退場す。

【三】

盧生は夢の中で宮殿の樣を見てゐる心で、

盧生「實に立派な樣だ。宮城は『雲の上』と

○雲龍閣―典據が見當らない。但し〔天鼓〕にも阿房殿と並稱してゐる。
○阿房殿―秦始皇が渭南上林苑に建てた宮殿の名。
○寂光の都―常寂光土即ち諸佛の居給ふ所。
○喜見城―須彌山頂の宮殿忉利天主帝釋の居城。
○千顆萬顆の御寶―顆は玉石の箇數に添へる語。かずかずの寶。
○千戸萬戸の旗のあし―千戸は千戸を領する大名。萬戸は萬戸を領する大名。これらの諸侯が旗を靡かして來朝する意。〔西王母〕に「百官卿相雲客や、千戸萬戸の旗を靡かし鉾を横へ、四方の門邊に群りて市をなし」とある。
○禮の聲―諸侯の朝貢して拜禮をする聲。古謠本には「雷の聲」と書き、拾葉抄評釋には「籟の聲」としてゐるが、刊行會本に「禮の聲」としてゐるが正しい。
○東に三十餘丈に―この一節、平家物語卷五「咸陽宮の事」の條に「長生殿あり、不老門あり、黄金を以て日を造り、銀を以て月を造れり。眞珠のいさご、瑠璃の砂を敷きみてり。四方には鐵の築地を高さ四十丈につ

もとより高き雲の上。月も光は明らけき。雲龍閣や阿房殿。光も滿ち滿ちてげにも妙なる有樣の。庭には金銀の砂を敷き。四方の門邊の玉の戸を。出で入る人までも。光を飾る粧ひは。まことや名に聞きし寂光の都喜見城の。樂しみもかくやと思ふばかりの氣色かな（下歌）千顆萬顆の御寶の數を連ねて捧げ物。千戸萬戸の旗のあし。天に色めき地に響く禮の聲も、夥し禮の聲も夥し

シテ『東に三十餘丈に（と角を見）

地『銀の山を築かせては。黄金の日輪を出だされたり

シテ『西に三十餘丈に（と幕の方を見）

地『黄金の山を築かせては。銀の月輪を出だされたり。たとへばこれは（と正面に直し）。長生殿の内に

いはれてゐる位だから、もとより月の光は明かに輝き、宮殿の雲龍閣や阿房殿には光が滿ち〳〵て、何ともいへない結構な有樣で、庭には金銀の砂を敷き、四方の門には玉の戸をたてゝゐて、この門を出入する人まで、光り輝く姿をしてゐる樣は、噂に聞いてゐた極樂の都、須彌山頂の宮殿喜見城の樂しみもこのやうなものであらうかと思はれる程の有樣だ。その上、幾千幾萬の寶物を獻上して來る大小諸侯の旗は、天を彩るばかりであり、諸侯の朝貢禮拜する聲は地に響くばかり夥しいことだ。——

なほ又、宮城の東には三十餘丈の銀の築山を築いて、金の日輪を出し、西には三十餘丈の金の山を築いて、銀の月輪が出してある。これは、——

『長生殿のうちは春秋富めり、不老門の前には日月遲し』
（宮殿の内には榮華が限りなく續いていつまで經つても月日が外へ移らない）
といふ意味を象つたものだ——

は春秋をとどめたり不老門の前には、日月遲し
といふ心をまなばれたり

【四】　ワキヅレ立ち、シテの前に出で辭儀して、

ワキヅレ「いかに奏聞申すべき事の候。御位に卽き給ひてははや五十年なり。然らばこの仙藥を聞しめさば。御年一千歲まで保ち給ふべし。さる程に天の濃漿や沆瀣の盃。これまで持ちて參りたり

シテ「そも天の濃漿とは

ワキヅレ「これ仙家の酒の名なり

シテ『沆瀣の盃と申すことは

ワキヅレ「同じく仙家の盃なり

シテ『壽命は千代ぞと菊の酒

ワキヅレ『榮華の春も萬年

シテ『君も豐かに

盧生はかういふ境涯にあつて、年月を暮らしてゐる心。

【四】　そこへ、ワキヅレの大臣が出て、

大臣「奏上致します。御位に御卽き遊ばされてから、はや五十年になりました。しかしこの仙人の藥をお飲みになりますれば、一千年の御壽命がございます。それで、天の濃漿と沆瀣の盃をこゝへ持つて參りましてございます」

盧生「一體天の濃漿とは何物ぢや」

大臣「これは仙人の酒の名でございます」

盧生「沆瀣の盃といふのは何ぢや」

大臣「これも仙人の盃でございます」

盧生「これが一千年の壽命を保つといふ酒か」

大臣「御榮華が一萬年も續きませう」

盧生「君も豐かになり……」

きあげて、殿の上にも同じく鐵の網をぞ張つたりける」とあるのを修飾したのであらう。

〇長生殿の内には　和漢朗詠集保胤の詩句「長生殿裏春秋富、不老門前日月遲」を引いたのである。長生殿及び不老門は、唐代帝居の殿門の名。このめでたい帝居は、永い年月變りなく榮え、日月の過ぎるのも遲くて、衰へる時が來ないとの意。上懸では富を「留める」に改めてゐるが、下懸は「富めり」としてゐる。

【四】

〇天の濃漿―こんづは「こみづ」の音便。天の濃漿はめでたい酒。評釋に「こんづは麴の事にや」とあるのは考へ誤りであらう。

〇沆瀣の盃―沆瀣は韻會に「海氣也、一曰沆瀣北方露氣也」とある。仙人の飲物である露を盛つた盃。

〇菊の酒―千代ぞと聞くといひかけた。九月九日重陽の節句に、菊花の酒を飲めば長壽を保つといふ。

○まさり草―菊の異名。喜びは増るといひかけた。

【五】

○菊水―壽命長久のめでたい水。慈童といふ仙人が經文を書いた菊の葉の雫をすすつて七百歳の長壽を保つたといふ故事から出た語。「菊慈童」「枕慈童」參照。

○流にひかれて―和漢朗詠集菅原雅規の詩句「礙レ石遲來心竊待、牽レ流遄過手先遮」を引いた。三月三日曲水宴の詩で、曲水宴は川邊に出て、盃を水に浮べ、盃の川上から流れて自分の前に來る時、これを受けて飲み詩を吟じ、又川下に盃を流し送る遊びで、この詩はこの時詩作が出來ても盃の來ない時には靜かに待つて居り、盃が早く流れて來て、詩の未だ出來ない時は、まづ盃を留めて詩を作り、然る後に川下に送るとの意。こゝでは衣の序に用ゐた。

○菊衣―表白裏蘇芳或は裏青の襲の色目をいふのであるが、こゝでは花の袂を呼び起す序に用ゐたのである。

○さすも引くも―舞の手の名。光と盃とに兼ねていふ。

○盃の影―盃を月に見立てて、月影の意に轉じて「めぐる」とつゞけた。

ワキヅレ『民榮え

地上歌『國土安全長久の。國土安全長久の。榮華もいやましに猶喜びはまさり草の。菊の盃とりどりにいざや飲まうよ

地上歌にワキヅレ扇を開き一子方に酌をし、もとの座に着く。子方酌を受けてそのまゝ立ち、シテの前に行き酌をす。シテこれを受けて、

【五】

シテ『廻れや盃の

子方扇を閉ぢて囃子座前へ行き、次の謡に合せて「夢の舞」を舞ふ。

地『廻れや盃の。流れは菊水の流にひかれてとく過ぐれば。手まづ遮る菊衣の。花の袂を飜してさすも引くも光なれや。盃の影の。めぐる空ぞ久しき

子方『わが宿の

地『わが宿の。菊の白露今日毎に。幾代積りて淵となるらん。よも盡きじよも盡きじ藥の水も泉

大臣「民も榮えます」

廬生「國土が安全で、榮華が愈々増すといふめでたい酒ならば、さあ飲まう」

といつて盃をうける。

【五】

廬生「さあ皆の者も盃を受けたがよからう」

といつて、侍臣も次から次へと盃を廻し、花の袂を飜して、さす手ひく手の舞を舞ふと、そのめでたい酒宴に、月日の光もさし添ふのである。

中にも小さな侍臣の子方が立つて、

侍臣―――「わが宿の菊の白露今日毎に、幾代積りて淵となるらん」

（一年に一度、九月九日毎に、菊の白露をとつて溜めて置く事が淵となるには、それはどえらい年月を要することであらう。しかし君の御榮えはなほそれよりも永く、いつまでも盡きることがないであらう）

と謡ひ舞ふ。

この歌の言葉通りに、仙人の酒も泉で

○めぐる空—盃のめぐると月のめぐると。
○わが宿の菊の白露今日毎に幾代積りて淵となるらん—拾遺集淸原元輔の歌。その詞書に「三條の后の宮の裳着侍りける屏風に九月九日の所」とある。
○藥の水—前に出てゐる菊水のこと。
○甘露—天酒ともいひ、諸神の飮料。
○有明の—有明の月は空にあるまゝ夜が明けるものであるから、これを夜晝の序とした。
○いつまでぞ榮華の春も常磐にて猶幾久し有明の月—この歌の出所未詳。
○常磐にて—常に變りがなくて。
○月人男—月の擬人。萬葉集に「夕づくの通ふ天路をいつまでか仰ぎて待たん月人男」こゝでは廬生を天上の仙人に見立てていつたのである。

なれば。汲めども汲めどもいやましに出づる菊水を。飮めば甘露もかくやらんと。心も晴れやかに。飛び立つばかり有明の夜晝となき樂しみの。榮華にも榮耀にもげにこの上や、あるべき

子方舞ひ納めてもとの座に着く。シテ興に乘じたる心にて、法被の右肩を脫ぎ、

〔樂〕

シテ引續き次の謠に合せて舞ふ。

シテ『いつまでぞ。榮華の春も。常磐にて

地『猶幾久し有明の月

シテ『月人男の舞なれば。雲の羽袖を。重ねつつ。喜びの歌を。謠ふ夜もすがら

地『謠ふ夜もすがら日は又出でて。あきらけくなりて。夜かと思へば

シテ『晝になり

地『晝かと思へば

あるから、いつまでも盡きることはたく、汲んでも〳〵愈〻湧き出てきて、これを飮めば、甘露の味ひもこのやうであらうかと思はれる旨さで、心も晴れやかになり、飛び立つやうな氣持になる。しかもこの樂しみが夜晝となく續くのであるから、世の中の榮耀榮華は、この上もないのである。

廬生は喜びのあまり、

〔樂〕

を舞ふ。

廬生「——『いつまでぞ榮華の春も常磐にて、なほ幾久し有明の月』

（榮華の樂しみはいつまでも變りなく續いて、この後なほ幾久しく變らない）

と謠ひ舞ひ、

廬生「このやうに仙人の心持になつて、輕い袖を飜して喜びの歌を謠ひ舞を舞ふと、夜であるのに日が出て明くなる。かうして、夜かと思つてゐると晝になり、晝かと思つてゐると月が明らかに出てゐる。——

○さやけし―明かに輝いてゐる。

○ありつる―以前にあつたまゝの。

【六】

○おひるなれ―お起きなさい。

シテ『月またさやけし

地『春の花咲けば

シテ『紅葉も色濃く

地『夏かと思へば

シテ『雪も降りて

地『四季折々は目の前にて。春夏秋冬萬木千草も。一日に花咲けり。面白や。不思議やな

シテ舞ひ上げて臺に腰かけ、景色を眺め入る心。

地上歌『かくて時過ぎ頃去れば。かくて時過ぎ頃去れば。五十年の榮華も盡きて。眞は夢のうちなれば。皆消え消えと失せ果てて。ありつる邯鄲の枕の上に。眠りの夢は。さめにけり

「眞は夢のうちに、」子方・ワキヅレは立ちて切戸より入る。「邯鄲の枕の上に」と、シテ前の如くに寢る。謠終ると、狂言臺の側に行き、扇にて二つ叩きて、

【六】

狂言「いかに御旅人。粟の御飯の出來て候。とうとうおひるなれや

又春の花が咲いてゐる一方、秋の紅葉が色濃く染まつて居り、夏景色かと思つてゐると、冬のやうに雪が降るといふ有様で、四季の景色が目前に現れ、春夏秋冬萬木千草、あらゆる花が一時に咲いてゐる。實に不思議な面白い景色だ」

かうして時が過ぎて行くと、今見てゐた五十年の榮華は、實は夢なのであるから、皆消えてしまつて、盧生は以前の通り邯鄲の枕に眠つてゐたのであつて、その夢が今さめたのである。

【六】

盧生が夢を見てゐたのは、實は粟飯を炊いてゐる間であつて、やがて宿主が食事の出來たことを知らせる。

○女御更衣―後宮の女官の官名。女御は中宮の次、更衣は女御の次。

とシテを呼び起して引く。シテ静かに起き上りて、

シテ「盧生は夢さめて

地「盧生は夢さめて。五十年の春秋の。榮華も忽ちに唯茫然と。起き上りて

シテ「さばかり多かりし

地「女御更衣の聲と聞きしは

シテ「松風の音となり（と橋懸の松を見）

地「宮殿樓閣は

シテ「ただ邯鄲の假の宿（と屋臺の柱を見上げ）

地「榮華の程は

シテ「五十年

地「さて夢の間は粟飯の

シテ「一炊の間なり

地「不思議なりや計り難しや

シテ「つらつら人間の。有樣を。案ずるに

盧生はこゝに夢がさめて、五十年の榮華が忽ちに消え失せたので、たゞぼんやりと起き上つて、あたりを見て、

盧生「おゝ今まで女御・更衣の美しい聲と聞いてゐたのは松風の音となり、立派な宮殿樓閣と見てゐたのも、今はたゞ邯鄲の假の宿で、五十年の榮華を盡したと思つたのは、その夢は粟飯を炊く間に過ぎなかつたのだ。——

あゝ不思議な事だ、想像もつかない事だ。しかし、よく人間の有樣を考へて見ると、

地『百年の歡樂も。命終れば夢ぞかし。五十年の榮華こそ。身の爲にはこれまでなり。榮華の望みも齡の長さも。五十年の。歡樂も。王位になれば。これまでなりげに。何事も一炊の夢

シテ『南無三寶南無三寶（と團扇にて膝を打ち）

地『よくよく思へば出離を求むる。知識はこの枕なり。げにありがたや。邯鄲のげにありがたや邯鄲の。夢の世ぞと悟り得て。望みかなへて歸りけり

地謡に臺を下り「げにありがたや」と兩手にて枕を戴き、下に置きて立ち、仕手柱際にて留拍子を踏む。

百年の歡樂も死んでしまへば夢に過ぎない。今見た五十年の榮華は、自分にとつてこの上もないものであつた。榮華になりたい、長命したいといふ望みも、今五十年の歡樂を盡し、王位にまで即いたのだから、もうこの上の望みはないのだ。そしてすべてが一場の夢なのだ。

さうだ、〳〵。よく〳〵考へれば、人間の煩惱を解脫させてくれる高僧は、この枕であつた。ありがたい〳〵。この邯鄲の枕のお蔭で、人生は夢だといふことを悟り得た」

と、わが旅行の目的を達して、國へ歸つた。

○これまでなり―これ以上のものはない。

○王位になれば―王位に登つたのであるから。

○一炊の夢―一炊に一睡の意を兼ねた。

○南無三寶―佛法僧の三寶に歸依することから轉じて深く感じた時に發する感動詞。

○出離―出離生死の略で、生死輪廻の苦を解脫して佛道に悟入すること。

○邯鄲の夢の世―邯鄲の夢の世と續けたのである。

〔考異〕

諸流（五流）

【五】地上歌「かくて時過ぎ……眞は夢の中なれば（下懸女御更衣。百官卿相千戸萬戸。從類眷屬宮殿樓閣ノ皆消え消えと……

古謠本（光悅本）

【一】シテサシ「これは……盧生といへる（光申す）者なり……ワキ「急ぎ候程に……旅宿せうずるにて候（光ナシ）と ワキ「いかに案内申し候……一睡見らずるにて候（光ナシ）。シテ「さては……聞き及びに（光ナシ）し邯鄲の枕なるかや（光へし）……

【四】ワキツレ「いかに……然らバ（光

いれ)ばこの仙薬を……

咸陽宮（かんやうきう）　觀（寶剛喜）

解　説

【能柄】四・五番目　一段劇能

【人物】狂言　秦の官人、**シテ**　秦始皇帝、**ツレ**　花陽夫人、**ツレ**　侍女（二人又は五人）、**ワキツレ**　大臣（三人）、**ワキ**　荊軻、**ワキツレ**　秦舞陽

【所】秦の皇居　咸陽宮

【時】秦始皇の時（十月）

【作者】能本作者註文に作者不明として擧げてゐる外、古記錄に見當らない。

【梗概】燕の人荊軻・秦舞陽の二人は、秦の高札を希貨として、燕の指圖及び樊於期の首を携へて始皇に謁し、左右からその袖を捉へて將に刺さうとした。その時、始皇は今生の名殘として寵姫花陽夫人の琴を聞きたいと望み、暫くの暇を得て、花陽夫人が祕曲を盡して琴を彈くと、荊軻等はその妙音に魅せられて恍惚としてゐた。始皇はその隙に乘じて、遂に二人を討ち取つた。

【出典】　この事は史記に見えてゐるが、夫人彈琴の事は見えない。燕丹子には彈琴の事を記してゐるが、それにはたゞ姫人とあるだけで、名を記してゐない。この說話は、平家物語諸本に採られてゐるが、これにも、長門本には夫人の名がなく、盛衰記には楊に后としてゐる。謠曲に最も近いのは流布本卷五の「咸陽宮の事」で、詞章も隨所に流布本の文を採つてゐる。この文は語釋に掲げることとする。

【概評】　本曲は平家物語の文を殆どそのまゝ一篇の謠曲に纏めたものであるが、劇としての要素は甚だ少いものである。しかし、語り物の劇的演出としてこれを見れば、亦別な興味を覺えないでもない。殊に第五節はこの意味に於て感興が深いやうに思はれる。

【序】　後見、一疊臺を大小前に出す。

狂言官人、官人頭巾・着附厚板・側次・括袴・腰帶・扇の裝束にて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。秦の始皇帝に仕へ申す官人にて候。この君賢王にてましますにより。吹く風枝を鳴らさず民戸ざしをせず。誠にめでたき御代にて候。然るにこの國を隣國より覦ひ申す間。燕の國の指圖の箱幷に樊於期が首を持ちて來るならば。何事にても望みを御叶へあるべきとの御事なり。皆々その分心得候へ〳〵

といひて引く。

【一】　眞來序の囃子にて、シテ秦始皇、唐冠・赤地金緞飾卷・襟白・着附厚板唐織・袷狩衣・半切・腰帶・唐團扇・劍の裝束、ツレ花陽夫人、面連面・鬘・鬘帶・天冠・襟赤・着附摺箔・唐織壺折・緋大口・腰帶・扇の裝束、ツレ侍女二人（又は五人）、面連面・鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・唐織壺折・緋大口。腰帶・扇の裝束、ワキヅレ大臣三人、洞烏帽子・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて出で、シテは一疊臺に上り床几にかゝり、ツレは脇座に、ワキヅレは脇正面に向合ひて下に居る。

シテ「抑もこの咸陽宮と申すは。都のまはり一萬

【序】

【一】　○咸陽宮—秦始皇の都。今の陝西省西安府。史記秦紀に「孝公十二年作ニ爲咸陽一、築ニ冀闕一、秦徙ニ都レ之」

○都のまはり—平家物語卷五咸陽宮の事に「咸陽宮は都の廻り一萬八千三百八十里につもれり。内裏をば地より三里高く築上げて、その上にぞ建てられたる」

【一】　舞臺は秦の王宮咸陽宮で、シテ秦始皇帝、ツレ花陽夫人及びその侍女、ワキヅレ大臣等登場。

この咸陽宮といふのは、都の周圍が一

八千三百餘里
地『内裏は地より三里高く。雲を凌ぎて築きあげて。鐵の築地方四十里
シテ『又は高さも百餘丈。雲路を渡る雁がねも。雁門なくては過ぎがたし
地『内に三十六宮あり。眞珠の砂瑠璃の砂。黄金の砂を地には敷き
シテ『長生不老の日月まで。甍を竝べて彩し
地『帝の御殿は阿房宮。銅の柱三十六丈
シテ『東西九町
地『南北五町
シテ『五丈の旗矛
地『龍車の雲居
シテ『さながら天に
地『飄り

萬八千三百餘里あり、その中の宮城は普通の地面よりは三里も高く、雲を凌ぐばかりに築き上げたもので、その四方にはまた四十里の鐵塀を設け、この塀の高さがまた百餘丈もあるので、空高く飛んで行く雁も、雁の爲に設けられた特別の門がなければ、通ることも出來ない有樣である。

この宮城の中には、三十六の宮殿があり、地面には眞珠の砂や瑠璃の砂や黄金の砂などが敷きつめてあり、金銀を以て日月を造つてある長生殿から不老門まで、屋根が竝んでゐて、實に大したものである。

天子の御殿は阿房殿で、その銅の柱の高さは三十六丈、東西の廣さが九町、南北が五町。五丈の旗矛を立て竝べて、その風に飄る樣は、宛も龍車が雲を走るがやうである。

○鐵の築地—鐵の塀。平家物語には「四方には鐵の築地を高さ四十丈に築上げて」
○雁門—雁の通る爲の門。平家物語に「秋は田面の雁、春は越路へ歸るにも、飛行自由の障りありとて、築地には雁門と名づけて、鐵の門をあけてぞ通されける」
○眞珠の砂—同書に「眞珠の砂瑠璃の砂を敷きみてり」
○長生不老の日月まで—同書に「長生殿あり、不老門あり、黄金を以て日を造り、銀を以て月を造れり」〔邯鄲〕參照。
○甍—瓦葺の屋根。
○阿房宮—秦始皇の建てた宮殿。平家物語に「その中に阿房殿とて、始皇の常に行幸なりて、政道行はせ給ふ殿あり。東西へ九町、南北へ五町、高さは三十六丈なり。上をば瑠璃の瓦を以て葺き、下には金銀を磨けり、大床の下には五丈の旗矛を立てたれども、猶及はぬほどなり」
○銅の柱三十六丈—平家流布本には柱の高さを記してゐない。城方本には「口六尺の銅の柱を高さ三十六丈に立てさせ」とある。

地上歌「登れば玉の階の。登れば玉の階の金銀を磨きて輝けり。唯日月の影を踏み蒼天を渡る心地して。各肝を、消すとかや各肝を消すとかや

【三】

一聲の囃子にて、ワキ荊軻、着附厚板・側次・白大口・腰帯・小刀・劒の装束、ワキヅレ秦舞陽、ワキと同様の装束にて、橋懸にて向合ひ、

ワキ舞陽 一聲「思ひ立つ。朝の雲の旅衣。落葉重なる。嵐かな

二人正面の方に向き、

ワキ「山遠うしては雲行客の跡を埋み

舞陽「松高うしては風旅人の夢を破る

ワキ「たとひ轅門は高くとも

舞陽「思ひの末は

ワキ「石に立つ

二人向合ひ、

ワキ舞陽 上歌「やたけの心あらはれて。やたけの心あらはれて。遠山の雲に日を重ね。やうやう行けば名

○旗矛―旗をつけた鉾。
○龍車の雲居―龍車の行き通ふ雲居の意で、空中に高く架けた長橋を指したのであらう。平家物語には見えない。阿房宮賦に「長橋臥レ波、未レ雲何龍」
○さながら天に飄り―旗矛が空高く飜り。
【三】
○思ひ立つ―立つは「裁つ」と同音で衣の縁語。
○朝の雲の旅衣―思ひ立つ朝、朝の雲、雲の旅といひ續けた。雲の旅は遠い旅路。
○落葉重なる―旅衣に落葉の重なり落つ。
○山遠うしては―和漢朗詠集紀齊名の句「山遠雲埋二行客跡一、松高風破二旅人夢一」を引いた。
○轅門―軍陣で、車の轅と轅を向合せて門とすることゝでは宮城の警備がいかに厳しくてもといふ意。
○思ひの末は石に立つ―志が強ければ必ず成功する意史記李廣傳の「李廣爲二北平太守一、嘗出獵、見二草中石一以爲レ虎、而射レ之、中レ石沒レ鏃、視レ之石也、因復更射レ之、終不レ能二復入一レ石矣」の故事から出た語。
○やたけの心―愈、勇む心。前の故事により、矢を「や

階段を昇ると、これはまた金銀で磨きたてたもので、この御殿に昇るものは、日や月の影を踏み、天を歩いてゐるやうな感じがして、誰も驚いてしまふといふことである。

【三】

橋懸は咸陽宮から離れた所で、ワキ荊軻、ワキヅレ秦舞陽、この橋懸へ出で、

荊軻舞陽「事を企てゝ遠い旅に出ると、吹き来る嵐に木の葉が散つて、この衣に重なり落ちることだ」

同「古人が、『旅人は山の方へ遠く行つて、雲に隠れてしまつた。あの旅人に寒い松風に夜の夢を破られることだらう』と詠んでゐるが、自分達の今の境遇は、全くその通りだ。しかし、あの宮城の警備が如何に厳重であらうとも、自分の志さへ強ければ必ず成就するに違ひない」

同「このやうな勇ましい心を以て、遠い旅に日を重ねて行くうちに、漸く名高い咸陽宮に着いた」

も高き。咸陽宮に着きにけり咸陽宮に着きにけ
り

ワキ「やうやう行けば」と正面の方に向き二三足出で、また
もとに歸りて咸陽宮に着きたる心。上歌終りて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。咸陽宮に着きて候。(舞陽に向ひ)まづ奏聞申さうずるにて候

舞陽「然るべう候

ワキ舞臺際に進み、

【三】

ワキ「いかに奏聞申し候

狂言仕手柱際へ出で、

狂言「奏聞とは如何なる者ぞ

ワキ「燕の國の傍に。荊軻秦舞陽と申す兩人の者、高札の表に任せ。燕の指圖の箱。並に樊於期が首を持ちてこれまで參内申して候

狂言「暫くそれに御待ち候へ。その由奏聞申し候べし

といひて、大臣の前へ出で、

狂言「いかに奏聞申すべき事の候。燕の國の傍に。荊軻秦舞陽

といつてゐるうちに、咸陽宮の門前に着いた態で
荊軻は秦舞陽に向き、

荊軻「旅を急いだので、存外早く咸陽宮に着いた。まづ王城へ案内を頼まうではないか」

舞陽「それがよろしからう」

【三】

荊軻、警備の官人に向ひ、

荊軻「天子に奏上したい儀がございます」

官人「奏上したいとは、何者ぢや」

荊軻「燕の國の片田舍の住人、荊軻と秦舞陽と申す二人の者が、高札に揭げられた仰せに從ひ、燕の國の地圖の入つた箱と樊於期の首とを持つて參内したのでございます」

狂言の官人が奥に入つて、ワキツレの大臣にこれを取次ぐ。

たけ」にいひかけた。

○遠山の雲に―志の通るといふ意にかけて「とほやま」と謠つたのを、後世「ゑんざん」と音讀したのであらう。

【三】

○燕の國―周の侯、召公奭の封地。召公奭より三十六代喜の太子丹の時に亡んだ。

○荊軻―燕の太子丹の客となり、丹の爲に秦始皇を刺さうとした人。

○秦舞陽―燕の勇士。

○高札―多くの人に知らせる爲に高く揭げた立て札。平家物語に「始皇四海に宣旨をなし下し、燕の指圖並に樊於期が首を以て參りた

らんずる者には、五百斤の金を與へんと披露せらる」
○指圖―地圖。文面だけでは解し難い所を圖で指し示す意から出た語。
○樊於期―もと秦の將軍であつたが、罪を得て、燕に遁がれた人。平家物語に「荊軻、樊於期がもとに行きて……汝が首われに借せ、取つて始皇帝に奉らん、喜びて叡覽を歷られん時、劍を拔いて胸を刺さんは易かりなんといひければ、樊於期踊り上り〳〵、大息ついて申しけるは、われ親叔父兄弟を始皇帝に亡されて、夜晝これを思ふに、骨髓に徹つて忍び難し。誠に始皇帝討つべからんに於ては、わが首を與へんこと塵芥よりも易しとて、自ら首を切つてぞ死ににける」

と申す兩人の者。高札の表に任せ。燕の國の指圖の箱竝に樊於期が首を持ちて。參内申したる由申し候

大臣「何と申すぞ。燕の國の民に。荊軻秦舞陽と申す兩人の者。燕の指圖の箱。竝に樊於期が首を持ちて參内したると申すか。かかるめでたき事こそなけれ。やがて奏聞申し候べし

シテの前に出で辭儀して、

大臣「いかに奏聞申し候。燕の國の民に。荊軻秦舞陽と申す兩人の者。燕の指圖の箱。竝に樊於期が首を持ちて唯今參内申して候

シテ「何と燕の國の傍に。荊軻秦舞陽と申す兩人の者。指圖の箱。竝に樊於期が首を持ちて參内したると申すか

大臣「さん候

シテ「急いで參内させ候へ

大臣「畏つて候

大臣「何と申す、燕の國の民で、荊軻と秦舞陽といふ二人の者が、燕の地圖の入つた箱と樊於期の首を持つて參内したといふのか。このやうなめでたいことはない。早速奏上しよう」

始皇帝の前へ出て、

大臣「奏上致します。燕の國の民で、荊軻と秦舞陽と申す二人の者が、燕の地圖の入つた箱と樊於期の首を持つて、唯今參内致しましてございます」

始皇「何と申す、燕の國の片田舍の荊軻と秦舞陽と申す二人の者が、地圖の箱と樊於期の首とを持つて參内したといふのか」

大臣「さやうでございます」

始皇「急いで參内致させ」

大臣「畏つてございます」

○御大法—厳しい規則。

◎畏つて候—以下狂言詞、謠本に「畏つて候。いかに方々へ申し候。急いで御參內あれとの御事にて候さりながら。御大法の事にて候間、面々の太刀刀を預り申して參內させ申せとの御事にて候ぞ。太刀刀をたまはり候へ」とある。

もとの座に歸りて狂言に向ひ、

大臣「唯今の由を奏聞申してあれば。急いで參內させよとの宣旨にてあるぞ。さりながら御大法の如く。太刀刀を汝預かり候へ

狂言「畏つて候

仕手柱際へ出で、

狂言「最前の人の渡り候か

ワキ「是に候

狂言「その由奏聞申して候へば。急ぎ參內あれとの御事にて候。又大法の事にて候間。帶劍は某に御預け候へ

ワキ秦舞陽に向ひ、

ワキ「いかに秦舞陽。太刀刀を參らせよと承り候が。何と仕り候べき

舞陽「御大法にて候はば唯參らせられ候へ

ワキ「さらば參らせうずるにて候

二人劍を解いて狂言に渡す。

狂言「さらばかう〱御通り候へ

ワキ「さて是よりいづ方へ參り候べき

官人の方へ來て、

大臣「唯今の趣を奏上致したところ、急いで參內致させよとの仰せだ。しかし御規則の通り、太刀・刀は汝が預かれ」

官人は荊軻に大臣の詞を傳へる。荊軻、秦舞陽に向ひ、

荊軻「秦舞陽、太刀・刀を差出せといはれたが、いかゞ致さう」

舞陽「御規則ならば、たゞ差上げたがよからう」

二人は官人に刀を渡し、咸陽宮への道筋を尋ねる。

狂言「さん候是より三里登つて又下り。十八町登れば御殿の候に君の御入り候。急ぎ御參り候へ

といひて、狂言は劍を持ちて切戸より入る。二人正面に向き、

ワキ「荊軻は佩劍を解いて威儀をなし。節會の儀式に從ひて。雲上遙かに見渡せば（と舞臺を見）

舞陽「金銀珠玉の御階を踏み。三里が間を登り行けば

ワキ「薄氷を踏む心地して（下を見）。荊軻は既に登れども（と舞臺に入りかゝる）

舞陽「後に立ちたる秦舞陽。身體わななき手をおして。登りかねてぞ休らひける

ワキ振返りて秦舞陽に向ひ、

ワキ「ああ不覺なりとよ秦舞陽。燕の賤しき住居にならつて。玉殿を踏む恐ろしさに。『臆して上りかねけるか

舞陽「それをなさのみ諫め給ひそ。その磧礫に習

かうして、荊軻は帶劍を解いて官人に渡し容儀を整へ、節會の儀式通りの作法に從つて出立ち、遙かに雲の上に高く聳える宮殿を見渡して、金銀珠玉で造られた階段を踏み、秦舞陽と共に三里ばかり登つて行くと、流石に薄氷を踏むやうな危險な恐ろしい心地がするが、それでも荊軻は遂に登つたが、後に立つた秦舞陽は、身體が震へ氣後れがして、登りかねて立留まつてゐた。

荊軻「秦舞陽、あまり卑怯未練だぞ。これまで燕の賤しい住居に慣れてゐるので、立派な御殿を見て、恐ろしくて氣後れがして、それで登れないのか」

舞陽「さうお叱りなさるな、昔の言葉にも

○節會の儀式―節會は朝廷に於て定時に行はせられる儀式。その儀式通りの作法によつてといふ意。

○薄氷を踏む心地―危險な思ひ。詩經に「戰々兢々、如レ臨二深淵一、如レ履二薄氷一」

○後に立ちたる秦舞陽―平家物語に「荊軻は燕の指圖を持ち、秦舞陽は樊於期が首を持ちて、玉の階半ばかり登り上りけるが、餘りに内裏の夥しきを見て、秦舞陽わなゝき震ひければ、臣下これを怪みて、刑人を君の傍に置かず、君子は刑人に近づかず、近づけば即ち死を輕んずる道なりといへり。荊軻立歸りて、秦舞陽全く謀反の志なし、唯田舍の賤しきのみ習ひて、かゝる皇居に慣れざる故に心迷惑すといひければ、その時臣下皆靜まりぬ」

○手をおして―身體わななきて、をく(臆)して―の句讀を誤つたものか、或は「手をのゝきて」を誤つたものか。

○不覺―不覺悟。卑怯未練。

○その磧礫に習つて―田舍者には宮殿の奧深い樣子が分らないとの喩。和漢朗詠集左太仲の句「翫二其磧礫一不レ窺二玉淵一者、未レ知二驪

龍之所ㇾ蟠」を引いた。平語長門本には、これを荊軻の詞として、「荊軻覺られなんずと驚きて申しけるは、翫ニ其磧礫ニ不ㇾ窺ニ玉淵一者、未ㇾ知ニ驪龍之所ㇾ蟠、習ニ其弊邑ニ不ㇾ覩ニ上邦一者、未ㇾ知ニ英雄之所ㇾ宿と、いひければ、兵ども靜まりにけり」と記してゐる。

○てんごく―未詳。光悦本には典獄の字を充ててゐる

【四】
○臨時の節會を執り行ひ―平家物語に「燕の指圖並に樊於期が首持ちて參りたる由を奏聞す。臣下を以て受取らんとし給へば、全く人傳に參らせじ、直に奉らんと奏する間、さらばとて節會の儀をとゝのへて、燕の使を召されけり」

○大床―廣い板の間。廣廂。

○胡床―折り疊みの出來る床几。

つて。玉淵を窺はざるは。『驪龍の蟠る所を知らず

地『げに理とててんごくは。さしも嚴しき禁中に轅門を解いて、許しけり轅門を解いて許しけり

ワキ秦舞陽の肩に手をかけて、二人舞臺際に進む。

【四】

大臣『帝はこれを聞しめし。臨時の節會を執り行ひ。燕使の參内を待ち給ふ

と謠ひながら地謠座前に行き坐す。

ワキ『舞陽荊軻は大床の。胡床に參着申しけり

と、ワキ秦舞陽の二人、舞臺に入り脇正面に坐し、シテへ向く。

舞陽『まづ秦舞陽進み出でて。樊於期が首を皇帝の。上覽に供へ立ちのけば

と謠ひながら秦舞陽は扇を開きてシテの前へ行き、樊於期の首を上覽に供ふる心にて、扇をシテに見せ、一疊臺の左側に坐す。

大臣『帝は笑める御氣色。御心も解けて見え給ふ

ワキ「その時荊軻進みよつて。燕の指圖の箱の蓋

『淺瀨にばかり慣れてゐて、深い淵を窺はないものは、龍の棲む所が分らない』と申すではないか」

警備の官人どもは、秦舞陽が臆したのも、たゞ田舍者が氣後れしたたけだと思つて、あれほど嚴重な門を通して、宮殿へ入れた。

【四】
大臣「始皇帝は燕の地圖及び樊於期の首を持つて來たといふ事をお聞きになつて、臨時の節會を行ひ、燕使の參内をお待ちになつていらつしやる」

といふところへ、秦舞陽と荊軻は大床の胡床に着いた。

まづ秦舞陽が進み出て、樊於期の首を皇帝の上覽に供へて、後へ引くと、皇帝はにこ／＼した樣子で、御心も晴れやかに見える。

次て、荊軻が進み寄つて、燕の地圖の入つた箱の蓋を開けて、上覽に供へ、

○黄泉の道をも—冥途にての苦しみ。
○手籠め—暴力で取り抑へること。
【五】
○飛ぶ鳥も地に落ち—平家物語に「凡そこの后の琴の音を聞けば、猛き武士の怒れる心をも和らげ、飛ぶ鳥も地に落ち、草木も搖ぐばかりなり。況や今を限りの叡聞に供へんと、泣く〳〵彈き給へば、さこそは面白かりけめ、荊軻首をうなだれ耳をそばだてて、殆ど謀臣の心もたゆみにけり」
○今はの玉の緒琴—今は最後の玉の緒（命）を小琴にいひかけた。
○花の春の琴曲は—以下「琴柱に落つる聲々」まで琴の組歌「菜蕗」の文句にある
○和風樂—舞樂の曲名、和風長壽樂。又春庭樂といふ。
○柳花苑—これも舞樂の曲名。
○同じ曲の囀り—同じく舞樂の「春鶯囀」といふ意。
○秋風—同じく舞樂曲の「秋風樂」といふ意。秋風より雁を出した。
○琴柱に落つる聲—琴柱を雁行に、爪音を雁聲に見立てていふ。

音を聞いて。黄泉の道をも免れうずると思ふは如何に

ワキ「いかに秦舞陽。さて何とあるべきぞ

舞陽「これ程まで手籠め申す上は。片時の御暇ならば参らせられ候へ

ワキ「さらば片時の御暇を参らせうずるにて候

（ワキ劔を下し、秦舞陽と共に腰を落着く。）

【五】

シテ「いかに花陽夫人。急ぎ秘曲を奏し給へ

夫人「さらば秘曲を奏すべし。もとより妙なる琴の音に。飛ぶ鳥も地に落ち武士も。和らぐ程の秘曲なれば。ましてや今はの玉の緒琴。さこそは御手も盡されけめ

地「花の春の琴曲は和風樂に柳花苑柳花苑の鶯は同じ曲の囀り。月の前の調めは夜寒を告ぐる秋風。雲居に渡れる雁がね琴柱に落つる、聲々も

を聞いて、冥途の迷ひを免れたいと思ふのだ。どうだ、許してくれないか」

荊軻「秦舞陽、どうしよう」

舞陽「これ程までに手籠めにしたのだから、心配はない。暫く御暇をあげたがよからう」

荊軻「それでは、暫くお暇をあげよう」

（ト手を緩める。）

【五】

（始皇花陽夫人に向ひ、）

始皇「これ花陽夫人、急いで秘曲を奏してくれ」

夫人「では、秘曲を奏しませう」

もとより琴の名人が、飛ぶ鳥も地に落ち、武士の荒い心も和らぐ程の秘曲を、殊に今は命の最後と思つて彈くのであるから、いかに手を盡されたかゞ推察されるのである。

夫人「——」

地「琴の春の曲には、和風樂に柳花苑、また春鶯囀があり、秋の夜月前に奏する曲には夜寒を告げる秋風樂がある。秋といへば雁の渡る頃で、悲しい琴の音に雁の聲が鳴き添へるのであるが、雁

を開き。「上覽に供へ立ちのけば

と謠ひながら、秦舞陽と同じく扇を燕の指圖の心にてシテに見せ、一疊臺の右側に行き下に居る。

シテ（下を見ながら）「不思議やな箱の底に劍の影。氷の如く見えければ。「既に立ち去り給はんとす

とシテ床几を離れんとす。

地「荊軻は期したる事なれば。御衣の袖にむんずと縋つて。劍を御胸にさしあて奉りけり

この間に、ワキと秦舞陽、左右より臺へ上り、シテの袖を捉へ、二人とも劍を拔き、ワキは劍をシテの胸先に擬す。

夫人「あさましや聖人人に見えずとは。今この時にてありけるぞや。あらあさましの御事やな

シテ「いかに荊軻。秦舞陽も確かに聞け。われ三千人の后を持つ。その中に花陽夫人とて琴の上手あり。されば毎日怠る事なし。然れども今日は汝等が參內により。未だ琴の音を聞かず。殊更今は最期なれば。片時の暇をくれよ。かの琴の

後へ引くと、不思議にも、箱の底に劍の影が氷のやうに光つて見えたので、皇帝は玉座を去らうとせられた。荊軻は勿論豫期してゐた事だから、御衣の袖をむずと捉へ、劍を皇帝の御胸にさし當てた。

花陽夫人はこの様を見て、

夫人「あゝあさましいことだ。『聖人は素性の知れない者に會はない』とは、この事をいつたのであつた。あゝあさましいことだ―

と歎く。始皇荊軻等に向け、

始皇「これ荊軻、秦舞陽もよく聞け。自分には三千人の妃があるが、その中に花陽夫人といつて琴の上手な者がある。それで毎日怠らずその琴を聞いてゐるのだが、今日は汝等が參內したので、まだ琴の音を聞いてゐないのだ。殊に今は命の最後だから、暫く暇をくれ、あの琴の音

○箱の底に劍の影―平家物語に「指圖の入りたる櫃の底に、氷のやうなる劍のありけるを始皇帝御覽じて、やがて逃げんとし給へば、荊軻御袖をむづと控へ奉り劍を胸に差當てたり。今はかうとぞ見えたりける」

○期したる―豫期したる。

○聖人人に見えず―前引平家物語の文「君子は刑人に近づかず」に據つたものか或は秦の趙高が二世皇帝に說いた語「天子所三以貴一者、但以レ聞レ聲群臣莫レ得レ見二其面一」に據つたものか。

○花陽夫人―平家物語に「始皇帝は三千人の后を持ち給へり。その中に花陽夫人とて、雙びなき琴の上手おはしき」と。この名、史記等他の諸書には見えない。

○片時の暇―ほんの暫くの暇。

○黄泉の道をも―冥途にての苦しみ。
○手籠め―暴力で取り抑へること。
【五】
○飛ぶ鳥も地に落ち―平家物語に「凡そこの后の琴の音を聞けば、猛き武士の怒れる心をも和らげ、飛ぶ鳥も地に落ち、草木も搖ぐばかりなり。況や今を限りの叡聞に供へんと、泣く〳〵彈き給へば、さこそは面白かりけめ、荊軻首をうなだれ耳をそばだてて、殆ど謀臣の心もたゆみにけり」
○今はの玉の緒琴―今は最後の玉の緒(命)を小琴にいひかけた。
○花の春の琴曲は―以下「琴柱に落つる聲々」まで琴の組歌「菜蕗」の文句にある
○和風樂―舞樂の曲名、和風長壽樂。又春庭樂といふ。
○柳花苑―これも舞樂の曲名。
○同じ曲の囀り―同じく舞樂の「春鶯囀」といふ意。
○秋風―同じく舞樂曲の「秋風樂」といふ意。秋風より雁を出した。
○琴柱に落つる聲―琴柱を雁行に、爪音を雁聲に見立てていふ。

音を聞いて。黄泉の道をも免れうずると思ふは如何に
ワキ「いかに秦舞陽。さて何とあるべきぞ
舞陽「これ程まで手籠め申す上は。片時の御暇ならば參らせられ候へ
ワキ「さらば片時の御暇を參らせうずるにて候
ワキ劍を下し、秦舞陽と共に腰を落着く。
【五】
シテ「いかに花陽夫人。急ぎ祕曲を奏し給へ
夫人『さらば祕曲を奏すべし。もとより妙なる琴の音に。飛ぶ鳥も地に落ち武士も。和らぐ程の祕曲なれば。ましてや今はの玉の緒琴。さこそは御手も盡されけめ
地『花の春の琴曲は和風樂に柳花苑柳花苑の鶯は同じ曲の囀り。月の前の調めは夜寒を告ぐる秋風。雲居に渡れる雁がね琴柱に落つる、聲々も

を聞いて、冥途の迷ひを免れたいと思ふのだ。どうだ、許してくれないか」
荊軻「秦舞陽、どうしよう」
舞陽「これ程までに手籠めにしたのだから、心配はない。暫く御暇をあげたがよからう」
荊軻「それでは、暫くお暇をあげよう」
と手を緩める。
【五】
始皇花陽夫人に向ひ、
始皇「これ花陽夫人、急いで祕曲を奏してくれ」
夫人「では、祕曲を奏しませう」
もとより琴の名人が、飛ぶ鳥も地に落ち、武士の荒い心も和らぐ程の祕曲を、殊に今は命の最後と思つて彈くのであるから、いかに手を盡されたかゞ推察されるのである。
夫人―
『琴の春の曲には、和風樂に柳花苑、また春鶯囀があり、秋の夜月前に奏する曲には夜寒を告げる秋風樂がある。秋といへば雁の渡る頃で、悲しい琴の音に雁の聲が鳴き添へるのであるが、雁

○涙の露の玉章―涙の露、露の玉、玉章とつゞけた。旅雁に玉章を託した漢の蘇武の故事によつて、人知れず始皇に心を傳へる意を表した。蘇武の事〔砧〕參照。
○たまさかに―まれにも。玉章の玉の音を重ねた。
○白絲の―人はよも知らじを白にいひかけ、琴の絲の調と續けた。
○調めを改め―これまでと琴の曲調をかへて。他の曲を更に彈き續けるのである。
○君聞けや―琴歌に始皇に聞き給へといふ意を含ませたのである。
○七尺の屏風は―平家物語前引「謀臣の心もたゆみにけり」の次に「その時后始めて更に一曲を奏す。七尺の屏風は高くとも、跳らばなどか越えざらん。一條の羅縠は强くとも、引かばなどか絶えざらんとぞ彈き給ふ。荊軻は之を聞き知らず、始皇帝は聞き知りて、御袖を引切つて、七尺の屏風を跳り越え、銅の柱の陰に逃げ隱れさせ給ひけり」
○羅縠―薄い絹。
○謀臣―謀叛の臣。荊軻・秦舞陽を指す。
○有無に醉へり―醉うて有

涙の露の玉章。たまさかに。たまさかに。人はよも白絲の。調めを改めて。君聞けや君聞けや（と夫人シテに目配せをし）。七尺の屏風は。躍らば越えつべし。羅縠の袂をも引かばなどか切れざらん。謀臣は。有無に醉へり群臣は。聖人の。御助けと。おし返し、おし返し。二三返の琴の音を君は聞し召さるれども荊軻は聞き知らで唯緩々と。侵されて。眠れるが如くなり

地謠のうちに、ワキと秦舞陽は祕曲に魅せられて眠る心。

【六】

地『時移る、時移ると。祕曲度々重なれば

シテ『荊軻が控へたる

地『御衣の袖を。引つ切つて。屏風を躍り越え。電光の。激するよそほひ霰の白玉盤に落ちて欄干を走る心地して。銅の御柱に。立ち隠れさせ給ひしかば

は遠い所にゐる人に音信を傳へたものだ……』――さうだ、人はよもや知りはすまい、琴の音にお知らせしようと、琴の曲を改めて、

夫人「わが君お聞き下さいませ――『高い七尺の屏風も躍れば越えられませう。薄絹の袂も引けば切れないことはございますまい。あの惡者は前後もなく醉つて居ります。臣下の人達はわが君をお助けしようとしてゐます』――

と繰り返し／＼二三返彈いた。その琴の音を皇帝は聞きわけられたが、荊軻は聞きわけることが出來ず、たゞうつら／＼と魅せられて、眠つたやうになつてゐる。

【六】

花陽夫人は『時が過ぎます』と祕曲を度々繰返して、お促ししたので、始皇帝は荊軻が捉へてゐた御衣の袖を引切つて、屏風を躍り越え、電火の閃くが如く、霰の盤に散ちるが如く、すばやく銅の御柱へお隠れになつた。

「御衣の袖を」とシテ床几を立つと、ワキ秦舞陽は驚きて臺を飛び下り、シテも臺を下りて立廻り、「銅の御柱に」とシテ橋懸へ行き、幕際にて袖を被ぎて下に居る。

ワキ『荊軻は怒りをなして

地『劍を帝に投げ奉れば（ワキ劍を前へ投ぐ）。番の醫師は。藥の袋を劍に合はせて投げ止めければ

シテ『帝また劍を拔いて（シテ立ちてワキの方へ向き劍を拔き）

地『帝また劍を拔いて（シテ舞臺に入り）。荊軻をも秦舞陽をも。八裂に裂き給ひ忽ちに失ひおはしまし。その後燕丹太子をも。程なく滅ぼし秦の御代萬歳を保ち給ふ事。唯これ后の琴の祕曲。ありがたかりけるためしかな

「荊軻をも秦舞陽をも」に、ワキ・秦舞陽は殺されたる心にて切戸より入り、シテは正面先にて斬る形をし、「ありがたかりける」と仕手柱際にて留拍子を踏む。

荊軻は氣がついて大に怒り、劒を投げつけたが、これと同時に當番で御殿にゐた醫者が藥の袋を投げて、その劒を喰ひとめた。そこで、始皇帝は劒を拔いて、荊軻をも秦舞陽をも八裂に裂いて殺してしまはれた。

その後燕の丹太子をも間もなく亡ぼして、秦の御代萬歳を保たれたのは、實に花陽夫人が琴の祕曲を奏した功によるので、ありがたいことである。

無を辨へない。
○群臣は聖人の御助け―秦の群臣は始皇帝をお助けしようと待ち構へてゐるとの意であらう。これまでが琴曲の文である。
○緩々と―うつら〳〵と。
【六】○電光の激する―始皇のすばやい形容。
○霰の白玉盤に落ちて―白樂天琵琶行の句「大珠小珠落二玉盤一」を借りて、始皇の形容に用ゐた。
○荊軻は怒りをなして―平家物語前引の次に「その時荊軻怒つて、劒を投げかけ奉る。折節御前に番の醫師の候ひけるが、劒に藥の袋を投げ合せたり、……王立ち返りて御劒を召し寄せて荊軻を八裂にこそし給ひけれ。秦舞陽も討たれぬ。やがて官軍を遣して燕丹をも亡さる」
○番の醫師―當番で御殿にゐた醫師。
○劒に合はせて―劒を投げると同時に。

〔考異〕

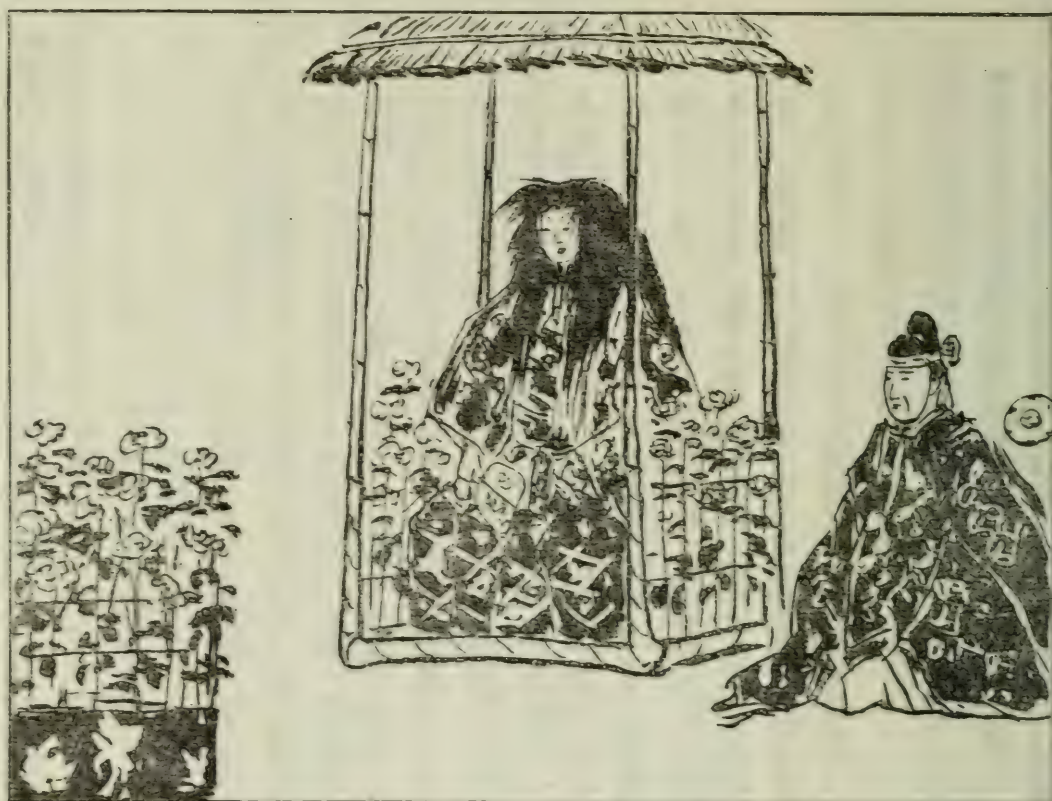
諸流（觀寶剛喜）

【一】シテ（剛、この一節のシテ謡をワキヅレ大臣謡とす）……地「內に三十六宮あり……シテ「長生不老の……暫し（寶ナシ） 【二】ワキ「いかに奏聞申し候……ワキ「さらば參らせうずるにて候（寶剛喜ナシ） 【六】地「劔を帝に投げ奉れば帝の醫師は藥の袋を劔に合はせて投げ止めければ（寶劍は柱に止まりけり）

古謠本（光悅本）

【三】シテ「急いで參內（光せ）させ候へ……大臣「唯今の由……さりながら大法の如く（光ナシ）太刀刀を……ワキ「さらば參らせうずるにて候（光さてとの御殿をとなたへ參內申候へき）……舞陽「それをさのみ……玉淵を窺はざる（光との）け……【四】舞陽「まづ秦舞陽進み出て（光よつ）て……シテ「いかに荊軻……殊更今（光これには）最期（光の事）なれば……ワキ「いかに秦舞陽さて（光ナシ）……舞陽「これ程まで（光に）手籠め申す上は（光ていつくまでのかし申へき）片時の（光事ならはたゞ）御暇ならば（光を）……

菊慈童　觀（寶剛喜）

解説

【能柄】　四番目　一段劇能

【人物】　**ワキ**　魏文帝勅使、　**ワキツレ**　同從者（二人）、

　　　　シテ　慈童

【所　】　**支那**　酈縣山

【時　】　魏文帝の時　秋（九月）

【異稱】　もと「枕慈童」といひ、現在も寶生・金剛・喜多の諸流では「枕慈童」といつてゐる。觀世流にも「枕慈童」があるが、それはこれとは別な曲である。また貞享三年の番外百番には「菊士童」があるが、これも本曲とは別である。

【作者】　能本作者註文に作者不明として擧げてゐる「慈童」は本曲のことであらうか。二百十番謠目錄にも「枕慈童」を作者未詳としてゐる。田樂の「菊水」はこれと同工のもので、室町時代の作であらうと思ふ。もとは前後二段の構造であつたものを、德川期の中頃に祝言物としてその前段を削つたのである。（考異參照）

【梗概】魏文帝の臣下が勅命によつて、薬の水を尋ねて酈縣山に行き、今より七百年昔、周の穆王に仕へた慈童が、この山に配流せられた時、帝から賜つた枕の要文を菊の葉にうつして、その露を吸つてゐたので、仙人となつて、今に生き永らへてゐるのに逢つた。慈童自身も自分の長命に驚いて、この壽を文帝に捧げた。

【出典】この事は太平記巻十三「龍馬進奏の事」に、

穆王震旦に歸つて後、深く心底に祕して世に傳へられず。この時慈童といひける童子を穆王寵愛し給ふに依つて、恒に帝の傍に侍りけり。或時かの慈童、君の空位を過ぎけるが、誤つて帝の御枕の上をぞ越えける。群臣議して曰く、その例を考ふるに、罪科淺きにあらず、然りと雖も事誤より出でたれば、死罪一等を宥して遠流に處せらるべしとぞ奏しける。群議已むことを得ずして、慈童を酈縣(「てつけん」と訓んである。古謠本にも同様に讀んでゐる)といふ深山へぞ流されける。かの酈縣といふ所は、帝城を去る三百里、山深うして鳥だにも鳴かず、雲暝うして虎狼充滿せり。されば假りにも此山へ入る人の生きて歸るといふ事なし。穆王猶慈童を哀み思し召しければ、かの八句の内を分たれて、普門品にある二句の偈を潛に慈童に授けさせ給ひて、毎朝に十方を一禮して、此文を唱ふべしと仰せられける。慈童遂に酈縣に流され、深山幽谷の底に棄てられけり。爰に慈童君の恩命に任せて、毎朝に一反此文を唱へけるが、若し忘れもやせんずらんと思ひければ、側なる菊の下葉に此文を書きつけけり。其より此菊の葉における下露、僅に落ちて流るゝ谷の水に滴りけるが、其水皆天の靈藥となる。慈童渇に臨んでこれを飲むに、水の味ひ天の甘露の如くにして、恰も百味の珍に勝れり。加之、天人花を捧げて來り、鬼神手を束ねて奉仕しける間、敢て虎狼惡獸の恐れなくして、却つて換骨羽化の仙人となる。是のみならず、此谷の流の末を汲んで飲みける民三百餘家、皆病即消滅して、不老不死の上壽を保てり。其後時代推移つて八百餘年まで、慈童猶少年の貌あつて、更に衰老の姿なし。魏の文帝の時、彭祖と名を替へて、此術を文帝に授け奉る。文帝之を受けて菊花の盃を傳へて、萬年の壽をなさる。今の重陽の宴是なり。

とあつて、本曲はこれに據つたのである。

【概評】本曲は前にいつたやうに二段能であつたものを、その前段を刪つたのであるが、他の祝言物の半能に比べて、よく纏つて居り、原作よりも却つてよく整つた祝言らしいものになつてゐる。脚色については特にいふべき事もないが、この曲から受ける感銘について一言したいのは、本曲の事件は魏文帝の時代であるが、能樂の觀衆はこれを魏文帝の事として、支那の事件として、他所事として受け

入れるのではなく、さながらわが國の當御代の瑞祥として、大きな喜悦を以て迎へてゐたものと思はれることである。能菊の構案は、〔高砂〕のやうな我國上代の喜びを、引續いて當御代のめでたさとして祝つたばかりでなく、遠く支那上古の喜びまでを、わが國の當御代のめでたさに引入れて祝つたものであることに注意したいと思ふのである。

【一】

○山より山の奥までも―實際の道を政道にかけて、深山の奥まで道の續いてゐるのは、當代の御德政が行渡つてゐるからであらうといふ。新古今集後鳥羽上皇の御製に「奥山のおどろの下も踏み分けて道ある世ぞと人に知らせん」

○魏の文帝―名は曹丕。支那三國時代の魏、曹操の子。

○酈縣山―河南省鄧州にある。荊州記に「酈縣北八里有二菊水一」

【一】

後見、正面先に一疊臺を置き、その三方には菊の花を垣とし、臺の上に錦の枕を置く。次に藁屋の作物に引廻をかけて大小前に出す。これにも同じく三方に菊の垣を作り置く。

次第の囃子にて、ワキ勅使、唐冠・金紗鉢卷・着附厚板・狩衣。白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ從者二人、ワキと同樣の裝束（冠は洞烏帽子）にて、舞臺に入り向合ひて、

ワキ ワキヅレ 次第「山より山の奥までも。山より山の奥までも道あるや時代なるらん

地取にワキは正面に向き、

ワキ「これは魏の文帝に仕へ奉る臣下なり。さてもわが君の宣旨には。酈縣山の麓より藥の水湧き出でたり。その水上を見て參れとの宣旨を蒙り。唯今山路に赴き候

酈縣山に着きたる心にて、

ワキ「急ぎ候程に。これははや酈縣山に着きて候。

【一】

舞臺は魏の都で、ワキ魏文帝の勅使、ワキヅレの從者を隨へて登場。

勅使「山の奥の奥までも道が拓けてゐるのは、當代の御德政が國の隅々までも行き渡つてゐるからであらう」

と次第に御代の太平を祝ひ、

勅使「自分は魏の文帝にお仕へしてゐる臣下だが、わが君が「酈縣山の麓から藥の水が湧き出た、その水上を見て參れ」と仰せ出されたので、勅命を奉じて、これから山へ行くのです」

と見物人に自己紹介をし、やがて酈縣に着いた體で、舞臺は酈縣山となる。

舞臺の正面には赤白黄の菊が咲き亂れて居り、その中に一叢の花があり、その裏に、やはり菊の咲いた藁屋があつて、その中に一人の慈童がゐる。

勅使「道を急いだので、思ひの外早く酈縣

【二】○邯鄲の枕の夢―蜀の盧生といふ者が、邯鄲の宿で、夢に王公となり五十年の榮華を盡したと見たといふ故事。「邯鄲」參照。
○慈童―解説に委しくいふ
○古の思ひ寢―昔の苦しみを思ひ出す種。慈童が穆王に寵せられてゐた時、誤つて帝の御枕の上を越したのでその罪により酈縣に流されたことを指す。
○松が根の―待つを松にいひかけた。
○身を知る袖―身の罪を思ひ知る涙が袖にかゝることをいふ。古今集在原業平の歌に「かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身を知る袖は降りぞまされる」
○賴めにしかひこそなけれ獨寢の枕詞ぞ恨みなる―戀の賴み難きことを恨んだ歌を引いたのでなからうかと思ふが、出所が分らない。こゝでは「賴めにし」は穆王が行末長く寵愛しようと約束したこと。「獨寢」は山中に捨てられて獨り寢ること。「枕詞」は常に口癖のやうにいふ詞。穆王の約束をいふ。檜本には「賴みにし」とある。
【三】○野干　狐の異名。

（脇座に向き）これに庵の見えて候。まづこの邊に徘徊し。（ツレへ向き）事の子細を窺はばやと存じ候

ワキヅレ「然るべう候

といひて、脇座へ行き下に居る。後見、藁屋の引廻を下す。シテ慈童、面慈童・黑頭・金緞鉢卷・襟白赤・着附厚板・法被・半切・腰帶・菊葉團扇の裝束にて、その中に床几にかゝりて、

【二】

シテサシ『それ邯鄲の枕の夢。樂しむこと百年。慈童が枕は古の。思ひ寢なれば目も合はず

地『夢もなし。いつ樂しみを松が根の。いつ樂しみを松が根の。嵐の床に假寢して。枕の夢は夜もすがら身を知る袖は乾されず。賴めにし。かひこそなけれ獨寢の枕詞ぞ、恨みなる枕詞ぞ恨みなる

【三】

ワキ立ちて作物に向ひ、

ワキ「不思議やなこの山中は。虎狼野干の栖なるに。これなる庵の内よりも。現れ出づる姿を見

山に着いた。（藁屋を見て）おゝこゝに家が見える。この邊を徘徊して、怪しい樣子を探らう」

【二】

シテ慈童、藁屋の中に居て、

慈童「邯鄲の枕をして寢たものは、百年榮華の夢を見たが、自分の枕は見る度に昔の罪科を思ひ出す種で、寢ても眼が合はず、夢を見ることもない。從つて何時樂しい夢を見るあてもなく、嵐の吹き入る寒い床に假寢するばかりで、終夜身の罪を思ひ知る涙に濡れて、袖の乾く時もない。行末長く寵愛してやらうとお約束下さつた甲斐もなく、このやうに山中に獨寢をする有樣となつて、今は昔のお約束の詞が恨めしい」

と獨言をいつて歎いてゐる。

【三】

勅使これを見て、

勅使「これは不思議だ、この山中にはもの凄い虎や狼や狐の栖であるのに、こゝの家の中から出て來たものを見ると、姿の異

○化したる—異樣な。化生の。
○人倫—人間。
○化生—妖怪、變化。
○周の穆王—周の武王より第五代の王。
○周の代は既に數代のそのかみにして—周穆王から鄒王まで凡七百五十年。それより東周、秦、前漢、後漢を經て魏文帝まで、約五百年、前後合せて約千二百年。これを太平記には八百年といひ、本曲には七百年といつて居る。
○次第に變る—次第は數代を誤つたのであらう。
○そのかみ—その昔。
○非想非々想—非想非々想天のこと。無想もなく有想もない世界で、三界の最上位にあり、有頂天ともいふ。

れば。その樣化したる人間なり。如何なる者ぞ名を名乘れ

シテ「人倫通はぬ所ならば。其方をこそ化生の者とは申すべけれ。これは周の穆王に召し使はれし。慈童がなれる果ぞとよ

ワキ『これは不思議のいひ事かな。眞しからず周の代は。既に數代のそのかみにて。王位もその數移り來ぬ

シテ「不思議やわれはその儘にて。昨日や今日と思ひしに。次第に變るそのかみとは。さて穆王の位は如何に

ワキ「今魏の文帝前後の間。七百年に及びたり。非想非非想は知らず人間に於て。今まで生ける者あらじ。いかさま化生の者やらんと。身の怪しめをぞなしにける

樣な人間だ。お前はどういふ者だ、名をいへ」

慈童「こゝが虎や狐の栖處で、人間の通はない所であるなら、そんな所へ來たそなたこそ化者といはなければなるまい。自分は周の穆王に召使はれた慈童が、このやうになつたのだ」

勅使「これは不思議なことをいふものだ。どうもほんととは思はれない。周の代といへば、もはや數代も以前の昔で、王位の數も非常に多く移つたのだが」

慈童「不思議だな。自分は元のまゝの姿で、こゝへ來たのも昨日か今日のやうに思つてゐたのだが、『數代も以前の昔のことだ』とは、どうも不思議だ。すると、穆王の御位はどうなつたのだ」

勅使「今は魏の文帝の世で、その間前後七百年を經てゐるのだ。天上の有頂天界ならばいさ知らず、この人間界で、七百年を經た今日まで生きてゐる者はあるまい。なるほど妖怪變化の者であらう」

と勅使は不審を起した。

○二句の偈―次に擧げる法華普門品の偈文をいふ。偈は詩句を以て佛德を讃稱し又は法理を述べたもの。

○具一切功德慈眼慈衆生―法華經普門品の二句偈文。「一切の功德を具して、慈眼をもつて衆生を視、福聚の海無量なり、是の故に應に頂禮すべし」と訓讀す。

○妙文―ありがたい文句。

○菊の葉に―妙文を聞くといひかけた。

シテ「いや猶もそなたこそ。化生の者とは申すべけれ。忝くも帝の御枕に。二句の偈を書き添へ賜はりたり。立ち寄り枕を御覽ぜよ

ワキ『これは不思議の事なりと。おのおの立ち寄り讀みて見れば

と謠ひながら舞臺の眞中へ出で下に居て、臺の上の枕を見る。

シテ『枕の要文疑ひなく

シテ ワキ『具一切功德慈眼視衆生。福聚海無量是故應頂禮

と謠ひてワキは脇座に歸り下に居る。

地『この妙文を菊の葉に。置く滴りや露の身の。不老不死の藥となつて七百歳を送りぬる。汲む人も汲まざるも。延ぶるや千歳なるらん。面白の遊舞やな

〔樂〕

「汲む人も汲まざるも」にシテ靜かに作物より出で、

慈童「いややつぱりそなたこそ妖怪變化の者といはなければならない。その證據には自分は忝くも陛下の御枕に二句の偈をお書き添へになつて、戴いてゐるのだ。こゝへ來て御覽なさい」

勅使「これは不思議なことだ」

と皆が立ち寄つて讀んで見ると、

慈童「それ、この枕に書き添へられた、ありがたい經文に疑ひはなからう」

「なるほど」と勅使と慈童と聲を揃へて、

慈童 勅使『佛は一切の功德を具へて、慈眼をもつて衆生を視、福聚の海無量なり、この故に應に頂禮すべし』

慈童「さうだ分つた、このありがたい經文を菊の葉に書くと、その葉に置く露の滴りが不老不死の藥となつて、それで七百歳を送つたのだ。この菊の露を飮めば、誰も彼も、皆千年の長命が出來るのだらう。實に面白いことだ。一つ舞を舞はう」

〔樂〕を舞ふ。

引續き次の謠に合せて舞ふ。

【四】

シテ『ありがたの妙文やな

地『即ちこの文菊の葉に。即ちこの文菊の葉に。悉く顯る。さればにや。雫も芳しく滴りも匂ひ。淵ともなるや。谷陰の水の。所は酈縣の山の滴り。菊水の流れ（流を見渡す形）。泉はもとより酒なれば。汲みては勸め。掬ひては施し（と泉を汲む形）、わが身も飮むなり飮むなりや。月は宵の間その身も醉ひに。引かれてよろよろよろよろと（だら〳〵と下り）。ただよひ寄りて。枕を取り上げ戴き奉り（と臺に上りて枕を戴き）。げにもありがたき君の盛德と岩根の菊を。手折り伏せ手折り伏せ。敷妙の袖枕。花を筵に臥したりけり（と臺の上に坐して袖にて顏を掩ひ臥したる形）

シテ『もとより藥の酒なれば（と臺より下り）

【四】

慈童「實にありがたい經文だ。この經文の功德が菊の葉の露に現れたのだ。それで、その雫も滴りも芳ばしく匂ふのだらう。そしてその雫が溜つては谷川の水となるのだ。だから、こゝ酈縣の山の水は菊水の流れなのだ」

といつて、この泉はもと〳〵酒であるから、汲んでは勅使に勸め、またその從者にも施し、

慈童「自分も飮むのだ。まだ月が出たばかりで、宵の間だ。ゆつくりお飮みなさい」

と、慈童自身も次第に醉ひがまわつて來て、よろ〳〵とよろけながら、かの枕を取り上げて戴き奉り、

慈童「わが君の御盛德は實にありがたいことだ」

といつて、岩根の菊を折つては伏せて敷き、袖を枕に、菊の花を床にして寢た。

しかし、もと〳〵これは菊の酒であるから、醉ひに侵されることはなく、

【四】

○淵ともなるや―拾遺集清原元輔の歌「わが宿の菊の白露今日毎に幾夜積りて淵となるらん」を引いた。

○その身も醉ひに―宵と醉と音が近いので、重ねて文の綾とした。

○岩根の菊を―盛德といふを岩にいひかけた。

○敷妙の―枕の枕詞。手折り伏せ下に敷くといひかけた。

地「もとより薬の酒なれば。酔ひにも侵されずその身も變らぬ、七百歳を。保ちぬるも、この御枕の故なれば。いかにも久しき千秋の帝（と下に居てワキに辭儀をし）。萬歳の わが君と祈る慈童が七百歳を。わが君に授け置き（と立ち）。所は酈縣の、山路の菊水。汲めや掬べや飲むとも飲むとも盡きせじや盡きせじと、菊かき分けて。山路の仙家に。その儘慈童は。入りにけり

と仕手柱際にて留拍子を踏みて舞ひ納む。

慈童「この身が何の變りもなく七百歳の壽命を保つたのも、この枕のお蔭だから、わが大君が幾久しく千年萬年御榮え遊ばすやう、祈りの心を籠めて、私の七百歳の命をわが大君にお授けしませう」

といひ、なほ勅使にも、

慈童「さあ、この酈縣山の菊水を遠慮なくお飲みなさい、いくら飲んでも盡きはしないから」

といつて、慈童はそのまゝ菊をかき分けて、山中の仙家に入つてしまつた。

〔考　異〕

諸流（觀寶剛喜）

【一】ワキ「これは魏の……子細を窺ははやと存じ候（喜地「下紅葉木の下露をかき分けて。〳〵。行方も知らぬ山の端の雲に言問ふ心地して。千里の外も遠からぬ。流れに添ひて尋ね行く〳〵）【三】地「この妙文を菊の葉に……盜りぬる汲む人も汲まざるも……遊舞やた（寶剛喜、左揭元祿本ト同樣ノクセ一章「それ妙文何れに於て……下し給はる枕とかや有難や」ヲ加フ）

古謠本（元祿二年本〔枕士童〕）

現行曲の前に、（元次第「關はなけれと越つるや。〳〵枕の夢路なるらん。ワキ「是は周のほくわうに仕へ奉る官人にて候。扨も是なるしとう。あやまつて皇帝の御枕をこえぬる科により。てつけん山にながしおけとの宣旨を蒙り。只今てつけん山に參候。それしゆうしやひつめつの

ことわり。今におとろへ事なけれとも。まのあたりなる身のありさま。かくおとろふる花ならは。何かはさきしあた櫻の。雲とーをるゝ梢の雨の。涙の袖とふり果て、身さへなかるゝ心の水の。何にたとへん。かたもなし。歌「こえし枕の科ならは。其夜の夢とさめもせて。何事も身にふる春の夢なれや。〳〵。思ひねさそふ明ほのゝ。南殿の花盛。其下ふしの枕には。かはりてつらき涙かな。雲路山路の朝ぼらけ有明とほき影迄も。つれなき身そとなかれ行。所をしかもいそかれぬ。はい所も今は程ちかし〳〵。官人「いかに土童。此山をすつけん山と申候。急此橋を渡り給へ。土童「侘むかひの山も王地にて有へきよなう。官人「中々の事。普天の下率土の内。いつくも王地なれとも。人倫通はぬ所なれば。王地共又いひかたし。さてこそ重科の者をはなかしおかるれ。いそいて橋を渡り給へと。各官人すゝむれば。土童「いやまてしはし情なし。實や此程は雲井のみはしをこそなれてわたりしに。是はわうとにあらさる道。かけたる橋も一筋に。聞し三途の橋成へし。とてもめいとに行身ならは。なき身と成て渡らはや。憂きを思ひて何かせんと。くときつゝ涙なからにこの橋を。〳〵。渡りむかへはさすかけに。なみたに。むせへる橋のおもて。渡るへき便なく。只たゝすめるはかりなり。かくてはいかゝあら波の。はやと〳〵とすゝむれは。ちからなくして打渡り。むかひの岸につくと見て。跡より橋を引はなては。鳥ならてはとひてもと。其まゝたふれ泣居たり。〳〵)

【一】ワキ「(元抑)これは魏の……酈縣(元てつけん、以下同ジ)山の……　【三】シテ「不思議や……穆王の位は如何に(元 大臣「文王武王周公旦。ツレ大臣「成王ゆう王秦の代には。大臣「始皇しえいと皇太子。抑せんかんにかううかうそ。ツレ大臣「こかんにかうそうのこうてい)ワキ(大臣)「今魏の文帝……地「この妙文を菊の葉に……七百歳を送りぬる汲む人も汲まざるも……面白の遊舞やな(元有難の妙文や。夫妙文いつれにおいておろかならす。殊に福壽界無量の御誓願。猶もつてせこおうちやうらい。有かたき御ひくわんかな。夫本願しよしやうの春の花は。にほひを三千界にくんし。みたかくわうの秋の月は。光を西方淨土にみつ。抑諸佛出世の本懐は。ねかふ心にありと聞。ましてや本より誠ある。一念發起菩提の程の。妙法蓮花もひとししや。此しんこくの菊の露。たへなる法のほうみを帯て。一滴の露萬水にくたつて。不老不死の薬となれる。身にひたしたる菊水の。よる年波を。かへすらん。クセ「しかるにぼくわうは。はつひつの胸にめされ。法の道本とけて。靈山の會座に參會し。法味の場に着座して。聽聞の聞法しんいをすますよもすから。則佛とひたまはく。汝はいかなる國。いか成世界の者なれは。爰に來れるそと。尋ねさせ給ひしに。ほくわう答へのたまはく。我はしんたんの主也。あひねかわくはすみやかに。大聖世尊は三世の。覺母の御法世にふかし。授給へや同しくは。地獄の法味をと冠をさけて頂禮す。然は一天のわうしとて。御たんしやうのみきんには。せうろく宮殿に參りつゝ。忝くも此文を。天子に授け給ふとか。されはみことのりもはんせうの其御影。千代萬代と菊のはに。移すや妙な

ゑ御法の。花の露若の雫。積り／＼て年を經ふともなるやなかれ行。すゑ萬民にいたるまで。汲人もくまさるゝ。延るや千年なるらん。七壽一溪水花をあらふ。かりうの末。其汲はすなはち。いきやうくんし。とひたつ心やすゝむらん。シエ有難や。此不老不死の藥といつぱ。其一切功德慈眼視衆生福聚海無量の德を見せんとて。忝くも君あそはして。くたし給はる枕とかや。有かたや)

木曾（きそ）

觀

解説

【能柄】 四番目 一段劇能

【人物】 **ツレ** 木曾義仲、 **シテ** 覺明、 **ツレ** 池田次郎、
ツレ 義仲從兵（五六人）

【所】 越前國 埴生

【時】 壽永二年五月

【異稱】 〔木曾願書〕ともいふ。

【作者】 能本作者註文に作者不明とある外、古記錄は見當らない。

【梗概】 木曾義仲が平家と戰つて越中國埴生に陣してゐた時、かなたに見える社が八幡宮であると聞き、大に喜んで、覺明に願書の草案を作らせて、これを神に奉つた。折柄所の土民が軍の門出を祝つて酒肴を持つて來たので、酒宴を開き、覺明に舞を舞はせてゐると、八幡の方から山鳩が翼を竝べて味方の旗手に飛びかけり、神の納受のしるしを表した。かくて、義仲は倶利伽羅で大勝を博した。

【出典】 木曾願書のことは、平家物語、源平盛衰記、平家物語長門本、い

づれにも見え、その內容も大同小異であるが、本曲の詞章は平家物語に從つたやうに思はれるから、その主要部、物語卷七「木曾の願書」を引くと、

木曾は埴生に陣取つて、四方をきつと見廻せば、夏山の峯の綠の木の間より、朱の玉垣ほの見えて、片そぎ造りの社あり。前には鳥居ぞ立ちたりける。木曾殿國の案內者を召して「あれをば何處と申すぞ、いかなる神を崇め奉つたるぞ」と宣へば「あれこそ八幡にて渡らせ給ひ候へ、所もやがて八幡の御領で候」と申す。木曾殿斜ならずに喜びて、手書に具せられたりける大夫坊覺明を召して「義仲こそ何となう寄すると思ひたれば、幸に新八幡の御寶前に近づき奉つて、合戰を旣に遂げんとすれ、さらんにとつては、且は後代のため、且は當時の祈禱のために、願書を一筆書いて、參らせうと思ふはいかに」と宣へば、覺明「此儀尤然るべう候」とて、馬より下りて書かんとす。覺明が其日のていたらく、褐の直垂の黑絲威の鎧着て、黑漆の太刀を佩き、二十四差いたる黑母呂の矢負ひ、塗籠籐の弓脇に挾み、兜をば脫いで高紐にかけ、箙の方立より小硯疊紙取出し、木曾殿の御前に畏つて願書を書く。あつぱれ文武二道の達者かなとぞ見えたりける。此覺明と申すは、本は儒家の者なり。藏人通廣とて勸學院にぞ候ひける。出家の後は、西乘坊信救とぞ名のりける。常は南都へも通ひけり。一年高倉の宮園城寺へ入御の時、山奈良へ牒狀を遣されけるに、南都の大衆如何思ひけん、其返牒をば此信救にぞ書かせける。「抑淸盛入道は平氏の糟糠、武家の塵芥」とぞ書きたりける。入道大に怒つて「何條其信救めが、淨海はとのものを、平氏の糟糠武家の塵芥と書くべきやうこそ奇怪なれ。急ぎ其法師搦め取りて、死罪に行へ」と宣ふ間、これによつて、南都には堪へずして、北國へ落ち下り、木曾殿の手かきして、大夫坊覺明と名のる。其願書に曰く、

歸命頂禮八幡大菩薩、日域朝廷の本主、累世明君の曩祖たり。寶祚を守らんがため、蒼生を利せんがために、三身の金容を顯し、三所の權扉を押し開き給へり。爰にしきりの年より以來、平相國といふ者あり、四海管領し萬民を惱亂せしむ。是旣に佛法の仇、王法の敵なり。義仲苟も弓馬の家に生れて、僅に箕裘の塵を繼ぐ。彼暴惡を案ずるに、思慮を顧るに能はず。運を天道に任せて、身を國家に投ぐ。試に義兵を起して兇器を退けんと欲す。然るに鬪戰兩家陣を合すと雖も、士卒未だ一致の勇を得ざる間、區々の心を恐れたる所に、今一陣旗をあぐ。戰場にして忽に三所和光の社壇を拜す。機感の純熟明なり。兇徒誅戮疑なし。歡喜淚こぼれて、渴仰肝にそむ。就中曾祖父前陸奧守義家朝臣、身を宗廟の氏族に寄附して、名を八幡太郎義家と號せしよりこのかた、其門葉たる者、歸敬せずといふことなし。義仲其後胤として、首を傾けて年久し。今此大功を起す事、譬へば嬰兒の貝を以て巨海を量り、蟷螂が斧を怒つ

て陸軍に向ふが如し。然りといへども、國のため君のために此を起す。全く身のため家のためにして此を起さず。志のいたり神慮そらにあり。頼もしきかな、悦ばしきかな。伏して願はくは、冥顯威を加へ、靈神力を合せて、勝つことを一時に決し、仇を四方へ退け給へ。然れば則ち丹祈冥慮に叶ひ、玄鑑加護をなすべくは、先づ一の瑞相を見せしめ給へ。壽永二年五月十一日、源の義仲敬白と書いて、我身をはじめて、十三騎が上矢の鏑をぬき、願書に取りそへて、大菩薩の御寳殿にぞ納めける。頼もしきかな、八幡大菩薩、眞實の志二つなきをや、遙に照覽し給ひけん、雲の中より山鳩三つ飛び來つて、源氏の白旗の上に翩翻す。

【槪評】謠曲は武士を對象として作つたものであるに拘らず、戰ひの勝利を描いた曲が殆どない。複式能修羅物にも、所謂勝修羅物は僅か三番に過ぎない。現在物劇能にも、鬼神變化を退治する曲はあるが、實戰の勝利を描いたものは本曲の外に一つも見當らない。その唯一の本曲も觀世流にだけ番外謠として僅かに命脈を保つてゐるに過ぎないのは、實に不思議な現象といはなければならない。さて、本曲は「考異」に記すやうに舊作を改修したもののやうで、その爲に、例へば「またこの莊の士民、軍の御門出を祝し、酒肴を奉りて候」の一句で、直に酒宴に移るなど、やゝ唐突の感を抱かせる所がないでもないが、平家物語に據つた劇能には、兎角語り物の形式が多分に遺存してゐて、劇的要件を缺いたものの多い中に、本曲の如きは比較的手際よく戲曲的體裁を整へ得たものといひ得よう。

【一】

舞臺に壇生の陣。

シテ覺明、ツレ木曾義仲に隨ひ、ツレ池田次郎、ツレ從兵と共に登場。

【二】

一聲の囃子にて、ツレ木曾義仲、梨打烏帽子・白鉢卷・襟淺黃・着附厚板・法被・半切・腰帶・扇・太刀の裝束にて弓矢を持ち、シテ大夫坊覺明、袈裟頭巾・襟花色・着附厚板・長直垂・込大口・扇・太刀の裝束、ツレ池田次郎、梨打烏帽子・白鉢卷・着附厚板・法被・半切・腰帶・扇・太刀の裝束、ツレ從兵四五人、梨打烏帽子・白鉢卷・着附厚板・側次・白大口・腰帶・扇・太刀の裝束にて、舞臺に入り向合ひて、

シテ・ツレ一同一聲『八百萬神も引きますかごの名の。弓矢の道こそ。久しけれ

一同「諸々の神が鹿兒の弓をお用ゐになつてよりこの方、この弓矢を持つ武士は久しく榮えてゐるのである」

【二】

○かごの名の―「かご」は鹿兒と書き鹿を射る弓矢の名であると傳ふ。記紀に、天照大神が日本の地をお治めになる爲、天若日子に天鹿兒弓と天鹿兒矢とを賜ひ、天降らしめ給うたとある故事から出たのである。

○木會義仲―源義賢の二男幼時信濃國木曾に於て乳母の夫中原兼遠に育てられたので、木曾といふ。壽永二年年三十の時、以仁王の令旨を受けて平家を敗り、京に入つて大將軍と稱したが翌三年範頼義經に襲はれて近江粟津原で戰死した。本曲はその平家を敗つた時の事であり「兼平」「巴」にはその最期の樣を描いてゐる
○燧が城―盛衰記卷二十八「源氏追討使事」に「抑も此城と云は、南は荒乳の中山を境て、虎杖崩能美山、近江の湖の北の端也、鹽津朝妻の濱に連たり。北は抽尾坂、藤勝寺、淵谷、木邊峠と一也、東は還山の麓より、長山遙に重りて、越の白峯に連たり。西は海路新道水津浦、三國の湊を境たる所也。海山遠打廻、越路遙に見え渡る、礬石高く聳え擧て、四方の峯を連たれば、北陸第一の城郭也―
○礪波山―越中加賀の國境にある山。平家物語卷七「燧合戰」に同じき(壽永二年)五月八日の日、平家は加賀の國篠原に着きて……都合其勢七萬餘騎、加賀越中の境なる礪波山へぞ向はれける。木曾は其頃越後國府に

義仲は正面に向き、

義仲「抑もこれは木曾義仲とはわが事なり

他の者は互に向合ひたるまゝにて、

シテ・進 田・從兵「さても平家は越前の、燧が城を攻め落し。都合その勢十萬餘騎。この礪波山まで押し寄する

義仲「味方は僅か五萬餘騎。計略をもつて防がんとて

シテ・進 田・從兵「白旗數多とゝのへつつ。黒坂の上におし立てて。敵の心を疑はしめ。山中に屯させ。夜に入り大手搦手より。一度にかかり倶利伽羅が。谷へ敵を落さんと

義仲も一同と向合ひ、

シテ・ツレ・一同「用意をなして義仲は。用意をなして義仲は。勢を七手に別ちつつ。その身は殊に精兵。一萬餘騎を引き從へ。埴生に陣をぞ、取りにけ

と次第を語つて武運を祝さ、

義仲「自分は木曾義仲である」

と自己紹介をし、

義仲「さて平家の軍は越前の燧が城を攻め落して、總勢十萬餘騎でこの礪波山まで押寄せて來た。これに比べて、味方の軍勢は僅か五萬騎であるが、計略を以てこれを防がうと思つて、白旗を澤山作つて、黒坂の上におし立てて、敵の目を欺き、軍勢は山の中に陣を張らせ、夜にたつてから、表と裏と兩方から一度に攻めかけて、倶利伽羅が谷へ敵を落し入れようと用意をした。――

そして味方の軍勢を七手に別け、自分自身は殊に精兵をすぐつて、一萬餘騎を從へ、埴生に陣を引いたのである―

ありけるが、是を聞きて、五萬騎にて國府を立ちて、砥竝山へ馳せ向ふ」

○白旗數多とのへて―平家物語「木曾の願書」に「まづ白旗三十流、黑坂の上に打立てたれば、案の如く平家これを見て、あはや源氏の大勢の向ひたるは、取り込められては叶ふまじ、爰は馬の草飼水便ともによげなり。暫く下り居て馬休めんとて、礪波山の山中、猿の馬場といふ所にぞおりゐたる」

○黑坂―礪波山中の坂路。長門本平家物語に「此砥竝山には三つの道候なり。北黑坂、中黑坂、南黑坂とて三つ候」

○屯させ―兵を集めて陣營を張らせること。

○大手搦手―大手は城砦の前門、搦手は城砦の後門。

○倶利伽羅が谷―礪波山中にあり。盛衰記に「抑も倶利伽羅が谷と云ふは、黑坂山の峠猿の馬場の東にあり其谷の中心に十餘丈の岩瀧あり、千歳の瀧といふ」

○勢を七手に別ちつつ―平家物語「篠合戰」に「義仲が軍の吉例なればとて、五萬騎を七手に分つ。……木曾我身一萬騎にて、小谷部の

る塙生に陣をぞ取りにける

と謠ひながら一同脇座より囃子座前にかけて弓形に居竝び、義仲は脇座にて床几にかゝる。

【三】

池田、舞臺の眞中に出で義仲に辭儀して、

池田「いかに申し上げ候。御諚の如く黑坂の上に。多くの白旗を立てて候へば。平家の勢これを見て。あはや源氏大勢向うたるは取りこめられては叶ふまじ。ここは便宜の所なりと。礪波山の山中。猿が馬場と申す所に陣を取つて候

義仲「それこそ義仲が願ふ處なれ。さあらば矢合は明日たるべし。構へて味方を戒め戰はずして。夜に入つて押し寄せうずるにて候。面々その由申し候へ

池田「畏つて候

義仲「いかに池田の次郎

池田「御前に候

ここまでの經過を述べる、(謠本にはこの詞白を義仲と臣下とで分擔してゐるが、解釋としては義仲一人とするのが適當であらう)

【三】

池田「申し上げます。仰せの通り、黑坂の上に澤山の白旗を立てましたところ、平家の軍勢がこれを見て、『さあ大變だ、源氏が大勢攻め寄せて來たわ。あれに取圍まれてはどうすることも出來ない、さうだ、こゝが都合のよい所だ』といつて、礪波山の山中の猿が馬場と申す所に陣をとりましてございます」

義仲「それこそ自分の思ふ壺だ。それならば開戰は明日にしよう。よく注意して味方の者にいひつけ、今日は戰はないで、夜になつてから押寄せることにしよう。皆の者にさう傳へてくれい」

池田「畏りました」

義仲「おい池田次郎」

池田「はい」

行教の衣に御影をうつされたのをいふ。などと諸說あつて決し難いが、第三說を採るべきでなからうか。
○三所―前掲八幡鎭座の三神。
○權扉―假の扉。佛が神に化現して垂跡すること。
○頻りの年よりこの方　數年以來。
○平相國―平淸盛。相國は太政大臣の唐名。
⦿曾祖父前の陸奥の守―義家をいふ。義家―爲義―義賢―義仲。
○名を宗廟の氏族に歸附す―宗廟は八幡宮を指す。八幡宮の御子孫卽ち源氏一族の爲に一身を捧ぐとの意。
○その後胤としてこの大功を起す―平家物語には「其後胤として（八幡宮に）首を傾けて年久し。今此大功を起す事」とある。本曲ではその一部を省いた爲に、文意が通じ難くなつてゐる。
○嬰兒の蠡を以て巨海を測り―自分の力を顧みないで大望を遂げようとする喩。漢書東方朔傳に「以レ管闚レ天、以レ蠡測レ海、以レ莛撞レ鐘」蠡は瓢であるとも又螺であるともいふ。
○蟷螂が斧を取つて隆車に向ふ―前項と同樣の喩。文

を測り。蟷螂が斧を取つて。隆車に向ふ如くなり。然れども君の爲國の爲にこれを起すのみなり。伏して願はくは。神明納受垂れ給ひ。勝つことを究めつつ。仇を四方に退け給へ壽永二年五月日と。高らかに讀み上げたり

　と文を讀み終りて拜す。

地『木曾殿を初めとして。その座にありし兵共。誠に文武の達者かなと。皆覺明をほめにけり

義仲『義仲上差拔き出だし（と背の矢を取出し）

地』これを願書に取り添へ て（義仲シテに矢を與へ）。內陣に納めよと。覺明に賜はれば。覺明これを捧げ持ち御前を立ちてゆしくも。八幡の宮に參りけり八幡の宮に參りけり

　シテ義仲の前に出て矢を受取り、文の上に載せて、後見座にくつろぐ。八幡宮に參詣の心。

【四】シテ、弓・文を後見に渡して、舞臺の眞中に出で、義仲に辭儀して、

赤兒が瓢で大海の水を汲み盡さうとし、かまきり蟲があの前足で勢のよい車の走るのを喰ひ止めようとするやうなもので、實に無謀な企だとは存じます。然し、大君の御爲、國家の爲に、この軍を起すのでございます。どうか神樣の御心に叶ひ、必勝を得て、敵を退けさせて下さいませ。

　壽永二年五月日――」

と高らかに讀み上げた。

これを聞いた義仲を初め、その座にあつた者は皆『實に文武二道に達した偉い者だ』と覺明を褒めた。

義仲は箙の上差の鏑矢を拔き出し、

義仲「これを願書に添へて、御神殿に納めよ」

と覺明に與へたので、覺明はこれを捧げ持つて、義仲の御前を立ち、雄々しいさまを以て、八幡宮に參つた。

【四】覺明は願書を神前に納めて、もとの陣へ歸つた體で、

選に「欲下以二蟷螂之斧一禦中隆車之隧上」。蟷螂はかまきり虫、隆車は勢ひよく走る車。
○神明―神に同じ。
○勝つことを究めつつ―平家物語に「勝つことを一時に決し」とある。
○上差―上差の矢の略。矢を箙に盛る時、普通の征矢の外に、箙の表に指し添へる鏑矢をいふ。鏑矢は矢の根の處を空虚にくつた木で作つた矢で、射る時音を立てゝ敵を恐れしめる用とす
○内陣―本殿の奥の神體を安置した所。
○ゆゆしくも―雄々しくも

【四】

シテ「いかに申し上げ候。御願書並に御上差の鏑八幡の宮に奉納仕りて候。又この莊の土民。軍の御門出を祝し。酒肴を奉りて候

義仲「かかるめでたき事こそなけれ。この度の軍に勝たんずる事必定なり。さらば軍の門出を祝ふべし。覺明酌に立ち候へ

シテ「畏つて候。『八幡の宮の神風に

と謠ひながら扇を開きて義仲に酌をし、もとの座に着く。

地『敵は木の葉と。散りぬべし

義仲「いかに覺明一さし舞ひ候へ

シテ「畏つて候

地『敵は木の葉と。散りぬべし

とシテ扇を開きて、

〔男舞〕

地『酒宴も既に半ばなりしに。酒宴も既に半ばなりしに不思議や八幡の方よりも（とシテ正面先を見上

覺明「申し上げます。御願書と御上差の鏑矢を八幡宮に奉納して參りました。それから又、この土地の者が軍の御門出をお祝ひして、酒肴を獻上して參りました」

義仲「こんなめでたいことはない。今度の軍は勝つに違ひない。それでは軍の門出を祝はう。覺明酌をしてくれい」

覺明「畏りました」

と酌をす。

覺明「――

『八幡の宮の神風に、敵は木の葉のやうに散つてしまふだらう』

と謠ふ。

義仲「おい覺明、一つ舞を舞へ」

覺明「畏りました。――

『敵は木の葉のやうに散つてしまふだらう』

と謠つて、

〔男舞〕

を舞ふ。

かうして、酒盛をしてゐる最中に、不思議や八幡宮の方から、山鳩が翼を並べて、味方の旗の上に飛び翔つて、神

○旗手―旗の上部。

げ）。山鳩翼を竝べつつ。味方の旗手に飛び翔り。納受のしるしを表しければ。木曾殿をはじめ（と一同正面に辭儀）。軍兵ども。皆一同に伏し拜み。いよいよ加護をぞ願ひける。さてこそ平家の大勢を（とシテ立ちて舞ひ）。倶利伽羅が谷に。追ひ落し。ただ一戰に。勝利を得しも。まことに八幡の。神力なり

と常座にて留拍子を踏み、義仲に辭儀。義仲以下順次退場。

の納受遊ばされた吉兆を示したので、義仲を始め軍兵どもは皆一所に神を伏し拜んで、愈〻神の御加護を祈つたのである。

かくて、平家の大勢を倶利伽羅が谷に追ひ落して、たゞ一度の戰に大勝利を得たのも、實に八幡大菩薩の神力によるのである。

〔考　異〕

古謠本

明暦三年外百番及び元祿八年外百番の〔木曾願書〕を現行曲に比べると、主題は同樣であるが、文章は願書が同一であり、第一節の前半が略同じである外は、全部別趣のもので、古謠本兩本はともに、役割を、シテ木曾義仲、ツレ覺明、ツレ義仲從兵、トモ同上、狂言里人、ワキ今井兼平とし、卽ち古謠本には、現行曲にないワキ兼平があり、シテ覺明とツレ義仲とが逆になり、從つて願書も義仲自身が讀み上げることになり、覺明の男舞はなくて、ワキ兼平がカケリを演じ、勇武な奮闘の樣を示すことになつてゐる。現行曲は元祿以後に於てこれを改作したものであらう。

砧（きぬた）

觀（寶 剛 喜）

解説

【能柄】四番目 夢幻的劇能
【人物】前ワキ 蘆屋何某、前ツレ 侍女夕霧、
前シテ 蘆屋何某妻、狂言 蘆屋の臣、
後ワキ 蘆屋何某、ワキツレ 同太刀持、
後シテ 蘆屋妻の亡靈
【所】筑前國 蘆屋
【時】（九月）
【異稱】（碪）とも書く。
【作者】能本作者註文に世阿彌の作とす。世子六十以後申樂談儀に、
静かなりし夜、砧の能の節を聞きしに、かやうの能の味ひは、末
の世に知る人あるまじければ、書き置くもものくさき由、物語せ
られしなり。
といふ。糺河原勸進猿樂記に寛正五年四月十日音阿彌の演じたこと、
親元日記に寛正六年二月二十八日仙洞御所で觀世の勤めたこと亦出

てゐる。

【梗概】九州蘆屋何某は自訴の事があつて三年前に上京したが、餘りに長くなつたので、侍女夕霧を國に歸して、この秋には必ず自分も歸るといひ送つた。國許の妻は夫を戀ひ慕ひ、夕霧を相手にして砧を打ち、淋しい心を慰めてゐたが、この暮にも歸れないといふ使が來たので、妻は夫が全く心變りしたものと恨んで、狂ひ死にに死んでしまつた。夫は歸國して妻の死を憐み、梓弓にかけて亡靈を引寄せると、妻の亡靈が現れ出て、夫の不實を恨んだが、法華讀誦の功力によつて成佛した。

【出典】主題についての典據は見當らない。

【概評】この曲に就て、世阿彌が夙く「かやうの能の味ひは、末の世に知る人あるまじ」といひ、現在も重習として大切な曲柄に取扱つてゐるやうに、普通の世話物とは違つた、情趣の深いものに感じられる。その味ひは勿論第三節第四節の、砧に寄せて夫を戀慕するところにあるが、全體の文段の推移も漸層法の妙を極めてゐる。たゞ第一節及び第八節即ち曲の首尾がやゝ妥當性を缺いてゐるやうに思はれる。それで、喜多流では、第一節の前ワキを省き、ツレの次第・名乘・道行といふ普通の脚色法に從つて曲を展開して居るが、やはりそれでは曲の皮肉味がない。前ワキの名乘を濟ませて、それからツレの次第に移ると進行が滑かのやうであるが、それではまた冗漫に流れ易い。結局原文のやうな行き方がこの曲の特殊な持ち味を見せてゐるのであらう。第八節キリのやうな曲の結末を叙べる叙事文は、語り物の影響を受けた謠曲文に屢々繰返されてゐる所であるが、謠曲を一種の劇として眺めようとする者にとつては、決して喜ましい行文ではない。本曲に於ても亦唐突の感を起させてゐるのであるが、たゞこの曲のシテは夫を戀慕する餘り命を失つたもので、その爲に墮獄の苦を受けてゐることは、戀愛否定論者の謠曲作者としてあり勝ちな構想であると承知しながらも、正當な夫婦愛をかくまで拒否するのは、餘りに極端であるといふ不滿を起させる。其際突如局面一轉して、成佛の喜びを告げるのは、不滿な感を持つた觀客に唐突の愉快を覺えしめる。殊にこれを晴れやかな舞に現した時に、一層の愉快を覺えしめる。こゝに本曲の不自然なキリが却つて意想外の效果を擧げてゐるのである。かうして本曲は全體を通じて皮肉な興味と優雅な情味とを兼ね備へた曲であるといひ得るのである。

【一】　前段

舞臺は京都蘆屋何某假住の宿。ワキ蘆屋何某、ツレ侍女夕霧ともに登場。

【一】　名乘笛にて、ワキ蘆屋何某、着附段熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束、ツレ夕霧、面連面・鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・唐織着流・扇の裝束にて、ツレは仕手柱際に坐し、ワキは眞中に出て、

【一】

○蘆屋の何某―蘆屋は筑前國遠賀郡にある。何某はその地の領主何某といふ意。
○自訴―他人に依賴しないで、自分で訴へ出ること。
○心もとなく―氣がかりに思ふ。
○この程の―この道行、「熊野」のと同文。
○日も添ひて―日數を經て、日もは衣の緣語紐にいひかけた。

ワキ「これは九州蘆屋の何某にて候。われ自訴の事あるにより在京仕りて候。假初の在京と存じ候へども。當年三年になりて候。餘りに古里の事心もとなく候程に。召使ひ候夕霧と申す女を下さばやと思ひ候

といひて、ツレに向ひ、

ワキ「いかに夕霧。あまりに古里心もとなく候程に。おことを下し候べし。この年の暮には必ず下るべき由心得て申し候へ

ツレ「さらばやがて下り候べし。必ずこの年の暮には御下りあらうずるにて候

ワキ幕に入る。ツレ立ちて、

ツレ道行「この程の。旅の衣の日も添ひて。旅の衣の日も添ひて。幾夕暮の宿ならん。夢も數添ふ假枕。明かし暮らして程もなく。蘆屋の里に着きにけり蘆屋の里に着きにけり

蘆屋「私は九州蘆屋の領主ですが、自分で訴訟しなければならないことがあつて、京都へ上り、暫くの積りでゐたところが、はや三年になりました。それで、故鄉の事があまり氣がかりだから、召使の夕霧を國へ返さうと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、夕霧に向つて、

蘆屋「夕霧、故鄉の事があまり氣がかりだから、お前を國へ歸さう。この年の暮には自分も必ず歸るからと、よく氣をつけていつてくれ」

夕霧「それではすぐ國へ下りませう。この年の暮には是非御歸國なさいますやうに」

蘆屋退場し

夕霧にや[illegible]旅立つ[illegible]態で、

夕霧「この間から、旅の日數も重なつて、幾日旅宿に旅の夢を結んだことか、隨分の日數を明かし暮らして行くうちに、間もなく蘆屋の里に着いた

と長旅の様を述べてゐるうちに歸國した態で、舞臺は筑前國蘆屋の里となる。

「明かし暮らして」と左の方に向きて二三足出で、またもとへ歸りて、蘆屋に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

ツレ「急ぎ候程に。蘆屋の里に着きて候。やがて案内を申さうずるにて候

橋懸一の松へ出で幕に向ひて、

ツレ「いかに誰か御入り候。都より夕霧が參りたる由御申し候へ

といひて後見座にくつろぐ。

【三】

アシラヒの囃子にて、シテ蘆屋の妻、面深井・鬘・鬘帶・襟白・着附摺箔・無色唐織着流・扇の裝束にて出で、三の松にて正面の方に向き、

シテサシ「それ鴛鴦の衾の下には。立ち去る思ひを悲しみ。比目の枕の上には波を隔つる愁ひあり。ましてや深き妹背の中。同じ世をだに忍ぶ草。われは忘れぬ音を泣きて。袖に餘れる涙の雨の。晴間稀なる心かな

ツレ一の松に出てシテの方に向き、

ツレ「夕霧が參りたる由それそれ御申し候へ

【三】

○それ鴛鴦の―鴛鴦は雌雄の睦しいもので、共寢してゐても、立ち離れる時の悲しみを思ひ煩ふとの意。

○比目の枕―比目は雌雄常に連れ立つてゐるといはれてゐる。ひらめは枕を並べて寢てゐても、波に隔てられはしないかと心配するとの意。この句「弱法師」にも見ゆ。

○同じ世をだに―夫婦は二世までの契り深いものであるのに、未來は愚か、現世に於てさへ離れ〳〵になつて思ひ亂れる。

夕霧「道を急いだので、思ひの外早く蘆屋の里に着きました。すぐ案内を申しませう」

と戸口に立つた心で、幕に向ひ、

夕霧「どなたかお出でになりませんか。都から夕霧が歸つて參りました。どうぞ奥へお通じ下さい」

【三】

橋懸に蘆屋の室内の態で、シテ蘆屋何某の妻が登場。淋しい思ひをしてゐる態で、

妻「夫婦仲のよいをしどりは、共寢をしてゐる時でも、別れる時の悲しさを思ひ煩ひ、ひらめは枕を並べてゐても、波の爲に隔てられはしないかと案じてゐるといふことだ。まして、人間の夫婦は二世の契りを結んでゐるものだのに、自分は來世は愚か、この世でさへ夫に別れ、夫を慕ひ泣いては、涙に濡れ、袖の乾く時もないことだ」

と悲しい境遇を獨言する。夕霧は内から返事がないので、再び聲をかけて、

夕霧「夕霧が參りました。どうぞお取次を願ひます」

シテ「なに夕霧と申すか。人までもあるまじ此方へ來り候へ

二人とも舞臺に入り、シテは地謠座の前に、ツレは常座に向合ひて坐し、

シテ「いかに夕霧珍しながら恨めしや。人こそ變り果て給ふとも。風の行方の便りにも。などや音信なかりけるぞ

ツレ「さん候とくにも參りたくは候ひつれども。御宮づかへの隙もなくて。心より外に三年まで、都にこそは候ひしが

シテ「なに都住居を心の外とや。思ひやれげには都の花盛り。慰み多き折々にだに。憂きは心の習ひぞかし

地下歌「鄙の住居に秋の暮。人目も草も枯れ枯れの。契りも絶え果てぬ何を頼まん身の行方。上歌「三年の秋の夢ならば。三年の秋の夢ならば。憂

○人までもあるまじ―取次の者を經るまでもない。
○珍しながら―久振りに會つたのは嬉しいけれど。
○人こそ變り果て―人は夫たとひ夫の心は變つてしまつても、そなたまで心變りしたのが恨めしいとの意。
○風の行方の―はかない便りの喩。
○御宮づかへ―御奉公。
○心より外に―心ならずも心にかゝりながらも。
○思ひやれ―私の身上を察してくれ。
○憂きは心の習ひ―慰みの多い時でも、辛い思ひをすることのあるのが、一般の人心である。
○秋の暮―田舍住ひに飽きるを秋にいひかけた。
○人目も草も―古今集源宗于の歌「山里は冬ぞさみしさまさりける人目も草もかれぬと思へば」を引いた。人の訪ねくる者もなく、草も枯れ果てるといふ意を、ここでは夫婦の契の絶えることに兼ねて用ゐた。
○三年の秋の夢ならば―夫に別れた後三年の間、苦しい思ひをしたことが夢であるならば、それ以前の事もすべて夢として覺め消えてしまへばよいのに。

妻「なに夕霧といふのか。取次までもないこちらへお入りなさい」

この室へ入れた態で、二人とも舞臺に入り、即ち舞臺は座敷の一室となる。

妻「夕霧、久し振りに會つたのは嬉しいが、でも、恨めしいぞ。たとひ夫のお心はすつかりお變りになつてしまつたにしても、何故そなたまでが、風の便りにも音信をしてくれなかつたのだ」

夕霧「もつと早く參りたいとは存じてゐましたが、御用が忙しく、心ならずも三年も都にゐた事でございます」

妻「なに、心ならずも都住居をしたといふのか。少しはこちらの事も察しておくれ。都では花の盛りだとか何だとか、色々慰み事の多いものだが、それでも、人といふものは、そのやうに慰みの多い中にもやはり辛い思ひのあるものだといふのに、こちらの田舍住居では、何の慰み事もなく、いつも秋の暮と同様で、外の景色は淋しく、勿論訪ねてくれる人とてになく、その上、夫との契りが絶え果てゝしまつては、この末何を頼りに生きて行くことだらう。あゝ、この辛い思ひをした三年の歳月が

きはそのまま覺めもせで。思出は身に殘り昔は變り跡もなしげにや僞りの。なき世なりせば如何ばかり。人の言の葉嬉しからん。愚かの心やな愚かなりける賴みかな

　遠く砧の音の聞ゆる心にて、シテ面を伏せ、やがて面を上げて、

【三】

シテ「あら不思議や。何やらんあなたに當つて物音の聞え候。あれは何にて候ぞ

ツレ「あれは里人の砧擣つ音にて候

シテ「げにやわが身の憂きままに。古事の思ひ出でられて候ぞや。唐土に蘇武といひし人。胡國とやらんに捨て置かれしに。古里に留め置きし妻や子。夜寒の寢覺を思ひやり。高樓に上つて砧を擣つ。志の末通りけるか。萬里の外なる蘇武が旅寢に。故鄕の砧聞えしとなり。わらはも思ひや慰むと。とてもさみしき吳織。あやの衣

○憂きはそのまま覺めもせで—情ない辛いことには、すべての事が覺め消えないで。
○思出—夫の優しかつた昔の思出。
○昔—昔優しかつた頃の夫の心。
○僞りのなき世なりせば如何ばかり—古今集讀人知らずの歌。下句は「人の言の葉うれしからまし」人の言葉には僞が多くあてにならないから悲しいとの意。
○愚かなりける賴みかな—あてにならないことを賴みにしたのは、愚かであつた。
【三】
○砧—布を臺の上に置き槌で擣ち和らげる具。
○蘇武—前漢武帝の時、匈奴に使して捕へられ、十九年の後、漸く國に歸ることが出來た。漢書蘇武傳に、「蘇武字子卿、杜陵人、武帝時以二中郎將一持レ節使二匈奴一、單于欲レ降レ之、迺幽レ武、置二大窖中一、絕不二飮食一、……昭帝卽位數年、匈奴與レ漢和親、漢求二武等一、匈奴詭言二武死一、常惠敎二漢使者一言、天子射二上林中一、得レ雁、足有レ係二帛書一、在二某澤中一、由レ是得レ還」
○胡國—夷狄の國。匈奴を指していふ。

夢ならば、一層すべてが夢となつてしまへばよいものを、辛いことにはただ昔の思出だけが殘つて、あの樂しかつた樣子は全くなくなつてしまつたのだ。ほんとに、人の言葉にうそのないものであつたならば、約束事がどんなに嬉しからうに、うそとは知らず、あだな約束を信じてゐたのは、ほんとに馬鹿なことであつた」

　折柄遠くに砧の音が聞える。

【三】

妻「あら變だ。何やら向ふの方に物音が聞えるが、あれは何であらう」

夕霧「あれは里人が砧をうつ音でございます」

妻「なるほど砧の音なのか。ほんに、わが身の辛いにつけて、昔の話を思ひ出した。支那の蘇武といふ人が、胡國とかいふ所へ捨て置かれたところ、故鄕に殘して置いた妻や子が、さぞ夫はこの夜寒に寢られなくて苦しんで居られる事だらうと案じ、溫い着物を着せてあげたいものだと思つて、高い所に上つて砧を打つた。すると、その親切の志が通じたものか、萬里を隔てた所にゐる夫蘇武の夢に、故鄕の砧が聞えたといふことだ。私も心が慰むかも知れないから、とても寂しくてし

○古里に留め置きし―和漢朗詠集公乘億の長安八月十五夜賦に、蘇武の妻が衣を擣つて夫を待つ心を叙して、「擣レ衣砧上、俄添二怨別之聲一」

○呉織―さみしき暮といひかけて、呉織漢織の成語によつて、綾の枕詞とした。

【四】

○馴れて臥す猪の床―共に相馴れて臥す床の意。「臥す猪の床」はたゞ寢床の意。後拾遺集和泉式部の歌「刈藻かき臥す猪の床の寢を安みさこそ寢ざらめかゝらずもがな」など古歌に多く詠まれてゐる。

○涙かたしく―涙に濡れた片袖を下に敷いて獨寢する意。新古今集藤原良經の歌に「きりぎりす鳴くや霜夜のさ筵に衣かたしき獨りかも寢む」小筵の小は接頭語。

○思ひをのぶる―氣を晴らす。「のぶる」は筵の緣語。

○夕霧立ち―便りぞといふを夕にいひかけ、霧の緣で立つと續けた。

を砧に擣ちて。心を慰まばやと思ひ候

ツレ「いや砧などは賤しき者の業にてこそ候へ。さりながら御心慰めん爲にて候はば。砧をこしらへて參らせ候べし

といひて、二人とも立ち、ツレは地謠座の前に行きて坐し、シテは後見座にくつろぎて唐織の右肩を脱ぐ。この間にツレのこしらへたる心にて、後見砧の作物を持ち出して脇座の前に置く。シテ立ちて常座に出で、

【四】

シテ「いざいざ砧擣たんとて。馴れて臥す猪の床の上

と靜かに作物の前へ行き、ツレも立ちて、

ツレ『涙かたしく小筵に

シテ『思ひをのぶる便りぞと

ツレ『夕霧立ち寄り諸共に

シテ『恨みの砧

ツレ『擣つとかや

と、ツレは脇座、シテは砧を隔ててその前に向合ひて下に居る。

やうのないこの夕暮、綾の衣を砧にうつて、心を慰めませう」

夕霧「いえ〳〵、砧などは賤しい者のする仕事でございます。……でも、御心の慰めになるならば、砧をこしらへて差上げませう」

【四】

砧の用意が出來たので、

妻「さあ砧をうたう。夫婦は一所に樂しく暮らすものだのに、自分は涙ながらに獨寢をして淋しい思ひをしてゐることだ。その氣晴らしにしませう」

と夕霧と一所に、怨めしい思ひをしながら、砧を打つたのである。

○衣に落つる松の聲―松風が砧の邊に吹いて來て、衣擣つ音に聲を合せること。「落つる」「落ちて」と時を二段に分けてゐるが、古本ではいひわけてゐない。
○稀なる中の秋風―音信の稀な夫婦仲と、中秋の風と、兩方に兼ねて用ゐた。
○遠里人―夫をさしていふ。夫もこの月を眺めてゐるのであらうとの意。
○誰が世と月は―世は夫婦仲。月はたゞ心なく照らすだけで、誰の夫婦仲にこのやうな物思ひをしてゐやうなどと尋ねて慰めてくれはしない。
○面白の折から―心を轉じて月に興ずるのである。
○見ぬ山風を送り來て―淋しい牡鹿の聲と共に、目に見えぬ山風を送つて來て。
○梢はいづれ―どの梢からか一葉散り落ちる。
○軒の忍に―軒に生えた忍草に月影が映じて。
○露の玉簾、簾かゝる―露の玉簾かゝる、かゝる身といひ續けた。
○宮漏高く立ちて―新撰朗詠集具平親王の詩句―宮漏高低風北送、隣砧緩急月西傾―を引いた。宮漏は宮中に設けられた漏刻といふ水時計。

地次第『衣に落つる松の聲。衣に落ちて松の聲夜寒を風や知らすらん

地取にツレは地謡座前に歸りて坐し、シテは常座に行きて、

シテ一聲『音づれの。稀なる中の秋風に

地『憂きを知らする。夕かな

シテ『遠里人も眺むらん（と右の方を遠く見やり）

地『誰が世と月は。よも訪はじ（と大小前へ出で）

シテサシ『面白の折からや。頃しも秋の夕つ方

地『牡鹿の聲も心凄く。見ぬ山風を送り來て。梢はいづれ一葉散る。空すさましき月影の軒の忍にうつろひて

シテ『露の玉簾。かかる身の

地『思ひをのぶる。夜すがらかな（と面を曇らし）。宮漏高く立ちて（と面を上げ）。風北にめぐり

シテ『隣砧緩く急にして。月西に流る（と橋懸の方に月を眺め）

すると、衣を打つ音と、秋風の聲とが相交つて聞え、このやうな夜風の吹くにつけても、愈〻寒い寂しい思ひがするのである。

妻「このやうな秋風の絶え〴〵に吹く夕暮は、夫から便りもなくて悲しい思ひをしてゐる私に、一層辛い思ひをさせることだ」

折柄月の空に上るのを見て、

妻「おゝ、この月を夫も遠くで眺めて居られることだらう。けれど、あの月は、たゞ心なく照るだけで、夫に離れて淋しい思ひをしてゐる者に同情はしてくれないのだ。――

でも、やはり秋の夕暮は面白いものだ。牡鹿の鳴く淋しい聲が遠くの山風と一所に聞えて來て、とこの梢からか木の葉が一つ散り落ちる。もの淋しい月影が軒の忍草に映つて、草の露がほと〳〵と落ちる。私のやうな者の慰めには、ほんとに適はしい景色だ。『御所の水時計が高い所にかかつて居り、風は北の方へ吹いて行く。隣の砧うつ音は或は高く或は低く聞え、月は西の方へ傾いて行く』といふ古詩のやうに、月が次第に西に傾いて行く。西

○間遠の衣―織目の粗い布の衣。
○嵐の音を殘すなよ―松の枝に嵐を留めないで、砧の音を夫の方へ吹き送れ。
○その夢を破るな―わが心を夫が夢に見るならば、その夢を破るまでには強く吹くな。
○誰か來ても訪ふべき―夢が破れゝば、夫がわが心を察しないで歸つて來ないとの意と、破れ衣は誰も着ないとの意と、二意を兼ねた。
○衣は裁ちもかへなん―夫の契りは取返し難いとの意を含めていふ。
○夏衣―かへ、なんのなの音を重ね、夏衣薄き、薄き契りといひ續けた。
○長き夜の―命は長き、長き夜とつゞけた。夏衣薄きと秋の夜長と相對す。
○七夕の契り―毎年七月七日の夜、牽牛織女の二星が天の河を渡つて一年に一夜の契りを結ぶといふ故事を夫に逢ふ事の稀な例に引いたのである。
○狩衣―假の逢瀨といふ意を狩衣にいひかけた。狩衣は衣の緣で出しただけで意味はない。
○浮舟の―かひなき憂き契

地蘇武が旅寢は北の國。これは東の空なれば。西より來る秋の風の。吹き送れと間遠の、衣擣たうよ（と西幕の方を見てツレに詰足す）

地古里の。軒端の松も心せよ。おのが枝々に。嵐の音を殘すなよ。今の砧の（作物を見）、聲添へて君がそなたに吹けや風（遠く見やり）。餘りに吹きて松風よ。わが心。通ひて人に見ゆならば。その夢を破るな破れて後はこの衣誰か來ても訪ふべき（と作物を見）、來て訪ふならばいつまでも。衣は裁ちもかへなん。夏衣薄き契りはいまはしや。君が命は長き夜の。月にはとても寢られぬに（正面に出て月を見）いざいざ、衣擣たうよ（ツレに向き）。かの七夕の契りには。一夜ばかりの狩衣。天の河波立ち隔て。逢瀨かひなき浮舟の。梶の葉もろき露涙。二つの袖やしをるらん（大廻りし）。水陰草な

といへば、蘇武が旅をしたのは北の國だが、わが夫のいらつしやる所は東の方だから、この西から吹いて來る秋風が、東の方へ吹き送つてくれるとよい。さあ粗末な衣を擣つて、砧の音を夫に聞かせませう。

この軒端の松もよく氣をつけて、松の枝に嵐の音を殘さないで、この砧の音を殘らず吹き送つておくれ。風よ、戀しい夫の方へ吹いて行つておくれ。けれど餘り烈しくは吹くのではないよ。何故といへば、私の心が通じて夫の夢に見えた時、その夢を破つては大變だから。夢が破れて、私の心が通じなかつたならば、夫は歸つて來て下さりはしないから。さうだ、夢だけでない、着物でも破れれば誰も着はしないのだ。いや着物の方は、歸つてさへ下されば、新しく作りもしようが、夫の歸つて下さる望みがなく、夫婦の緣の薄いのが恨めしい。いや／＼夫を恨んでゐてはいけない。どうぞ長生きしてほしい。こんな愚痴をいつてゐるよりは、この秋の夜長に、寢られないまゝ砧をうつて夫のお歸りを待たう。

夫婦の緣の薄いことをいへば、あの七夕は一年に一夜の契りだけで、いつも夫の

りの「憂き」を浮にいひかけ、船の楫とつゞけて梶を呼び出した。
○梶の葉—七夕の祭に梶の葉に歌を書きつけるので、こゝに出したのである。後拾遺集上總乳母の歌「天の河とわたる船の梶の葉に思ふことをも書きつくるかな」など詠まる。
○二つの袖—牽牛織女二星の袖。
○水陰草—水に流れる草。二星のしをれた袖を、妻のしをれた袖に取做し、わがしをれた袖が水陰草であるならば、これを夫の方へ打寄せよといふのである。
○うたかた—泡沫。波の泡よ、水陰草を夫の方へ打寄せよと命令するのである。
○文月—七月の雅名。
○八月九月—和漢朗詠集白樂天の聞夜砧の詩句「八月九月正長夜、千聲萬聲無二止時一」を引いた。
○憂きを人に知らせばや—秋の長い夜、寢られもせず、千聲萬聲の砧の聲を聞いて悲しい物思ひをしてゐるこのつらさを夫に知らせたい
○交りて落つる—夜嵐の聲蟲の音、露の雫の落ちる音、涙の落ちる音が砧の音に交つて聞えるのである。

らば。波うち寄せようたかた
シテ「文月七日の曉や
地「八月九月。げに正に長き夜。千聲萬聲の憂きを人に知らせばや。月の色風の氣色。影に置く霜までも心凄き折節に。砧の音。夜嵐悲しみの聲蟲の音交りて落つる露涙。ほろほろはらはらはらと。いづれ砧の音やらん

「夜嵐悲しみの聲」に、しをりながら作物の前へ出で、シテと向合ひて下に居、「ほろほろはらはら」と扇にて互に砧を擣つ形をし、「いづれ砧の音やらん」と面を伏せて聞く。

【五】

ツレ立ちて眞中に出で、シテに向ひ下に居て、

ツレ「いかに申し候。都より人の參りて候が。この年の暮にも御下りあるまじきにて候
シテ『恨めしやせめては年の暮をこそ。僞りながら待ちつるに。さてははや眞に變り果て給ふぞや（としをり）

河に隔てられ、逢ふことが出來ないで、牽牛も織女も涙に袖を濡らしてゐることだらう。袖を濡らすのは私も同じことだ。この悲しい思ひを、波が水草を打寄せるやうに、夫に通じてくれるとよいのだが。……七月七日、七夕の祭も過ぎて、八月九月となれば、一年中で一等夜の長い時だが、その夜長に千々の思ひに悲しんでゐる私の心を夫にお知らせしたいものだ。かうして、月の色も風の氣色も、草蔭に置く霜も、すべてがもの凄い時、砧をうつてゐると、夜嵐の聲、悲しい泣き聲、蟲の音、それに交つて落ちる露の音、涙の雫、いづれも、ほろ〱はら〱と音を立てゝ、どれが砧の音やら差別もつかない」

かうして、ひたすら夫を戀ひ慕つてゐるところへ

【五】

夕霧「都から使の者が參りましたが、この年の暮にもお歸りにならないとの事でございます」
妻「あゝうらめしい。せめてこの年の暮にはお歸りになるかと、うそとは思ひながらもお待ちしてゐたのに、それでは、全く心變りをしてしまはれたのか。あゝもう思ふまいと諦める力もなくなつてしま

地　思はじと思ふ心も弱るかな。聲も枯野の蟲の音の。亂るる草の花心。風狂じたる心地して。病の床に伏し沈み遂に空しくなりにけり　遂に空しくなりにけり

地謡に、ツレシテの後へ行き抱へるやうにして看病の心。「聲も枯野の」に二人とも立ち、シテ病氣の心にて靜かに中入。ツレ後よりシテに手を添へて送りながら幕に入る。

つた」と、すつかり力を落して、狂氣のやうになつて、病氣になり、とう／＼妻は死んでしまつた。

【五】○偽りながら—偽りと思ひながらも。○思はじと思ふ心—このやうな物思ひをすまいと心で制してゐるが、その制する力も弱つて。千載集藤原俊成の歌「さりともと思ふ心も蟲の音も弱りはてぬる秋の暮かな」を引いた。○花心—秋の草花の風に亂れるのを、妻の心のもの狂ほしくなつたことに喩へていふ。

【間】○御心をいさめ—お心を勵まし。

【間】　狂言蘆屋の臣、着附段熨斗目・長上下・腰帶・扇・小刀の裝束にて、名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。蘆屋の何某殿に仕へ申す者にて候。扨も頼み奉る御方は。訴訟の事あつて都へ御上りあり。三年に罷りなり候間。餘り故郷の事心許なく思し召し。御下りありたき由に候へども。とてもの事に訴訟御叶へあつて御下向あるべしとて。夕霧と申す召使の女房を先へ御下しなされ。この年の暮には御下向あるべしとの御事にて候へば。こなたにも御悦びにて候。誠に三年まで御留守の事なれば。御待ち兼ねなさるるは御尤もにて候。されば年の暮と申しても程なき事なれども。少しの間も忘れさせらるる事のなければ。せめての御慰みと思し召し。里にて賤の女の翫ぶ砧を御擣ちあつて。明かし暮らし給ふを。夕霧も御痛はしく思ひ。御側を離れず砧の御相手を致し。御心をいさめ候が。都よりこの暮にも御歸りなき由申し參り候へば。女性のはかなさは。扨は御心變り御下りなきと思し召し。現なき事ばかり仰せられ。終に空しくなり給ひて候。御内の者は申すに及ばず。落涙致さぬ者はなく候。さるによつて蘆屋殿にもこの由を御聞きあつて。早々に御下りあり御歎き限りなく候へども。返らぬ事なれば梓に御掛けなされ。今はの時まで手馴れ給ひたる事なれ

ば。砧をそのまま御手向なされ。御幣ひあるべきとの御事にて候。即ち所の者にも罷り出で。御幣ひにあひ候樣にとの御事にて候間。皆々罷り出で御幣ひにあひ候へ。その分心得候へ〳〵

といひて幕に入る。

【六】

後ワキ蘆屋某、前の裝束に掛絡をかけ數珠を持ち、ワキヅレ從者、着附段熨斗目・素袍上下の裝束にて太刀を持ち、ワキは舞臺正面先に出でて下に居り、ワキヅレはワキの後に下に居て、

ワキ「無慙やな三年過ぎぬる事を恨み。引き別れにし妻琴の。つひの別れとなりけるぞや

ワキワキヅレ上歌（待謠）「さきだたぬ。悔の八千度百夜草。悔の八千度百夜草の。蔭よりも二度歸りくる道と聞くからに。梓の弓の末弭に。言葉をかはす、あはれさよ言葉をかはすあはれさよ

とワキ合掌して脇座に行き下に居る。ワキヅレもその次に坐す。

【七】

出端の囃子にて、後ジテ妻の亡靈、面泥眼・鬘・鬘帶・摺箔・着附摺箔・白綾壺折・淺黃大口・腰帶・扇の裝束にて杖をつきて出で、橋懸一の松にて正面に向き、

後ジテ「三瀬川沈み。果てにし。うたかたの。あはれはかなき身の行方かな。標梅花の光を竝べては

【六】　後段

ワキ蘆屋何某歸國して、わが家に居る體で登場。

蘆屋「あゝ可哀想なことをした。三年の間別れたまゝで過したのを怨んで、とうとう死んでしまつたのか。後悔先に立たず、今更是非のない事ながら、梓弓の絃を鳴らせば、死人が草葉の蔭からこの世へ歸つてくるといふことだから、梓弓で亡き妻に詞を交はさう。あゝ可哀想なことをした」

【七】

後ジテ妻の亡靈、梓弓に引かれて現れて來た體で登場。

亡妻「とう〳〵三途の川に沈んでしまつた。思へば不仕合な果報であつた。世間の睦しい夫婦といふものは、この世

【六】○無慙やな—いたはしや。むごたらしいことだ。○妻琴—琴の異稱。こゝでは妻の意に取做し、琴の縁で、彈きにかけて「引き別れ」の詞を上に置いた。○さきだたぬ悔の—古今集閑院の歌「さきだたぬ悔の八千度悲しきは流るゝ水のかへり來ぬなり」を借りた。○百夜草—菊又は露草の異名であるといふ。八千度を承けて百といひ、草より蔭とつゞけた。○梓の弓—梓弓の弦を鳴らして死靈を呼び寄せると、その靈がこの世に歸つて來て、現世の人と言葉を交はすといふ。また生靈を呼び寄せるにも用ゐた。「葵上」參照。

【七】○三瀬川—冥途にある三途の川。○うたかたの—川の縁で泡沫を出し、泡の音を重ねて「あはれ」と續けた。○標梅—標はしるし。詩經召南に「標有梅」と題する詩三章があつて、男女の婚期に達した事を述べてゐるのによつて、新夫婦の意に用ゐた。

（と舞臺に進み）。娑婆の春をあらはし（と常座に立ち）
地『跡のしるべの燈火は（と幕を見）
シテ『眞如の秋の。月を見する。さりながらわれは邪婬の業深き。思ひの煙の立居だに。安からざりし報いの罪の。亂るゝ心のいとせめて。獄卒阿防羅刹の。笞の數の隙もなく。うてやうてやと。報いの砧。恨めしかりける（ワキへ向き）。因果の妄執（としをる）
地「因果の妄執の思ひの涙。砧にかかれば。涙は却つて。火焰となつて（としをりながら正面に出で）。胸の煙の焰にむせべば（と杖を胸に當て）。叫べど聲が出でばこそ。砧も音なく（耳を澄まし）。松風も聞えず（橋懸の松を見やり）。呵責の聲のみ。恐ろしや

と杖をすてて後へ下り、兩手を耳に當てて坐す。

地上歌「羊の歩み隙の駒（と立上り）。羊の歩み隙の駒。

では春の光のやうに樂しく暮らし、死んだ後は、後世の回向を受けて、秋の月のやうに迷ふことなく成佛するものだが、私は夫を戀慕する心が深く、暫くの間も安らかな心を持たなかつた報で、その亂れ心を責められて、地獄の鬼阿防羅刹が砧をうつやうに絶えず私を鞭打つて苦しめる。あゝ生前の妄執が恨めしい。――

生前の戀慕妄執を悲しんで、泣く涙が砧にかゝると、その涙は火焰となつて、胸にむせぶので、いくら叫んでも聲が出ない。聲が出ないばかりか、砧の音も松風の聲も聞えず、たゞ聞えるのは鬼に責められる聲だけだ。あゝあの聲の恐ろしいこと。――

人は遲かれ早かれ六道の一に落ち、暫くの

○跡のしるべの―後生回向の。
○眞如の秋の月―悟りの心に喩へていふ。
○邪婬の業―戀慕のために迷つた罪業。
○思ひの煙の―思ひのひを火に寄せて煙といひ、煙の立つといひかけて次句に續けた。
○亂るゝ心の―罪の身といひかけて「みだるる」といひ亂るゝ絲の絲で、いとせめてと續けた。
○獄卒―地獄で罪人を呵責する役を勤めるもの。
○阿防羅刹―獄卒の名。
○報いの砧―前世の報の來ぬるを砧にいひかけた。
○因果の妄執―因果は前世の業因により、後にそれに相應した果報を受けること。こゝでは戀慕妄執の業因によつて呵責を受ける意。
○羊の歩み―屠所に引かれる羊の歩み。物の進みの遲い喩。摩耶經の偈に「譬如下栴陀羅驅レ羊就二屠處一、歩々近中死地上人命亦如レ是」
○隙の駒―物の進みの早い喩。史記に「人生二一世間一、如二白駒過レ隙耳」

○六つの道—衆生の生死流轉する六の世界、地獄・餓鬼畜生・修羅・人間・天上をいふ。
○因果の小車—一切の事、業因果報の廻り廻るを車に喩へていふ。
○火宅—不安な生死の迷界を火に包まれた家に喩へた語。法華經譬喩品に「三界無レ安猶如二火宅一、衆苦充滿甚可二怖畏一」
○生死の海—生死の苦の際涯ないことを海に喩へた語
○葛の葉—葛の葉は風の吹く毎にうら返つて裏を見せるので、裏見にかけて恨みの序に用ゐなれた語。
○二世—諺に「夫婦の契りは二世」といふ。二世は現世と來世。
○末の松山—陸前の名所。古今集の「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波も越えなむ」など、波と取合せて、男女の中を契る歌などに屢々詠まれてゐるので、波の緣で「かけし」「あだ波」といつたのである
○鳥てふ—萬葉集東歌「鳥とふおほをそ鳥のまさでにも來まさぬ君をころくとぞなく」を引いた。原歌は、鳥といふ大うそつきの鳥が君の來られもしないのに、

移り行くなる六つの道。因果の小車の火宅の門を出でざれば。廻り廻れども生死の海は離るまじやあぢきなの浮世や・

シテ「恨みは葛の葉の

地「恨みは葛の葉の。歸りかねて執心の面影の（と眞中へ行きてワキに向き）。恥かしや思ひ夫の。二世と契りてもなほ。末の松山千代までと。かけし頼みはあだ波の。あらよしなや空言やそもかかる人の心か（つと後へ下つてワキを見つめ）

シテ「鳥てふ。おほをそ鳥も心して

地「うつし人とは誰かいふ。草木も時を知り。鳥獸も心あるや。げにまことたとへつる。蘇武は旅雁に文をつけ。萬里の南國に至りしも（と遠くを見ながら前に出で）。契りの深き志。淺からざりし故ぞかし（とワキの前に行きて坐し）。君如何なれば旅枕夜寒

だが、私はまだこの世に心殘りがして、生死の苦を離れることが出來ず、何の甲斐もない憂き世に現れて來ました」（[illegible]に向ひ、

亡妻「私はあなたが怨めしくて、冥途に歸ることが出來ず、執心深くもこゝへ現れて來ました。でも、この變りはてた姿をお見せするのがお恥かしい。あなたとは、二世の契りを結んで、なほそれでも足らず、千年も萬年も添ひ遂げようとお約束しましたのに、それをあだにして、うそを仰しやつた。それが人の心と申すものですか。鳥といふ大うそつきの鳥でも、少しは心があつて、これほどの大うそは申しはしません。これでも正氣の人と申せませうか。草木でも、花咲き實を結ぶ時節を間違へは致しません。鳥や獸でも、心のあるものです。さう〱、生前譬へにした蘇武は雁の足に文をつけてまで、苦心をして便りをなし、遂に遠い南國へ歸つたといふのも、夫婦の契りが深かつたからです。それだのに、あなたは何故遠い旅に出て、何一つ便りをして下さらなかつたのです。あまり薄

ころ〳〵と鳴いて人をだますとの意。○蘇武は旅雁に——前掲「蘇武」の註に掲げた。○うつつとも—衣を擣つといひかけた。○うつし人—正氣のある人○草木も時を知り—心なき草木も春秋の時を知つて、花咲き實結ぶ時を間違へない。【八】○法華—妙法蓮華經。○開くる法の華心—法華の二字を隱していふ。思ひ慰めようとして擣つた砧の聲の内に、自ら悟を開く佛緣を得、その佛緣が種となつて、菩提成佛の實を結んだとの意。

の衣うつつとも。夢ともせめてなど思ひ知らずや恨めしや（とワキを見てさめ〴〵としをる）

【八】

ワキシテに合掌。シテこれより晴れやかに舞ふ。

地（キリ）『法華讀誦の力にて。法華讀誦の力にて。幽靈まさに成佛の。道明らかになりにけり。これも思へば假初に。擣ちし砧の聲のうち。開くる法の華心。菩提の種となりにけり菩提の種となりにけり

と仕手柱際にて合掌、静かに幕に入る。

情な、お怨めしい」このやうに怨み歎いたが、

【八】法華經を讀誦して回向した法力により「幽靈正に成佛す」との經文の通り、亡妻は成佛した。これも思へば、假初に砧を打つたのが悟を開く佛緣となつたので、その結果菩提成佛するやうになつたのである。

〔考異〕

諸流（觀寶剛喜）

【一】ワキ「これは九州……ツレ「さらば……御下りあらうずるにて候（喜ナシ、喜ツレ次第「旅の衣の遥々と。〳〵。蘆屋の里に急がん。詞是は九州蘆屋の何某殿に仕へ申す夕霧と申す女にて候。扨も頼み奉り候何某殿は。御訴訟の事候ひて。三年餘り御在京にて候。妾も御供申し都に候ひしが。故郷の事心もとなく思召し候程に。御使に参れとの御事により。只今蘆屋の里へと急ぎ候）【六】ワキ「無慙やな……別れとなりけるぞ（喜是は蘆屋の何某にて候。われ訴訟の事候ひて。三年に餘り在京仕りこの頃罷り下り候處に。妻にて候者空しくなり候程に。法事をなさばやと存じ候）上歌「先だたぬ悔の……二度歸りくる道と……かはすあはれさよ（喜來りて甲斐もなき身ぞと。思ひの珠の數々に。かの跡とふぞあはれがたき〳〵）

古諸本　（元祿八年本）

【一】ツレ「急ぎ候程に……案内を申さうずるにて候（元ナシ）　【四】ツレ「夕霧立ち寄り諸共（元主從共）に……地次第「衣に落つる（元て）松の聲……　【五】ツレ「いかに……人の參りて候がこの年（元歳は今年）の暮……

清經（きよつね）

觀（寶　春　剛　喜）

解說

【能柄】　二番目　劇的夢幻能

【人物】　ワキ　淡津三郎、ツレ　平清經の妻、
　　　　シテ　平清經の靈

【所　】　京都　平清經妻の邸

【時　】　壽永二年晩秋（九月）

【異稱】　「清常」とも書いた。

【作者】　世子六十以後申樂談儀に世阿彌の作とし、能本作者註文、二百十番謠目錄にも世阿彌の作としてゐる。能作書を初め歌舞髓腦記、禪鳳習道目錄等にも曲名が見えてゐる。永正二年四月十三日粟田口勸進猿樂に演ぜられてゐる。言經卿記文祿四年三月廿七日の條に謠釋のことが出てゐる。

【梗概】　平清經は豐前國柳が浦で敗戰し、もはや平家復興の見込のないことを歎いて入水してしまつたので、その臣淡津三郎が形見の黑髮を持つて都に歸り、清經の妻に渡した。清經の妻は夫が非命の死

を遂げたことを歎き悲しんでゐると、清經の亡靈が現れ出て、これを慰め、平家敗戰の樣などを語る。

【出典】　清經が入水した事は、平家物語諸本に見えて居り、殊に清經入水の前「横笛音取朗詠し」たことは、流布本にのみ見えてゐる記事であるから、本曲は流布本を參酌したと思はれるが、本曲の骨子である、清經が妻に鬢髪を贈つたことは流布本にも長門本にも見えないもので、盛衰記に記された説話であるから、本曲は大體源平盛衰記に據つたものと思はれる。しかし、盛衰記卷三十三には、

小松殿の三男に左中將清經は、都を落ち給ひける時、女房をも西國へ相具し奉らんと宣ひければ、年來深き契を結び、二心なく憑み憑まれたる御中にて、女房はさもと出立ち給ひけるを、父母大に嗔りつつ免し給はざりければ力及ばず、悲みの中に別れて獨り都を落ち給ひけるが、道より鬢の髪を切つて返し遣して「常は音信申さん、使の時は又承る事も候へよ」などいひ送りながら、三年が程あるかなきか言傳もなかりければ、女房恨み給ひて「何の國までも相具せんといひしかば、我もさこそと思ひしに、今は心替りのあればこそ三年を經る共云ふ事はなかるらめ、さては形見も由なし」とて返し下し給ひけるが、左中將が柳が浦に御座ける所へ着きたり、一首の歌を副へられたり。

　見るからに心つくしのかみなればうさにぞ返す本の社に

左中將是を見給ひては、さこそ悲しく覺しけめ。

とあり、鬢髪を贈つたのは、清經の生前であるのを、入水の際の形見としたのは、本曲の創作である。

【概評】　前ジテのない單式の修羅物、即ち武將の亡靈が直に昔の姿で登場する曲には「生田敦盛」「經政」「俊成忠度」などがあり、いづれも普通の夢幻能と違つて劇的成分の多いものであるが、その中でも本曲の如きは最もこの色彩の強い曲で、これに次ぐのが「俊成忠度」であらう。ワキが死者の形見をツレの許へ屆けるのは、兩曲同工であるが、シテとツレとの關係が、一は師弟であり、これは夫妻であるから、やはり關係の親密な本曲の方が一層情味が深いやうに思はれる。原據盛衰記では出陣の際に贈つた鬢髪を、この曲に形見の品としたのは、作者の手腕である。尤もこの鬢髪を返す「見るたびに」の歌は、原據の方が時の宜しきを得てゐるが、本曲でも、これを主題として夫妻がかこちかこたれてゐるのは、平家物にふさはしい構想であると思ふ。シテの軍語の間に、ツレが恨み言を挿んでゐるのもよい。キリの一節は、清經の西方淨土を望んで入水したことを作者の歎賞したものであらうが、戲曲としては蛇足に過ぎない。

【一】

○八重の潮路の―遠い海路を經て都に歸らうとの意。八重。九重と數を重ねて文のあやとした。平家物語灌頂卷清經の事を記した條に「九重の雲の上にて見し月を八重の潮路に詠めつゝ」とあるに據つたのであらう。

○左中將―左近衞中將。

○清經―平重盛の三男。平家物語諸本ともに柳が浦で入水したと記してゐるが、盛衰記卷四十二にはまた四國落の際敵を討つて自害したと記してゐる。

○淡津の三郎―假作の人物であらう。

○過ぎにし筑紫の軍―壽永二年八月平家一族は太宰府に着いたが、また同國の住人緒方三郎惟義に追はれて、豐前國柳が浦に落ちた。

○道芝―路傍の雜草。雜兵を喩へていふ。

○柳が浦―豐前國企救郡にある。

○夜船より身を投げ―盛衰記に「左中將淸經は舟の屋形の上に上りつゝ……月曇りなく晴れたる夜、靜に念佛申しつゝ、波の底にこそ沈みけれ」

【一】

ツレ清經の妻、面連面・鬘・鬘帶・襟箔・着附摺箔・唐織着流・扇の装束にて出で、脇座へ行き下に居る。次第の囃子にて、ワキ淡津三郎、着附段熨斗目・掛素袍・白大口・腰帶・扇・小刀の装束にて、守袋を首に懸け、笠を被りて出で、名乘座に立ちて囃子座の方に向き、

ワキ次第「八重の潮路の浦の波。八重の潮路の浦波九重にいざや歸らん

地取に笠を脫ぎて正面に向き、

ワキ「これは左中將清經の御內に仕へ申す。淡津の三郎と申す者にて候。さても賴み奉り候淸經は過ぎにし筑紫の軍に打ち負け給ひ。都へはとても歸らぬ道芝の。雜兵の手にかからんよりはと思しめしけるか。豐前の國柳が浦の沖にして。更け行く月の夜船より身を投げ空しくなり給ひて候。又船中を見奉れば。御形見に鬢の髮を遺し置かれて候間。かひなき命助かり。御形見を持ち唯今都へ上り候

笠を被りて、

【一】

舞臺は初め筑紫で、ワキ淡津三郎登場。

淡津「遠い〳〵海路を渡つて、これから都へ歸らう」

と次第に旅の目的を述べ、

淡津「私は左近衞中將平淸經の家來の淡津三郎といふ者です。さて、御主人淸經はこの間の筑紫での戰爭にお負けになり、都へはとても歸ることが出來ず、途中で雜兵の手にかゝつて死ぬよりは、寧ろ自害した方がましだとお思ひになつたものか、豐前國柳が浦の沖に於て、夜も更けた月の晩、船から身を投げて死んでしまはれたのです。又船中を見ると、御形見に鬢の髮を遺して置かれたので、自分も生き甲斐のない事ながら、死ぬのを思ひ留まつて、御形見を持つて、これから都へ上るのです」

ト目附へ向ひ[illegible]

○秋暮れて—清經の入水したのは十月。

【二】

○人までもなし—取次の手を經るまでもない。

ワキ道行「この程は。鄙の住居に馴れ馴れて。鄙の住居に馴れ馴れて。たまたま歸る古里の昔の春に引きかへて。今はもの憂き秋暮れてはや時雨降る旅衣。しをるる袖の身のはてを忍び忍びに、上りけり忍び忍びに上りけり

「今はもの憂き」と右の方に向きて二三足出で、またもとに歸りて都に着きたる心。道行濟みて笠を脫ぎ正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。これははや都に着きて候。やがて案内申さうずるにて候

といひて後見座にくつろぎ、守袋を懷中して名乘座に立ち、ツレに向ひ、

【二】

ワキ「いかに案内申し候、筑紫より淡津の三郎が參りて候それそれ御申し候へ

ツレ「なに淡津の三郎と申すか。人までもなし此方へ來り候へ

ワキ舞臺の眞中に出で、ツレに辭儀す。

ツレ「さて唯今は何の爲の御使にてあるぞ

淡津「この間中は、田舎住居に馴れて、たま〲今度都へ歸るとはいふものの、昔の榮華を極めた時代とは全く反對で、今はすべてもの憂いことばかりで、時も時晩秋時雨そぼ降る中を、雨と涙に袖をも濡らしながら、敗軍の身の、人目を忍んで都へ上つた」

と旅の辛い心を述べてゐるうちに、京に歸つた態で、舞臺は京都清經の館となる。

淡津「旅を急いだので、存外早く都に着いた」

といつて、清經の館に着いた態で、

【二】

淡津「お頼み申します。筑紫から淡津三郎が參りました。お取次を願ひます」

ツレ清經の妻、案内を聞いて、

清經妻「なに淡津三郎か。それならば取次を經るまでもない、こちらへお入りなさい」

淡津三郎は室に入つた態で、舞臺は清經邸の一室となる。

妻「して、唯今は何の爲の御使に來たのか」

○御遁世　御出家。

ワキ「さん候面目もなき御使に參りて候

ツレ「面目もなき御使とは。もし御遁世にてあるか

ワキ「いや御遁世にても御座なく候

ツレ「過ぎにし筑紫の軍にも御恙なきとこそ聞きつるに

ワキ「さん候過ぎにし筑紫の軍にも御恙御座なく候ひしが。清經心に思しめすやうは。都へはとても歸らぬ道芝の。雜兵の手にかからんよりはと思しめされけるか。豐前の國柳が浦の沖にして。更け行く月の夜船より身を投げ空しくなり給ひて候

ツレ「なに身を投げ空しくなり給ひたるとや。恨めしやせめては討たれもしは又。病の床の露とも消えなば。力なしとも思ふべきに。われと身

武士「面目もないお使に參りました」

妻「面目もないお使とは、もしやわが夫は御出家でも遊ばしたのか」

武士「いえ御出家でもございません」

妻「でも、この間の筑紫の合戰にも御無事であつたと聞いてゐたのに……」

武士「この間の筑紫の合戰には御無事でございましたが、御主人が心中にお考へ遊ばしたことには、このやうな形勢ではとても無事に都へ歸ることは出來ない、それならば途中で雜兵の手にかゝつて死ぬよりは、一層自害した方がましだと、かうお考へになりましたものか、豐前國柳が浦の沖合に於て、夜も更けた月夜の晩、身を投げてお亡くなりになつたのでございます」

妻「なに身を投げてお亡くなりになつたと申すのか。お恨めしい。せめて敵に討たれるとか、又は病氣でお亡くなりになつたのならば、是非ないことと諦めもつかうが、御自分で身を投げておしまひに

○かねこと—約束。誓ひあつた詞。
○なき世となる—恨み甲斐のない事と、身の亡くなつた事とを兼ねていふ。
○人目をつつむ—平家の緣者であるから、人の見る目を避けるのである。
○垣ほ—庭。
○有明月の—誰に憚りのあらんといひかけて、夜の語を出す。
○夜ただ—終夜。
○名をも隱さで—平家の緣者である事を遠慮せずおほびらに。盛衰記の連歌「一時鳥名をば雲居にあぐる哉」を借りて文を綴つた。
【三】
○目もくれ心消え—目もくらみ、心も消え入るやうに思はれる。

を投げ給ふ事。僞りなりつるかねことかな。げに恨みてもそのかひの。なき世となるこそ悲しけれ（とツレしをる）
地下歌 何事もはかなかりける世の中の。上歌「この程は。人目をつつむわが宿の。人目をつつむわが宿の。垣ほの薄吹く風の。聲をも立てず忍び音に泣くのみなりし身なれども。今は誰をか憚りの。有明月の夜ただとも。何か忍ばん時鳥。名をも隱さで、鳴く音かな名をも隱さで鳴く音かな

【三】ワキ「又船中を見奉れば。御形見に鬢の髪を遺し置かれて候。これを御覽じて御心を慰められ候へ

と謠ひながら守袋を扇にのせてツレの前に出し、もとの座に歸る。ツレこれを左手に受取りて、

ツレ「これは中將殿の黑髪かや。見れば目もくれ

なるとは、あんまりなことだ。これまでお約束して置いた事もうそであつたのだ。といつて、いくらお恨みしても、もはやこの世の人でないとは、ほんとに悲しいことだ。この世の中は何事も果敢ないものであるが、わけてもわれら平家の落人の緣者は、人の見る目も憚られて、泣くにも聲を立てないやうに愼んでゐたのだが、もはや今は誰に遠慮をしようとも思はない。思ふ存分、夜通し泣き明かさう」

【三】旅僧 またその時船中を見ますと、御形見に鬢の髪を遺してお置きになりました。これを御覽になつて御心をお慰めになりますやうに—

と守袋から形見の黑髪を出して主人の妻へ渡す。

妻はこれを見て、

妻「これが中將殿の黑髪であるのか。見ると目もくらみ、心も消え入るやうで、一

○見る度に心づくしの髪なればうさにぞ返す本の社に—解説に掲げた清經の妻が夫に贈つた歌。髪を神に、憂さを宇佐にいひかけ、神によそへて本の社といつたのである。
○手向け返して—清經の方に向けて返す意。盛衰記では清經の在世中の事であるが、本曲は歿後の事としてゐるので、死者へ手向け返すといつた。宇佐八幡の緣をかねてゐる。
○思ひ寝—物を思ひながら寝る事。
○枕や戀を知らす—枕がわが戀を知つて、夢に知らしてくれるであらう。千載集久我内大臣の歌「つゝめども枕は戀を知りぬらん涙かからぬ夜はしなければ」を轉用したのである。
【四】○聖人に夢なし—聖德ある人は心が安泰であるから夢を見ない。大慧語錄に「聖人無ㇾ夢」
○眼裡に塵あつて—物を觀ずる眼中に迷ひの塵がかゝつてゐては、廣い世界も狹くなり、心に何一つ迷ふ所がなく大悟すれば、自分の坐つてゐる狹い床も無限の廣い世界となる。夢窓國師

心消え。なほも思ひのまさるぞや。見る度に心づくしの髪なれば。うさにぞ返す本の社にと地、手向け返して夜もすがら（ト守袋を下に置き）。涙と共に思ひ寝の。夢になりとも見え給へと寝られぬに傾くる枕や戀を。知らすらん枕や戀を知らすらん

【四】

地謠の間に、ワキ切戸より入る。

地謠の間に、シテ平清經、面中將・黒垂・梨打烏帽子・白鉢卷・襟白淺黄・着附縫箔・法被・大口・腰帶・扇・太刀の裝束にて幕より出で、地謠の終る時一の松に立ち、

シテサシ『聖人に夢なし。誰あつて現と見る。眼裡に塵あつて三界窄く。心頭無事にして一床寛し。げにや憂しと見し世も夢。辛しと思ふも幻の（ト幕へ向き）。いづれ跡ある雲水の（ト正面を眺め）。往くも。歸るも閻浮の故郷に。たどる心の。はかなさよ（ト面伏せ）。うたたねに戀しき人を見てしより。夢てふものは。頼みそめてき。（ツレに向ひ）いかにい

嘆悲しい思ひが増すばかりだ。『見るたびに心づくしの髪なれば、うさにぞかへす本の社に』（見るたびに却つて心を痛ませる種だから、もと通りにお返し致します）と、かうしてもと通りにお返ししませう。そして夜中涙ながらに寝て、夢になりともお姿を見ませう。どうぞお見え下さいますやうに—

妻 かういつても、さて寝つくことも出來ないが、夜も更けて行けば、やがてこの戀心に引かれて、夫の面影が現れて下さることであらう—

【四】

（妻の夢に現れる態で、シテ平清經登場。）

清經 聖人には妄念がなく夢を見ないといふが、この世の中はすべて夢と同じで、現と見るべきものはないのだ。一體わが觀ずる眼に迷ひの塵がかゝれば、廣い世界も狹くなり、心の中に何一つ迷ひがなければ、自分の坐つてゐる小さな床も廣い世界となるのだ。まことに憂いと思ふのも辛いと思ふのも、結局跡方のない夢幻のやうなものだ。—と悟つたつもりでゐながら、いつの間にやら、この娑婆に心を引かされて歸つてくるとは、あまりに果敢ない心だ。古人が、—

「うたゝねに戀しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき」
（うたゝねをして、戀しい人の夢を見て以來、夢といふものを頼みに思ふやうになつた）

語錄の「眼裡有レ塵三界窄、心頭無レ物一床寛」を引いたのである。
○幻―捉へることの出來ない影の如き形。
○雲水―捉へることの出來ない物の喩。
○閻浮の故郷―娑婆。閻浮は須彌四洲の一、閻浮提の略。
○うたたねに戀しき人を見てしより夢てふものは賴みそめてき―古今集小野小町の歌。
○いにしへ人―古くから契つた妻。
○命を待たで―定命の盡きるのを待たないで。

にしへ人。清經こそ參りて候へ
ツレ（シテに向ひ）『不思議や、なまどろむ枕に見え給ふは、げに清經にてましませども、正しく身を投げ給へるが、夢ならではいかが見ゆべきぞ。よし夢なりとも御姿を。見みえ給ふぞありがたき。さりながら命を待たでわれと身を。捨てさせ給ふ御事は。僞りなりけるかねことなれば。唯恨めしう候（としをる）
シテ『さやうに人をも恨み給はば。われも恨みは有明の、見よとて贈りし形見をば。何しに返させ給ふらん
ツレ『いやとよ形見を返すとは。思ひあまりし言の葉の。見るたびに心づくしの髮なれば
シテこの間に舞臺に入り、常座に立ちて、
シテ「うさにぞ返す本の社にと。さしも贈りし黑

と詠んだが、この歌の通り、わが妻の戀しいと思ふ夢に自分は現れて來たのだ」
といつて妻の前に現れ、
清經「わが妻、清經がこゝへ來ましたぞ」
妻「不思議なことだ。うと／＼と眠つてゐたところへ、お見えになつたのは、ほんとに清經であらうか。清經は確かに身をお投げになつたのだから、夢でなければ、お見えになる筈はないのだが、今見てゐるのが夢であらうか。いやこれが夢であらうとも、御姿のお見えになつたのは何よりうれしうございます。けれど、定命の終るのも待たないで、御自身で身を捨てゝおしまひになつたのは、以前のお約束を反古に遊ばしたので、それがお恨めしうございます」
清經「そのやうにお恨みになるなら、こちらにも恨みがある。折角形見にと思つて贈つたものを、どうしてお返しになつたのです」
妻「いえ／＼、形見をお返ししたとはあまりなお言葉でございます。あれは、見れば見るほど思ひの種になるものですから……」
清經「それで、もとへ返したといふのか。

髪を。飽かずは留むべき形見ぞかし

ツレ『おろかと心得給へるや。慰めとての形見なれども。見れば思ひの亂れ髪

シテ「わきて贈りしかひもなく。形見を返すは此方の恨み

ツレ『われは捨てにし命の恨み

シテ『互にかこち

ツレ『かこたるる

シテ『形見ぞつらき

ツレ『黒髪の

地上歌「恨みをさへにいひ添へて。恨みをさへにいひ添へて。くねる涙の手枕を。並べて二人が逢ふ夜なれど恨むれば獨寢の。ふしぶしなるぞ悲しき。げにや形見こそ。なかなか憂けれこれなくは。忘るる事もありなんと思ふも濡らす、

折角贈つた黒髪を、見厭きないならば、形見に留めて置く筈ではないか」

妻「思ひやりのないお心です。心を慰めよといつてお贈り下さつたものではございますが、見れば愈〻心が亂れるばかりでございます」

清經「心を籠めて贈つた甲斐もなく、形見を返したのが、私は恨めしい」

妻「私は命をお捨てになつたのが、お恨めしうございます」

かうして、お互に恨み恨まれるにつけ、清經の妻は、形見に遺された黒髪が、辛い恨みの種となつて、涙ながらにすねて恨めば、折角二人相逢うた夜ではあるが、獨寢のやうに別々の思ひに悲しむのである。まことに形見といふものは却つて辛い思ひの種となるもので、これがなければ忘れる事もあらうかと、涙に袂を濡らすのである。

○飽かずは―思ひ厭きないならば。

○わきて贈りし―殊更贈つた。髪を分くといひかけたのである。

○捨てにし命の恨み―定命も盡きないのに自殺せられたのが恨めしい。

○くねる―すねる。

○ふしぶし―獨寢の如く別別に寢る臥々と、恨みの主意が相方異る節々とを兼ねていふ。

○形見こそなかなか憂けれ―古今集讀人知らずの歌「形見こそ今はあだなれこれなくは忘るゝ時もあらましものを」を引いた。

○なかなか―却つて。

【五】
○山鹿の城｜筑前國遠賀郡山鹿兵藤次秀遠の居城であつた所。平家は太宰府を落ちて柳が浦へ行く途中、秀遠に導かれて、暫くこの城に籠つた。
○取るものも取りあへず｜盛衰記に「山鹿の城にも未だ御安堵なかりける處に、惟義十萬餘騎にて押寄すると聞えければ、又取る物も取りあへず、山鹿の城をも落ちさせ給ひて、高瀨舟に乘移り、豐前國柳といふ所へ渡り入らせ給ひけり」
○高瀨舟｜底の淺い川舟。
○宇佐八幡｜豐前國宇佐郡にある。盛衰記に「主上女院を始め參らせて、內府以下の人々豐前國宇佐の宮に參詣あり、社頭は皇居となり、廓は月卿雲客の居所となる」
○奉幣　御幣を捧げ供物を供へること。
○猶も身の恨み｜自分一個の恨みをいふやうであるが
○御代の境｜安德天皇の御最後。

袂かな思ふも濡らす袂かな（二人ともしをる）

【五】
シテ「古の事ども語つて聞かせ申し候べし。今は恨みを御晴れ候へ
といひて眞中へ出で床几にかゝり、
シテ『さても九州山鹿の城へも。敵寄せ來ると聞きし程に。取るものも取りあへず夜もすがら。高瀨舟に取り乘つて。豐前の國柳といふ所に着く
地『げにや所も名を得たる。浦は並木の柳蔭。いと假初の皇居を定む
シテ「それより宇佐八幡に御參詣あるべしとて
地『神馬七匹その外金銀種々の。捧げ物。卽ち奉幣の。爲なるべし
ツレ『かやうに申せば猶も身の。恨みに似たる事なれども。さすがに未だ君まします。御代の境

【五】
清經「昔の事を話して聞かせようほどに、今は恨みを晴らしておくれ」
といつて、軍語を初める。
清經「さて折角落ちのびた九州山鹿の城へも、敵が押寄せて來ると聞いたので、とるものも取り敢へず、大急ぎで、夜中小舟に乘つて、豐前國柳といふ所に着いたのだ。こゝは地名の通り、柳の並木の多い所で、こゝを當座の皇居に定められた。
それから宇佐八幡へ御參詣になるといふので、神馬七匹その外金銀色々のものをお供へになつた……」
妻「このやうな事を申すと、やはり自分勝手な恨みではございますが、まだ天子のお出て遊ばすのに、その御最後も、また

や一門の。果をも見ずして徒らに。御身一人を捨てし事。誠によしなき事ならずや

シテ『げにげにこれは御理さりながら。頼みなき世のしるしの告。語り申さん聞き給へ

地「抑も宇佐八幡に參籠し。樣々祈誓怠らず。數の頼みをかけまくも。忝くもみとしろの錦のうちよりあらたなる。御聲を出だしてかくばかり

シテ『世の中の。うさには神も。なきものを。なに祈るらん。心づくしに

地「さりともと。思ふ心も。蟲の音も。弱り果てぬる。秋の暮かな

シテ「さては。佛神三寶も

地「捨て果て給ふと心細くて。一門は(と床几を離れ)。氣を失ひ力を落して足弱車のすごすごと。還幸なし奉るあはれなりし有樣

平家一門の最後をも見屆けないで、あなた一人で身をお捨てになつたのは、ほんとにつまらないことではございませんか―

清經「いかにも尤もだ。しかしこの世が頼みにならないといふ神の御告げがあつたからだ。それを話すからお聞きなさい。

さて宇佐八幡に參籠して、色々一生懸命にお祈りしてゐたところが、忝くも御神殿の錦の御戸張の中から、あらたかなお聲で、―

『世の中のうさには神もなきものをなに祈るらん心づくしに』

(世の中の亂れた今日、平家を助ける神はないのに、一生懸命になつて何を祈つてゐるのであらう)

と仰せになつたので、萬一を頼みにしてゐた心も弱つてしまひ、さては神も佛もお見捨てになつたのかと、平家一門氣を失ひ力を落して、すごすごと還幸の御供をしたのだ。―

○かけまくも―口に出していふも。頼みを**かける**といひかけた。

○みとしろ―神前の御戸張

○世の中のうさには神もなきものをなに祈るらん心づくしに―宇佐八幡の神歌。盛衰記平家物語等に見ゆ。**憂さ**を**宇佐**に、**心づくし**を**筑紫**にかけていふ。

○さりともと思ふ心も蟲の音も弱り果てぬる秋の暮かな―千載集藤原俊成の歌。但し盛衰記には宗盛の詠歌として揭げてある。

○三寶―佛・法・僧。こゝではたゞ佛の意。

○足弱車―足の進みかねる喩。

〇移る夢こそ眞なれ―榮枯盛衰が夢の如く移り變ることだけが、この不定の世の中で間違なく行はれることである。
〇保元の春の花―盛衰記福原管絃講の事に「平家は保元に春の花と榮えしかども壽永に秋の紅葉と散りはてて」
〇一葉の船―紅葉を承けて葉といふ。たゞ一艘の船といふ意。
〇追手顏なる―船の追手の風も敗軍の平家には敵の追手のやうに思はれる。
〇白鷺の群れゐる―平家物語に「遠き松に白き鷺の群れゐるを見ては、源氏の旗かと心をつくす」
〇正直の頭に―神に僞りがないと信じて。「正直の頭に神宿る」といふ諺を引いたのである。
〇あぢきなや―生きてゐても無益。
〇猶おき顏に―まだ生きてゐるのかと思はれるやうに「おく」は露の緣語。
〇水鳥の―憂き目を見るといひかけた。

と大小前に下りて正面に向ひ辭儀してしをり、立ちてこれより謠に合せて舞ふ。（舞クセ）

地クセ『かかりけるところに。長門の國へも敵向ふと聞きしかば。又船に取り乘りていづくともなくおし出だす。心の中ぞあはれなる。げにや世の中の。うつる夢こそ眞なれ。保元の春の花壽永の秋の紅葉とて。ちりぢりになり浮かむ。一葉の船なれや。柳が浦の秋風の。追手顏なる跡の波白鷺の群れゐる松見れば。源氏の旗を靡かす多勢かと肝を消す。ここに清經は。心にこめて思ふやう。さるにても八幡の。御託宣あらたに心魂に殘ることわり。まこと正直の。頭に宿り給ふかと。唯一筋に思ひとり

シテ『あぢきなや。とても消ゆべき露の身を

地『猶おき顏に浮草の。波に誘はれ船に漂ひていつまでか。うきめを水鳥の。沈み果てんと思ひ

かうしてゐる處へ、また長門國へも敵が向つて來たと聞いたので、船に乘つて何處へ行くといふ目當もなく漕ぎ出した時の心細かつたこと。ほんとに世の中には何一つ確かなものがなくて、たゞ夢の世たといふことだけは間違ひがなく、平家は保元の頃にはあのやうに榮えたのに、壽永の今日は既に衰へて、一門ちりぢりになつてしまつたのだ。そして柳が浦を漕ぎ出るにつけても、そら恐ろしくて、順風の秋風も敵が追ひかけてくるやうに思はれ、白鷺の群つてゐる松を見ると、源氏の多勢が白旗を靡かせてゐるのかと驚かれたのだ。そこで、自分が心中に深く思ふには、あのやうにあらたかな八幡の御託宣がはつきり聞えたのは、確かに神樣の僞りのない仰せ事であると、かう思ひ込んで、このやうな生き甲斐のない世の中に、やがて死ぬる命を生き延びて、浮草のやうに波に誘はれ、舟に漂つて、いつまでも辛い目を見るよりは、一層沈んてしまつた方がましだと思ひ切り、人には何ともいはず、夜の更けるのを待つ

○岩代の—岩代は紀伊國の松の名所であるから、松にかけて待つを呼び出した。○腰より横笛拔き出だし—平家物語に「ある月の夜船ばたに立出で、横笛音取朗詠して遊ばされけるが—」○今様—多くは七五四句より成る謠ひ物。○朗詠—主として漢詩の二句を朗吟する謠ひ物。○かゞみて—過去の非に鑑みて行末を思ひやり。○とまらぬは心づくし—心配がやまない。○この世とても旅—都を出て筑紫へ來たのが旅であるばかりでない、人生すべてが旅である。○みるめ—人の見る目を海草のみるめにいひかけ、その緣で「刈り」にかけて「假の世」といひ、世を夜にいひかけた。○われも連れん—自分も西方淨土に連れられて行かう。○落汐—引汐。海中に落つといひかけた。○くれはとり—心もくれるといひかけた。くれはとりは呉織であるが、こゝでは鳥に見立てて浮寢といひ、「憂き音」を兼ねた。

きり。人にはいはで岩代のまつことありや曉の。月に嘯く氣色にて船の舳板に立ち上り。腰より横笛拔き出だし。音も澄みやかに吹きならし今様を謠ひ朗詠し。來し方行く末をかゞみて終にはいつかあだ波の。かへらぬは古とまらぬは心づくしよ。この世とても旅ぞかし。あら思ひ殘さずやと。よそ目にはひたふる狂人と人や見るらん。よし人は何ともみるめをかりの夜の空。西に傾く月を見ればいざやわれも連れんと。南無阿彌陀佛彌陀如來。迎へさせ給へと。唯一聲を最期にて。船よりかつぱと落汐の。底の水屑と沈み行く憂き身の果ぞ悲しき

と仕手柱先に安坐してしをる。

ツレ『聞くに心もくれはとり。憂き音に沈む涙の雨の。恨めしかりける契りかな

て、月を眺めるやうな振りをして、船の舳先に立上り、腰から横笛を取出し、澄み渡つた音で吹き鳴らし、今様や朗詠を謠ひ、さてこれまでの事を考へて將來を判斷するのに、遂には仇波に消えてしまふに違ひない、昔の榮華は取返すことが出來ないで、もの思ひを續けなければならない。思へばこの筑紫に來てゐるだけが旅ではない、人生すべてが旅だ。何も思ひ殘すことはない、身投げなどをすれば、或は外の人には全くの狂人に見えるかも知れないが、人は何と思ふとも構はない、あの西へ傾いて行く月のやうに、自分も西方淨土へ行かうと、『南無阿彌陀佛彌陀如來われを淨土に迎へさせ給へ』とたゞ一聲を殘して、船よりかつぱと落ちて行つたのだ」

妻「お話を伺ふにつけて、心もくらくなり涙のとめやうがございません。まことに恨めしい運命でございます」

シテ『いふならく。奈落も同じ。うたかたの。あはれは誰も。變らざりけり

【六】

シテ（キリ）〽さて。修羅道に。をちこちの（と立上り）

地 さて修羅道に、をちこちの。たづきは敵（と正面に出で）。雨は矢先。土は精劍（と下を見）。山は鐵城（と見上げ）。雲の旗手をついて（太刀を拔きて角へ行き）。憍慢の。劍を揃へ。邪見の眼の光。愛欲とのいちつうげん道場。無明も法性も。亂るる敵。打つは波（太刀にて打つ形）。引くは潮（後へ退り）。西海四海の因果を見せて（とツレへ向き）。これまでなりや（太刀を捨て）。まことは最期の十念亂れぬ御法の船に。賴みしままに、疑ひもなくげにも心は清經がげにも心は、清經が佛果を得しこそありがたけれ

と常座にて留拍子を踏む。

清經「さて死後の地獄も、やはりこの世と同じ果敢ないものなのだ」

【六】

清經「その死後墮ちて入つた修羅道では、あちらにもこちらにも賴りになるものはなく、四方敵にかりて、上より降る雨は矢先となつて身を責め、踏む土は鋭い劍となつて身を斬り、山は鐵城となり、雲は敵の旗となり、それが憍慢な心で劍を揃へて攻め來り、邪見の眼を光らして押寄せて來るので、すべての者が愛着・貪欲・瞋恚・愚痴に沒頭して、日夜闘諍ばかりしてゐるのだ。かうして迷ひの心と悟りの心とを辨別する隙もなく、敵が潮のさし引くやうに亂れかゝるのだが、これが九州や四國で合戰をした業因の結果なのだ。この有樣を見せたから、今はお暇をしよう」

といつて消えたが、まことに最期の時に心靜かに念佛して煩惱を離れたので清經は願ひのまゝに疑ひもなく成佛することの出來たのはありがたいことである。

○いふならく奈落―道歌。盛衰記に―いふならく奈落の底に入りぬれば刹那も首陀も變らざりけり―。いふならくの音を重ねた。
○奈落―地獄。

【六】

○をちこちの―修羅道に落つといひかけて、古今集讀人知らずの歌「遠近のたづきも知らぬ山中に覺束なくも呼子鳥かな」を借りた。
○たづきは敵―便宜は得難きを敵にいひかけた。
○雨は矢先―降る雨は矢となつて身に當る。
○土は精劍―土を踏めば鋭い劍となつて身を斬る。
○雲の旗手―雲は敵の旗となる。
○愛欲とのいち―愛欲貪瞋痴を訛つたのであらう。
○つうげん道場―痛患闘諍でなからうか。
○無明―迷ひの心。
○法性―無明を斷つた悟りの心。
○因果を見せて―生前合戰をした因により、死後修羅道に墮ちた果を妻に見せて。
○十念―念佛十度すること
○御法の船―佛が衆生を救ふ事を喩へた語。
○心は清經―心は清しといひかけた。

〔考異〕

諸流（五流）

【五】ツレ「かやうに申せば猶も身の……世抑ゝ宇佐八幡……御聲を出だしてかくばかり（下懸ナシ）

古謠本（光悅本）

【一】ワキ「これは……淸經の御内に仕へ申す（光ナシ）……賴み奉り候淸經（光中將殿）は過ぎにし筑紫の……かからんよりはと（光つゐに身のなり行へき事を）思しめし（光さためられ）けるか豊前（光後）の國……更け行く月の夜船より（光ナシ）身を投げ……遺し置かれて候間（光程に）……都へ（光に）上り……ワキ「急ぎ候程に……都に着き（光のぼりて）候　【二】ツレ「いかに案内（光ナシ）申し候筑紫より（光ナシ）淡津の……ツレ「何淡津の三郎と申すか（光荒めつらしや）……ツレ「さて唯今は……御使にてあるぞ（光ワキ「さん候かくと申さんために。是迄は參りて候へ共。何と申あくへきやらん。是非をわきまへす候。ツレ「あらふしきや。なにとてものをは申さて。さめ〳〵となくぞ）……ワキ「さん候過ぎにし筑紫の軍にも御恙御座なく候ひしが（光うちまけ給ひ）淸經心に（光ナシ）……豊前（光後）の……ツレ「なに身を……力なしと思ふ（光すこしの恨もはる）べきに……　【三】ワキ「又（光いかに申上候）船中を見奉れば（光申て候へは）……　【四】ツレ「不思議や……よし夢なりとも（光うつつなり共）……　【五】シテ「古の事ども……今は（光ナシ）恨みを御晴れ……シテ「さても……豊前（光後）の國……

祇王（ぎわう）　寶（剛）

解説

【能柄】三番目　二段劇能

【人物】ワキ　瀬尾太郎、前ツレ　祇王御前、前シテ　佛御前、狂言　瀬尾の從者、後ツレ　祇王御前、後シテ　佛御前

【所】京都　清盛館

【時】平家時代（三月）

【異稱】喜多流では「二人祇王」といつた。

【作者】能本作者註文に作者不明とある。世阿彌の能作書に「女體には、伊勢、小町、祇王、祇女、靜、百萬、此の如きの遊女」とあるが、本曲は世阿彌の作ではなからう。

【梗概】清盛が白拍子祇王をこの上もなく寵愛してゐたところへ、佛御前といふ白拍子が推參したが、清盛はもとよりこれに會はうともしなかつた。祇王は佛の心中を察して、清盛にとりなし、その爲に自分も四五日出仕を控へてゐたので、清盛は瀬尾太郎に命じて二人

を迎へしめた。やがて二人が喜んで相舞をすると、清盛の心は佛に移つて行つた。しかし佛は祇王と堅く約束してこれに應じなかつた。

【出典】本曲は平家物語巻一「祇王の事」に、

その頃京中に聞えたる白拍子の上手、妓王妓女とて姉妹あり、刀自といふ白拍子が女なり。然るに姉の妓王を入道相國寵愛し給ひし上は、妹の妓女をも世の人もてなすことなのめならず。……かくて三年といふに、又白拍子の上手一人出て來り。加賀の國の者なり。名をば佛とぞ申しける。年十六とぞ聞えし。京中の上下是を見て、昔より多くの白拍子は見しかども、かゝる舞の上手は未だ見ずとて、世の人もてなすことなのめならず。或時佛御前申しけるは、われ天下にもてあそばるゝといへども、當時めでたく榮え給ふ平家太政の入道殿へ召されぬことこそ本意なけれ、あそび者の習ひ何か苦しかるべき、推參して見んとて、或時西八條殿へぞ參じたる。人御前に參りて「當時都に聞え候佛御前が參りて候」と申しければ、入道相國大に怒りて「なんでう左樣の遊び者は、人の召にてこそ參るものなれ、左右なう推參するやうやある。その上神ともいへ佛ともいへ、妓王があらんずる所へは叶ふまじきぞ、疾う／＼罷り出でよ」とぞの給ひける。佛御前はすげなういはれ奉りて、既に出でんとしけるを、妓王入道殿に申しけるは「遊び者の推參は、常の習ひにこそ候へ。その上年も未だをさなう候なるが、たま／＼思ひ立ちて參りて候を、すげなう仰せられて、返させ給はんこそ不憫なれ。如何ばかり恥しう片腹痛くも候ふらん。我立てし道なれば、人の上とも覺えず、假令舞を御覽じ、歌をこそ聞し召さずとも、只理を枉げて召し返して、御對面ばかり候ひて、返させ給はゞ、ありがたき御情にこそ候はんずれ」と申しければ、入道相國「いで／＼、さらばわごぜが餘りにいふことなるに、對面して歸さん」とて、御使を立てて召されけり。佛御前はすげなういはれ奉りて、車に乘りて、既に出でんとしけるが、召されて歸り參りたり。……佛御前は髪姿より始めて、見目貌世に勝れ、聲よく節も上手なりければ、なじかは舞は損ずべき、心も及ばず舞ひ濟したりければ、入道相國舞に愛で給ひて、佛に心を移されけり。

とあるに據り、その舞を中心として脚色したのである。

【概評】祇王の事は、平家物語中でも最も興味の深い一節で、世阿彌も能作書に女體能の恰當の人物として擧げてゐるが、本曲はその秀れた題材に反比例した拙劣な作であると思はれる。第一にその大體が物語の本說を傳へようとして餘りに散文的に陷つてゐる。第二に殊にクセの後半が登場人物の科白として解釋し難い叙事文となつてゐる。――この弊はやはり平家物語から出た現在物の「千手」にも

ある。第三に本曲が舞を中心としたのは當然のことであるが、その舞を祇王との相舞とした爲に、本曲に最も大切な佛御前の特殊性を減殺してゐる。第四に作者の意圖が佛御前の推參よりも清盛の變心よりも、祇王の寛容を稱讃しようとする所にあつたらしいので、その爲に主題が分裂してゐる。第五に祇王の寛容に對して佛御前の感激を示さうとした爲に、物語に描かれてゐる重要な階段を飛んで、佛御前をして直に清盛を捨てて祇王に走らせてゐるので、佛御前の性格が甚だ不鮮明なものとなつてゐる。これと同一材を複式夢幻能とした「佛原」に比べて見れば、その優劣が一層明らかに知られるのである。

名乘笛にて、ワキ瀬尾太郎、梨打烏帽子・白鉢卷・着附厚板・直垂上下・込大口・腰帶・扇・小刀の裝束にて、狂言從者（着附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束）に太刀を持たせて出で名乘座に立つ。

【一】ワキ「これは入道相國に仕へ申す。瀬尾の太郎何某にて候。さても淨海掌に天下を治め給ひ榮華の半ばにて御座候。ここに祇王御前と申す遊女、唯かりそめに淨海の御目にかかり給ひしが、御寵愛並びなし。日夜朝暮の御酒宴申すばかりなく候。又加賀の國より佛御前と申して、これも白拍子にて候が、淨海の御目にかかりたき由を申し出仕申され候へども、淨海の御諚には。如

【一】
○入道相國—平清盛をいふ。相國は太政大臣の唐名。
○瀬尾の太郎—清盛の臣。名は兼康、備前國の人。
○淨海—清盛の剃髮した後の名。長門本平家物語に「清盛は仁安三年十一月十一日歳五十一にて病に犯されて存命の爲に忽に出家す。法名を聖蓮、程なく改名して淨海と號す」
○榮華の半—榮花の最中。
○祇王御前—解説に平家物語の文を掲ぐ。
○佛御前—解説に掲げた。
○白拍子—遊女をいふ。平家物語「祇王の事」に、「抑も我朝に白拍子の始りけることは、昔鳥羽の院の御宇に

第一段

舞臺は京都、平清盛の館で、ワキ瀬尾太郎登場。

【一】瀬尾「私は太政大臣淨海入道（清盛）に仕へてゐる瀬尾の太郎何某といふものです。さて淨海には天下をわがものに治めて、榮華を極めて居られるのでありますが、こゝに祇王御前といふ遊女があつて、ふとしたことから淨海のお目にとまり、この上もなく御寵愛遊され、日夜朝暮の差別もなく酒宴をして、祇王をお側に侍らせて居られます。ところが、また加賀の國から都へ參つたもので、佛御前と申す、これも祇王と同じ白拍子の者があつて、淨海のお目にかゝりたいといつて參られたのですが、淨海は、たとへ神といはうが佛といはうが、祇王のゐる限りは對面

島の千歳若の前、彼等二人が舞ひ出したりけるなり。始は水干に立烏帽子、白鞘巻をさして舞ひければ、男舞とぞ申しける。然るを中頃より、烏帽子刀をのけられて、水干ばかり用ゐたり。さてこそ白拍子とは名づけれ」—間語にも同じ事を語つてゐる。

○流れをたつるは同じ事——同じやうに遊女で世を渡るものとの意。

【三】

○佛御前の訴訟故—佛御前をお召しになるやうにとお願ひの爲。

何なる神なりとも佛なりとも。祇王があらん程は御對面叶ふまじき由仰せ候處に。祇王の御申しには。いづれも流れをたつるは同じ事にて候へば。御對面なくては叶ふまじき由たつて御申し候ひて。この四五日は出仕をとどめ給ひて候。さる間今日御對面あるべき由仰せ出だされ候間。この由祇王御前に申さばやと存じ候

といひて舞臺際に出で、幕に向ひ、

【三】

ワキ「いかに案内申し候。淨海の御諚にて。祇王御前も佛御前も御參りあれとの御事にて。瀨尾の太郎が參りて候

ツレ祇王、面小面・鬘・鬘帶・着附摺箔・唐織着流・扇の裝束、シテ佛御前、面増・鬘・鬘帶・着附摺箔・唐織着流・扇の裝束にて出づ。ワキ先に立ちて舞臺に入り、脇座に坐し、ツレ・シテも後より入る。

ワキ(ツレに)「いかに祇王御前。何とてこの間は御出仕もなく候ぞ

は罷りたらぬ」と仰せられたのです。すると、祇王は『私も同じやうに遊女の身でございますから、佛御前の心中が思ひやられます。是非とも御對面下さいますやうに』と、達つて願ひ出でられ、その爲、この四五日は出仕も控へて居られるのです。それで、淨海も『今日は佛御前に對面しよう』と仰せ出されたので、このことを祇王御前に傳へようと思ふのです」

こゝ見物人に事件の次第を説明す。

【三】

舞臺は祇王の室。瀨尾太郎は祇王の室へ行つた態で、

瀨尾「御案内を願ひます。淨海の仰せに、『祇王御前も佛御前も參るやうに』との事で、瀨尾の太郎がお使に參りました」

ツレ祇王、シテ佛御前登場。こちに舞臺に入り清盛の館に來た態。

瀨尾「祇王御前、この間中はどうして出仕せられなかつたのです」

○今めかし—今更その必要のないこと。
○御申しにより—祇王のお願ひにより。
○御參りの上は候—佛御前の參られた上は、その必要があるまいとの意。
【三】
○願ひの絲—七夕祭に五色の絲を手向けて、願望の成就を祈ることがあり、この絲を願の絲といふ。
○色見えぬ—絲の五色にかけていふ。心の内には願つてゐても、その色を外に現さないとの意。
○闇の錦—闇夜に錦の衣を着る喩のやうに、美人に生まれた甲斐がない。漢書朱買臣傳に「富貴不レ歸二故郷一、如二衣レ錦夜行一」
○同じかざし—佛御前も祇王も同じ白拍子であるとの意。
○花蔓—花を髪飾にかけること。「かゝる」を呼び出す料としたのである。
○名高き御事—清盛をさしていふ。
○人をえらばせ給ふ—人によつて分け隔てをせられる。
○わが方の越の山風—佛御前の生國は加賀である。越とは廣く北陸地方をいふ。
○都人如何にと問はば山高

ツレ「唯今參り候事も。佛御前の訴訟ゆゑ候よ
ワキ「あら今めかしの御事や候。既に御申しにより。佛御前の御參りの上は候(シテに向ひ)いかに佛御前。唯今の御出仕めでたう候

【三】
シテ「申すにつけて憚り多く。御心の中も恥かしやさりながら。申さで過ぎばいとどしく。願ひの絲の色見えぬ。闇の錦のたとへても。身のはて如何になりぬらん。同じかざしの花蔓。かかる恨みは。身ひとりかや
地下歌「さしも名高き御事の。人をえらばせ給ふかや。上歌「わが方の越の山風吹くたびに。越の山風吹くたびに。高根に殘る天雲の。かくるる空もうき旅の何に心の急がれん都人。如何にと問はば山高み。晴れぬ思ひにかきくれて。ただ言の葉もなく露の。それならで古里の人目にかかる

祇王「それはお分りになつてゐる筈です。今日參るのも、佛御前に御對面になるやう、お願ひしたいからです」
瀬尾「それならば、もう御心配は入りません。もはやあなたのお願ひによつて、佛御前も參られたのですから」
瀬尾「やあ佛御前、御出仕になつておめでたう」

【三】
佛「自分から御對面を願ひ出でましたことは、ほんとに無躾なことで、あなた樣の御心に對しても恥かしう存じます。けれど、このまゝ申さないで、自分の願ひを外に現さなければ、誰一人知つてくれる人はなく、夜の錦の譬のやうに、わが身を徒らに朽ち果たすことでございませう。祇王御前と同じ遊女の身でありながら、どうして私だけがこのやうな悲しい思ひをするのでせうか。
淨海樣はあのやうに名高いお方であるのに、人によつて、かう分け隔てを遊ばすのでございませうか。
私はわが生國の北陸を出まして、寒い山風に吹かれて辛い旅を續け、氣も進まないながら、都へ參つたのでございます。そして都の人にどうしたのかと譯かれても、悲しい思ひに胸が一杯になつて、答へる言葉もなく、たゞ泣くばかりで、この賤しい姿を故郷の人に見られないのを、せめてもの慰みにしてゐるのでござ

み―古今集小野貞樹の歌を引いた。この下句「晴れぬ雲居にわぶと答へよ」
○なく露の―言の葉も無く、を泣くにいひかけた。
○人目にかかる―かゝるは露の縁語。
【四】
○相曲舞―曲舞を二人で相舞に舞ふこと。曲舞は當時白拍子などの舞つた俗舞。總説參照。
○ことふりぬれば―度々舞つて古くなつてゐるから。
○目がれて―目馴れての誤であらう。
○夕顏の―さぞと言ふといひかけて、花を呼び起す料とした。
○花の狩衣―花やかな狩衣
○有明月の―今一しほ興ありといひかけ、古今集壬生忠岑の「有明のつれなく見えし別れより」の歌を引き「つれなく」を呼び起した。
○面つれなき―つれなきは素知らぬ振との意で、心中に悲しみを懷きながら、顏色にそれと現さないことをいふ。
○われだに知れば―人は知らないでも、自分だけは知つてゐるから。

事あらじ
【四】
ワキ「いかに佛御前、あら面白の御述懷や候。又御諚には。御前にてそと御舞ひあれとの御事にて候
シテ「仰せに隨ひ立ち上り。まづ悦びの和歌の聲。いで祇王御前同じくは。相曲舞に立ち給へ
ツレ「妾はいつもの舞の袖。ことふりぬれば人々も。目がれて興やなからまし
シテ「げにげにさぞと夕顏の。花の狩衣烏帽子を着。袖めづらかに出でたたむ
ワキ「げに面白や舞人の。衣裳をかざらば今ひとしほ
地「有明月の影ともに。面つれなき心とはわれだに知れば恥かしや。思ひは朝まだき。花の衣裳をかざらんと。二人伴ひ立ち出づる二人伴ひ立ち

います」
【四】
瀬尾「やあ佛御前、なるほど面白い身上話だ。ところで、淨海の仰せに「自分の前で少し舞を舞へ」とのことですぞ」
佛「仰せに隨つて立上り、まづ御祝儀の和歌を謠ひませう。では祇王御前、同じことならば、御一所に相曲舞で舞ひませう」
祇王「私はいつも舞つて、ふるくさくなつてしまひましたから、どなたにも目馴れて、興味がございますまい」
佛「御尤もでございます。では、舞の狩衣烏帽子をつけ、美しく裝束をして致しませう」
瀬尾「いかにもそれは面白からう。舞の衣裳を飾つたならば、一入美しいことでせう」
佛「私は悲しい思ひを顏には現さず、知らない振りをしてゐるものの、たとひ人は知らないとしても、わが心に恥かしいことだ。（と獨言をいひ、思ひ直して、）あゝ私の考はまだ淺はかであつた。さあ舞裝束をつけませう」

○思ひは朝まだき｜思ひは淺はかであるといひかけて花を呼び起す。

【間】

と祇王と佛と二人連れ立つて出て行つた。

出づる

シテ・ツレ、中入。

【間】ワキ「いかに誰かある

狂言（ワキの前に出で）「御前に候

ワキ「祇王御前に佛御前を御作ひあつて。御前へ御出であれと申し候へ

狂言「畏つて候。（名乗座に出で）扨も／＼唯今の佛御前と申すは。加賀の國の人にて年は十六七にて御座候。總じて昔より多くの白拍子ありつれども。誠に容顏美麗なる女の。聲よくして今様を謠ひ舞の上手にて候間。これ程の女は京田舍にもあるまじくとて。洛中の人々褒め申し候間。佛御前思はれ候は。當時時めく清盛公へ參らぬこそ本意なけれ。遊び者の推參は苦しかるまじいとて。當所西八條へ參られしに。入道殿仰せには。左樣の遊び者は召しによつて參るべきに。召さぬに參るは推參なり。佛にもせよ神にもせよ。祇王かくてある上は。對面は叶ふまじとて追ひ返させ給ふを。祇王の取做しによつて召し出され候が。清盛公佛御前を御覽じて。はや御心移されたる樣に見え申して候。扨又祇王と申すも。隱れなき遊君にて。眉目形人に勝れ殊更心ばへよければ。入道殿御寵愛淺らず候が。唯今の體を見るに。定めて祇王はすてらるべきかと存じ候。總じて白拍子と申す者は。鳥羽の院の御時。島の千歳和歌の前二人の女。水干に精巧の大口を着。烏帽子を着刀をさして舞ひければ。男舞とはつけられたれ。又その後烏帽子を脱ぎ。水干に大口ばかりにて舞ひければ。白拍子と名づけられたると申す。いや獨言を申さずとも。裝束の事を申さばやと存ずる。（幕に向ひ）いかに祇王佛に申し候。裝束を召され候はば。急ぎ御前に御出であれとの御事にて候。とう／＼御出で候や

といひて狂言座に坐す。

【五】○陸奥の今日を―願ひは滿つといひかけ、陸奥の希婦の里を今日にいひかけた。○なまめきたてる―古今集僧正遍昭の歌「秋の野になまめき立てる女郎花あなかしがまし花も一時」を借りた。○女郎花―佛御前を喩へていふ。○巷にうたふ和歌の聲―支那の聖天子堯の代には、人民が君の德を稱へて巷に歌を謠つたといふ故事を引いていふ。こゝには清盛を祝つたのである。

【六】○金谷―晉の石崇が住んで綠珠といふ美妓を寵愛した地。○一褒の色を見せ―敵に攻められて、石崇も綠珠も忽に滅びたことをいふ。○姑蘇臺―呉王夫差が西施といふ美人を住ませた邸の名。○涅槃の雲に隱れぬ―涅槃は寂滅の意であるが、こゝには呉の滅亡した喩。○一去不來―盛んな時は一度去れば、また歸つて來ないこと。○送離累別―親しい人々に離別すること。

【五】

後ヅレ祇王、前裝束の唐織を脱ぎ、靜烏帽子・縫箔腰卷・長絹を着け、後ジテ佛御前も後ヅレと同樣の裝束にて出で、

後ヅレ「嬉しやな今ぞ願ひは陸奥の。今日を待ち得て舞人の。なまめきたてる女郎花

後ジテ「女姿に立烏帽子

ツレ「折から花の狩衣に

シテ「袖をつらねて

ツレ「立ち出づる

シテツレ一聲「よろづ代を。治めし君がためしには

地「巷にうたふ和歌の聲

〔中舞〕（シテ・ツレ相舞）

【六】

シテツレクリ「それ金谷の春の花は。一褒の色を見せ

地「姑蘇臺の秋の月は涅槃の雲に隱れぬ

シテツレサシ「一去不來の名殘送離累別の袂

地「いづれの日を經てか乾すことを得ん。誰あつ

【五】第二段

舞臺は前に同じ。

後ジテ佛御前、後ヅレ祇王御前と共に舞裝束を着へて登場。

祇王「あゝ嬉しいことだ。今日は私の願ひも叶うて、佛御前の女郎花のやうに美しい優しい舞姿が見られるとは」

佛「このやうに女の姿に立烏帽子を着まして……」

祇王「時季に適はしい模樣のついた狩衣を着て……」

佛「御一所にうち揃つて……」

祇王「さあ舞ひませう」

佛祇王「―――

『よろづ代を治めし君がためしには、巷に謠ふ和歌の聲』

（あなたが千年萬年變りのない太平の世をお治めになつた喜びに、人民が巷で御德をたゝへ歌を謠つて居ります）といふ歌を謠ひ、

〔中舞〕

を二人で相舞ひ、つゞいて、

【六】

佛祇王「―――

『昔晉の石崇は、綠珠と共に金谷に、樂しい春に耽つたが、忽ち敵に亡ぼされ、呉の夫差と西施とは、姑蘇臺に樂しい夢を結んだが、これまたやがて死に就

○昨日に變り今日にさめ―昨日見た夢は今日は覺めるが、今日はまた次の夢に入るとの意。
○色好みの家櫻―古今集序に「色好みの家に埋木の人知れぬ事となりて」とあるを借りて、家櫻と續けた。
○蘆垣の―世の交はりの惡しを蘆にいひかけ、垣の間をまめなるにいひかけた。
○まめなる所とて―古今集序、前揭の文の次―まめなる所には花薄穂に出すべき事にもあらずなりにたり―を借りた。眞面目な人の前へは出られないとの意。
○金玉玉殿―金殿玉殿の誤りか。
○漢宮四臺―漢の武帝が建てた神明臺、通靈臺、漸臺、柏梁臺の四をいふ。
○好色―容貌の美しい意。
○比翼連理―唐玄宗皇帝が楊貴妃と契を約した故事。白樂天の長恨歌に「在レ天願爲二比翼鳥一、在レ地願爲二連理枝一」とあるに據る。
○天長く地久し―同じく長恨歌の末句に「天長地久有レ時盡、此恨綿々無二絶期一」（ここは）
○漆膠の約―漆や膠でつけた如き、離れ難い契りをいふ。

て終日を語らはんや。あはれなりける

（舞クセ）

地クセ「世の中の夢現。昨日にかはり今日にさめ幻の夢も幾度ぞ。われら賤しくも。遊女の道を踏みそめし。心はかなき色好みの。家櫻花しぼみ。ただ埋木の人知れぬ。世の交はりや蘆垣の。まめなる所とて。初花薄露重み。穂に出でがたき身なるべし。ここに平相國。清盛の朝臣とて。今の世の武將たり。誰かは恐れざるべき。金玉玉殿に。美女の數を集めては。漢宮四臺もこれにはいかで勝るべき。中に祇王は好色の。その名にめでて參殿の。始めよりも色深く比翼連理のその契り。天長く地久し漆膠の約と聞えしに

シテ「時に佛と號しては

地「一人の遊女あり。名にし負ふ。佛神の御感應

いた。

榮耀榮華も一時で、一度去つては歸り來ず、たゞ思ひ出が殘るだけ。親しい人にも逢の別れは避け難く、その悲しみの消える時はなく、誰に訴へよう術もない。あはれ果敢ない世の中は、昨日の夢が今日覺むも、覺めては次の夢に入り、夢より夢に出入して、たゞ幻を追ふばかり。

殊にわれらは賤しくも、遊女の道に踏み初めて、賴みにならぬ浮氣男に戯れて、あたら盛りを人知れず、たゞ埋木の世を過し、晴れた世間の交はりは、眞面目な人に咎められ、顔出しならぬ身の上だ――」

（といふ意味のことを謡ひながら舞ふ。）

さて、この太政大臣平清盛朝臣は、世に勝れた武將で、誰一人恐れないものはない。その華美を盡した御殿には、數多の美女を集めて、漢武帝が建てた四臺もこれには及ぶまいと思はれるばかりである。その多くの美女の中でも祇王は殊に容色が勝れてゐたので、清盛はこれを愛して、始めて參殿した時から思ひ込み、比翼連理の契りを結び、天地の變る時があつても、二人の間は離れることがないと、堅い約束をしたのである。

ところが、ここに佛といふ一人の遊女があり、名も佛といふだけあつて、神

○彼に心掛帶の―佛御前に心を懸けるを掛帶にいひかけ、引きかへを呼び起す。掛帶は昔女の禮裝につけたものであるが、こゝには文飾としたのに過ぎない。○見るこそやがて思ひ草―佛御前の舞を見るのが、やがて祇王の物思ひの種となるとの意。草の縁で言の葉を呼び起す。
【七】

か人心うつればかはる習ひ故か彼に心掛帶の、引きかへて舞の袖、げに面白く花やかに、見るこそやがて思ひ草。言の葉もなかなかに、恥かしき餘りなりけり（と舞ひ上げて二人とも下に居る）

【七】

ワキ「いかに申し候、いづれも御舞面白く思しめされ候。然れども祇王御前は御休み候ひて佛御前一人舞はせ申され候へとの御事にて候

ツレ「妾はこれに在りてもよしなし。先々家路に歸り候はん

ワキ「いやいやさやうに仰せられ候ひては、御機嫌も如何にて候。暫くこれに御座候へ。いかに佛御前。淨海の御諚には、佛御前一人御舞ひあれとの御事にて候

シテ「いや祇王御前の御舞ひなくは。妾ひとりは舞ひ候まじ

の御感應を得たものか、とかく人の心は移り易いもので、清盛は一目これを見るより心をひかれて行つたのである。それにつけても、祇王は佛の面白い花やかな舞を見ることが、やがて物思ひの種となつたが、言葉に出すことも出來ず、たゞわが身を恥かしく思ふばかりであつた。

（二人の相舞は終る。）

【七】

瀨尾「淨海には、御兩人の舞姿をいづれも面白く思し召されたのです。だが、祇王御前の方はお休みになつて、佛御前一人で舞つて見よとの仰せです」

祇王「妾はこゝに居ても致方がありませんから、では一先私宅へ歸りませう」

瀨尾「いや〳〵そのやうにいはれては、淨海の御機嫌が惡いでせう。暫くこゝにお出でなさい。（佛御前に向ひ）佛御前、淨海の仰せには、佛御前一人でお舞ひなさいとの事です」

佛「いえ祇王御前がお舞ひにならなければ、私一人では舞ひますまい」

○羅綺の重衣たる―和漢朗詠集菅原道眞の句「羅綺之爲二重衣一、妬二無レ情於機婦一」をいふ。羅綺はうすもので輕い衣。機婦は機を織る女。
○人の心も煩はし―祇王の恨みが煩はしとの意。
○心に任せぬ―清盛に强ひられて、心ならずも舞ふことをいふ。
○返す返すも―舞の袖を翻すといひかけた。
○人は何とも―人は清盛を指す。
○花田の帶―花田色に染めた帶。花田色は變り易い色であるから、心の變り易い喩に用ゐ、帶の緣で「引きかへ」といふ。
○深き契り―清盛と佛御前との契りをいふ。
○虛言なく―僞りなく。佛御前と祇王との契りをいふ。

ワキ「御意にて候程に。急いで御舞ひあらうずるにて候

シテ「羅綺の重衣たる情なきことを機婦に妬む。いつしか人の心も煩はし。さりとては

とシテ立ちて次の謠に合せて舞ふ。

地「さりとては。心に任せぬこの身の習ひ。佛はもとより舞の上手。和歌をあげて袂をかへし。返してはうたふ。聲も霞むや春風の。花を散らすや舞の袖返す返すも。面白や

「破舞」

シテ「人は何とも花田の帶の

地「人は何とも花田の帶の。引きかへ心はかはるとも。祇王御前心に懸け給ふな。わが名は佛神かけて。深き契りの中ぞとはよしなや聞かじ。と諸共に虛言なくこそ。契りけれ

と舞ひ上げて常座にて留拍子を踏む。

淨尼「わが君の仰せだから、急いでお舞ひなさい」

佛御前立つて、

佛「羅綺の重衣たる、情なきことを機婦に妬む」

（かよわい美人は、うすものの衣さへ重く思つて、何故機織女がこんな重い着物を織つたのであらうとその不親切を恨む）といふ朗詠を謠つて舞ひ、

佛「あゝこのやうにしてゐては、祇王御前の恨みを受けるであらう。といつて、自分のやうな身分では、どうすることも出來ない」

と思ひながら、

もとより、佛は舞の上手であるから、美しい歌を謠ひ、袂を翻して舞ふ。その繰返して謠ふ聲は春の空の霞むがやうであり、その袂を翻して舞ふ姿は、春風の花を散らすがやうである。實に面白いことである。

「破舞」

と舞つて、祇王に向つて、

佛「淨海は如何に心變りせられませうとも、祇王御前、どうぞ心配しないで下さい。私の名は佛でございます。神佛に誓つて、淨海と深い契りを結んだなどといふつまらない噂を立てさせることは致しません」

と佛御前は祇王御前と眞心を以て堅い約束を結んだのである。

〔考　異〕

諸　流（寶　剛）

二流の間、殆ど差異がない。

古諸本（觀世流元祿八年本）

【一】ワキ「これは入道（元ナシ）相國に……さても淨海掌に天下を治め……申され候へども淨海の御諚（元佛御前と申て舞の上手の候。是は加賀國の者にて候が罷上りて候、其由申上て候へば。我君の仰）には如何なる神（元佛）なりとも佛（元神）なりとも……御對面（元ナシ）叶ふまじき由仰せ（元出されて）候處に祇王の御申しには何れも（元此由祇王御前に申て候へは）流れをたつる（元身）は（元何れも）同じ（元御）事にて候へば御對面なくて……申さばやと存じ候（元と御申により。只今御對面有へき由仰出され候）【二】ワキ「いかに案内……瀬尾太郎が參りて候（元いかに誰か有。祇王御前に佛御前を伴ひ急ぎ御參あれと申候へシカ〳〵）。ワキ「いかに祇王……ワキ「あら今めかし……めでたう候（元御參り先以めでたう候。シテ「御申により佛御前の御參りめでたう候）。シテ（元ナシ）「人々申すにつけて……【四】ワキ「いかに佛御前……御前にてそと（元御述懐尤にて候。又唯今仰出され候は。祇王御前と佛御前とあひ舞に）御舞ひあれ……シテ「仰せに隨ひ……相曲舞に立ち給へ（元ナシ）……シテ「げにげに……出でたゝむ（元ナシ）……地「有明の……恥かしや思ひは（元さこそ實。よそめも）朝まだき……【六】シテクリ「それ金谷の……は一衰の色を見せ（元十惡の里に散やすく）……【七】ワキ「いかに申し候いづれも……舞はせ申され候へ（元佛御前一人まはせ申され。祇王御前は御見物あれ）との……シテ「妾は……先々家路に歸り候はん（元歸らばやと思ひ候）。ワキ「いやいやさやうに……御座候へ（元御意にて候）……淨海の……佛御前（元に申候）……シテ「いや（元ナシ）祇王御前の……シテ「羅綺の重衣たる情なきことを機婦に（元事を）妬む（元と聞に）……地「さりとては……身の習ひ（元心に任せぬ此の身のならひ）……地「人は何とも……契りの中ぞ（元こ）とはよしなや……

金札（きんさつ）

観（寶 春 剛 喜）

解説

【能柄】祝言能（脇能） 半能（複式夢幻能）

【人物】ワキ 桓武天皇勅使、ワキツレ 同従者（二人）、（前シテ老翁）、（狂言 伏見社人）、シテ 天津太玉神

【所】山城國 伏見の里

【時】桓武天皇御宇（正月）

【作者】能本作者註文、二百十番謡目錄ともに世阿彌の作とす。金春禪竹の五音次第に祝言の例として、

夫久かたの神代より、天地開し國のおこり、天のにほこのすぐなるや、名もふたはしらの神ここに、八島の國をつくりおき、すべら代なれや大君の、みかげのどけきときとかや。あをによしならの葉もりの神こころ、〱、末くらからぬ宮こ路の、すぐなるべきかすがはらや、ふしみの里の宮つくり、おほうち山の影たかく、雲のうへ成玉殿の、月もひかりやみがくらん、〱

と、觀世流に省略したワキのサシ及び上歌を擧げて居り、同じく五音三曲集にも祝言骨味の例として、前揭と同一の文を擧げてゐる。言經卿記文祿四年三月廿九日の條に本曲註釋のことを記してゐる。

【原形】觀世流現行曲は原作の前半を省略したもので、もとはワキ名乘の次にサシ・上歌があつて、前シテ天津太玉神の神靈が老翁の姿で

登場し、サシ謡の後、ワキ・シテ掛合・地上歌・ロンギなどがあつて中入したものである。現在も他の四流は原形の通りに演じてゐるから、貞享本によつてその詞章を本文の間に插入し、語釋・通譯をも附けて置いた。

【梗概】桓武天皇が平安に都を奠め給うて、伏見に神殿を御造營遊ばされたのに就て、勅使が伏見へ行くと、天津太玉神が金札を降らして天降り、惡魔降伏國土守護を誓はれる。

【出典】この緣起の出所は未だ明かにし難い。

【概評】本曲の原形は脇能神事物として、莊重な曲柄で、殊に金札といふ劇的興味をも添へてゐるのであるが、めでたい曲であるが故に、祝言物として半能に省略した爲に金札といふ題名も空しくなり、筋も通り難いものとなつたのは、惜しいことであつた。これと同じ難に遭つてゐる曲に〔岩船〕がある。

【一】次第の囃子にて、ワキ勅使、風折烏帽子・着附厚板・長絹・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ從者二人、着附無地熨斗目・素袍上下・扇・小刀の裝束にて舞臺に入り、向合ひて、

ワキ ワキヅレ 次第「風も靜かに楢の葉の。風も靜かに楢の葉の。鳴らさぬ、枝ぞのどけき」

地取にワキは正面に向き、

ワキ「抑もこれは桓武天皇に仕へ奉る臣下なり。さても山城の國愛宕の郡に。平安の都を立て置き給ひ。國土安全のみぎんなり。同じく當國伏見の里に。大宮造りあるべきとの勅諚を蒙り。

【一】舞臺は初め京都で、ワキ桓武天皇の勅使、ワキツレの從者を隨へて登場。

勅使「風も靜かにそよ〳〵と吹いて、木の枝も動かない程のどかな、まことに太平の御代である」

と次第に御代の太平を祝ひ、

勅使「自分は桓武天皇にお仕へしてゐる臣下です。さて唯今は山城國愛宕郡に平安の都をお定めになつて、天下泰平の御時節であるが、また同じく山城國伏見の里に神社を造營せよとの仰せを承り、これから伏見へ行くのです」

と見物人に自己紹介をし、―以下道行に

【一】○楢の葉の―風も靜かになるを楢にいひかけ、「なら」の音を重ねて、鳴らさぬと續けた。○鳴らさぬ枝―王充の論衡に「太平之世、五日一風、十日一雨、風不レ鳴レ條」とあるに據り、太平を祝ふ詞とす。○桓武天皇―天應元年御即位、延暦三年都を奈良より山背國乙訓郡長岡に遷し、同十三年十月更に葛野郡宇太村に奠め給ひ、新京を平安京といふ。大同元年崩御壽七十。○愛宕郡―史實には違つてゐるが、夫木抄にも「愛宕

の里の大宮所」と詠み、何日の頃よりかこのやうに誤り傳へたのである。
〇みぎん―砌。時節。
〇伏見―山城國紀伊郡、京都の南に當る。
〇大宮造り―神社造營の意伏見の鷹匠町に金札宮といつて天太玉命を祀つた社がある。慶長以前は同郡久米村にあつたといふ。この社を指してゐるのであらう。
〇久方の―神の枕詞。こゝには久しいとの意を含めて用ゐた。
〇天の瓊矛―天沼矛。伊弉諾・伊弉册の二神が國土創生の時、海原を探る爲にお用ゐになつた矛。古事記日本書紀に見ゆ。
〇名も二柱の―「にぼこ」を二矛の意にとつて二柱とつづけたのである。二柱の神とは前揭の諾册二神を申す
〇すべら代―君が代。
〇青丹よし―奈良の枕詞。
〇葉守の神―木を守る神。楢の葉といひかけた。
〇菅原や―伏見の枕詞。古今集讀人知らずの歌に「いざこゝにわが世は經なむ菅原や伏見の里のあれまくもをし」
〇大内山―京都仁和寺の後の山。內裏の意を含めて用ゐた。

唯今伏見に下向仕り候

〽ワキサシ「それ久方の神代より。天地開けし國の起り。天の瓊矛の直なるや。名も二柱の神こゝに。八洲の國を作り置き。すべら代なれや大君の。御影のどけき。時とかや

〽ワキ上歌『青丹よし。楢の葉守の神心。楢の葉守の神心。末暗からぬ都路の。直なるべきか菅原や伏見の里の宮造り。大内山の陰高き。雲の上なる玉殿の。月も光や磨くらん月も光を磨くらん

【三】

〽シテサシ「あら貴の御造りや。聞くも名高き雲の垣。霞の軒も玉簾。かかる時代に逢ふ事よと。命うれしき長生の。あつぱれ老の思出や

ワキ「不思議やな參詣の人々多き中に。けしたる宜禰御幸の先に進み給ふ。そも御身はいづ

は省かれてゐる）

勅使「遠い神代の昔、天地開闢の初め、伊弉諾・伊弉册の二神が天の瓊矛を以て下界をさぐり、この日本の國をお作りになつてよりこの方、皇統は連綿としてうち續き、大君の御稜威によつて、天下はいつも安穩なのだ。そして今又、葉守の神の御守護をうけて、帝都の御治政がこの後愈〻正しく榮えるやうにとの思召で、伏見の宮に神社をお作りになるのであるが、さぞ都の御所のやうに立派なものが出來て、月の光のやうに輝くことであらう」

といつてゐるうちに、伏見の里に着いた心で、舞臺は伏見の里となり、神社の御造營が初まつてゐる態。

【三】

前ジテ天津太玉神靈、老翁の姿を装うて登場。

老翁「あゝ結構な御造營だ。話に聞いた出雲八重垣の宮のやうで、雲や霞か垣や軒を作つて、全く玉の御殿のやうだ。このやうなありがたい時節に逢ふのも、長生きをしたお蔭で、この年寄りの、ほんとによい思出だ」

と宮殿の樣を見て感歎してゐる態。勅使はこれを見て、

勅使「これは不思議だ。參詣の人々の多い

【三】
○霞の軒―宮殿が高く聳えて、霞が軒を作つてゐるとの意。
○玉簾―かゝるの序。
○けしたる―化したる。不思議な、變な。
○あこねの浦―阿漕が浦の誤か。
○竹の杖伏見は―竹の杖の節を伏見にいひかけた。
○深き井桁を切るなるは―前漢の枚乘が諫二吳王一書に「泰山之霤穿レ石、殫極之綆斷レ幹、水非二石之鑽一、索非二木之鋸一、漸磨使二之然一也」
○欄井―井桁のある井戸。

くより參詣の人ぞ
シテ「これは伊勢の國あこねの浦に住む者なるが。當社伏見の大宮造り。天も納受し地もうるほふ。王法を尊み來りたり
ワキ「そも王法を尊むとは。如何なる望みのあるやらん
シテ「そもかかる身の望みとは。そら恐ろしやこの年まで。『命すなほに愁ひもなく。上直なれば下までも。豊かに治まるこの國の
地下歌『千代をこめたる竹の杖。伏見はこれか宮所。參りて拜むこそ。朝恩を知る心なれ。」上歌
『春は花山の木を伐れば。春は花山の木を伐れば。袂にかかる白雪。深き井桁を切るなるは欄井の釣瓶繩。又泰山の山下水その巖石を切石

が、その中に樣子の變つた社人が先に立つて進んで行くのが變だ（社人に向ひ）一體あなたはどこから參詣なさつた方です」
老翁「私は伊勢國阿漕の浦に住んでゐるものですが、この伏見の社を御造營遊ばされて、定めし天の神も御嘉納遊ばされ、國土も榮えることであらうと、王法を尊んで參つたのです」
勅使「一體王法を尊ぶといはれるのは、どういふ望みがあるのです」
老翁「どうしまして。このやうな身に望みなどとは勿體ないことです。たゞこの年まで長生きをして、からだも丈夫で、何の心配もなく暮らして來ましたので、上の御治政が明かであれば、下萬民も豐かに榮える、この太平のわが國を、千代までも御榮え遊ばすやうにと、お祝ひの心をこめて、竹の杖をついて、伏見の社に參詣しましたもので、たゞ皇室の御恩を深くありがたく思つてゐるのです（こゝまで上）」
老翁―
『春の頃、花咲く山の木を伐れば、落花の雪が袂にふりかゝる。深い井桁を切るものは、井戸に釣した釣瓶繩。又山の下行く眞淸水は、いつとはなしに大きな岩を切る』

【三】

○木の間になさん槻の―古今集讀人知らずの歌「木の間よりもり來る月の影見れば心づくしの秋は來にけり」を引いて、月を槻にいひかけた。

○秋立つ桐の木―新古今集式子内親王の秋の歌に「桐の葉も踏みわけ難くなりにけり必ず人を待つとなけれど」

○名は春の木の―松は春の木としてめでたいものとするが、なぜ花が咲かぬといひかけて、榊とつゞけた。

【四】

○何々―文を讀み始める時に發する詞。

○眞如法身の―玉の曇りなき喩とした。

○玉垣の内―玉垣は神社の垣であるが、我國は神國であるから、日本全國を玉垣の内といつたのである。

○御裳濯川―伊勢大神宮の神境を流れる川。

○流れ絶えせず―皇統の連綿として續き給ふ喩。

【三】

地ロンギ「車を作る椎の木。車を作る椎の木

シテ「船を作する楊柳

地「木の間になさん槻の木

シテ「それは秋立つ桐の木

地「君に齢をゆづり葉や

シテ「千年の松は伐るまじ

地「名は春の木の枝ながら。花は、など榊葉。これは神の宿木。恐れあり伐るまじ

【四】

シテ「あら不思議や。天より金札の降り下りて候。即ち金色の文字すわれり讀み上げ給へ

ワキ「げにげに天よりも金札の降り下りて候ぞや。取り上げ讀みて見れば何々。「抑もわが國は。眞如法身の玉垣の。内にすめるや御裳濯川の。流れ絶えせず守らん爲に。伏見に住まんと誓ひをなす

【三】

老翁「――

「車を作るは椎の木、船を作るは柳の木。木の間を洩れ出る月の眺めのをかしいは、その名も月と同じ槻の木蔭。槻よりもなほをかしいのは、秋立つ頃の桐の蔭。

槻や桐は木材によいけれど、君に齢を讓るゆづり葉や、千年榮える松は切られない。松はめでたいものだから、なぜに花が咲かぬやら。同じ常磐の榊の木、これは神といふ字を添へたれば、勿體なくて伐られない」

三「木づくし」の謠を含む。

【四】

折柄天から金札が降つて來た體で、

老翁「おやこれは不思議だ。天から金札が降つて來た。それに金色の文字が書いてある。さあお讀みなされ」

シテ金札を脇僧に渡す。

脇僧「いかにも天から金札が降つて來た。取り上げて讀むと、何だと――

「抑もわが國は佛身のやうに光に滿ちた國で、あの澄みきつた御裳濯川の流れのやうに、絶えずこの國を守護する爲に、伏見に住まうと思ふのである」

と金札の文字を讀み上ぐ。

○天の磐座—天上にある神の御座。

○天津太玉の神—天照大神が天岩戸に籠り給うた時祝詞を奏して功を立てた神。忌部氏の祖神。

シテ「さてこの伏見とは、何と知ろしめされて候ぞ

ワキ「こともおろかや伏見の宮居。この御社の事なるべし

シテ「あらおろかや伏見とは。總じて日本の名なり。「伊弉諾伊弉冊の尊。天の磐座の苔筵に。伏して見出だしたりし國なれば。伏見とはこの秋津洲の名なるべし

地「人知らぬ事なり。この國も伏見里の名も。伏し見る夢とも現とも。分かぬ光の内よりも。金の札をおつ取つて。かき消すやうに失せけるが。暫し虚空に聲ありて

シテ「これは伊勢大神宮の御つかはしめ。天津太玉の神なり。「猶しもわれを拜まんと思はば、重ねて宮居を造り崇むべしと

老翁「ところで、この伏見とは何だとお思ひになります」

勅使「いふまでもない、伏見の里で、このお社のことであらう」

老翁「それは大きな間違ひです。伏見とは日本の總名です。伊弉諾・伊弉冊の神が高天原の御座所から伏して見出された國だから、日本のことを伏見といふのです。これは人の知らないことです」

といつて、老翁は伏見の里の夢とも現とも分らない光の中で、金の札を手にとつて、かき消すやうに見えなくなつてしまつたが、暫くすると、空中に聲がして、

老翁「自分は伊勢大神宮の御使の天津太玉神である。なほも自分を拜みたいと思へば、重ねて社を造つて崇めるやうに」

○迦陵頻伽　佛說に美しい聲で鳴くといふ鳥の名。

【五】○嬉しきかな—このワキ上歌一章は半能に省略した結果、前後の聯絡を調へる爲に、原文の道行の代りに、「老松」「呉服」と同文の待謡を加へて、これに道行と待謡との兩義を持たせたのである。

○風も嘯く寅の時—孝經序に「虎嘯而風起」とある句を借りて、寅の序とす。寅は今の午前四時。

【六】○古鳥蘇—壹越調の高麗樂。

○すめらぎ—天皇。

地「迦陵頻伽の聲ばかり、虚空に殘り雲となり、雨となるや雷の、光の内に入りにけり光の内に入りにけり　中入

【五】ワキ・ワキヅレ向合ひて、

ワキ・ワキヅレ上歌「嬉しきかなやいざさらば、嬉しきかなやいざさらば、この松蔭に旅居して、風も嘯く寅の時、神の告をも待ちて見ん神の告をも待ちて見ん

と謡ひて脇座に着く。

【六】出端の囃子にて、シテ天太玉神、面天神・黒垂・輪冠（金札を戴く）・金緞鉢卷・着附厚板・法被・半切・腰帶・扇の裝束にて弓矢を持ち一ノ松に留まり、

地「樂に引かれて古鳥蘇の、舞の袖こそゆるぐなれ

シテ「守るべし、わが國なればすめらぎの、萬代いつと、限らまし

と、迦陵頻伽のやうな美しい聲だけが空に殘つて、やがて雲が出て雨となり、雷が鳴り轟いて、その雷の光の中に入つてしまつた。

（前ジテ退場する。（以上觀世流現行曲の省略した部分）

【五】勅使は伏見の里で神の來現を待ち受けて、

勅使「おゝ嬉しいことだ。それではこの松蔭に一夜を明かして、夜の明方、神の御告げのあるのを待つて見よう」

（この一節、古謡本にはない）

【六】シテ天津太玉神登場。

（樂の音に誘はれて、古鳥蘇の曲を舞ふ舞袖が翻るのである）

地「自分はこの國を守るのである。わが日本の國は神國であるから、天子の大御代は千代萬代に限りなく御榮えになるの

地「限らじな。限らじな。榮ゆく御代を。守りのしるし

シテ『ただ重くせよ。神と君

地「重くすべしや重くすべしや扉も金の御札の神體。光もあらたに。見え給ふ

と舞臺に入り、これより謠に合せて舞ふ。

地「四海を治めし御姿。四海を治めし御姿

シテ『あらたに見よや君守る

地「八百萬代の。しるしなれや

シテ『惡魔降伏の眞如の槻弓

地「さて又つぎには狹蠅なす

シテ『あらぶる神も祓へのひもろぎ

地「その神託は。數々に。左も右も神力の。惡魔を射拂ひ清めをなすも（弓を番へて放ち）。金胎兩部の。かたちなり

だ。だから、國土守護の社を立派に建てて、神と君とをよく崇敬しなければいけないぞ」

と、金色の扉を押し開いて、かの金札をお降らしになつた神が、光もあらたかに現れ給うたのである。

天下をお治めになつたこの神の御姿は、實にあらたかなことである。

神「よく見よ。わが君を守護し奉り、千代八千代の御榮えをお護りするしるしとして、惡魔を降伏する貴い弓矢を持ち、また五月蠅のやうに涌き立つ惡神を追ひ拂ふ爲に榊を持つてゐるのだ。神の助けは數々あつて、左の手にも右の手にも、神力のあらたかな武器を持ち、惡魔を討ち拂ひ清めるのであつて、金剛界・胎藏界の兩部を具足した、圓滿完全な神姿であるぞ」

○重くせよ―尊重せよ。
○金の御札の神體―天津太玉神を指す。
○眞如の槻弓―佛力の强い弓との意。眞如は絕對平等の理體をいふのであるが、こゝにはたゞ佛といふほどの意に用ゐたもの。槻弓は槻で作つた弓であるが、こゝには眞如の月にかけて文飾としただけである。
○狹蠅なす―「なす」は如くとの意。出盛り時の蠅のやうに、惡神の騷しく涌き立つこと。
○祓―罪穢れを拂ひ淸淨にする神事。拾遺集藤原長能の歌に「さばへなす荒ぶる神もおしなべてけふはなごしの祓なりけり」
○ひもろぎ―神籬の意にも神の供物の意にも用ゐるがこゝでは槻弓に對して、祓ひの榊といふ意に用ゐたのである。
○金胎兩部―智差別門の金剛界と理平等門の胎藏界との兩部。この二面を具へた圓滿完全な神姿の意。

〔舞働〕

【七】

シテ『とても治まる國なれば

地』とても治まる國なれば。なかなかなれや。君は船。臣は瑞穂の國も豐かに治まる代なれば。東夷西戎。南蕃北狄の。恐れなければ。弓をはづし。劍を納め、君もすなほに民を守りの御札は宮に。納まり給へば影さしおろす。玉簾。影さしおろす。玉簾の。ゆるがぬ御代とぞ。なりにける

と常座にて留拍子を踏み、舞ひ納む。

〔舞働〕に惡魔降伏の勇ましい様を示し、

【七】

(地)この日本の國は實によく治まつて、「君は船民は水」といふ諺の通り、君臣一致して、國土は豐かに天下のうち治まつた御代であるから、四方の外敵の襲ひ來る心配もない。だから、弓を外し劒を收めよう」

といつて、聖天子の御代に人民を守護せられる金札の神は、社殿にお入りになると、神の御影がさして、社殿の玉簾は下され、世は動きのない太平となつたのである。

【七】○なかなかなれや―尤もなことであるとの意。○君は船―君臣のよく一致することを「君は船臣は水」(荀子に「君者船也庶人者水也」)といふので、臣は水といひかけて瑞穂とつゞけた。○瑞穂の國―日本。○東夷北狄―支那人が四方の野蕃人に對してつけた名。○弓をはづし―太平で武力を用ゐる必要がない意。詩經に「載戢二干戈一、載櫜二弓矢一」○影さしおろす　神の御影のさすと、簾をさし下すとを兼ねていふ。簾を下すは神が神殿内に入り給ふこと。○ゆるがぬ御代―簾の動かぬと御代の動かぬとを兼ねていふ。

〔考　異〕

諸　流　(五　流)

寶・春・剛・喜の四流は觀世流の原形(貞享本正德本等)と略同じである。

古諸本　(貞享二年本)

解説に述べた省略の外は同文である。

草薙　　寶

解説

【能柄】　四番目　複式夢幻能

【人物】　ワキ　惠心僧都、前シテ　花賣男（日本武尊の靈）、前ツレ　花賣女（橘姫の靈）、狂言　熱田社人、前シテ　日本武尊、後ツレ　橘姫

【所】　尾張國　熱田神宮

【時】　一條天皇頃．五月（四月）

【作者】　作者及び演能に關する古記錄は見當らない。

【梗概】　惠心僧都が熱田の宮に參籠してゐると、每日花賣りの男女が來るので、その人となりを尋ねると、自分達夫婦は草薙の神劒を守る夫婦である。七日結願の夜、燈火の影に眞の姿を見せよう」といつて消え失せる。やがて御殿が鳴動して、日本武尊と橘姫が現れ出で、草薙の神劒を以て東夷を平らげ給うたことを語られる。

【出典】　日本武尊東征の事は、記紀ともに詳記してゐる。今書紀の文を抄出すると、卷七景行天皇紀に、

四十年夏六月、東夷多叛、邊境騷動。……則天皇持二斧鉞一、以授二日本武尊一曰、朕聞、其東夷也、識性暴強、……亦山有二邪神一、郊有二姦鬼一、遮レ衢塞レ徑、多令レ苦レ人、……願深謀遠慮、探レ姦伺レ變、示之以レ威、懷之以レ德……冬十月壬子朔癸丑、日本武尊發路之、戊

午枉レ道拜二伊勢神宮一、仍辭二于倭姬命一……倭姬命取二草薙劒一、授二日本武尊一曰、愼之莫レ怠也、是歲日本武尊初至二駿河一、其處賊陽從之、欺曰、是野也麋鹿甚多、氣如二朝霧一、足如二茂林一、臨而應狩、日本武尊信二其言一、入二野中一而覓レ獸、賊有二殺レ王之情一、放レ火燒二其野一、王知レ被レ欺、則以レ燧出レ火之、向燒而得レ免、一云、王所レ佩劒叢雲自抽之薙二攘王之傍草一、因レ是得レ免、故號二其劒一曰二草薙一也、叢雲此云二茂羅玖毛一王曰、殆被レ欺、則悉焚二其賊衆一而滅之、故號二其處一曰二燒津一。

即ち本曲はこの史實に本づいたものであるが、これを素盞嗚尊と結びつけ、大蛇が尊の東征を妨げようとしたといふのは、平家物語劒巻に、

日本武尊これ（天叢雲劒）を帶して、東國に下り給ふに、道に不思議あり。出雲國にて素盞嗚尊に害せたりし、八岐大蛇天降り、無體に命を失はれ、劒を奪はれし憤散せず、今日本武尊の帶して東國に赴き給ふを、せき留めて奪ひ返さんその爲に、毒蛇となりて、不破關の大路を伏塞ぎたり。尊事ともし給はず、躍り越えてぞ通られける。

とある傳說から出たものであらう。（源太夫）の解說參照。

【概評】本曲と同樣の說話を取扱つた曲に（源太夫）があり、本曲はこれに據つた所が多いやうに思はれるのであるが、（源太夫）が奇想に秀れてゐるのに比べて、これは平凡であり冗漫である。寶生流の現行曲にクセの一章を省略したのも、この缺點を棄てようとした爲であらうが、なほ且冗漫の感を離れることが出來ない。本曲の新しい試みは、最勝王經の講讀と花賣りとにあるが、花賣りは（通小町）の木の實から出たもののやうで、それよりは遙かに劣つて居り、最勝王經の讃歎も、亦本曲の主題たる神劒の功德讃美の勢ひを弱めてゐるのである。佳作とは認められない。

【一】名乘笛にて、ワキ惠心僧都、角帽子・著附無地熨斗目・水衣・腰帶・扇の裝束にて出で、

ワキ「これは比叡山に住む惠心の僧都にて候、われこの程尾張の國熱田に參り、一七日參籠申し。

【一】前段

舞臺は尾張熱田神宮で、ワキ惠心僧都の登場。

惠心「私は比叡山に住んでゐる惠心僧都ですが、この間中、尾張國熱田神宮に參詣し、一七日お籠りして、最勝王經を讀誦

【一】〇比叡山—山城近江の國境にあり、山上の延暦寺は傳敎大師の建立したもので、天台宗の總本山。〇惠心の僧都—名は源信、姓は卜部、大和國葛城上郡當麻の人、比叡山に上り慈

惠に仕へて精を勵まし、名僧の聞え高かつた人。寛仁元年六月七十六歲で寂。
○熱田—草薙の神劍を奉祀した宮。日本書紀景行天皇五十一年の條に「初日本武尊所佩草薙横刀、是今在二尾張國年魚市郡熱田社一也」
○最勝王經—委しくは寶光明最勝王經といふ。天下太平の祈禱として講ぜられ、惠心僧都在世の一條天皇御宇には最も盛に行はれた。
【二】
○時鳥花橘の—新古今集讀人知らずの歌「時鳥花橘の香をとめて鳴くは昔の人や戀しき」を引いた。
○香をとめて—香を尋ね求めて。
○鳴くや五月の—古今集讀人知らずの歌「時鳥鳴くや五月の菖蒲草あやめも知らぬ戀もするかな」を引いた。
○これも立ちそふ—夏の立つと、夫婦の立ち添ふと。
○碓氷山—袖の薄いを碓氷にいひかけた。碓氷山は信濃上野の國境にあり、日本武尊御東征の時、妃橘姫の相摸の海に入水せられた事を歎いて「あづまはや」と仰せられたと傳ふる所。
○隔てし中—碓氷山が二國を分け隔ててゐることに、

最勝王經を講じ奉り候。又ここにいづくとも知らず男女の候が。草花を持ちて來り候。今日も來りて候はば。如何なる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候

といひて脇座に行き下に居る。

【二】

一聲の囃子にて、シテ花賣男、着附厚板・水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて竹に草花を挿して持ち、ツレ花賣女、面小面・鬘・鬘帶・着附箔・唐織着流の裝束にて出で、

シテツレ 一聲「時鳥。花橘の香をとめて。鳴くや五月の、あやめ草

シテサシ「これは上野に見ゆるかの岡に草を刈り。賣りて命の露をつぐ。荒村の野人にて候なり

ツレ「これも立ちそふ夏衣。重ねの袖は碓氷山。隔てし中を忘れねば。實さへ花さへ常磐に賣る。

シテ「それ人間の容貌は。朝に榮え夕に衰へ。電光石火の光の陰。時人を待たぬ蘆の屋の

申し上げてゐるのです。ところが、こゝへ何處の者か分らない男女の者か、草花を持つてくるのです。それで、今日も來たならば、どういふ者か、名を尋ねようと思ひます」

と見物人に自己紹介をする。

【二】

シテ日本武尊、花賣男を裝ひ、ツレ橘姫、花賣女を裝うて登場。

男女「五月、菖蒲の花咲く頃には、時鳥が橘の香を尋ね求めて、鳴き渡ることだ」

と、この頃の景趣を述べ、

男「私は山手の方に見えるあの岡で草を刈つて賣り、はかない命を繋いでゐる、片田舍の賤しい男です」

女「これに連れ添つて、夏衣の薄い着物を着てゐる私は、一度夫婦別れをした悲しみが忘れられないので、いつも一所に連れ添うて、實も花も薫りの長いといはれてゐる橘を賣つてゐる、貧乏女でございます」

と自己紹介し、

男「一體人間の容貌といふものは、若い時は美しくても、すぐ衰へてしまふもので、

橘姫が尊に別れて入水せられたことを兼ねていふ。○實さへ花さへ―萬葉集に「橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれどいやとことはの木」とあるを引いた。○橘の貧女・橘妃であることを仄かしていふ。○人間の容貌は朝に榮え―和漢朗詠集大江朝綱の詩句「朝有二紅顏一誇二世路一暮爲二白骨一朽二郊原一」に據つた。○電光石火―世の無常であることの譬。寶王論に「人生在レ世如二石火電光一」○蘆の屋の―足を蘆に、屋を矢にいひかけた。○月は見んに見えじ―この上歌「雲雀山」後段の地上歌と同文。この句和歌のやうであるが出所未詳。○恥かしの森―恥かしを羽束師の森にいひかけ、森の下草を呼び起した。羽束師の森は山城國乙訓郡にある○日頃經て―これも引歌らしいが出所が分らない。○匂ひ求めて尋ねくる―時鳥もその花の香を慕つて尋ねてくるといふ名花であるから買ひ下さいとの意。【三】○白露の―數は知られずといひかけた。

シテツレ下歌「入るより早く明け暮れて限りや涙なるらん。上歌「月は見えじながらへて、月には見えじながらへて、浮世を廻る影も恥かしの森の下草咲きにけり花ながら刈りて賣らうよ。日頃經て待つ日は聞かず時鳥、匂ひ求めて尋ねくる。花橘や召さるる花橘や召さるる

【三】
ワキ「いかに申すべき事の候、かたがたの持ち給ひたる草花の名を承りたく候
ツレ「なうこの橘召され候へ
シテ「この草花召され候へ。二「色々の
地「色々の、草木の數は白露の、枝に霜は置くとも猶常磐なれや、橘の、目覺し草の戲れ。お僧の身には何事もつつむとしはなくとも。說き置く法の古を、忍ぶ草を召されよや忍ぶ草を召されよや

人生の果敢ないことは、電の光や石を打つ火がすぐ消えてしまふやうなもので、時間は人を待たず、足早く過ぎて行くのだ、それにつけても、明暮悲しい思ひに涙の盡きる時はないのだ。自分達も月は見たいと思ふが、この恥かしい姿を月に見られたくはない。このやうなしがない暮らしをして、生き長らへてゐる自分達の姿が恥かしい。……おゝあの森の下草が咲いてゐる。花のまゝ刈り取つて賣らう」
（獨言のやうにいひ、僧都に向ひ、
男女「古歌に―
「日頃經て待つ日は聞かず時鳥匂ひ求めて尋ねくる……』
（自分が永い間時鳥の聲を聞きたいと思つて待つてゐる時には一聲もせず、花橘が咲くと、その匂を尋ね求めて、やつてくる）
と詠まれてゐます花橘をお買ひ下さいませんか」

【三】
僧都、二人に向ひ、
僧都「もうし、そなた方が持つて居られる草花の名は、何と申すのです」
女「もうし、この橘をお買ひ下さい」
男「この草花をお買ひ下さい。草木には色色數知れず種類がありますが、枝に霜が置いても、葉は常磐で、花も實も盛りの長いのは橘で、よいお目の慰めでござい

○枝に霜はおくとも―「實さへ花さへ」の語釋に掲げた萬葉歌を引いた。
○目覺し草―橘の葉といひかけた。目を慰める材料の意。草の名ではない。
○つつむとしはなくとも―法華經に玉を衣に包むといふ故事のあるに據る。
○忍ぶ草―草の名。古を忍ぶといひかけた。

【四】

○權扉―權悲といひかけた。權悲は佛の權智から起す大悲。

【四】

ワキ「草花の數は承り候。扨々御身は如何なる人ぞ名を御名乘り候へ

シテ『まづかやうに承り候。御身は如何なる人にて御座候ぞ

ワキ「さん候これは比叡山に住む惠心の僧都にて候が。當社に參り一七日最勝王經を講じ奉り候

ツレ『さてはありがたや我等が望む御經なり

シテ「われ久しく當社の權扉を押し開き。長へに。國家を守る

シテ ツレ『然りといへどもなほ五穀を成就せしめ。人壽圓長なる事を求むるに。唯この經の德ならずや

シテ「又我等二人は夫婦の者。或は草薙の神劍を守る神となる

ます。それに花橘は昔を忍ばせる花だと申しますから、と申しても、お僧さまには、何も身にお包みになつていらつしやる昔の思出もございますまいが、說經の昔を忍ぶといふ思召で、どうぞお求め下さい」

【四】

惠心「草花のことはよく分りました。ところで、あなたはどういふ方なのです。名を聞かして下さい」

男「さう仰しやるあなたはどういふ方でございます」

惠心「さやう、私は比叡山に住んでゐる惠心僧都ですが、御當社に參り、一七日最勝王經を讀誦申しあげてゐるのです」

女「それはまあ有りがたいこと、それは私達の望みの御經です」

男「自分は長い年の間、當社に垂跡して、永久に國家を守護してゐるのだが、この國土の五穀が豐かに實のり、人々の壽命の長久なのは、これは全くこの經の御蔭によるのだ」

男「自分達二人は夫婦の者で、自分は草薙の神劍を守る神となつたのだ」

ツレ「又は蓬が島とかや。常世の木の實の名をとめて。齢を延ぶる仙女となる

シテ「七日の御經結願の夜

地「燈火の影にたち添ひて姿を見え申すべしと。語れば白鳥の。峯の薄雲立ち渡り。風すさまじく雨落ちて。暮れ行く空は薄墨のかき消すやうに失せにけりかき消すやうに失せにけり

シテ・ツレ中入。

女「そして私は又、この所を蓬萊島とか申すさうですが、私の姓の橘を仙界の木の實といはれてゐる通りに、命を延べる仙女となつたのです」

男「では僧都、一七日御經讀誦の結願の今夜、燈火の影に現れて、わが姿を見せよう」

といふや、白鳥の峯に雲が立ち渡り、すさまじく風が吹き雨が降り、やがて日も暮れて、空が薄墨色にかき昏ると、その中にかき消すやうに消え失せてしまつた。

【間】　狂言熱田社人、梨打烏帽子・上頭掛・着附厚板・縷水衣・括袴・脚半・腰帶・扇の裝束にて出で、

狂言「かやうに候者は。熱田大明神に仕へ申す社人にて候。こゝに惠心僧都と申す御方。當社へ御參詣あり。一七日御參籠あり最勝王經を御讀誦なされ候間。我等も御見舞申さばやと存ずる。(ワキの前に出で)いかに申し候。是は當社に仕へ申す社人にて候が。御經聽聞の爲參りて候

ワキ「御參りありがたう候。扨かたがたに尋ねたき事の候。思ひもよらぬ申し事にて候へども。この所に於て日本武尊橘姫の御事。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「何と當社の神秘を語り申せと仰せ候か。總じて神の事あさあさしくは申さぬ事にて候が。御尋ねにて候間。御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「さる程に當社の古を尋ね奉るに。神代にては素盞嗚尊と申し。出雲の國簸の川上に。大蛇を

○蓬が島―仙界の蓬萊山。俗說にこの島は日本をいふといひ、更に狹めて熱田を指すともいふ。神社考に「支那諸書指ニ言蓬萊一者、於ニ日本一有ニ三所一、一曰紀州熊野、一曰駿州富士、一曰尾張熱田」即ちこゝには熱田說を採つたのである。

○常世の木の實―橘の事。日本書紀垂仁天皇九十年に「天皇命ニ田道間守一、遣ニ常世國一、令レ求ニ非時香菓一、今謂レ橘是也」常世は神仙界。

○名をとめて―名を留めて名の通り。

○結願―日數を定めて行ふ立願修法の終りの日。

○白鳥の峯―熱田境内の西にあり、日本武尊を祀る。

○かき消すやうに―墨の緣語、書きといひかけた。

【間】

○あさあさしく―輕々しくあらはに。

【五】

従へ給ひ。かの大蛇の尾にありしを。天の村雲の劒と申し。伊勢大神宮にこめ置き給ひたると申す。その後人皇十二代景行天皇の皇子日本武尊と現じ。東夷を御退治の御時。かの劒を伊勢より申し受け給ひ。蒲原まで御下向候處に。東夷十萬餘騎冑を脱いで矛を伏せ降參す。それより尊は富士の裾野にて御狩して慰み給ふに。夷四方の草に火をかけ燒き奉らんとせしに。かの寶劒にて草を薙ぎ給へば。猛火は却つて夷敵を燒き亡ぼし申し候。それよりこの劒を草薙の劒と名づけ給ふ。その後尊橘姫と諸共に宮居し給ひ。今に至るまで靈劒あらたに御座候。又八劒の宮と申すは。村雲の劒に劣らぬ御劒を七振まで作り込み。村雲を添へて八劒の宮と申し奉り候。總じて神祕樣々御座候へども。淺しく申さぬ事にて候。扨何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。われこの程御經讀誦申し候處に。いづくともなく女性と若き男の。草花を持ちて來られ候。即ち今日も來られ候程に。草花の名を尋ねて候へば。色々戲れを申され。草薙の神劒を守る神なりといひもあへず。そのまゝ姿を見失うて候よ

狂言「是は奇特なる事を仰せ候ものかな。扨は日本武尊橘姫假に現れ給ひたると存じ候間。重ねて奇特を御覽あれかしと存じ候

ワキ「彌〻信心を致し重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「御用の事も候はゞ仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【五】

ワキ「御殿忽ち鳴動し。御殿忽ち鳴動し。日月光り

【五】

後段

[illegible]御殿が急に鳴り動いて、雲が晴れて

【六】
○五衰の眠り—天人の衰へ。天上界にも命終の時來り、衣服垢穢、頭上華萎、身體臭穢、腋下汗流、不ㇾ樂二本座一の五衰相が現れるといふ。
○無上正覺の月—この上もない悟りを月の明らかなことに喩へていふ。
○源太夫—日本武尊に幸せられた岩戸姫の父。「源太夫」參照。
○橘姫—日本武尊の妃弟橘媛、日本書紀に穗積氏忍山宿禰之女也といふ。
○景行天皇—紀元七百三十一年御卽位、御在位六十年壽百四十三。
○日本武の尊—小碓尊。日本武は川上梟帥がその武勇に驚歎して奉つた御名。
○素盞嗚の神靈なり—草薙劒は、素盞嗚尊が大蛇退治の際、お見出しになつたもので、その神劒を以て日本武尊が危難を免がれ給うた緣により、附會したのである。「源太夫」參照。
【七】
○景行天皇十一年—日本書紀には景行天皇四十年とある。

雲晴れて、山の端出づる如くにて、現れ給ふ不思議さよ現れ給ふ不思議さよ

【六】 出端の囃子にて、後ジテ日本武尊、面三日月・黑頭・白鉢卷・唐冠・著附厚板・法被・半切・腰帶・扇・劒の裝束、後ヅレ橘姫、面小面・鬘・鬘帶・黑垂・天冠・着附箔・長絹・白大口・腰帶・扇の裝束にて出で、

後ジテ「あらありがたの御經やな。燈火の影に姿を見え、五衰の眠りを無上正覺の月に覺まし、衆生等も同じく、息災延命なる事を守るなり

後ヅレ「われは熱田の源太夫が娘、橘姫の靈魂なり

シテ「我はこれ景行天皇第三の皇子。日本武の尊

地「神劒を守る神となる。これ素盞嗚の神靈なり

【七】
地サシ「抑も人皇十二代、景行天皇十一年、東夷頻りに起りしかば、依つて關の東穩かならず。急ぎ退治すべしとて、第三の皇子日本武の尊を下

月日の光が山の端から出るやうに、神がお現れになつた。實に不思議なことだ」

【六】
後ジテ日本武尊、後ヅレ橘姫登場。

尊「あゝありがたい御經だ。この御經のお蔭で、燈火の影にわが姿を現し、天人五衰の迷ひを離れ、無上の悟りを開いて、衆生等も自分と同じやうに災禍を免れ長命するやうに守護しよう」

姫「自分は熱田の源太夫の娘の橘姫の靈です」

尊「自分は景行天皇第三の皇子の日本武尊で、神劒を守護する神となつたもの、即ち素盞嗚神の神靈である」

【七】
尊「さて人皇十二代景行天皇の十一年、東國の惡者どもが叛亂を起して、關東の方が不穩であつたので、天皇は第三の皇子日本武尊に「急いでこれを退治せよ」とお命じになつた。それで、自分はそれか

○伊勢皇大神宮に申させ給ひて——日本武尊東夷御征伐の時、伊勢を拜し、御叔母倭姫命から、當時伊勢に奉置せられた神劍を授けられたこと、日本書紀、古事記ともに見ゆ。
○素盞嗚の尊に斬られし大蛇——この神話「大蛇」に委しく見ゆ。
○二村山、尾張國愛知郡にも、三河國額田郡にもある。こゝには前者を指すか。平家物語劍卷には美濃國不破關の事としてゐる。解說參照。

し奉る
シテ『その後伊勢皇大神宮へ申させ給ひて
地『熱田の神劍をも下し奉り給ふ
シテ「かくて東夷を平らげんと發向するところに、出雲の國にて素盞嗚の尊に斬られし大蛇、件の劍をたぶらかさんと、大山となつて道を塞ぐ。されども事ともせず驅け破つて通りしより、今の二村山となる。その後駿河の國まで攻め下るに、夷敵十萬餘騎、兜を ぬぎ鉾を伏せて降參し。頻りに御狩の御遊をすすむ。頃は神無月十日餘りの事なれば、冬野の景の面白さに、何心なく打ち出でたりしに。夷四方の圍みをなし。「枯野の草に火をかくれば
地「餘焔頻りに燃え來り。餘焔頻り に燃え來り。遁れ出づべき方もなく、敵攻鼓をうちかけて火

ら伊勢皇大神宮に參詣して、草薙の神劍を授けられたのである。——
かうして、自分は東國の惡者を退治しようと東へ出掛けたところ、出雲國で素盞嗚尊に斬られた大蛇が、あの神劍をだまかして奪ひ取らうと企て、大山に化けて、通る道を塞いだ。しかし、それを譯もなく驅け破つて通つたので、その山が二に分れて、今の二村山となつたのである。その後、駿河國まで攻め下ると、惡者どもも十萬騎が兜を脫ぎ鉾を伏せて降參し、そして頻りに御狩のお遊びを勸めた。その時は十月十日頃であつたので、冬野の景色の面白さに誘はれて、何心なく狩に出かけると、惡者どもが四方を取圍んで、枯野の草に火をかけたから、焰が盛んに燃えて來て、遁れ出る途もない。敵はこれに乘じて、攻鼓をうち、火焰を放つて、攻めかゝつた。——

焰を放してかかりけるに

シテ「尊劒を拔いて

地「尊劒を拔いてあたりを拂ひ忽ちに。焰も立ち退けと。四方の草を薙き拂へば。劒の精靈嵐となつて。焰も草も吹き返されて。天にかかやき地にみちみちて。夷の陣に吹き暗がつて。猛火は却つて敵を焼けば。數萬の夷ども。皆焼け死にてその跡の。おきは積つて山の如し。それより名づけつつここを興津と夕汐の。御劒も納まり尊もつつがましまさず。世を治め給ひし草薙の劒はこれなり

【八】

地（キリ）「その後四海穏かに。その後四海穏かに。國に飛火の名を聞かず。當社ふりぬる御劒の。久しき代々に末を經神道も榮え國も富み。人も息災なる事は。唯この經の徳とかや唯この經の

○おきは積つて—「おき」は燠で、火の燃え殘つて、炭火のやうになつたものをいふ。

○興津—駿河國にあり、燠の積つた所といふ意味から「おきつ」といふと。

○夕汐の—と言ふといひかけ、汐の滿つを御劒にいひかけた。

○飛火—烽火。敵の攻め來る時、高く築いた壇の上などに、薪を積んで火を點じ、味方の軍に知らせる合圖としたもの。

しかし、自分は劒を拔いて、四方を拂ひ、「直に火焰も立退け」と、あたりの草を薙ぎ拂ふと、劒の精靈が嵐となつて、火焰も草も敵の方へ吹き返したので、火焰は天に輝き地に充ち滿ちて、惡者の陣を吹き掩うた爲、猛火は却つて敵を燒くこととなり、數萬の惡者は皆燒死に死んでしまつた。その跡の燠が積つて山のやうになつたので、この地を興津といふのである。——

かうして、神劒も熱田の宮に納まり、自分も無事に難を免がれ、世を治めたので、草薙の劒とは卽ちこの神劒をいふのである」

【七】

章「その後は天下安穩で、敵を警戒する爲に烽火を備へる必要もなく、神劒はそれ以來年久しくこの社に納まり、幾千代かけて、神道も榮え、國も富み、人も無事となつたので、これも實にこの最勝王經の德によるのた」

と佛德を讃へて退場。

徳とかや

と舞ひ納めて幕に入る。

〔考異〕

古謡本（觀世流貞享三年本）

【三】ワキ「いかに申すべき事の候（貞シテ「何事にて候ぞ。ワキ）かたがたの持ち給へる草花の名を承りたく候（貞候〳〵）。ツレ「なう（貞〳〵）この橋……【四】ワキ「草花の數は承り候（貞ナシ）扨々御身は……シテ「まづかやうに承り候御身（貞ナシ）は…… ワキ「さん候（貞ナシ）これは……最勝王經を講じ奉り（貞ナシ）候…… 【六】シテ「あらありがたの御經やな（貞〳〵。はづかしや）篝火の影に……地「熱田の神劍を下し奉り給ふ（貞クセ「すでにしんはつの日。熱田の源太夫。宮かつまるのよていにて。一夜假寢の草筵。袖しく夜半のつれ〴〵に。宿の少女のなを聞は。風にかくれぬ香をとめて。花たちはなの夕附夜。木の間もりくるよそほひを。わりなく思ひそめしより。末の松山もろともに。浪こさしとや契りけん。いさなひくたりける程に。えひすみことをいつはりて。今はしたかひ申すとて。男鹿かる野の御狩場にたはかりいたし奉り。くわきうのせめにあらねとも。枯野の草に火をかくる。えひすのせめをいてかねて。みことはうたれ給ふよと。聞より心うかれつま。武藏野は。けふはなやきそ若草の。つまもこもれり我もかく。思ひこかるゝ胸の火の。せんかたなみに火をけして。うきなのみ橘の。昔の人となり給ふ。ワキ「とてもの事にみこと劍ぬき。野火のなんをのかれ。えひすをたひらけ代をさめ給ひし所を語て御聞せ候へ）。シテ「かくて（貞いて語てきかせう。扨も）東夷を平げんと（貞たいちの爲に）發向するところに……驅け破つて通りしより（貞かは。大蛇中をわられ威を失ひ）今の二村山となる……御遊をすすむ（貞時しも）頃は神無月……夷四方の圍みをなし（貞時をとつとつくり）……天にかかやき（貞むらかり）地にみちみちて（貞うつまいて）

國栖

觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】五番目　二段劇能

【人物】子方　天武天皇、ワキ　供奉官人、ワキツレ　同臣下（二人）、ワキツレ　輿舁（二人）、前シテ　老翁

前ツレ　老嫗、狂言　追手武士（二人）、後ツレ　天女、後シテ　藏王權現

【所】大和國　吉野

【時】弘文天皇御宇　春（三月）

【作者】二百十番謠目錄に世阿彌の作とし、禪鳳雜談目錄に曲名が出てゐる。言繼卿記に天文三年四月九日演能の記事が見えてゐる。

【梗概】清見原天皇が叛亂の爲に吉野に遷幸遊ばされた時、老人夫婦が根芹・國栖魚を供御に奉り、やがて追手の敵が襲うて來ると、天皇を舟にお隱しして、御危難をお救ひ申しあげた。そして、御慰めの爲に音樂を奏し奉らうといつて、夫婦は消え失せる。やがて天女が現れて樂を奏し、藏王權現が現れて御味方申しあげ、かくて世は泰平となつた。

【出典】 老人夫婦が天皇をお助け申しあげた事、天女が舞を奏した事は、源平盛衰記卷十四「淨見原天皇の事」に、

我等の本願主、淨見原の宮と申すは、天智天皇の御弟大海人王子是なり。天皇わが御子達には位を讓り給はで、淨見原宮に讓り給へりしかば、天智崩御の後、皇子大友、位に洩れ給ひぬる事を恨みて謀叛を起し、淨見原宮を襲ひ給ひしかば、宮都を出でて吉野山に入り給ふ。天神憐みを垂れ給ひけるや、天女天降り、天の羽衣にて廻雪の袖を奏でしかば、後憑しくぞ思し召しけるに、なほ吉野山を責むべき聞えありければ、かの山を出で給ひ、伊賀國へ越え、伊勢と近江の境なる鈴鹿山に入り給ふ。……山中に幽火の光あり。かれにたどり至つて御覽ずれば、奇しき柴の庵に、夫婦と思しくて老翁老嫗あり、御宿を借り給へば、惜まず請じ入る。

とあるのに據つたのであらう。吉野の天女舞を五節舞の起源とすることも、盛衰記卷一「五節始」の條に、

天武天皇芳野川に御幸して、御心を澄まし琴を彈じ給ひしに、神女空より降り下り、淨見原の庭にて廻雪の袖を飜しけれども、天暗うして見えざりければ、かの玉を出され、仙女の形を御覽じき。玉の光に耀きて、

　乙女子が乙女さびすもから玉を、をとめさびすもその唐玉を

と五聲歌ひつつ、五度袖を飜す。五人の仙女舞ふ事各異なる節なり。さてこそ五節と名づけたれ。

とあるのに據つたのであらう。また國栖魚の占方は、宇治拾遺物語卷十五「淸見原天皇與二大友皇子一合戰の事」に、

たゞ一人山を越えて、北ざまにおはしける程に、山城國田原といふ所へ、道も知り給はねば、五六日にぞたどる〳〵おはしつきにける。その里人、怪しくけはひの氣高く覺えければ、高杯に栗を燒き、又ゆでなどして參らせたり。その二色の栗を「思ふこと叶ふべくは、生ひ出でて木になれ」とて、片山の上に埋み給ひぬ。

とある、燒栗ゆで栗の占ひを飜案したもの、また舟に隱し奉つたことは、同書の、

この國の洲股の渡に、舟もなくて立ち給ひたりけるに、女の大きなる舟に布入れて洗ひけるに、……女申しけるは、「見奉るやう、ただにはいませぬ人にこそ、さらば隱し奉らむ」といひ、湯舟をうつぶしになして、その下に伏せ奉りて、上に布を多く置きて水くみかけて洗ひ居たり。暫しばかりありて、兵四五百人ばかり來り、女に問ひて曰く、「これより人や渡りつる」といへば、女のいふやう、「やごとなき人の、軍千人ばかり具しておはしつる、……この小勢にては追ひつき給ひたりとも、皆殺され給ひなむ、これより歸りて、軍を多くとゝのへてこそ追ひ給はめ」といひければ、まことに思ひて、大友皇子の兵皆引返しにけり。

とある洲股渡の女の湯舟を翻案したのであらう。

【概評】類曲のない珍しい題材て、前述のやうな數種の材料を巧みに一曲にまとめ、殊に老人夫婦の質朴と忠誠とを極めて鮮かに描き出してゐる。脚色もクセ謡で直に中入とし、「天つ少女の返す袖、五節の始めこれなれや」といつて、やがて天女の現れるのは、他に例のない面白い構想である。たゞ實演の效果からいへば、稍ともすれば、前段の劇的な場面と、後段の夢幻的な場面とが遊離して、前後不調和に陥る恐れがないでもないが、それは主として中入後、後ヅレ天女の出方によつて定まるのであつて、後ヅレが縹緲たる趣を以て登場する時は、普通の夢幻能には味はれない面白い效果を奏するのである。

第一段

舞臺は昔の大和の都で、子方天武天皇、ワキ供奉官人以下ワキヅレの臣下を從へて登場。

【一】

一聲の囃子にて、子方天武天皇、初冠・襟赤・着附縫箔・單狩衣・指貫・込大口・腰帯・扇の裝束にて、ワキヅレ輿舁二人、着附厚板・白大口・腰帯・扇の裝束にて輿の作物を子方にさしかけ、次にトモ從者二人、着附熨斗目・素袍上下・腰帯・扇・小刀の裝束、その後にワキ供奉官人、着附厚板・法被・白大口・腰帯・扇・太刀の裝束にて出で、舞臺に立竝びて、

ワキ・ワキヅレ一聲「思はずも、雲居を出づる春の夜の、月の都の。名殘かな

ワキ「道道たらば位山、

ワキヅレ「上らざらめや。ただ頼め

ワキ・サシ「神風や五十鈴の古き末を受くる。御裳濯川の御流れ。やごとなき御方にておはします

【一】

官人「わが君には、思ひもよらない意外な叛亂の爲に、名殘惜しくも都をお立退き遊ばすのである」

こゝで舞臺を廻つて旅の様を見せ、

官人「今はかうして都をお立退き遊ばしても、政道が明らかになり、國內が治まれば、わが君が御位にお即きにならない筈はないのである。わが君は實に天照大神の御血統をお受け繼ぎになつた高貴の御方に渡らせられるのである。

【一】○雲居を出づる—天武天皇の都を出で給ふ事を、月の雲から出るのに譬へた。○道道たらば位山—道が明らかにならば、遂に帝位にお即きにならない筈がないとの意。○位山　飛彈國にある。帝の位といひかけ、山の縁で登るとつゞけた。○神風や—伊勢の枕詞。こゝでは五十鈴の枕詞に用ゐた。○五十鈴の古き—伊勢大神宮（內宮）を五十鈴宮ともいふので、天照大神の御血統をお受けになつてとの意に用ゐた。○御裳濯川—伊勢內宮の神境を流れる五十鈴川の別名。天照大神の御系統を受け繼ぎ給ふとの意に用ゐた。

○御讓り―東宮。
○天津日嗣―神代より御繼承遊ばされた皇位。
○御伯父何某の連―右大臣中臣金連を指したのであらう。但し御伯父ではない。觀世以外では「大友皇子」と記してゐるが、觀世ではかかる直寫を避けて、大友皇子の御味方をした臣下を擧げたのである。
○御幸と思へば―草木の露の縁で、み雪に通はせて御幸といつた。山野を分け給ふ御苦しみも、やがて國内を御巡幸遊ばさるべき前兆と思へば頼もしいとの意。
○身を秋山の―身を飽きを秋にいひかけた。
○宇陀の御狩場―大和國宇陀郡にある。世の中の憂きを宇陀にいひかけた。
○牡鹿伏すなる―御狩場の縁で鹿を出し、春日山には鹿が多いので、その序に用ゐた。
○水嵩ぞ增る―春日山の別名三笠山といひかけた。
○よしや暫し―吉野の「よし」の音を重ねた。
○花曇りなれ―花盛りの頃空の曇るをいふ。天皇の暫

ワキ ワキヅレ『この君と申すに御讓りとして。天津日嗣を受くべき處に。御伯父何某の連に襲はれ給ひ。都の境も遠田舍の。馴れぬ山野の草木の露。分け行く道の果までも。御幸と思へば頼もしや

ワキ ワキヅレ 下歌『身を秋山や世の中の宇陀の御狩場よそに見て。上歌『牡鹿伏すなる春日山。牡鹿伏すなる春日山。水嵩ぞ增る春雨の。音はいづくぞ吉野川。よしや暫しこそ。花曇りなれ春の夜の。月は雲居に歸るべし頼みをかけよ、玉の輿頼みをかけよ玉の輿

ワキ「よしや暫しこそ」と正面先へ出で、またもとへ歸り、一同旅を進めたる心。上歌濟みて、ワキは正面に向き、

ワキ「御急ぎ候程に、いづくとも知らぬ山中に御着きにて候。(子方に向ひ)まづこの所に御座をなされうずるにて候

子方は脇座へ行き床几にかゝり、ワキ・トモは子方の次に地謠座前に坐す。

わが君は東宮として、やがて帝位をお嗣ぎ遊ばす筈であつたのであるが、御伯父の何某の連にお襲はれになり、都を立退いて遠い田舍へお旅立ち遊ばされ、お馴れにもならない山野をかき分けてお出でになるのであるが、これも遂には國治まつて帝位にお卽きになり、國中を御巡幸遊ばす前兆であらうと思へば、心丈夫にも思はれるのである」

と本曲の前提を物語り、

官人「わが身もこの世の中も辛いものだと思つて、都を立出て、宇陀の御狩場をも餘所に見て、鹿の鳴く春日山を後にし、この頃の春雨に水嵩も多い吉野川を渡つて行くのであるが、今暫くはかうして悲しい思ひをしようとも、やがては都にお歸りになるであらう。それを樂しみに玉駕をお進めしよう」

といつてゐるうちに、旅は進んだ態で、舞臺は吉野山中となる。

官人「お急ぎ申したので、何處だか見當もつかない山中にお着きになつた」

といつて天皇に向ひ、

官人「まづこの所に御出で遊ばされますやうに」

と奏上して、天皇はある民家にお入りになつた態。

し苦しみ給ふ喩。
○月は雲居に歸るべし―月を天子に喩へ、雲居を帝都の意と誠の雲とに兼ねて用ゐた。
○頼みをかけよ―輿を舁けよといひかけた。

【三】
○おほぢ―老爺。
○拝まい―「拝み」の俗語として用ゐた。

【三】

後見、舟の作物を持出し、橋懸を吉野川の心にて置く。アシラヒの囃子にて、ツレ姥、面姥・姥鬘・鬘帶・襟朽葉色・着附摺箔・無色唐織・縷水衣の裝束にて釣竿をかたげて舟の眞中に乘り、シテ老翁、面朝倉尉・尉髪・襟淺黃・着附無地熨斗目・絓水衣・腰帶・腰簑・扇の裝束にて舟の艫に乘り、水棹を持つ。シテ舞臺の方を見て、

シテ「姥や見給へ
ツレ「何事にて候ぞ
シテ「あのおほぢが伏屋の上に。紫雲のたなびいたるを拝まい給うたか
ツレ(舞臺の方を見て)「げにげにあたりに紫雲たなびき。ただならぬ空の氣色やな
シテ「おうただならぬ氣色候よ。(正面に向き)『昔より天子の御座所にこそ。紫雲は立つと申せ。「もしも不思議に尉が住家に
ツレ『さやうの貴人やおはすらんと
シテ『舟さし寄せてわが家に歸り(と棹に手をかけて漕ぐ

【三】

舞臺は大和國吉野、菜摘川筋。天皇のお休みになつた所は、吉野の菜摘川筋で、その川に舟を泛べて、シテ・ツレの老人夫婦がわが家へ歸らうとする態で登場。老翁わが家の方を見て、

翁「婆さん、お見やれ」
姥「何でござんす」
翁「あの爺の小屋の上に紫の雲が棚引いてゐるのを拝みやつたか」
姥「ほんにあの邊に紫の雲が棚引いて、並ならぬ空模樣でござんす」
翁「さうだ、並ならぬ樣子だ。昔から天子の御座所には紫の雲が立つといふが、ひよつとすると、不思議にもこの爺の家に……」
姥「そのやうな高貴の方がお出でになるのでせうか知ら」
といつて、舟を漕ぎ寄せて、わが家に歸つて見ると、

○玉の冠―瓔珞をつけた高貴の方の冠。
○直衣―貴人の常服。
○疑ひもなく白絲の―知らるを白にいひかけた。
○暫しが程の―柴の音を重ねた。
○御座―御座所。

【三】

○間近き人―近親の人。

形をし）

ツレ「見れば不思議やさればこそ（と子方の方を見やり）

シテ「玉の冠直衣の袖（と同じく子方を見やり）

ツレ「露霜に萎れ給へども

シテ『さすが紛れぬ御粧ひ

地『さもやごとなき御方とは。疑ひもなく白絲の。釣竿をさし置きてそもや如何なる御事ぞ。かほど賤しき柴の戸の。暫しが程の御座にもなりけることよいかにせんあら忝の御事やあら忝の御事や

「釣竿をさし置きて」と二人とも竿を捨て舞臺に入り、シテは眞中に、ツレは脇正面に行き下に居てワキの方に向く。

【三】

シテ「これはそも何と申したる御事にて候ぞ

ワキ「これは由ある御方にて御座候が。間近き人に襲はれ給ひ。これまで御忍びにて候。何事も尉を頼み思しめさるるとの御事にて候

嫗「おゝ不思議な、やつぱり……」

と天皇の方を見る。

爺「玉冠に直衣をお召しになつた方が……」

嫗「旅の疲れにお窶れにはなつていらつしやるが……」

爺「あの並ならぬ御様子、確かに高貴な御方に違ひない」

と持つてゐた釣竿を下に置いて、

爺嫗「これはまあどうした事であらう。このやうな賤しい家に、暫くでも御臨幸を仰ぐとは、まあどうしたらよからう。ほんとに勿體ないことだ」

【三】

老爺、官人の前に出て、

爺「一體これはどうした事なのでございます」

官人「これは高貴の御方であらせられるが御近親の者にお襲はれになり、これまで御忍びになつたのです。何事も爺やを頼りに思し召すのですぞ」

○供御—召し上り物。

○日本一の事—この上もない事。室町時代の常用語。

○國栖魚—國栖川でとれる鮎。

○心若菜を—年は老いたが心け若いといひかけた。

シテ「さては由ある御方にて御庭候か。幸ひこれはこの尉が庵にて候程に。御心安く御休みあらうずるにて候

ワキ「いかに尉。面目もなき申し事にて候へども。この君二三日が程供御を近づけ給はず候。何にても供御に供へ候へ

シテ「その由姥に申さうずるにて候。（ツレに向ひ）いかに姥聞いてあるか。この二三日が程供御を近づけ給はず候との御事なり。何にても供御に奉り候へ

ツレ「をりふしこれに摘みたる根芹の候

シテ「それこそ日本一の事。我等もこれに國栖魚の候。これを供御に供へ申さうずるにて候

ツレ二「姥はあまりの忝さに（と正面に向き）胸うち騒ぎ摘み置ける。根芹洗ひて老が身も。心若菜を

翁「ではやつぱり高貴の方であらせられるのでございますか。幸ひこの小屋は爺のものでございますから、どうぞ御氣安うお休み遊ばしますやうに」

官人「爺や、恥かしい話だが、わが君にはこの二三日召上り物をお近づけにならないのです。何なりと召上り物を差上げて下さい」

翁「婆にこの事を申しませう」

（姥に向ひ、）

翁「婆さん、お伺ひしたか。この二三日召上り物をお近づけにならないとの御事だ。何なりとも召上り物を差上げるがよい」

姥「丁度これに摘んだ根芹がござんす」

翁「それこそこの上もないことだ。自分もこゝに國栖魚がある。これを御食膳にお供へしよう」

といつて、姥は餘りの勿體なさに、胸もときめく思ひで、根芹を洗ひ、老人ながらも氣も若々として、これを摘へ

○菜摘の川—國栖川の別名で吉野川の上流。この時からこの名稱が生まれたといふのは、作者の假託である。
○紅葉を林間に焚き—和漢朗詠集白樂天の詩句「林間煖レ酒焚二紅葉一、石上題レ詩拂二綠苔一」を引いた。
○吉野の國栖—國栖は吉野の山中にある。國栖川はその邊を流れる吉野川の稱。
○蓴菜の羹—美食の例。晉の張翰が遠國に赴任して、秋風の吹く頃、故郷の蓴菜の羹や鱸の膾の美味を思ひ出し、官を罷めて故郷に歸つたといふ故事に據る。
【四】

揃へつつ。供御に供へ奉る（とワキに向き）、それよりしてぞ三吉野の、菜摘の川と申すなり

シテ「祖父も色濃き紅葉を林間に焚き。國栖川にて釣りたる鮎を燒き。『同じく供御に供へけり

と扇を開きて魚を載せたる心にて立ち、ワキの前に行き、ワキの扇に移す形をして、本の座に歸る。

地「吉野の國栖といふ事もこの時よりの事とかや。蓴菜の羹鱸魚とても、これにはいかで勝るべき間近く參れ老人よ間近く參れ老人

「蓴菜の羹鱸魚とても」とワキ扇を兩手に持ちて立ち、子方の前に行き扇を差出す。子方これを見て、御箸を觸れ給ふ心。ワキ扇を開きたるまゝ本の座に歸り、「間近く參れ」とシテに向く。

【四】

ワキ「いかに尉。供御の御殘りを尉に賜はれとの御事にて候（と扇をシテに示す）

シテ扇を開きてワキの前に出で、御殘りを戴きたる心に一兩手に持ち、子方に辭儀して、

シテ「あらありがたや候。さらばうち返して賜は

て、御食膳にお供へした。これよりこの吉野川を菜摘川といふのである。

爺の方も、よく紅葉した紅葉を焚いて、國栖川で釣つた鮎を燒き、また御食膳に奉つた。この地を吉野の國栖といふ事もこの時から始まつたのである。

天皇はこれを召上つて、

天皇「美食の第一といはれる、蓴菜の羹や鱸魚の膾も、これほど旨くはなからう。老人よ近う參れ」

【四】

官人「爺や、供御の御下りを爺やに賜はると仰せられるぞ」

爺「ありがたうございます。では、打返し

○うち返して——裏返して。

○國栖魚のしるし—解し難い。

○條なき事—道理のないこと。無理なこと。

○神功皇后——神功皇后新羅御征伐の時、玉島の里の小川で、針を曲げて鈎を作り、裳の絲を拔いて釣絲とし、西方の賊國に討つことが出來るならば、この鈎に魚がかれとお祈りになつて絲を引き給ふと、鮎がかかつたといふ故事。古事記・日本書紀に見ゆ。

○玉島川—肥前國東松浦郡に流れる川。

らうずるにて候（ともとの座に歸る）

ワキ「そもうち返して賜はらうずるとは。何と申したる事にてあるぞ

シテ「うち返して賜はらうずると申すこそ。國栖魚のしるしにて候へ。（ツレに向ひ）いかに姥。供御の殘りを尉に賜はれとの御事にて候が。この魚は未だ生々と見えて候

ツレ「げにこの魚は未だ生々と見えて候

シテ「いざこの吉野川に放いて見よう

ツレ「條なき事な宣ひそ。放いたればとて生き返るべきかは

シテ「いやいや昔もさる例あり。神功皇后新羅を從へ給ひし占方に。玉島川の鮎を釣らせ給ふ。その如くこの君も（と子方へ向き）。二度都に還幸ならば。（扇を見て）「この魚もなどか生きざらんと

て戴きますでございませう」

とお下りを戴く。

官人「打返して戴くとは、どういふことだ」

翁「うち返して戴きますとは、この國栖魚のしるしでございます」

姥に向ひ、

翁「婆さん、供御のお下りを爺に賜はると仰せられたが、この魚はまだ生々して見えるわ」

姥「いかにもこの魚はまだ生々としてゐます」

翁「では、この吉野川に放つて見よう」

姥「飛んでもない事を仰しやるな。放つたとて、生き返へるものですか」

翁「いや／＼さうではない。昔にもかういふ例がある。神功皇后が新羅を御征伐遊ばした時にも、玉島川の鮎を釣つて、勝敗をお占ひになつたのだ。そのやうに、この君も二度都へ還幸遊ばすならば、この魚の生き返らない筈はない」

〇岩きる水―岩を切り通すやうに勢ひ鋭く流れる水。古今集讀人知らずの歌「吉野川岩切り通し行く水の音には立てじ戀ひは死ぬとも」

〇あれ三吉野や―あれ見よいいを三吉野にいひかけた。

【五】

地「岩きる水に放せば（と正面先に出で）、岩切る水に放せば（と扇をうつむけて魚を放つ形）。さしも早瀬の瀧川に、あれ三吉野や吉瑞を。現す魚のおのづから。生き返るこの占方頼もしく思しめされよ

と囃子座前へ行き、ワキに向ひ下に居る。

【五】

早鼓にて追手の來たる樣を示す。

ワキ立ちてシテに向ひ、

ワキ「いかに尉。追手がかかりて候

シテ「此方へ御任せ候へ。（ツレに向ひ）いかに姥。あの舟舁いて來う

ツレ「心得申し候

二人は橋懸へ行き、船を舁いて地謠座前に置く。子方舟の側へ來る。二人舟を横にして子方の上にかぶせたる態。シテは舟を背にして坐し、ツレその次に坐す。ワキ・トモは後見座にくつろぐ。

狂言追手二人、着附縞熨斗目・狂言上下・脚半・腰帶・扇・小刀の裝束にて、オモは鉾、アトは弓矢を持ちて出で、

狂言二人「やるまいぞ〳〵

といひながら舞臺に入り、

といつて、岩打つ激流にこの標魚を放つと、（魚は不思議にも生き返る）

爺「あれゝ御覧遊ばせ、魚が吉瑞を現して自然と生き返りましてございます。この占ひを心丈夫に思し召し遊ばせ」

【五】

ところが、そこへ敵の追手が來た樣である。

官人「爺や、追手がかゝつて來たぞ」

爺「私どもにお任せ下さいませ。（婆に向つて）婆さん、あの舟を舁いで來よう」

婆「畏りました」

といつて、舟を舁いで來て、舟を逆さまにして、天皇をお隱しする。そこへ狂言の追手が來て、「淸見原天皇の御行方を知らないか」と尋ねる。

○清み祓へ—神詣などの時、川邊で身を洗ひ清める作法。わざと清見原を聞き違へたやうに裝うたのである。

○清見原—天武天皇の都をお奠めになつた地名。これを天皇の御名として借りた

○兜率の內院—彌勒菩薩の住む淨土。

○五臺山清凉山—共に支那の巨刹。「白鬚」「兼平」の語釋參照。吉野山との關係「葛城」參照。

オモ「南無三寶。見失うた

アト「その通りぢや

オモ「山々が深いによつて見失うた。まづこちへ渡らしめ

アト「心得た

オモ（シテを見て）「これに老人が居らるる。尋ねて見よう。いかに老人。清見原の天皇の行衞を知らぬか

シテ「なに清み祓へ。清み祓へならばこの川下へ行け

オモ「これは如何な事。老いほれてむさとした事をいふ

アト「但し耳が遠いか。高う言うて見さしめ

オモ「心得た。いかに老人。清見原の天皇の行衞を知らぬか

シテ「さては清見原とは人の名よな。あら聞き馴れずの人の名や。その上この山は、兜率の內院にもたとへ。又五臺山清凉山とて。唐土までも遠く續ける吉野山。隱れ家多き所なるを。いづくまで尋ね給ふべき。速かに歸り給へ

オモ「誠に老人のいふ通りぢや。いざ戻らう。こちへおりやれ

翁「なに清み祓へか。清み祓へがしたければ、この川下へ行つてするがよい」

追手は翁が聞き違へたのかと思つて、更に「清見原天皇を尋ねるのだ」と尋ね直す。

翁「それでは清見原といふのは、人の名前なのか。聞き馴れない名前だな。この吉野山は彌勒の淨土にもたとへられ、又五臺山清凉山ともいつて、支那へまでも續いてゐる大きな山で、隱れ場の多い所なのに、何處まで尋ねるお積りぢや。詮ないことをせずと、早うお歸りなされ」

追手は一旦歸らうとしたが、逆さにした舟を怪しむ。

〳〵

と廻りかけて舟を見て、

オモ「いや是に舟がうつ向けてある。尋ねて見よう。いかに老人。あの舟は何とてうつ向けてあるぞ。舟の中が合點が行かぬ。探して見よう

シテ「何と舟が怪しいとや。これは乾す舟ぞとよ

オモ「乾す舟なりとも合點が行かぬ。そこ退かしめ舟探さう

シテ「何と舟を捜さうとや。漁師の身にては舟を捜されたるも家を捜されたるも同じ事ぞかし。身こそ賤しく思ふとも（と立ち）。この所にては翁もにつくき者ぞかし。孫もあり曾孫もあり（と正面を見渡し）。山々谷々の者ども出で合ひて。あの狼藉人を打ち留め候へ打ち留め候へ（と手を打合す）

オモ「これ〳〵老人。聊爾を仰しやるな。追手の者ははや戻るぞ

アト「このやうな所に長居は無用。こちへ渡らしめ〳〵

オモ「心得た〳〵

と幕に入る。

翁「なに舟が怪しい。これに舟を乾して置くのぢや」

追手は强ひて舟中を探さうとする。

翁「なに舟を探さうといふのか。漁夫の身には、舟を探されるのは、家を探されるのも同じ事ぢや。そんな事をせられてたるものか。賤しい身分といへ、この翁はこの所では一かどの者ぢや。孫もあれば、曾孫もある。さあ山々谷々、この邊の者は皆出て來て、この亂暴者を打ち留めてくれ」

追手はこの見幕に恐れて立退く。

○につくき—筋骨の逞しい。この語「安宅」にもある。

○聊爾—輕卒なこと。

○かひある御命―舟の櫂にいひかけた。

【六】○君は船臣は水―荀子王制篇に「君者船也、庶人者水也、水則載レ船、水則覆レ船」とあるを引いた。この語平家物語に見ゆ。

ツレ立ちて眞中に出で、シテに向ひ、

ツレ『なう聞しめせ追手の武士は歸りたり

シテ『今はかうよとおほぢ姥は（と向合ひ）

ツレ『嬉しや力を

シテ『えいや

二人『えいと

とシテ・ツレ舟の前後へ行き舟を引起す。

地上歌『舟引き起し尊體の。舟引き起し尊體の。御恙なく川舟の。かひある御命。助かり給ふぞありがたき

この間に子方はもとの脇座に歸り床几にかゝり、ワキ・トモももとの座に着く。

【六】

地クリ『それ君は船臣は水。水よく船を浮かむとは。この忠勤のたとへなり

クリにシテ・ツレ舟を仕手柱際に持ち行き、シテは眞中に、ツレは笛座の上に坐す。（後見舟を持ち入る）

ワキサシ『ありがたやさしも姿は山賤の

姥「もうし、お聞きなされ、追手の武士は歸りましたぞ」

そこで、今は安心だと、老人夫婦は喜んで、力を合はせ、えいや〳〵と舟を引起し、尊體をお出し申しあげる。

天皇の御命が御無事にお助かりになつたのは、誠にありがたいことである。

【六】官人「格言に「君は船、臣は水、水よく船を泛ぶ」といふのも、このやうな忠勤を喩へたものだ。――

ありがたい事であつた。姿はこのやうに賤しい者だが、よく御助けしてくれた。

○積善の餘慶―前世に善事をお積みになつた果報で、この世に帝として御生まれになつたとの意。易の文言傳に「積善之家必有二餘慶一、積不善家必有二餘殃一」
○流れ絶えせぬ―限りなく流れるとつゞけ、川の縁で「濁れる」と呼び起し、萬世一系の皇統を御繼ぎになつても、亂世には御安泰なり難いといふ意に用ゐた。
○宿善―前世で行ひ積んだ善根。
○一葉の舟―心細い御身に喩へた。
○蟠龍の―蟠つてゐる龍が時を得て雲に昇るやうに、遂には帝都に還幸遊ばされるとの意。
○よしや世の中―秋津洲の洲の縁で葭の音をかりて「よしや」と續け、よの音を重ねて世の中といつた。
○綸言―天子の御言葉。禮記に「王言如レ絲、其出如レ綸」
○月雪の三吉野―月・雪・花三つとも眺めのよい吉野。月雪は前に置き、花は後に出す。

地「心は高き謀。げに貴賤にはよらざりけり
ワキ「積善の餘慶限りなく
地「流れ絶えせぬ御裳濯川。濁れる世には住み難し
子方「されば君としてこそ。民をはごくむ習ひなるに。却つて助くる志（トシテ向合ひ）
地上歌「身は宿善のかひぞなき。身は宿善のかひぞなき一葉の舟の行く末。蟠龍の雲居終になど。至らざらめや都路に。立ち歸りつつ秋津洲の。よしや世の中治まらば。命の恩を報ぜんと。綸言肝に銘じつつ。夫婦の老人は忝さに泣きゐたり（シテ・ツレしをる）
地クセ「さる程に更け靜まりて物凄し。いかにとしてかこの程の御心。慰め申すべき。しかも所は月雪の。三吉野なれや花鳥の。色音によりて音

心の立派さ、謀の巧みさは、ほんとに貴賤によつて差別されるものでないのだ。」
「とはいへ、前世に十善をお積み遊ばされた御果報で、天照大神の御血統にお生まれ遊ばされたが、この亂世には、どう遊ばすことも出來ない、情ないことだ」
天皇「だからこそ、君たるものは民を惠む習ひであるのに、自分は却つて民に助けられるとは、十善の果報を受けた甲斐もないことだ。しかし、今こそこの様な哀れな境遇であるが、やがては都に歸れるに違ひない。都に歸つて日本國が治まつた節には、この命を助けてくれた禮をしようぞ」
と、恐れ多い御沙汰に、老人夫婦はありがた涙をこぼしてゐた。
かうして、夜も更け行けば、あたりは愈々もの凄い有様なので、
老「何とかして、この頃のお辛い御心をお慰め申し上げたいものでございます」
といつて、月雪花鳥ともに眺めの面白い吉野山で音樂を奏すると、峯の松風

○呂律―音樂の調子。呂は低音、律は高音。
○琴の音に嶺の松風―拾遺集齋宮女御の歌「琴の音に峰の松風通ふらしいづれの緒より調べ初めけん」を引いた。
○五節の始め―五節舞の起源のこと解説に掲げた。
【七】○その唐玉の琴の絲―解説に掲げた源平盛衰記の歌「をとめ子がをとめさびすもから玉ををとめさびすもその唐玉を」を引いた。この歌の下句十訓抄奥儀抄等には「袂にまきてをとめさびすも」とある。
○勝手八所―吉野山七曲坂の西側にある勝手明神。今は山口神社といふ。八所は吉野山八神の意。
○木守の御前―八神の籠るにかけて木守といふ。木守つ神は勝手明神よりなほ上方、水分山にあり、今水分神社といふ。
○藏王―金剛藏王菩薩。吉野山の藏王堂に安置す。附記參照。
【八】○王を藏すや―藏王の字を分けて、清見原天皇を藏すの意にとりなした。
○卽ち姿を現して―以下藏王權現の容姿をいふ。附記

樂の、呂律の調め琴の音に。嶺の松風通ひ來る。天つ少女の返す袖。五節の始め、これなれや

シテ・ツレ「三吉野なれや」と立ち、シテ常座にて「呂律の調」と樂を聞く心持をし、「これなれや」と中入。ツレも續いて幕に入る。

【七】後ヅレ天女、面連面・鬘・鬘帶・黑垂・天冠・縹赤・着附摺箔。長絹・色大口・腰帶・扇の裝束にて出で、

〔樂〕を舞ひ、續いて次の地謠に合せて舞ふ。

地「少女子が。少女子が。その唐玉の琴の絲。ひかれ奏づる音樂に。神々も來臨し。勝手八所この山に。木守の御前藏王とは

【八】と仕手柱際にて後ジテを迎ふる心にて幕に向ひ、シテ謠ひ出すと、笛座前に行きて坐す。

後ジテ藏王權現、面大飛出・赤頭・輪冠・金蝦鉢卷・縹花色・著附厚板・袷狩衣・半切・腰帶・扇の裝束にて橋懸に出で、一の松に立ち、

後ジテ「王を藏すや吉野山

地「卽ち姿を現して。卽ち姿を現し給ひて(と舞臺の

まで調べを合はせるのである。さて、この時に少女の舞つた舞か、五節の舞の起源である。

老人夫婦はいつの間にか消え失せる。

第二段

【七】後ヅレ天女登場。

〔樂〕を舞ふ。

かうして、天女が舞を舞ひ、音樂を奏すると、これに引かれて、神々が來臨し、勝手明神も木守明神も藏王權現も出現になるのである。

【八】舞臺には他の神々は形を現さないが、後ジテ藏王權現が代表的に登場して、

藏王「自分は天皇をお隱し申した吉野の藏王權現である」

眞中へ出で」。天を指す手は（扇にて上を指し）
シテ「胎藏
地「地を又指すは（扇を逆手に下を指し）
シテ「金剛寶石の上に立つて（拍子を踏み）
地「一足を提げ（左足を擧げ）、東西南北十方世界の虚空に飛行して（舞臺を廻りて飛返り）、普天の下。率土の内に王威をいかでか輕んぜんと（子方に向き）。大勢力の力を出だし。國土を改め治むる御代の。天武の聖代畏き惠み。あらたなりける。ためしかな
と仕手柱際にて留拍子を踏む。

参照。
○天を指す手は―片手は天を指して胎藏界を占め、片手は地を指して金剛界を占める。
○胎藏―理の世界。〔安宅〕の語釋參照。
○金剛―胎藏界に對した、智の世界。
○十方世界―四方四隅に上下を加へて十方といふ。あらゆる有情世界といふ意。
○虚空―大空。
○普天の下―天下地上殘る所なくとの意。詩經小雅に「普天之下莫レ非二王土一、率土之濱莫レ非二王臣一」
○國土を改め治むる―國家の亂れたのを改めて治める
○天武―清見原天皇即ち天武天皇。

といつて姿を現し、片手は天に向つて、理の世界胎藏界を占め、片手は地を指して、智の世界金剛界を占め、寶石の上に立つて、片足は擧げて、四方八方十方世界の大空を飛行し、天下地上隈なくもこの世界で、王威を輕んぜしめてはならないと、大勢力を出して、天皇をお助け申しあげたので、國土は安穩に治まり、世は天武天皇の聖代となつた。まことにあらたかな神の御力である。

〔考異〕

諸流（五流）

寶・春・剛・喜の四流は左に掲げる元祿本に略同じ。

古諸本（元祿八年本）

【一】ワキキシ「神風や……やごとなき御方（元清見原の天皇）にておはします……御伯父何某の連（元大伴の皇子）に襲はれ……

【二】シテ「あの（元ナシ）おほぢが伏屋の上に紫雲のたなびい（元客星の御立あり）たるを拜まい給うたか。元ハと「いづく」の程にて候ぞ。シテ「あの森の

梢にあたつて見え給ひ候よ)。ツレ「げにげに……シテ「おうただならぬ(元雲間の)氣色候よ昔より(元去程に)天子の御座所に……ツレ「露霜に
萎れ(元引ぬれ)給へども……地「さもやごとなき御方とは疑ひもなく白絲の(元清見原の天子とは後にぞ思ひしらなみの)釣竿を……いかに
せんあら忝の……御事や(元定めなき世のならひこそふしきなれ世の習ひ社ふしきなれ)　【三】シテ「(元偖)これはそも何と……ワキ「これ
は由ある御方(元淸見原の天皇)にて御座候が間近き人(元大伴の皇子)に襲はれ給ひこれまで御忍び(元御落)にて候……シテ「さては由ある
御方(元淸見原の天皇)にて……幸ひこれはこの尉が……御休みあらう(元なに事も賴まれ申さう)ずるにて候。ワキ「いかに尉……二三日が程
(元間)供御を近づけ給はず候(元程に)……供御に供へ候へ(元をそなへ申され候へ)。シテ「その由姥に……いかに姥聞いてあるか(元是にま
しますは忝くも淸見原の天皇にて御座候か) この二三日が程(元ナシ)供御を近づけ給はず候との御事なり(元程に)何にても供御に奉り候へ
(元備へ申せとの御事にて候)……シテ「それこそ……我等もこれに(元祖父も)國栖魚の候(元を持て候程に)……ツレ「姥はあまりの……摘み
置ける(元澤におふる)根芹洗ひて(元かもとに)老が身も……(元御)供御に供へ奉る(元こそ參らせけれ)……シテ「おほぢも(元今日釣たる魚
の)色濃き紅葉を……國栖川に釣りたる(元かゝるめぐみに)鮎を燒き……地「吉野の……この時(元御代)よりの事……鱸魚とても(元なりと)
……　【四】ツレ「げにこの魚は未だ生き生きと見えて候よ(元して候よ)。シテ「いざこの(元魚を)吉野川に(元へ)……ツレ「條なき……生き
返るべきかけ(元にてもあらず)。シテ「いやいや……新羅を從へ給ひし(元異國退治の)占方に玉島川の(元にて)鮎を釣らせ(元り)給ふ……生
き返るこの(元かへるやくすの)占方……　【五】シテ「此方へ御任せ候へ いかに姥あの舟舁いて來う。ツレ「心得申し候(元ナシ)……シテ「なに
淸み祓へ……この川下へ行け(元あの川すそへ行候へ)……シテ「さては淸見原とは人の名か(元天皇にてもたゞ人にても。なにしに是まで淸見
はらひ)あら聞き馴れずの……いづくまで(元か)尋ね給ふべき速かに(元はやとう)……シテ「何と(元此)舟を搜さう……翁も(元ナシ)につく
き者ぞかし(元とよ。誠狼藉をいたさは)孫もあり……山々(元峯々)谷々の者ども(元より)……地上歌「舟引き起し寶(元玉)體の……御恙なく
(元うちしほれたる)川舟の。かひある(元なき)御命助かり給ふぞありがたき(元嬉しさよ)　【六】地クリ「それ君は……忠勤のたとへなり
(元そよもしかし)。ワキサシ「ありがたや……山賤(元下人)の……ワキ「積善の餘慶限りなく(元君十善の餘君にこえ)。地「流れ絶えせぬ(元生れ
來にけり)御裳濯川……地上歌「身は宿(元十)善の……蟠龍の雲居(元萬乘の位)終になど至(元かへら)ざらめや……立ち歸りつつ(元かはるも
同し)秋津洲の……地クセ「さる程に……色音によりて音樂(元絲竹)の……　【七】地「少女子が……琴の絲(元音に)……

附記

○藏王權現——塵添壒嚢抄に「役行者一千日金峯山に練行して、金剛藏王を感得せり。その形忿怒身にして、右の手には三鈷を握り、臂を

怒らし、左手に五指開いて腹を押へ、三眼明らかに怒つて魔障降伏の相を示し、兩脚擧げ垂れて、天地經緯の相を顯す」と。同樣の事、太平記卷二十六「吉野炎上の事」にも見ゆ。その文は〔嵐山〕の解說に揭げた。

楠露　観

解説

【能柄】　四番目　一段劇能

【人物】　ツレ　楠正成、トモ　同從者、シテ　恩地滿一、

子方　楠正行

【所　】　攝津國　兵庫の津

【時　】　延元元年五月

【作者】　古今謠曲解題に「聞く處によれば、喜多流「櫻井」の曲によりて、或人が文を作り改め、觀世清廉が節附したるものなりといふこと。明治時代の作である。

【梗概】　楠正成は朝敵尊氏討伐の爲に、兵庫の津に下つたが、戰死を覺悟して、わが子正行を故鄕へ歸すこととし、種々教訓を與へた後、生別の宴を催し、正行の傅恩地滿一は興を助ける爲に舞を舞つた。その間に時も移つて行つたので、正行は泣く泣く滿一と共に河內に歸つた。

【出典】　本曲は太平記卷十六「正成下二向兵庫一事」に、

尊氏卿、直義朝臣大勢を率して上洛の間、要害の地に於て、防ぎ戰は

ん爲に、兵庫に引退きぬる由、義貞朝臣早馬を進せて、内裏に奏聞ありければ、主上大に御騒あつて、楠判官正成を召されて、急ぎ兵庫へ罷下り、義貞に力を合せて合戰を致すべしと仰せられければ、正成畏て奏しけるは「尊氏卿已に筑紫九國の勢を率して上洛候なれば、定めて勢は雲霞の如くにぞ候らん、御方の疲れたる小勢を以て、敵の機に乘つたる大勢に懸合つて、尋常の如くに合戰を致し候はゞ、御方決定打負け候ぬと覺え候なれば、新田殿をも唯京都へ召し候て、前の如く山門へ臨幸成り候べし。正成も河内に罷下り候て、畿内の勢を以て河尻を差塞ぎ、兩方より京都を攻めて兵粮をつからし候程ならば、敵は次第に疲れて落下り、御方は日々に隨て馳せ集り候べし、其時に當て、新田殿は山門より押寄せられ、正成は搦手にて攻め上り候はゞ、朝敵を一戰に滅す事ありぬと覺え候。新田殿も定めて此料簡候共、路次にて一軍もせざらんは、無下に云甲斐なく人の思はんずる所を恥ぢて、兵庫に支られたりと覺え候。合戰は、兎ても角ても始終の勝こそ肝要にて候へ、能々遠慮を運ばれて、公議を定めらるべきにて候」と申しければ、……坊門宰相淸忠申されけるは「正成が申す所も、其謂ありといへども、征罰の爲に差下されたる節度使、戰をなさざる前に、帝都を捨て、一年の内に二度まで、山門に臨幸ならん事、且は帝位の輕きに似……唯時を替へず、楠罷り下るべし」とぞ仰せ出されける。正成此上はさのみ異議を申に及ばずとて、（延元元年）五月十六日に都を立て、五百餘騎にて兵庫へぞ下りける。正成此を最期の合戰と思ひければ、嫡子正行が今年十一歲にて供したりけるを、思ふ樣ありとて、櫻井宿より河内へ返し遣すとて、庭訓を殘しけるは、「獅子子を產んで三日を經る時、數千丈の石壁より是を擲ぐ、其子獅子の機分あれば、敎へざるに中より跳返りて、死する事を得ずといへり、況や汝已に十歲に餘りぬ。一言耳に留らば、我敎誡に違ふ事なかれ、今度の合戰、天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顏を見ん事、是を限りと思ふ也、正成已に討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の代になりぬと心得べし、然りといへ共、一旦の身命を助からん爲に、多年の忠烈を失ひて、降人に出づる事あるべからず。一族若黨の一人も死殘てあらん程は、金剛山の邊に引籠て、敵寄來らば、養由が矢さきに懸て、義を紀信が忠に比すべし。是ぞ汝が第一の孝行ならんずる」と。泣々申し含めて、各々東西に別れにけり。

とあるに據つた所が多いのである。

【概評】 明治以前にも楠公父子に關する曲が、〔花櫓〕〔湊川〕〔幽靈楠〕など二三曲あつたが、明治時代、楠公父子の忠誠が特に顯彰せられるやうになつて〔櫻井〕〔楠露〕の二曲が新作せられ（外に〔鳳凰迎〕も作られたが、これは廣く行はれなかつた）現行曲として數へ

られて來たのである。さて、この類曲二つを比べると、「櫻井」の方はワキの次第・道行などもあつて形式はよく整つてゐるが、やゝ冗漫に流れた恨みがあり、本曲はそれを簡約してゐるが、やゝ雅味を缺いてゐる。一長一短はあるが、本曲の方が改作だけに秀れた點が多いといはれよう。謠曲の新作は必ずしも望ましいことではなく、亦流布し難いものであると思ふが、これら一二曲だけは永く廢曲にしないで、一つには明治時代の復興を記念したいものだと思ふ。然るに喜多流では近頃この「櫻井」を、同じく明治時代の新作「重盛」等と共に廢曲にしてしまつたが、金剛流で新しく「櫻井驛」を加へることにした。

【一】

ツレ楠正成、梨打烏帽子・白鉢卷・褸淺黄・着附無色厚板・直垂上下・込大口・小刀・扇の裝束、トモ從者、着附無地熨斗目・素袍上下・扇の裝束にて太刀を持ち、トモは仕手柱際にて下に居り、ツレは舞臺の眞中に立ちて、

ツレ「これは楠正成なり。さても朝敵尊氏大擧して上洛すべき由聞し召めされ。急ぎ正成に馳せ向ひ。義貞に力を合はせよとの宣旨に任せ。唯今兵庫の津へ罷り下り候。又存ずる子細の候間。正行を古里へ歸さばやと思ひ候

といひてトモに向ひ、

ワキ「いかに誰かある

トモ目附柱際に出でツレに辭儀して、

トモ「御前に候

【一】

○楠正成―河内の人。後醍醐天皇の御爲に忠誠を盡して、延元元年湊川で討死した。

○さても朝敵尊氏大擧して―延元元年五月の事。詳しくは解説に掲ぐ。

○義貞―新田氏。南朝の御爲忠誠を盡して、延元三年越前で戰死した。

○兵庫の津―今神戸市の一部で、和田岬湊川尻附近の地。

【一】

舞臺は攝津國兵庫の津。ツレ楠正成、トモ從者を随へて登場。

正成「自分は楠正成である。さて朝敵足利尊氏が大軍を率ゐて都へ攻め上るとの事を、陛下がお聞き遊ばされて、自分に急いで馳せ向ひ、義貞に力を合はせて之を防ぎ討てとの宣旨を仰せ下されたので、今兵庫の津へ下つたのである。また少し考へる所があるので、正行を故郷へ歸さうと思ふ」

と見物人に自己紹介をし、

正成「誰か來るやうに」

從者「はい、お前に居ります」

○滿一—恩地氏。本朝武功傳に、恩地左近太郎といふ人が、正成の死後正行を助けて兵を擧げたことを記してゐる。本曲はこの人を指したのであらうが、この事古記には見えてゐない。

◎何事にて候ぞ—檜本にはない。

ツレ「滿一に正行を連れて此方へ來れと申し候へ

トモ「畏つて候

ツレ地謠座前に行き床几にかゝる。トモ一の松に出で、幕に向ひ、

トモ「いかに恩地殿に申し候

シテ恩地滿一、侍烏帽子・襟花色・着附厚板・掛直垂・白大口・腰帶・扇・小刀の裝束、子方楠正行、小結烏帽子・襟赤・着附厚板・長絹・白大口・腰帶・扇の裝束にて、三の松に出で、

シテ「何事にて候ぞ

トモ「若君の御供申し。急ぎ御本陣へ御參りあれとの御事にて候

シテ「畏つて候

一同舞臺に入り、トモは笛座の上に着き、シテは子方と竝びて仕手柱先に坐し、ツレに辭儀して、

シテ「いかに申し上げ候。若君の御供申して候

ツレ（子方に）「いかに正行。唯今申す事をよくよく聞き候へ。さてもこの度の出陣。正成討死すべ

正成「滿一に正行を連れて、こちらへ來るやうにいつてくれ」

従者「畏りました」

従者[illegible]へ出で、

従者「申し恩地殿」

シテ恩地滿一、子方楠正行を伴つて登場。

恩地「何の御用です」

従者「若君のお供をして、すぐ御本陣へ御出でなされよとの事でございます」

恩地「畏りました」

二人舞臺に入る。恩地、正成に向ひ、

恩地「申しあげます。若君のお供をして參りました」

正成、正行に向ひ、

正成「正行、今申すことをよく聞くやうに。さてこの度の出陣は、自分の討死する時

○千早―河内國南河内郡金剛山の西南腹。正成こゝに千早城を築いた。

○弓矢の家―武士の家。

◎唯召し具して―檜本には「たゞたゞ召し具して」とある。

○こざかしき―小利巧な。

き時こそ至りたれ。それにつきて正行は滿一を伴ひ、千早に歸り命のあらん程は忠勤し。上を敬ひ下を憐み。某が志をつぎ候へ。(シテに)又滿一には、正行の成長の程を賴むなり。(子方に)これをこの世の別れと思ひて。急ぎ古里へ歸り候へ

子方「仰せ謹んで承り候さりながら。弓矢の家に生まれ。父の最期をよそに見て、誰に面を向け候べき。唯召し具して給はり候へ

ツレ「こざかしき事を申す者かな。これ皆朝廷の御爲なれば。とくとく千早に歸り候へ

子方「いかに君の御爲なりとも。罷り歸る事はなりがたう候

ツレ「やあかほどまで父が申す事に從はざるやと。「恩愛の子を叱りければ

地「正行も滿一も、正行も滿一も。何といふべき

が來たのだ。それについて、正行は滿一を連れて千早城へ歸り、命のある限りわが君に忠勤を勵み、上を敬ひ下を憐んで、自分の志を繼いでくれ。(滿一に向ひ)又滿一には正行の成人するやうよく世話を賴むぞ。(正行に向ひ)それではこれを今生の別れと思つて、すぐ故鄕へ歸るやうに」

正行「父上のお言葉は謹んで承りました。けれど、苟も武士の家に生まれながら、父上の御最期を知らぬ振で過して、この後誰に顏を向けることが出來ませう。是非ともお連れ下さいませ」

正成「おゝ小利巧なことをいふものだ。だが、これも皆朝廷の御爲であるから、早く千早へお歸り」

正行「いかに大君の御爲でも、私は歸ることが出來ません」

正成「やあ、これほどまでに父が申すのに、それに從はないのか」

と、いとし子を叱ると、正行も滿一も、何ともいふ言葉がなく、泣きながら畏つてゐる樣子である。

○泣く泣く—言葉もなくといひかけた。

【三】

○逆徒—叛逆の徒。

○尊氏兄弟—尊氏と弟直義と。

○叡山—比叡山。京都の東、山城近江の國境にあり、山頂に延暦寺がある。

○坊門殿—藤原清忠。俊輔の子で左大辨參議となる。坊門はその住地から名づけられた通稱。

○ささへ—妨げ。反對。

言の葉も。泣く泣く袖をしをりつつ。畏つたる、氣色かな畏つたる氣色かな

【三】

ツレ「この上は語つて聞かせ候べし。さても逆徒尊氏兄弟。西海より大軍を率ゐ。上洛すべき由叡聞に達し。急ぎ正成に馳せ向ひ。義貞もろとも追伐すべきとの勅諚なり。正成謹んで申し上ぐるやうは。この度逆徒罷り上る事。新手といひ大軍といひ。勞れたる官軍を以てくひ留め候はん事。なかなか存じもよらず。義貞を召し還されし。今一度叡山へ行幸なし奉りなば。必定逆徒上洛仕り候べし。その時正成は糧道を絶ち。義貞と内外より攻め候はんに於ては。恐れながら御勝利疑ひあるべからずと。必勝の計議を申し上ぐるといへども。坊門殿のささへにて。既に防戰に定まる事。偏に天運の極まりなり

【三】

正成「この上はよく話して聞かせよう。さて謀叛人の尊氏兄弟が九州の方から大軍を率ゐて都へ攻め上つてくるといふ事が、陛下のお耳に入り、自分にすぐさま馳せ向つて、義貞と一所に力を合はせて、謀叛人を討ち平らげよと仰せ出されたのだ。それで、自分が申し上げるには、『この度謀叛人が攻め上つて來ましたにつきましては、敵は鋭氣の新しいもので、しかも大軍でございますから、勞れた官軍でこれを防ぎ止めることは、思ひも寄らぬことでございます。それで、義貞をも一度お召し返しになり、今一度比叡山へ行幸遊ばされますれば、きつと謀叛人が都へ入るでございませう。その時に私が敵の糧食を輸送する道を絶ち、義貞と内外から攻めましたならば、恐れながら御勝利遊ばすこと疑ひございません』と、必勝の計略を申しあげたのであるが、坊門殿が反對せられたので、結局敵を防ぎ戰ふこととなつたのは、全く天運の盡きたと申すものだ」

【三】
○日月上に明らかなれども―佞臣が君の英明を掩ひ所置を誤る喩。淮南子に「日月欲レ明、浮雲掩レ之」
○良薬口に苦く―孔子家語に「良薬苦二於口一、利二於病一、忠言逆二於耳一、利二於行一」
○藤房の卿―藤原宣房の子中納言に昇り正二位に叙せらる。南朝の爲に忠誠を盡した人、元弘三年北條高時滅亡の後、後醍醐天皇やゝ政に倦み給うたので、藤房苦諫し奉り、退出して北山の岩藏に赴き、遁世したこと、太平記巻十三「龍馬進奏事」及び「藤房卿遁世事」に委しく見ゆ。
○引きは返さじ―生きて再び還らないとの意。弓矢の緣で「引く」といつた。
○やたけの心―勇み立つ心矢竹に通はせて、竹の節を心節にいひかけ、武人の心節が潔白であるとの意にいひつゞけた。
○獅子の子を生みて―この句太平記の文に據つたものであるが、その原據は分らない。

【三】地クリ『それ日月上に明らかなれども。雲霧光を覆ふ習ひ。今に始めぬ事なれども。歎きても又あまりあり

ツレサシ『良薬口に苦く。忠言耳に逆ふといふ

地『その故事を悟り給ひ。藤房の卿は世を遁れ。

今正成が門出も引きは返さじ武士の

ツレ『やたけの心節清く

地『世を諫めんと。思ふなり

（居クセ）

地クセ『獅子の子を生みて。三日を經る時は數千丈の巖より。これを投げて試みる。その子獅子の氣力あれば。教へざるに中より。跳ねかへりて死せずといへり。況んや正行。十歳に餘りぬ。一言耳に留めつつ。この教誡に違はざれ。われ討死と聞くとても。歎きをとどめいづくまでも。

【三】地盛。謠にも『日月上に明らかなれとも雲霧光を覆ふ』と申す通り、佞臣が君の御明徳を汚し奉ることは、今に始まつたことではないが、實に慨歎の至りだ。それで、『良薬口に苦く、忠言耳に逆ふ』といふ通り、忠諫の用ゐられないことを悟つて、藤房卿は遁世されたので、今自分も亦覺悟を決めて出陣した上は、もう生きては還らず、武士の勇ましい心節を清くして、世の不忠を正したいと思ふのだ。――

獅子は子を生んで三日經つと、數千丈の高い巖からこれを投げ下して、その力を試して見て、その子獅子が氣力があれば、教へなくても跳ね返つて、死なないといふことだ。まして正行は、もはや十歳にもなつたのだ。よく父のいふ一言を耳に留めて、この教へを違へてはならないぞ。自分が討死したと聞いても歎かないで、どこまでも朝敵を平らげて、朝廷の御運勢が開けるやうに考へよ。――

朝敵を平らげて、聖運の開けん事を思ふべし

ツレ「一言耳に留めつつ」と子方を招きて、床几を離れ下に居て、懐中より巻物を取出し子方に與ふ。子方巻物を披きて見る。

ツレ「たとひ逆賊日の本に

地「羽をのし嘴を鳴らすとも、命のあらんその程は、帝位を守護し私の、心聊かなき跡に、汚名を殘す事なかれ、生ひさき思ふ撫子に、かかる涙や楠の露（一同しをる）

子方巻物を巻き、懐中し、ツレの次に坐す。

【四】

シテロンギ「時しも頃は五月雨の、ふる枝も繁る下草の、雫にしをる袂かな

ツレ「花散りて、春は暮れにし櫻井の、名にだにありて朽ちせざる

シテ「石になるてふ楠の葉の、恨みも何かあまざかる

○羽をのし—羽根を擴げる逆賊が勢ひを恣にすることを猛禽に喩へていふ。
○なき跡に—聊かなくといひかけた。
○撫子—愛撫する子を喩へていふ。

【四】
○ふる枝—古い枝。五月雨の降るといひかけた。
○櫻井—攝津國の東北境。木津川の淀川に合する邊をいふ。武士に喩へられる櫻の花を地名にいひかけたのである。
○石になるてふ—楠は石になると古くよりいふ。芳野拾遺に楠正行の墓所の落首として「楠のあとのしるしを來て見ればまことに石になりにけるかな」と記す。
○恨みも—楠の葉の裏といひかけた。
○あまざかる—鄙の枕詞。

たとひ一時は謀叛人が日本中に羽を擴げて勢ひを振つても、お前の命のある限りは、天皇を御守護申しあげ、少しも私利の心を懐かず、自分の死んだ後に汚名を殘すやうな事をしてくれるな」とわかいとし子の將來を思つて、正成は涙を落すのである。

【四】

恩地「折も折今は五月、五月雨時で、降りしきる五月雨で、古枝の繁つた葉に雨雫の溜つてゐるやうに、悲しみの涙に袂を濡らすことでございます」

正成「武士に喩へられた櫻花は散つて、春も暮れてしまつたが、忠義の爲に死んだものの名は、この櫻井の名とともに朽ちることはないだらう」

恩地「楠は石になると申します通り、石のやうな不朽の名を留めれば、何の恨みもございません」

恨みも何かあらんといひかけた。

○菊水―太平記に楠氏の家紋として記す。傳へて聞くといひかけた。

○湊川―正成の討死した所神戸市を横ぎつて海に入る

【五】

○花橘―武士の花といひかけた。楠氏は橘諸兄の子孫であるから、橘氏にかけていつたのである。

ツレ「鄙人までもあはれ知る
シテ「恩愛
子方「親子
三人「主從の
地「別れも今更に。涙を袖に滿一が。お酌に立ち
てとりあへず
とシテ扇を開きて立ち、ツレに酌をし、
シテ「淸き名を。千代に傳へて菊水の
と謡ひながら仕手柱際に坐し、
地「流れ久しき。湊川（と立ち）
〔男舞〕

五】

シテワカ「諸人の。鑑となりて。ますらをの
地「花橘の。匂ひぬるかな匂ひぬるかな
ツレ「かくて時刻も移るなる
地「とくとく歸れと潔き。仰せに從ふ主從は。盡

正成「さうだ、田舍人でも情といふことは知つてゐるのだ」
かうして、恩愛の情深い親子主從は、今を最期の別れに涙をとめられないのであつたが、恩地滿一はお酌に立つて、
恩地「――
「淸き名を千代に傳へて菊水の、流れ久しき湊川」
（美名を千年の後に傳へて、楠氏のほまれは、湊川の流れのやうに、いつまでも消える時はない）と謡つて
〔男舞〕
と舞ひ、

【五】

恩地「――
「諸人の鑑となりてますらをの、花橘の匂ひぬるかな」
（楠氏の後裔たる子は、諸人の鑑となつて、武士のほまれを輝すのである」と謡ふ、
正成「かうしてゐるうちに、時刻も過ぎた。早く歸れ」

○歸るは孝行―孝行は正行について、忠義は正成についていふ。

きぬ涙を飜し、その名も淸き河内の國へ歸るは孝行留まるは忠義の、かしこき例ぞ。ありがたき

シテ「仰せに從ふ主從は」とツレの前に出て太刀を戴き、子方を誘ひて一の松へ行き、舞臺に向き下に居る。ツレ立ちて仕手柱際へ行きて見送り、面を伏せて留む。

と深い仰せに從つて、正行・滿一の主從は盡きぬ涙を打拂つて、その名も淸い河内の國へ歸り、國へ歸つた正行は孝行の、後に留まつた正成は忠義の、尊い例となつたのは、實にめでたいことである。

九世戸（くせのと）　観

解說

【能柄】脇能　複式夢幻能

【人物】ワキ　當今臣下、ワキツレ　同從者（二人）、前シテ　漁翁（さいしやう老人）、前ツレ　漁夫、狂言　九世戸門守神、後ツレ　天女、後シテ　龍神

【所】丹波國　九世戸

【時】六月中旬

【作者】能本作者註文に觀世小次郎の作として擧げてゐる外、古記錄に見當らない。

【梗概】今上陛下の臣下が九世戸の法會參詣に出掛けると、さいしやう老人が漁翁の姿をして漁夫と共に現れ出て、天神始祖より九世に當る忍穗耳尊がこの地に文殊菩薩を勸請遊ばれ、それ以來今に至るまで、天女・龍神が渴仰して燈明を捧げるのであると、九世戸の緣起を語つて消え失せる。やがて老人の話の如く、天女・龍神が現れ出て燈明を捧げて、佛を敬禮す。

【出典】この事は諸國俚人談にも見えてゐて、九世戸の法會に行はれる祭事であるが、この曲が何によつたか　その文獻は明らかにし難い。

【概評】本曲は龍神物の脇能で、この種のものに「江島」「竹生島」「寢覺」などがあり、いづれも本地垂跡說に本づいて神佛を混淆したものであるが、本曲の如きは殊に佛教臭味の濃いものである。勿論神佛同一體と視た室町時代のことであるから、佛德を稱へた脇能も少くはなく、「道明寺」「輪藏」の如きは本曲よりも更に佛敎的色彩の濃いものであるが、それらは僧ワキである。大臣ワキ（勅使又は當今臣下など）の脇能では、本曲ほど佛教臭味の著しいものがない。舞臺效果からいへば、天燈・龍燈は賑やかな感じを與へてよいと思ふが、ツレ天女に舞のないのが物足りなく感じられる。

【一】

○朝立つ—風の涼しい朝早く出立すとの意。旅衣の麻を朝にいひかけた。立つ（裁つ）、遙（張る）は衣の緣語。

○九世の戸—丹後國與謝郡吉津村にあり、今は切戸又は喜瀨戸といふ。

○神代の古跡—後に出づ。

○天竺五臺山　支那長安の東北にあり、印度にあるのではない。一に淸涼山といひ、華嚴經菩薩住所品に「東方有二菩薩住處一、名二淸涼山一、……現有二菩薩一名二文殊師利一、有二一萬菩薩一、常爲說法」とあるに據り、こゝに文殊菩薩を祀る。

○文殊—文殊師利 Manjuçri の略。妙吉祥と譯す。普賢と相對し、釋尊の左側に侍し、智慧を司る。頭に五髻（大日の五智を表す）を結び、右手に智劒を持し、左手に靑蓮華を持し、獅子に

【一】

後見、松の立木左右に燈明臺をつけたる作物を正面先に出す。次第の囃子にて、ワキ當今臣下、大臣烏帽子・上頭掛・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶の裝束、ワキヅレ從者二人、ワキと同様の裝束にて舞臺に入り向ひて、

ワキ　ワキヅレ　次第「風も涼しき旅衣。風も涼しき旅衣朝立つ、道ぞ遙けき

地取の後、また次第を繰返して、ワキは正面に向き、

ワキ「抑もこれは當今に仕へ奉る臣下なり。さても丹後の國九世の戸は神代の古跡にて。忝くも天竺五臺山の文殊を勸請の地なり。殊に林鐘半ばかの會式にて御座候程に。唯今參詣仕り候

ワキ・ワキヅレ向合ひ、

ワキ　ワキヅレ　道行「丹波路の。末はるばると思ひ立つ。末は

【一】

前段

舞臺は初め京都で、ワキ當今の臣下、ワキヅレ從者を隨へて登場。

朝臣「風も涼しい朝まだ早いうちに、旅に出掛けるのであるが、行先が隨分遠い感じがする」

と次第を謠つて旅の心持を述べ、

朝臣「自分は今上陛下にお仕へしてゐる臣下である。さて、丹後の國九世の戸は神代の古跡で、忝くも天竺五臺山の文殊菩薩をお移し申した地である。今は丁度六月の中頃で、九世の戸にお祭があるから、これから參詣しようと思ふ」

と見物人に自己紹介をし、

朝臣「丹波への旅を、行先の隨分遠いこと

駕す。
○勸請の地―勸請とは遠隔の地から神佛の靈を移し祀ること。九世戸に文殊堂があり、天橋山智恩寺といふ。
○林鐘―六月の異名。もと音律の名で、十二律の一として六月に配したもの。
○會式―法會祭式。祭。
○生野―丹波國天田郡にあり、幾の音を重ね、金葉集小式部の歌「大江山生野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立」を引いて文の綾とした。
○天の橋立―與謝郡府中村江尻より西南に二十七町餘突出した沙洲。日本三景の一で、その南端は文殊堂と相對す。

【三】

るばると思ひ立つ。旅の衣の日もいく日生野の道の程遠き。まだ踏みも見ぬ橋立や。はや九世の戸に着きにけりはや九世の戸に着きにけり

ワキ「まだ踏みも見ぬ」と正面に向き正面先へ出で、またもとへ歸りて、九世戸に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

ワキ「日を重ねて急ぎ候程に。これははや九世の戸に着きて候。都にて承り及びて候よりも。天の橋立はるばると。誠に妙なる眺めにて候。なほなほ心靜かに眺めばやと存じ候（へとツレに向く）

ワキヅレ「尤も然るべう候

といひて、脇座に行き順に竝びて下に居る。

【三】

眞一聲の囃子にて、シテ漁翁、面笑尉・尉髮・襟淺黄・着附無地熨斗目・茶水衣・腰帶・扇の裝束、ツレ漁夫、直面・襟赤・着附無地熨斗目・縷水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて、二人とも釣竿を持ちて橋懸に出で、ツレは一の松、シテは三の松に立ちて向合ひ、

シテ ツレ 一聲「浦風も。涼しさ添へて追風とや。波路遙かに。出づるなり

だと思ひながら出掛けて、幾日かの日を過してゐるうちに、遠いと思つてゐた、まだ來たことのない天橋立に來て、九世の戸に着いた」

といつてゐるうちに、旅は進んで九世戸に着いた心で、舞臺は丹後國九世戸となる。

朝臣「幾日もの旅を急いだので、思ひの外早く九世の戸に着いた。この天橋立の邊は遙か遠くまで見渡されて、都で聞いてゐたよりも更に勝れた實によい景色だ。なほゆつくりと眺めませう」

といつて、景色を眺める態。

【三】

シテさいしやう老人漁翁の姿を裝ひ、ツレ若い漁夫を作つて、釣舟から濱へ上つて、こちらへくる態で登場。

漁翁「濱風が涼しい上に、順風が吹いたので、思はず沖遠くまで出たことだ」

正面に向きて、

ツレ二句『海士の見る目もいさみある。シテツレ（向合ひ）『眺め妙なる。景色かな

と謠ひて舞臺に入り、ツレは眞中に、シテは常座に立ちて、

シテサシ『所から曇らぬ空も與謝の海の。天の橋立はるばると。シテツレ（向合ひ）『蔭踏む道に行きかふ人も。今日の祭の時をへて夏水無月のなかば行く。船の渡りの。隙もなき。貴賤群集ぞ。ありがたき

シテツレ下歌『世渡る業は惜しめどもいざや歩みを運ばん。上歌『神の代の。昔語を思出の。昔語を思出の。月日曇らぬ天つ神。地神二代を數へ來てここ九世の戸の名も高き。大聖文殊を勸請の。御影あらたに捧ぐなる。法の燈火曇りなく。照らす誓ひは、賴もしや照らす誓ひは賴もしや

「法の燈火曇りなく」とシテ・ツレ入替り、シテは眞中に、ツレは脇正面に立つ。ワキ立ちてシテに向ひ、

漁夫「われ／＼風流な心のない漁夫が見てさへも、思はず心が浮き立つてくる、實によい景色だ」

漁翁「場所柄とて　空の氣色まで曇りなく晴れ渡つて、この與謝の海の天橋立は遠くまで遙々と見渡され、松原の中を行き來する人も、今日は六月の中旬、お祭の日なので、殊更多く、舟の渡も隙間のない程、貴い人も賤しい者も寄り集まつてゐる。實に佛の德はありがたいものだ」

漁翁「われ／＼はその日／＼の渡世で忙しいからだであるが、さあ參詣しよう。月日のやうに曇りのない天神七代を經て地神二代の御時に、出來たといふので、九世の戸といふ名が附けられたのであつて、その神がこの方、文殊菩薩をこゝに御勸請遊ばされてより、佛德を仰ぎ奉る御燈明は曇りなく照り輝いて、誠に御利益の賴もしいことだ」

と語り合ひながら臣下の方に來る。臣下これを見て、

○海士の見る目も—風流な心のない漁夫が見てさへ心が浮かれ勇むほどのといふ意。「見る目」を海士の刈る海松藻にいひかけた。
○與謝の海—橋立左右の海灣。曇らぬ空もよしを與謝にいひかけた。
○蔭踏む道—天の橋立の松原の木蔭の道。文殊の德の蔭を受く意を含めていふ。
○時をへて—古謠本には「時を得て」とあるのを、謠ひ誤つたのである。
○水無月のなかば行く—水無月は六月の雅名。六月も半分過ぎたとの意。半ば行くを行く船にいひかけた。
○天つ神地神二代—天神七代地神二代。
○ここ九世の戸の—天神七代地神二代合せて九世を經てとの意にいひかけた。

【三】
○天神七代―日本書紀によれば、國常立尊、國狭槌尊、豊國主尊、泥土煮尊・沙土煮尊、大戸之道尊・大苫邊尊、面足尊・惶根尊、伊弉諾尊・伊弉册尊を申す。
○地神二代―第二代目の地神の意で、地神第一代を天照大神とし、その御子忍穂耳尊を申す。間語に「地神二代忍穂耳尊この國へ天下り給ひ、末世の衆生濟度のため……」といふ。但しこの傳説の出所は分らない。
○菩薩の像體―文殊堂に安置した文殊菩薩の像。
○帝釋―能天主と譯す。須彌山の頂上、忉利天の天主で、四天王及び他の三十二天を領して佛法歸依の人を護り、阿修羅の軍を征する天王。
○龍宮―海の底にある龍王の都。

【三】ワキ「いかにこれなる老人に尋ぬべき事の候
シテ「此方の事にて候か何事を御尋ね候ぞ
ワキ「これは都より始めて參詣の者なり。まづこの所を九世の戸と。名づけそめにしその謂れを。委しく語り給ふべし
シテ「我等は賤しき漁人なれば。いかでか語り申すべきさりながら。まづ九世の戸と名づけし事。かたじけなくも天神七代地神二代の御神。この國に天降り。ここにて天竺五臺山の。文殊を勧請し給へば。天の七代地の二代を。これ九世の戸と名づけしなり
ツレ『されば菩薩の像體も。これ帝釋の御作とかや
シテ「その後龍宮に入り給ひ。法を弘めて程もなく。又この島に上り給ふ

【三】朝臣「もうし、御老人に一寸お尋ねするが……」
漁翁「私の事ですか、何のお尋ねでございます」
朝臣「自分は都から始めて參詣した者だが、まづこの所を九世の戸と名づけるやうになつた謂れを委しく聞かせて下さい」
漁翁「私どもは賤しい漁師ですから、何をお話し申すことが出來ませう。しかし、ここを九世の戸と名づけたのは、忝くも天神七代を經て地神第二代の御神が、この國に天降りになり、こゝに天竺五臺山の文殊菩薩をお移し遊ばしたので、天神七代地神二代合はせて九世といふ意味て、九世の戸と名づけられたのです」
漁夫「それで、この菩薩の御像も帝釋の御作だといふことです」
漁翁「地神第二代の忍穂耳尊はその後龍宮へお入りになり、佛法をお弘めになつて、またこの島にお上りになつたのです」

○獅子の渡り―獅子は文殊菩薩の乗物であるから、この名を生じたのである。今宮津港を隔てた文殊堂の對岸に獅子崎がある。この邊をいつたものであらう。

○天の燈火龍神の御燈―諸國俚人談に「丹後の國與謝郡天橋立にて、毎月十六日夜半の頃、丑寅の沖より龍灯現じ文殊の方に浮み寄る。堂の前に一樹の松あり、之を龍灯の松といふ。又正五九月の十六日の夜に、空より一灯くだる。之を天灯といふなり」

○渇仰―天人と龍神とが文殊を信心敬禮する意。

ツレ『即ち獅子の渡りとて。今に絶えせぬ跡とめて

シテ「龍神御燈を捧ぐれば

ツレ『天より天人天降り

シテツレ『天の燈火龍神の御燈。この松が枝に光をならべ。渇仰の時節今宵なり。ありがたかりける。時節なり

ワキ『さては神代の昔より。今に絶えせぬこの松に。捧ぐる御燈をまのあたり。拜まん事ぞありがたき

シテ『なかなかの事御覽ぜよ。出でくる月も曇りなき

地上歌『天の橋立光添ふ。天の橋立光添ふ。都の人も浦人も。語れば思ふ事なくて。四方の眺めも面白や。松風も音しげく。立ちくる波も白妙の。

漁夫「それで、その所を獅子の渡りと申して、今に至るまで古跡を留めてゐるのです」

漁翁「龍神が文殊に御燈を捧げますと……」

漁夫「天からは天人が降り……」

漁翁「天人の燈火と龍神の御燈とが、この松の枝に光を竝べて、天人龍神ともに文殊を信心敬禮するのは、今宵のことです。實にありがたい折です」

朝臣「それでは、神代の昔から今に至るまで絶えることなく、この松に捧げる御燈を、眼のあたり拜むことが出來るとは、實にありがたい」

漁翁「全くです。おゝ御覽なさい。今空に昇つてきた月も曇りなく、天橋立に光を添へてゐます。かうして、都の方とこの浦の者とお話をしてゐると、全く何の思ひもなく、四方の景色も面白う感じられます。松風も音高く、打寄せる波は色白く、月は今し澄み上つて、ほんとに面白い景色です」

月澄みのぼる、氣色かな月澄みのぼる氣色かな

「天の橋立光添ふ」にツレは地謠座前に行きて坐し、ワキも下に居る。シテ地謠に合せて仕科をし、上歌濟みて眞中に行きて坐す。

【四】

地クリ『それ地神二代の御神。始めてここに天降り。末世の衆生濟度の爲に。靈像を勸請し給へり

シテサシ『さればこの地開闢の昔

地『はや神國とあらかねの。ききうの祭しなじなの。衆生濟度の方便生死の相を助けんとて

シテ『三世覺母の。大聖文殊を

地『この島に安置。し給ひけり

（居クセ）

地クセ『この橋立を造らんと。約諾ありしその頃は。神の代未だ遠からず。雲霧。虚空に充ち滿ちて常闇の如くなりしかば。おのおの神火を燈し

【四】

漁翁「さて地神第二代の御神が、始めてここに天降りになり、末世の衆生を濟つて、極樂の彼岸に渡さうと思し召し、こゝに文殊菩薩の御像を移しお祀りになつたのです。

從つてこの地は天地開闢の昔から早く神國として現れたもので、ききうの祭など色々行はれて、衆生を生死の迷界から助け濟つて、極樂へ渡す手段として、過去・現在・未來の三世を導く悟りの母といはれる文殊菩薩をこの島に安置遊ばしたのです」

漁翁「そして、この橋立を造らうとお約束になつた頃は、まだ神代から餘り距つて居ず、雲や霧が空に充ち滿ちて、一日中眞暗であつたので、神々が皆神火を燈して、日夜土を運んで　また松をお植ゑに

【四】

○あらかねの―土の枕詞。神國とあらはるといひかけた。

○ききうの祭―意不明。謠曲評釋に「地久の祭といふを謠ひ誤れるには非ぬか」といふ。

○衆生濟度の方便―衆生を生死の迷界より濟ひ出して悟りの彼岸に渡らしめる爲の手段。

○三世覺母―過去現在未來の三世を導く覺りの母の意で、文殊菩薩の德號。心地觀經に「文殊師利大聖尊、三世諸佛以爲レ母、十方如來初發心、皆文殊敎化力」

○火置の島―天橋立の北、今與謝郡日置村の邊に、島があつたのであらうか。
○有頂―有頂天で、佛教で所謂天の最頂。非想非々想天ともいふ。
○下界―龍宮を指していふ。
○影向―神佛の來臨し給ふこと。

【五】
○御影を松の―御燈の光を待つを松にいひかけた。

て。日夜に土を運びて同じく松を植ゑ給ふ。その燈火の餘りをかしこに置かせ給ひしより。火置の島とてこれも故ある神所なり

シテ『かくて神々集まりて

地『天竺五臺山の。文殊を勸請し給へば。上は有頂の雲を分け。下は下界の龍神。音樂種々の花降り。御燈を捧げ奉る。その影向の有樣語るも、愚かなりけり

【五】

地ロンギ『げにありがたき神の代の。げにありがたき神の代の。昔語も今の世に。殘る燈火曇りなき。御影を松の木蔭かな

シテ『短夜の。空も更け行く浦風の。音を靜めて待ち給へ。必ず御燈現れん

地『不思議やさてもかくばかり。委しく語る浦人の。その名を名乘り給へや

なりました。その燈火の餘りを、あそこにお置きになつたので、これを火置の島と申し、これも由緒のある神所なのです。かうして、神々が集まつて、天竺五臺山の文殊菩薩を移しお祀りになると、上は天人が有頂天の雲をかき分けて天降り、下は海底の龍神が浮かび出て、音樂を奏し、種々の花を降らし御燈を捧げるので、その御來臨の有樣は、とても口には申せない結構なものです」

【五】

朝臣「いかにもありがたいことだ。神代の昔話をそのまゝに、今の世まで絶えず殘つてゐる御燈の光を拜む爲、この松の木蔭で待つてゐませう」

漁翁「夜も短い時で、すぐ夜も更け、浦風も靜かになつてきました。靜かにお待ちなさい、きつと御燈が現れることでせう」

朝臣「どうも不思議だ。一體このやうに委しくお話し下さるそなたはどういふ方か、名をお名乘り下さい」

○さいしやう老人―さいしやうは採桑で、舞樂の採桑老のやうな老人といふ意であらうか。本書の底本とした間語本にもこの字を充てゐるが、文殊との關係は分らない。

【間】

シテ『今は何をか包むべき。われは知らずやこの寺の

地。大聖文殊の御前なる。さいしやう老人はわれなり（と立ち）。御身信心清淨の。心を感じ來りたりと。いひ捨ててその姿。松の木蔭に、失せにけり

松の木蔭に失せにけり

と仕手柱際にてひらき、來序の囃子にて中入。ツレも續いて入る。

漁翁「今は何を隱さう、自分を御存じないか、自分はこの寺の文殊菩薩の御前に仕へてゐる採桑老人だが、そなたの清淨な信心に感じて、こゝへ來たのだ」といひ捨てて、その姿は松の木蔭に消え失せてしまつた。

【間】　亂序の囃子にて、狂言門守の神、面登髭・末社頭巾・上頭掛・着附厚板・縷水衣・括袴・脚半・腰帶・扇の裝束にて出で、名乘座に立ちて、

狂言「かやうに候者は。丹後の國九世の戶の文殊に仕へ申す門守の神にて候。誠に當寺の文殊は天下に隱れなき御事にて候。その子細は。地神二代忍穗耳尊この國へ天降り給ひ。末世の衆生濟度のため。天竺五臺山の大聖文殊を御勸請あり。所の名をも九世の戶と申し候。されば菩薩の尊像も大聖の御作と申し候。扨又この所に獅子の渡り。火置の島橋立など申して御座候が。今に神代の如く綿津見の宮と御心を一にして。今に至るまで龍燈を捧げ松の枝に移し給ふ。その時天人天燈を松の枝に捧げ。天地と共に渴仰なさるる御事にて候。かやうの靈地なれば。國々在々所々より信仰仕り。參り下向は夥しき御事にて候。されば當今に仕へ給ふ臣下殿。この所へ御參詣にて候が。この所の子細申し上ぐるものもあるまじくと思し召し。採桑老人龍宮の姬宮假に現れ。神代の事ども御物語あり。重ねて奇特を見せ申さんとて。松に木隱れ給ふ。その間我等がやうなる門守にも罷り出で。一曲を

仕り慰め申せとの御事により。これまで出でて候。急いで一曲奏で申さう

狂言『めでたかりける時とかや。〔三段舞〕『やら〳〵めでたやめでたやな。かゝるめでたき折柄なれば。我等がやうなる門守も。現れ出でて謡ひ奏で。これまでなりとて門守は。これまでなりとて門守の神は。もとの社に歸りけり

と舞ひて幕に入る。

【六】

出端の囃子にて、後ヅレ天女、面連面・黒垂・天冠・襟赤・着附摺箔・紫長絹・緋大口・腰帶・扇の裝束にて、燈明臺を兩手に持ちて常座に出で、

後ヅレ『久方の。雲居に渡る橋立は。天つ御空の。御階かな

地『月も更け行く天の原。月も更け行く天の原。紫雲たなびき異香薫じ。天つ少女の雲の羽袖。光も妙なる御燈を捧げ（と正面に出で）。松の梢に天降り。天降る。かかりければ龍宮より捧ぐる御燈の光。海上に浮かんで見えたる粧ひ。あらたなりける出現かな

「海上に浮かんで見えたる」と幕に向ひ、後ジテを迎ふる心にて開き、次の早笛にて地謡座前に行きて坐す。

【六】　後段

後ヅレ天女登場。

天女「空の雲にまでつゞいてゐる橋立は、天へ上る御階段であらう—

と、月も更けて行つた空に、紫の雲がたなびき渡り、妙なる香が薫り、天女が輕やかな袖を飜して、光も妙なる御燈を捧げて、松の梢に天降つて來た。

さうすると、また龍宮から捧げる御燈の光が海上に浮かんで見える樣子、誠にありがたい御來臨である。

【六】

〇久方の—雲の枕詞。

【七】

○本光―佛の光。

○日月燈明佛―法華經序品に見えたる佛の名。二萬の同名の佛があり、光明天にあつては日月の如く、地にあつては燈明の如くであつたといふ意から出た名。こゝには天燈の輝く形容に借りたのである。

○一つになりあひ―一になるを地名の成相にいひかけた。成相山は與謝郡の北にあり、中腹に成相寺があり、觀世音を祀る。

【七】

早笛にて、後ジテ龍神、面黒髭・赤頭（龍戴）・金襴鉢巻・襟紺・着附厚板・法被・半切・腰帯・打杖の裝束にて、燈明臺を兩手に持ちて橋懸に出で、一の松に立ちて、

後ジテ「本光普き燈火の。龍宮の內裏を。照らすなり（と謠ひて舞臺に進み）

地「空には日月燈明佛。空には日月燈明佛

シテ「又下界には龍神の燈火

地「潮に搖られ浮き沈めども（と右膝をつきて面伏せ）。光はいとど（と立ち）。かかやきあがりて天地の兩燈一つになりあひ（と作物の右へ燈明をのせ）。九世の戸の明方。明々たり

と打杖を手に持ちて、

〔舞働〕

引續き次の謠に合せて仕科。

シテ「もとより龍神は飛行自在に

地「もとより龍神は飛行自在に通力遍滿の奇特を見せんと。平地に波瀾を起しつつ。海山虛空

【七】

後ジテ龍神登場。

龍神「佛の光の遍く輝き渡る燈火が、龍宮の內裏を照らすのである」

と、天には日月の如き燈明が輝き、また海底よりは龍神の燈火が浮かび出て、潮に搖られて、浮きつ沈みつするけれど、光は消えないどころか、愈〻照り輝いて、地上に浮かび上つて、天地の兩燈が一つになつて、こゝ成相山の麓九世の戸は、夜の明方にあか／＼と輝き渡るのである。

〔舞働〕に龍神は文殊を敬禮する樣を示し、

もとより龍神は飛行自在の神通力を持つてゐることとて、その通力自在の奇蹟を見せようといつて、平地に波を起して、或は海に或は山に或は空中に飛

に飛びかけつて。嵐を蹴立て。雨を起して吹き曇り吹き曇り震動すれども御燈の光は。明らかに。猶澄み昇るや（ツレ立ちて幕へ行き）。天つ少女の姿も雲居に（シテ、ツレを見送り）。入らせ給へば又龍神は。波を蹴立て。逆巻く潮の廻るとともに。逆巻く潮の廻るとともに。引かれて波にぞ。入りにける

と幕際へ乗り込み飛び返りて下に居、袖をはねて立ち上り、留拍子を踏む。

び翔つて、嵐を蹴立て、雨を起して、吹き曇り／＼して、震動するけれども、御燈の光は明らかに愈〻澄み上る。その中に、天女の姿も空中にお入りになると、龍神はまた波を蹴立てて、逆巻く潮の廻るとともに、潮に引かれて、海中に入つた。

〔考　異〕

古謡本　（元祿二年本）

【一】ワキ「日を重ねて……これははや（元程なう）九世の戸に……眺めばやと存じ（元思ひ）候　【二】シテサシ「所から……今日の祭の時をへ（元得）て……　【三】シテ「我等は賤しき……いかでか語り（元存じ）申すべき……九世の戸と名づけし（元候）事……　【五】地「不思議（元うれしや）さてもかくばかり……

熊坂（くまさか）

觀（寶　春　剛　喜）

解說

【能柄】五番目　複式夢幻能

【人物】ワキ　都方の僧、前シテ　僧（熊坂長範の靈）、狂言　所の者、
後シテ　熊坂長範

【所】美濃國　赤坂

【時】（九月）

【異稱】古く「幽靈熊坂」ともいつた。

【作者】二百十番謡目錄に金春禪竹の作とし、能本作者註文には「幽靈熊坂」を作者不明として擧げてゐる。世子六十以後申樂談儀後人加筆の分に、永正十一年十月廿八日南都禰宜の能に本曲の演ぜられたことを記してゐる。

【梗概】都方の僧が東國修行の途次美濃の赤坂まで來ると、一人の僧が出て來て、古墳に回向を乞ひ、わが庵に泊める。この僧は實は熊坂長範の亡靈であつて、やがて昔の姿で都僧の夢に現れ、牛若に殺された次第を語るといふ筋で「烏帽子折」の後半と同一の事件を幽靈物に脚色したものである。

【出典】牛若丸が强盜を殺した事は、平治物語卷三にもあり、義經記卷二には殊に委しく記してゐるが、義經記には强盜の首領を藤澤入

道とし、熊坂長範の名は見えず、三條吉次の旅宿も近江の鏡の宿となつてゐる。幸若舞曲の「烏帽子折」は謠曲と同趣の構想で、謠曲・舞曲、いづれかが創案したものであらうが、その制作の前後が分らない。謠曲拾葉抄には、異本義經記に據つたもののやうに記して居り、その引用文は謠曲に近似してゐるのであるが、義經記にこの種の異本は見當らない。義經記の異本として著しいのは、判官物語であるが、これは謠曲の〔攝待〕舞曲の「八島」に相當する記事を缺いてゐるだけで、流布本と殆ど同一であり、義經記評判に引いてゐる芳野本も流布本と大差なく、十二卷の大和本も單に卷數を細かくしたに過ぎない。たゞ正德二年馬場信意の義經勳功記が拾葉抄所の引用文とほゞ一致したものであるが、もし異本義經記がこの種のものであるならば、謠曲以後のもので、本曲の原據ではない。同じく拾葉抄に引いてゐる雜々拾遺も後世の述作で、本曲の典據ではない。小山田與淸の强盜熊坂長範考に、

　藤澤入道を熊坂長範と改めしは、當時藤澤氏に憚る人などありてのわざにや。

と記してゐるのは、首肯すべき說のやうであるが、その何人であるかを明らかにしない。

【槪評】總說に述べたやうに、謠曲の特色は複式夢幻能にあるので、同一材料を現在物と幽靈物とに脚色した二つの曲、例へば〔梅枝〕と〔富士太鼓〕、〔巴〕と〔現在巴〕〔鵜〕と〔現在鵜〕などを比べると、いづれも幽靈能の方により多くの興味があるのであるが、本曲とその現在物〔烏帽子折〕とを比べると、必ずしも本曲の方が勝つてゐるとはいへない。題材としては、本曲の方が〔烏帽子折〕のやうに二段に分れてゐないだけ力强いのであるが、その脚色法が甚だ拙い。まづ前段で、ワキとシテとが同樣な僧侶であることが觀衆の眼を混亂させて、夢幻能として大切な、ワキに對する親しみ、シテに對する怪しみ、さうした別趣の感じを引起させるに不便である。殊に後段に於て、强盜討入の光景をシテとワキとの掛合で描いてゐるのは、その光景を舞臺に躍如たらしめるのには都合がよいが、その度が過ぎて宛も現在物のやうな劇的描寫に陷り、稍ともすればワキ僧も强盜の一人であるかの感を抱かしめるのである。もし「吉次が通る道すがら、野にも山にも宿泊りに、目附をつけてこれを見す」「夜も更け行けば吉次兄弟、前後も知らず臥したりしに」などを謠本の通りにワキの科白として解釋すれば、どうしても强盜の一人、シテヅレと見なければならないのである。このやうな劇的色彩の强いものとしたことが、やがて夢幻能の特色を失ひ、從つて現在物劇能の〔烏帽子折〕に劣る結果となつたのであらうと思ふ。

【一】
○憂しとはいひて―この世は辛いものだといつて出家したのであるが。
○行方いつとか定むらん―いつまで行方も定まらない旅にさすらふことであらう
○山越えて―逢坂山を越えて。
○粟津の森―近江國、大津市の南にあり、近江八景の一。湖の泡といひかけた。
○勢田の長橋―琵琶湖の湖尻勢田川に架けた橋。近江八景の一。
○野路篠原―野路は瀬田村の東北にあり、矢橋と隣る。篠原は野洲郡にあり、野路に續いてゐる。
○夜をこめて―夜の明けないうちに。篠の節にかけて夜を呼び起した。
○青野が原―美濃國不破郡にある。
○色づく色か―所の名は青野であるが、木々の葉は紅葉して赤くなつてゐるといひかけて赤坂とつゞけた。
○赤坂―青野が原と同じく不破郡にある。
【二】

【一】
次第の囃子にて、ワキ都僧、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・腰帯・扇・數珠の装束にて名乘座に出で、囃子座の方に向き、

ワキ次第『憂しとはいひて捨つる身の憂しとはいひて捨つる身の行方いつとか定むらん

地取に正面に向き、

ワキ「これは都方より出でたる僧にて候。われ未だ東國を見ず候程に。唯今思ひ立ち東國修行と志し候

ワキ道行『山越えて。近江路なれや湖の。近江路なれや湖の。粟津の森も見え渡る勢田の長橋うち過ぎて。野路篠原に夜をこめて朝立つ道の露深き。名こそ青野が原ながら。色づく色か赤坂の里も暮れ行く、日影かな里も暮れ行く日影かな

【二】
「色づく色か赤坂の」と謡ひながら脇座へ行きかゝる。

シテ僧、直面・角帽子・褾淺黄・着附無地熨斗目・縷水衣・腰帯・數珠の装束にて、幕より出でながら、

シテ(呼掛)「なうなうあれなる御僧に申すべき事

【一】前段

舞臺は初め京都で、ワキ都僧登場。

都僧「この世の中は辛いものだと思つて、出家して旅に出たのであるが、このやうな行方も分らないさすらひの旅を、いつまで續けることであらうと思ふと、さすがに心細くなる」

と次第を謡つて旅の心持を述べ、

都僧「私はまだ東國を見たことがないので、今度思ひ立つて、東國へ修行に出掛けようと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

都僧「逢坂山を越えて、近江路に入り、湖水のあたり、粟津の森などを見て、勢田の長橋を渡り、野路や篠原を夜の明けないうちに立ち、朝旅を急いで、美濃の國青野が原を經て、木の葉の紅葉した赤坂の里に夕暮着いた」

と旅程を述べてゐるうちに、旅は進んだ態で、舞臺は美濃國赤坂に移る。

【二】
都僧が赤坂の里まで來ると、シテ熊坂の亡靈、僧の姿をして登場。

僧「もうしもし、そこへ行かれるお僧にお

○往復ならねば申すなり―特に往復すべきわざとの途でない、通り途だからお序にお願ひするとの意であらう。此句解諸説區々としてゐる。拾葉抄には―往復とは往きて復らざると云ふ詞なり、死したる人なれば名を申すにも及ばざると云ふ心なり」評釋には「古墳の主の極樂に往生出來ずして迷ひ居るをいふ。復の字は輕く見るべし」刊行會本辭解には「通行の路邊ならねば特に敎ふとの意、往復は人の往來する處即ち道路の謂」とある。

○あら何ともなや―何ともなやは實は何ともなしの反對で、都合が惡いとの意。名を知らずして回向するのが都合が惡いのである。

○法界衆生平等利益―一切の衆生は皆一樣に佛の慈悲利益を受け、生死の迷界を脫れ出るとの意。法界は物心すべての世界をいふ。

の候

ワキ駒座にてシテに向ひ、

ワキ「こなたの事にて候か何事にて候ぞ

シテ「今日はさる者の命日にて候弔ひて給はり候へ

ワキ「それこそ出家の望みなれ。さりながら誰と志して回向申すべき

シテ一の松に留まり、

シテ「たとひその名は申さずとも。（右の方を見やりて）あれに見えたる一木の松の。少しこなたの茅原こそ。唯今申す古墳なれ。往復ならねば申すなり

ワキ「あら何ともなや。誰と名を知らで回向は如何ならん

シテ「よしそれとても苦しからず。法界衆生平等利益

話がしたいのです」

旅僧「私の事ですか、何の御用です」

僧「今日はある者の命日ですから、とうか回向をして下さい」

旅僧「それこそ出家の望む所です。して、どなたの爲に回向を致すのですか」

僧「たとひその名前を申さないでも、あそこに見えてゐる一本松の、少し手前の茅原の中にある古墳が、その主ですから、すぐ分ります。お通りがけの途だから、お願ひ致します」

旅僧「これは異なことをいはれる。誰だか名前も知らないで回向をするのは、變ちやありませんか」

僧「いえ、それでも構ひません、經文にも仰せられた『この世の衆生は皆一樣に佛の慈悲利益を受け、生死の迷苦を免れて、

○離れよ―出離生死の生死を上下に兼ねて用ゐたのである。

○それこそ主よ―その回向を受けて喜ぶ者が古墳の主である。

○回向は草木國土まで―經文に「草木國土悉皆成佛」とある通り、追善回向の功德は非情の草木土石にまで及ぶものであるから。

○わきて―特にその人と名を指さないでも。

【三】

○持佛堂―自分の持佛を安置して供養する爲に建てた堂、或はこれを簡略にした佛間。

と舞臺に入り常座に立ちてワキへ向く。

ワキ『出離生死を

シテ『離れよとの

地上歌『御弔ひを身に受けば。御弔ひを身に受けば。たとひその名はなのらずとも。受け喜ばば。それこそ主よありがたや。回向は草木國土まで。漏らさじなればわきてその。主にと心あてなくとも。さてこそ回向なれ浮かまではいかがあるべき

【三】

シテ『さらば此方へ御入り候へ。愚僧が庵室の候に一夜を明かして御通り候へ

ワキ「さらばから參らうずるにて候

ワキ踏み廻りて脇座に坐し、シテは眞中へ出でて下に居る。

ワキ「いかに申し候。持佛堂に參り勤めを始めうずると存じ候處に。安置し給ふべき繪像木像の

成佛せよ』との御回向を受ければ、結構なので、たとひその名は申さなくても、それが即ち御回向を受けて、喜ぶものがあれば、ありがたく存じます。御回向を受ければ、非情の草木國土まで漏れなく成佛するのですから、殊更その主の爲にと名ざして戴かなくても、回向さへして戴ければ、成佛しない筈はありません」

【三】

僧「では、こちらへお出で下さい。私の庵室がありますから、こゝで一夜をお明かし下さい」

都僧「では、參りませう」

と都僧は土地の僧に案内せられた態で、舞臺は僧の庵室となる。

都僧はその庵室の様を眺めて、

都僧「一寸お尋ねしますが、持佛堂へ參つて勤行を始めようと思ひますと、安置なさる筈の繪像も木像もなく、壁には大長

○柱杖―禪僧の用ゐる杖。
○初發心―發心出家してからまだ年月を經ない者。
○垂井青墓―二所とも美濃國不破郡にある。
○子安の森―赤坂の北にある。
○晝ともいはず雨のうちには―晴天の日には勿論の事といふ意であらう。
○高荷―馬に高く積んだ荷物。
○はしたの者―人の數に入らない下人。
○一度はさもなき時もあり―一度は時にはとの意。自分が聲をかければ、時には盜賊の害を受けないで濟むこともある。

形もなく。一壁には大長刀。柱杖にあらざる鐵の棒。その外兵具をひつしと立て置かれ候は。何と申したる御事にて候ぞ

シテ「さん候この僧は未だ初發心の者にて候が。御覽候如くこのあたりは。垂井青墓赤坂とて。その里々は多けれども。間々の道すがら。青野が原の草高く。青墓子安の森繁れば。晝ともいはず雨のうちには。山賊夜盜の盜人等。高荷を落し里通ひの。下女やはしたの者までも。うち剝ぎ取られ泣き叫ぶ。さやうの時はこの僧も。例の長刀ひつさげつつ。ここをば愚僧に任せよと。呼ばはりかくればげには又。一度はさもなき時もあり。さやうの時はこの所の。便りにもなるものぞかしと。悦びあへば然るべしと。思ふばかりの心なり。なんぼうあさましき世を捨

刀が掛けてあり、柱杖はなくて、鐵の棒があり、その外武具が一杯に立て並べてあるのは、これはどうしたことなのです」

僧「實は私はまだ出家して間のないものですが、御覽の通り、この邊は垂井・青墓・赤坂などといつて、人家の建てこんだ里が多いのですが、その間の、青野が原には草が高く生ひ茂つて居り、青墓の子安の森は薄暗いばかりに木が繁つてゐるので、白晝でも構はず、殊に雨天などにはよい幸ひにして、山賊や夜盜などの盜人が、澤山の荷物を持つてゐる旅人は勿論のこと、隣り里まで行く下女下人の物まで剝ぎ取るので、とられた者が泣き叫ぶのです。さういふ時に、この私も、例の長刀をひつさげて飛び出し、『この所は愚僧に任せろ』と呼ばはると、盜賊も逃げ出して、時にはこれに怖れて盜賊の現れないこともあるのです。さうすると、土地の人達が『この土地の者にとつて誠に結構なことだ』と喜ぶので、自分もさうだらうと思つて喜んでゐるのです。いや出家の身として、あさましい心掛です」

○しゝようなき手柄―「ししよう」刊行會本には殊勝、寶生流には師匠、下懸三流には支證の字を充て、拾葉抄には「殊勝なき手柄證據なき手柄なり」といつてゐる。僧侶として殊勝らしくない手柄といふ意にも解せられるが、支證（證據）なき手柄で、功名とならない、意義のない腕立てといふ意であらう。
○似合はぬ僧の腕立―僧に不似合な腕立。
○彌陀の利劍―阿彌陀の名號を稱へれば、一切の罪障を斷滅するので、彌陀も念佛といふ利劍を用ゐるといふ。善導の般舟讃に「利劍卽彌陀號、一聲稱念罪皆除」
○愛染―愛染明王は三面六臂の忿怒尊で、手に弓箭等を持つて衆生を救ふ方便とす。弓箭は妄念を射る標示。
○多聞―多聞は毘沙門の譯語で、この佛は手に三叉或は獨鈷の戟を持つて惡魔を降伏する。
○愛着慈悲心―恩愛執着の念より起る慈悲心。この心は佛道の障害となるものである。
○達多―提婆達多の略。釋迦の從弟で、始め佛法に反

て者の所存候ぞ

（居クセ）

シテクセ『しゝようなき手柄

地『似合はぬ僧の腕立てさこそをかしと思すらん。さりながら佛も彌陀の利劍や愛染は方便の弓に矢を矧げ。多聞は鉾を横たへて。惡魔を降伏し災難を拂ひ給へり

シテ『されば愛着慈悲心は

地『達多が五逆に勝れ。方便の殺生は。菩薩の。六度に優れりとか。これを見かれを聞き他を是非知らぬ身の行方。迷ふも悟るも心ぞや。さればこゝろの師とはなり。心を師とせざれと古き詞に知られたり。かやうの物語。申さば夜も明けなましお休みあれやお僧たちわれもまどろまんさらばと眠藏に。入るよと見えつるが。形も失

僧「このやうなつまらない手柄立をし、僧らしくもない腕立てをするのは、随分をかしな奴だとお思ひになるでせう。しかし、佛も衆生を救ふ爲には、稱名念佛を煩惱を斷ち切る利劍とせられ、愛染明王は妄念を射る方便に弓矢をお持ちになり、毘沙門天は鉾を以て惡魔を降伏し災難をお救ひになるのです。

かういふ譯で『恩愛執着の心から起す慈悲心は、結局佛道の障りとなるもので、寧ろ提婆達多が五逆罪を犯しても遂に成佛した方が勝つて居り、佛が衆生を救ふ方便として殊更殺生をなさるのは、菩薩が色々の修業をして漸くに涅槃に入るのよりは勝つてゐる』とも聞いて居ります。外の委しい事は知りませんが、要するにわが身の行末を迷ふのも悟るのも心一つで、『われらは心の師となつて心を制御しなければいけない、迷ひの心に動かされてはいけない』と、古くからいはれて居ります。……いやこのやうなお話をしてゐると、夜が明けてしまひます。とうぞお休み下さい、私も寢ませう」

といつて、寢室に入るやうに見えたが、形も消えて、今あつた庵室は草むらと

せて庵室も草むらとなりて松蔭に夜を明かしたる、不思議さよ夜を明かしたる不思議さよ

シテ「眠藏に」と立ち、静かに橋懸に出で中入す。

【間】　狂言所の者、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帯・扇の裝束にて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。赤坂の宿に住居する者にて候。今日は青野が原へ參り。心を慰め申さばやと存ずる。（ワキを見て）いや是なるお僧はいづ方より御出でなされ候ぞ

ワキ「是は都方より出でたる僧にて候。御身はこのあたりの人にて渡り候か

狂言「なかなかこの邊の者にて候

ワキ「左樣にて候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「畏つて候。（眞中に出て坐しさて御尋ねなされたきとは如何やうなる御用にて候ぞ

ワキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。古この所に於て色々惡業をなしたる者の果てたる子細。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「是は思ひもよらぬ御尋ねにて候。熊坂の長範と申して。初發心の身として惡黨なしたる者の候。かの者の事にて候はば物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「まづ熊坂の長範と申したる人は。北國方の者にて御座ありしが。若年の時は正直なる者にて御座ありしに。ある時親類の方へ行き。酒に醉ひたる風情にて。藏の鍵を盜み取りしを。亭主これを見て追ひ驅けしに。長範やがてかの鍵を地のしるき所に踏みつけて逃け申して候。亭主は鍵を取返しその儘歸りしが。長範鍵の踏みつけたる所を元に拵へ合せ鍵をし。かの者の留守を狙ひ一跡を盜み取る。それより盜みは重寶と思ひ。ここかしこにて人の物を盜み取り。後には盜人の棟梁とな

なつて、都僧は松蔭に夜を明かしてゐたのであつたのは、實に不思議なことである。

對し五逆罪を犯したが、後に法華の功德によつて成佛した。「愛着慈悲心は達多が五逆に勝れ」は、文章の形からいへば、愛着心の方が達多の五逆よりは勝つてゐると解すべきであるが、前後の關係から見れば、執着心を離れない慈悲よりは、遂に成佛することの出來た達多の五逆の方が勝れてゐるとの意でなからうか。

○方便の殺生―佛が衆生を救ふ手段として、故らに殺生をすること。

○六度―度は生死の海を渡る義。布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六法を六度といふ。このやうな菩薩の修行よりは佛の方便の殺生の方が勝つてゐるとの意。

○他を是非知らぬ―彼を聞きて他を是非しといひかけて、是非知らぬと轉じた。

○心の師―涅槃經に「願作二心師一、不レ師二於心一」心の師となつて迷はないやうにわが心を制御せよ、迷ひの心に動かされるなとの意

○眠藏―寢室。禪家の語。

【間】

○しるき所―泥水になつた地。

○合せ鍵―元の鍵と同じ形の鍵。

○一跡―すべての財產。

【四】○牡鹿の角の――時間の極めて短い喩。萬葉集に「夏野行く牡鹿の角の束の間も妹が心を忘れて念へや」

り申して候。又この所にて空しくなりたる様體は。三條の吉次信高とて。金を商ひ色々の寶を持ちて奥へ下るを。長範これを存じ夜討をかけしに。義朝の御子牛若殿。小太刀を以て斬り殺し給ふ。その後悪黨をなし申す者は御座なく候。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。御身以前にいづくともなく僧一人來られ。今日は志す日に當りたり。御經を讀み佛事をなせと申され候程に。如何なる人ぞと尋ねて候へば。色々悪業をなしたる者の事を懇に語り。眠蔵に入ると見て形も消えて候は。なんぼう不思議なる事にては候はぬか

狂言「是は奇特なる事を承り候ものかな。扨は長範の幽靈現れたると存じ候。それを如何にと申すに。かの者は誰弔ふ者もなく候間。御回向にも預りたく存じ。御宿を申したると存じ候間。弔つて御通りあれかしと存じ候

ワキ「近頃不思議なる事にて候程に。暫く逗留申し。ありがたき御經を讀誦し。かの者の跡を懇に弔ひ申さうずるにて候

狂言「御逗留にて候はば重ねて御用仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【四】

ワキ上歌〈待謡〉「一夜臥す。牡鹿の角の束の間も。牡鹿の角の束の間も。寢られんもの か秋風の。松の

【四】後段

義信 一夜こゝに泊つて、寒い秋風に吹かれて、暫くの間も寝ることが出來ず、

下臥夜もすがら、聲佛事をやなしぬらん聲佛事をやなしぬらん

【五】

出端の囃子にて、後ジテ熊坂長範、面惡見・長範頭巾・襟花色・着附無色段厚板・法被・半切・腰帶・金緞襷の裝束にて長刀をかたげて出で、一の松にて留まり、長刀を突き立てて、

後ジテ『東南に風立つて西北に雲靜かならず。夕闇の。夜風烈しき山陰に

地『梢木の間や。騷ぐらん（と面を使ひて見廻し）

シテ『有明頃かいつしかに

地『月は出でても朧夜なるべし切り入れ攻めよと前後を下知し。弓手や馬手に心を配つて。人の寳を奪ひし惡逆。娑婆の執心これ御覽ぜよ。あさましや

【六】

と舞臺に入り、常座に立ちてワキに向く。

ワキ「熊坂の長範にてましますか。その時の有樣御物語り候へ

○聲佛事―讀經念佛の如く聲を立ててする佛事。

【五】

○東南に風立つて―〔志賀〕〔呉服〕に天下の泰平を諷つて、「東南に雲收まり西北に風靜かなり」とあるを反對にして、もの凄い夜景を叙したのである。

○夕闇―日が沒して月の出るまでの間。宵闇。

○有明頃か―今夜は月の出の運い有明月の頃であらうか。

○下知―命令、指圖。

○弓手―左。

○馬手―右。

○娑婆の執心―死後なほこの世に殘る執着心。

【六】

○熊坂の長範―義經記にも記されてゐない假作人物。解說及び間語參照。

の下蔭で、夜中、聲を立てて讀經したことである。

といふうちに、いつしか假睡すると、その夢に現れる心で、後ジテ熊坂長範が登場。

【五】

長範「東南から強い風が吹いて來て、西北に走る雲行が穩かでない、夕暮から夜にかけて風が烈しく吹いて、山陰の梢は騷がしい音を立てることだらう。今日は有明月の頃であらう。いや早く月が出ても、嵐が烈しいので朧夜たらう。これを幸ひに、『切り入れ、攻め入れ』と、部下の者に命令して、右左に心を配つて、人の財寳を奪つた悪逆の執心がこの世に殘つて、その幽靈が現れて來たのです。このあさましい姿を御覽下さい」

【六】

都僧は夢現にその姿を認めて、

都僧「あなたが熊坂長範ですか、その時の有樣を話して下さい」

○三條の吉次―義經記卷一に「その頃三條に大福長者あり、その名を吉次信高とぞ申しける。每年奥州に下る金商人なりける」
○與力―助力加勢。仲間。
○河内の覺紹―以下磨針太郎、三條の衞門、壬生の小猿等みな地名を冠した盜賊の名。
○面討―正面からの討入。
○火ともしの上手―松明をつけて夜討をすることの名人。義經記卷二鏡の宿にて吉次宿に强盜入る事に「油さしたる車松明五六臺に火をつけて、天にさし上げたれば、外は闇けれども内は日中のやうに拵へ」とある。
○わけ切り―押し分けて一騎討ちに斬り入ることか。

シテ「さても三條の吉次信高とて。黄金を商ふ商人あつて。毎年數駄の寶を集めて。高荷を作つて奥へ下る。「あつぱれこれを取らばやと。與力の人數は誰々ぞ

ワキ「さて國々より集まりし。中に取りても誰がありしぞ

と謡ひながら眞中へ出で、床几にかゝる。

シテ「河内の覺紹。「磨針太郎兄弟は。面討には並びなし

ワキ「さて又都のそのうちに。多きが中にも誰がありしぞ

シテ「三條の衞門壬生の小猿

ワキ「火ともしの上手わけ切りには

シテ「これらに上はよも越さじ

ワキ「さて北國には越前の

長範「では、お話しませう。さて、三條の吉次信高といつて、黄金を商ふ商人があつて、毎年多くの寶を集め、荷物に積み重ねて奥州へ下るのだ。おゝこれはよいものだ、取つてやらうと、人數を集めた。あの時おれと一所に働いたのは、誰々であつたか知ら」

都僧「諸國から集まつたことだらうが、殊に勝れてゐたのは誰々だな」

長範「さうだ、河内の覺紹に磨針太郎兄弟これらは正面から攻め入るのに、一番强い男であつた」

都僧「都から來たものも多かつただらうが、その中で强いのは誰だつた」

長範「三條の衞門に壬生の小猿だ」

都僧「松明の投げ入れや一騎討の上手な男は……」

長範「今いつた二人が一番勝れてゐた」

都僧「それから北陸で、越前の者では……
……」

○究竟の手柄—勝れた手柄を立てること。
○しれ者—愚者。こゝでは口に罵つて心で誇る詞で、したゝか者といふ意。
○目附—見張りの番人。
○退き場—負けた時に引退く逃場所。
○目のうち人に勝れ—眼光が凡人とは違つて輝いてゐる。

シテ「麻生の松若三國の九郎
ワキ「加賀の國には熊坂の
シテ「この長範を始めとして、究竟の手柄のしれ者等。七十人は與力して
ワキ「吉次が通る道すがら。野にも山にも宿泊りに。目附をつけてこれを見す
シテ「この赤坂の宿に着く。こここそ究竟の所なれ。退き場も四方に道多し。見れば宵より遊君する。數百の遊び時を移す
ワキ「夜も更け行けば吉次兄弟。前後も知らず臥したりしに
シテ「十六七の「小男の。目のうち人に勝れたるが。障子の隙間物間の。そよともするを心にかけて
ワキ「少しも臥さでありけるを
シテ「牛若殿とは夢にも知らず

長範「麻生の松若に三國の九郎があつた
吉次「加賀の國では、熊坂とそれから……
長範「さうだ、この長範を始めとして、一廉の手柄を立てるしたゝか者七十人が力を合はせて、吉次の通る道筋には、野にも山にも、どこにもかしこにも、見張の番をつけて見させた。——
やがて吉次がこの赤坂の宿に着いた。ここそ最も恰好な所だ、たとへ敗けても逃げ場所が多い。そこで、宿の樣子を探らせると、宵のうちから遊女を呼んで色んな遊びをして時を過してゐる。——
夜も更けて行くと、吉次兄弟等は前後も知らずに寢てしまつたが、十六七の小男が眼光烱々として、障子の隙間などの一寸音のするのにも氣を配つて、少しも寢ないで居つた。——

○機嫌はよきぞ—折はよいぞ。

○いふこそ程も久しけれ—言ふ方が動作に比べて久しい。言ふより早くの意。

○やうやく神—拾葉抄に行疫神、陽厄神の二を擧げ、評釋は陽厄神に從ひ、刊行會本は行疫神に從つてゐる。行疫神は魔鬼を司る神で、今昔物語・元亨釋書・沙石集等に見えてゐる。恐らくその訛音であらう。

○獅子奮迅、虎亂入、飛鳥の翔り—拾葉抄に、ともに兵法の名であるといふ。

○あら枝葉—枝葉は抄物類に「しよう」支用とあると同

ワキ「運の盡きぬる盜人等

シテ「機嫌はよきぞ

ワキ「はや

シテ「入れと

地「いふこそ程も久しけれ。いふこそ程も久しけれ。皆われ先にと松明を。投げ込み投げ込み亂れ入る。勢ひはやうやく神も。面を向くべきやうぞなき。然れども牛若子。少し恐るる氣色なく。小太刀を拔いて渡り合ひ。獅子奮迅虎亂入。飛鳥の翔りの手を碎き。攻め戰へばこらへず。面に進む十三人。同じ枕に切り伏せられ。その外手負ひ太刀を捨て具足を奪はれ はうはう迯げて。命ばかりを免るもあり。熊坂いふやう。この者どもを手の下に。討つはいかさま鬼神か人間にてはよもあらじ。盜みも。命のありてこそあら

しかし、運の盡きたことには、この小男が牛若殿だとは夢にも知らず、『よい折だ、早く討入れ』といふやいはずに、皆われ先にと、松明を投げ込み投げ込みして、亂れ入つたのだ。その勢ひの恐ろしさ、疫病神も手向ひが出來さうになかつたのだが、牛若は少しも恐れる様子がなく、小太刀を拔いて斬り合ひ、獅子奮迅、虎亂入、飛鳥の翔りなど色々の祕術を盡して攻め戰つたので、對抗しきれず、正面に進んで行つた十三人の者は一度に斬り伏せられてしまつた。その外傷を受け、太刀を捨て、武具を奪はれ、這ふ〲の體で迯げて來て、やつと命だけ助かつた者もあつた。——

そこで、おれも、この男等がこのやうに手輕く討たれる所を見ると、彼奴は鬼神であらうか知ら、よもや人間ではあるまい、盜みも命があつての話だ、仕方がな

じく、「仕方がない」といふ意。國語と國文學六十一號湯澤氏「難語考十則」參照。
○うしろめたくも——卑怯にも。
○冠者——元服して冠をつけてまだ間のない少年。
○さぞあるらん——知れたものである。
○孝養——もと亡父母の爲に追善することをいつたが、轉じて一般に死者を追善供養する意に用ゐる。
○引きそばめ——小脇にかいこみ。
○折妻戸——開き戸。
○小楯——身をかばふ具。
○物あひ——距離。
○いらつて——せきこんで。

枝葉や引かんとて。長刀杖につきうしろめたくも引きけるが

「盜みも命のありてこそ」と床几を離れて立上り、長刀を杖につきて仕手柱際へ下り、これより謠に合せて長刀を遣ひ當時の様を示す。

シテ「熊坂思ふやう

地「熊坂思ふやう。ものものしその冠者が。斬るといふともさぞあるらん。熊坂。祕術を。奮ふならば如何なる天魔。鬼神なりとも。中につかんで微塵になし。討たれたる者どもの。いで孝養に報ぜんとて。道より取つて返し例の長刀引きそばめ。折妻戸を小楯に取つて。かの小男を。狙ひけり。牛若子は御覽じて。太刀拔きそばめ物あひを。少し隔てて待ち給ふ。熊坂も長刀構へ互にかかるを待ちけるが。いらつて熊坂左足を踏み鐵壁も。徹れと突く長刀を。はつしと打

い、引揚げようと思つて、卑怯にも長刀を杖について、少し後へ引いたが、また思ひ返して見ると、何を仰山らしい、あの小男の分際で、斬るといつたところで大したことはあるまい、おれが祕術を盡して戰つたならば、いかな天魔鬼神でも、中につかんで微塵にしてやるのだ。さうだ、彼奴を殺して、討たれた者どもの供養にしてやらうと、途中から引返して、例の長刀を小脇にかい込み、開き戸を楯にとつて、あの小男を狙つた。牛若はこれを見て、太刀を拔いて、少し間を置いて、おれの打ち込むのを待つて居られる。おれも長刀を構へて、互に先から打込むのを待つてゐたが、おれが少しせき込んで、左足を踏み、鐵壁も徹れとばかり突き入ると、牛若ははつしと打ちとめて、左の方へ避けた。——

○込む長刀―突き込む長刀
○刄向になし―長刀の刄を牛若の方に向けて。
○しさつて引けば―後へさがつて長刀をかいこむと。
○中にて結ぶ―上段に切り結ぶ。
○打物わざ―太刀長刀などの斬合ひ。
○面廊―長廊下又は廣い板敷。
○詰り―戸や壁などの行き詰り。
○水の月―水にうつつた月。

つて。弓手へ越せば。追つ懸けすかさず込む長刀に。ひらりと乗れば。刄向になし。しさつて引けば。馬手へ越すを。おつとり直してちやうと切れば。中にて結ぶをほどく手に。却つて拂へば飛び上つて。そのまま見えず。形も失せて。此處や彼處と尋ぬる處に思ひもよらぬ後より。具足の透間をちやうと斬れば。こは如何にあの冠者に。斬らるる事の。腹立ちさよと。いへども天命の。運の極めぞ無念なる（と長刀を捨つ）

地「打物わざにて叶ふまじ。打物わざにて叶ふまじ。手取りにせんとて長刀投げ捨て大手をひろげてここの面廊かしこの詰りに。追つかけ追つつめ取らんとすれども陽炎稲妻。水の月かや姿は見れども手に取られず

シテ「次第次第に重手は負ひぬ

追懸けてすかさず打込むと、牛若はひらりと飛んで乗り込んでくる。刄を向け直し、後に引いて構へると、牛若は右の方へ避ける、構へ直してちようと切りかゝつて、上段に斬り結ぶと、牛若は之をほどいてしまふから、切り拂ふと、飛び上つてその儘牛若の姿は見えない、あちらこちらと探してゐると、思ひもよらぬ後から、おれの鎧の隙間をちやうと斬りつけた。「これはいかな事、あのやうな小男に斬られるとは腹が立つ」といつたところで、天命の盡きたものは、致し方がなく、實に無念なことであつた。―

太刀わざでは叶はない。手取りにしてやらうと思つて、長刀を投げ捨て、大手を擴げて、こゝの廊下やかしこの隅に追つかけ廻して、捕へようとしたが、陽炎か稲妻か、水にうつる月の影のやうで、姿は見えるが手に取ることが出來ない。そのうちに、次第々々に重い傷を受けて、强い心も力も弱つてしまひ、この松の根もとで死んでしまつたのだ。―

地「次第次第に重手は負ひぬ。猛き心。力も弱り。弱り行きて（膝を突きて安坐し）シテ「この松が根の（と目附柱の下を見）地「苔の露霜と。消えし昔の物語（と立ち）。末の世助けたび給へと。ゆふつけも告げ渡る。夜も白々と赤坂の松蔭に隱れけり松蔭にこそは隱れけれ

と仕手柱際にて留拍子を踏む。

いやこれは昔話に時を過しました。どうぞ後世を弔つて下さいといふ間に、鷄の鳴き聲がして、夜もしらしらと明けて行くと、亡靈は赤坂の松蔭に隱れてしまつた。

○ゆふつけ―木綿附鳥。鷄の異稱。たび給へといふといひかけた。○夜も白々と赤坂　夜も白白と明くを赤坂にいひかけた。

〔考異〕

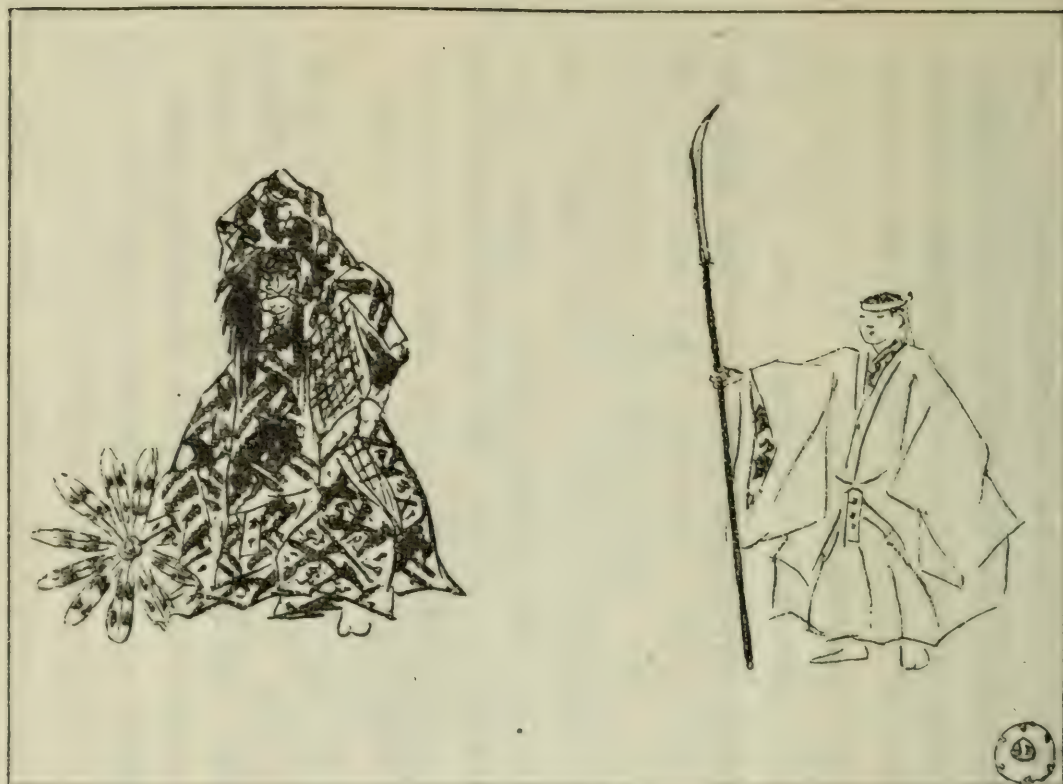
諸流（五流）

【一】ワキ次第「憂しとはいひて……いつと定むらん（剛ナシ）ワキ道行「山越えて……里も暮れ行く日影かな（春寳夕べ〳〵の假枕。〳〵。宿は數多にかはれども。同じ憂き寢の美濃の國。青野が原に着きにけり〳〵）【四】ワキ上歌「一夜臥す……跡佛事をやなしぬらん（春寳松風寒きこの原の。〳〵。草の假寢のとことはに。御法をなして夜もすがら。かの跡とふぞありがたき〳〵）

古諸本（元祿八年本）

【一】ワキ「これは都方より……唯今思ひ立ち（元ナシ）東國修行と……【二】シテ「なうなう（元いかに）あれなる御僧に……【六】地「打物わざにて……手に取られず（元カケリ）。シテ「次第次第に……

鞍馬天狗　觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】　五番目　二段劇能

【人物】　前シテ　山伏（大天狗）、狂言　西谷能力、前子方　牛若丸、前子方　平家公達（四五人）、前ワキ　鞍馬東谷の僧、ワキツレ　同從僧、狂言　木葉天狗（二人）、後子方　牛若丸、後シテ　大天狗

【所】　山城國　鞍馬山

【時】　平家時代（三月）

【作者】　能本作者註文、二百十番謠目錄ともに宮增の作とす。異本札河原勸進猿樂記に寬正五年四月十日、親元日記に寬正六年三月九日いづれも音阿彌の演じたこと、言繼卿記に文祿四年四月一日本曲を註釋したことが見えてゐる。

【梗概】　鞍馬山東谷の僧は西谷の招きを受けて、山の稚兒である牛若丸及び平家公達を作つて西谷の花見に出掛けたが、見知らぬ山伏が來たので、立歸つてしまつた。たゞ牛若丸一人があとに殘つてゐる

と、山伏はこれを憐んで、諸所花の名所へ伴ひ歩き、自分は大天狗であるが、平家討滅の望みの達せられるやうに、兵法を授けようといつて立ち去る。牛若丸が仕度をして待つてゐると、やがて大天狗が現れ出て、約束の如く兵法を授ける。

【出典】　牛若丸が鞍馬山で天狗に兵法を學んだことは、平治物語巻三「牛若奥州下りの事」に、

晝は終日學文を事とし、夜は終夜武藝を稽古せられたり。僧正が谷にて天狗と夜な／＼兵法を學ぶと云々。

とあるが、この一節は參考平治物語所收の岡崎・京師の二本に見えてゐるだけで、他の諸本には見えず、平治物語以後の制作と信ぜられる義經記巻一「牛若貴船詣の事」にも、「人跡もない僧正が谷で、貴船明神を祈つては、淸盛父子の形代を討ち、武術の鍛錬をした」と記してゐるが、天狗は出て來ない。たゞその所の物凄い様を描いて、

人住みあらし、偏に天狗の住所となり、夕日西に傾けば、物怪をめき叫ぶ。

と記してゐるだけである。即ち天狗傳説は義經記以後に發生したものと思はれるのであるが、然らば、この傳説は前掲平治物語の異本から出たものか、或は謠曲の創案したものか、又は幸若舞曲の「未來記」が語り初めたものかは明かにし難い。たゞ傳説發展の經路から見れば「義經記」、「未來記」、「鞍馬天狗」の順序を追つたもので、義經記には、天狗の住所と記してゐるだけであるのを「未來記」には、これを現場に出現せしめ、義經記の「淸盛父子の形代を討つた」といふ記事を進めて、天狗が牛若の未來を語ることとし、終に天狗の法を授かるといふ趣向で結び、「鞍馬天狗」は更にこれより進んで、「未來記」の「天狗が面白い亂舞をした」といふ記事に暗示を得て、物凄い場所を花盛りの賑はしい景に轉化し、單に兵法を授けるばかりでなく、その場で兵法を教へると活躍させたのではなからうか。

後段の挿話、張良のことは、別曲「張良」に於て述べることとする。

【概評】　判官物の謠曲には、「烏帽子折」「船辨慶」「安宅」「攝待」など、世間に流布した、また實際に秀れた作が多いのであるが、本曲も亦その秀れたものの一で、天狗物中の第一位に推されてゐるのである。

天狗が兵法を授けるといふ構想については、前項に述べた通りであるが、更にその脚色について見ると、華麗・哀涼・凄愴及び豪壯、四段に變化する舞臺情趣を釀成してゐるのである。先づ最初の花見の宴は世に思ふ事のない華麗な光景であるが、山伏の闖入によつてその感興は忽ちに奪ひ去られ、舞臺は逆轉して、いひ知れぬ寂涼たる光景を呈する。しかもその間に「友鳥の御物笑ひの種を蒔く」情景があつて、再び艷麗な場面を作ることかと思へば、この山伏と思つたのは實は大天狗で、「哀猿雲に叫んでは腸を斷つ」もの凄い氣色と

なつて、凄愴を極めた間に第一段を終り、第二段は大天狗が眞の姿を現して、一代の麒麟兒牛若丸に兵法を授けるといふ豪壯な場面でその間に師を尊んだ張良の挿話を以て、世の情理を示してゐるのである。題材の興味、舞臺面の變化、情理の周到、世阿彌以後の作としては傑出したものといふべきであらう。

【一】

○鞍馬―山城國愛宕郡にある山。山腹に鞍馬寺がある。寺は延暦年中の草創で、毘沙門天を祀る。○僧正が谷―鞍馬寺の西北十町ばかりの所にあり、俗に天狗太郎坊の栖であるといふ。○客僧―食客となつて寄學する僧。轉じて山伏の別名。

【二】

◎かやうに候者は―以下狂言詞、檜本（天和本にも）に、「これは鞍馬の御寺に仕へ申す者にて候。さても當山に於て。毎年花見の御座候殊に當年は一段と見事にて候。さる間東谷へ唯今文を持ちて參り候、いかに案内申し候、これに文の御座候御覽候へ」とある。

【一】

シテ山伏、兜巾・篠懸・襟絓・着附厚板・縞水衣・白大口・腰帶・扇・小刀・數珠の裝束にて舞臺の眞中に出で、

シテ「かやうに候者は。鞍馬の奧僧正が谷に住居する客僧にて候。（右の方を見て）さても當山に於て。花見の由承り及び候間。立ち越えよそながら梢をも眺めばやと存じ候

といひて後見座にくつろぐ。

【二】

狂言能力、能力頭巾・着附縞熨斗目・水衣・括袴・脚半・扇の裝束にて文を持ちて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。鞍馬の西谷の寺に仕へ申す能力にて候。扨も當山に於て西谷東谷とて御座候。毎年番に當りて花見の會の御座候。當年は西谷の番にて候が。東谷の面々未だ御出でなく候間。この文を持ちて參れとの御事にて候。まづ急いで參らばやと存ずる。誠に東谷の面々は何をして居らるるか。もはや御出でありさうなものぢや

【一】

第一段

舞臺は鞍馬山で、シテ大天狗、山伏の姿をして登場。

山伏「自分は鞍馬山の奧僧正が谷に住んでゐる山伏です。さてこの鞍馬山では今が花見時だといふことを聞いたので、谷の方へ行つて、餘所ながら、櫻の梢を眺めやうと思ふのです」

と自己紹介をして、西谷へ行く態。

【二】

舞臺は鞍馬山の東谷で、ワキ東谷の僧、ワキツレの従僧、子方牛若丸、子方平家公達數人を伴ひ、花見に出掛ける態で登場。

狂言西谷の能力、文を持つて出で、僧に渡す。僧これを受取つて、

○何々―文を讀み始める時に發する言葉。

○今日見ずは悔しからまし花盛り咲きも殘らず散りも始めず―謠曲拾葉抄に一定頼卿の歌なり―といふが、出所は分らない。

○花咲かば告げんといひし―源三位頼政集―花咲かば告げよといひし山守の來る音すなり馬に鞍置け」を少し替へて引いた。

といひて橋懸を見ると、子方牛若丸及び稚兒五六人、縹帽・着附縫箔・稚兒袴・腰帶・扇の裝束、ワキ東谷僧、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・大口・腰帶・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧、角帽子・着附無地熨斗目・縷水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて、子方を先に立てて橋懸に立ち並ぶ。

狂言「いやこれへ御出でにて候

舞臺際へ行き下に居て、

狂言「いかに申し候。西谷よりの御使にて參りて候

ワキ「何と西谷よりの文と候や。さては見うずるにて候

狂言「なかなかの事即ちこれに御文の候。御覽候へ

とワキの前へ行き文を渡す。ワキ文を披きて、

ワキ「何々西谷の花。今を盛りと見えて候に。など御音信にもあづからざる、一筆啓上せしめ候古歌に曰く。『今日見ずは悔しからまし花盛り、咲きも殘らず散りも始めず（文を下して）』げに面白き歌の心。たとひ音づれなくとても。木蔭にてこそ待つべきに（と文を卷きて懷中し）

地上歌「花咲かば。告げんといひし山里の。告げん

僧「何だと――

『西谷の櫻が今花盛りだと思はれるのに何故お出で下さらないのですか、お誘ひの爲め一書をさしあげます。古歌に「今日見ずはくやしからまし花盛り、咲きも殘らず散りも始めず」（今が丁度花の眞盛りで、咲きも殘らず散りも始めない、ほんとに咲き揃つたところだ。今日見なければ、やがて散り始めて後悔するだらう）と詠まれた通りの、花の最盛りです』

と書いてある手紙を讀んで、

僧「おゝいかにも面白い歌だ。たとひお手

といひし山里の。使は來たり馬に鞍、鞍馬の山のうず櫻、手折枝折をしるべにて、奥も迷はじ咲きつづく。木蔭に竝みゐていざいざ、花を眺めん

「鞍馬の山のうず櫻」と子方を先に立てて舞臺に入り、脇座より地謡座前にかけて立ち竝び、「いざいざ花を眺めん」と一同下に居る。

【三】

ワキ「いかに能力

狂言「御前に候

ワキ「少人を伴ひてある間。何にても一曲奏で候へ

狂言「畏つて候（と立上り）

狂言「いたいけしたる物あり。張子の顔や塗兒。ししや結びに結結び。山科結びに風車。瓢簞に宿る山雀。胡桃にふける友鳥。虎まだらの猫のころ。おきやがり小法師振り鼓。手鞠やおどります小弓

と謠ひて小舞をする間に、シテ目附柱際にどつかと安坐す。狂言これを見て、

狂言「やあ。これに見馴れぬ客僧の候。總じて當山に於て他山の輩參會禁制にて候間。この由申し引き立て申さう

とワキの前に出で膝をつきて、

紙がなくても、出掛けて行つて、木蔭に佇み、御案内を待たうと思つてゐたのだに、花が咲いたならば、知らせようといつてゐた、山からの使が來たのだ。では早速用意して、出掛けよう。この鞍馬山の雲珠櫻の枝を折つて、栞として行けば、いかな山奥でも道を迷ひはしまい。さあ花の咲き揃つた木蔭にずらつと竝んで、花を眺めよう」

と舞臺へ入る。

【三】

舞臺に[illegible]、僧俗稚兒達と花見をしてゐると、そこへ先程の山伏が出掛けてくる。能力これを見て、ワキ僧に向ひ、

○うず櫻―鞍の雲珠（唐鞍の飾り具）にいひかけた。うず櫻は雲珠櫻とも書き、鞍馬山の特種であるともいひ、紅の薄い色の花即ち薄櫻の意であるともいふ。定頼集に「うす櫻といふを入れてもて來たりければ」と詞書して、「これやこの音に聞きつるうす櫻鞍馬の山に咲けるなるべし」

○手折枝折―櫻の枝を手折るといひ、折の字を重ねて枝折とつゞけたのである。枝折は木の枝を折つて道しるべとすること。

○いたいけしたる―いたいたしい、可愛らしい。以下玩具盡しの小唄である。

◎いかに申し候—この狂言詞、謠本の文に從ふ。

○童形—稚兒姿の少年。

○外人—この山に見馴れない人。

○人を選み申す—人を好き嫌ひする。

◎いや〳〵それは—この狂言詞も謠本の文に從ふ。

◎畏つて候—以下狂言詞、謠本にはない。

○さまさす—興を破る。

狂言「いかに申し候。あれに客僧の渡り候。これは近頃狼藉なる者にて候。追つ立てうずるにて候

ワキ「暫く。さすがにこの御座敷と申すに。源平兩家の童形達各御座候に。かやうの外人は然るべからず候。然れども又かやうに申せば人を選み申すに似て候間。花をば明日こそ御覽候べけれ。(子方に向ひ)まづまづこの所をば御立ちあらうずるにて候

狂言「いや〳〵それは御諚にて候へども。あの客僧を追つ立てうずるにて候

ワキ「いや唯御立ちあらうずるにて候

狂言「畏つて候

牛若丸を除き子方・ワキ一同幕に入る。狂言名乘座にて、

狂言「これはいかな事。苦しうない事を無用にせいと仰せらるる。この御座敷をさまさするも客僧殿と思へば腹が立つ。某が儘になるならばこれを一つ戴かせたいな。腹立やく

と握拳にてシテを打つ眞似をして幕に入る。シテ安坐したるまゝにて、

能力「申しあげます。あそこに山伏が居られます。この花見の席へ出掛けてくるとは、甚だ亂暴な者です。追拂つてやりませう」

といつて行きかける。

僧「いや待て、このお座敷は普通の座敷とは違つて、源平兩家の稚兒達がお出でになるのだから、このやうな風來者の入つてくるのは面白くないが、しかし又このやうにいつては、人を好き嫌ひするやうで面白くないから、今日は中止して、明日御覽になることとしよう」

稚兒に向ひ、

僧「今日は一先こゝをお立ちなさい」

能力「いや〳〵お言葉ですが、それよりもあの山伏を追拂ひませう」

僧「いや唯こゝをお立ちになるがよい」

といつて、皆々幕に入るが、牛若丸だけは殘つてゐる。

【四】シテ「遥かに人家を見て花あれば即ち入る。論ぜず貴賤と親疎とを辨へぬをこそ。春の習ひと聞くものを。浮世に遠き鞍馬寺。本尊は大悲多聞天。慈悲に洩れたる人々かな

子方「げにや花の下の半日の客。月の前の一夜の友。「それさへ好みはあるものを（とシテへ向き）。あら痛はしや近う寄つて花御覽候へ

シテ（子方に）「思ひよらずや松蟲の。音にだに立てぬ深山櫻を。御訪ひのありがたさよこの山に

子方「ありとも誰か白雲の。立ち交はらねば知る人なし

シテ「誰をかも知る人にせん高砂の

子方「松も昔の

シテ「友鳥の

地「御物笑ひの種蒔くや。言の葉しげき戀草の。

【四】○遥かに人家を見て―和漢朗詠集白樂天の詩句「遥見二人家一有レ花便入、不レ論二貴賤與一レ親疎一」を引いた。

○大悲多聞天―大悲とは衆生を救ふ佛の慈悲心。多聞天は毘沙門天の漢譯。四天王の一で、身に七寶の甲冑をつけ、無量の夜叉を率ゐて北州を守護し、又常に佛の道場を護つて說法を聞くといふ。

○花の下の半日の客―平家物語巻三「少將都還の事」に「花の下の半日の客、月の前の一夜の友、旅人が一村雨の過ぎ行くに一樹の蔭に立ちよりて、別るゝ名殘も惜しきぞかし」

○松蟲の音にだに立てぬ―松蟲の忍び音に泣くを世間に知られぬ身といふ意にいひかけ、身の音をうけて深山櫻とつゞけた。

○深山櫻―客僧を喩へた。

○白雲の―誰か知らんを白にいひかけ「白雲の」を立つの枕詞とす。

○誰をかも知る人にせん―古今集藤原興風の歌「誰をかも知る人にせん高砂の松も昔の友ならなくに」を引き「友」より友鳥に轉じた。

○友鳥の御物笑の種蒔くや―諺であらう。

【四】山伏「古人の句にも、遠くの方に人家が見えた時、その家に花が咲いて居れば、早速出掛けて行つて、それを眺めるのだ。その家が貴い人のものであらうと賤しい人のものであらうと、又自分に親しい人であらうと、見知らない人であらうと、それは構はない』といつて、春の花見には貴賤親疎の差別をしないのが普通であるのに、世間離れのしたこの鞍馬寺では、御本尊は慈悲深い毘沙門天であるにも拘らず、慈悲も情もない人々ばかりだわい」

牛若「いかにも御尤もです。『花の下の半日の客、月の前の一夜の友』といつて、一夜や半日一所に花を見、月を眺めるのも、前世からの深い因緣だといふのに、折角の花見に仲間外れにして、御興を殺ぐとは、ほんとにお氣の毒なことだ。さあこちらへ近う寄つて花見をなさい」

山伏「これは存じも寄らぬ。世間に知られない深山櫻のやうな私をお訪ね下さるとは、ありがたいことです。して、そたたはこの山の……」

牛若「人らしい者には誰も思つてくれず、誰ともつき合はないから、別段親しい人といつてはないのです」

山伏「では、誰か親しい人にするお考へは……」

牛若「相手もなし」

山伏「おゝ『鳥に笑はれる種を蒔く』といふ諺の通り、すぐ人の口の端に上るとい

○言の葉しげき—世間の噂に立つ。種をうけて葉、草とつゞけた。
○無草—戀情を喩へていふ。
○老をな隔てそ—草の生ひ出づを老にいひかけた。老人であるが自分を疎んずるなとの意で、客僧と稚兒との男色をいつたのである。
○垣穗の梅—隔ての文字より垣と續け、垣より梅、花といひ續けた。
○さてこそ花の情なれ—梅が香を老若の隔てなく送るのが、花の情である。
○花に三春の約あり—花は固く約束を守つて春になれば花を開くとの意。三春は春三箇月をいふ。この句の出所は分らない。
○人に一夜を馴れそめて—人は唯一夜で深く親しい仲となる意。
○後如何ならん—後は心變りするか知られない。
○うちつけに—すぐに。逢ひ初めるとすぐに。
○楢柴の—心空になるといひかけ、萬葉集柿本人麻呂の歌「御狩する交野の小野の楢柴の馴れはまさらで戀こそまされ」を引いた。
○安藝の守清盛—清盛は久安二年二月安藝守に任ぜられた。

老をな隔てそ垣穗の梅さてこそ花の情なれ。花に三春の約あり。人に一夜を馴れそめて。後如何ならんうちつけに心空に楢柴の。馴れはまさらで戀のまさらん悔しさよ

シテ「いかに申し候。唯今の稚兒達は皆々御歸り候に。何とて御一人これには御座候ぞ

子方「さん候唯今の稚兒達は平家の一門。中にも安藝の守清盛が子どもたるにより。一寺の賞翫他山の覺え時の花たり。『自らも同山には候へども。よろづ面目もなき事どもにて。月にも花にも捨てられて候

シテ「あら痛はしや候。さすがに和上臈は。常磐腹には三男。毘沙門の沙の字をかたどり。御名をも沙那王殿とつけ申す。『あら痛はしや御身を知れば。所も鞍馬の木蔭の月（と上の月を見）

ふことは知りながら、戀心が湧き出してくるのです。このやうな老人だからといつて、分け隔てして下さるな。梅の花もあの香を分け隔てしないのが花の情です。いや花は春三月の季節を違へず、約束を固く守るものだが、人は一夜馴れ初めて親しくなつても、その後の心變りの計られないものだ。とは思ひながら、逢ふやすぐに心も空になるばかりで、親しみは增しもしないのに、戀しい心は募つて行くばかりだ。あゝ悔しいことだ」

（と心持をいひ、）

山伏「もうし、唯今御一所の稚兒達は皆お歸りになつたのに、何故そなた一人はここにお出でになるのです」

牛若「はい、唯今の稚兒達は平家の一族で、殊に安藝守清盛の子供達なので、この鞍馬山寺中の者から寵愛せられるのは勿論、外の寺の者にも可愛がられて、全盛を極めてゐるのです。ところが、私は同じ山の者とはいへ、何かにつけて恥かしい境遇で、月にも花にも捨てられたものです」

山伏「あゝお氣の毒なことだ。そなた樣はさすが源家の貴公子で、常磐腹の三男であり、毘沙門の沙の字を象つて、御名をも沙那王殿とつけられた御身分でありながら、あゝお氣の毒なことだ。あなたの御身分をお察しすると、心も暗くなるのです。さうだ、この鞍馬山の木隱れの月のやうな、見る人もない山里の櫻花のや

○一寺の賞翫他山の覺え—鞍馬寺中すべての者から寵愛せられ、また他の寺に於てももてはやされる。
○時の花—時勢にあつて花の如くもてはやされる意。
○和上﨟—和は「わが」で親しみの詞。上﨟は身分の高い人。
○常磐腹には三男—常磐は左馬頭義朝の妾。義經記卷一に「九條院の常磐が腹にも三人あり、今若七つ、乙若五つ、牛若當歳子なり」—
○沙那王殿—平治物語卷三に「弟牛若は鞍馬寺東光坊の阿闍梨蓮忍弟子禪林房阿闍梨覺日が弟子になりて遮那王とぞ申しける」（義經記にも同樣に記す）
○木蔭の月—鞍馬の音に暗しとの意を持たせて、木隱れの月といひ、見る人もなきとつゞけた。
○見る人もなき—古今集伊勢の歌「見る人もなき山里の櫻花外の散りなん後ぞ咲かまし」を引いた。
○松嵐花の跡訪ひて—松風が落花の跡を淋しく吹き、落花を雪の如く雨の如く散らすとの意。詩句のやうであるが、出所が分らない。
○哀猿雲に叫んでは—和漢朗詠集謝觀の句「巴峡秋深、

地「見る人もなき山里の櫻花、よその散りなん後にこそ、咲かば咲くべきにあら痛はしの御事や
地上歌「松嵐花の跡訪ひて、松嵐花の跡訪ひて、雪と降り雨となる。哀猿雲に叫んでは、腸を斷つとかや。心すごの氣色や。夕を殘す花のあたり、鐘は聞えて夜ぞ遲き。奧は鞍馬の山道の、花ぞ知るべなるこなたへ入らせ給へや（とシテ立ち子方を伴ひて二三足連れ出し）。さてもこの程お供して見せ申しつる名所の、或時は（と右へ少し廻り）。愛宕高雄の初櫻、比良や横川の遲櫻、吉野初瀬の名所を、見殘す方もあらばこそ
（と所々の花を見せ廻りたる心にて仕手柱際に立つ）。

【五】

子方ロンギ「さるにても。如何なる人にましませば。われを慰め給ふらん、御名を名のりおはしませ
シテ「今は何をか包むべき。われこの山に年經た

うな御境遇で、外の花の散つた後には、また榮える時機も來ようか。あゝお氣の毒なことだ。——

古人の句に、『松風が淋しく落花の跡を吹いて、花を雪や雨のやうに散らしてゐる』とか、『猿の哀しい聲が雲の中に聞えて、旅人に悲痛な感を起させる』といふのがあるが、丁度そのやうな、もの凄い氣色だ。それでも、花のあたりは、あかい色の爲に夜になつても夕氣色の感じが殘つて、入相の鐘の音が聞えても、まだ夜にならないやうに思はれる。だから、鞍馬の奧の山道は暗くても、この花で道しるべとすることが出來よう。では、こちらへお出でなされ」

（山僧ハ案内する氣、稚子は花を賞でる心で、）

山伏「さて、かうして先程からお伴してお見せした名所は、或は愛宕や高雄の初櫻、或は比良や横川の遲櫻、又は吉野や初瀬などで、名所は殘らず御案内したのです」

【五】

牛若「それにしても、あなたはどういふ方で、私をこのやうにお慰め下さるのです。どうか御名を仰しやつて下さい」

山伏「今は何を隱さう、自分はこの山に永

五夜之哀猿叫レ月」及び同集白樂天の句「猿過二巫陽一始斷レ腸」に據つた。
○夕を殘す花のあたり―花はあかいものであるから、夜に入つても花のあたりには暗くならないとの意。
○鐘は聞えて―夜の鐘が聞えても、花のあたりには夕氣色の感じがして、夜の來るのが遲いとの意。
○奥は鞍馬の―奥は暗しといひかけた。
○さてもこの程―「此方へ入らせ給へや」といつて、諸所を案内した後の心持である。
○愛宕―山城國葛野郡。
○高尾―同郡、鞍馬山の東にある。
○比良―近江國滋賀郡。
○横川―比叡山の山中北の谷地。
○吉野―大和國吉野郡。
○初瀬―同國磯城郡。
【間】

る。大天狗はわれなり
地「君兵法の。大事を傳へて平家を滅ぼし給ふべきなり。さも思しめされば。明日參會申すべし（と子方に辭儀をし）。さらばといひて客僧は（と勢ひ込んで立ち）。大僧正が谷を分けて雲を踏んで（と橋懸へ行き）、飛んで行く立つ雲を踏んで飛んで行く

と來序の囃子にて中入。續いて子方も中入。

年寢んでゐる大天狗である。そなたはわが兵法の祕傳を授かつて、平家を滅ぼされるがよろしい。そなたが望みならば、明日お會ひしよう。「ではさよなら」といつて、山伏は大僧正が谷を分け、雲を踏んで飛んで行く。

【間】 狂言オモ・アト木葉天狗二人、面ウソフク（アトは見德）・末社頭巾・着附厚板・縷水衣・括袴・脚半・腰帶・扇の裝束にて舞臺に入り、

オモ「かやうに候者は。鞍馬の奥僧正が谷に住む木葉天狗にて候。（アトを見て）いやそちは何として出たぞ
アト「何かは知らぬが。そなたが出たによつてそれ故出たわ
オモ「それならば子細を語つて聞かせう。ようお聞きやれ
アト「心得た
オモ「總じて當山に於て。西谷東谷とて毎年花見の會あり。當年は西谷の番にて。東谷の坊稚兒達を伴ひ花見に參られたを。大天狗羨ましく思し召し。そと窺はうずるとあつて。客僧の姿となり御出で候を。能力が見つけて。他山の輩參會禁制なり引き立てうと申すを。院主のいはるるは。當山に於て山伏は子細あり。花は明日にても御覽候へとて。皆々御歸り候。その跡に義朝の御子沙那王殿。たゞ

○笄隱し、木の葉隱れ、霧の印—いづれも忍びの術である。

○見えたか—自分の技倆が分つたか。

一人すご〳〵と殘り給ふを。大天狗御覽じて。皆々退散候に何とて殘り給ふぞと仰せ候へば。今の稚兒達は平家の公達。中にも清盛が子供なれば。一寺の賞翫他山の覺えよく候。自らも同山に候へども。よろづ面目もなき事どもにて。月にも花にも見捨てられ。迷惑御推量あれかしと御申し候へば。大天狗聞し召し。あら痛はしや御身と申すは。源家の棟梁にてましますが。花が御覽ありたくは見せ申さんとて。吉野初瀨愛宕高雄の花まで御見せあり。「是非とも兵法の大事を傳へ。平家を討たせ申さんとて敎へ給ふ程に。御器用にはあり御發明にはあり。はや笄隱しの木の葉隱れの霧の印などと申す大事を御傳へなされた。扨又今日は我等がやうなる木の葉天狗にも罷り出で。沙那王殿の打太刀をせよとの御事ぢや。何と思ふ

アト「某は打太刀をせうと思ふ

オモ「沙那王は大事を傳へられた事ぢやによつて。なか〳〵打太刀はなるまい

アト「身どもは是非とも打太刀をせうと思ふ

オモ「それならば稽古の爲に一太刀參らう

アト「ヤツトナ〳〵

オモ「エイヤツトナ〳〵（と打合ひ）

オモ「何と見えたか〳〵

アト「免してくれ〳〵。もはや身どもは打太刀はなるまい。戻るぞ〳〵

アトは幕に入る。オモは仕手柱際にて、

オモ「待つた〳〵。これはいかな事。はやどれへやら行つて。某一人してなか〳〵沙那王殿と打太刀はなるまい。これまで出たしるしに沙那王殿を呼び出して戻らう。（幕に向ひ）いかに沙那王殿〳〵

といひて幕に入る。

【六】

一聲の囃子にて、後子方牛若丸、白鉢卷・着附厚板・白水衣・白大口の裝束にて長刀を持ちて常座に出で、

後子方「さても沙那王がいでたちには肌には薄花櫻の單に。顯紋紗の直垂の。露を結んで肩にかけ　白絲の腹卷白柄の長刀

地「たとへば天魔鬼神なりとも。さこそ嵐の山櫻。花やかなりけるいでたちかな

と脇座に行きて立つ。

【七】

大癋の囃子にて、後ジテ大天狗、面大癋見・赤頭・金襴鉢卷・大兜巾・紫袷・着附段厚板・狩衣・半切・腰帶の裝束にて羽團扇を持ちて橋懸一の松に出で、

後ジテ「抑もこれは。鞍馬の奧僧正が谷に。年經て住める。大天狗なり

地「まづ御供の天狗は。たれたれぞ筑紫には

シテ「彦山の。豐前坊

地「四州には

シテ「白峯の。相摸坊。大山の伯耆坊

【六】　第二段

囃子前に同じ。後子方牛若丸登場

さて、今日沙那王の裝束には、肌には薄花櫻色の單を着、その上に着た顯紋紗の直垂の袖の露を結んで肩にかけ、白絲縅しの腹卷に、白柄の長刀を持ち例へば天魔鬼神の如き恐ろしい者が出て來ても、これには適はないと思はれる、花やかな勇ましい姿である。

【七】

後ジテ大天狗登場。

天狗「自分は鞍馬山の奧僧正が谷に、永年住んでゐる大天狗である。――

まづお供の天狗には誰々がゐるか。……といへば、九州では彦山の豐前坊、四國では白峯の相摸坊、又、大山の伯耆坊、飯綱の三郎、富士太郎、大峯の前鬼の一黨、葛城高間の……いやそのやうに遠くの者まで數へることはない、この近邊の土

【六】○薄花櫻―表白裏紅の襲の色目。こゝには單とあるから、薄紅色をいつたのであらう。○顯紋紗―花の紋のある紗○直垂―鎧直垂。鎧の下に着る一種の裝束。○露―狩衣直垂などの袖を縅ぢた打紐。兩袖の紐の端を結んで、袖を肩にかけるのである。○白絲の腹卷―白絲で縅した腹卷。腹卷は鎧の一種で、腹に卷いて背で合せるやうにしたもの。○天魔鬼神―天魔は天界の魔王、鬼神は鬼畜。○さこそ嵐の―これほど強くはあらじを嵐にいひかけた。

【七】○彦山の豐前坊―彦山は豐前國田川郡にある。豐前坊はこの山に棲むといふ天狗の名。○白峯の相摸坊―白峯は讃岐國綾歌郡松山の高峯。こゝに相摸坊といふ天狗が居るといふ。〔松山天狗〕參照。○大山の伯耆坊―大山は伯耆國西伯郡にあり、伯耆坊はその山の天狗。

○飯綱の三郎―飯綱は信濃國水内郡にあり、この山の天狗を飯綱の三郎といふ。○富士太郎―駿河の富士山に棲む天狗の名。○大峯の前鬼―大峯は大和國吉野郡にあり、前鬼はこの山で山伏修驗道を開いた役行者に使役された鬼。天狗は山伏姿であるから、同じ仲間として擧げたのである。○葛城―大和國南葛城郡にある峻嶺。○高間―葛城山の上方にある山。○よそまでもあるまじ―かやうに遠方の國々まで求めるに及ぶまい、この附近ではといふ意。新古今集讀人知らずの歌「よそにのみ見てや止みなん葛城や高間の山の峯の白雲」を借りて、葛城高間より「よそ」とつゞけたのである。○邊土―こゝでは近邊の土地の意。○我慢高尾の―天狗は我慢心が高いといふを高尾にいひかけた。○人の爲には愛宕山―人のために仇をなすを愛宕山にいひかけた。○霞とたなびき雲となつて

地「飯綱の三郎富士太郎。大峯の前鬼が一黨葛城高間。よそまでもあるまじ。邊土に於ては

シテ「比良

地「横川

シテ「如意が嶽

地「我慢高雄の峯に住んで。人の爲には愛宕山。霞とたなびき雲となつて（と橋懸を小廻りし）

シテ『月は鞍馬の僧正が（と上を見）

地「谷に充ち滿ち峯を動かし。嵐木枯瀧の音。天狗倒しはおびたたしや

（と舞臺に入り、）

【八】

シテ「いかに沙那王殿。唯今小天狗を參らせて候に。稽古の際をばなんぼう御見せ候ぞ

子方「さん候唯今小天狗ども來り候程に。薄手をも斬りつけ。稽古の際を見せ申したくは候ひつ

地では、比良や横川や如意が嶽の天狗、我慢心の高い高雄の峯に住む天狗、人に仇をなす愛宕山の天狗。これらの者どもが霞の如く雲の如く自在に飛行して、月も暗い鞍馬の僧正が谷に滿ち〳〵、峯を動かし、嵐、木枯の風を吹き起し、瀧の音を立て、天狗倒しの騒ぎをする物音は、實に凄じいことだ」

【八】

牛若丸に向ひ、

天狗「沙那王殿、唯今小天狗をさし出しましたから、稽古の手際を隨分お見せになつたでせうな」

牛若「はい唯今小天狗どもが來ましたから、少し手傷をも負はせ、稽古の手際を見せたいとは思ひましたが、師匠に叱ら

一飛行自在の有様をいふ。
○月は鞍馬の一月は暗しといひかけた。
○天狗倒し一深山で突然暴風の如き凄じい響の起る事。
【八】
○稽古の際一稽古の手際。
○漢の高祖一沛公劉邦。楚の項羽を討つて支那を統一し、秦の後を受けて、國號を漢と稱す。
○張良一韓の人、嘗て下邳の圯橋で一老翁より兵法を授かり、謀略に勝れ、蕭何韓信と並んで、高祖臣下の三傑と稱せらる。張良が兵法を授けられたことは、「張良」の曲に作らる。
○黄石公一張良に兵法を授けた老翁は穀城山下の黄石の化現であるから、これを黄石公といふ。

れども。師匠にや叱られ申さんと思ひ留まりて候

シテ「あらいとほしの人や。「さやうに師匠を大事に思しめすについて。さる物語の候語つて聞かせ申し候べし

と大小前に出で床几にかゝり、

シテ「さても漢の高祖の臣下張良といふ者。黄石公にこの一大事を相傳す。或時馬上にて行き逢ひたりしに何とかしたりけん。左の履を落し。いかに張良あの履取つてはかせよといふ。安からずは思ひしかども履を取つてはかす。又その後以前の如く馬上にて行き逢ひたりしに今度は。左右の履を落し（と左右の下を見）。やあいかに張良あの履取つてはかせよといふ。「猶安からず。思ひしかども。よしよしこの一大事を相傳す

れはしないかと思つて、思ひ留まりました」

天狗「おゝ何といふしほらしい人だらう。そのやうに師匠を大事にお思ひになるについて、ある昔話があります。話してお聞かせしませう」

天狗「さて、漢の高祖の臣下の張良といふ者は、黄石公に兵法の奧儀を傳受したのであるが、それは或時、張良が黄石公の馬に乘つて通るのに出會つたところ、黄石公は何と思つたのであらうか、左の履を落して『おい張良、あの履をとつてはかせよ』といつた。張良は腹立たしく思つたが、我慢してその履をとつてはかせた。その後又以前と同じやうに黄石公が馬に乘つて通るのに出會ふと、今度は左右兩方の履を落して『おい張良、あの履を取つてはかせてくれ』といふ。張良は愈〻腹立たしく思つたが、まあよいわ、兵法の奧儀を傳受する爲には致方がない、と思つて、落ちた履を取上げ、これを捧げて、

○坊主―一坊の主で、僧の敬稱。天狗は山伏姿であるから、僧の敬稱を用ゐたのである。

【九】

○源平藤橘　わが國の代表的な名族。

○かの家の水上―源氏の祖先との意。

○清和天皇の後胤―清和天皇の皇子貞純親王の子經基初めて源の姓を賜ふ。牛若丸もその後胤である。

る上はと思ひ。落ちたる履をおつとつて（ト床几を離れ居立ちて履をとる形をし）

地「張良履を捧げつつ。張良履を捧げつつ。馬の上なる石公に（ト床几にかゝり）。はかせけるにぞ心解け兵法の。奥儀を傳へける

シテ「その如くに和上﨟も

地「その如くに和上﨟も。さも花やかなる御有様にて姿も心も荒天狗を。師匠や坊主と御賞翫は。いかにも大事を殘さず傳へて平家を討たんと思しめすかや優しの志やな

と立ち、

【九】

地上歌「抑も武略の譽れの道

〔舞働〕

續いて次の謠に合せて仕科。

地「抑も武略の譽れの道。源平藤橘四家にもとりわきかの家の水上は。清和天皇の後胤として。

馬の上の黄石公にはかせたので、黄石公の心が解けて、兵法の奥儀を傳へたといふことだ。――

そいやうに、そなたも、花やかな御身を以て、姿も心も荒々しいこの天狗を、師匠よ御坊よと大事になさるのは、どうか秘傳を殘らず傳へて、平家を討ちたいとお思ひになるのですか。ほんとにお優しいお心掛だ」

【九】

〔舞働〕

に兵法の秘傳を與へ、

天狗「さても、武藝才略を以て天下の名譽を得たものに、源氏平氏藤原氏橘氏の四名族があるが、その中でも、源氏の祖先

あらあら時節を考へ来るに、驕れる平家を西海に追つ下し。煙波滄波の浮雲に飛行の自在を受けて。敵を平らげ。會稽を雪がん。御身と守るべし、これまでなりや。お暇申して立ち歸れば。牛若袂に。すがり給へばげに名殘あり。西海四海の合戰といふとも、影身を離れず弓矢の力を添へ守るべし。賴めや賴めと夕陰暗き。賴めや賴めと。夕陰鞍馬の。梢に翔つて。失せにけり

「これまでなりや お暇申して」とシテ舞臺の眞中にて子方に辭儀して仕手柱際へ行く。子方「牛若袂にすがり」と立ちてシテの袖を捉へ、「げに名殘あり」と子方は脇座に歸り、シテは舞臺を大廻りして、「賴めや賴めと」橋懸へ行き、幕際に乗込み、羽團扇を後へ投げ捨て飛び返り袖をかづきて留む。

○あらあら時節を―大凡時運到來を豫想するに。
○煙波滄波―煙の如き波、蒼い波で、西海の縁語として出し、浮雲の形容とす。
○會稽を雪がん―越王勾踐が呉王夫差に滅されて、會稽山に籠り、十年の後その恥を雪いだ故事をいふ。
○西海―こゝでは四國の海といふ意。
○夕陰鞍馬の―賴めと言ふを夕に、夕陰暗きを鞍馬にいひかけた。

は淸和天皇の後より出で、そなたも亦その後胤で、貴いお家柄だ。大凡未來の事を豫想するのに、そなたはやがて驕れる平家を西海に追ひ下し、雲の如き大海、波の如き浮雲の間を自在に飛行して敵を平らげ、積る恨みを晴らすであらう。自分はそなたを守らう。ではもはやお暇する」

といつて立ち歸ると、牛若が袂にすがつて引留めるので、

天狗「いかにも名殘惜しいことだ。九州四國の合戰にも、影の如く御身を離れず、弓矢の力を添へて守らう。安心なさい」

といつて、夕陰の暗い鞍馬の梢に翔つて、消えてしまつた。

〔考異〕

諸流（五流）

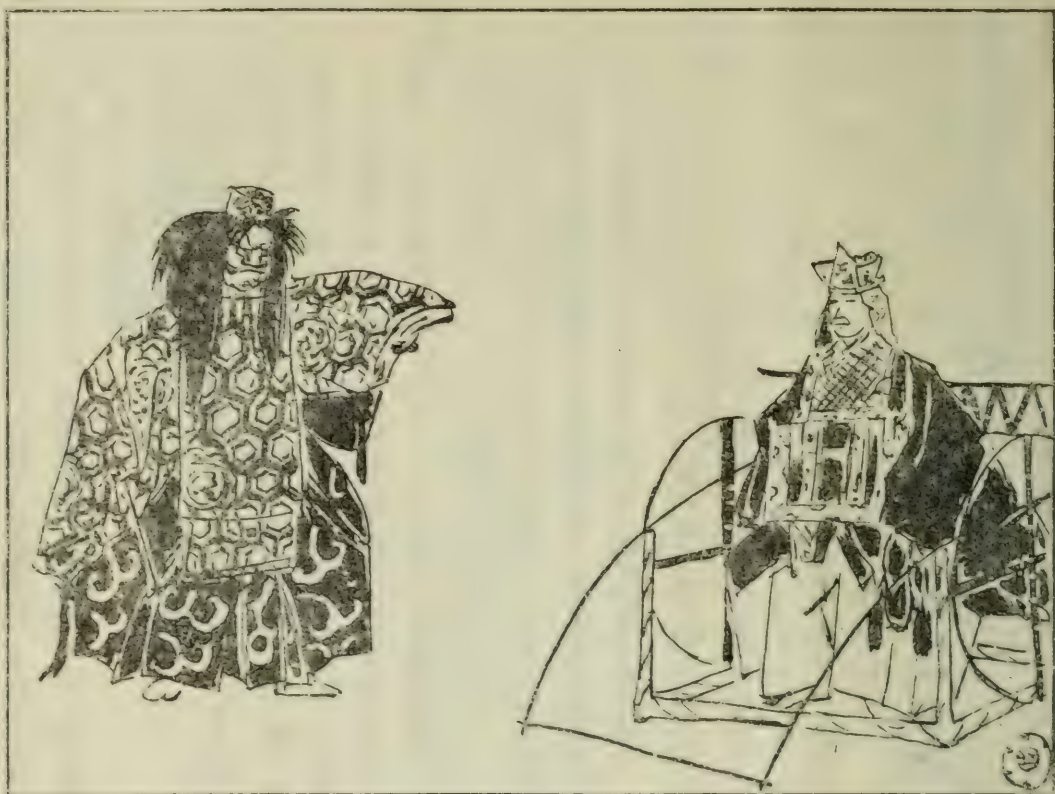
著しい異同はない。

古謠本（天和三年本）

【三】ワキ「暫く……源平兩家の童形達（天のゝ）各……【四】シテ「あら痛はしや候（天ナシ）

車僧（くるまぞう）

觀（寶春剛喜）

解説

【能柄】五番目　複式劇能

【人物】ワキ、車僧、前シテ　山伏姿の大天狗、
狂言　溝越天狗、後シテ　愛宕山大天狗

【所】山城國　嵯峨野

【時】冬（十二月）

【作者】能本作者註文、二百十番謡目録ともに世阿彌の作とす。世子六十以後申樂談儀後人加筆の所に、永正十一年十月廿八日南都雨喜びの能に演ぜられた事が見えてゐる。

【梗概】ある雪の日、車僧が嵯峨野へ出掛けると、愛宕山の太郎坊大天狗が山伏姿で現れ、車僧を打負さうとして禪問答をやつたが成功せず、二度目の天狗姿を以て現れ、行較べをしたが、車僧の恐ろしい行徳に畏敬して立ち去つた。

【出典】この典據と見るべきものは未だ見當らない。但し車僧のことは、和漢三才圖會、山城海生寺の項に、

海生寺、在ニ太秦南市川村一、禪宗、開基未詳、車僧深山和尚正虎住レ焉、車僧、嘗不レ著ニ生國姓氏一、常乘ニ破車一往ニ返于四方一、能歷ニ試七百年來往事一以語レ之、呼稱ニ車僧一、又名ニ七百歲一、謁ニ南禪寺眞翁侃一大悟、號ニ深山正虎一、住ニ于山科草庵一、後遷ニ于當寺一遷化、有ニ車僧塚一、今爲ニ黃檗派一。

また黑川道祐の遠碧軒記に引いた深山行狀記には、

車僧諱正虎、字深山、結ニ庵于山階之山中一、每レ往ニ來光藏之塔一、自持ニ時裏一供ニ木佛一、常乘ニ破車一、在ニ四衢道一、道傍小兒隨ニ其車一欲推レ之、里人名レ之曰ニ車僧一、或語以ニ七百歲之事一、而自歷試云、因レ玆又呼ニ七百歲一

車僧が破車に乘つて市中を歩き廻つたのは著名な話で、從つて奇行の多い人として諸種の傳說が傳へられ、本曲の如き事件も、その一として傳唱されてゐたのではなからうか。

【梗評】天狗が佛法を妨げようとして、高僧に打負されたといふ曲は、本曲の外に今昔物語から出た「善界」がある。そしてその曲は大唐の天狗が本曲のシテと同じ愛宕山の太郎坊と協力して、日本全體の佛法を妨げようとする、これに對して、比叡山僧が勅命によつて祈り伏せると、その祈りに應じて明王諸天、八百萬の神が力を合はせて天狗を退散させられるといふのであつて、舞臺が甚だ廣大であるが、本曲は車僧對太郎坊の個人的葛藤としてゐるのである。即ち舞臺は「善界」に比して遙かに狹いが、それだけ亦よく纏つてゐて、第一段の禪問答、第二段の車の運行、前は洒脫、後は豪快、その文章を讀んでも、實演を見ても、棄て難い味ひがあるのである。

【一】

第一段

ワキ車僧、車に乘つて登場。

車僧「悟りを開けば、現世も後世も變りがなく、結局いつも眠つてゐると同じことだ」

と次第を謠つて、出家の心持を述べ、

【一】後見、車の作物を脇座に出す。

次第の囃子にて、ワキ車僧、金入角帽子・着附小格子厚板・水衣・白大口・掛絡・腰帶・扇・數珠の裝束にて舞臺に入り、名乘座に立ちて囃子座の方に向き、

ワキ次第「後の世かけて車僧。後の世かけて車僧常寢の眠りいつまで

地取に正面に向き、

【一】

○後の世かけて――この世から後の世へかけて、いつまでも眠る。悟了すれば、眠るも覺めるも同じであるとの意。

○車僧―解說にいふ。

○常寢―車の床を常寢にいひかけた。覺める時なく寢ること。

○空は小倉の—空は小暗きといひかけた。小倉山は山城國葛野郡嵯峨にある。
○嵐山—嵐が雪を散らすとの意で地名につゞけた。嵐山は葛野郡松尾村にあり、大井河を隔てて嵯峨と相對す。
○大井河—雪の多い、といひかけた。嵐山の北麓を流れる川。
○筏の床—大井河に流す筏より、筏の床、床の枕、枕かたしく袖、袖の白妙、白妙の空とつゞけて行つた。
○西山本—西山の麓。西山は嵯峨・嵐山等京都の西にある山地。日の西に傾くを西山にいひかけた。

【三】
○浮世をば何とか廻る車僧まだ輪の内にありとこそ見れ—天狗が車僧を嘲つた歌。車輪の内は生死輪廻の迷界を車の縁で喩へた語で、車僧よ汝はまだ生死輪廻の迷界を解脱し得ないやうであるのに、何と思つてそのやうに悟り顔して浮世を廻り歩いてゐるのだといふ意。

ワキ上歌「降り曇る。空は小倉の峯の雪。空は小倉の峯の雪。散るや嵯峨野の嵐山。瀧の響も聲添へて重なる雲の大井河。筏の床のうき枕かたしく袖も白妙の。空も程なく廻る日の。西山本に着きにけり西山本に着きにけり

「筏の床のうき枕」と右の方に向きて二三足出で「西山本に着きにけり」と脇座へ行きて、車の中に入り、

ワキ「暫くこの所に車を立て。四方の景色を眺めうずるにて候（と床几にかゝる）

【三】

シテ山伏、兜巾・篠懸・襟紺・着附無色厚板・緋水衣・白大口・腰帯・扇・小刀・刺高數珠の裝束に一幕より出でながら、

シテ「いかに車僧

ワキ「何事ぞ

シテ「浮世をば

ワキ「浮世をば

シテ「浮世をば何とか廻る車僧。まだ輪のうちに。

車僧「雪が降つて空も小暗く、殊に小倉山や嵯峨野、嵐山のあたりでは雪が散り亂れて、瀧の響も音高く水煙をあげ、白雲の立上る大井河のあたりでは流す筏も眞白になつてもの寒い感じのする、この西山の麓嵯峨野へ夕日の西に傾いた頃着いた」

と、あたりの景趣を述べてゐる間に、舞臺は嵯峨野となる。

車僧「暫くここに車を留めて、あたりの景色を眺めよう」

と休んでゐる態。

【三】

そこへ、シテ愛宕山の大天狗が山伏姿で現れ、

天狗「おい、車僧」

車僧「何の用だ」

天狗「浮世をば……」

車僧「浮世をば、どうしたといふのだ」

天狗「浮世をば、どうしてそのやうに悟り

○浮世をば廻らぬものを車僧乗りも得るべきわがあらばこそ—車僧の答へた歌。「わ」を輪と我とにかけ、この世の中はすべて假象で、車とか我とかいふ實體はないのである。即ち我といふものがないのだから、乗るべき車もなく、浮世を廻るといふこともないとの意。
○いふは誰そ—我がないといふが、その我がないといふものの主體は、汝自身でなくて誰だ。汝自身でないか。
○空洞風涼し—空虚な洞の中には一物もなく、たゞ涼しい風の吹くに任せてゐるだけである。即ちこの世の中はすべてが假空のものであるから、我も誰もないのである。
○わが名のみ高雄の—自分は昔に聞えた有名な、愛宕山の大天狗であることを知らぬか。拾遺集八條のおほいぎみの歌—なき名のみ高雄の山といひ立つる人は愛宕の峯にやあるらん」を借りた。
○人は愛宕の峯に—人は天狗を指す。慢心が深くて佛道の仇をなすを愛宕にいひかけたのである。
○一所不住—一所に定住しない。

ありとこそ見れ（と常座に立つ）
ワキ「浮世をば廻らぬものを車僧。「乗りも得るべきわがあらばこそ
シテ「乗りも得るべきわがあらばこそといふは誰そ
ワキ「空洞風涼し
シテ「わが名のみ高雄の山にいひ立つる
ワキ「人は愛宕の峯に住むな
シテ「さてお僧の住家は
ワキ「一所不住
シテ「車は如何に
ワキ「火宅の出車
シテ「廻れど
ワキ「廻らず
シテ「押せど

顔をして廻り歩いてゐるのだ。お僧はまだこの輪廻の迷界を解脱してはゐないと思ふが」
車僧「自分は浮世をば廻り歩いてゐるにしないのだ。第一、車に乗るべき我といふものがないのだ。この世はすべて假象ではないか」
天狗「その車に乗るべき我がないといふ言葉の主は誰だ」
車僧「うつろな洞に風が通つてゐるやうなもので、一切空だ」
天狗「見違へるな、おれは昔にも高い高雄山の……」
車僧「さては愛宕山に住んで佛道の仇をなす者だな」
天狗「して、お僧の住家は……」
車僧「どこといつて定めがない」
天狗「でも、その車が住家ではないか」
車僧「これに迷ひを出て浄土に入る車だ」
天狗「しかし、その車は迷ひの世界に廻つてゐるが……」
車僧「いや迷ひの世界へは行かない」
天狗「おれは迷はしてやらうと思ふが……
……」

ワキ「押されず

シテ「引くも

ワキ「引かれぬ

シテ「車僧の

地「三界無安猶如火宅をば。出でたる三つの。車僧かな。廻るも。直なる道なりけりおう。乗り得たり乗り得たり

地上歌「見聞く人。心空なる雲水の。心空なる雲水の。深立つ空も凄しく。嵐の聲々に愛宕山。嶺どよむまで響き合ひて。車路はなけれども。わが住む方は愛宕山。太郎坊が庵室に。御入りあれや車僧と。呼ばはりて夕山の黒雲に乗りて、あがりけり黒雲に乗りてあがりけり

シテ「黒雲に乗りて」と小廻りして橋懸へ出で、来序の囃子にて中入。

車僧「動きはしないぞ」

天狗「引き入れてやらうと思ふが……」

車僧「いや引き入れられはしない」

天狗「それでは、車僧は『三界の安きなきこと、猶火宅の如し』といはれた迷ひの世界を出て、悟りの車に乗つて、一路佛法に精進するといふのか。よくも悟りの車に乗れたものだ。おゝ天晴れなことだ。――

ところが、このおれこそ見聞く人が驚いて、氣も失つてしまふ恐ろしい者なのだぞ。あの愛宕山には嵐が烈しく山中に響き渡つて、車の通る路もないのだが、おれが住んでゐるのは、その山なのだ。あの愛宕山にこの太郎坊の庵室があるのだ。車僧。おれの所へ來て御覽―

と大聲にいつて、夕暮の黒雲に乗つて飛び上つて行つた。

○車は如何に―一所不住といふが、その車は汝の住家でないか。

○火宅の出車―火に包まれた家の如き迷界を出て、涅槃に入る譬。「三つの車」の條參照、

○三界無安猶如火宅―法華經譬喩品の句。三界は欲・色・無色の三世界で、衆生の生死輪廻する迷界、この世界の不安なことは火に燃えてゐる家のやうであるとの意

○三つの車―法華經譬喩品に、昔ある長者に三人の子供があり、その家が火事に羅つてゐたのに、三人の子供は遊びに心を奪はれて、家を出ようとしなかつたので、父が羊車・鹿車・牛車の三つの車を取出して、これに乗れといふと、子供はその面白さに心が移つて、遂に火より救はれたと、火宅を人間界に、父を佛に、子供を衆生に、三つの車を佛の方便に喩へた話から出た話

○心空なる―見聞の人が驚いて、心も空になるを、空の雲といひかけた。

○深立つ空―諸本この字を充ててゐるが、解し難い。深水の緣で深といふ字を用ゐて、雲の多い意を表したのであらうか。

○とよむ―響く。

○愛宕山太郎坊―愛宕山は山城國葛野郡にあり、山伏修行の道場で、天狗の住む山と傳へられてゐる。源平盛衰記にも「柿本紀僧正は日本第一の天狗となりて愛宕山の太郎坊と申すなり」とある。

【間】

○ねそ〳〵―のそり〳〵。言語動作の緩漫な形容。

【間】　亂序の囃子にて、狂言溝越天狗、面ウソフキ・末社頭巾・着附厚板・水衣・括袴・脚半・腰帯・扇の裝束にて、

竹杖をついて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。愛宕山の傍に住む溝越天狗にて候。扨も我等が名を溝越天狗と申す子細は。ある時上京より下京へ參るとて。大きなる溝のありしを飛んで飛びすまし。我ながらよく飛んだと自慢の致してござれば。太郎坊慢ずる所が憎いとあつて。それより溝越天狗と呼ばれて候。又ここに車僧と申して。貴き僧の渡り候が。われ程貴き者はあるまじいと思し召すによつて。太郎坊慢ずる所が憎いと思し召し。嵯峨野の邊へ客僧の姿となり御出であつて。いかに車僧と言葉をかけられたれば。車僧ねそ〳〵と何事ぞといはれた。その時太郎坊。浮世をば何とか廻る車僧。まだわの内におりとこそ見れとかけられたれば。車僧の返事に。浮世をば廻らぬものを車僧。のりも得るべきわがあらばこそ。輪もなし我もなしと言はれた。さやうに申す者は誰ぞ。是はたそのわと言ひて。禪道の言葉にて面白き事にてありげに候。されば歌に。たそといふたそと答ふる誰ぞの輪は。兎の耳か鳶の尺。なんぼう祕傳道に入りたる法文にて候。扨その後空洞風涼し。わが名のみ高雄の山にいひ立つる。人は愛宕の峯に住むな。車はいかに。火宅の出車。引くか廻るか。さは候まじ。承るまじなどと色々問答なされ候が。太郎坊受太刀になられ。我は愛宕に歸り。今一度出合ひ問答申さうずるとて御歸りなされ候が。我等がやうなる溝越天狗にも罷り出で。車僧をなぶり申せとの御事により。是まで出でて候。何かと申す内に嵯峨野にて候。車僧はいづ方に居らるるか。（ワキを見て）さればこそ是に居らるる。先はねそ〳〵とした面つきかな。太郎坊が憎まるるは尤もぢや。まづ言葉をかけて見よう。いかに車僧〳〵。これは如何なこと。鹿の角に蜂がさいたとも思はぬ。漸々思へば言葉をかけられ。むさとした返事をしてはなるまい。總じて人間といふ者は。こそぐらるるほど迷惑なものはござらぬ。さらば擽つて笑うたならば。魔道へ引き入れてやらう。こそ〳〵〳〵。こそ〳〵

こそ（と杖にて操る形をして）。をかしいか車僧〱

狂言「車僧の鼻は大きな鼻かな。車僧の鼻の先を鼠が子を負うて。あなたへちよろ〱。ちよろ〱やちよろ〱。をかしいか車僧〱。こなたへちよろ〱。ちよろ〱やちよろ〱。をかしいか車僧

狂言「是はいかな事。なか〱魔道へ引き入る事はなるまい。太郎坊を呼び出して戻らう。（幕に向ひ）いかにやいかに太郎坊〱

といひて幕に入る。

【三】

大癋の囃子にて、後ジテ大天狗、面大癋見・赤頭・大兜巾・金緞鉢巻・襟紺色・着附厚板・狩衣・半切・腰帶・羽團扇の裝束にて、打杖を後にさし、橋懸一の松に立ちて、

後ジテ「愛宕山樒が原に雪積り。花摘む人の跡だにもなし。「げに雪中に山路なし。さて車輪はいかに車僧（とワキを見込み）。われ程貴き者あらじと。慢心の心路跡なからんや。然らば無着法欲心に。引くか移るか車僧。「魔道にも。心を寄せよ車僧

といひながら舞臺に入り、

地「善惡二つは兩輪の如し

シテ「佛法あれは世法あり

地「煩惱あれば。菩提あり

【三】　第二段

後ジテ大天狗、今度は眞の天狗姿で現れ、

天狗「古歌に、「愛宕山の樒が原には雪が積つて、花摘む人の影もない」といつたやうに、雪の中には道一筋もないのだ。どうだ車僧、この雪では車が動くまい。おれの、お僧の車は動かないだらうが、おれの、おれほど偉い者はないと思ふ我慢心の路は、雪などで消えるものではないのだ。だから、佛法心など離れて天狗道に心を移さないか。車僧、魔道に心を寄せたらどうだ。

元來善惡の二つは車の兩輪のやうに相並んだものなのだ。出世間の佛法があれば、一方に世間法があり、煩惱があれば他面に菩提心があり、佛があれば衆生もあり、

【三】○愛宕山樒が原に雪積り―夫木抄曾根好忠の歌を引いた。この下句「花摘む人の跡だにぞなき」

○車輪はいかに―車輪を雪に埋められて動かすことが出來ないだらう。

○慢心の心路―山路は雪の爲に消えるが、天狗道の我慢心は雪などの爲に消えはしない。

○無着法欲心―出典不明。佛法を究めたいといふ欲心に捉はれないこと、即ち佛法を無視する天狗道の謂か刊行會本辭解には「俗事に執着せずして佛法を求めんと欲する心のみにては車は動くまじ」と解す。

○魔道―佛法を妨害する道天狗道はその一である。

○世法―世間法、佛法の出世間法に對す。

○太郎坊の行者―天狗は山伏に緣のある者とせられてゐるので、修驗道の行者のやうにいつたのである。
○行德―修行力の效驗。

【四】
○それには寄らじ―天狗には近寄るまい、相手にしまい。
○不增不減―他人に媚びられてもわが法心は增加せず他人に妨げられてもわが法心は減少しない。
○絲遊―春ののどかな日、ちら〳〵と立ち上る氣、陽炎。遊ぶといふ文字によつて、絲遊を出し、絲を引くを心を牽くにいひかけた。

シテ「佛あれば衆生もあり
地「車僧あれば
シテ「太郎坊の行者もあり
地「祈らば祈るべし。行せば行德も。劣るまじとよ劣るまじとよ。いざ車僧。行較べせん

【四】

とワキの方へ行き安座す。

ワキ「いかに汝妨ぐるとも。それには寄らじ爭はじ。われはもとより不增不減。「あら面白の時節やな
シテ「げに面白き時節ならば。雪中に車を廻らし。嵯峨野の原にていざ遊ばん

シテ立ちて打杖をぬきながら仕手柱際へ行く。

ワキ「遊ばば遊べ絲遊の。わが心をば引かれめや
シテ「などかは引かであるべきと。笞をふり上げ車を打つ

とワキの前へ行き、打杖にて車の前を打つ。

佛法執心の車僧もあれば、魔道行者の太郎坊もあるのだ。そちが祈ればこちらも祈らう。行力の效驗も劣りはしないぞ。さあ車僧、一つ行力較べをしよう」

【四】
車僧「いかに汝が修行の妨げをしても、それには心を寄せもしないし、爭ひもしないぞ。わしは元來他人の媚びや妨げで、法心を增しも減じもしないのだ。あゝ面白い時節だ」

と景色を眺め入る態。

天狗「さうだ、面白い時節ならば、雪中に車を乘り廻して、嵯峨野の原で一所に遊ばう」
車僧「遊びたければ勝手に遊ぶがよい。わしの心はお前などにひかれはしないのだ」
天狗「なに引かずに措くものか」

といつて、笞を振りあげて車を打つ。

○牛を打たば―火宅の三車の一、牛車に因んでいつたのである。

○人牛の道―不詳。差別法の意でなからうか。刊行會本辭解に「人牛の道とは蓋し支那の廓庵志遠禪師の十牛圖より取り來れるならんか。十牛圖は吾人本來の面目を牛に喩へ、之を尋ぬる牧童の牛を尋ぬるに寄せて順序と悟得後の心得とを說きたるものにて、その中に『人牛俱に忘る』といふ圖ありて、牛に乘りて歸りたる牧童の自他を忘れたるを畫きたり。玆に見えたる牛といふも所謂本來の面目にして自他淸淨の本心を指すものなるべし」と記してゐる。

○露地の白牛―法華經の火宅三車の譬喩に、門外の露地に大白牛車ありとあるに據つた。

○拂子―はぐまの毛を束ねて柄をつけた佛具。僧侶が常に手に持つもの。

○足弱車―車輪が弱くて進みの遲い車。

ワキ「おう車を打たば行くべきか。牛を打たば行くべしや

シテ「げにげに車は心なし。さて牛を打たんもあらばこそ（と仕手柱際に帰る）

ワキ「愚かや汝人牛の道。見えたる牛をばなど打たぬ

シテ「見えたる牛とはさて如何にそも人牛は

ワキ「打つとも行かじ

シテ「さてお僧の打たば行くべきか

ワキ「なかなかの車。いでいでさらば露地の白牛を打つて見せんと、拂子を上げて虚空を打てば（とワキ扇をあぐ）

地「不思議やなこの車の。不思議やなこの車の。ゆるぎ廻りて今までは。足弱車と見えつるが。牛もなく人も引かぬにやすやすと遣りかけて

車僧「おう車を打つたところで動くものか。それよりは、牛を打てば動くだらう」

天狗「さうだつた、車には心がないから仕方がない。しかし牛を打たうにも、牛が居ないおやないか」

車僧「愚かな奴だ、人牛差別の道を知らないのか。何故見える牛を打たないのだ」

天狗「見える牛とは何のことだ。一體人牛とは……」

車僧「どうせ、お前が打つたところで動きはしないのだ」

天狗「では、お僧が打てば動くといふのか」

車僧「勿論のことだ。それでは人を悟りに導く白牛を打つて動かして見せよう」

といつて、拂子をあげて空を打つと、不思議にも、この車は廻り出して、今までは動きさうにも見えなかつたものが、牛もなく人も引かないのに、やすやすと飛び翔ける車となつた。

【五】
○浮世の嵯峨―浮世のさが（習はし）を地名の嵯峨にいひかけた。
○雪の古道―雪の降るを古道にいひかけた。後撰集在原行平の歌「嵯峨の山御幸絶えにし芹川や千代の古道跡はありとも」を引いた。
○車の轍は足引の―車輪は足を引きずつて、早く進まぬといふを足引にいひかけ「足引の」は山の枕詞であるのを、こゝでは山の意に用ゐた。
○雪山の道―雪山は釋迦の修行した山。雪の緣で引いた。
○法の力―車に乘るを法にいひかけた。
○眩惑すれども―天狗は魔道を以て車僧の目を眩まし惑はすが。
○魔障を和らげ―惡魔の佛法を妨げる心を和らげて。

飛ぶ。車とぞなりたりける

【五】

地ロンギ『小車の。山の陰野の道すがら。法の道のべ遊行して。貴賤の利益なすとかや

シテこれより謠に合せて仕科。

シテ『所から。ここは浮世の嵯峨なれや。雪の古道跡深き。車の轍は足引の。大雪にはよも行かじ

地『げに雪山の道なりと。法の車路平らかに

シテ『行くか行かぬかこの原の

地『草の小車雨添へて

シテ『打てども行かず（ワキの前へ行きて車を打ち）

地『止むれば進む（と左手にて抑へる形をし）

シテ『この車の

地『法の力とて。嵯峨小倉。大井嵐の。山河を飛び翔つて。眩惑すれども騷がばこそ。誠に奇特の。車僧かな（と後へ下り）。あら貴や恐ろしやと。魔障を

【五】
車僧「かうして、車が山路を廻る道すがら、佛法を流布して、貴賤群集に利益を與へるのだ」
天狗「ここは土地の名も浮世の嵯峨といひ、雪の深く降り積つた所で、世間普通ならば、よもや車の動く筈はないと思つてゐたのに……」
車僧「法力の強い車は、どんな雪の中でもやすやすと走つて行くのだ」
天狗「ところが、おれが動かさうとすると、車の輪がきかなくて、打てども進まず、止めれば進む。實に不思議な法力の車だ。よしそれならば、おれは車僧を惑はしてやらう。……と思つて、嵯峨野や小倉山大井河や嵐山と、あちらこちらを飛び翔つて、惑はしてやるが、車僧は落着き拂つて平氣な樣だ。實にめづらしい貴い恐ろしいお僧だ」
と、大天狗も遂に佛法障碍の心を和ら

和らげ大天狗は。合掌してこそ、失せにけれ

と仕手柱際にて打杖を捨てワキに合掌し、留拍子を踏む。

げ、車僧に合掌して立ち去つた。

〔考異〕

諸流（五流）

殆ど異同がない。

古謡本（元祿八年本）

【一】ワキ「暫くこの所に……眺めうずるにて（元はやと思ひ）候　【二】地上歌「見聞く人……夕山の黒（元ナシ）雲に乗りてあがりけり黒（元ナシ）雲に……　【四】シテ「げに面白き……いざ遊ばん（元ふ）……ワキ「おう車を……牛を（元は）打たば行くべしや……ワキ「愚かや汝人（元仁）牛の道……シテ「見えたる……そも人（元仁）牛は……

呉服

観（寶春剛喜）

解説

【能柄】　脇能　複式夢幻能

【人物】　**ワキ**　當今臣下、**ワキツレ**　同從者（二人）、**前シテ**　女（呉織の靈）、**前ツレ**　女（漢織の靈）、**狂言**　所の者、**後シテ**　呉織

【所】　攝津國　呉服の里

【時】　（九月）

【異稱】　「呉羽」「呉機」とも書いた。

【作者】　能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作とす。言繼卿記に弘治二年二月十二日「呉機」演能のこと、言經卿記に文龜四年三月卅日本曲註釋のことが見えてゐる。

【梗概】　時の帝に仕へ奉る臣下が西の宮に參詣の途次、呉服の里の松蔭で、二人の女の一人は機を織り、一人は絲を引いてゐるのを見て、怪しんでその素性を尋ねると、自分達は應神天皇の御代に御衣を織り初めた呉織・漢織で、今又めでたい御代なので現れて來たのである

といひ、昔呉國から織女の渡來した當時の樣を物語り、この夜更けに機を織つてわが大君に捧げ奉らうといつて立ち去る。やがて夜も明方に近い頃、呉織が二度現れ出て、君が代を壽いで舞を舞ひ、機を織つて奉る。

【出典】 呉國から織女の渡來したことは、日本書紀應神紀に、

三十七年春二月戊午朔、遣二阿知使主・都加使主於呉一、令レ求二縫工女一。爰阿知使主等、渡二高麗國一欲レ達二于呉一、則至二高麗一、更不レ知二道路一、乞レ知レ道者於高麗一、高麗王乃副二久禮波・久禮志二人一爲二導者一、由レ是得レ通レ呉、呉王於レ是與二工女兄媛・弟媛・呉織・穴織四婦女一。

又

四十一年春二月甲午朔戊申、天皇崩二于明宮一、時年一百一十歳。是月、阿知使主等自レ呉至二筑紫一、時胸形大神乞二工女等一、故以二兄媛一奉二於胸形大神一、是則今在二筑紫國一、御使君之祖也、既而率二三婦女一以至二津國一、及二于武庫一。

同じく雄略紀に

十四年春正月丙寅朔、戊寅、身狹村主青等共二呉國使一、將二呉所レ獻手末才伎漢織呉織及衣縫兄媛弟媛等一、泊二於住吉津一、是月、爲二呉客道一通二磯齒津路一、名二呉坂一、三月、命二臣連一迎二呉使一、卽安二置呉人於檜隈野一、因名二呉原一、以二衣縫兄媛一奉二大三輪神一、以二弟媛一爲二漢衣縫部一也、漢織、呉織、衣縫、是飛鳥衣縫部、伊勢衣縫之先也。

とある。本曲はこの史實に據つて脚色したものである。

【概評】 本曲は脇能とせられてゐるが、そのシテは普通の女性、外國から歸化した織女で、神靈ではない。――尤もこのシテ及びツレは呉服神社に祀られてゐるのであるが、本曲では神靈として現れてゐない――從つて脇能に通例な典雅莊重の氣分よりも、優雅纖麗の情趣を釀してゐるのであるが、それにも拘らず、本曲を脇能として取扱つてゐるのは、他の鬘物は大抵戀に死んで墮獄の苦を受けてゐるのに反し、これは生前御代の爲に盡し、今又聖代を祝して御調物を捧げてゐるからである。そしてその脚色法も亦脇能と三番目物との中間にあり、行文も亦優艶のうちに莊重を含めてゐて、本曲の特色はこの莊重にしてしかも優麗な所にあるのである。

【一】
○道の道たる時―政治がすべて道德に適つてゐる時代これを道路が開けて國々の交通の盛んなことにとりなしたのである。
○住吉―住吉神社。攝津國東成郡住吉（今大阪市住吉區に入る）にあり、底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命及び神功皇后を祀る。
○西の宮―攝津國武庫郡西宮町にある、廣田明神。蛭子を祀る。
○住の江―住吉の古名。
○淺香潟―住吉浦の古名。「高砂」の謠に「淺香潟玉藻刈るなる岸陰の」とあるを引いたのであらうか。
○道もすぐなる―政道が正しいばかりでなく、人の歩く道路も平坦であるとの意
○難波潟―今の大阪の海邊
○行方の浦―淺香潟から難波潟へ行く途中の浦々。
○呉服の里―攝津國豐能郡池田町の舊名。こゝに呉服神社があり、呉國から渡來した呉織穴織を祀る。

【一】
（眞次第の囃子にて、ワキ當今臣下、大臣烏帽子・上頭掛・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の装束、ワキヅレ從者二人、ワキと同樣の装束にて舞臺に入り向合ひ、

ワキ・ワキヅレ〽次第「道の道たる時とてや。道の道たる時とてや。國々豐かなるらん

（地取にワキは正面に向ひ、

ワキ「抑もこれは當今に仕へ奉る臣下なり。われこの間は攝州住吉に參詣申して候。又これより浦傳ひし。西の宮に參らばやと存じ候

（ワキ・ワキヅレ向合ひ、

ワキ・ワキヅレ〽道行「住の江や。のどけき波の淺香潟。のどけき波の淺香潟。玉藻刈るなる海士人の道もすぐなる難波潟。行方の浦も名を得たる。呉服の里に着きにけり呉服の里に着きにけり

（ワキ「行方の浦も名を得たる」と正面に向き、正面先へ出で、またもとへ歸りて呉服の里に着きたる心。道行濟みてワキは正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。これははや呉服の里に着きて候。又あの松

【一】　前段

（舞臺は初め住吉で、ワキ當今の臣下、ワキヅレ從者を随へて登場。

朝臣「御政道が正しく、交通が開けてゐるので、國土が誠に豐かなことである」

（次第を謡つて御代の太平を祝ひ、

朝臣「自分は今上陛下にお仕へしてゐる臣下であるが、この間は攝津國住吉明神に參詣致し、又これから濱邊傳ひに西の宮へ參詣しようと思ふのです」

（見物人に自己紹介をし、

朝臣「住吉ののどかな淺香潟に海人の藻を刈る樣を眺めながら、平らかな道を通つて、難波潟へ行く途中、浦々の名所を見物して、この有名な呉服の里に着いた」

（旅程を述べてゐるうちに呉服の里に着いた體）

（舞臺は攝津國呉服の里となる。

原に當つてはた物の音の聞え候。立ち越え尋ねばやと存じ候

ワキヅレ「尤も然るべう候

といひて、脇座へ行き順次竝びて下に居る。

【二】

後見、機の作物を正面先に出す。

眞一聲の囃子にて、シテ里女、面增・鬘・鬘帶・襟白赤・着附摺箔・唐織着流・扇の裝束、ツレ里女、面連面・鬘・鬘帶・着附摺箔・唐織着流・扇の裝束にて白水衣を左に掛け、橋懸に出で、ツレは一の松、シテは三の松に立ちて向合ひ、

シテ ツレ 一聲「くれはとり。綾の衣の浦里に。年經て住むや。海士少女

二人とも正面に向き、

ツレ 二句『立ち寄る波も白絲の。シテ ツレ（向合ひ）『機織り添ふる。音しげし

と謠ひて舞臺に入り、ツレは眞中に、シテは常座に立ち、

シテ サシ『これは津の國呉服の里に。住みて久しき二人の者。シテ ツレ（向合ひ）『われこの國にありながら。身は唐土の名にし負ふ。女工の昔を思ひ出づる。月の入るさや西の海。波路遙かに來し方の身は

【二】

○くれはとり―呉織漢織と竝び稱するので「くれはとり」を「あや」の枕詞とし、綾の衣といひ、衣の縁で浦（裏）とつゞけた。

○立ち寄る波も白絲の―波も白しを白絲にいひかけた。寄るは絲を縒るの緣語。

○唐土の名にし負ふ―呉織といつて、呉の國名を呼ばれるとの意。

○月の入るさ―月の入る西の方。呉の國を指す。

○來し方―唐土より渡つて來た意と、年月の過ぎ去つた意とを兼ねていふ。

【二】

ワキ臣下がこゝに休んでゐると、シテ呉織の靈、ツレ漢織の靈、ともに里女の姿をして登場。

女二人「綾の衣を織る呉服の里に、永年住んでゐる田舍女がこゝへ出て來ましたが、白絲のやうに岸邊に打寄せる波の音が機を織る音と入り交つて、隨分やかましいことです」

といひ、一人は機を織り、一人は絲を取りながら

女二人「私どもは攝津國呉服の里に、永年住んでゐる二人の者ですが、この日本の國に居りながら、その身は支那の國名の呉の字をそのまゝにつけられて、呉織と呼ばれてゐることです。思ひ出せば、昔女工として、月の入る西の方から遙々の海を越えて來た支那人の身ではありま

○ここに吳服の――こゝに來れば、といひかけた。
○身に知られたる――わが身に關係のある。
○送り迎へし――唐土より送り、日本に迎へて。
○敷島の道かけて――營みを今しきりにすといひかけた。敷島の道は和歌のことで、唐衣ばかりでなく、美しい言葉の花まで織り出すとの意。
○あらはし衣――あらはすといふ程の意。衣の名ではない。（源氏物語藤袴の卷より出づ。）
○心を碎く――心を盡して染める。

【三】

○やごとなき――貴い。

○潮も曇る――潮曇りといつて、海上の烟りわたること。
○聲にたぐへて――波の音にまぎれて。

唐人の年を經て。ここに吳服の。里までも。身に知られたる。名所かな

シテツレ下歌「これもかしこき御代の爲送り迎へし機物の。上歌「大和にも。織る唐衣の營みを。織る唐衣の營みを。今敷島の道かけて。言の葉草の花までもあらはし衣の色添へて。心を碎く紫の。袖も妙なる、かざしかな袖も妙なるかざしかな

「袖も妙なる」と謡ひながら、シテ・ツレ入替り、シテは眞中に、ツレは脇正面に立つ。ワキ立ちてシテに向ひ、

【三】

ワキ「さてもわれこの松原に來て見れば。やごとなき女性二人あり。一人は機を織り。今一人は絲を取り引き。互に常の里人とは見え給はず。そも方々は如何なる人ぞ

シテツレ「恥かしや里離れなる松蔭の。潮も曇る夕月の。影に紛れて浦波の。聲にたぐへて機物の。音

すが、それ以來永い年月の間、こゝに來て住んでゐるので、里の名までも、わが身に因んで吳服と名づけられ、私たちの爲に一つの名所となつてゐることです。これといふのも、ありがたい御聖代を祝つて、支那から日本へ送り迎へられて、機物を織る事となつたからでありまして、この日本でも唐衣を織つてゐるのでありますが、それが今は和歌にまで美しく詠み出されるやうになつたのですから、愈〻心を籠めて、紫の色も立派に染め出さうと、手を盡してゐることです」

と謡ふ。

【三】

臣下はこれを見て、

臣下「自分がこの松原へ來て見てゐると、身分のある女性が二人ゐて、一人は機を織り、他の一人は絲を取つてゐるが、二人とも普通の里人とは思はれない。」（と獨言し二女性に向ひて）「一體あなた方はどういふ方です」

女二人「おゝ恥かしい、こゝは里を離れた松蔭で、汐曇りで濱邊は薄暗く、月影もかすかなので、その蔭に姿も紛れ、波の音

○應神天皇―仲哀天皇の御子。紀元八百六十一年御誕生、九百七十年崩御。
○めでたき御衣―立派な御召物。
○呉織漢織―解説に掲ぐ。

聞えじと思ひしに。知られけるかや恥かしや
ワキ「何をか包み給ふらん。その身は常の里人ならで。」この松蔭に隱れゐて。機織り給ふは不審なり。『いかさま名のり給ふべし
シテ「これは應神天皇の御宇に。めでたき御衣を織り初めし。呉織漢織と申しし二人の者。今又めでたき御代なれば。現にあらはれ來りたり
ワキ「不思議の事を聞くものかな。それは昔の君が代に。唐國よりも渡されし。」綾織二人の人なるが。今現在に現れ給ふは。『何といひたる事やらん
シテ「早くも心得給ふものかな。まづこの里を呉服の里と。名づけ初めしも何故ぞ。われこの所に在りし故なり
ツレ「又漢織とは機物の。絲を取り引く工ゆゑ。綾

も高いから、その音に紛れて、機を織る音も聞えまいと思つてゐましたのに、知られてしまつたのですか、おゝ恥かしい」
朝臣「いや何もお隱しになることはありますまい。普通の里人とは思はれない方が、この松蔭に隱れてゐて、機をお織りになるのは、不思議だ。是非お名前をお明かし下さい」
呉織「私どもは應神天皇の御代に、立派な御召物を織り初めた呉織・漢織と申す二人の者ですが、現代もまたありがたい御代なので、現實に現れて來たのです」
朝臣「これは不思議な事を聞くものだ。呉織・漢織といへば、昔の御代に支那から送られて來た綾を織る二人の人であるのに、それが今現在お見えになるとは、これは何といふ事であらう」
呉織「すぐお分りになりましたのですね。第一、この里を呉服の里と申すやうになつたのも、私がこゝに居たからでございます」
漢織「又漢織と申すのは、織物の絲を引く工女で、綾の紋をお作りますので、それ

○絲引く木をばくれはといへば―絲を引く木を「くれは」といつた例は見當らない。恐らく作者の附會した說であらう。

○呉織あやに戀しくありしかば―後撰集淸原諸實の歌。下句は「二村山も越えずなりにき」。原歌の「呉織」は「あや」の枕詞に過ぎないのであるが、こゝには二人の名とし、この二人を戀して詠んだ歌の如くに附會したのである。

○怪しめ―「あや」といひかけた。

○所から唐人と―「から」の音を重ねた。この里が呉服の里であるといふことから推して、唐人であると察する意。

○よき君―聖天子。

の紋をもなす故に漢織とは申すなり

シテ「呉織とは機物の。絲引く木をばくれはといへば。くれはとる手によそへつつ。『呉織とは申すなり

ツレ『されば二人の名によせて

シテ『呉織

ツレ『綾とは申し傳へたり

シテツレ『然れば我等は唐人なれば。やまと詞は知らねども

シテ『呉織あやに。戀しくありしかば。二村山と詠みし歌も。二人を思ふ心なり

地上歌『くれはとり。怪しめ給ふ旅人の。怪しめ給ふ旅人の。御目の程はさすがげに。名にし負ふ都人の。所から唐人と我等を御覽ぜらるるは。げにかしこしやよき君に。仕ふる人か、ありが

で『あやはとり』と申すのです」

呉織「呉織と申すのは、織物の絲を引く木を『くれは』といひますので、くれは取る手といふのに因んで『くれはとり』と申すのです」

漢織「それで二人の名に因んで……」

呉織「呉織綾と結びつけて申し傳へるやうになつたのです。勿論私どもは支那人のことですから、日本の詞はよく存じませんけれど、――

『くれはとりあやに戀しくありしかば、
二村山も越えずなりにき』

と詠んだ歌も、私ども二人を思ふ心を詠んだのでございます。

それにしても、私どもの樣子に不審をお起しになる旅人の御鑑識は、流石名高い都の方だと感ぜられます。こゝが呉服の里だから、私どもを支那人であらうとお見當てになるのは、いかにも偉い聖天子にお仕へになる方だけあると、ありがたく存ぜられます」

たや仕ふる人かありがたや

ツレ、「怪しめ給ふ旅人の」に、地謡座前に行きて坐し、同時にワキも下に居る。

【四】

地クリ『それ綾といつぱ。唐土呉郡の地より織りそめて。女工の長き營みなり

シテサシ『然るに神功皇后。三韓を從へ給ひしより

地『和國異朝の道廣く。人の國まで靡く世の。わが日の本はのどかなる。御代の光は普くて國富み民豐かなり

シテ『東南雲。收まりて

地『西北に風靜かなり

（居クセ）

地クセ『應神天皇の御宇かとよ。呉國の勅使この國に。始めて來り給ひしに。綾女絲女の女婦を添へ。萬里の。蒼波を凌ぎ來て西日影殘りなく。呉

【四】

呉服　一體綾といふものは、支那の呉郡で織り出したもので、長い間あの地の女工の仕事となつてゐたのです。ところが、神功皇后が三韓を御征服遊ばしてよりこの方、日本と外國との交通が開け、外國までが聖徳をお慕ひするやうになり、わが日本はのどかで、御代の光は遍く行き渡り、國土は富み人民は豐かなのでございます。そして、諺にも『東南の雲は收まり、西北の風靜かなり』と申す、太平の御代でございます。——

あの當時のことを申せば、應神天皇の御代であつたと思ひますが、呉國の勅使がこの日本に始めてお出でになつた節、綾を織る女、絲をとる女を連れて、萬里の海を渡つてお出でになり、その女は夕日

【四】○呉郡の地より—源平盛衰記に「荆軸之玉、呉郡之綾、蜀江之錦」とあるに據つたのであらう。

○長き營み—長き絲といひかけた。

○神功皇后—息長足姫尊。仲哀天皇の皇后、應神天皇の御母。仲哀天皇崩御の後親しく三韓を征討遊はされた。

○三韓—今の朝鮮。高麗、百濟、新羅をいふ。

○和國異朝の道廣く—日本と外國との交通が開けたこと。

○人の國—外國。

○東南雲收まりて—太平の徵。その出典は分らない。

○呉國の勅使—阿知使主等を呉國に遣されたことを、呉國からの勅使のやうに作り做したのである。

○綾女絲女—綾を織る工女と絲を引く工女。

○西日影殘りなく—夕日の全く暮れるを呉服にいひかけた。

○錦を折々の―錦を織るを折々にいひかけた。
○奏覽―奏上して天覽に供へ奉ること。
○それより名づけつつ―それより次第に名聲を博して。
○袞龍の御衣―天子の御服龍の形をぬひとりした衣で支那上古の禮制に天子の服と定められたもの。
○山鳩色―天子の御袍の色黃櫨染とも麴塵ともいひ下は黃上は青色で、山鳩の毛色に似てゐるので、からいふ。
○氣色だつ―引き立つ。
○羽ぶさ―翼。
○たたむ綾となす―鳥の翼をたゝむ形を綾に織りなす
○御調―年々朝廷に布絹などを獻上すること。
○呉服の文字を和らげて―漢音を日本語に和げて、呉の字を「くれはとり」服の字を「あやはとり」と訓んだとの意。作者の附會である。
○返す返すも―衣をかへすにいひかけた。源氏物語行幸の卷に「唐衣又から衣から衣かへす〴〵もから衣なる」
○古きためしを―袖を振る、

服の里に休らひ連日に立つる機物の。錦を折々の綾の御衣を奉る。勅使奏覽ありしかば。叡感殊に甚し。それより名づけつつ。袞龍の御衣の紋。營みも名高き山鳩色をうつしつつ。氣色だつなり雲鳥の。羽ぶさをたたむ綾となすいともかしこかりけり

シテ「然れば萬代に。絶えせぬ御調なるべしと

地「御定めありしより呉服の文字を和らげて。呉織漢織と。名づけさせ給へば年を迎へて色をなす。綾の錦の唐衣。返す返すも君が袖。古きためしを引く絲のかかる御代ぞめでたき

【五】

地ロンギ『これにつけてもこの君の。これにつけてもこの君の。めでたきためし有明の。夜すがら機を織り給へ

シテツレ『いざいざさらば機物の。錦を織りてわが君

の全く暮れた頃、この呉服の里に着き、こゝに滯在して、毎日々々錦の機を織り、度々綾の御召物をお作り申しあげました。それを呉國の勅使が帝に奏上して御覽に供へ奉ると、帝は殊の外御感遊ばされました。それ以來有名になつて、天子の御召物をお織り申しあげることとなり、あの名高い御服地の山鳩色を引き立てて、雲や鳥の翼をたゝんだ模樣をお作りするやうになつたのは、ほんとに勿體ないことでございます。

かうして、朝廷では萬代に變りのないよい御調物であると仰せ出され、それによつて、呉服の文字を日本風に和らげて、くれはとり、あやはとりとお名づけ遊ばしたので、それより以來、年々歳々色も鮮かな綾の錦の衣を作つて、わが君の御召物と致すのでありまして、このやうな古例が傳へられて、今の大御代となつたのは、ほんとにめでたいことでございます」

【五】地 今の話を伺ふにつけても、わが大君のめでたい大御代が仰がれることだ。どうぞ夜通し機を織つて下さい。

女二人「さあそれでは、機を織り錦を作つ

を古きに、例を引くを引く絲にいひかけた。
○かかる御代―絲の掛かるといひかけた。

【五】
○有明の―ためしありといひかけた。
○錦の色は小車の―錦の模樣は小車のといふ意、所謂小車の錦で、小車の形を織り出した有職模樣の錦をいふ。その車の緣で次の丑を呼び出した。
○丑三つ―丑の刻は今の午前二時より四時までで、その一刻を四つに割つて丑一つ丑二つ丑三つと數へる。即ち丑一つは午前二時で、丑三つは午前三時に當る。眞夜中の意。
○鷄は―くれはとりあやはとりと重ねて文の綾とした

【問】
◎いかに誰かある―以下、ワキ・ワキヅレ詞、高安流に據る。

の御調に供へ申さん
地「げにや御調の數々に。錦の色は
シテツレ「小車の
地「丑三つの時過ぎ曉の空を待ち給へ。姿をかへて來らん。さらばといひて呉織（とシテ立ち）。漢織は歸れども。鷄はまだ鳴かずや夜長なりと待ち給へ。夜長くとても待ち給へ

と仕手柱際にて開き靜かに中入。ツレも續いて幕に入る。
後見、機の作物を引く。

て、わが大君の御調物にお供へしませう」
朝臣「ほんとに御調物には數々種類があるが、その中でも錦は色も……」
女二人「御模樣も小車の形に致します。おおもう眞夜中時も過ぎました。この夜の明方をお待ち下さい、姿を變へて參りませう。では、私とも二人はお暇を申しますが、まだ鷄も鳴かず、夜も長うはございませうが、暫くお待ち下さい」
といつて退場。

【問】
ワキ「いかに誰かある
ワキヅレ（ワキの前に出で）「御前に候
ワキ「所の者を召して來り候へ
ワキヅレ「畏つて候。（名乘座に出で）所の人の渡り候か
狂言所の者、着附段熨斗目・長上下・腰帶・扇・小刀の裝束にて一の松に立ち、
狂言「所の者と御尋ねある。罷り出で承らばやと存ずる。（ワキヅレに向ひ）所の者と御尋ねは。いかやうなる御用にて候ぞ
ワキヅレ「ちと物を御不審ありたき由仰せ候。近う來りて給はり候へ
狂言「畏つて候

○應神天皇の御宇に―解說　日本書紀の文參照。

二人舞臺に入り、眞中に坐して、

ワキヅレ「所の者を召して參りて候（といひてもとの座に着く）

狂言「所の者御前に候

ワキ「所の人にて候はば。吳織漢織の謂れ語つて聞かされ候へ

狂言「是は思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこの邊に住居仕り候へども。さやうの事委しくは存ぜず候が。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「やがて語られ候へ

狂言「まづこの里を吳服の里と申す子細は。應神天皇の御宇に異國より綾織姬を。四人わが朝へ渡し給ふ。初めは和泉の國深井の里に舟を着けられ。ここにて機を立てられ。御調の御衣を織り君に供へ給ふが。この所をめでたき在所と聞き。こゝに移り御衣を織りて帝に捧げ給ふに。彌々國土安全にして何事も思し召す儘に御座候間。それよりここに移り給ふ。されば織姬の名を。一人の名は吳服どり一人は綾羽取と申し候。その吳服と申すは。機の中に吳服と申す木の御座候を。專ら取り扱ひ給ふにより。吳服とる手によそへくれはとりと申し候。又綾羽取と申すは。絲を取り引く綾の紋を。思ひの儘に召され候により。綾羽取と名づけられたると申す。又一說には吳服の文字を和らげ名を御付けありたるとも申し候。まづ我等の承りたるはかくの如くにて候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に語られ候ものかな。方々以前に姿は唐人なる女性二人。機織る氣色見え候程に不審をなして候へば。唯今方々の物語の如く承り。その後御貢物を織りて參らせん。夜なかなりとも待つべしといひもあへず。松蔭にて姿を見失ひて候よ

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。扨は吳織漢織二人の織姬現れ給ひ。目前に機を立てて御

衣を織り給ふ風情なり。御目にかけ申されたると存じ候間。暫く御逗留ありて。重ねて奇特を御覽あれかしと存じ候

ワキ「方々の申さるる如く暫くこの所に候ひて。重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「御逗留にて候はば重ねて御用仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【六】

ワキ　ワキヅレ　上歌（待謡）二「嬉しきかなやいざさらば。嬉しきかなやいざさらば。この松蔭に旅居して。風も嘯く寅の時。神の告をも待ちて見ん神の告をも待ちて見ん

【七】

出端の囃子にて、後ジテ呉織、面増・黒垂・天冠・襟白赤・着附摺箔・唐織壺折・緋大口・腰帯・扇の装束にて舞臺に入り常座に立ちて、

後ジテ『君が代は天の羽衣稀にきて。撫づとも盡きぬ巖ならなん。千代に八千代を松の葉の。散り失せずして色は猶。眞拆の葛長き代の。ためしに引くや綾の紋。曇らざりける。時とかや

【六】

後段

朝臣「あゝ嬉しいことだ、それではこの松の木蔭に休んでゐて、夜の明ける午前四時頃、神のお告のあるのを待つて見ようう」

【七】

後ジテ呉織が天女の姿をして再登場。

呉織「――『君が代は天の羽衣稀にきて、撫づとも盡きぬ巖ならなん』」

（わが大君の御榮えは、天女が輕い羽衣を着て、ほんの時々天降つて來て、大きな巖を撫でて行つても、この巖が盡きないやうに、千代八千代に御榮え遊ばすやうに）と詠ひ、

呉織「どうか千代八千代に御榮え遊ばすやうに、御衰へになる時はなく、愈々御長久であらせられるやうにと、祈りをこめて、絲を引き綾の模樣をお織りするのですが、ほんとに御治政の明らかな大御代だ。わが大君のありがたい御治世だ。

【六】

○風も嘯く―寅の語を呼び起す序。孝經の序に「虎嘯而西風起」とあるに據つた。

○寅の時―午前四時。

【七】

○君が代は天の羽衣稀にきて撫づとも盡きぬ巖ならなん―拾遺集讀人知らずの歌。佛書に劫といふ長久の時間を說いて、四十里四方の巖を、百年毎に一度づつ天人が來て、柔い袖で撫でて行つて、その巖が遂に撫で盡される時があつても、となほ盡きない時をいふ、といつたのに據つて、この歌を詠んだものである。

○千代に八千代を―和漢朗詠集讀人知らずの歌―君が代は千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで」を引いて、八千代を待つを松にいひかけた。

○松の葉の散り失せずして―古今集序の「松の葉の散り失せずして、眞拆の葛長く傳はり、鳥の跡久しくとゞまらば」を引いた。「松の葉」は散り失せずの序、「眞拆の葛」は長くの序。

○ためしに引くや―めでたい例に引くを綾の絲を引くにいひかけた。

○曇らざりける—御服の綾の紋に雲の形を織ることを御代が治まつて曇らぬ意にいひかけた。
○夕波に—世ぞといふといひかけた。
○錦を織る機物の内に—和漢朗詠集公乘億の長安十五夜之賦「織レ錦機中已辨二相思之字一、擣レ衣砧上俄添二怨別之聲一」を引いた。上句は、竇滔といふ人が遠國に行つて、永い間歸らなかつたので、その妻の蘇若蘭が戀慕の情を詩に作り、錦の文に織りつけて夫に贈つた故事で、月の光で錦の文に織りつけた戀慕の文字がよく分るとの意。下句は蘇武が胡國に使して、永く歸らなかつたので、その妻が秋毎に衣を擣つて、夫が歸つたならば着せようと待つてゐた故事で、月の夜に砧を擣つと、一入悲しみの情が增すとの意。
○踏木—機を織る爲に、足で左右かはる〴〵に踏み動かす木。
○きりはたりちやう—機織る音。
○惡魔も恐るる聲—機の音に惡魔の恐れた故事未詳。
○織姬—機織る女。

次の謠に合せて舞ふ。

地「この君の。かしこき世ぞと夕波に。聲立て添ふる。機の音

シテ「錦を織る機物の內に。相思の字をあらはし。衣擣つ砧の上に。怨別の聲。松の風。又は磯打つ波の音

地「しきりにひまなき、機物の

シテ「取るや呉服の手繰の絲

地「わが取るはあやは

シテ「踏木の足音

地「きりはたりちやう

シテ「きりはたり。ちやうちやうと

地「惡魔も恐るる。聲なれや。げに織姬の。かざしの袖

〔中舞〕

引續き謠に合せて舞ふ。

といつて、波の音に聲を添へながら、機音高く錦を織る。

呉織「この月の光で、錦の文に織りつけた戀慕の文字がよく分り、この月の夜には、砧を擣つ音が一入悲しみの情を催させる」

といふ謠を謠ひながら機を織る。

呉綾「松風の音、磯邊に打ち寄せる波の音が、隙なく織る機の音に入り交つて聞えることです」

呉綾「手繰の絲をとつて、機を織れば、踏木の足音が、キリ・ハタリ・チヤウ〳〵とする。この音は惡魔も怖れて退くめでたい聲だ。……おゝ、さうだ、めでたく織姬の舞を舞ひませう」

〔中舞〕

と舞ふ。

【八】○たまたま逢へる—織女から七夕の故事を引き、「たまたま」を稀にの意と偶然にの意と通はせて用ゐた。○妙幢菩薩—最勝王經「妙幢夜夢見下妙金鼓出二大音聲一讃中佛功德幷懺悔法上」とあり、夢を支配するものと信じられてゐた。古今集雅抄にも「戀しき人を夢に見んと思へば、雙六盤を枕にして、衣を返し着て、夢の妙幢菩薩を念ずれば、必ず夢に見ゆ」○とりどりの—それぞれの意。あやはとりの「とり」を承けていふ。

【八】地「思ひ出でたり織女の。思ひ出でたり織女の。たまたま逢へる。旅人の。夢の精靈妙幢菩薩も。影向なりたる夜もすがら夜もすがら。寶の綾を織りたて織りたて。わが君に捧げ物。御代のためしの二人の織姫。呉服あやはのとりどりに。呉服あやはのとりどりの御調物供ふる御代こそ。めでたけれ

と仕手柱際にて留拍子を踏む。

【八】織姫といへば、七夕の織女の事を思ひ出すのであるが、織女がたまに牽牛に逢ふやうに、この旅人はたまたま織姫に出遭ひ、夢の功德を授ける妙幢菩薩の來現により、終夜貴い夢を見たのであつて、この夢の中に、二人の織姫が立派な綾を澤山織つて、わが大君への捧げ物としたのである。このやうに御代を壽ぐ呉織漢織がそれぞれ御調物を供へ奉つたのは、誠にめでたい大御代である。

〔考異〕

諸流（五流）

殆ど異同がない。

古謡本（光悦本）

【一】ワキ「抑もこれは當今（光後宇多院）に仕へ奉る……浦傳ひし（光に）西の宮に……　【二】シテサシ「これは津の國……女工の昔を思（光忍）ひ出づる……シテ下歌「これもかしこき御代（光きみ）の爲……　【三】ワキ「さても（光ナシ）われこの松原に……やごとなき（光いとなまめける）女性二人……シテ「恥かしや……夕月の影に紛れ（光たくへ）て浦波の聲にたぐへ（光紛れ）て……知られけるか（光そ）や恥かしや……シテ「これは應神天皇の……織り初め（光そなへ）し……二人の女（光者）……ワキ「不思議の事を聞くものかな（光ナシ）……地上歌「くれはとり……所（光心）から唐人と……　【四】シテサシ「然るに（光れは）神功皇后……

皇帝（くわうてい）　觀（寶　剛　喜）

解説

【能柄】　五番目　二段劇能

【人物】　**狂言**　唐官人、**子方**　楊貴妃、**ワキ**　唐玄宗、**ワキツレ**　同大臣（二人）、**前シテ**　鍾馗の靈（老翁姿）、**後ツレ**　病鬼、**後シテ**　鍾馗の靈

【所】　支那　宮殿

【時】　唐玄宗の代（三月）

【異稱】　（明王鏡）（玄宗）（御悩楊貴妃）ともいつた。

【作者】　能本作者註文、二百十番謡目錄ともに觀世小次郎の作とす。言継卿記に文祿四年四月二日本曲を註釋したことが見えてゐる。

【梗概】　唐玄宗が寵姫楊貴妃の大患を案じてゐると、鍾馗の靈が現れ出て、嘗て進士に落第した事を歎いて自殺した時、官を贈つて厚く葬られた報恩の爲に、楊貴妃の病を平らげて奇特を見せようから、明王鏡をその枕許に立て置かれたいといつて立ち去る。果して病鬼の姿が鏡に映つたので、玄宗は劍を以てこれを斬らうとすると、姿を

隱してしまつた。そこへ鍾馗の靈が現れ出て、病鬼をずたずたに斬り捨て、貴妃の病を平らげ、守りの神となることを約束して、書は夢の如くに消えてしまつた。

【出典】鍾馗の事はわが國に於ても屢〻繪に描かれ人口に膾炙した說話であるが、この事を記した先進文藝は全く見當らない。恐らくは〔土蜘〕〔鵺〕〔龍虎〕などと同じく繪によつて流布してゐた傳說を、謠曲作者が一篇の戲曲に作りなしたのではなからうか。尤もこの種の傳說は夙く支那に於て傳へられてゐたもののやうで、甲子夜話續篇卷卅七に引用してゐる淸人趙翼の陔餘叢考鍾馗の條に、

顧寧人謂、世所レ傳鍾馗乃終葵之訛、其說本二于楊用修郞仁寶二人一、仁寶七修類稿云、宣和畫譜釋道門載下六朝古碣得二于墟墓間一者上、上有二鍾馗二字一、則非二唐人一可レ知、北史、魏堯暄、本名鍾葵字辟邪、意葵字傳訛、而捉レ鬼之說起二于此一也、用修丹鉛雜錄云、唐人戲作二鍾馗傳一虛二構其事一、如二毛穎陶泓之類一也、葢因二堯鍾葵字辟邪一、遂附會、畫二鍾葵于門一、以爲二辟邪之具一、……今按、天中記引二唐逸史一、明皇因二店疾一晝臥、夢一小鬼盜二太眞香囊及上玉笛一、上叱問レ之、奏曰、臣乃虛耗也、能耗二人家喜事一成レ憂、上怒欲レ呼二武士一、俄見二一大鬼一、破帽藍袍、角帶朝靴、捉二小鬼一刳二其目一、劈而啖レ之、上問、爾何人、曰、臣終南進士鍾馗也、武德中應レ擧不レ第、觸レ堦而死、得下賜二綠袍一以葬上、感レ恩發レ誓、爲レ帝除二虛耗妖孽之事一、言訖夢覺、而疾遂瘳、乃詔二吳道子一畫レ之、道子沈思若レ有レ所レ覩、成レ圖以進、上視レ之曰、是卿與レ朕同レ夢也、唐逸史不レ可レ見、天中記所レ載斯其故事矣、亦見二沈括筆談一、然此事不レ辨、可レ知二其妄一也、

これが鍾馗傳說の本をなしてゐるのである。

【概評】類曲に〔鍾馗〕があり、それも說話の原據に近い感じ、能柄の荒涼凄愴たる趣など、佳作と思はれるのであるが、本曲も亦、寄事物・鬼畜物として適はしい脚色で、登場人物が多いに拘らずその出入も自然で、劇能として手際のよい纏め方であると思ふ。

【序】

【序】後見、引廻をかけたる屋臺を地謠座前に出し、脇正面に一疊臺を出す。

狂言官人、官人頭巾・着附厚板・側次・括袴・腰帶・扇の裝束にて名乘座に出で、

狂言（口開）「抑も是は唐土（もろこし）玄宗皇帝に仕へ申す官人にて候。この君賢王にてましますにより。吹く風枝を鳴らさず民戶ざしをせず。誠にめでたき御代にて候。然るにこの君三千人の后の御座候中にも。

楊貴妃と申して御寵愛の后の御座候が。この程は御惱にてましますにより。今日この殿へ行幸ありて。楊貴妃の様體を叡覽あるべきとの御事なり。皆々この殿へ參内申され候へ。その分心得候へ〳〵

といひて幕に入る。

【二】

子方楊貴妃、鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・唐織壺折・緋大口・腰帶・扇の裝束にて屋臺に坐し、ワキ着座すると、後見引廻を下す。眞來序の囃子にて、ワキ玄宗皇帝、唐冠・金入鉢卷・着附厚板・袷狩衣・白大口・劍・唐團扇の裝束、ワキヅレ大臣二人、大臣烏帽子・着附厚板・狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて出で、ワキは脇正面の一疊臺に上りて坐し、

ワキサシ『春は春遊に入つて夜は夜を專らとし、後宮の佳麗三千人。三千の寵愛一身にあり。かく類ひなき貴妃の紅色。芙蓉の紅。色かへて。未央の柳の力もなし

地下歌『ただ弱々と伏柴の露の命もいかならん。

上歌『心づくしの春の夜の。心づくしの春の夜の。木の間の月も朧にて。雲居に歸る雁がねもわが如くにや鳴き渡る。霞のうちの樺櫻ひとへに惜しき、姿かなひとへに惜しき姿かな

【二】

第一段

舞臺は唐玄宗の宮殿楊貴妃の病室で、ワキ玄宗皇帝ワキヅレ大臣を随へて登場。子方楊貴妃も病床にある態で登場してゐる。

玄宗「春の遊宴にも夜の寢所にも、いつも自分の傍を離れる時はなく、奥御殿に三千人の美人が居る中で、たゞ一人寵愛を一身に集めてゐるのだ。それほど無雙の美人である楊貴妃の勝れた姿、あの太液の蓮の花のやうに紅い顔色が色あせ、未央の柳のやうに美しい眉も力がなく、ただ弱々と病に倒れてしまつて、命もいつ消えるか知れない果敢ない有様だ。實に心配なことで、わが心持を察してか、春の夜の木の間を洩れ出る月も朧に影ろひ空を歸り行く雁も自分と同じやうに泣いて行くことだ。あゝこの霞の中の樺櫻にも喩へたい美しい姿を亡くするとは、ほんとに惜しいことだ」

【一】

○春は春遊に入つて―白樂天の長恨歌に、楊貴妃が寵を得た事を述べて「承レ歡侍レ宴無二閑暇一、春從二春遊一夜專レ夜、後宮佳麗三千人、三千寵愛在二一身一」とあるを引いた。

○後宮―后妃などの住み給ふ宮殿。奥御殿。

○貴妃―貴妃は官名であるが、こゝには楊貴妃をさしていふ。楊貴妃は蜀州の司戸楊玄琰の女、小字を玉環といふ。夙く孤となつたが、開元二十四年玄宗皇帝に召されて、寵を一身に集めた。天寶十四年安祿山の亂に高力士に殺された。年三十八〔楊貴妃〕參照。

○紅色―粧ひを凝らした容色。

○芙蓉の紅色かへて―長恨歌に「太液芙蓉未央柳、芙蓉如レ面柳如レ眉」とあるに據る。太液は漢武帝の造つた池、芙蓉は蓮の花。

○未央の柳―未央は漢高帝の建てた宮殿。

○伏柴の―伏柴は柴のことよわ〳〵と病み伏すといひかけ、柴の露、露の命と續けた。

○露の命―命のはかないことを露に喩へていふ。

○心づくしの—古今集讀人知らずの歌「木の間より漏りくる月の影見れば心づくしの秋は來にけり」を借りて、春のことに轉用し、玄宗が楊貴妃の病の爲に心を盡すことに兼ねていふ。
○わが如くにや鳴き渡る—玄宗が心配して泣くやうに雁も鳴いて行くとの意。
○霞のうちの樺櫻—宮殿奥深い所に病み伏してゐる楊貴妃を形容していふ。宴曲集「花」に「楊貴妃がかほばせ、雨を帶びたる花の枝、源氏の紫の上、霞の中の樺櫻」
○ひとへに惜しき—花の一重といひかけた。
【三】○伯父—未詳。鐘馗は武徳年中の人であるから、唐高祖を指したのであらうか。
○鐘馗—唐逸史から出た傳說人物。本曲の解說及び「鐘馗」參照。
○及第叶はぬ事—進士の試驗に落第したことをいふ。
○亡心—亡魂。
○綠袍—官服。

【三】地謠の間にシテ老翁、面小牛尉。尉髪・襟淺黄・着附小格子厚板・茶水衣・腰帶・扇の裝束にて幕より出で、一の松に立ちて、舞臺に向き、

シテ「いかに奏聞申すべき事の候

ワキ、シテに面を向けて、

ワキ「不思議やな宮中靜まり物さびて。心を澄ます折節に。御階の下に來るを見れば。さも不思議なる老人なり。そも汝は如何なる者ぞ

シテ「これは伯父の御時に。鐘馗といひし者なりしが。及第叶はぬ事を歎き。玉階にて頭を打ち碎き。身を徒らになしし者の。亡心これまで參りたり（と二足つめ）

ワキ「げにさる事を聞きしなり。そのまま都の内に葬め。贈官せられし大臣の。その亡心は何の爲。唯今ここに來れるぞ

シテ「げによく知ろしめされたり。贈官のみか綠袍

【三】シテ鐘[illegible]、玄宗の姿[illegible]。

鐘馗「奏上いたします」

玄宗「これは不思議だ、宮中が靜かでものさびしく、心もしんみりしてゐる折に、御階段の下へ來る者があるので、その姿を見ると實に變つた老人だ」

と獨言をいつて、鐘馗に向ひ、

玄宗「一體お前は何者だ」

鐘馗「私は伯父の御時に鐘馗と申しましたもので、進士の試驗に落第したことを歎いて、御殿の御階段に頭を打ちつけて自殺してしまつた者でございます。その亡魂がこゝまで參つたのでございます」

玄宗「いかにもそのやうな事は聞いた。そしてその男はそのまゝ都に葬り大臣の官を贈られた筈であるのに、その亡魂が何の用があつて、今こゝへ來たのだ」

鐘馗「ほんとによく御存じでございます。

○はうむる―もと「かうむる」（蒙る）とあつたのを讀み誤つたのであるらう。
○明王鏡―典據を明かにしない。
○直奏―直接天子に申しあげること。
○誘ふ風を靜めん―楊貴妃の姿を花に喩へ、その命を取らうとする病魔を風に喩へていふ。
【三】
○衣を取り枕を推すべき力もなく―長恨歌に、勅使が仙界に楊貴妃を訪ねた時の事を述べて「攬レ衣推レ枕起徘徊」とあるを引いた。
○涙の露の玉蔓―涙の露、露の玉、玉蔓といひつづけ、玉蔓の緣でかゝる姿とつゞけた。玉蔓は多くの珠玉を聯ねた頭飾。

を。死骸にはうむる舊恩に。今かく君の寵愛し給ふ。貴妃の病を平らげて。奇特を見せしめ申すべし。然らば件の明王鏡を。かの御枕に立て置き給はば。「必ず姿を現さんと

地上歌『直奏かたく申し上げ。直奏かたく申し上げ。われ通力を起しつつ。楊貴妃の花の姿誘ふ風を靜めんと。申しもあへずその姿御階のもとに、失せにけり御階のもとに失せにけり

と三の松にて右へ小廻りしてひらき、靜かに中入。

【三】

ワキ（子方に向ひ）「いかに貴妃。今日はいつしか曇る日の。暮るる夕も朧月夜の。『晴れぬ心はいかなるぞ

貴妃「げにや衣を取り。枕を推すべき力もなく。苦しき心にせきかぬる。涙の露の玉蔓。かかる姿は恥かしや

あの時官を戴いたばかりでなく、緋袍まで死骸に賜はりましたその御恩報じに、今陛下がこのやうに御寵愛遊ばす楊貴妃の病氣を直して、奇瑞を御覽に入れませう。就ては例の明王鏡をあの御枕上にお立て下さいませ。さうすれば必ずわが姿を現しませう」

と堅く直奏を申しあげ、

鍾馗「必ずわが神通力を出して、楊貴妃の花のやうな御姿を奪ひ取らうとする病魔を追ひ拂ひませう」

といふや否や、その姿は御階段の下に消え失せてしまつた。

【三】　第二段

玄宗、楊貴妃に向ひ、

玄宗「どうだ楊貴妃、今日もはやいつの間にやら夕暮となつたが、日中も日は曇り、夜はまた朧月で、晴れる時もないが、そなたの氣分はとのやうた」

貴妃「ほんとに着物を取り枕を推す力さへなく、餘りの苦しさに涙のとめどもなく、このやうな姿をお目に入れてお恥かしうございます」

○代るに代る—自分が代つて病の苦を受けることが出來るものならばとの意。千載集顯昭法師の歌に「たらちめやとまりてわれを惜まし代るにかふる命なりせば」
○木綿四手の髪をも上げず—力を添へていふを木綿にいひかけ、幣の紙を髪にいひかけた。
○翠翹金雀—髪飾の具。長恨歌に「翠翹金雀玉搔頭」
○かざしの花—髪飾に挿す花。
○枕波の斜紅—枕のあとが顏について紅くなること。
○海棠の眠れる花—唐書、楊貴妃傳に「妃被レ酒新起、令ニ力士從侍兒扶披而至一、明皇笑曰、此眞海棠睡未レ足耶」
○明皇—玄宗皇帝の事。
○色を重んじ給ふ—色は美人の事。長恨歌に「漢皇重レ色思ニ傾國一」漢皇とは唐帝を憚つていひ換へたもの。
○春宵短きを苦しみて—長恨歌に「春宵苦レ短日高起、從レ此君王不ニ早朝一」とあるを引いた。
○移る方なき中—寵愛の他の女に移ることのない意。
○有明の—障りありといひ

ワキ「代るに代るものならば。かく苦しみを見るべきかと。力を添へて木綿四手の

貴妃「髪をも上げず

ワキ「ひれふすや

地「翠翹金雀とりどりに。かざしの花もうつろふや。枕破の斜紅の世に類ひなき姿かな。げにや春雨の。風に隨ふ海棠の眠れる花の如くなり

（居クセ）

地「然るに明皇。榮花を極め世を保ち。色を重んじ給ふ故。類ひなき貴妃にかく。契りをこめて年月の。春宵短きを苦しみて。日高く起き出で朝政も絶え絶えに。移る方なき中なれど

ワキ「のがれ難しや世の中は

地「思はぬ障り有明の。月の都の舞樂まで學び殘せる方もなく。祕曲傳へし笛竹の。壽なれやこ

玄宗「その苦しみを自分が代つてやることの出來るものならば、自分が代つてやつて、そなたに苦しみはさせないのだが……

—と玄宗が力をつけていふと、楊貴妃は髪をも得上げずに倒れ伏した。翠翹や金雀、その他色々の髮飾も色あせたとはいへ、枕のあとが顏について紅くなつた樣は、實に類ひのない美しい姿である。まことに春雨につれて吹く風にゆらぐ海棠の花の睡つてゐるやうな、なまめいた姿である。

さて玄宗皇帝は榮花を極めて天下に君臨し、殊に美人を愛せられたので、無雙の美人楊貴妃とこのやうに深い契りをこめられ、永い年月の間、春宵の短いことを歎き、日も高く昇つてから起き出て、朝廷の政治も怠つて絶え〴〵になり、ひたすら貴妃を愛して、他の女に心を移されることもなかつたのであるが、

玄宗「いや世の中は思ふ儘にならぬもので色々障りがあるが、自分は月の都の舞樂まで學んで、殘らず音樂の祕曲を傳へた身であるから、その音樂の效驗によつて、自分達の契りは、天地の久しく變りのな

かけ、有明の月、月の都と續けた。
○月の都の舞樂—龍神錄に「八月望日、唐明皇與申天師遊月宮、寒氣逼人霜雪霑衣、過天門在玉光中見一大府、榜曰廣寒淸虛之府、少前見素娥十餘人、皓衣乘白鸞、笑舞於廣庭大桂樹下、樂音淸麗、上皇歸製霓裳羽衣曲」とある故事を指す。
○壽なれや—笛竹の琴といひかけ「こと」の音より轉じて壽といふ。
○天長く地久しくて—長恨歌に「天長地久有時盡、此恨綿々無絕期」とあるを祝の意に轉じて用ゐた。
【四】
○月卿雲客—公卿殿上人。
○御几帳—衝立のやうにして、とばりを懸けたもの。
【五】
○九華の帳—長恨歌の上に引いた「攬衣推衣」の前句に「九華帳裡夢魂驚」とあり花模樣を繡にした帳を九枚重ねて寢室のまはりに垂れたもの。

の契り。天長く地久しくて盡くる時もあるまじ

【四】

ワキ「げに今思ひ出だしたり。かの老人の敎への如く。明王鏡を取り出だし。かの御枕に置くべきなり（とワキヅレに向く）

ワキヅレ『勅諚尤も然るべしと。月卿雲客一同に。立て添へてこそ置きたりけれ

ワキヅレの一人「月卿雲客一同に」と謠ひながら舞臺際へ行き、後見の取出し置きたる作物の鏡臺を正面先へ置き、もとの座に歸る。

地上歌『かくて暮れ行く雲の脚。かくて暮れ行く雲の脚。漂ふ風も。凄しく。身の毛もよだつ折節に。不思議や鏡のそのうちに。鬼神の姿ぞ映りける

【五】

早笛にて、ツレ鬼神、面顰・赤頭・金緞鉢卷・襟紺・着附段厚板・法被・赤地半切・腰帶・扇の裝束にて舞臺の眞中に出で鏡に向ひ、

地『九華の帳をおし除けて（と拍子を踏み）。九華の帳

いやうに、盡きることがなからう」

（と自ら慰め、）

【四】

玄宗「さうだ、今思ひ出した。あの老人の敎への通り、明王鏡を取り出して、あの貴妃の枕上に置かう」

（と傍の大臣にいふ。）

大臣「仰せ御尤もでございます」

と公卿殿上人が一同に起ち上つて、明王鏡を取り出し、楊貴妃の御枕の傍の御几帳に立て添へて置いた。

かうして、あたりが昏くなつて、雲が漂ひ風も凄じく吹き荒れて、身の毛もよだつばかり恐ろしい時に、不思議にもその鏡の中に鬼神の姿が映つた。

【五】

ツレ病鬼登場する。

病鬼が楊貴妃の閨の美しいとばりをお

○より竹の—より竹は波に流れて寄り來る竹で、これで笛を作れば美音を發するといふので、御枕に寄るといひかけて、笛と續けた。

【六】

をおし除けて。かの御枕により竹の。笛をおつ取りさし上げて（ト扇をあげし）。勇み喜ぶその氣色。鏡に映り見えければ。帝はこれを叡覽あつて。さては病鬼よ遁さじと。劒を拔いて。立ち給へば。天に上り。地に又下り。飛行自在を現して。帝に向ひ。怒りをなせば。劒をふり上げ斬り給へば。御殿の柱に立ち隱れて姿も見えず失せにけり

ワキ「劒を拔いて」と劒を拔きて座を下り、ツレ鬼神と切組み、「姿も見えず失せにけり」とツレは脇座にくつろぎ、ワキは舞臺際に立ちて幕に向ひ、

ワキ「不思議や曇る空晴れて。宮中光りかかやきて

地「鳴動することこそ恐ろしけれ

と舞臺に入り地謡座前の一疊臺、貴妃の右側に腰をかく。

【六】 大癋の囃子にて、後ジテ鍾馗の靈、面小癋見・赤頭・唐冠・金襴鉢卷・縹花色・着附段厚板・袷狩衣・赤地半切・腰帶の裝束にて劒を持ちて橋懸に出で、一の松に立ち、

し除けて、その御枕に寄り添ひ、笛を取つてさし上げ、喜び勇む有様が、鏡に映つて見えたので、玄宗はこれを御覽になつて『さてはこれが病鬼だな、遁してなるものか』と劒を拔いて立たれると、病鬼は或は天に上り或は地に下り、飛行自在の力を現して、玄宗に向つて怒りかける。玄宗が劒をふり上げてお斬りになると、病鬼は御殿の柱に隱れて、姿も見えなくなつてしまつた。

玄宗、病鬼の姿を見失つて驚く体にて、

玄宗「おゝこれは不思議だ、今まで曇つてゐた空が晴れて、御殿の中が光り輝き、鳴り動くのは、恐ろしいことだ」

【六】 後ジテ鍾馗登場。

○病鬼—病を司る鬼神。
○武德年中—唐の高祖皇帝の時の年號。
○天形星王我劍降鬼—「天形星王よ、わが劍を以て病鬼を降伏せしめ給へ」との意であらう。秘文の句であるが、出所は分らない。
○祕文—祕密の呪文。

【七】

○眞木柱—眞木(杉檜等)の太い柱。

後ジテ「抑もこれは。武德年中に贈官せられし。鍾馗大臣の。精靈なり。さてもこの君寵愛し給ふ。貴妃の病を平らげんと。通力を以て奇瑞を見す。南無天形星王。我劍降鬼と。祕文を稱へ駒に乘じ。虛空を翔つて參內せり

【七】

地上歌「惡鬼はこれを見るよりも(とツレ立ちて眞中に出で)。惡鬼はこれを見るよりも。驚き騷ぎ。かの眞木柱に。隱れけるを(と袖をかづき)。鍾馗の精靈馬より下り立ち利劍を提げ袂をかざし。明王鏡に向ひ給へば。鬼神の姿は。隱れもなし

シテ「袂をかざし」と舞臺に入り鏡の前に出で、

〔舞働〕

にシテとツレの二人立廻りの樣を示し、引續き次の謠に合せて仕科。

鬼神「鬼神は通力自在も失せて

地「鬼神は通力自在も失せて。起きつ轉びつ。走

鍾馗—自分は武德年間官位を贈られた鍾馗大臣の精靈である。さて今この君が御寵愛になる楊貴妃の病氣を直さうと思ひ、神通力を以て奇瑞を見せるのである。—「南無天形星王、我劍降鬼」——と、祕文を稱へ、馬に乘り虛空を翔つて、參內した。

【七】

惡鬼はこれを見るや、驚き騷いで、かの御殿の親柱に隱れたが、鍾馗の精靈が馬から下り、鋭い劍を提げ、袂をかざして、明王鏡に向はれると、鬼神の姿は隱れる術もなく現れた。

〔舞働〕

に舞ひ、鬼神と病鬼と互に力を爭ふうちに、病鬼は次第に力が衰へて、

かうして、鬼神の自由自在の神通力がなくなつて、起きつ轉びつして、走り逃げようとするのを、鍾馗が追ひ詰めると、病鬼は御殿を飛び下り、奥御殿

○六宮　后妃の住み給ふ奥御殿。周禮内宰の鄭註に「皇后正寢一、燕寢五、是爲二六宮一」

り出づるを。追つ詰め給へば御殿を飛び下り六宮の玉階に。走り上るを、遁さじものをと引き下し。利劍を振り上げづだづだに斬り放し。庭上に投げ捨て忽ちに。貴妃も息災猶この君の。惠みを仰ぎ。守りの神と。なるべしと。玉體を拜し。奉り。玉體を拜し奉りて。姿は夢とぞ。なりにける

「六宮の玉階に」とツレ一疊臺に上り、シテに追はれて下り、「引き下し」とツレ仰向きに倒れて切戸より入る。シテ「利劍を振り上げ」と劍を振上げて切る形をし「庭上に投げ捨て」と正面先へ投ぐる形をし、「玉體を拜し」とワキに辭儀して橋懸へ行き、三の松にて袖をかづきて留む。

の御階段に走り上る。鍾馗はなほも逃すまいと病鬼を引き下して、鋭い劍を振り上げ、づだ〱に病鬼を斬り放して庭上に投げ捨てて、

鍾馗「すぐに楊貴妃の病氣も全快せられませうし、なほわが君德を仰ぎ、守護の神となりませう」

と玄宗の御姿を拜して、姿は夢の如くに消えてしまつた。

〔考異〕

諸流（觀寶剛喜）

殆ど異同がない。

古謠本（光悅本）

現行曲に同じ。

花月（くわげつ）

観（寳　春　剛　喜）

解説

【能柄】　四番目　一段劇能

【人物】　ワキ　僧（花月の父左衛門）、シテ　花月
　　　　狂言　清水門前の者、

【所】　京都　清水寺

【時】　春（二月）

【異稱】　「果月」とも書いた。

【作者】　能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作とす。世阿彌の能作書に「又放下には、自然居士、花月、東岸居士、西岸居士などの遊狂」と記してゐる。

【梗概】　筑紫彥山の麓の左衛門は今年七歳になつた一子の行方が分らなくなつたのを機緣として出家し、諸國を遊歷して京都淸水寺に來た時、小歌曲舞などを面白く謠ひ舞ふ喝食の花月に遭つた。それがわが尋ねる子であつたので、悦んで供に連れ立つて修行に出た。花月は彥山に登つて天狗にとらはれ、このやうな姿になつてゐたのであつた。

【出典】　これといふ典據は見當らないが、子供が天狗に捉へられた巷說は當時いくらもあつたことであらうから、それを主題とし、民間

藝術の小歌や八撥をとり入れて、本曲を創作したものであらう。

【概評】 別離した父子・母子の再會は、誠に情味の濃やかなもので、これを主題とした謡曲が少くないのであるが、從來の興味を重視して、舞踊を主眼とする爲に、强ひて物狂などを演せしめ、その結果曲の主旨を誤らしめてゐるのが通弊で、殊に父子再會を主題とした曲にこの弊が甚しいのである。本曲も亦小歌・曲舞・八撥などを演出せしめてゐて、觀衆の興味も自然この方面に傾くのであるが、それにも拘らず、主題の分裂を感ぜしめないのは、一つには父子ともに俗を離れた出家で、殊にシテを雜藝を本業とする喝食僧としたことが、このやうな演出を圓滑ならしめたのであらう。觀世流刊行會本(光悦本でも)の羯鼓は、父子が再會した後、なほ狂言が一すわたき事を承り候」と再會の喜びを抑へて、引續きこれを演せしめることとして、類曲と同樣な無理を押してゐるが、これも檜本(正德本も)では、再會の喜びを表す爲に演出することとして、圓滑に運んでゐるのである。

【一】

次第の囃子にて、ワキ旅僧、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・腰帶・扇の裝束にて、名乘座に出で囃子座の方に向き、

ワキ次第『風に任する浮雲の風に任する浮雲のとまりはいづくなるらん

地取に正面に向き、

ワキ「これは筑紫彦山の麓に住居する僧にて候。われ俗にて候ひし時。子を一人持ちて候を。七歳と申しし春の頃。いづくともなく失ひて候程に。これを出離の緣と思ひ。かやうの姿となり

【一】

舞臺は初めある旅の途中で、ワキ僧(花月の父左衞門)が登場して、

と次第を謡つて旅の心持を述べ、

僧「自分は風のまに〳〵吹かれて行く浮雲のやうな身上で、どこに泊まるといふあてもなく、旅にさすらつてゐることだ」

僧「私は筑紫彦山の麓に住む僧です。私は在俗の時、子を一人持つてゐたのですが、その子が七つの時の春、どこへ行つたのか行方不明になつたので、これは自分の出家するよい機會だと思つて、このやうな姿となり、諸國を修行して歩いてゐるのです」

【一】

○風に任する浮雲の—風の吹くに任せて、何處となく動いて行く浮雲のやうなわが身は。

○とまりはいづくなるらん—何處に泊まるといふ目當もない。

○彦山—豐前・豐後・筑前の三國に跨る太山。山伏修驗道彦山派の本山。古來天狗の住む所といひ傳ふ。

○俗—僧に對し、佛門に入らない人をいふ。

○出離の緣—生死の迷界を脱れ出る機緣。出家入道する機會。

○生まれぬ先の―以下の一節「卒都婆小町」のワキ上歌と同文。われら衆生はこの世に生まれ出て、種々の煩惱愛着を生ずるのであるが未生以前の本覺實體を悟れば、一切平等無差別で、親子恩愛の執着もないとの意

○清水―京都東山の清水寺「田村」參照。

◎門前の人の―以下ワキ狂言の掛合、光悅本は趣を異にす。考異參照。

て諸國を修行仕り候

道行〽生まれぬ先の身を知れば。生まれぬ先の身を知れば。あはれむべき親もなし。親のなければわが爲に。心を留むる子もなし。千里を行くも遠からず。野に臥し山にとまる身のこれぞ眞の、住家なるこれぞ眞の住家なる

「千里を行くも」と右の方に向き二三足出で、またもとへ歸りて清水に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。これははや花の都に着きて候。まづ承り及びたる清水に參り。花をも眺めばやと思ひ候

といひて眞中へ行きかけ、舞臺際に出で、

ワキ「門前の人の渡り候か

狂言門前の者、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて一の松に立ち、

狂言「門前の者と御尋ねは。いかやうなる御用にて候

ワキ「これは都始めて一見の事にて候。この所に於て何にてもあれ面白き事の候はば見せて給はり候へ

と見物人に自己紹介をし、

僧「この世の煩惱を離れて、未生以前の實體を悟れば、すべてが平等無差別で、親子恩愛の執着もないのだ。子を憐む親心もない筈だ。親心がなければ、親の爲に心をかけてくれる子もない筈だ。何の愛着も執心もなければ、千里を離れた所へ行つても、遠いといふ感じはないのだ。かうして、一切を忘れてしまへば、野山もわが家同然だ。いや野山がほんとのわが住家といふものだ」

といつてゐる間に、京都に着いた態で、

僧「道を急いだので、存外早く京都に着いた。まづ第一に評判に聞いてゐた淸水寺に參詣して、花景色をも眺めませう」

といつて淸水寺に行く。即ち舞臺は淸水寺となる

◎さん候都は人の—諸本には「定めて今日は清水へ御參りなき事はあるまじく候。御供申しかの人を見せ申し候べし」とある。

【三】

○くわの字はと問へば—「くわ」と發音する文字であれば、花、瓜、菓、火、どれでもよいとの意。能作書には花月、禪鳳習道目錄には果月と記してゐる。

○末後まで—光悦本には「まつこ」と假名書きにし、以後の諸本多くは「末期」としてゐるのを刊行會本には「末後」の字を充て、その辭解に「因果の果字を末後の一句に殘すとなり。末後の一句とは頓悟を得る最後の斷案の語句の謂。無關門に巖頭と德山との末後の句の問答見え、其頌に、識二得最初句一便會二末後句一末後與二最初一不二是者一句一」といつてゐる。

○末世のかうそ—末世澆季に珍しい高僧といふ意であらう。謠曲評釋には「かうそ、華嚴宗の祖師香象大師を云ふ。天竺の人。今花月の云ふ言が其旨に合ひたれば比して云へるなり」と解してゐる。

狂言「さん候都は人の集まりにて。面白き事數多く御座候中にも。花月と申す人の御座候が。面白き地主の曲舞を御舞ひ候間。呼び出だし御目にかけ申さうずるにて候

ワキ「さあらばその花月とやらんを見せて給はり候へ

狂言「やがて呼び出さうずるにて候間。まづかう〳〵御座候へ

ワキ「心得申し候

ワキは脇座に行き下に居る。狂言舞臺に入り幕に向ひ、

狂言「いかに花月へ申し候。とう〳〵御出で候へや

といひ狂言座につく。

【三】

シテ花月、面喝食・喝食鬘・後折烏帽子・襟白赤・着附平厚板・水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて弓矢を持ちて舞臺に入り眞中に立ちて、

シテ「抑もこれは花月と申す者なり。ある人わが名を尋ねしに答へて曰く。月は常住にしていふに及ばず。さてくわの字は問へば。春は花夏は瓜。秋は菓冬は火。因果の果をば末後まで。一句のために殘すといへば。人これを聞いて

地「さては末世のかうそなりとて天下に隱れもなき花月とわれを、申すなり

【三】シテ花月、舞臺に出て、

花月「私は花月といふものだ。ある人が私の名前のいはれを問いたので、『くわげつ』の月は、四季常住のもので、眞如の意味を示してゐるものだから、委しくいふまでもなからう。それから「くわ」の字についていへば、これは變化の意味を持つたもので、春ならば花、夏ならば瓜、秋ならば菓、冬ならば火、時の宜しきに從へばよいのであるが、同じ「くわ」の字でも、因果の果と考へれば、悟りを開く最後の文字にならうと、かう答へると、人がこれを聞いて、末世澆季に珍しい高僧だと驚いた程、天下に有名な者なのだ」と名乗る。

◎何とて今までは—以下狂言詞、謠本の文に從ふ。
○雲居寺—京都東山、今の高臺寺の邊にあつた寺で、夙く廢滅した。〔自然居士〕參照。

○小歌—室町時代の俗謠。

○來し方より—以下「寢られね」までが小歌。

○戀こそ寢られね—戀しい時は寢られないとの意。戀の歌を父の戀しい心に用ゐたのである。

狂言立ちて臨正面に出でシテに向ひ、

狂言「何とて今日は遲く御出で候ぞ

シテ「さん候今までは雲居寺に候ひしが。花に心を引く弓の。春の遊びの友達と。中違はじとて參りたり

狂言「さらばいつもの如く小歌を謠ひて御遊び候へ

とシテに近づく。シテ狂言の肩に手をかけて、

シテ『來し方より

地『今の世までも絕えせぬものは、戀といへるくせもの。げに戀はくせもの。くせものかな。身はさらさらさら。さらさらさらに戀こそ寢られね

「今の世までも」と狂言とともに正面へ出で、「戀こそ寢られね」と狂言を突きやる。狂言目附柱の方を見て、

狂言「あれ御覽候へ鶯が花を散らし候よ

シテ狂言と同じ方を見て、

シテ「げにげに鶯が花を散らし候よ。某射て落し候はん

門前の者「今日はどうして遲くお出でになつたのです」

花月「さやうさ、今まで雲居寺にゐたのだが、花に心を引かれて、それに春の遊び友達と中違ひをしないやうにと思つて、お仲間入りにやつて來たのです」

門前の者「では、例の通り小歌を謠つて下さい」

花月「——

『昔から、今の世までも絕えないものは、戀といふ曲者ぢや。ほんに戀は曲者ぢや。身にはさら〳〵覺えもないに、いつの間にやら戀が心に忍び入り、戀しい思ひで寢られない』——」

と小歌を謠ふ。

門前の者、向ふの櫻の木を見て、

門前の者「おゝ御覽なさい、鶯が花を散らしますよ」

花月「いかにも鶯が花を散らしたな。よし私が射落してやりませう」

【三】
○細脛—細い足。次の大長刀に對せしめた。
○養由—養由基。支那春秋時代の人で、弓の名人。百歩離れて柳の葉を射て百發百中したといふ。史記を初め今昔物語・源平盛衰記等に見ゆ。
○それは雁がね—源平盛衰記に「養由弓をとれば、雁列を亂り、飛鳥忽ちに地に落つる勢ひありき」
○大口のそば—大口袴の裾大口袴は下袴の一種で、その裾口の大きなもの。
○うつ肩ぬいで—衣の肩をうち脱いで。
○よつぴきひようと—弓をよく引きしぼり、ひやうと弦音を立てて矢を放つ。

狂言「急いで遊ばし候へ
といひて、狂言は笛座の上に着く。

【三】
シテ「鶯の花踏み散らす細脛を。大長刀もあらばこそ。花月が身に敵のなければ。太刀刀は持たず。弓は的射んが爲。又かかる落花狼藉の小鳥をも。射て落さんが爲ぞかし。異國の養由は。百歩に柳の葉をたれ。百に百矢を射るに外さず。われは又花の梢の鶯を。射て落さんと思ふ心は。その養由にも劣るまじ。『あら面白や
地『それは柳これは櫻。それは雁がね　これは鶯。それは養由こ　れは花月。名こそかはるとも。弓に隔てはよもあらじいでもの見せん鶯。いでもの見せん鶯とて。履いたる足駄を踏ん脱いで大口のそばを高く取り狩衣の袖をうつ肩ぬいで。花の木蔭に狙ひ寄つて。よつぴきひようと。射

門前の者「すぐやつつけておやりなさい」
花月「あの美しい櫻の花を踏み散らした、憎い鶯の細足を斬つてやらうと思ふが、さて大長刀はなし。もと／＼敵持つ身でないから、太刀や刀の用意もなし、何と致さう。さうださうだ。この弓は的を射る爲でもあれば、このやうな花踏み散らす狼藉者の小鳥をも射落す爲のものであつた。弓といへば、支那の養由は百歩離れた所から柳の葉を射て、百發百中、射外したことがないさうだ。今私が花の梢の鶯を射落さうとする心も、その養由に劣りはしないのだ。さう思へば面白い。」
一は柳で一は櫻、一は雁で一は鶯、一は養由で一は花月、射る人が違ひ、射られる品もかはるが、弓のうまさに變りはあるまい。憎い鶯よ、目にもの見せてくれよう……と、このやうに、履いてゐた足駄を脱ぎ、大口袴の裾を高くからげ、狩衣の肩をぬいで、花の木蔭に狙ひ寄つて、ようく引いて、ひようと射よう……と思つたが、いや／＼佛の御戒めである殺生戒を破ることは出來ない」
と一度弓を引かうとして止める。

○殺生戒—生類を殺すなとの佛法の禁戒。

【四】

○曲舞—室町時代民間に行はれた一種の歌舞。

○さればにや—以下「五濁の水に影清し」まで〔田村〕のシテサシと同文。

○大慈大悲の—觀世音の功徳を讃美した今様。觀世音菩薩は大慈悲の心を以て、十惡の衆生を濟度する爲に三十三様に身を變化して、五濁のこの世に現れ給ふとの意。委しくは〔田村〕に註す。

○坂上の田村丸—平城天皇の御宇、征夷大將軍となつて東夷の叛亂を平定した武將。〔田村〕參照。

○大同二年—平城天皇の年號。清水寺大伽藍の造立せられた年。

○音羽山—清水寺のある山

ばやと思へども佛の戒め給ふ殺生戒をば破るまじ

「花の木蔭に」と弓に矢を番ひ、矢を放さんとして、「佛の戒め給ふ」と弓矢を一所に持ち、「殺生戒をば破るまじ」と弓矢をうち捨てて下に居る。

狂言脇正面に出で、

【四】

狂言「言語道断面白き事を仰せられ候。また人の御所望にて候。當寺の謂れを曲舞に作りて御謠ひ候由を聞しめして。一節御謠ひ候へとの御所望にて候。

シテ「易き事謠うて聞かせ申さうずるにて候

肩を脱ぎて囃子座前へ行き（狂言はもとの座に着く）

シテサシ『さればにや大慈大悲の春の花

地『十惡の里にかうばしく。三十三身の秋の月。五濁の水に影清し

これより謠に合せて舞ふ。（舞クセ）

地クセ『抑もこの寺は。坂上の田村丸。大同二年の春の頃。草創ありしこの方。今も音羽山。嶺の下枝の滴りに。濁るともなき清水の。流れを誰か

【四】

門前の者「實に面白い事を仰しやる。ところで、あのお僧の御所望ですが、あなたがこの清水寺の縁起を曲舞に作つてお謠ひになるといふ事をお聞きになり、一節聞かしてほしいと。かう御所望なさるのです」

花月「――『今様歌にも、「大慈大悲の觀音は、罪業深い衆生を救はんと、三十三種に身を變へて、穢れたこの世に出て給ふ」といふやうな事が謠はれてゐる。――

さて、このありがたい清水寺は、大同二年の春坂上田村丸の創建せられたもので、それよりこの方、今に至るまで、觀音の大慈悲は、この音羽山の瀧水のやうに、濁り衰へる時はなく、すべての人が御利益

○こんじゆせん―こんじきせん（金色泉）の訛であらう
○名は青柳の朽木―名前は若々しい青柳であるが、實は緑の色もない枯木。
○楊柳觀音―右手に楊柳の枝を持ち、左手に施無畏の印を結んだ觀世音。千光眼祕密法經に「若欲レ消二除身上衆病一、當レ修二楊柳枝藥法一」とある。
○御所變―御化現。
○千手の誓ひ―千手觀音の誓願。
○枯れたる木にも―梁塵祕抄に「よろづの佛の願よりも、千手の誓はありがたや、枯れたる草木も忽に、花咲き實なると説い給ふ」大悲陀羅尼經に「此大神呪、乾枯樹尙得レ生二枝柯華菓一、何況有情有識衆生身、有二病患一治レ之不レ差者必無二是處一」

汲まざらん。ある時この瀧の水。五色に見えて落ちければ。それを怪しめ山に入り。その水上を尋ぬるに。こんじゆせんの岩の洞の。水の流れに埋もれて名は青柳の朽木あり。その木より光さし。異香四方に薫ずれば

シテ『さては疑ふ所なく

地『楊柳觀音の。御所變にてましますかと。皆人手を合はせ。猶もその奇特を知らせてたべと申せば。朽木の柳は緑をなし。櫻にあらぬ老木まで。皆白妙に花咲きけり。さてこそ千手の誓ひには。枯れたる木にも、花咲くと今の世までも申すなり

【五】

ワキ先程よりシテを熟視して居り、シテ舞ひ終ると立ちて、正面に向き、

ワキ「あら不思議や。これなる花月をよくよく見候へば。某が俗にて失ひし子にて候は如何に。

を受けてゐる。或時、この瀧の水が五色に見えて流れ落ちたので、不思議に思ひ山に入り、その水上を尋ねると、金色泉が岩の洞に埋もれてゐて、そこに柳の朽木があつた。そして、その木から光がさし出て、妙なる香が四方に薫ずるので、さては疑ひもなく、楊柳觀音が御出現になつたのだと、皆の人が手を合はせて禮拜し、なほこの上の奇特をお示し下さいと申すと、朽木であつた柳に緑の葉が生ひ茂り、櫻でない老木まで、皆眞白に花が咲いた。それで、千手觀音は枯れた木にまで花を咲かせて見せると御誓願になつたのだと、今でも申すのだ』――」

と曲舞を謡ひ舞ふ。

【五】

僧は先程から花月の曲舞を聞きながら、その顔をつく〴〵と見てゐたが、

僧「あゝ不思議だ、この花月をよく〳〵見れば、私が在俗の時なくしたわが子であつた。實に不思議だ、名乗つて逢はう。」

名のつて逢はばやと思ひ候（とシテへ向き二足つめ）

ワキ「いかに花月に申すべき事の候

シテ「何事にて候ぞ

ワキ「御身は何處の人にて渡り候ぞ

シテ「これは筑紫の者にて候

ワキ「さて何故かやうに諸國を御廻り候ぞ

シテ「われ七つの年彦山に登り候ひしが。天狗にとられてかやうに諸國を廻り候

ワキ「さては疑ふ所もなし。これこそ父の左衛門よ見忘れてあるか

【六】

狂言立ちてワキに向ひ、

狂言「なう〳〵御僧は何事を仰せられ候ぞ

ワキ「さん候この花月は某が俗にて失ひし子にて候程に。さてかやうに申し候

狂言「げにと御申し候へば。瓜を二つに割つたるやうにて候。この上はいつもの如く八撥を御打ち候ひて。うち連れだつて古

（と獨言をいつて花月に向ひ、

僧「花月に少しお伺ひしたい」

花月「何です」

僧「あなたは何處の方です」

花月「手前は筑紫の者です」

僧「なぜこのやうに諸國を廻つて歩いて居られるのです」

花月「私が七つの年彦山に登つた時、天狗にとられて、このやうに諸國を廻つてゐるのです」

僧「それでは、もう間違ひがない（と獨言をいつて）私がそなたの父の左衛門だぞ、見忘れたか」

【六】

門前の者「もしもし、お僧は何を仰しやるのだ」

僧「いやこの花月は、私が在俗の時失つた子供であつたので、このやうにいつてゐるのです」

門前の者「成程伺つて見ると、瓜を二つに割つたやうに、よく似ていらつしやる。それでは、いつものやうに八撥を打つて、

【六】

〇げにと御申し―刊行會本（光悦本にも）には「すぢなき事を承り候。まづ〳〵そなたへ御のき候へ。いかに花月へ申し候。いつものやうに八撥を御打ち候ひて皆人に御見せ候へ」とある。

○八撥―鼓の一種羯鼓を八拍子に打つこと。
○彦の山―彦山に同じ。
○四王寺―筑前國筑紫郡大野山の別名。深き思ひをしいてといひかけた。
○松山―讃岐國綾歌郡にあり、阿野松山ともいふ。
○白峯―松山の高峯。崇德上皇御陵のある山で、この山の天狗が上皇をお慰め申し上げたといひ傳へた。
○大山―伯耆國東伯郡にあり、修驗道の靈場。
○鬼が城―大江山の東南三里ばかりの所にある。「大江山」參照。
○愛宕の山の太郎坊―山は山城國葛野郡にあり、修驗道の靈場。太郎坊はこの山に住む天狗の名。「車僧」參照。
○比良のの峯の次郎坊―山は近江國滋賀郡にあり、これも修驗道の靈場。次郎坊はこの山の天狗の名。光悦本には「平野の」と書く。

里へ御歸り候へ」

といひて狂言は切戸より入る。

シテ後見座にくつろぎ【物着】羯鼓をつけて正面に出で、(ワキは下に居る)

シテ「さてもわれ筑紫彦山に登り。「七つの年天狗にとられて行きし山々を。思ひやるこそ悲しけれ

地「とられて行きし山々を。思ひやるこそ悲しけれ

〔羯鼓〕

引續き次の謡に合せて舞ふ。

地「とられて行きし山々を。思ひやるこそ悲しけれ。まづ筑紫には彦の山。深き思ひを四王寺。讃岐には松山降り積む雪の白峯。さて伯耆には大山さて伯耆には大山。丹後丹波の境なる鬼が城と、聞きしは天狗よりも恐ろしや。さて京近き山さて京近き山々。愛宕の山の太郎坊。比良の

一所に故郷へお歸りなさい」

花月、羯鼓をつけて、

花月「――

『さても私が七つの年に、筑紫の彦山に登り、天狗にとらはれて、あちらこちらの山々に、連れて行かれた事を思ひ出すと、悲しうてならぬ』

〔羯鼓〕の舞を舞ひ、

花月「――

『天狗にとらはれて、あちらこちらの山々に、連れて行かれた事を思ひ出すと、悲しうてならぬ。最初の山は筑紫の彦山で、泣きの涙で四王寺山に連れ行かれ、それから讃岐の松山、雪の降り積む白峯、次には伯耆の大山、丹後丹波の國の境に聳えた鬼が城山、この名を聞いては天狗よりもなほこはい。さてそれから京に近い山々で、愛宕の山の太郎坊、比良山の次郎坊、名高い

○比叡の大嶽―近江山城の兩國に跨る比叡山の絶頂を大嶽といふ。
○少し心のすみしこそ―少し心の澄むやうに思はれたのは。
○横川―比叡山の北麓。月の夜といひかけた。
○日頃はよそにのみ―新古今集讀人知らずの歌「よそにのみ見てや止みなむ葛城や高間の山の峯の白雪」を引いて山の綾とした。
○葛城や高間の山―葛城山は大和國の西界にあり、その高峯を高間山といふ。昔行者の修行した山。〔葛城〕參照。
○山上大峯釋迦が嶽―大峯は大和國金峯山から玉置山に至る連山。山上嶽及び釋迦嶽は大峯中の一峯。
○心亂るる―さゝらの打ち方の亂れるにいひかけた。
○ささら―二つの竹を割り合せて歌の拍子をとるもの
○舞うては數へ―舞ひながら謠ひ。白拍子などを謠ふことを「數へる」といふ。
○さつと捨てて―さゝらを捨てることに浮世を捨てる意を含ませた。さゝら、さつと、さ候はば、三つの頭韻を讀んだのである。

の峯の次郎坊。名高き比叡の大嶽に。少し心のすみしこそ。月の横川の流れなれ。日頃はよそにのみ。見てや止みなんと眺めしに。葛城や。高間の山。山上大峯釋迦が嶽。富士の高嶺にあがりつつ。雲に起き臥す時もあり。かやうに狂ひめぐりて。心亂るるこのささら（撥を打合ひ）。さらさらさらとすつては謠ひ舞うては數へ。山嶺々里々をめぐりめぐりてあの僧に（ワキへ進み）。逢ひ奉る嬉しさよ。今よりこのささら。さつと捨てて候はば（撥を捨て）。あれなる御僧に。連れ參らせて佛道連れ參らせて佛道の修行に出づるぞ嬉しかりける出づるぞ嬉しかりける

と仕手柱際にて留拍子を踏む。ワキは「捨てて候はば」に立ち、目立たぬやうに橋懸に出で、シテより先に靜かに幕に入る。

比叡の大嶽に連れて行かれたが、こゝで心の少し慰められたのは、横川あたりの月夜の景色。またそれから葛城の高間山、大峯の山上嶽や釋迦嶽、富士の高嶺にも上つたことだ。かうして山から山へと連れて行かれ、雲に起き臥す時もあり、とう／＼心も亂れてこのやうに、さゝらをさら／＼と、磨つては謠ひ舞うては謠ひ、山から里へと廻り歩いて居りました』

（羯鼓を打つて舞ひ謠ひ、）

花月「ところが唯今父のお僧にお逢ひして、このやうに嬉しいことはない。今は用のないさゝら、さつと捨てて、これより後は父のお僧に連れられて、佛道修行が出來ようとは、このやうな嬉しいことはない」

（羯鼓を捨て、父の後に從つて幕に入る。）

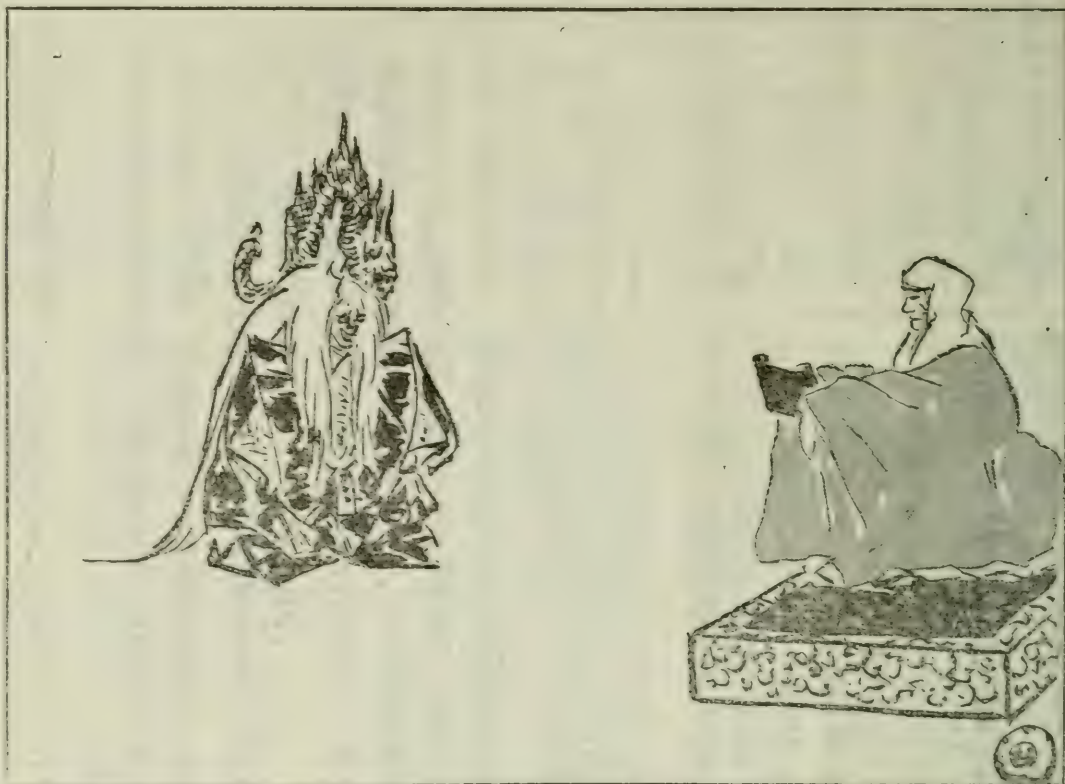
〔考異〕

諸流（五流）

【一】ワキ「これは筑紫彦山の……失ひて候程にこれを出離の縁と思ひ（下懸それより浮世あぢきなく候ニ）かやうの姿となりて諸國を修行仕り候（下懸候父都は人の集りと申し候程に。この春思ひ立ち都に上り。彼者の行方をも尋ねばやと思ひ候）。ワキ道行「生まれぬ先の……野に臥し山にとまる身はこれぞ眞の住家なる〳〵（下懸り來て清水寺にも着きにけり〳〵）【五】ワキ「いかに花月に申すべき事の候。シテ「何事にて候ぞ。ワキ「御身は……シテ「われ七つの年……ワキ「さては疑ふ所もなし（寶下懸ナシ）これこそ父の左衛門よ見忘れてあるか（下懸シテ「久しく馴れたる父に逢ひ申す事の嬉しさは候。ワキ「やがて歸國せうずるにて候）【六】シテ「さても寶吉野龍田の花紅葉。地「更科越路の月雪）われ（寶下懸はもと）筑紫（下懸の者あたり近き）彦山へ登り……

古謡本（光悦本）

【一】ワキ「これは筑紫……七歳と申しし春の頃（光ナシ）いづくともなく……ワキ「（光やう〳〵）急ぎ候程に……眺めばやと思ひ候（光なう〳〵是なる人。是は遙の遠國の者にて候。承りたる清水へ参候か。御参候はは御供申たく候。ヲカシ「安き事御供申て参候へし。ワキ「扨此比都にはいかやうの面白き事か御座候。ヲカシ「都はいつも色々様々の御事御座候中に。花月と申候喝食の御座候か。異形の御姿にて面白く御舞ひ候彼人を見せ申候へし。定て今日清水へ御参なき事はあるまじく候。御供申て御目にかけうするにて候）【四】シテ「易き事（光さらばうたうて……ヲカシ「抑もこの寺は……水上を尋ぬるに（光れば）……【五】ワキ「さては疑ふ……父の左衛門（光家次）よ見忘れて……

【六】地「とられて行きし……雲（光雪）に起き臥す……出づるぞ嬉しかりける（光名残成ける〳〵）

現在七面（げんざいしちめん） 觀（剛）

解説

【能柄】四・五番目 複式劇能

【人物】ワキ 日蓮上人、ワキツレ 同從者（二人）、前シテ 里女（龍女）、狂言 能力、後シテ 龍女

【所】甲斐國 身延山

【時】鎌倉中期（無季）

【作者】作者及び演能に關する古記錄は見當らない。貞享番外謡本に「七面」（これも古記錄は見當らない）がある。本曲（これも貞享謡本に出てゐる）はその後に出來たので、七面の上に現在の字を冠したのであらう。

【梗概】日蓮上人が身延山で法華經を讀誦してゐると、毎日參詣して花水を佛に捧げる一人の女性がある。今日も參詣して、日蓮から女人成佛の說法を聽聞し、御法の水を手に掬んで、「自分は七面の池に住む蛇身であるが、三熱の苦を免れ得た報恩に、本の姿を現さう」といつて消え失せる。やがて前の女は大蛇となつて現れ出たが、日蓮の讀經によ

つて忽ちに蛇身を變じて天女の姿となり、神樂を奏し「この山の鎭守となり、衆生を廣く濟度しよう」と約束して虚空に上つてしまつた。

【出典】法華經提婆達多品に八歳の龍女が男子に變成して南方無垢世界に生まれたとある說話に本づいた、宗教靈驗說話である。そして本曲（又はその原形）の作者は恐らく日蓮宗の僧侶で、祖師の高德功力を宣傳するの目的で、新しくこれを創作したものでなからうか。大和田建樹氏は謠曲評釋に日蓮上人傳記の文といふものを揭げて居られるが、龍女の成佛と法華經、法華經と日蓮、この二つの結合によつて本曲が生まれたものであらうと思ふ。

【概評】一般に謠曲は佛敎の影響を受けたことが著しく、古の英雄佳人も草木の精魂もみな經文の讀誦回向によつて成佛し、鬼畜異魔も修法祈禱によつて退散してゐるのであるが、それは謠曲大成時代の時代思潮の然らしめるところ、戲曲の歸結解決として佛敎的方便を用ゐたまでで、謠曲の主題、戲曲としての興味は、別趣な文藝的意義の深いものにあるのである。勿論數多くの謠曲の中には宗敎宣傳を第一義としたらしいものがあるが、それらは大抵謠曲としては拙いものばかりである。本曲の如きも、宗敎的意義の濃いものであるが、この種のものの中では、靈驗說話に徹底したところに却つて特殊な味ひを出してゐる。殊に後ジテが一度龍女として現れ、中途天女に變るのは、他に類例のない思ひ切つた脚色法で、觀衆に新しい興味を與へてゐるのである。

【一】

後見一疊臺を地謠座前に出す。

ワキ日蓮上人、花帽子・着附白綾・紫水衣・差貫・込大口・掛絡・數珠・扇の裝束にて經卷を懷中し、ワキヅレ從僧二人、角帽子・着附無地熨斗目・縷水衣・白大口・腰帶・扇・數珠の裝束にて出で、ワキは一疊臺に上りて坐し、ワキヅレはその前に下に居り、

ワキサシ『それ世尊の教法は。五時八教に配立し。權實二教に分てり。さる程に滅後の弘經も正像

【一】

前段

舞臺は身延山で、ワキ日蓮上人ワキヅレ從僧を隨へ、勤行の體で登場。

日蓮 抑も釋迦牟尼佛の敎理說法は、御一代を五期に分け、化儀四教・化法四敎の八つに配當して宗義を立てられ、方便・妙法の二つに分たれたのである。その後釋尊寂滅の後は、佛法弘布の程度が正法時・像法時・末法時と次第に變へて來たの

【一】

○世尊―釋迦牟尼佛をいふ。世尊とは佛十號の一で、智斷恩の三德を圓滿に具足して、よく世間を利し、世に尊重せられる意。

○五時八教―本曲の末に記す。

○配立―配當して宗義を立てること。

○權實二教 本曲の末に記す。

○滅後の弘敎―釋迦入滅後の佛法弘布。

末に次第して。今後五百歳の時なれば。時機に叶ふこの妙經を弘めつつ。國土安全の勸めをなせしその甲斐の。身延の山に引き籠り。寂寞無人の樞の內には。讀誦此經の聲絕えず。一心三觀の窓の前には。第一義天の月まとかなり

地上歌「尾上の風の音までも。尾上の風の音までも。皆法の聲ならずや。落ち瀧つ瀨の響も唯懸河流瀉の御聲にて。鷲の御山も餘所ならず。八卷の法の花の紐。時知る風にたち渡る。身の浮雲も晴れぬれば心の月ぞ、さやかなる心の月ぞさやかなる

ワキ「われ法華修行の身なれば。讀誦禮讚を怠る事なきところに。いづくともなく女性の絕えず詣で候。今日も亦來りて候はば。名を尋ねばやと思ひ候

○正像末後五百歲—本曲の末に記す。
○時機に叶ふ—法華經勸發品に「爾時普賢菩薩白レ佛言、世尊於二後五百歲濁惡世中一、其有下受二持是經典一者上、我當下守二護除二其衰患一令中得二安穩一上」とあるをいふ。
○妙經—妙法蓮華經の略。
○その甲斐の—法華經を說く效ありといふを國名にいひかけた。
○身延の山—甲斐國南巨摩郡身延山にあり、日蓮こゝに隱棲し、弘安四年一宇を建立して、身延山久遠寺と號した。日蓮宗の總本山。
○寂寞無人、一心三觀、第一義天—本曲の末に記す。
○懸河流瀉—釋迦說法の雄辯を譬へていふ。
○鷲の御山—天竺の靈鷲山。釋迦が法華經を說いた山。
○八卷の法の花—法の花は法華經を和らげていつたもの。八卷は法華經の卷數。
○時知る風—春の時節を知つて吹く風。紐を解きを時にいひかけた。
○身の浮雲も—「身延山御書」日蓮上人の歌「立ち渡る身の浮雲も晴れぬべしたえぬ御法の鷲の山風」を引いた。浮雲は心の迷妄の譬。
○讀誦禮讚—經文を讀む事と、佛德を讚美する事。

であるが、今は丁度彌勒菩薩が佛法を守護せられる後五百年の時代で、佛法再興に都合のよい時機であるから、この妙法蓮華經を弘めて、國土を安穩にするやうに勸說したところ、その甲斐があつて、今はこの身延山に引籠つて、人もゐない寂しい所で絕えず法華經を讀誦し、一心を空假中の三様に觀念してゐると、かの澄み渡つた月のやうな大乘至極の、涅槃の妙理を悟るのである。かうして居れば、山上を吹く風の音までが皆說法の聲のやうに聞え、落ちくる瀧水の響は、水を流すやうに御雄辯な釋尊の御聲のやうに思はれ、この山がさながら釋尊御說法の靈鷲山と思はれるのである。まことに法華經八卷を繙く時には、ありがたい御敎が知られて、迷ひの夢が晴れてしまふので、宛も風に浮雲の拂ひのけられた月のやうに、心が淸々するのである」

と謠ふと、

日蓮「自分は法華經を修行してゐる身であるから、朝夕經文の讀誦・佛德の禮讚を怠らずしてゐるところ、何處からとなく女性が始終參詣に來ることだ。今日も來たならば、一體どういふものか、名を尋ねて見ませう」

と獨言のやうにいふ。

【三】

次第の囃子にて、シテ女、面深井・鬘・鬘帶・襟淺黄・着附摺箔・唐織壷折・縫箔腰卷・扇の裝束にて、常座に出で囃子座の方に向きて、

シテ次第「法の教へを身に受けて。法の教へを身に受けて誠の、道に入らうよ

地取に正面に向き、

シテサシ「ありがたの靈地やな。漢土にては四明の洞。和朝にてはわが立つ杣と詠じけん。御山もいかでまさるべき。さて又大白波木井の河風に。波の立居もおのづから。隨緣眞如を。顯せり

シテ下歌「谷の戸出づる鶯も。法を唱ふる花の枝。

上歌「來ても見よ。身延の山の深雪だに。身延の山の深雪だに。春を迎へて消えぬれば。これも慧日の、光かと思へばわが作りにし罪科も。かくこそ消えめ賴もしやと。信心はいやましにげにありがたき、御山かなげにありがたき御山かな

「かくこそ消えめ」と右の方に向きて二三足出で、「げにあり

【三】

○四明の洞―支那浙江省寧波府にあり、佛法興隆の地。

○わが立つ杣―比叡山をいふ。傳敎大師がこゝに根本中堂を建立した時に「阿耨多羅三藐三菩提の佛たち、わが立つ杣に冥加あらせ給へ」(新古今集)と詠んだ歌を指す。

○大白波木井―大白、波木井、ともに身延山境内の地名。

○隨緣眞如―不變眞如の對で、眞如はもと不變のものであるが、外來の緣によつて萬有を生起すること、譬へば不變の水が風の緣によつて波浪を起すことをいふ。

○谷の戸出づる―身延七谷の一に鶯谷といふのがあるので、その名を含めていつた。

○法を唱ふる―鶯の囀る聲の「法々華經」と聞えるのをいふ。

○慧日の光―佛の智慧を日に譬へていふ。普賢觀經に「衆罪如二霜露一慧日能消除」

【三】

シテ龍女、里女の姿で登場。

里女「佛法の御敎を戴いて、誠の悟りの道に入りませう」

と次第を謠つて心持を述べ、

里女「あゝこの所はほんとにありがたい靈地です。支那では四明の洞、わが日本では傳敎大師の『わが立つ杣に冥加あらせ給へ』とお詠みになつた比叡山が無二の靈場といはれてゐるけれど、どうしてどうして、この御山には叶はないでせう。この大白や波木井の河風に波の立つ姿までが、外緣によつて現象を生ずる隨緣眞如を現してゐることです。さうだ、人間ばかりではない、谷を渡る鶯までが『法華經』と鳴くのです。

論より證據、この身延の山の深雪でさへ、春になると消えてしまふのですから、これを見ても、日光のやうな佛の智慧が想像せられ、私たちの作つた罪業もこの雪のやうに消えるだらうと賴もしく思はれ、愈ゝ信心の增してくるのは、ほんとにありがたいことです」

と獨言をいひながら日蓮に近づいてくる。

がたき」ともとに歸りて正面に向く。ワキシテに向き、

【三】

ワキ「怪しやなこの山は。花より外は知る人もなき庵なるに。そもや女性の御身ながら。御經讀誦の折々に。歩みを運び花水を佛に捧げ給ふ。さておことは如何なる人にてましますぞ

シテ（ワキへ向き）「これはこのあたりに住む者なるが。かくありがたき御法に逢ふ事。盲龜の浮木優曇華の。花待ち得たる心地して。悦びの涙の露。『かかる折しも縁を結び。後の世の闇を晴らさずは。又いつの世を松の戸の。明暮歩みを運びつつ。上人に結緣をなすばかりなり

ワキ『げに奇特なる信心かな。この法華經を保ちぬれば。若有聞法者。無一不成佛と說き給ひて。二乘闡提惡人女人おしなめて。成佛する事疑ひなし

【三】

○花より外は―金葉集行尊僧正の歌「もろともにあはれと思へ山櫻花より外に知る人もなし」の詞を借りた。

○盲龜の浮木―事の困難なる譬。法華經妙莊嚴王本事品に「佛難レ得レ値、如二優曇波羅華一、又如三一眼之龜値二浮木孔一」

○優曇華―佛說に引く想像上の花で、三千年に一度花を開き、この花が開けば世に輪王出で、又天下に佛のある時にはこの花が開くといふ。靈瑞華と譯す。

○かかる折しも―露のかかるといひかけた。

○緣を結び―佛道に入るをいふ。

○後の世―死後。

○松の戸の―いつの世を待つを松にいひかけ、戸の開くを明暮にいひかけた。

○若有聞法者―法華經方便品の偈。「若しも法を聞く者あらば一として成佛せざるはなし」と訓む。

○二乘―自利のみで利他なく、佛果の大菩提を求めない聲聞乘と緣覺乘。

○闡提―不信と譯す。佛法を信じない者。

【三】

日蓮「どうも變だ。この山は花より外に知るものもない所だのに、自分が御經を讀誦してゐる折々に、女性の身でありながら、こゝへ來て花や水を佛にお上げになるが、一體そなたはどういふ人なのです」

里女「私はこの邊に住んでゐる者ですが、このやうなありがたい御教を受けることの出來るのは、盲目の龜が浮木を得たやうな、三千年に一度咲くといふ優曇華の花を見つけたやうな心持がして、悦びに涙が流れるのでございます。そして、このやうな機會に佛緣を結んで、死後の闇路を照らさなければ、いつになつても成佛することは出來ないと思ひ、朝夕こゝへ參つて、上人に佛緣を結んでゐるのでございます」

日蓮「それは實に結構な御信心だ。この法華經を信心すれば、經文にも「若しこの法華經を聞く者であれば、いかなる者でも成佛出來ないことはない」と仰せられて、利他の考のない聲聞乘や緣覺乘、不信な闡提、或は惡人乃至女人に至るまで、すべて成佛するに違ひないのです」

【四】

○草木國土悉皆成佛—「一佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛」の句を引いた。

○久遠劫—太古といふ意。劫は限りのない年月。法華經壽量品に「我實成佛已來、無量無邊百千萬億那由他劫」

○初成道—成道は化佛八相の第六で、菩提樹下金剛座上で無上菩提を成ずる相を現す事。

○華嚴の朝より般若の夕に至るまで—釋尊五時のうち第一の華嚴より第四の般若までの方便敎をいふ。

○抑止在懷し—一乘眞實の敎を說きたいと思ふ心を抑へ止めて、心中に藏めて置く意。

○一乘—一佛乘の略。一切衆生をして悉く成佛せしめる眞實大乘、法華經をいふ。

○十界—地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛の十で、一切有情を分類した稱。

○差別まちまち—法華に至つて初めて十界のもの悉く成佛することが出來るのであつて、法華以前の經では、菩薩界の外皆自界に止まらなければならないのをいふ

シテ『さては殊更ありがたや

地上歌『その名をだにもまだ聞かぬ。その名をだにもまだ聞かぬ。御法を既に保つまで。いかで契りを結びけん。げに賴もしき折からや猶も女の佛となる謂れを示しおはしませ

【四】

ワキ「なかなかの事草木國土。悉皆成佛の法華經なれば。女人の助かりたる所をも語つて聞かせ候べし

シテ次のクリに眞中に出で下に居る。

地クリ『抑も法華經といつぱ。釋尊久遠劫のその昔。初成道の時悟り得給ひし。妙法華經なり

ワキサシ『然るに華嚴の朝より。般若の夕に至るまで

地『抑止在懷し給ひて。種々の方便機に隨ひ。終に一乘を說き給はねば。十界差別。まちまちな

里女「さう伺へば、愈々ありがたいことに存じます。このやうなありがたい御經があらうとは、まだその名前さへ聞いたことがありませんのに、知らないでゐて、どうしてまあ、このやうに深く信心するやうな佛緣を結んだことでございませう。ほんとに賴もしいことでございます。どうかなほこの上、女人が成佛することをお諭し下さいませ」

【四】

日蓮「よろしい、法華經は草木國土まで一切成佛せしめるものだから、勿論女人も成佛する。その女人の成佛した話を話してあげよう」

日蓮「さてこの法華經と申すものは、釋尊がずつと遠い昔初めて無上菩提心を成就せられた妙法華經である。ところが、釋尊第一次の御說法華嚴から第四次の般若に至るまでは、この一乘眞實の御敎を外に出さず、深く心中にお藏めになつて、その折々に隨つて方便の敎をお說きになつたのである。それで、もし最後にこの一切衆生悉皆成佛の妙法華經、一乘敎をお說きにならなければ、地獄・餓鬼・畜生など十界の有情は、成佛することが出來ず、もとの形に留まらなければならなか

○女は外面は菩薩に似て——寶物集に華嚴經の句として「女人外面如二菩薩一内心如二夜叉一」といふ。菩薩は佛の次位にあるもの、夜叉は暴惡と譯す。
○陸奥の——經文の内に滿ち、たりといひかけて、大和物語(拾遺集にも)平兼盛の歌「陸奥の安達が原の黑塚に鬼こもれりといふは眞か」を引いた。委しくは「安達原」解說參照。
○荒れたる宿の——伊勢物語に、ある宮腹の女どもの事を戯れて、男の詠んだ歌に「葎生ひて荒れたる宿のうれたきはかりにも鬼のすだくなりけり」とあるを引いた。「うれたく」は氣味が惡いとの意。
○よみしも女の事とかや——以上の二歌は女を鬼に譬へて詠んだものであるといふ
○松山や——いつの時を待つ、を松にいひかけ、後拾遺集清原元輔「契りきなかたみに袖をしぼりつゝ末の松山波こさじとは」の歌詞を借りた。
○悔の八千度——古今集閑院の歌「さきだゝぬ悔の八千度悲しきは流るゝ水のかへりこぬなりけり」を借りた。

り

（居クセ）

地クセ『さる程に女人は。外面は菩薩に似て。内心は。夜叉の如しと嫌はれし。その言の葉はもろもろの。經の内にし陸奥の。安達が原の黑塚や。荒れたる宿のうれたきに。假にも鬼のすだくなると。詠みしも女の事とかや。かかる憂き身の浮かまん事いつの時をか松山や。袖に涙の波越えて。作り重ねし罪科を。悔の八千度身をかこち。佛の御法の言の葉さへ。恨めしとのみ歎きけり

ワキ『然るにこの法華經は

地『佛七十餘歲にて。始めて說かせ給ひしに。そよや一味の法の雨。等しく灑ぐ潤ひに。敗種の二乘闡提も。皆々同じ悟りを得。殊に文殊の敎へにて。龍女は須臾に法を得て。この世ながらの

つたのである。さて又、女人と申す者は『外面に柔和な菩薩のやうで、内心は恐ろしい夜叉のやうだ』と嫌はれたもので、この事は色々の經文にも度々書き記されて居るのである。經文ばかりではない、和歌に——

『陸奥の安達か原の黑塚に、鬼こもれりといふは眞か』

『葎生ひて荒れたる宿のうれたきは、かりにも鬼のすだくなりけり』

などと詠まれた、鬼も女の事を指してゐるのだといふことである。女人はこのやうに情ない身の上で、いつ成佛することが出來るか、誠に果敢ないことで、たゞ涙に咽びながら、自分の作つた罪業を深く後悔し、わが身を歎いては、佛が女人を罪業深いものだと仰せられたお言葉をさへ恨めしく思つて、たゞ悲歎にくれるばかりであつたのである。

ところが、この法華經は釋尊が七十餘歲に至つて始めてお說きになつたのであるが、この御經に於て、ありがたい慈悲の雨は一切の有情に灑がれ、佛果を得る見込のなかつた聲聞業・緣覺業も、不信心の闡提も皆等しく悟りを得、殊に文殊菩薩の御敎によつて、八歲の龍女も忽ちに

○佛の御法の言の葉さへ―女人を罪業深しとする教をいふ。
○佛七十餘歲にて―法華經は釋迦七十二歲の時から八年間の說法であるといふ。
○一味の法の雨―法華經藥草喩品に「佛平等說、如二一味雨一」
○敗種の二種―本曲の末に記す。
○文殊の敎へにて―法華經提婆達多品に、文殊菩薩の敎化によつて、婆竭羅龍王の女八歲の龍女が成佛したといふ。
○本の覺りの古里―本覺の都、淨土。
○錦の袂―「錦を着て故鄉に歸る」といふ諺により、前の故鄉の語を承けて錦の袂といつた。
【五】○妙典―法華經をいふ。
○唐絲の一筋に―經を說くを、解くにかけて、唐絲を呼び起し、絲の緣で一筋にといつた。
○三熱―龍蛇の受ける三つの熱い苦惱。一は熱風・熱砂が皮肉骨髓を燒くこと、二は惡風が起つて居所・衣飾等を燒くこと、三は金翅鳥が來て龍の子を食ふこと長阿含經に見ゆ。

身を捨てず。本の覺りの古里に。立ち歸る有樣や。錦の袂なるらん

【五】

地ロンギ「この妙典の理を。とく唐絲の一筋に。仰ぎて保ち給へや

シテ「ありがたの御事や。さては妾も隔てなき。御法の水を手に掬び。絕えず苦しき三熱の。焰を早く免れん

地「そも三熱の苦しみを。免るべしと宣ふは。さては御身は靈神の。假に女となりたるや

シテ「今は何をか包むべき。われは七面の池に。住む月並の數知らぬ。年經たる蛇身なり

地「さらば懺悔のその爲に。もとの姿を見せ給へ

シテ「恥かしながら報恩に。ありし姿を現さんと

地「夕風も烈しく（とシテ立ち）。立つや黑雲の（と正面先を見渡し）。行方も早き雨の脚。踏み轟かし鳴神の。

悟りを開き、この世ながらの身で、そのまゝ極樂淨土に歸ることが出來たのである。その時は龍女もさぞ錦を着て故鄉へ歸るやうな嬉しい氣持がしたことであらう」

【五】日蓮「このやうにありがたいものであるから、よく妙法華經の理を悟つて、專心御信心なされい」

里女「ほんとにありがたいことでございます。それでは私も他の者と同じやうに佛の御慈悲を受けて、始終苦しんでゐる三熱の焰から免れることが出來ませう」

日蓮「何といはれる「三熱の苦しみを免れる」といはれる所を見ると、それでは、そなたは靈神がかりに女の姿となつて現れて來られたのではありませんか」

里女「今は何を隱しませう。私はあの七面の池に住んで、永い年月を經た蛇なのです」

日蓮「それでは、懺悔の爲にもとの姿を見せて下さい」

里女「お恥かしながら御恩報じの爲に、もとの姿をお見せしませう」

といふや、夕風が烈しく吹き起り、黑雲が湧き立ち、大雨が降り、雷が鳴り

稍光してすさましき。音にまぎれて、失せにけり音にまぎれて失せにけり

轟き、電が頻りに光つて、もの凄い光景となつた、その騒ぎに紛れて、今の女の姿は消えてしまつたのである。

と仕手柱際にて身をかゞめ直して中入。

【間】 狂言能力、能力頭巾・着附縞熨斗目・水衣・括袴・脚半の装束にて名乗座に出で、

狂言「かやうに候者は。身延山日蓮上人に仕へ申す能力にて候。唯今是へ出づる事餘の儀にあらず。誠に當御山と申すは。天竺にては靈鷲山。漢土にては四明の洞。我朝にてはわが立つ杣と詠じけん。比叡山にも勝る靈地なり。然る處に。上人忝くも一切衆生を引導せんと。釋尊成道の御時。初めて悟り行じ給ひし。妙法華經を説き給ふ。然れども一切衆生是を無益せられば。上人寂寞無人の窓の内に閉ぢ籠り。この御經を怠り給はず。心を澄ましおはします折節。いづくともなく女性一人。毎日閼伽の水を運び。上人を禮拜し。ありがたや願はくは女人成佛の緣を示し給へとぞふ。その時上人。女は外面菩薩と見えて内心夜叉なれば。なか〳〵成佛得難しと宣ふ。然れどもなんぼう限りなき世界のありがたき事を示し給へば。その時女人悟りを得て。ありがたや今は何をか包むべき。われ誠はこの七面の池に住む大蛇なるが。唯今上人の示しによりて成佛せんこと疑ひなし。いで〳〵懺悔の爲眞の姿を現すべしといふかと思へば。雨の脚雲にかき紛れ姿は失せて候。上人彌〻御經を怠り給はず。御示しあらうずるとの御事なり。皆々罷り出で御拜み候べし。ヒツカリ〳〵。ありや〳〵心あるは〳〵。南無妙法蓮華經。〳〵

といひて狂言は引く。

【六】 ワキ上歌〈待謠〉かかる不思議に逢ふ事も。かかる不思議に逢ふ事も。唯これ法の力ぞと。心をすま

【六】 後段

日蓮 このやうな不思議に逢ふ事も、全く佛法の力だ。

○七面の池—身延山の西七面山の山頂にある池。この山に日蓮の祈禱した山神七面明神がある。
○澄む月並の—池に住むを澄む月といひかけた。月並は年月の意。池の緣で波を含めていふ。
○夕風も—現さんと言ふを夕にいひかけた。
【間】
○ヒツカリ—電の形容。
○心あるは—奇特が現れるわ。
【六】

○ひたふるに―一向專心。

【七】

○慚愧懺悔―罪をさとり愧ぢて悔い改めること。

○瞻仰―仰ぎ見ること。

【八】

○於須臾頃便成正覺―法華經提婆達多品龍女成佛の條にある句「しばらくありて卽ち正覺(成佛)をなさん」と訓む。

しひたふるに。讀誦をなして待ち居たり讀誦をなして待ち居たり

【七】 出端の囃子にて、後ジテ龍女、面般若・白頭(大龍戴)・襟白・着附鱗箔・法被・紫大口・腰帶・扇・打杖の裝束にて橋懸一の松に出で、

地「あら不思議やな今までは。あら不思議やな今までは(シテ舞臺に入り)。妙に優なる女人と見えつるがさもすさましき。大蛇となつて。日月の如くなる眼を開き。上人の高座を幾重ともなくくるくると引き纏ひ(と舞臺を小廻りして眞中に坐し)。慚愧懺悔の姿を現し、高座へ頭をさし上げて瞻仰してこそ。居たりけれ

【八】 ワキ懐より經卷を出し披きて、

ワキ「その時上人御經を取り上げ

地「その時上人御經を取り上げ。於須臾頃便成正覺と。高らかに。唱へ給へば忽ち蛇身を變じつ

と、日蓮は心を澄まして專心法華經を讀誦して、かの大蛇の現れるのを待つてゐた。

【七】 後ジテ龍女登場。

すると、不思議や今までは奇麗な優しい女に見えてゐたものが、實にもの凄い大蛇となつて、日月のやうに輝く眼を開き、日蓮上人の高座を幾重ともなくくる／＼と取り卷いて、慚愧懺悔の姿を現し、高座に頭をさし上げて、上人を仰いでゐた。

【八】

その時日蓮上人は御經を取り上げて、

日蓮「――『暫くありて卽ち正覺成佛をなさん……』

と高らかに御經を唱へられると、忽ち

〇如我等無異—法華經方便品の句—我が如く等しく異なることなし」と訓む。我とは佛自らをいふ。
〇四種の花—曼陀羅華（白蓮華）、摩訶曼陀羅華（大白蓮華）、曼殊沙華（赤蓮華）、摩訶曼殊沙華（大赤蓮華）をいふ。
〇宜禰が鼓—宜禰は神主。こゝには七面明神の神主を指す。
〇たぐふなる—擬へた。
〇鈴の音—神樂の舞に用ゐる鈴の音。
〇白和幣—神樂の舞に手に執る幣。月も霜も白きといひかけた。
〇鷲の山いかに澄みける月なれば入りての後も世を照らすらん—續古今集題昭の歌。

つ

「忽ち蛇身を」とシテ後見座にくつろぎ「物着」。ワキこれを見送りて經を卷き懷中す。シテ、面增・天冠（立物月輪）・黒垂・着附箔・舞衣・紫大口の裝束に改め、幣を持ちて常座に出で、次の謠に合せて仕科。

地「忽ち蛇身變じつつ。如我等無異の身となれば。虚空に音樂聞えきて。宜禰が鼓にたぐふなる。報謝の舞の袂も。異香薫じて吹き送る。松の風颯々の鈴の音も更け行く夜半の月も霜も白和幣。ふり上げて聲澄むや

シテ「謹上（と常座にて幣を振り）

地「再拜

〔神樂〕

シテワカ「鷲の山。いかに澄みける。月なれば

地「入りての後も。世を照らすらん

に蛇身を變へてしまふ。

後シテ龍女、物着で天女の姿に變る。

龍女が忽ちに姿を變へて、經文に所謂「佛と變りのない身」（天女）となると、空には紫の雲がたなびき、大小紅白の蓮華が降り、音樂が聞えて、神主の打つ鼓のやうに聞える。そして、報謝の舞を舞ふ舞袖には妙なる香が薫り、吹きくる松風は颯々の音を立てゝ神樂の鈴のやうである。かくて夜も更け行けば、月も霜も白い、さういふ光景の中で、天女は霜の如き白幣を振り上げ、澄みきつた聲で、

龍女、——「謹上再拜」
と祝詞をあげて、

〔神樂〕
を舞ひ、

龍女、——「鷲の山いかにすみける月なれば、入りての後も世を照らすらん」
（西に隠れた後までもこの世を照らすとは、靈鷲山の月は何といふ尊いことであらう。——釋迦が入滅せられた後までも佛法がこのやうに弘布することは、何といふありがたい教であらう）と謡ひ、

【九】シテ『嬉しや妙經信受の功力。三身圓滿の妙體を受
地けて。和光同塵結緣の。姿を現し垂跡示現して。この山の。鎭守となつて。火難水難もろもろの。難を除き。七福則生の願ひを滿てしめ（と眞中にて下に居りワキに向き）。代々を重ねて衆生を廣く。濟度せんと。約諾かたく申しつつ（と立ち）。行方も白雲に。たち紛れて。虚空に上らせ。給ひけり

と仕手柱際にて留拍子を踏む。

【九】龍女「ほんとに嬉しいことだ。妙法華經を信心した功德の力によつて、法・報・應の三身を具足した立派な身となつた。この後は衆生利益の爲に權現となり、淨土よりこの地に來て、この山の鎭守の神となり、火難水難その他色々の難を除き、あらゆる幸福が直に生じるやうに、衆生の願ひを叶へ、この後いつまでも衆生を廣く濟はう」

と堅く約束をして、どことも知れず白雲に紛れて、空に上つてしまはれた。

【九】○信受　法を信じてその教を受けること。○三身圓滿―法報應の三身法身は眞如の本體、報身は眞如の理を證悟感得する色身、應身は衆生に隨應して種々變化示現する化身をいふ。圓滿は具足の意。○和光同塵―佛が本來の德光を和らげて、世俗の塵埃に交はり、衆生と緣を結んでこれを教化すること。○垂跡示現―佛が本地より假にこの世界に現れること。七面明神と現れる意。○七福卽生―この成語は見當らない。○行方も白雲に―行方も知らずといひかけた。

〔考　異〕

諸　流（觀　剛）

金剛流は左に記す貞享本に略同じ。

古謠本（貞享三年本）

【二】シテサシ「ありがたの靈地……御山もいかでまさるべき（貞先ひかしは天子かたけ。空につらなる靑巖朝日をかけ。西に七面の峯みちをさしはさむ。丹崖夕陽に映す。北には身延山。嶺そびえ松高うして。上求菩提の心を示す。南は鷹取山。谷ふかくり水ふかうして。下化衆生の姿を表せり）さて又大白……【四】クリ「抑も法華經といつぱ……妙法華經なり（貞にて。三世の諸佛の秘要の藏なれは。我等ごときの凡夫にとき聞せ。みちびかんとし給へ共。衆生の機緣しゆくせされは。とき給ふ事も更になし）。ワキサシ「然るに……ワクセ　さ

る程に……恨めしと歎きけり（貞け共。ワキ「眞をとかん時いたらねは。いたつらに人のまよひの浮雲に。邪正一如の月影も。雲かくれしてあらはれす。けにもさとりの道遠く。思ひをかくる葛城や。高間の山の嶺の雲。四十餘年のとしなみは。くるしひの海にたゞよひて。よる人もしらぬ人のみの。行末はたゞあしの葉の。葦は舟に似たれ共。難波の人もわたらぬに。又一乘の渡し舟。乘得ぬ事ぞ悲しき）。ワキ「然るに……

附記

○五時―天台宗で、釋尊一代五十年間の説教を年時の上から五つに區劃したもの華嚴時、阿含時、方等時、般若時、法華涅槃時をいふ。法華經信解品の譬より出づ。

○八教―天台宗で、化儀の四教と化法の四教とを合せて八教といふ。化儀の四教とは、釋尊の教化を形式より分類したもので、頓、漸、祕密、不定をいひ、化法の四教とは、教理の内容より分類したもので、藏、通、別、圓をいふ。

○權實二教―權は一時の機宜に適する方便。實は究竟不變の理法。實教とは一乘妙法華で、權教とはその他の教をいふ。

○正像末―佛の滅後佛法の行はれる程度を三期に分けた稱。卽ち佛入滅後五百年間は、佛道を修業し佛果を證悟する者の多い時で、これを正法時といひ、次の一千年間は修行する者はあるが佛果を證悟する者の少い時で、これを像法時といひ、その後一萬年間は修行する者も證悟する者もない時代で、これを末法時といふ。

○後五百歳―大集月藏經に佛滅後二千五百年間を五個の五百年に分けた最後の五百年をいふ。

○寂寞無人―法華經法師品に「獨在二空閑處一、寂寞無二人聲一、讀二誦此經典一、我爾時爲現二清淨光明身一」

○一心三觀―天台宗の觀法で、吾人の一心を空假中の三樣に觀念すること。空觀とは心は因緣生のもので實性空無であると觀ずること、假觀とは心は空無であるが森羅萬象の存するのは一心の現象であると觀ずること、中觀とは實性空無であるが現象があるのであるから、空でもなく有でもなく卽ち中であると觀ずること。

○第一義天―第一義空と同じく、大乘至極の涅槃の妙理を天に譬へたもの。

○敗種の二乘―聲聞緣覺の二乘が小乘の悟りに滿足して、佛果を證得すべき因種を持たないことをいふ。維摩經に「於二此大乘一已如二敗種一

源氏供養 観（寶 春 剛 喜）

解説

【能柄】 三番目 複式夢幻能

【人物】 **ワキ** 安居院法印、**ワキツレ** 同從僧（二人）、
前シテ 里女（紫式部の靈）、**狂言** 所の者、
後シテ 紫式部

【所】 近江國 石山

【時】 鎌倉初期 春（三月）

【作者】 能本作者註文には作者として世阿彌と河上神主（和州十二大夫先輩）との二說を掲げ、二百十番謡目錄には金春禪竹の作としてゐる。糺河原勸進猿樂記に寛正五年四月四日音阿彌の演じたこと、言經卿記に文祿四年三月廿六日本曲を註釋したことが見えてゐる。

【梗概】 安居院法印が石山觀音に參詣すると、その途に里女が呼びとめて「私は源氏物語を書いて、その供養をしなかつた罪により成佛出來ないから、物語の供養をして下さい、私もやがて參ります」といつて消え失せる。法印は怪しからぬことと思つたが、石山に詣でて回向

してゐると、その夢に紫式部が現れ出て、願文を捧げて法印と共にこれを讀み、舞を奏した。紫式部は實は石山觀世音の化現で、この世は夢であると知らせる爲の方便にこの物語を書いたのである。

【出典】これは安居院法印聖覺の作と傳へる源氏物語表白に據つたものである。この表白には和漢兩體があり、和文のものは湖月抄にも收められ、漢文のものは源氏物語願文と題して群書類從卷三百十三に載つてゐる。その和文のものを擧げると、

桐壺の夕の煙速かに法性の空に至り、帚木の夜の言の葉は遂に覺樹の花を開かん。空蟬の空しき世を厭ひて、夕顏の露の命を觀じ、若紫の雲の迎を得て、末摘花の臺に坐せしめん。紅葉の賀の秋の夕には、落葉をのぞみて有爲を悲しみ、花の宴の春の朝には、飛花を觀じて無常を覺らん。たま／＼佛敎に葵なり。榊葉のさして淨刹を願ふべし。花散里に心をとゞむといへども、愛別離苦の理を免るゝ例なし。唯すべからくは生死流浪の須磨の浦を出でて、四智圓明の明石の浦にみをつくし、關屋の行きあふ道を免れて、般若の淸きみぎりに赴き、蓬生の草むらを分けて、菩薩のまことの道を尋ねん。何ぞ彌陀の尊容をうつして、繪合にして松風に業障の薄雲を拂はざらん。生老病死の身朝顏の日影を待たん程なり。老少不定の境、少女子が玉葛かけても猶賴み難し。谷うち出づる鶯の初音も何か珍しからん。鳧雁鴛鴦の囀りには如かじ。籬にたはるゝ胡蝶の唯暫くの樂しみなり。天人聖衆の遊びを思ひやれ。澤の螢のくゆる思ひ常夏なりといへども、忽に智慧の篝火に引きかへて、野分の風に消ゆることなく、如來覺王の御幸に伴ひて、慈悲忍辱の藤袴を着、上品蓮臺に心をかけて七寶莊嚴の眞木柱のもとに至らん。梅枝の匂ひに心をとゞむることなくて、淨土の藤の裏葉をもてあそぶべし。かの仙洞千年の給仕には、若菜を摘みて世尊に供養せしかば、成佛得道の因となりき。夏衣たち居にいかにしてか一枝の柏木を拾ひ、妙法の薪となして無始曠劫の罪を滅ぼし、本有常住の風光をかゞやかして、聖衆音樂の橫笛を聞かん。恨めしきかなや、佛法の世に生れながら、家を出でて名を捨つる砌には、鈴蟲の聲ふりすて難く、道に入り飾をおろす所には、夕霧のむせび晴れ難し。悲しきかなや、人間に生を受けながら、御法の道を知らずして苦海に沈み、幻の世を厭はずして、世路を營まんこと。如かじ唯薫大將の香をあらためて、靑蓮の花房に思ひを染め、匂兵部卿の匂をひるがへしては、香の烟の雜ひとなし、竹川の水を掬びては煩惱の身をすゝぎ、紅梅の色をうつして愛着の心を失ふべし。待宵の更くるを歎きけん宇治の橋姬に至るまで、優婆塞が行ふ道をしるべにて椎が本にとゞまる事なかれ。北邙の野べの淡雪と消えん夕に、解脫の總角を結び、東岱の山の早蕨の煙とならん朝には、栴檀の陰に宿木とならん。官位を東屋の內にのがれて、樂み榮えを浮舟に譬ふべし。これも蜻蛉の身なり、あるかなきかの手習にも、往

生極樂の文を書くべし。夢の浮橋の世なり。朝な夕なに來迎引接を願ひ、南無西方極樂善逝、願はくは狂言綺語の誤を翻して、紫式部が六趣苦患を救ひ給へ。南無當來導師彌勒慈尊、必ず轉法輪の緣として、これをもてあそばん人を安養淨刹に迎へ給へとなり。

【概評】 外國文化を尊重して固有文化を輕視するのが、わが國古來の弊習であつた。支那文化が輸入せられて後、未だ西洋文化の入らない以前は、頻りに支那文化を尊重して、わが國民の思想感情を表現するにも、漢文學の形式に賴つて、所謂假名文字を用ゐることを嫌忌した。假名文學の中で、たゞ和歌だけは紀貫之が鬼神を感ぜしめるに足るものだと宣揚して以來、これを尊重して神佛に捧げ、進んでは、著名な歌人を神佛の化現と崇めるに至つたが、その他の文學、例へば物語小說の如きは、陰にこれに親しみつゝも陽にこれを擯斥して來た。そしてこの考へ方が佛教思想と結びついて、虛構の小說を作るものは、破戒の罪によつて墮獄の苦を受けるものと見做すやうになつた。世界に誇るべき大文藝を創作した紫式部も亦この厄に遭つたのである。平康賴の寶物集に、

まぢかく紫式部が虛言を以て源氏物語を作りたる罪によりて、地獄に落ちて苦患忍び難き故に、早く源氏物語を破りすてて、一日經書きて弔ふべしと、人の夢に見えたりけりとて、歌よみども寄りあひて、一日經書きて供養しけるは覺え給ふらん。

藤原信實の今物語にも、

ある人の夢に、その正體もなき影のやうなるが見えけるを、あれ何人ぞと尋ねければ、紫式部なり。空言をのみ多くしあつめて、人の心を惑はす故に、地獄に落ちて苦を受くる事いと堪へがたし。源氏の物語の名を具して、なもあみだ佛といふ發句に人々によませて、わが苦しみを弔ひ給へといひければ、いかやうによむべきかと尋ねけるに、

桐壺に迷はん暗もはかばかり南無阿彌陀佛と常にいはなん

とぞいひける。

このやうな說が信じられて、前揭の「表白」も出來たのである。

謠曲作者はこの說を信じ、殊に表白の文に興味を持つて、この曲を脚色したのである。由來女性は三從五障の罪業の深いものであると信じてゐる謠曲作者にとつて、女性の紫式部を地獄に陷れることは、さほど苦しいことでなかつたかも知れない。しかし、謠曲作者に一面わが古典文藝を殆ど極度まで尊重し、この物語の主人公光源氏を都率天から垂跡したものと觀(須磨源氏)、女性のしかも遊女である「江口」の君さへも、和歌に長じてゐた故を以て普賢菩薩の化現であることを認めてゐるのであるから、この大文藝作家紫式部を俗說の

まゝ墮獄の罪人として看過することは出來なかつた。そこで、本曲のキリに於て突如「紫式部と申すはかの石山の觀世音、假にこの世に現れ」たものだと解釋して、本曲の主想と甚しく矛盾した言說を立てゝゐるのである。

事實、本曲に前述の如き甚しい矛盾に陷つてゐるのであるが、作者の心を忖度すれば、作者自身の紫式部に對する見解はキリの一節にあり、それまで述べ來つた所も、源氏物語を最も貴重なる文藝と觀て、その大體を一般觀衆に知らしめようとする目的であつたのであらう。そしてこの物語の梗概を知るに最も都合のよい文として「表白」をとり、これが脚色法を舊來の俗說に從つて試みたものであらう。から解釋することによつて、本曲は正當に味得せられ、また本曲と「須磨源氏」とを併讀することによつて、源氏物語の横斷面と縱斷面とが知られ得るやうに思ふのである。

【一】

次第の囃子にて、ワキ安居院法印、角帽子・着附小格子・水衣・白大口・腰帶・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧二人、角帽子・着附無地熨斗目・縷水衣・白大口・腰帶・扇・數珠の裝束にて舞臺に入り向合ひて、

ワキ・ワキヅレ〽次第「衣も同じ苔の道。衣も同じ苔の道。石山寺に參らん

地取にワキは正面に向き、（ワキヅレは下に居り）

ワキ「これは安居院の法印にて候。われ石山の觀世音を信じ。常に步みを運び候。今日も又參らばやと思ひ候

といひて（ワキ・ワキヅレ立ち）ワキ・ワキヅレ向合ひ、

【一】　前段

最初の舞臺は京都で、ワキ安居院法印、ワキヅレ從僧を隨へて登場。

法印「苔に緣のある僧衣を着て、やはり苔に緣のある石山寺に參詣しよう」

と次第を謠つて旅の目的を述べ、

法印「私は安居院の法印です。私は石山の觀世音を信じ、いつも參詣してゐます。今日も又參詣しようと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

【一】

○衣も同じ苔の道―着る衣も、苔の衣、行く道も苔の道であるとの意。苔の衣は僧衣の喩。苔の道から石山を呼び起した。

○石山寺―近江國滋賀郡石山村にあり、本尊は如意輪觀音。

○安居院の法印―藤原通憲の孫、法印澄憲の子聖覺を指す。安居院は今京都西陣の寺內と呼ぶ地にあつた。昔比叡山延暦寺東塔竹林院の里坊で、聖覺はこの院主であつた。嘉禎元年三月六十九歲で寂。

○時も名も花の都—時も花の頃、地も花の都といふ意。花の都は京都の美稱。
○嵐につるる夕波—嵐の吹くにつれて立つ夕波。
○白河—南禪寺の北から賀茂川へ流れ入る川。
○音羽の瀧—京都清水寺の南崖にある。
○關のこなた—逢坂關のこなた。古今集在原元方の歌に「音羽山音に聞きつる逢坂の關のこなたに年をふるかな」
○有明—滿月以後の遲く出る月。
○鳰の海—近江國琵琶湖の別稱。影もあなたに匂ふといひかけた。
○ささ波や—志賀の枕詞。
○辛崎の一つ松—滋賀郡下坂本村にあり、近江八景の一。
○立つこそ水の煙—志賀の浦では鹽を燒かないが、水煙の立ちわたるのが、鹽燒く煙に似て面白いとの意。
【三】

ワキ・ワキヅレ「道行」時も名も。花の都を立ち出でて。花の都を立ち出でて。嵐につるる夕波の。白河表過ぎ行けば。音羽の瀧をよそに見て。關のこなたの朝霞。されども殘る有明の。影もあなたに鳰の海げに面白き、景色かなげに面白き景色かな

ワキ「音羽の瀧をよそに見て」と正面に向き正面先へ進み、またもとに歸りて旅の心を示し、ワキヅレと向合ひて、

ワキ・ワキヅレ「下歌」ささ波や志賀辛崎の一つ松。鹽燒かねども浦の波立つこそ水の、煙なれ立つこそ水の煙なれ

【三】

「浦の波立つこそ水の」と謡ひながら一同脇座の方へ行く。
シテ里女、面深井・鬘・鬘帶・襟白・着附摺箔・唐織着流・扇の裝束にて幕より出でながら、

シテ（呼掛）なうなう安居院の法印に申すべき事の候

ワキ脇座に立ちてシテに向き、（ワキヅレは地謡座前に坐す）

ワキ「法印とはこなたの事にて候か何事にて候

法印「時も花の頃、所も花の都を出立し、嵐につれて夕波の立つ白河のあたりを通り、音羽の瀧にも立ち寄らないで、逢坂關まで來て、都の方を見返ると、一面に朝霞が立ちこめてゐるが、有明の月影の殘つてゐる琵琶湖の方を見渡すと、いかにも面白い景色だ。向ふのあの辛崎の一つ松のあたりには、水煙が立つてゐて、藻鹽を燒く煙のやうに思はれる」

といつてゐるうちに、石山の附近へ來た譯で、舞臺は石山附近となる。

【三】

シテ筆者の靈、里女の姿を裝つて登場。

里女「もうしもし、安居院の法印にお願ひがございます」

法印「法印とお呼びになるのは私の事です

○われ石山に籠り―紫式部が石山寺に籠つて物語を書いたといふ傳説による。河海抄に見ゆ。間語參照。
○源氏六十帖―紫式部の作つた源氏物語をいふ。源氏物語は五十四帖であるのを一口に六十帖といつたのである。但し天台六十卷に擬して六十帖に作つたものであるとの說もある。細流にも「凡そこの物語は天台の本疏に擬すといふなり。然らば天台の本疏は六十卷なり。今この物語は五十四帖なり。不審あるに似たり」
○筆のすさみ―慰みに書いた文。
○名の形見―名を後の世まで殘す記念。
○かの源氏―源氏物語の主人公光源氏。
○供養―死者の追福を祈る佛事。
○奇特―殊勝。

ぞ

シテ「われ石山に籠り。源氏六十帖を書き記し。亡き跡までの筆のすさみ。「名の形見とはなりたれども。「かの源氏に終に供養をせざりし科により。浮かむ事なくさむらへば。然るべくは石山にて。源氏の供養をのべ。わが跡弔ひてたび給へと。この事申さんとて。これまで參りて候

と謠ひながら舞臺に入り常座に立つ。

ワキ「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。さりながら易き間の事供養をばのべ候べし。さて誰と志して回向申し候べき

シテ「まづ石山に參りつつ。源氏の供養をのべ給はば。その時われもあらはれて。「ともに源氏を弔ふべし

ワキ「嬉しやそれこそ奇特なれ。いで源氏を書き

か、何の御用です」

里女「私は石山寺に籠つて、源氏物語六十帖を書き記しました慰みの文章が、死んだ後まで名を殘す記念とはなりましたが、その主人公光源氏に供養をしないでしまつた罪により、成佛することが出來ませんので、ならうことならば、石山で源氏の供養をして、私の菩提を弔つて戴きたいと、このお願ひを致したい爲に、こゝへ參つたのでございます」

法師「これは意外の事を承るものです。しかし、お易い御用ですから、御供養を致しませう。ところで、どなたを施主として、回向するのです」

里女「まづ石山へお出でになつて、源氏の御供養して下さいますれば、その時私も參つて、御一所に源氏の回向を致しませう」

法師「それは御殊勝なことです。ところで、

しは

シテ「恥かしやこの身は浮世の土となれども

ワキ「名をば埋まぬ苔の下

シテ「石山寺に立つ雲の

ワキ「紫式部にてましますな

シテ「恥かしや。色に出づるか紫の

ワキ下に居る。

地「色に出づるか紫の。雲もそなたか夕日影さしてそれとも名のり得ずかき消すやうに、失せにけりかき消すやうに失せにけり

とシテ小廻して少し腰をかゞめ、消え失せる心にて靜かに中入。

【間】　狂言門前の者、着附段熨斗目・長上下・腰帶・扇・小刀の裝束にて名乘座に出で、

狂言「これは石山寺門前に住居致す者にて候。この間はいづ方へも參らず候間。今日は石山寺に參詣致さばやと存ずる。(ワキを見て)や。これなる御僧達はこの邊にては見馴れ申さぬ御事にて候が。いづ方より御參詣なされ候ぞ

ワキ「これは安居院の法印にて候。御身はこの所の人にて渡り候か

狂言「なか〳〵この門前の者にて候

源氏物語の作者は……」

里女「お恥かしいことに、この身は浮世の土となつたのですが……」

法印「いやしかし、その名はいつまでも傳はつてゐます」

里女「石山寺に名は殘りましたが……」

法印「さうすると、あなたは紫式部なのですな」

里女「お恥かしい、私がお分りになりましたか」

と名乘るか名乘らずに、向ふの紫色の雲に夕日影がさして、里女はかき消すやうに見えなくなつてしまつた。

○名をば埋まぬ—名は消えない。白氏文集に「遺文三十軸、軸々金玉聲、龍門原上土、埋レ骨不レ埋レ名」續後撰集慈鎭の歌に「埋もれぬ名をだに聞かぬ苔の下に幾度草の生ひかはるらん」

○立つ雲の—淨土には紫雲が立つといふので、紫にいひかけた。

○紫式部—式部丞藤原爲時の女で右衞門權佐藤原宣孝の妻。夫の歿後上東門院に仕へ、源氏物語を著した。長元四年五十七歳で卒。

○紫の雲もそなたか—紫雲のたなびく淨土も夕日のさす西方かとの意。夕日影のさすを、何某と名をさしていひかけた。

【間】

○この間語、大藏流にないので、和泉流に據つた。

ツキ「左様にて候はば尋ね申すべき事の候。近う御入り候へ

狂言「心得申し候。(眞中に出で下に居てさて御尋ねなされたきとは。いかやうなる御事にて候ぞ

ワキ「尋ね申すべきこと餘の儀にあらず。紫式部の御事。御存じ候はば語つて御聞かせ候へ

狂言「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこの邊に住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。初めて御目にかゝり御尋ねなされ候を。何とも存ぜぬと申すも如何にて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「まづ紫式部と申すは。勸修寺左大臣の六代の孫。良門の五代の孫女。越中守爲時の息女。一條の院上東門院に仕へ申す官女にてありたるげにて候。その上東門院と申すは。御堂關白道長の息女。一條の院の御后にて渡らせ給ふが。或時選子内親王より珍しき草子やあると御所望ありしかば。紫式部この寺に參籠申して。この事を祈願しけるが。折柄八月十五夜の月。湖水にうつりて心も澄み渡る折節。物語の風情そらに浮かびければ。佛前にありける大般若の斷紙を本尊より申し請け。まづ須磨明石の二巻を書きつけて候。その後罪障懺悔の爲に。大般若一部六十巻を自ら書いてこの寺に納め申し候。今に於て石山寺にある由承り候。最前申す如く。我等承り及びたる通り大方御物語り申して候か。如何やうなる子細により御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り祝着申し候。尋ね申す事餘の儀にあらず。御身以前に若き女性參られ候て。石山寺にて源氏の供養をのべよといひもあへず。そのまゝ姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。われ等推量申し候は。御僧貴くましますにより。紫式部の幽靈かりに現れ。御詞を交はし給はりたると存じ候間。末は御急ぎの御旅なりとも。暫くこの所

○選子内親王—村上天皇女十宮。大齋院と申す。源氏物語がこの内親王の御望みによつて書かれたといふこと、河海抄に見ゆ。

○うつぼ、竹取、住吉—いづれも源氏物語以前にあつた物語。但し住吉物語は今は傳はつてゐない。

に御逗留あつて。かの御跡を御弔ひあれかしと存じ候

ワキ「われ等も左様に存じ候間。かの御跡を懇に弔はうずるにて候

狂言「重ねて御用も御座候はば仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

ワキ・ワキヅレ立ちて正面に竝び石山寺に着きたる心にて下に居て、

【三】

ワキ『さて石山に参りつつ。念願の勤め事終り。夜も更け方の鐘の聲心も澄める折節に

ワキヅレ『ありつる源氏の物語。眞しからぬ事なれども

ワキ『供養をのべて紫式部の

ワキヅレ『菩提を深く

ワキ『弔ふべきなり

ワキ ワキヅレ 上歌（待謡）『とは思へどもあだし世の。とは思へどもあだし世の。夢にうつろふ紫の。色ある

【三】

○念願の勤め―自分の念願を果す爲めの佛事。

○ありつる―先程里女の話した。

○あだし世―はかない世。

○夢にうつろふ―世事の夢の如く移つて行くことと、紫色の夢に現れることと、移り變ることと。

【三】

後段

舞臺は石山寺。

法師「さて、かうして石山寺に着いて、自分の念願の佛事を終り、夜も次第に更けて、鐘の聲も澄み渡る頃であるから、先程聞いた源氏物語についての話は、餘りに不思議な、ほんとらしくも思はれないが、とにかく供養をして、紫式部の菩提を弔はう。――

それにしても、この世の中は實にはかないもので、あの有名な才女が世に榮えたのも、ほんの花の一時で、間もなく死ん

花も一時の。あだにも消えし古の。光源氏の物語。聞くにつけてもその誠賴み少き、心かな賴み少き心かな

といひてもとの座に歸り坐す。

【四】

一聲の囃子にて、後ジテ紫式部、前の裝束の唐織を脫ぎて、紫挽長絹・緋大口を着け、經卷を懷中して出で、橋懸一の松に立ち、

後ジテ一聲「松風も。散れば形見となるものを。思ひし山の下紅葉

地「名も紫の。色に出でて

と舞臺に入り常座に立ちワキに向ひ、

シテ「見えん姿は。恥かしや

ワキ「かくて夜も深更になり。鳥の聲をさまり。心凄き折節。燈火の影を見れば。さも美しき女性。紫の薄衣のそばを取り。「影の如くに見え給ふは。夢か現か覺束な

シテ「移ろひやすき花色の。襲の衣の下こがれ。紫

でしまつて、今ははや昔話となつたのだが、この源氏物語を讀むにつけても、この世の頼み難いことが知られることだ」

といつて諸經回向する態。

【四】

後ジテ紫式部登場。

式部「松風があの美しい紅葉を散らすのだと思へば、松風を恨めしく思はれるが、散りしいた紅葉の面白さを見れば、これは松風のなした形見と思はれて、なつかしい感じもする」

さあたりの景色を眺めながら進んで來て、

式部「わが姿をお見せするのが、お恥かしうございます」

法印はその姿を認めて、

法印「このやうに夜更けになり、鳥の鳴き聲もなく、もの淒い時に、燈火の光で見ると、大層美しい女が紫の薄衣の端をとつて、影のやうに立つて居られるが、これは夢であらうか、ほんとなのであらうか、實に變だ」

式部「紫色の襲衣を着てゐます私、はつき

○花も一時—古今集僧正遍昭の歌に「秋の野になまめき立てる女郎花あなかしがまし花も一時」

○その誠賴み少き—源氏物語が事實でない作り物語であることと、紫式部の現れ出る望みの少いことと。

【四】

○松風も散れば形見—松風が美しい紅葉を散らすのは憎いが、さて散つた紅葉の面白いのを見れば、これは松風のなした形見としてなつかしく思はれる。

○そばをとり—衣の端を手に取り。

○花色の—紫草の花の色。卽ち紫色の。

○下こがれ—心の中で思ひこがれるを、襲の下の色の濃いことに通はした。

○本のあらまし―本から豫期してゐた事。萩の本といひかけ「枯野の萩」を本の序としたのである。

○おきもせず―心を置かぬを起きにいひかけて、伊勢物語の歌「起きもせず寢もせで夜半をあかしては春のものとてながめくらしつ」を引いた。

○夢をも誘ふ―新後拾遺集平英時の歌「露をこそ拂ひもはてめうたゝねの夢をも誘ふ萩の上風」を借りた。

○光源氏―源氏物語の主人公。風前の燈火といふ語を文のあやにして、夢を誘ふ風、風に消ゆる燈火、燈火の光、光源氏と續けたのである。

【五】○布施―衆生の爲に財又は法を施し布くこと。轉じて僧の讀經に對する喜捨謝禮

の色こそ見えね枯野の萩。本のあらまし末通らば。名のらずと知ろしめされずや

ワキ「紫の色には出でずとあらましの。言葉の末とは心得ぬ。紫式部にてましますか

シテ「恥かしながらわが姿

ワキ「その面影は昨日見し

シテ「姿に今も變らねば

ワキ「互に心を

シテ「おきもせず

地「寢もせで明かすこの夜半の。月も心せよ。石山寺の鐘の聲。夢をも誘ふ風の前。消えしはそれか燈火の光源氏の、跡弔はん光源氏の跡弔はん

とシテ舞臺の眞中に出で、下に居てワキに向ひ合掌。

【五】

シテ「あらありがたの御事や。何をか布施に參ら

りと名乘らなくても、以前にお話しました樣子からお察しになれば、お分りになるぢやございませんか」

法印「紫の衣を着た人で、はつきりいはなくても以前の話具合から推察がつかうとは合點の行かないことだ、あゝさうく紫式部でいらつしやるのですか」

式部「お恥かしながら私でございます」

法印「なるほどその面影は昨日見たと同じ人だ」

式部「昨日と變りのない者でございます」

法印「それではお互に心置きなくこの夜中夜明かしをして……さうだ、この月も自分達の心を察して一夜中照つてくれるがよい。そしてこの石山寺で鐘を打鳴らしながら、風前の燈火のやうに果敢なく消えた光源氏の御跡を弔ひませう」

【五】

式部「ありがたうございます。何な御布施

○昔に返す―舞の袖を飜すをいひかけた。

○日もくれなゐの―薄衣の紐を日もに、日の暮れるを紅にいひかけて、紅の扇といつた。

○胡蝶のひと遊び―莊子齊物論に莊周が夢に胡蝶となつて舞ひ遊んだといふ故事による。

○現に返す―現世に歸りたいとの意。

せ候べき

ワキ「いや布施などとは思ひもよらず候。とてもこの世は夢のうち。昔に返す舞の袖。『唯今舞うて見せ給へ

シテ「恥かしながらさりとては。仰せをばいかで背くべき。いでいでさらば舞はんとて

ワキ『もとよりその名も紫の

シテ『色めづらしき薄衣の

ワキ『日もくれなゐの扇を持ち

シテ『恥かしながら弱々と（と立上り）

ワキ『あはれ胡蝶の

シテ『ひと遊び

地次第『夢のうちなる舞の袖。夢のうちなる舞の袖。現に返すよしもがな

地取に仕手柱際へ行き、

にさしあげませう」

法印「いや布施などは決して望みませぬ。それよりは昔の舞を舞うて見せて下さい」

式部「お恥かしいことです。でも、仰せに背くのも如何でございますから、では、舞つて見ませう」

といつて、その名前と同じ紫色の奇麗な薄衣を着て、紅色の扇を持ち、恥かしげになよなよと立ちあがつて、胡蝶のやうな舞を一さし舞ふ。

あゝ夢のうちに見るその舞の美しいこと。すべて過ぎ去つた昔の夢を現實に引戻すことが出來れば、どんなによからう。紫の花染にした色襲の袂の、舞ふがまゝに飜る樣が實に面白い。

○花染衣―露草の花で染めた衣。

【六】

○槿花一日―槿花（むくげ）が朝咲いて夕に凋むのと大差がない。和漢朗詠集白樂天の詩句に「松樹千年終是朽、槿花一日自爲レ榮」

○悲願―觀世音の大慈悲の誓願。

○妄執の雲―迷妄執着の心の離れ難いことを雲に喩へた語。

○逢ひ難き縁―安居院法印に逢つた縁をいふ。平家物語に「人身は受け難く、佛法には逢ひ難し」

○無明の眠り―煩惱迷妄の爲に正覺すべき本性の明を失ふこと。

シテ「花染衣の色襲

地「紫匂ふ。袂かな

〔イロヘ〕

を舞ひて囃子座前に出で、

【六】

シテクリ「それ無常といつぱ。目の前なれども形もなし

地「一生夢の如し。誰あつて百年を送る。槿花一日唯同じ

シテサシ「ここに數ならぬ紫式部。頼みをかけて石山寺。悲願を頼み籠り居て。この物語を筆に任す（と懐中より經卷を出し）

地「されども終に供養をせざりし科により。妄執の雲も晴れがたし

シテ「今逢ひ難き縁に向つて

地「心中の諸願を發し。一つの巻物に寫し。無明

〔イロヘ〕を舞ふ。

【六】式部「形こそないが、無常は目前に迫つてゐて、人の一生は宛も夢のやうなもので、誰一人百年の命を生き延びるものはありません。槿の花が一日で凋むのと大差はないのでございます。さてこゝに人數にも入らない私、紫式部が望みを起して、石山寺に籠り、觀世音の大慈悲を頼み奉つて、この物語を書きました。しかし、終にその供養をしなかつた罪により、迷ひが晴れず成佛することが出來ません。ところが、今ありがたい不思議な御縁で、安居院法印にお逢ひすることが出來て嬉しうございます。こゝに心願を起して、一つの卷物に願文を寫し、「迷ひの夢を覺ましたいと思ひます。光源氏の幽靈、どうぞ成佛なさいますやうに」

といつて願文を安居院法印に渡す。

○成等正覺―等正覺を成ぜよ、成佛せよ。

○抑も桐壺の―以下表白の文を抄出したのである。解說及び附記參照。

○法性―一切の迷妄を離脱した佛の境地。

○佛意に逢ひながら―表白には「佛教に奏なり」とある。

○愛別離苦―己の愛するものに別れる苦痛。

○四智圓明―四智は一に大圓鏡智、鏡に物の映るが如く明かに悟り得ること、二に平等性智、一切のものに

の眠りを覺ます。南無や光源氏の幽靈成等正覺

シテ「心中の諸願を」と經卷をワキに渡す、ワキ立ちて受取り、地謠座前に坐して「南無や光源氏の」と經卷を開き、シテ囃子座前に坐して合掌。次のクセにワキ經卷をシテに見せ、シテこれを見て共に讀む心。

地クセ「抑も桐壺の。夕の煙速かに法性の空に至り。帚木の夜の言の葉は終に覺樹の花散りぬ。

（ワキ經卷を拜して脇座に歸り坐し經を懷中す、シテこれより立ちて舞ふ）。空蟬の。空しきこの世を厭ひては。夕顔の。露の命を觀じ。若紫の雲の迎へ末摘花の臺に坐せば。紅葉の賀の秋の。落葉もよしやただ。たまたま。佛意に逢ひながら。榊葉のさして往生を願ふべし

シテ「花散る里に住むとても

地「愛別離苦の理免れがたき道とかや。ただすべからくは。生死流浪の須磨の浦を出でて。四智圓明の。明石の浦に澪標。いつまでもありなん。

（譯文）「抑も桐壺の更衣はもろくも亡くなられたが、速かに迷ひを離れて成佛せられた。帚木の巻にある雨夜の品定めは一時の戯れ言とはいへ、昧へば悟りを開く因となるであらう。空蟬といふ名の如く、この世が果敢ないものであることを知り、人の命は夕顔の君と同じやうに、露のやうなもろいものであるといふことを悟れば、若紫に緣のある淨土の紫雲に迎へられて、末摘花ならぬ極樂の蓮華臺に坐することが出來るのである。紅葉の賀の行はれる秋も、木葉の散るを見れば、たゞ世の無常が觀じられるばかりである。このやうに見るもの聞くもの、皆佛の教を示されてゐるのであるから、われらはよく悟りを開いて、榊葉をもつて神を拜すると同じ心持て、たゞ極樂往生を願ふべきである。人はいかほど花散る里のこの世に心ひかれてゐても、愛別離苦會者定離の理を免れることは出來ない。たゞ宜しく須磨の浦波のやうな生死の迷界に流浪しないで、佛果を得る四智を明かにするがよい。いつまでも明石の浦あたりにみをつくし心を碎くのは愚かなことである。たとへ蓬生の如き賤しい家に

対し是非の相を立てず平等一理を悟り知る智慧。三に妙觀察智、よく萬法を觀じて無碍自在に濟度利益すること、四に成所作智、その爲すべきことを成就圓滿すること。この四智に圓熟するを圓明といふ。
○業障—人間の罪障が心を掩うて正道の障りをなすこと。
○紫磨忍辱—紫磨は上等の精金。忍辱は恥辱を忍んで柔和であること。佛は紫磨黃金の肌に慈悲忍辱の衣を着るとの意。
○上品蓮臺—極樂に九等の階級があり、その上三級を上品といふ。
○心をかけて—かけては藤の緣語。
○七寶莊嚴の—金・銀・瑠璃・珊瑚・琥珀・硨磲・瑪瑙など色々の金玉（七寶の種類は經文によつて異同がある。こゝには無量壽經による）で立派に飾つた。
○身の來迎を願ふべし—常に極樂淨土に來迎引接せられるやうに願へとの意。來迎は菩薩聖衆が娑婆へ來て衆生を迎へ取ること。
○西方彌陀如來—西方淨土の教主阿彌陀如來。

唯蓬生の宿ながら。菩提の道を願ふべし。松風の吹くとても。業障の薄雲は。晴るる事更になし。秋の風消えずして。紫磨忍辱の藤袴。上品蓮臺に。心をかけて誠ある。七寶莊嚴の。眞木柱のもとに行かん。梅が枝の。匂ひに移るわが心。藤の裏葉に置く露の。その玉鬘かけしばし朝顏の光頼まれず

シテ『朝には栴檀の。蔭に寄生木名も高き

地『官位を。東屋の内に籠めて。樂しみ榮えを浮舟に譬ふべしとかやこれも蜻蛉の身なるべし。夢の浮橋をうち渡り。身の來迎を願ふべし。南無や西方彌陀如來。狂言綺語を振り捨てて紫式部が後の世を。助け給へともろともに。鐘うち鳴らして回向も既に終りぬ

と舞ひ上げて仕手柱際にてワキに向く。

【七】

地ロンギ『げに面白や舞人の。名殘今はと鳴く鳥の。

ゐても、たゞ〳〵菩提を願ふがよい。松風が吹いても心にかゝる業障の薄雲は晴れるものでない。金色の身に忍辱の衣を着給ふ佛を仰ぎ奉り、藤袴を着て極樂の上品蓮臺に迎へられることに心を用ゐ、色々の寶玉を以て眞木柱を飾り立てた極樂の宮殿に行くやうに祈るがよい。この世に心をかけ、梅が枝の匂ひなどに氣をとられるのは、藤の裏葉に置く露か、玉鬘ならぬ朝顏の露の玉のやうなもので、暫くも賴みにはならない。たとひこれまで栴檀の木蔭に宿るやうな立派な身分であらうとも、その高い官位を捨てて、小さな東屋に身を置き、この世の榮華は浮舟の如き定めないものと思ふがよい。誠に人の身は蜻蛉のやうな果敢ないものであるから、夢の浮橋のやうなこの世を去つて、淨土に迎へられるやうに願ふべきである。

南無西方淨土の教主阿彌陀如來樣、どうぞ戲れ飾りの言葉を以て物語を書きました科をお免し下さいまして、私の後世をお助け下さいませ—

と、紫式部が安居院法印と一所に鐘を打ち回向を終つた。

（舊演にはワキは願文を讀む心を示し、シテは中途から立つて舞ひその心持を表す）

夢をも返す袂かな

シテ『光源氏の御跡を。弔ふ法の力にて。われも生まれん、蓮の花の宴は賴もしや

地『げにや朝は秋の光

シテ『夕には影もなし

地『朝顔の露稻妻の影。いづれかあだならぬ。定めなの浮世や

【八】

地（キリ）『よくよく物を案ずるに。よくよく物を案ずるに。紫式部と申すはかの石山の觀世音。假にこの世に現れて。かかる源氏の物語（と眞中に行きてワキへ向き）。これも思へば夢の世と（右へ廻り）。人に知らせん御方便げにありがたき誓ひかな。思へば夢の浮橋も。夢の間の言葉なり夢の間の言葉なり

と仕手柱際にて開き留拍子を踏む。

○狂言綺語―遊戲虛飾の文。和漢朗詠集白樂天の句に「願以二今生世俗文字之業狂言綺語之過一、轉爲二將來世々讃佛乘之因轉法輪之緣一」。

【七】

○名殘今はと鳴く鳥の―夜明を告げる雞のこと。

○夢をも返す―夢をもとの現に返すことと、舞の袖を飜すことと。

○蓮の花の宴―蓮の花の緣に花の宴をいひかけた。花の宴は第八卷の卷名。

○朝顔の露稻妻の影―共にすぐ消えるもので、果敢ない人世の喩。

【八】

○假にこの世に現れて―紫式部が石山觀音の化身であるといふことは、河海抄にも―或は又作者觀世音の化身也」とあり、岷江入楚にも同樣のことを記してゐる。

【七】

法印「實に面白い舞でした。でも、はや夜明けを告げる雞が鳴いて、面白い舞を見てゐた夢もさめるやうです」

式部「光源氏の御跡を弔つた佛德により、私も同じく極樂に生まれることが出來ることと、賴もしう存じます。誠に浮世は定め難いもので、朝光つてゐたものが夕にはもはやその影もない、朝顏の露や稻妻の影と何の變りもないものでございます」

【八】

よく〳〵考へるに、この紫式部といふ人はかの石山觀世音が假にこの世に現れた權化であつて、源氏物語を書かれたのも、この世は夢だと人に知らせる爲のありがたい方便なのである。たゞ考へれば、夢の浮橋の物語そのものが夢の言葉なのである。

〔考　異〕

諸　流（五　流）

【五】シテ「あらありがたの御事や……　ワキ「いや布施などは……　シテ「恥かしながら……　ワキ「もとよりその名も……　シテ「色めづらしき……ワキ「日も紅の……　シテ「恥かしながら……　ワキ「あはれ胡蝶の。　シテ「ひと遊び（寶ナシ）

古諸本（光悦本）

【二】ワキ「これは思ひもよらぬ……さりながら（光ナシ）……供養をばのべ候べし（光さりながら）さて……

附　記

○桐壺の夕の煙―桐壺の卷は源氏物語の第一卷。この卷に源氏の御母桐壺更衣の亡くなられた事を記してあるので「夕の煙速かに法性の空に至り」といつた。

○帚木の夜の言の葉―帚木は第二卷。これに光源氏、頭中將等が雨の夜、女の品定めをした事を記す。「覺樹の花散りぬ」の覺樹は菩提樹で、正覺の喩。雨夜の品定めの詞も正覺を開く便となるであらうと解するのが穩當であらう。表白の原文には「帚木の言の葉は遂に覺樹の花を開かん」とある。「花散りぬ」と作つたのは後世の誤りであらう。

○空蟬―第三卷。空蟬を空しきの序とした。

○夕顔―第四卷。この卷に夕顔上が物怪に憑かれて急死するので、卷名を露の序として、命の果敢ないことをいふ。

○若紫―第五卷。卷名にかけて淨土の紫雲を出し、紫雲に乘つた聖衆に迎へられると續けた。

○末摘花―第六卷。卷名にかけて花の臺といふ。花の臺は極樂淨土の蓮華の座。

○紅葉の賀―第七卷。卷名にかけて、紅葉の秋と續けた。

○榊葉―第十卷。卷名をさすの序とした。

○花散る里―第十一卷。卷名より里に住むと續けた。

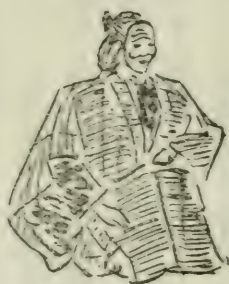
○須磨―第十二卷。上の「生死流浪の」は、生死の迷界に流轉するを、光源氏が須磨に配流せられたことに通はした。

○明石―第十三卷。四智の明らかにいひかけた。

○澪標―第十四卷。光源氏が配流の明石で身を盡し心を砕いたことにいひかけた。

○蓬生―第十五巻。巻名を賤しい家の意にかねて用ゐた。
○松風―第十八巻。
○薄雲―第十九巻。業障の雲にかけていふ。
○藤袴―第三十巻。藤は紫の緣、袴は衣の緣。
○眞木柱―第三十一巻。七寶で巻き飾つた柱と續け、極樂の宮殿といふ意に用ゐた。
○梅が枝―第三十二巻。巻名を梅の花に取做した。
○藤の裏葉―第三十三巻。巻名の葉より露、露より玉とつゞけた。
○玉鬘―第二十二巻。「かげしばし」は、鬘を髪にかけるを露の影暫しといひかけたのである。
○朝顔―第二十巻。巻名を盛りの短い朝顔の花に取做した。
○寄生木―第四十九巻。上の栴檀は香木。栴檀の木蔭に宿るを巻名の寄生木にいひかけた。
○東屋―第五十巻。文意、高い官位を見捨てて東屋に籠ると取るべきであらう。表白には「官位を東屋の内にのがれて」とある。
○浮舟―第五十一巻。巻名によつて、榮華の賴み難いことを波に漂ふ浮舟に譬へた。
○蜻蛉―第五十二巻。はかないものゝ喩へとした。
○夢の浮橋―最後の第五十四巻。賴み難い人世に喩へた。

絃上 觀（寶春剛喜）

解説

【能柄】五番目 劇的夢幻能

【人物】**ツレ**（前後）藤原師長、**ワキ** 師長從者、**ワキツレ** 同從者（二人）、**前シテ** 老翁（村上天皇靈）、**前ツレ** 老嫗（梨壺女御靈）、**後シテ** 村上天皇、**後ツレ** 龍神

【所】攝津國 須磨浦

【時】治承の頃（八月）

【異稱】「玄上」とも、「玄象」とも書いた。

【作者】二百十番謠目錄に金剛彌五郎の作とす。言繼卿記に天文元年五月二日本曲演能のことが見えてゐる。

【梗概】わが國に並ぶ者のない琵琶の名人太政大臣師長が支那に渡つて琵琶の奧儀を究めようと思ひ、都を出立して、須磨で海士の鹽屋に一夜を明かすこととした。そしてその老夫婦の願ひにより、琵琶を彈くと、折柄村雨が板屋を打つて調子を亂したので、老翁は苫で板屋を葺

き、その調子を調へた。師長は驚いて夫婦に一曲を所望すると、夫婦は琵琶琴を取つて越天樂を奏した。師長はその神技に感じ、渡唐を斷念して都に歸らうとすると、夫婦は引留めて、自分達は村上天皇と梨壺女御で、そなたの入唐を止めようと思つて現れたのであるといつて消え失せる。やがて村上天皇が出現遊ばされ、龍神を呼んで獅子丸の琵琶を取寄せ、これを師長に賜ふ。

【出典】 本曲の題名とした絃上は玄象とも書き、古くから著名な琵琶であつて、枕草子にも、

御前に候ものどもは、琴も笛も、皆珍しき名つきてこそあれ。琵琶はげんじやう、ぼくば、ゐで……。

とあり、今昔物語卷廿四「玄象琵琶爲レ鬼被レ取語」には、この琵琶を羅生門の鬼に取られたのを源博雅が取戻した傳說を記して、

今は昔、村上天皇の御代に玄象といふ琵琶、俄に失せにけり。これは世に傳はり物にて、いみじき公財にてあるを、かく失せぬれば、天皇極めて歎かせ給ひて、かゝるやむごとなき傳はり物の、わが代にして失せぬる事を思し歎かせ給ふも理なり。……この玄象は生きたるものゝやうにぞある。拙く彈きて彈きおほせざれば、腹立てゝ鳴らざるなり。亦塵居て拭はざる時にも腹立てゝ鳴らざるなり。其氣色現れて見ゆなり。或時には内裏に燒亡あるにも、人取り出さずといへども、玄象おのづから出でて庭にあり。これ奇異の事なりとなむ語り傳へたるとや。

このやうに靈異の名器とせられてゐたので、傳說は次第に發達し、江談抄・古事談・禁祕御抄・十訓抄などにも語り傳へられてゐるが、謠曲の原據となつたのは、平家物語卷七「青山の沙汰の事」(源平盛衰記卷三十一「青山琵琶流泉啄木事」にも同樣の記事があるが、平家物語の方が謠曲に近い)のやうで、次のやうに記してゐる。

昔仁明天皇の御宇、嘉祥三年三月に、掃部頭貞敏渡唐の時、大唐の琵琶の博士廉承武に逢ひ、三曲を傳へて歸朝せしに、其時玄象・獅子丸・青山三面の琵琶を相傳して渡りけるが、龍神や惜しみ給ひけん、波風荒く立ちければ、獅子丸をば海底に沈めぬ。今二面の琵琶をわたいて、我朝の帝の御寶とす。村上の聖代應和の頃ほひ、三五夜中の新月の色白くさえ、涼風颯々たりし夜半に、帝清涼殿にして、玄象をぞ遊ばされける。時に影の如くなる者御前に參じて、優に氣高き聲を以て唱歌をめでたう仕る。帝暫く御琵琶をさしおかせ給ひて、「抑も汝は如何なるものぞ、何處より來れるぞ」と仰せければ、答へ申していはく、「是は昔貞敏に三曲を傳へ候ひし、大唐の琵琶の博士廉承武と申す者にて候が、三曲の中に、祕曲を一曲殘せる罪によりて、魔道に沈淪仕る。今君の御撥音妙に聞え侍る間、參入仕る所なり。願くは此曲を君に授け參らせて、佛果菩提を生ずべき」由申して、御前に立てられたりける青山を取り、轉

手をねぢて、此曲を君に授け奉る。

【概評】 本曲は琵琶の名人藤原師長が音樂研究の爲に渡唐しようとしたのを、村上天皇の英靈が留め給ふといふのが主想で、この點「春日龍神」に、高僧明惠上人が入唐しようとしたのを、春日龍神が留め給ふのと、同様の想で、「白樂天」とともに、謠曲の排外思想を示した著例である。

その主材に、琵琶の名器絃上をもつて來たのは、「經政」に青山の琵琶を採り入れたのに似てゐるが、「經政」は大體平家物語の所說に從つてゐるのに反し、これは絃上の御主とも申すべき、最も御縁故の深い村上天皇をシテとし、平家物語の村上天皇に相當する人物として新しく藤原師長を捉へ、これをツレとし、平語の廉承武と同じやうにシテの天皇がツレの師長に祕曲を授け給ふこととし、更に平語の貞敏が渡唐したことに擬へて、師長が渡唐を思ひ立つことに構想したのであらう。そして、平語では廉承武が魔道の苦患を免れたいが爲に祕曲を授けたのに反し、これには天皇が國威を示す爲にお授けになつたとしたのは、謠曲作者の手腕といふべきであらう。

脚色は複式能の普通の形式を履んだもので、取立てゝいふべきものもないが、中入前に師長がシテ・ツレの名曲を聞きさして立去らうとするのは、面白い構想である。しかし、ロンギが重出してゐるのは、餘りよい感じを與へない手法である。

【一】

次第の囃子にて、ツレ藤原師長、風折烏帽子・襟白・着附厚板・單狩衣・白大口・腰帯・扇の裝束、ワキ師長の從者、着附厚板・法被・白大口・腰帯・扇・太刀の裝束、ワキヅレ同從者二人、着附無地熨斗目・素袍上下・扇・小刀の裝束にて舞臺に入り向合ひて、

ワキ ワキヅレ 次第「八重の潮路を行く舟の。八重の潮路を行く舟の唐土はいづくなるらん

地取にツレ師長正面に向き、

師長「抑もこれは太政大臣師長とはわが事なり

【一】

前段

舞臺は初め京都で、ツレ藤原師長、ワキ從者、ワキヅレ同じく從者を揃へての登場。

從者「波路遙かな海を渡つて行かうと思ふ支那は、一體どの邊に當るのであらう」

と次第、旅の心持を言ひ、

師長「自分は太政大臣師長である」

【一】

○八重の潮路—波路遙かな海路をいふ。

○太政大臣師長—左大臣頼長の子、保元の亂に連坐して土佐に流されたが、後召し還されて、治承元年太政大臣となる。同三年また平清盛の爲に尾張に流され、翌年赦されて歸洛、建久三年薨ず。年五十六。妙音院と稱し、琵琶の名人であつた。

○この君―師長をさしていふ。
○入唐―支那へ行くこと。
○須磨の浦―攝津國武庫郡にある。「松風」參照。
○いつの夕を都の―今日出立して、いつの夕にまた歸つて來て都を見んといふ意で、見を都にいひかけた。
○末に見えたる―遠くに見えた。
○山崎―山城國乙訓郡にある。
○波越す袖の―新後撰集惟宗忠宗の歌―波越ゆる袖の湊のうき枕うきてぞひとりねは泣かれける―を借りて湊川を出した。波越ゆる袖の湊とは、袖を湊として涙の波が越すとの意。
○湊川―今神戸市中を流れる川。もとは武庫郡の西部を流れてゐた。
○われは生田の―生田は神戸市の東三宮の東方の地。知らぬ方にも我は行くを生にいひかけた。
○洩り來る月は―生田の森を洩りにいひかけ、古今集讀人不知の歌「木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は來にけり」を引き、心づくしを筑紫にいひ

ワキも正面に向きて、

ワキ「さてもこの君天下に隱れなき琵琶の御上手にて御座候が。入唐の御望みましますにより。この度思しめし立ち道すがら名所の月をも御覽ぜん爲に。唯今津の國須磨の浦に御下向にて候

師長サシ「われはさていつの夕を都の空。まだ夜深きに旅立ちて。末に見えたる山崎も。過ぐれば後にはやなりて

一同また向合ひて、

ワキ ワキヅレ上歌「波越す袖の湊川。波越す袖の湊川。まだ知らぬ。方にもわれは生田の洩り來る月は木の間にて。心筑紫の旅の道。されどもこれは唐土の門出と思へば勇みある。駒の林をよそに見て。須磨の浦にも、着きにけり須磨の浦にも着きにけり

從者「さてわが主君師長公は天下に隱れ無かつた琵琶の御上手ですが、支那に渡りたいといふお望みがあつて、今度急に思ひ立ちになり、その途中名所の月をも眺めたいと思し召して、今攝津國須磨の浦へお出でになるのです」

と見物人に紹介し、

師長「自分は今都を出立すれば、また何日歸つて來て都を見ることが出來ようかと思ひながら、まだ夜深のうちに旅立ちをして、道を急ぐと、遠くの方に見えてゐた山崎もいつの間にやら通り過ぎて、はやそれも後の方に見返るやうになつた」

從者「かうして『波越す袖の湊』と詠まれた湊川も過ぎ、これまで自分達の來たこともない所を歩いて、生田森のあたりへ來ると、木の間を洩れ出る月影が淋しくて、旅のつらさがしみ〴〵感じられるのであるが、これが支那へ渡る門出の旅であると思ふと、自然氣も勇み立つて、駒林も通り過ぎ、はや須磨の浦に着いた」

と旅の様をいつてゐるうちに、一行は須磨に着いた態で、[illegible]

かけた。
○駒の林―勇む駒を朝鮮の高麗國及び武庫郡林田村の駒林にかけていふ。

○事の由―名所のいはれ。

【三】

○又力づく―杖によつて力をつくを杖をつくに兼ねていふ。
○拙き業を―賤しい業をするを須磨にいひかけた。

ワキ「心筑紫に旅の道」と正面に向き正面先へ出でまたもとへ歸りツレと向合ひて、一同須磨に着きたる心、上歌濟みて、ツレとワキとは正面に向き、

ワキ「御急ぎ候程に。これははや津の國須磨の浦に御着きにて候。（ツレへ向き）暫くこの所に御休みあり。事の由をも御尋ねあらうずるにて候。まづかう御座候へ

といひて、ツレ脇座へ行き床几にかゝり、ワキ・ワキヅレその次に下に居る。

【三】

一聲の囃子にて、シテ老翁、面笑尉・尉髪・襟淺黃・着附無地熨斗目・茶絓水衣・腰帯・腰蓑・扇の装束にて田子をかたげ、ツレ老嫗、面姥・姥髪・鬘帯・襟松葉色・着附摺箔・無色唐織・絓水衣の装束にて橋懸に出で、ツレ一の松、シテ三の松にて向合ひ、

シテツレ一聲「持ちかぬる。汐汲む桶の苦しきに。又力づく。老の杖

二人とも正面に向きて、

ツレ二句「拙き業を須磨の浦。シテツレ（向合ひ）「眺めに憂きや。忘るらん

従者「道をお急ぎになつたので、はや攝津國須磨浦にお着きになつた」

といつて師長に向ひ、

従者「暫くこの所にお休みになつて、名所の謂れをお尋ねになるがよろしいかと存じます」

一同、里人を待つ態で脇座に着く。

【三】

前シテ村上天皇老翁の姿で、前ツレを姥の姿をした梨壺女御を伴ひ、塩汲桶を持つて登場。

老夫婦「年寄りの身には、汐汲み桶が重くて持ちかね、苦しさの餘り復しても杖をつくことだ」

老婦「ほんとに賤しい業をしてゐることです」

老夫婦「でも、この須磨の浦の面白い景色を眺めると、辛い思ひも忘れられる」

○明石―播磨國明石郡にあり、須磨と竝稱せられる名所。
○紀の路の小島―紀伊國の方に見える小島といふ意。
○由良の戸―淡路と紀伊との間にある紀淡海峽の古名
○早舟―舟足の早い舟。
○吹上―和歌山市の西南部から雜賀村に至る邊の古名
追風の吹くを地名にいひかけたもの。
○住吉―今の大阪市住吉區にあり、須磨の對岸に當る。住吉の松のことは〔高砂〕に揭ぐ。
○富島―淡路國津名郡にある。
○昆陽―攝津國河邊郡にある。磯屋小屋を地名にいひかけた。
○難波―今の大阪市。難波の音を重ねて「名には」とつゞけた。
○繪島―淡路國津名郡にある。
○あは沖舟の―淡路潟に續けて阿波といひかけ、あは（あはれの意）沖舟のといつた。
○雨ごさめれ―雨にこそあるめれの約言。
○今一返り―もう一度。
○そよや―「さうだ」と何事か思ひ出した時に用ゐる語

といひて、二人とも舞臺に入り、シテは常座に、ツレは眞中に立ち、正面に向き景色を眺むる心にて、

シテサシ『面白や浦に入日は海上に浮かみ。須磨や明石の浦の樣。鹽燒く海士の心にも。さも面白う候なり

ツレ『南を遙かに眺むれば。雲に續ける紀の路の小島

シテ「由良の戸渡る早舟も。汐追風の吹上や

ツレ『遠浦ながら住吉の。松こそ見ゆれ海越しに

シテ『富島の磯や昆陽難波

ツレ『名には繪島といひながら

シテ『いかでか筆にも及ぶべき。シテツレ（向合ひ）『あら面白の浦のけしきや

地下歌『げにや面白き。海士の磯屋とや淡路潟。あは沖舟の漕ぎ來るは。雨ごさめれ今一返りも。汐汲めや人々。上歌『そよや陸奥の。そよや陸奥

老翁「いや面白いことだ。夕日の海上に浮かんだ須磨や明石の浦の景色を眺めては、賤しい鹽燒く海士の心にも、ほんとに面白く思はれることだ」

老媼「南の方をずつと遠く眺めると、雲に續いた紀伊あたりの小島が見えます」

老翁「由良の戸を渡る早舟の趣、汐追風の吹く吹上濱の眺め……」

老媼「遠い所ですけれど、海越しに住吉の松が見えます」

老翁「それから、富島の磯や昆陽や難波のあたりも見える」

老媼「あの繪島といへば、繪に描けさうですが……」

老翁「あの美しい眺めはとても描けるものでない」

老夫婦（この浦の景色を眺める態。）「實に面白い浦の眺めだ」

老夫婦「さうだ、海士の磯屋とは實に面白くいつたものだ。あの淡路潟あたりの眺め……おや、沖の舟が漕ぎ返して來るの

○千賀の鹽竈―陸前國宮城郡にある。〔融〕參照。
○名のみにて遠ければ―千賀は近の音に通ふが、それは名ばかりで、實際の距離は遠いとの意。
○伊勢島―伊勢の南部又は志摩國の古名。
○阿漕が浦―伊勢國津市の海岸。
○度重ねても―古今和歌六帖の歌「逢ふことをあこぎが島に引く網の度重ならば人も知りなん」を借りた。この歌のこと〔阿漕〕參照。
○田子の浦―駿河國富士郡にある。源氏物語葵巻「袖ぬるゝこひぢとかねて知りながら、おりたつ田子のみづからぞうき」を引いて「おりたゝん」と續けた。
○わくらはに―古今集在原行平の歌「わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつゝわぶと答へよ」を引いた。「わくらはに」は稀に、たまさかにの意。
○鹽屋―鹽燒く家。
【三】

の。千賀の鹽釜は。名のみにて遠ければ。いかが運ばん伊勢島や。阿漕が浦の汐をば度重ねても汲み難し、田子の浦の汐をばいざ下り立たんわくらはに。問ふ人あらば。侘ぶと答へてこの須磨の浦の汐汲まん須磨の浦の汐汲まん

シテ「阿漕が浦の汐をば」と少し前へ出で、「田子の浦の汐をば」と汐を汲む形をし、「この須磨の浦の」と仕手柱際に歸り田子を下して、ツレと向合ひ、

シテ「鹽屋に歸り休まうずるにて候

といひてシテ・ツレ入替り、シテは眞中に、ツレは脇正面に坐して、鹽屋に歸りたる心。（後見田子を引く）ワキ立ちて、

【三】

ワキ「鹽屋の主の歸りて候。御宿を借らばやと存じ候。（シテに向ひ）いかにこれなるは鹽屋の主にてあるか

シテ「さん候鹽屋の主にて候

ワキ「これに御座候は太政大臣師長公と申して。天下に隱れましまさぬ琵琶の御上手にて候が。

は、雨が降るのだな。さあ皆も一度汐水を汲むがよい。
さう〳〵、鹽汲といへば、陸奥の千賀の鹽釜が名高いが、名前はちかでも所は遠いのだから、とても汐を運ぶわけにはいかない。それから阿漕が浦も名所だが、これも度々汲むわけにはいかない。同じ名所のうちでは、田子の浦の汐は、波打際に下りて汲みたいものだ。いやそれよりは、行平が――
『わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に、藻鹽たれつゝわぶと答へよ』
（もしやひよつと、自分の事を聞いてくれる人があつたら、須磨の浦にしほたれて、淋しく暮らしてゐると答へてくれ）
といつたやうに、この須磨の浦の汐水を汲まう」

と汐水を汲んだ態で、

老翁「さあ鹽屋に歸つて休まう」

と師長等の方へ來る。師長の從者これを見て、師長に向ひ、

【三】

從者「鹽屋の主人が歸りました。御宿を借りませう」

といつて、老翁に向ひ、

從者「もうし、そなたは鹽屋の主人か」

老翁「さうです、鹽屋の主人です」

從者「こゝにお出でになるのは、太政大臣師長公と申して、天下に知れ渡つた琵琶

○異浦—外の浦。

○難波わたりにてこそ—新古今集宜秋門院丹後の歌「忘れじな難波の秋のよはの空異浦にすむ月は見るとも」などあるに據つていふ。

○雨の祈りの御時—神泉苑雨乞の事は太平記卷十二にも見えてゐるが、師長が雨乞の琵琶を彈じたといふ出所は分らない。

○神泉苑—拾芥抄に「二條南、大宮西八町、三條北、壬生東」とある。

入唐の御望みにてこの浦に御下向にて候。一夜のお宿を參らせ候へ

シテ「いやさやうの人にて御座候はば。異浦にて御宿を召され候へ

ワキ「あら何ともなや。難波わたりにてこそ異浦なんどとは申すべけれ。これは須磨の浦にてはなきか。唯御宿を參らせ候へ

シテ「見苦しく候へども。さらば御宿を參らせ候べし

ワキ宿を借りたる心にて下に居る。

ツレ「されば一年雨の祈りの御時。神泉苑にして。琵琶の祕曲を遊ばされしかば

シテ「龍神もめでけるにや。さしもの晴天俄かに曇り。大雨降ること終日。「それよりしてこの君を。雨の大臣とは申すとかや

の御上手だが、今度支那へお出でになりたいとのお望みで、この浦へお下りになつたのだ。一夜のお宿を貸してくれい」

老翁「いやそのやうな御立派なお方ならば、外の浦でお宿をお取りになりますやうに」

從者「これはつまらない事を申す。なる程、難波のあたりでならば、古歌にも詠まれた通り、外の浦といつた方がよからうが、こゝは須磨の浦ではないか。是非お宿をお貸ししてくれい」

老翁「見苦しい所ですが、それではお宿を致しませう」

と一同家の中へ入つた心で、舞臺は庵屋の一室となる。

老媼「師長公と申せば、先年雨乞の御祈禱の御時、神泉苑で琵琶の祕曲を遊ばしたので……」

老翁「龍神も感心したものと見え、實に晴れ渡つた空が俄かに曇つて、一日中大雨が降つたのだ。それで、この君のことを雨の大臣と申すといふことだ」

○蟬丸―源平盛衰記卷三十一に「我朝には延喜第四の王子會坂の蟬丸は琵琶の上手にて、天人より傳へられたりしを祕藏せられて、更に人に授け給はず、博雅三位三年の程、夜々關屋に通ひつゝ傳へたりしを、三位も是を祕藏して、輙く人には傳へざりけり」とある。「蟬丸」參照。
○逢ひ難き砌―枚と枚との合ひ難き意を復と逢ひ難い絕好の機會との意にかけていふ。
○里離れ―以下源氏君が須磨に流されてゐた樣を想ひ起す態で、源氏物語須磨卷「昔こそ人のすみかなどもありけれ、今はいと里ばなれ心すごくて、海人の家だに稀に……竹編める垣し渡して、石の階、松の柱、おろそかなるものから、珍らかにをかし……心盡しの秋風に、海は少し遠けれども……枕をそばだて、四方の嵐を聞き給ふに、波たゞここもとに立ちくる心地して」を引いて文を綴つた。
○何事を松の柱―何事を待つこともなきを松にいひかけた。
【四】

ツレ「かほどやごとなきこの君に。一夜のお宿を参らせて

シテ「祕曲をも聽聞申すならば。シテツレ「例なき思出

地下歌「かの蟬丸は逢坂や藁屋にて琵琶を彈き給ふ。今この君は須磨の鹽屋露もたまらぬ軒の板間。逢ひ難き砌に逢ふぞ嬉しかりける。上歌「里離れ。須磨の家居の習ひとて。須磨の家居の習ひとて何事を松の柱や、竹編める垣は一重にて。風もたまらじ痛はしや。海は少し遠けれども。波ただここもとに。聞え來ていつの間に。夢をも御覽候べき。よしよしそれも御琵琶を、寢られぬままに遊ばせやわれらも聽聞申すべしわれも聽聞申さん

【四】

ワキ、ツレ師長に辭儀して、

ワキ「いかに申し上げ候。夜もすがら御琵琶を遊

老婦「そのやうな偉い方に、折角一夜のお宿を致したのですから……」

老翁「琵琶の祕曲を伺ふことが出來れば、この上もないありがたい思出になるのだ」

昔蟬丸は逢坂山の藁屋で琵琶をお彈きになつたが、今この師長公が須磨の鹽屋で、軒の板間にも隙が多くて、露をも防ぐことの出來ない所で、お彈きになるのを伺へる、そのやうなよい折に出會つたことは實に嬉しい」

こ夫婦の間でいつて、さて師長に向ひ、

老翁「この所は源氏物語の文句ではありませんが、里を遠く離れた須磨の鹽屋のこととて、何の風情もなく、松の柱や竹で編んだ一重垣の、實にお粗末な家で、吹き來る風をも防ぐことが出來ず、ほんとにお氣の毒でございます。それに、海は少し離れてゐますが、波音が高くて、すぐ耳近くに聞えて、暫くもお寢みになることが出來ますまい。まあそれよりは、寢られないまゝに、御琵琶をお彈きなさいませ、私どもも聽聞致しませう」

【四】

從者師長に向ひ、

從者「申しあげます。この夜中御琵琶をお

○須磨の卷―源氏物語の卷の名。春は光源氏が都を出立した時。
○源氏―源氏物語の主人公、光源氏といひ、桐壺帝の御子で、世に類ひのない才色兼備の貴公子であつたが、朧月夜内侍の事によつて、三年の間須磨に謫流されたといふ。この間の事件を脚色したものに「須磨源氏」がある。
○玉の緒琴―露の玉、玉の緒、小琴といひつゞけた。
○戀ひわびて泣く音にまがふ浦波は思ふ方より風や吹くらん―源氏の君の歌。須磨の卷に「ひとり（源氏の君）目をさまして、枕をそばだてゝ四方の嵐を聞き給ふに、波たゞこゝもとに立ちくる心地して、涙落つとも覺えぬに、枕浮くばかりになりにけり。琴を少し掻き鳴らし給へるが、我ながらいと凄う聞ゆれば、彈きさし給ひて、戀ひわびて泣く音にまがふ浦風は、思ふ方より風や吹くらんと歌ひ給へるに、人々驚きて、めでたう覺ゆるに思はれて、あいなう起きゐつゝ、鼻を忍びやかにかみわたす」
○折からなれや―琵琶の緒、

ばされ候へ

といひて地より琵琶を受取り師長に渡す。師長これを受取り正面に向き彈ずる心にて、

師長「この須磨の卷の春かとよ。源氏この浦に移され給ひ。初めて世の味ひの辛きを知るといへども。まだ汐じまぬ旅衣。泣くばかりなる涙の露の。玉の緒琴を彈き鳴らし。戀ひわびて。泣く音にまがふ浦波は。思ふ方より。風や吹くらん

地「それは浦波の。音通ふらし琴の音の。音通ふらし琴の音の。これは彈く琵琶の。折からなれや村雨の。古屋の軒の板庇。目覺ます程の夜雨や管絃の障りなるらん

師長琵琶を下に置く。

【五】

シテ「や。何とて御琵琶をば遊ばしとめられて候ぞ

ワキ「さん候村雨の降り候程に。さて遊ばしとめ

彈きなさいませ」

師長琵琶を[illegible]

師長「源氏物語のこの須磨の卷の春の頃の物語であつた。源氏の君はこの浦に左遷されになつて、初めて世間の辛い味を經驗せられたが、といつても、まだその辛さに馴れられない御身には、悲しさに泣くより外のことはなく、せめてもの慰めに琴を彈き鳴らして、――

「戀ひわびて泣く音にまがふ浦波は、思ふ方より風や吹くらん」

（都の方が戀しくて堪へられず、泣いてゐると、その泣く音と同じやうな音をして、浦波の寄せる音のするのは、都の方でも愛する人が自分を思つて泣いてくれる、その泣き聲を風が吹き送つてくる爲であらうか）

と詠まれたが、それは浦波の音が琴の音に似通うて聞えたのだ。それと同じやうに、今こゝで琵琶を彈いてゐると、これに合はせるやうに村雨が降るが、この古い家の板庇を打つ雨音は餘りに烈しくて、この夜雨が音樂の邪魔になる

と謡つて、琵琶を彈き止む。

【五】

老翁「おや、どうして御琵琶をお止めになつたのです」

從者「はい　村雨が降つたので、それでお

を折にいひかけた。
○村雨の古屋の―白樂天の琵琶行に「大絃嘈々如二急雨一」とあるを引いて村雨を出し、村雨の降るを古屋にいひかけた。
【五】
○苫―菅又は茅を編んだ蓆。船の雨覆などに用ゐる。
○鹽竈の名の―千賀の鹽竈の千賀を近に通はせていふ
○黄鐘―十二律の一。
○盤渉―十二律の一。

られて候
シテ「げに村雨の降り候ぞや。（ツレに向き）いかに姥。
苫取り出だし候へ
ツレ「それは何のために候やらん
シテ「苫にて板屋を葺き渡し。靜かに聽聞申さん
と（シテ・ツレ立上り）。シテ ツレ『おほぢと姥は諸共に
ツレ『苫取り出だし
シテ『さつと葺き
（とシテ常座へ行き扇にて苫を葺く形。ツレは笛座前に行きて坐す。）
地「鹽釜の名の。近々と寄りゐつつ（と眞中へ出で）。耳をそばだて聞き居たり（と坐す）
ワキ「いかに主。かほど漏らざる板屋の上を。何しに苫にて葺きてあるぞ
シテ「さん候唯今遊ばされ候琵琶の御調子は黄鐘。板屋を敲く雨の音は盤渉にて候程に。『苫に

止めになつたのです」
老翁「なる程村雨が降りました」
老翁（老嫗に向ひ、）「おい婆さん、苫を取つてお出で」
老嫗「それは何の爲になるのです」
老翁「苫で板屋を葺き渡して、靜かに何はうと思ふのだ」
と老人夫婦は一所に苫を取り出して、さつと板屋を葺いて、師長の近くに居寄つて、耳を立てゝ琵琶を聽いてゐた。
從者「これ御主人、別段雨も漏れないのに、何故板屋の上を苫で葺いたのだ」
老翁「はい唯今遊ばした琵琶の御調子は黄鐘だのに、板屋を敲く雨音は盤渉調でしたから、それで苫で板屋を葺き隱したの

○心にくしや―奥ゆかしい

【六】

○岩越す波の―波が岩を越す意に、岩越（琴柱の先の緒のある所）をかけていふ。

○思ひもよらぬ―琵琶琴の緒を思ひにいひかけた。

○押して―強ひて。琴を弾く手に絲を押す手があるので、その緣でつゞけた。

○撥音爪音―撥音は琵琶、爪音は琴。

○ばらりからり―ばらりは撥音、からりは爪音。

○感涙もこぼれ―村雨ばかりでなく感涙もの意。

○えいじも躍る―「えいじ」舊本「嬰兒」の字を充ててゐる。穩當でないやうに思ふが、他に適當な字も考へつかない。

て板屋を葺き隠し。今こそ一調子になりて候へ

【六】地ロンギ『されば・こそ始めより。唯人ならず思ひしに。心にくしや琵琶琴を。いかでか弾かでああるべき

シテツレ『所から江のほとり。岩越す波の弾きやせん。琵琶琴の。思ひもよらぬ御諚なり

地『思ひよらずも琴の音の。押してお琵琶を賜はりて

とワキ立ちてツレより琵琶を受取りシテに渡してもとの座に帰る。シテ琵琶を受取り安坐して、

シテ『おほぢは琵琶を調むれば

ツレ『姥は琴柱を立て竝べて

地『撥音爪音。ばらりからりからりからりばらりばらりと。感涙もこぼれえいじも躍るばかりなり　や弾いたり弾いたり面白や

です、今は同じ調子になりました

【六】従者「道理で、始めから普通の人ではないと思つてゐたが、奥ゆかしいことだ。是非琵琶琴を弾いて貰はう」

老夫婦「場所柄海の近くですから、岩越す波が樂を奏しもしませうが、私どもに琵琶や琴を弾けとは、思ひも寄らぬ仰せでございます」

然し「是非弾け」といつて、強ひて師長の御琵琶を渡されたので、老翁が琵琶を調べると、老嫗は琴柱を立て竝べて、琵琶の撥音、琴の爪音、ばらり・からり、からり・ばらりと、いかにも面白く弾き澄ますので、思はず感涙もこぼれ、心なき赤子も躍り出すばかりで、實に面白く弾いた。

○大國—支那。

○越天樂—雅樂、唐樂の曲名。

○唱歌—樂に合せて歌ふ歌

○梅が枝にこそ—興福寺延年舞式に越天樂の歌ひ物として「梅が枝にこそ鶯は巣をくへ、風吹かばいかゞせん、花に宿る鶯、やら〳〵よしなの、袖のうつり香や」と見ゆ。「巣をくふ」は巣を作るの意。

○宿人—泊まつた人。

【七】

師長「師長思ふやう

地「師長思ふやう。われ日の本にて琵琶の奥儀を極めつつ。大國を窺はんと。思ひし事のあさましさよや。まのあたりかかる堪能ありける事よ。所詮渡唐を留まらんと（ワキ師長に辭儀して出立を促し）。忍びて鹽屋を出で給へば（師長・ツキ立上る）。それをも知らで琵琶琴の心一つの嗜みにて。越天樂の唱歌の聲。梅が枝にこそ。鶯は巣をくへ。風吹かばいかにせん花に宿る鶯。宿人の歸るをも知らで彈いたり琵琶琴

「宿人の」と師長等仕手柱際へ行く。ツレこれを見てシテに向ひ、

【七】

ツレ「なう旅人の御立ち候

シテ「なに旅人の御立ち候とや（と琵琶を下に置き）。何とて留め申さぬぞと。シテツレ「おほぢと姥は走り

そこで、師長が思ふには、「自分は日本の國で琵琶の奥儀を極めたのだから、これから支那の模様を知らうと思つたのだが、それはあさはかな考へであつた。自分の眼の前にこのやうな堪能の人がゐたのであつた。結局支那へ渡ることは思ひ留まらう」と人知れずこの鹽屋を出て行かれたが、老人夫婦はそれにも氣がつかないで、琵琶と琴とを合はせて、これを隨一の樂しみにして、越天樂の唱歌を、「梅が枝にこそ鶯は巣をくへ、風吹かばいかにせん花に宿る鶯」と謡つて、泊まつた客人の歸るのも知らないで、琵琶琴を彈いてゐた。

その時老嫗に氣づいた態で、

【七】

老嫗「もうし、旅人がお立ちになりました」

老翁「何だと、旅人がお立ちになつたといふのか。何故お留めしないのだ」と、老人夫婦は師長の方へ走り寄つて

○引けや引けや—琵琶琴を弾くと、袖を引くと、横雲の棚引く、とを兼ねていふ。
○夜はまだ深し—横雲のよの音を重ねて夜といふ。
○あかして—明石といひかけた。
○絃上—琵琶の名器。解説に委しくいふ。
○村上の天皇—醍醐天皇の御子。天慶九年（一六〇六）御即位、康保四年（一六二七）崩御。寶算御四十二。詩歌管絃に勝れさせ給うた。
○梨壺の女御—村上天皇の女御芳子を申す。宣耀殿女御と申し琴の御上手であつたこと榮花物語に見ゆ。但し梨壺にお住みになつたといふことは見えない。作者の思ひ違へであらう。
○故院の昔の夢の告—源氏物語明石巻に、光源氏の夢に故桐壺帝の御告のあつたといふ故事をさす。

【八】

より（と二人立上り）

地「琵琶琴よりも御袖を唯引けや引けや横雲の（と師長の狩衣の袖に手をかけ）。夜はまだ深し浦の名のあかしてお立ち候へ

ツレ師長その場にて、

師長「何しに留め給ふらん。まづこの度は歸洛して。重ねて尋ね申すべし。御名を名のり給へや

シテ ツレ「今は何をか包むべき。われ絃上の主たりし。村上の天皇梨壺の女御夫婦なり

地「御身の入唐留めんため。夢中にまみえ須磨の浦。故院の昔の夢の告思ひ出でよ人々とてかき消すやうに、失せ給ふかき消すやうに失せ給ふ

とシテ仕手柱際にて正面に開き、來序の囃子にてシテ・ツレ中入。師長脇座に着く。

【八】

出端の囃子にて、後ジテ村上天皇、面中將・初冠・金緞鉢卷・襟白・着附赤地縫箔・單狩衣・指貫・込大口・腰帶・扇の装束にて常座に出で、

老夫婦「琵琶琴を弾くよりは、この方の御袖を引返すのがよい」

と師長に向き、

老夫婦「まだ横雲が棚引いて夜も深いのです。この浦で夜を明かして、それからお立ちなさいませ」

師長「何故お留めなさるのです。まづ今度は都に歸つてまたお訪ね致しませう。どうか御名前を仰しやつて下さい」

老夫婦「今は何を隱さう、自分夫婦は絃上の主であつた村上天皇と梨壺女御なのだ。そなたが支那へ渡らうとするのを留めようと思つて、夢の中に現れ出たのだ。かの源氏の君が須磨の浦で故父帝の夢の告を受けた故事を思ひ出すがよい」と仰しやつて、かき消すやうに、なくなつてしまはれた。

前ジテ・前ツレ退場。

【八】

後段

後ジテ村上天皇登場。

○延喜聖代―延喜は村上帝の御父醍醐天皇の年號。但し醍醐天皇の次には村上帝の御兄朱雀天皇が御即位になり、村上天皇はその次に御即位になつたのである。

○三面の琵琶―玄象(絃上)獅子丸、青山をいふ。委しくは解説平家物語の引文參照。但し同書には仁明天皇の御宇としてゐる。

【九】

○八大龍馬―八大龍王を龍馬にいひかけた。龍馬は駿馬をいふ。

○八大龍王―難陀龍王(歡喜)、跋難陀龍王(善喜)、沙伽羅龍王(鹹海)、和修吉龍王(多舌)、阿那婆達多龍王(無熱)、德叉迦龍王(多頭)、摩那斯龍王(大力)、優鉢羅龍王(黛色蓮華池)をいふ。龍王は龍神と同義で、海中に住んで雨水を掌る。

○獅子―高麗樂。琵琶の獅子丸と同名であるから、名にし負ふといふ。

○團亂旋―唐樂。獅子虎の緣で出した。

後ジテ「抑もこれは。延喜聖代の御讓り。村上の天皇とはわが事なり。その聖代の御宇かとよ。唐土より三面の琵琶を渡さるる。絃上青山獅子丸これなり。さる程に獅子は龍宮へ取られしを。いで召し出だし彈かせんと。漫々たる海上に向ひ。いかに下界の龍神たしかに聞け(と幕へ向き)。獅子丸持參。仕れ

といひて地謠座前に行き床几にかゝる。

早笛にて、後ヅレ龍神、面黑髭・赤頭(龍戴)・金緞鉢卷・着附段厚板・法被・赤地半切・腰帶の裝束にて打杖をさし、琵琶を兩手に持ちて橋懸一の松に出で、

【九】

地「獅子丸浮かむと見えしかば。獅子丸浮かむと見えしかば(龍神舞臺に入り)。八大龍馬を引き連れ引き連れかの御琵琶を。授け給へば(琵琶を師長に渡し)。師長賜はり彈きならし。八大龍王も絃管の役々。或は波の。鼓を打てば。或は琵琶の。名にし負ふ(龍神幕に走り込む)。獅子團亂旋に村上の天

天皇「自分は延喜の聖代醍醐天皇の御讓りを受けた村上天皇である。御父醍醐天皇の御代に、支那から三面の琵琶を渡された。絃上、青山、獅子丸が即ちそれである。ところが、獅子丸は龍宮へ取られたのであるが、さあこれを召し出して彈かせてやらう」

と廣々とした海上に向つて、

天皇「これ海底の龍神よく聞け、獅子丸を持つて參れ」

仰せに從つて、後ヅレ龍神、獅子丸の琵琶を持つて登場。

【九】

獅子丸の琵琶が浮かび上つたと見えると、村上天皇は八大龍馬を引連れて、その御琵琶を師長にお授けになる。師長はこれを戴いて彈き鳴らすと、八大龍王も管絃の役々を勤め、波も同じやうに鼓を打つ。そしてこの琵琶の名に適はしい獅子や團亂旋の曲を奏てると、村上天皇も同じくお奏でになる、實に面白い樂曲である。

皇も。奏で給ふ面白かりける。秘曲かな

シテ「獅子團亂旋に」と立ちて正面に出で、

〔早舞〕

を舞ひ、續いて次の謠に合せて舞ふ。

シテ『獅子には文殊や召さるらん

地『獅子には文殊や召さるらん。帝は飛行の車に乘じ。八大龍馬に引かれ給へば師長も飛馬に。鞭を打ち。馬上に琵琶を。携へて馬上に琵琶を。携へて。須磨の歸洛ぞ。ありがたき

と常座にて開き留拍子を踏む。

〔早舞〕

にシテ村上天皇が輿に乘じて舞をお舞ひになる態

獅子といへば文殊菩薩のお乘り物であるが、村上天皇は飛行の車にお召しになつて、八大龍馬に引かせてお立ちになると、師長も駿馬に鞭打ち、馬の上に琵琶を携へて、須磨の浦から都へ歸つたのはありがたいことである。

シテ村上天皇は上天の態で退場、次でツレ師長は歸洛の態で退場。

○獅子には文殊や―獅子は文殊菩薩の乘物であるから樂名の獅子を承けてこの句を出し、「帝は飛行の車に乘じ」の句に對せしめた。

○文殊―文殊師利 Manju-sri の略。妙吉祥と譯する菩薩で、普賢と一對になり、釋迦如來の左側にあり、智慧を司る。

○須磨の歸洛―須磨から歸京する意。

〔考　異〕

諸　流（五　流）

【二】ツレ「句「拙き業を（下懸波こゝもとや）須磨の浦眺めに憂きや忘るらん（下懸月さへ濡らす袂かな）【三】ワキ「鹽屋の主の歸りて……いかにこれなるは鹽屋の主にて……シテ「さん候……ワキ「これに……シテ「いやさやうの……ワキ「あら何ともなや……シテ「見苦しく候へども……ツレ「されば一とせ雨の祈りの御時（寶此鹽屋の內へ案內申し候。ツレ「誰にて渡り候ぞ。ワキ「旅の者にて候一夜の宿を御借し候へ。ツレ「暫く御待ち候へ。主にその由申し候べし。如何に申し候。旅人の御入り候が。一夜の宿と仰せ候。シテ「何と旅人の御宿と候や。ツレ「さん候。シテ「餘りに見苦しく候程に。異浦にて御宿召されよと申し候へ。ツレ「主にその由申して候へば餘りに見苦しく候程に。異浦にて御宿を召されよと仰せ候。ワキ「暫く異浦とは難波の浦にてこそ申すべけれ。これは須磨の浦にては候はぬか。シテ「仰せ尤もに

て候。さらば御宿を參らせ候べし。扨これは如何樣なる御方にて御座候ぞ。ツレ「いかに主。これに御座候は。天下に隱れもましまさぬ琵琶の御上手師長公にて御入り候。入唐の爲この須磨の浦に御下向にて候。この君一年雨の御祈りの爲に。（下懸も略寶と同じ）神泉苑にて……　【八】後ジテ「抑もこれは……さる程に獅子は龍宮へ取られしを（寶青山は仁和寺御室の御讓りとして。守覺法親王の御相傳。獅子丸は龍宮に止まり下界にあり。師長玄上青山かくの如く。又傳へ聞く琵琶學の。獅子丸さこそとゆかしきぞや。シテ）いで取り出だし……

本曲はこの外諸流の間、詞の出入が多い。

源太夫(げんだいふ) 春

解説

【能柄】 脇能 複式夢幻能

【人物】 ワキ 當今勅使、ワキツレ 同從者(二人)、
前シテ 老翁(脚摩乳即ち源太夫神の靈)、
前ツレ 老嫗(手摩乳の靈)、狂言 熱田末社神、
後ツレ 橘姫(天女)、後シテ 源太夫神

【所】 尾張國 熱田神宮

【時】 (六月)

【作者】 能本作者註文に金春禪竹の作とす。

【梗概】 勅使が熱田明神に參詣して、老人夫婦の御垣守にこの社の由來を尋ねると、老夫婦は當社は出雲大社と御一體であるといつて、草薙劒の故事を語り、自分達は稻田姫の父母の脚摩乳、手摩乳であると打明けて消え失せる。やがてその脚摩乳と同身である源太夫神が橘姫と共に現れ、樂を奏して勅使を慰める。

【出典】 本曲は素盞嗚尊の大蛇退治と日本武尊の東征とを結びつけたも

ので、前者については別に「大蛇」、後者については「草薙」の曲が作られてゐるから、その典據は前掲二曲の解說に擧げることとして、こゝには、たゞ本曲の主人公たる源太夫の神について考へるに、この神は熱田神宮の攝社として祀られ、平家物語劍卷に、

十二代の帝景行天皇四十年の夏、東夷多く御政に背きて關東靜らず。帝の第二の皇子日本武尊、御心も猛く御力も勝れて御座しければ、かの皇子遣して平らげしに、……尾張國に下りて、松子の島といふ所に、源太夫といふ者の家に泊まり給へり。太夫に娘あり、名を岩戸姬といひけり。眉目貌好かりければ、尊是を召して幸ひし給ふ。……日本武尊は白鳥にて飛び落ち給ひて、神になる。今の熱田大明神是なり。岩戸姬もあかで別れし中なれば、即ち神と顯れ、源太夫も神となり……。

とある。恐らくこの頃から源太夫神が信じられるやうになり、室町時代に入つては、源太夫を橘姬の御父とし、東海道の守護神と信ずるやうになつて、本曲が生まれたのであらう。

【概評】素盞嗚尊と日本武尊とは、わが國英雄神として最も著しい方で、殊に草薙の寶劍について、極めて深い關係を持つて居られるのであるから、英雄傳說としてこの二尊を結びつけて考へるのは自然のことである。そしてその結びつけ方に於て、その時代々々の時代相が窺はれるのであつて、垂跡說の流行した室町時代に於て、日本武尊を素盞嗚尊の御再來と信じたのは、時代相の反映として當然のことであらう。

能作者が神話物として本曲を創作するに當り、この時代相に從つたのは、無理からぬことであるが、その結果、主想の混雜を來したこと、——素盞嗚尊の大蛇退治と日本武尊の東征と源太夫の緣起とが鼎立の形をなしたことは、失敗と見なければなるまい。殊に二尊を結びつけるのに源太夫を媒としないで、御垣を緣としたのは、窮策としか考へられない。脚色は神事能の普通の形式を履んだもので、際立つて變つた點もないが、中入前の普通ロンギとなるべき所を唯詞で初め、平明を主としたのは、やゝ注目に値する。修辭も大體平明を旨として、華麗な緣語掛詞などは少い。

【一】

【一】　次第の囃子にて、ワキ勅使、大臣烏帽子・上頭掛・着附厚板・狩衣・大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ從者二人、ワキと同樣の裝束にて舞臺に入り向合ひて、

【一】　前段

舞臺は初め京都で、ワキ勅使、ワキヅレ從者を隨へて登場。

○曇りなき名の―日の序詞
○熱田の宮―愛知郡熱田町(今名古屋市に入る)にあり草薙劒を齋ひ奉り、天照大神、日本武尊を祀り、素盞嗚尊、宮簀姫命、建稻種命を合祀す。
○道ある御代―御政道の正しい御代といふ意に、旅の道路の平坦なことを含ませた。
○逢坂の山―山城と近江との國境にあり、古く關所のあつた所。

ワキ ワキヅレ 次第「曇りなき名の日の本や。曇りなき名の日の本や。熱田の宮に參らん

地取にワキは正面に向き、

ワキ「抑もこれは當今に仕へ奉る臣下なり。さても尾州熱田の明神は。靈神にて御座候由君聞し召し及ばせ給ひ。急ぎ參詣申せとの宣旨を蒙り。唯今熱田の明神に參詣仕り候

といひてワキヅレと向合ひ、

ワキ ワキヅレ 道行「何事も道ある御代の旅とてや。道ある御代の旅とてや。關の戸ささで逢坂の山を都の名殘ぞと。末は東の道遠き。行方なれども程もなく。國々過ぎてこれぞこの。熱田の宮に着きにけり熱田の宮に着きにけり

ワキ「末は東の道遠き」と正面に向きて二三足出で、またもとへ歸りてワキヅレと向合ひ、道行濟みて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に熱田の宮に着きて候。心靜かに

勅使「曇りなきわが日の本の熱田神宮へお參りしよう」

と次第を謡って、旅の目的を述べ、

勅使「自分は今上陛下にお仕へ申してゐる臣下です。さてわが大君には、尾張國熱田明神が靈驗あらたかな神樣であることをお聞き遊ばされ、急いで參詣せよと仰せ下されたので、これから熱田明神に參詣するのです」

と見物人に自己紹介をし、

勅使「何事につけても御政道の正しい大御代とて、旅をするにも何の困難もなく、易々と逢坂山へ來て、都の方を顧みて名殘を惜しみ、それから東の方へ行先の遠い旅をつゞけてゐるうちに、いつの間にか國々を通り過ぎて、目的の熱田の宮に着いた」

と旅の様を述べてゐる間に旅は進んだ趣で、舞臺は尾張熱田の宮となる。

勅使「道を急いだので、はや熱田の宮に着

神參中さうずるにて候

ワキヅレ「尤も然るべう候

といひて脇座に行き下に居る。

【二】

眞一聲の囃子にて、シテ老翁、面三光尉・尉髪・襟淺黄・着附小格子・水衣・腰帶・扇の裝束にて萩帚を持ち、ツレ老嫗、面姥・姥髪・鬘帶・襟朽葉色・着附箔・水衣の裝束にて橋懸に出で、

ツレ一の松、シテ三の松にて向合ひ、

シテツレ一聲『朝淸め。落葉を拂ふ程ならし。風をも松の。木蔭かな

二人とも正面に向きて、

ツレ二句『神の御前の瑞籬の。シテツレ（向合ひ）『久しき世より。仕へ來ぬ

と謠ひて舞臺に入り、ツレは眞中、シテは常座に立ちて、

シテサシ『これは當社に年久しき。夫婦の者にて候なり。シテツレ『それ千早ふる神の敷地。樣々なりと申せども。ここは所もうらさびて。眺めの末は海山の。雲と波とに移り行く。氣色ぞ變る明暮に。馴れても通ふ心とて折々毎に珍しさよ。もとよ

【二】

○朝淸め—朝の掃除。
○風をも松の—風をも待つを松にいひかけた。
○瑞籬の—瑞籬は神社の垣。「久しき」の枕詞に兼ねて用ゐた。
○千早ふる—神の枕詞。
○敷地—神のおはす所。
○うらさびて—淸寂な、神々しい。

いた。心靜かに參拜しませう」

といつて神前に參る態。

【二】

前ジテ・脚摩乳（源太夫）は翁の姿で、前ツレ・姥の姿をした手摩乳と共に登場。

老夫婦「丁度朝の御掃除をして、落葉を拂ふ時刻らしい。この松の木蔭にそよ風の訪れる趣はほんとに面白い。さうだ、自分達はこの神樣に隨分久しい間お仕へして來たものだ」

といひながら神前に近づいた態で、

老翁「私どもはこのお社に永年お仕へしてゐる夫婦の者です」

と自己紹介をし、

老夫婦「神樣のお出でになる所は、所々方々に澤山あるが、殊にこのお宮は神々しくて、眺めが廣々として、海の波、山の雲、その時折に趣が變つて、自分達のやうに通ひ馴れてゐる者にも、その時折毎に珍しい心持のすることだ。勿論この神樣の御利益は限りもなく深いもので、佛の深い敎を受けて極樂淨土へ

○誓ひの海—神佛が衆生を濟度しようと誓願せられた慈悲の深いことを海に譬へていつたのである。
○底ゐなく—底ゐは「そこひ」の訛で、限り、果てとの意。
○彼の國—極樂淨土。
○佛の道もよそならぬ—佛の道も神の道も同じであるとの意。

【三】
○宮づこ…宮つ子で、神社に仕へる者。

りも誓ひの海の底ゐなく。深き敎への彼の國に安く到らん法の御舟。佛の道も。よそならぬ。神の惠みを賴むなり

シテツレ下歌「歩みを運び年月を送り迎へて老が身の。

上歌「夙に起き夜半に寢覺め仕へてぞ。夜半に寢覺め仕へてぞ。ながらへ來ぬる春秋の。月に馴れ花に添ふ心も老と身はなりて。誠を致す志。げに神感も賴もしやげに神感も賴もしや

「げに神感も賴もしや」と謠ひながら入替り、シテは眞中、ツレは脇正面に立つ。ワキ立ちて、

【三】

ワキ「われ曉天より星を戴き。宮中を拜するところに。これなる老人夫婦と思しくて。御垣を圍ふ氣色見えたり。そも御身は宮づこにてましますか

シテ「さん候これは當社の宮づこにて候が。わき

易々と渡る爲にも、佛の道も神の道と同樣のものであるから、この神樣の御惠みをお賴みするのがよいのだ。——

かうして毎日この宮に參詣して、永い年月を送り迎へ、この年寄になるまで、朝は早く起き夜も夜中に眼を覺まして、神にお仕へをして來たことだ。その永い年月の間、春は花秋は月に馴れ親しんで、心も身も老い過して來たのだから、この誠をこめた志を神樣も御納受下さることと賴もしく思はれることだ—

【三】

勅使老人夫婦の來たのを見て、

勅使「自分が朝早く星を戴いて參つて、お社を拜んでゐると、この老人夫婦らしい者が來て、神垣を繕つてゐる樣子だ。

と獨言をいつて老翁に向ひ、

勅使「一體そなたはこのお宮に仕へてゐる人なのですか」

老翁「はい私はこのお社にお仕へしてゐる

○御垣守―垣根の番人。庭番。
○渇仰―渇いた者が水を求めるやうに、深く仰ぎ信じること。
○大内の御垣守―御所の諸門を警固する衛士。
○出雲の國大社―簸川郡杵築町にあり、大國主神を祭神とし、素盞嗚尊を合祀す。「大社」參照。
○素盞嗚尊―伊邪那岐神が御鼻を洗ひ給うた時に、お生まれになつた神。出雲國にお降りになつた時の事は「大蛇」に作つてゐる。
○八雲立つ出雲八重垣つまごめに八重垣つくるその八重垣を―素盞嗚尊の御歌。記紀に見えてゐるわが國最古の短歌。
○和光垂跡―和光とは佛が衆生濟度の爲に德光を和らげて、この俗塵に交ること。垂跡は佛が本地を離れてこの土に現れること。本文の「御事なるが」は「なるか」の誤であらう。

ては御垣守にて候程に。古りたる所を圍ひ。時時は庭を淸め渇仰致し候
ワキ「げにげにありがたう候。大方神所に於て。御垣を圍ひ申さるる事はさることなれども。まづは大内の御垣守とこそ申すべけれ。わきて當社の御垣を圍ふ謂ればし候やらん
シテ「げに御不審は御理にて候。忝くも當社と申すは。出雲の國大社御一體の御事ぞかし
ツレ「然るに往昔素盞嗚の尊。出雲の國に到り給ひ。御宮造りありし時
シテツレ「八雲立つ出雲八重垣つまごめに。八重垣つくるその八重垣を。ここにも由緒はあるものを。不審はなさせ給ひそとよ
ワキ「謂れを聞けばありがたや。さては出雲と御一體。和光垂跡の御事なるが。猶々謂れを語り

者で、殊に神垣の番をするのが私の役ですから、古びた所を結び、時々は庭のお掃除をして、信心してゐるのです」
勅使「それは實に結構なことです。一體神社で神垣を結はれるのは尤もなことで、これを御所で申せば、御垣守の衛士に相當するのだが、何か特にこのお社の御垣を作る謂れがあるのでせうか」
老翁「いかにも御不審は御尤もですが、辱くもこのお社は出雲國の大社と御一體に渡らせられるのです」
老嫗「と申すのは、太古素盞嗚尊が出雲國に御出でになつて、御殿をお造りになりました時……」
老翁嫗「尊が――『八雲立つ出雲八重垣妻ごめに、八重垣つくるその八重垣を』
（この出雲で、妻を住まはせる爲に宮を作ると、雲までが七重八重に立ちこめて、わが宮の周圍に八重の垣を造つてくれる）
とお詠みになりました。從つて大社と御一體のこの社でも、垣を作ることは由緒があるわけですから、御不審が晴れませう」
勅使「謂れを聞けば、實にありがたく思はれます。して、出雲の大社と御一體であるといふことは、神樣が德光を和らげてこの地に御垂跡になつたといふ事なのでせ

○景行―紀元七三一年御即位、七九〇年崩御、寶算百四十三。
○日本武の尊―小碓命。日本武は川上梟帥の奉つた御名。〔草薙〕參照。
○御再來―生れ變り。
○衆生濟度―迷妄の苦海に沈む衆生を濟つて、極樂の彼岸に渡すこと。
○人の代―日本武尊をさす
○神の代―素盞嗚尊をさす
○思ひ出雲の―思ひ出づを出雲にいひかけた。
○八重垣の―前掲素盞嗚尊の御歌を引いて、次の「隔て」の緣語とす。
○ここも隔ては名もことに―出雲と熱田、素盞嗚尊と日本武尊と、所も離れ名も違つてゐるがとの意。
○一體分身―佛菩薩が衆生利益の爲に、その身を樣々に分つて化現すること、
○三伏―小暑後の第一・第二・第三の庚の日即ち初伏・中伏・末伏の總稱。盛夏の意
○熱田の宮路―夏の日の暑きを熱田にいひかけた。
○鳴海―尾張國愛知郡にある。近くなるといひかけた。
○寢覺の里―信濃國木曾に

給へ
シテ「景行第三の皇子日本武の尊と申すは。東夷を平らげ國家を鎭め
ツレ「終にはここに地を占め給ふ。これ素盞嗚の御再來
シテ「衆生濟度の方便にて
ツレ「或は人の代
シテ「或は又
地上歌「神の代を思ひ出雲の宮柱。思ひ出雲の宮柱。立ち添ふ雲も八重垣の。ここも隔ては名もことに。誓ひは樣々かはれども。一體分身の御神所一心に仰ぎ給へや。時は三伏の夏の日の。熱田の宮路浦傳ひ。近く鳴海の磯の波。松風の聲寢覺の里。聞くにも心涼しく老の身も夏や忘るらん老の身も夏や忘るらん

うか、なほその謂れを委しく話して下さい」
老翁「景行天皇第三の皇子日本武尊は、東國の亂賊を平げて、國家をお鎭めになり……」
老嫗「最後にはこの地にお留まりになりました。この尊が素盞嗚尊の御生まれ變りで……」
老翁「これと申すも、衆生を濟度する爲の御方便で……」
老嫗「人代では日本武尊としてお現れになり……」
老翁「また神代では素盞嗚尊としてお現れになつたので、空の雲までが八重の垣を作つた出雲の宮とこの熱田の社とは、所も隔り、神の御名も違つてゐて、神の御誓願にはその時折で色々お變りになりますが、もと〳〵御一體の神が色々の姿でお現れになつたのですから、出雲も熱田も同じ心持で御信仰なさいませ。丁度今は夏の眞盛りですが、この熱田の宮のあたりは濱傳ひになつてゐて、こゝに近い鳴海潟の磯打つ波の音、又は松風の響、夜の寢覺めにも聞えて涼しく感じられ、年寄りの身にも夏の暑さが忘れられるのです」

地上歌の初めにツレは笛座前に行きて坐し、ワキも下に居る。

【四】

ワキ「猶々當社の神祕懇に申し上げ候へ

シテ『懇に申し上げうずるにて候

シテ次のクリに舞臺の眞中にて坐し、

地クリ『それ和光同塵の御垂跡。いづれ以て疎かならねど。威光を四方に顯し給ふは。これ八劒の神德なり

シテサシ『然れば景行第三の皇子。御名は日本武の尊

地『地神五代には天照大神の兄。素盞嗚の尊出雲の國に跡を垂れ。暫く宮居し給へり

シテ『こゝに簸の河上に涕哭する聲あり

地『尊到りて見給へば。老人夫婦が中に。少女を抱きて泣き居たり。これを如何にと尋ぬるに

（居クセ）

【四】

勅使「なほこのお社の緣起を委しく話して下さい」

老翁「委しく申しあげませう」

さくつろいで、

老翁「一體神佛が衆生濟度の爲に德光を和らげて俗塵に交けり、この國土に御出現遊ばすのは、どの神佛にしても、あだおろそかはない、皆ありがたいことですが、その中でも威光を四方にお顯しになつたのは、この草薙の劍の御神德を第一に稱へなければならないのです。その次第は、景行天皇第三の皇子日本武尊はその昔地神五代の初めには、天照大神の御弟素盞嗚尊として出雲國に御出現になり、暫くこゝにお出でになつたのです。ところが、簸の河上でひどく泣く聲がするので、尊がその所へ行つて御覽になると、老人夫婦が少女を中に抱いて泣いてゐるのです。尊が『これはどうしたわけだ』とお尋ねになると、老人がお答へして申すのには、『私どもは手摩乳。脚摩乳と申し、娘は稻田姬と申す者でございますが、娘を

ある。松風の聲に寢覺めるといひかけた。

【四】
○八劒—こゝには草薙劍をさしていふ。八劒の宮のことは後に掲ぐ。
○景行第三の皇子—平家物語劍卷には「第二の皇子」とある。
○地神五代—神皇正統記等に天照大神を地神五代の第一に擧げ奉つてゐる。
○兄—男兄弟をいふ。
○簸の河—今の斐伊川で、出雲國船通山から發し宍道湖に入る。

○手摩乳脚摩乳—手摩乳は嫗、脚摩乳は翁の名。娘の手足を撫でる意を示した名であるといふ。

○八劍の宮—熱田の攝社。平家物語劍卷に—(神羅の)帝生不動といふ將軍に、七の劍を持たせて、日本へぞ渡しける。生不動既に尾張國まで攻め來る。熱田の神宮惡き奴かなとて、蹴殺し給ひにけり。所持の七の劍を召取りて、草薙劍を加へて、宮殿に祝はれたり。今の八劍の大明神とは是なり」

【五】○簸上の明神—熱田の攝社

地クセ『老人答へて申すやう。われは手摩乳脚摩乳。娘を稲田姫と。いふものに候が。大蛇の生贄を。悲しむなりと申せば。然らばその姫を。われに得させよその難を。のがすべしと宣へば。喜悦の心妙にして。尊に姫を奉る

シテ『やがて大蛇を從へ

地『その尾にありし劍を叢雲の劍と名づけしこそ八劍の宮の御事。されば簸上の明神はその時の稲田姫なり。父の老翁名をかへて源太夫の神と顯れ。東海道の旅人を守らんと誓ひ給へり

【五】

ワキ「げにありがたき神祕の教へ。唯人ならず覺えたり。御名を名のり給ふべし

シテ「今は何をか包むべき。簸の河上に顯れし

ツレ『われは手摩乳

シテ『脚摩乳

大蛇の犠牲にするのが悲しいのでございます」と、かう申すので、尊は「それならばその姫をわしにくれ、その難儀を免れさせてやらう」と仰しやつたので、老人夫婦は大悦びをして尊に姫をさし上げました。尊はやがて大蛇を御退治になり、その尾にあつた劍を叢雲の劍とお名づけになりました。これが卽ち八劍の宮で、簸上の明神はその時の稲田姫なのです。それから父の老翁は名を變へて源太夫の神として出現し、東海道の旅人を守護しようと御誓約になつたのです」

【五】

勅使「このやうな實にありがたい神の縁起を委しくお敎へ下さる所を見れば、あなたは普通の人だとは思はれません。お名前を仰しやつて下さい」

老翁「今は何を隱さう、簸の河上に現れた……」

老嫗「私は手摩乳—」

老翁「自分は脚摩乳—」

○源太夫—熱田の攝社。委しくは解說に掲ぐ。

【間】

ツレ「夫婦これまで

シテ「顯れたり

地「常ならず御身は勅諚の使なる故に。仰ぐべし神とても。人の敬ひ深ければ。守らん爲に來りたり。ここにては源太夫の。神ぞと名乘りすてて。行き方知らずなりぬ。行方知らずなりにけり

老嫗「夫婦の者がこゝまで……」

老翁「現れて來たのだ。そなたは普通の人ではない、大君の仰せを蒙つた勅使だから、敬意を拂ふのである。自分は神ではあるが、人に對する尊敬の念の深いものであるから、そなたを守護する爲に來たのだ。自分はこの地では源太夫の神といふのだ」

と名乘りすてて、どこともしれず消えてしまつた。

シテ地謠にて立ち、常座に行きて開き、來序の囃子にて中入。

ツレも續いて幕に入る。

【間】亂序の囃子にて、狂言末社神、面登髭・末社頭巾・着附厚板・水衣・括袴・脚半・扇の裝束にて太鼓臺を持ちて出で、

狂言「かやうに候者は。熱田明神に仕へ申す末社の神にて候。誠に當社の御事は。天下に隱れもなき御神にて候。されば神代にては素盞嗚尊と現じ。出雲の國に御座ありしが。その頃簸の河上にて涕哭する聲聞えしかば。尊不審に思し召し。到りて御覽ずるに。老人夫婦の中に美しき姫を抱きて歎き悲しみ候間。子細は如何にと御尋ね候へば。その時老人申すやう。さん候是は手摩乳脚摩乳とて夫婦の者にて候。これなる姫を稻田姫と申し候が。この所に大蛇のあるに年々生贄を供へ申し候。當年はこの姫が番に當り。免るる所なしとて伏しまろび悲しみ候間。尊不便に思し召し。さればその姫を我に得させよ大蛇の難を助くべしとありければ。夫婦は悦び參らすべしと申す。その時尊大蛇

の様體を尋ね給ふに。まづ七尾七谷塞がつて。胴は一つ頭は八つ御座あると申す。尊の御謀に。大なる酒舟を御さゝせあり。その中へ酒をたゝへ。その上に棚をかき稲田姫を置き給へば。八つの舟に姫の姿映つて見え候間。大蛇姫は舟の中にありと心得。酒を飲む程に〳〵。納まる胴は一つなり。正體もなく醉ひ伏し候處を。十握の劍にて從へ給ひ。その尾を切り給ふに。刄しらみて切れ申さず候間。割つて御覽あれば尾の中に一つの劍あり。これ卽ち叢雲の劍と名づけ給ふ。その後尊に稲田姫と出雲の國に宮造りして住み給ふが。これよりこの所に地を占めて大明神と現れ給ふ。さる間手摩乳脚摩乳は今の源太夫の神にて東海道を守り給ふ。扨また當今に仕へ御申しある臣下殿。當社へ御參詣候を源太夫の神殊に歡び給ひ。假に顯れ御詞を交はし給ふが。今夜は舞樂を奏し慰め申さうずるとの御事にて候。卽ち源太夫の神は太鼓の役にて候間。これまで持ちて參りて候。急いで太鼓を置かう。いづ方がよからう（正面へ太鼓を置き）これで一段とようござる。某もこれまで出たしるしに。一曲奏でて罷り歸らう。『めでたかりける時とかや。〔三段の舞〕『やら〳〵めでたやめでたやな。かゝるめでたき折柄なれば。我等がやうなる末社の神も現れ出でて。謠ひかなでて。是までなりとて末社の神は。〳〵。本の社に歸りけり

と舞ひ納めて幕に入る。

【六】

出端の囃子にて、後ヅレ橘姫、面増・黑垂・天冠・襟赤・着附箔・舞衣・大口・腰帶・扇の裝束、後ジテ源太夫神、面惡尉・白垂・烏甲・襟紺・着附厚板・狩衣・半切・腰帶・扇の裝束にて出で、

後ヅレ『われはこれ眞如實相の無漏を出でて。有爲の濁塵に光を交へ。結緣の衆生を擁護の神。橘姫とはわが事なり

○御さゝせあり—御作らせになり。

【六】
○眞如實相—眞如は絕對平等の理體。實相はありのままの姿。
○無漏—漏は煩惱の異名。無漏は煩惱を增長させないこと。
○有爲—爲は造作の義。有爲は造作を有するもの、因緣所生の事物。
○結緣—衆生が佛道を修める爲に佛法僧に因緣を結ぶこと。
○橘姫—日本武尊の妃。尊の御東征の時、風浪の難をお救ひする爲に入水せられた。「草薙」參照。

【六】　後段

後ヅレ橘姫天女の姿で、後ジテ源太夫の神とともに登場。

橘姫「自分は眞實そのまゝな煩惱のない世界を殊更離れ出て、一切衆生の居る濁惡世界に立ち交はり、その衆生に因緣を結んで、これを守護する神の、橘姫です」

後ジテ『われは又無緣の衆生を利益せんとて。東海道を日夜に守る。源太夫の神とは。わが事なり

地『あらありがたや

【七】

ワキ『げにありがたき御影向。感涙肝に銘じつつ。心空なるばかりなり

ツレ『とても姿を現さば。いざや舞樂の曲を盡し。かの客人に見せ申さん

シテ『げにげにこれもいはれたり。さて役々は

ツレ『絲竹の

シテ『中に異なる太鼓の役

ツレ『卽ち御身

シテ『源太夫か

ツレ『佳例もさぞな

シテ『思ひ出づる

【七】
〇影向―月影が水面に宿るやうに、神佛が衆生に向つて姿を示現し給ふこと。

源太夫「自分はまた緣なき衆生をも助けたいと思つて、日夜を分たず東海道を守る源太夫の神である」

このやうに二神の現れ給ふのは、實にありがたいことである。

【七】

勅使「神樣が御出現遊ばされて、實にありがたいことだ。ありがたさが肝に銘じて、夢我夢中の有樣だ」

橘姫、源太夫神に向つて、

橘姫「このやうに姿を現した以上は、さあ色々の舞樂をして、この客人に見せませう」

源太夫「成程これはよいことをいはれた。して、舞樂の役々には……」

橘姫「私が管絃の役をしませう」

源太夫「樂の中で別趣な太鼓の役は誰が……」

橘姫「それはあなたが……」

源太夫「私がするのか」

橘姫「昔のめでたい先例もあることですから……」

源太夫「さうだ、昔の事が思ひ出される。」

地「昔もうちたる太鼓の御役。今も妙なる祕曲を添へて。撥も數ある樂拍子。今うち寄るも波の調べ面白やなありがたや（ツレ笛座前に坐す）

〔樂〕（シテ舞ふ）

【八】

シテ「面白の遊樂や

と次の謠に合せ舞ふ。

地「面白の遊樂や。時しもあれや月も照り添ひ。松風も涼しくて神さびわたれる折からに。凡そ人間の業なりとも感應などかなかるべき。況してや神前の事業なれば。げにも妙なる御代のしるし。治世の聲は安樂にて。琴瑟は玉殿に。鉦鼓は庭上宮商上り下る時に聲。あやをなす舞歌の曲。程時移るかと。はや明方にもなりぬれば。都に歸るは勅の使。さてこそ名殘の還城樂さてこそ名殘の還城樂の鼓の聲や二十五聲の。五更の

昔も太鼓の御役を勤めて、撥をうつたことだ。今もこの勝れた祕曲の相手をして、色々の撥拍子を打たう。おゝ今撥をうつと、波の音までが調子を合はせるわ。面白いありがたいことだ」

太鼓を打つ心持で、更に興に乘じた態で、〔樂〕を舞ふ。

【八】

源太夫「實に面白い舞樂だ」

と、時も折よく月まで照り添うて、松風の音も涼しく、あたり一邊神々しい氣分が滿ち漂ふのである。かやうな折には、たとひこれが人間の仕業であつても、神の御感應遊ばさぬ筈はないのであるが、況してこの舞樂は神前で行はれるのであるから、實に立派なもので、御代泰平の瑞相を示して、樂の聲は安樂の響きをなし、殿上でせられる琴瑟、庭上で行はれる鉦鼓、いづれも或は宮音或は商音、時に應じて高い調子となり、又低い調子となり、舞樂の曲は變化の妙を極めるのである。やがて大分時間も經つたと見え、はや夜明け方になると、勅使は都に歸る。そこでその名殘を惜しんで還城樂が奏せられる。その鼓の聲が二十五聲の音

○宮商―宮、商、角、徵、羽の五音のうちの二。
○還城樂―舞樂の名。大食調の曲。都に歸る緣で出した。
○二十五聲―五音を更に五分した聲調。
○五更の一點―五更は夜を五分した最後の時、今の午前四時。一點は一時（今の二時間）を四分した最初の時。即ち五更の一點は午前四時の夜明け時をいふ。

一點より夜はしらじらとぞ明けにける夜はしらじらと明けにけり

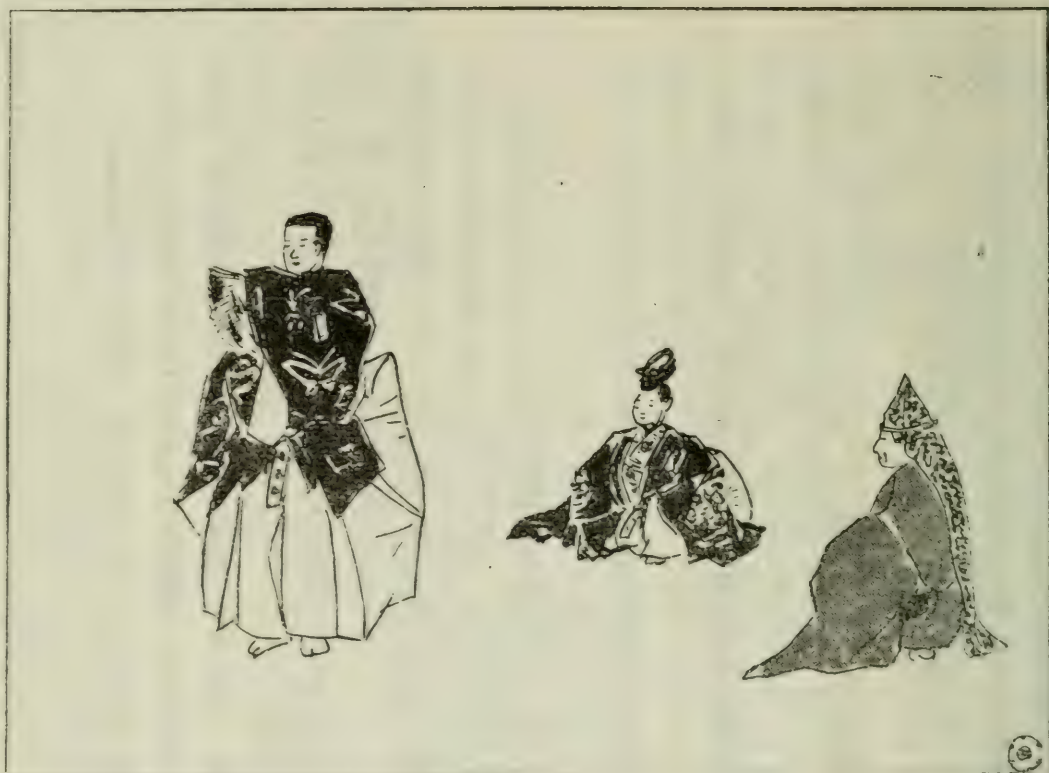
と舞ひ納めて常座にて留拍子を踏む。

律正しく調べられてゐるうちに、朝方となつて、夜は白々と明けて行つた。

夜の白むと共に神の影向も消ゆる態で、後ヅレ退場。ワキも都に歸る態で退場。

〔考異〕

古諸本（觀世流元祿八年本）

【一】ワキ「抑もこれは……靈神にて御座候由君聞し召し及ばせ給ひ（元聞）……宣旨を蒙り（元に任せ）唯今熱田の明神（元尼州）に參詣（元下向）仕り候…… ワキ「急ぎ候程に……神拜申さうずるにて候（元ナシ） 【三】ワキ「われ曉天より……そも（元ナシ）御身は…… シテ「さん候……庭を清め湯仰（元信心を）致し候……シテ「けに（元ナシ）御不審は…… ツレ「然るに往昔（元當時）……ワキ「謂れを聞けばありがたや（元實有難き御事哉）さては……謂れを語り候（元給）へ 【四】ワキ「猶々當社の（元御）神祕懇に申しあげ（元委く御物語）候へ……………

元服曾我（げんぷくそが）　喜

解説

【能柄】 四番目　二段劇能

【人物】 **シテ** 曾我十郎祐成、**ツレ** 從者團三郎、**狂言** 箱根能力、**ワキ** 箱根別當、**子方** 箱王丸

【所】 **第一段** 相摸國　箱根寺
　　 第二段 同　箱根街道の宿

【時】 建久元年九月

【作者】 能本作者註文に宮增の作とす。看聞日記に永享四年三月十四日仙洞御所で「曾我五郎元服」が演ぜられたと見えてゐるのは本曲のことと察せられ、親長卿記には長享二年二月二十三日「元服曾我」の演ぜられたことが見えてゐる。

【梗概】 曾我十郎は箱根別當に預けられてゐる弟箱王を別當から申し受けて、曾我へ歸る途中、わが手で弟を元服させた。そこへ別當が來て、元服を祝ひ重代の太刀を與へた。十郎は別當に勸められて、祝ひの舞を舞ふ。

【出典】 箱王丸元服の事は吾妻鏡建久元年九月七日の條に、

戊午、甚雨、入レ夜故祐親法師孫子祐成(號二曾我十郎一)相二具弟童形一(號二筥王一)參二北條殿一、於二御前一令レ遂二元服一、號二曾我五郎時致一、賜二御騎一疋一、是祖父祐親法師者、雖レ奉レ射二二品一、其子弟事、於レ今者不レ及二沙汰一、祐成又相二從繼父祐信一、在二曾我庄一、依二不肖一雖レ未レ致二官仕一、常所レ參二北條殿一也、然間今夜儀强不レ及二御斟酌一云々。

とあり、曾我物語(流布本)卷四「箱王曾我へ下りし事」「箱王が元服の事」にも、

箱王つく〴〵と思ひけるは、法師になりたりとも、折節につけて、この事思ひ思はば罪深かるべし。一向に思ひ切り、男になりて本意を遂ぐべし。その砌には後悔するとも叶ふまじ。この事を十郎殿といひ合せて、とにもかくにも定めてと案じ、人にも知らせずして、唯一人夜に紛れて曾我の里へぞ下りける。

と箱王自身の發意で曾我へ下り、然る後兄十郎とともに北條時政の館へ行つて、烏帽子親を賴む。そこで時政は、

誠に面々の御事見放し申すべきにあらず。然れば餘所にてもあらば無念なるべし。尤も本望なり。時政の子と申さんとて、髮を取り上げて烏帽子を着せ、曾我の五郎時致と名乘らせ、鹿毛なる馬の五ざう逞しきに白覆輪の鞍おかせ、黑絲の腹卷一領添へて引かれたり。

といひ、眞字本曾我物語にも卷四及び卷五に同樣の事を記してゐる。然るに本曲に、十郎が弟箱王を別當から貰ひ受けて、自分の手で元服させる事としてゐるのは、何に據つたものであらうか。室町時代の作品幸若舞曲にも「元服曾我」があるが、史實又は物語と同樣で、謠曲とは趣を異にしてゐる。恐らくは能作者が史實及び物語を度外視して、創作したものであらう。たゞ箱王の命名及びその箱根寺に預けられた理由については、眞字本曾我物語卷四にだけ、

弟筥王申二十一歲一霜月中半比、(母)呼二寄膝許近一、汝父自レ本信二進筥根權現一故、名二付筥王一、而行二筥根別當許一、學文吉成二法師一、父孝養可レ助二童後世一

とあるから、本曲の作者は眞字本を參照したかと思はれる。

【槪評】 前述の通り本曲は有力な典據を持ちながら、能作者の創案した點が多いのであるが、その結果戲曲としての效果を增大したやうに思はれる。まづ元服の前段に於て、箱王丸が寺を脫出すると脚色するよりは、十郎が迎へに來て、別當と交渉し、別當をして箱王の

眞情を聞かしめる方が、十郎の人を賴りにする温和な性格、箱王の幼い中に負けじ魂を持つてゐる性格、別當の同情深い性格などを描出するのに、誠に都合がよい。殊に後段の元服に於て、老獪な北條時政の手を煩はすよりは、兄十郎の手によつて、淋しく髮をはやさせた方が、どの位觀客乃至讀者にすが／＼しさを感ぜしめ、同情を起さしめるか知れない。しかもこの淋しさを慰める爲には、別當が後を追つて來て、重代の太刀を與へることを構想してゐるのであるから、淋しさは轉じて力強い期待をさへ持たしめてゐるのである。――この別當が太刀を與へることは、所謂劒讃歎（曾我物語卷八）の傳說を採り入れたもので、一層興味深く感じられる。

脚色の形式は、現在物であるから類型を脫してゐる。第一段は前述の通り十郎・箱王・箱根別當の性格描寫に力を注ぎ、第二段は二節に分けて、前節には淋しい元服を、後節には太刀贈與の力強い期待を描き、十郎の男舞によつてめでたく局を結ぶこととしてゐるのである。

第一段

【一】

ワキ箱根別當、角帽子・着附小格子厚板・絓水衣・腰帶・扇・數珠の裝束、狂言能力、能力頭巾・着附無地熨斗目・括袴・脚半・扇の裝束にて出で脇座に坐す。

次第の囃子にて、シテ曾我十郎、直面・侍烏帽子・襟淺黃・着附段厚板・掛直垂・白大口・腰帶・扇・小刀の裝束、ツレ團三郎、襟樺・着附段熨斗目・素袍上下・扇・小刀の裝束にて太刀を持ちて出で、舞臺に入り向合ひ、

シテツレ次第『うつを限りの秋衣。うつを限りの秋衣。恨みをいつか晴らさん

地取にシテは正面に向き、

シテ「これは曾我の十郎祐成にて候。さても某が親の敵の事。世に隱れなく候へども。敵は猛勢

【一】

舞臺は初め相模國曾我の里で、シテ曾我十郎、ツレ團三郎を隨へて登場。

十郎「砧で衣を擣つ頃となれば、それを限りに秋も暮となるやうに、自分も父の敵を討てば、それを限りに恨みも晴れようものを、いつその時節が來ることだらう」

と夫婦を言つてわが心持を述べ、

十郎「自分は曾我十郎祐成です。さて自分が親の敵を討つべき身であるといふことは、世間に知れ渡つてゐることだが、敵

【一】

○うつを限りの―「うつ」を砧を擣つと敵を討つとに兼ね、敵を討てばそれ限りに恨みが晴れようがとの意に用ゐた。恨みは衣の縁語裏にいひかけた。

○秋衣―砧は秋擣つものであるから、かういつた。

○曾我の十郎―伊豆の人河津三郎の子。五歲の時父が工藤祐經に討たれた後、曾我祐信に養はれた。（「小袖曾我」參照。

○親の敵―工藤祐經。

○箱王—十郎の弟、五郎時致の童名。解說參照。
○箱根の御寺—相摸國足柄下郡箱根の箱根權現。鎌倉時代伊豆三島明神と共に特に崇信せられた。
○男—童形の者を元服させて成人の男とすること。
○一樹の蔭に宿る—說法明眼論に「宿二一樹下一、汲二一河流一、一夜同宿、一日夫妻……皆是先世結緣」。平家物語卷七に「一樹の蔭に宿るも前世の契り淺からず、同じ流れをむすぶも他生の緣なほ深し」。
○深きちぶさ—父母の恩。その廣大なことを海山に喩へた。
○乾す便り—親の恨みを晴らすことを指す。
○曾我の里—相摸國足柄上郡にあり、曾我兄弟の養父祐信の居所。
○月影は雪にて—月影は雪の光で一層明るいとの意。
○明くる—光の明くるを箱の開くにいひかけ、箱根山を呼び起した。

われ等は一人の事にて候程に。思ふに甲斐なく罷り過ぎ候。又弟にて候箱王は。幼少より箱根の御寺に上せ置きて候。餘りに便りなく候程に。かの者を男になし。諸共に本望を達せばやと思ひ。唯今箱根の御寺へと急ぎ候

シテサシ『一樹の蔭に宿ることも。これ生々の契りなり。シテツレ（向合ひ）『同井の流れを汲むも皆。前世のかたらひの宿緣なり。深きちぶさの海山の。たとへは積る恩德の。情を思ふ涙の袖乾す便りをと待つまでの命を賴むばかりなり。身は露霜の果までも。兄弟ならでは又もなし。急ぎ箱根の寺へ上り。箱王殿を呼び下し。父の恨みの涙の袖をもともに乾すやとて曾我の里を立ち出づる。

シテツレ（上歌）『月影は雪にて明くる箱根山。雪にて明

は多勢で力が強く、自分の方はたゞ一人なので、心ならずも空しく月日を過してゐるのです。ところで、弟の箱王は幼い時から箱根の御寺に上げてあるのだが、自分一人ではあまり賴りなく思はれるので、あの弟を元服させて、弟と一所に力を合はせて本望を遂げたいと思ひ、これから急いで箱根の御寺へ上るのです」

と見物人に自己紹介をし、

十郎「偶然二人の者が同じ木蔭に立ち寄るのも、また同じ流れの水を汲むのも、實は偶然の出來事ではなく、皆前世からの約束事であり因緣であるのだ。況して父母の恩德は海にも山にも喩へ難いもので、その厚い情を思ふ時には、落ちくる涙に袖が濡れて、乾く隙もないのだが、たゞ本望を達し恨みを晴らすまでの命と思ひ定めてゐるのだ。自分の身はこのやうに果敢ないもので、兄弟の外には賴りにすべきものもないのだから、急いで箱根の寺に上つて、箱王を元服させ、父の恨みを晴らし、われらの歎きを止めたいと思つて、この曾我の里を出て行くのだ」

と曾我を出發する態で、

十郎「月影が雪の光で一層明るい箱根山を

○峯も二つの―二つは月と雪との光で、箱の緣語蓋にいひかけた。
○うつろふ富士を―水に映る富士を見るを湖にいひかけた。湖は箱根山中の蘆の湖を指す。
○波の雪も時知らで―新古今集在原業平の歌―時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらん―に據り、富士の雪が四季ともに消えないのみか、波の雪も常に見られると、波を雪に見立てたのである。
○心ばかりの頼みにや―本望を達したいと思ふ心ばかりを力にして、甲斐なき命を永らへてゐるとの意。
〔團三郎〕曾我物語に鬼王と共に曾我兄弟の從者として記す。
○別當―僧職の一。三綱の上にあつて一山の法務を統御するもの。
【三】

くる箱根山。峯も二つの影添ひて。ほのぼのと。うつろふ富士を湖の波の雪も時知らで。春夏秋をば送れども。いつか思ひの末通る。心ばかりの頼みにや。つれなき命惜しむらんつれなき命惜しむらん

シテ正面に向き、

シテ「急ぎ候程に。これははや箱根の御寺に着きて候。(ツレに向ひ)いかに團三郎。急ぎ別當に參り。某登山仕りたる由申し候へ

ツレ「畏つて候

シテくつろぐ。ツレ脇座に向ひ、

【三】

ツレ「いかにこの内へ案内申し候

狂言(立ちてツレに向ひ)「案内とは誰にて渡り候ぞ

ツレ「祐成の御登山にて候

狂言「その由申さうずる間。暫くそれに御待ち候へ。(ワキの前に出で)いかに申し候。祐成の御登山にて候

雪と月との光に照らされながら、上つて行くと、ほの〴〵と夜も明方になつて、富士の雪が蘆の湖に映つて見えることだ。さういへば、富士の雪が四季ともに消えないばかりか、波の雪も常に見られることだが、自分は永い年月を空しく送つて、いつになつたらば本望を達することが出來ようか、たゞ敵を討ちたい一心で、生き甲斐のない命を永らへてゐることだ」

さいつてゐるうちに、箱根に着いた態で、舞臺は箱根寺となる。

十郎「道を急いだので、思ひの外早く箱根の御寺に着いた」

さいつて團三郎に向ひ、

十郎「おい團三郎、別當の御坊へ行つて、わしが參つたと通じてくれい」

團三「畏りました」

【三】

舞臺は別當の坊となり、ワキ箱根別當が狂言能力と共に登場してゐる。

團三「もうしこの御坊の方にお取次を願ひます」

能力「となたです」

團三「祐成が御登山になつたのです」

能力「では、その事をお通ししますから、暫くお待ち下さい(別當に)申しあげます。祐成が御登山でございます」

○元服―少年が始めて大人の服を着、冠を加へて大人となる儀式。

ワキ「なにと祐成の御登山と申すか
狂言「なか〳〵の事
ワキ「此方へと申せ
狂言「畏つて候。（ツレに向ひ）最前の人の渡り候か。その由申して候へば。かう〳〵御通りあれとの御事にて候
ツレ「心得申し候。（シテに向ひ）かうかう御通りあれとの御事にて候
ワキ「いかに祐成こなたへ御入り候へ
シテ舞臺の眞中に出でて下に居る。
ワキ「さて唯今は何の爲の御登山にて候ぞ
シテ「さん候唯今參ること餘の儀にあらず。弟にて候箱王を申し請け元服せさせばやと存じ。その爲登山仕りて候
ワキ「なに箱王殿を元服させん爲に御出でと候や
シテ「さん候

別當「何ぢや、祐成が御登山になつたといふのか」
能力「さうでございます」
別當「こちらへと申せ」
能力「畏りました。（團三郎に）申し入れましたら、こちらへお通り下さいとの事で―」
團三「ありがたう。（十郎に）こちらへお入り下さいとの事でございます」
祐成別當の前に出る。
別當「おゝよくこそ。どうぞこちらへ。……して、唯今の御登山はとういふ御用でございますな」
十郎「はい唯今參りましたのは、別の用でもございませんが、實は弟の箱王を頂戴して元服させたいと思つて參つたのでございます」
別當「なに、箱王殿を元服させたいと思つて、お出でになつたのか」
十郎「さうです」

○大方殿—貴人の母を呼ぶ稱。
○女ばからひ—女の淺い料簡。
○河津殿—兄弟の父、河津三郎祐泰。
○御綺ひ—關係、干渉すること。

ワキ「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。箱王殿の御事は。大方殿より出家になし申せとこそ承り候に。何と思しめしてかやうには承り候ぞ

シテ「仰せ尤もにて候へども。それは母にて候者の女ばからひにて申され候。ただ平に祐成にたまはり候へ

ワキ「いや大方殿の御意ばかりにても候はず。故河津殿より仰せらるる子細の候間。總じて祐成は御綺ひあるまじく候

シテ「仰せ少しも違はず候。親にて候者の申すことはさる事にて候へどもさりながら。御心を靜めて聞しめされ候へ。われ等が親の敵の事。あはれ討たばやとは存じ候へども。『敵は猛勢力なし。唯別當の御慈悲にて。箱王を男になし。父の

別當「これは意外な事を伺ふものだ。箱王殿の事は、御老母樣から出家にしてくれと仰しやつたのです。どうしてそのやうな事を仰しやるのです」

十郎「いかにも仰せは御尤もでございますが、それは母の淺い女智慧から、物事をよく考へないで申されたのでございませう。どうか是非ともこの祐成に戴きたいのですが……」

別當「いや／＼御老母樣お一人のお考へだけでもありません。お父上河津殿の仰しやつた事情もあるのだから、この事については、そなたは全く御干渉なさらぬがよからう」

十郎「お言葉は一一御尤もです。親の申す事も無理にはございませんが、しかし、どうか私の申す事もよくお聞き下さい。實は私どもの親の敵の事が絶えず心にかゝつて、どうか旨く討ちたいと思ふのですが、敵の方は多勢で力が強く、どうする事も出來ないのです。どうか別當樣の御慈悲で、箱王を元服させ、父の恨みの敵

○是非の言葉—かれこれと說き聞かせる言葉。

○胸の煙もその名をも—富士山はもと噴火山であつたから、兄弟の鬱憤を富士の煙に喩へた。

【三】

○力及ばぬ事—致し方のないこと。

○領掌—承諾。

恨みの敵をも。ともに討たせて給はらば。出家の功德に劣るまじと

地(下歌)「かきくどきつつ申せば是非の言葉もあらばこそ。理なれや痛はしやと。別當も列座の人も殊に袖をしをりけり。(上歌)「夢の世にながらへて。夢の世にながらへて。あるも甲斐なき身の行方。命ぞ恨みなる惜しまずながらながらへて。思ひはいつかは末遂げて。胸の煙もその名をも富士の嶺に上げて兄弟が。その亡き跡弔はれんその亡き跡弔はれん

【三】

ワキ「言語道斷。祐成にくどき立てられ申してそぞろに落涙仕りて候。この上は力及ばぬ事。別當ははや領掌申して候さりながら。箱王殿の御心中を存ぜず候程に。呼び出だし尋ね申さうずるにて候

敵をも一所に討たさせて下されば、それこそ出家の功德にも劣るまいと思ふのでございます」

と、かき口說いていふので、別當はとやかくとこれを說き伏せる言葉もなく『いかにも尤もだ、氣の毒なことだ』と別當もその外座に居合せた人々も、皆淚にくれて袖を濡らしたのである。

十郎は更に言葉をつゞけて、

十郎「夢のやうなこの世に永らへて、生きてゐても、生き甲斐もない身の上で、いつ死んでも惜しくもない命ながら、どうかこの息のあるうちに、いつかは本望を達して、胸に燃え立つ鬱憤を晴らし、富士山のやうな高名を立てて、兄弟の死んだ後を回向して戴きたいと思ふのです」

【三】

別當「いやはや、祐成殿に口說き立てられて、私も思はず落淚致した。この上は是非もないこと、私は承知しませうが、しかし箱王殿がどういふ考だか分らないから、こちらへ呼び出して尋ねて見ませう」

○祝着なる事—喜ばしいこと。

○能力—寺僧に従つて雑役をするもの。

○抜群—異常に。甚だ。

シテ「かかる祝着なる事こそ候はね。さらば箱王を此方へ召され候へ

ワキ「いかに能力

狂言「御前に候

ワキ「祐成殿の御登山にてあるぞ。箱王殿に此方へと申し候へ

狂言「畏つて候。（橋懸へ出で幕に向ひ）いかに箱王殿こなたへ御出であれとの御事にて候

子方箱王、襟赤・着附箱・長絹・白大口・腰帯・扇の装束にて出づ。

ワキ「御覧候へ殊の外なる御成人にて候ぞ

シテ「仰せの如く久しく見候はねば抜群成人仕りて候

ワキ「いかに箱王殿。唯今祐成の御登山餘の儀にあらず。御身を元服せさせ申し候はんとの御事にて候。但し箱王殿は何と思しめされ候ぞ

子方「ともかくも師匠の御計らひにてこそ候へさりながら。我等が親の敵の事。世に隠れなき

十郎「このやうなありがたい事はございません。それでは箱王をこちらへお呼び下さい」

別當（能力に）「おい能力、祐成殿がお出でだぞ。箱王殿にこちらへお出でなさいと申してくれい」

子方箱王、能力に伴はれて登場。別當箱王を見て十郎に向ひ、

別當「御覧下さい、大變成人せられました」

十郎「仰せの通り、永らく會はなかつたので、馬鹿に大きくなりました」

別當「おい箱王殿、唯今祐成殿が御登山になつたのは、外の御用でもない、そなたを元服させたいと仰しやるのだが、そなたの考へはどうぢやな」

箱王「いづれなりともお師僧様のお考へでお定め下さいませ。たゞ私共が親の敵を持つてゐる事は、世間に知れ渡つてゐる

○ともども―別當と兄と。
○この子善くは―箱王の人柄が善ければ。
○師弟の契約―師弟の約束
○御身―箱王を指す。
○内には―内教。佛教。

事ぞかし。同じ兄弟にて候へば。十郎殿の御身の上。一人に限らぬ敵ぞかし。たとひ寺にありとても。忘るる隙はよもあらじ。ともども計らひ給ひ候へ

ワキ「さてはばや箱王殿の御心中も元服の御望みと聞え申して候。いかに祐成心を靜めて聞しめされ候へ。箱王殿生まれさせ給ひし時。故河津殿別當を召され。この子善くは弟子ともなし。惡しくは兎も角も別當が計らひたるべしと仰せられし程に。權現の社官別當なれば。箱根を象り御名をも箱王殿とつけ申す。『今元服の折までも。師弟の契約淺からず。同じくは出家をも遂げさせ申し。一寺をも繼がせ申したくは候へども。御身の心もさすがなり。祐成の御事も痛はしし。よし俗體になり給ふとも。内には慈

のでございます。そして私も同じ兄弟でございますから、敵討は兄十郎殿一人に限つてゐないのでございます。それで、私もたとひ寺に居りましても、敵の事を忘れる隙はよもやなからうと思ひます。どうか兄とお二人で、よきやうにお計らひ下さいませ」

別當、なる程、今の話で箱王殿も元服したいと思つて居られることが分りました。(十郎に)ところで祐成殿、よくお聞き下さい。箱王殿が生まれられた時、故河津殿がわしを呼んで、『この子が成人してよい子になつたならば、弟子にして下さい、もしいけなければ、どうなりとも別當の考へで取計つて下さい』と仰しやつたのだ。それでわしには箱根權現の社官別當なので、箱根の文字に象つて、名を箱王殿とつけて、今元服せられるまで、長い年月深い師弟の約束を結んで來たのです。そして出來ることならば、出家をも遂げさせ、一寺を相續させたいと思ふのだが、箱王殿が元服したいと思はれるのも無理はなし、また祐成殿の御事情もお氣の毒に思ふのです。たとひ俗體になられても、佛の敎へを守つて慈悲の心を旨とし、又

○外には—外典。佛教以外の教。儒教。
○影身になり—影になり、身になつて、互に助け合ふこと。
○深き箱根の海山の—淺からぬから深きを呼び出し、深きから箱根の海卽ち蘆の湖を出し、海から更に山と續けた。
○ともに影高き—兄弟ともに立派に成人したこと。
○花の若枝—年若い兄弟の喩。
○月の盃—月を盃に、また盃を月に喩へていふ。
【四】
○嵐につるる—嵐の吹くに從つて。
○梅が香—箱王を喩へた。
○有明の盡きぬ—花に對して有明の月を出し、月を盡きにいひかけた。
○あらまし—期待。復讐の計畫をいふ。

悲の心中をなし。外には仁義を旨として。祐成の影身になり給へと。別當手づから酌をとり

地「行末をいのる師弟や兄弟の。いのる師弟や兄弟の。心はともに淺からぬ。深き箱根の海山のたとへは同じ心にて。年々月日を迎へても。なほ成人を急ぎつる。その甲斐ありて今ははや。ともに影高き花の若枝ぞめでたき。かくてこの日も暮れ方の月の盃急ぎつつ

【四】

シテ子方（ロンギ）「時刻も今は移るなり暇申して歸らん

ワキ「花を吹く嵐につるる梅が香を。とめてもいかが有明の盡きぬぞ名殘なりける

シテ子方「名殘はさぞなあらましの。末頼みある中なれば

ワキ「又登山もあるべしや

シテ子方「さらばといひて兄弟は（と二人立ち）

儒教に從つて仁義を重んじ、祐成殿と二人、互に影になり形になり、助けあつてお出でなさい」

といつて、別當自身が酌をして、兄弟の將來の成功を祈るのである。誠に師弟兄弟の情愛はいづれも劣らず深い。深いので、箱根山や蘆の湖にも譬ふべき深い高い兄や師僧の恩愛によつて、年月を迎へるにつけて、愈々箱王の成人を急いで來た甲斐があつて、兄弟打揃つて、花の若枝のやうに生ひ立つたのはめでたいことである。かうして、盃をとりかはしてゐるうちに、日も夕暮になつて、丸い月が空に上つて來た。

【四】

十郎箱王「もはや時刻も經ちました。では、お暇して歸りませう」

別當「花を吹き散らす嵐に誘はれて散つて行く梅のやうに、可愛らしい箱王殿と別れてしまふのは、いかにも名殘惜しいことです」

十郎箱王「お名殘は惜しうございますが、敵を討つべき望みを持つてゐる身でございますから……」

別當「それでは、又御登山下さるやうに……」

十郎箱王「ではお暇致します」

【五】

○涯分—隨分。

○近頃めでたき御事—近頃にない、非常にめでたいこと。

ワキ『はや門前を

シテ子方『出で行けば

地『さすがに別當も。年月馴れし馴染をば。いつか忘れんその跡を。見やれば伴ひ兄弟は。曾我の里にぞ歸りける曾我の里にぞ歸りける

ワキ、シテ・子方を見送りたる心にて後見座にくつろぐ。

【五】

シテ「いかに團三郎

ツレ「御前に候

シテ「別當の色々仰せられしを。涯分申して箱王を伴ひ歸ることの嬉しさは候

ツレ「御諚の如く近頃めでたき御事にて候

子方「いかに申すべき事の候

シテ「何事にて候ぞ

子方「このまゝ古里へ歸り母御に對面申すならば。定めて元服は叶ふまじきと仰せ候べし。こ

といつて、兄弟ははや門前に出て行くと、さすが別當も永い年月馴れ馴染んでゐた箱王の可愛さを忘れられよう筈もなく、兄弟の出て行く跡を見送ると兄弟は連れ立つて曾我の里へ歸つて行つた。

【五】

第二段

舞臺は箱根から曾我館へ歸る途中。

十郎「おい團三郎—

團三「はい」

十郎「別當が色々いつて斷られたのを、一生懸命かき口說いて、かうして箱王を連れて歸ることの出來たのは、嬉しいことだな—

團三「仰せの通り、ほんとにおめでたいことでございます」

箱王「もうし、お兄樣—

十郎「何だ—

箱王「このまゝ雜兒姿で故鄕に歸つて、お母樣にお會ひしたならば、きつと元服してはならないと仰しやるでせう、たか

○路次—途中、途すがら。
○髪をはやして—切るといふ言葉を忌んで「はやす」といふ。長い童髪を切つて元服すること。
○聊爾—かりそめ。輕卒。

○こざかしき—小生意氣な

○人宿り—宿屋。
○そと—一寸。簡單に。

○父を討たせ—父を討たれ。受身を忌んで使役にいふ武士言葉。

の路次にて髪をはやして給はり候へ
シテ「げにげにこれは尤もにて候さりながら。元服などと申すことは聊爾にはなき事にて候。但しいかに團三郎
ツレ「げにげに箱王殿の御諚の如く。このまま御歸り候はば。定めて大方殿とかく仰せられ候べし。こざかしき申し事にて候へども。何か苦しう候べき。めでたく唯この人宿りにてそと御髪をはやし申されかしと存じ候
シテ「さては汝もさやうに存ずるよな。さらばこれなる人宿りにてそと髪をはやさうずるにて候
シテ子方に小結烏帽子を着す。
シテサシ『げにやわれ等ほど果報拙き者はよもあらじ。幼くして父を討たせ。その本望をば遂げずして。なほあり甲斐なき身となりぬ。よしよ

ら、この途中で髪を切つて元服させて下さい」
十郎「なるほど、これは尤もだが、元服などといふ事は、さう疎略にしてはいけないことなのだ。ねえ團三郎、どうしたものだらう」
團三「いかにも箱王殿の仰しやる通り、このまゝお歸りになつたならば、定めし大奥樣がかれこれと仰しやいませう。差し出た事を申しあげますけれど、何も構ふことはございません。こゝの宿屋で、簡單に御髪をお切りになるのがよろしからうと存じます」
十郎「それではお前もそのやうに思ふのだな。では、こゝの宿屋に入つて、簡單に髪を切らう」
一同宿屋に入つて態で、舞臺は宿屋の中となり、十郎箱王を元服させて冠を加へる。
十郎「ほんとに自分達ほど運の悪い者は、よもや外にはあるまい。幼い時に父上を討たれて、まだ敵討の本望が遂げられず、生き甲斐のない身上となつたことだ」
箱王「しかし、それも是非がないことです。

○そゞろにせきあへぬ―いつとはなしに流れ出る涙の止めきれない意。
【六】
○輪廻の迷ひ―心の迷ひが晴れず、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天の六道を車輪の如くに廻り廻ること。
○因果―善因惡因によつて善果惡果の生じること。
○絆―ものを縛る綱。絶ち難い恩愛。
○宿緣―前世からの緣。
○子を思ふ道には―後撰集藤原兼輔の歌「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな」に據つた。
○雲居の鶴―白氏文集に「夜鶴憶レ子籠中鳴」とあり、諺にも「燒野の雉子夜の鶴」といつて、鶴は最も子を愛するものといふ。

しそれも命の限り。終には恨みを晴るべきなれば。唯元服こそ嬉しけれと。兄弟主從すごすごと

地「髪をはやして千代までと。言葉ばかりは祝へども。そゞろにせきあへぬ涙や袖をしをるらん

【六】

地クリ「それ生死の道樣々にして輪廻の迷ひ多し。因果を離れぬ絆皆。親子兄弟の。宿緣なり

シテサシ「げにや人の親の迷ふ事。まことの闇にはあらねど

地「子を思ふ道にはたどるといふ。雲居の鶴は月影の。さやけき空と思へども。それも子をのみ思ひの闇に。聲をかはして鳴くとかや

シテ「われ等はまた親の跡に

地「殘りて物を思ひの露の。雨とも降り涙とも過ぎ。いつかは晴れん心の闇の

たゞ命さへあれば、いつかは恨みを晴らすことが出來るのですから、今はたゞ元服したことが何より嬉しいのです」と、兄弟主從とも〳〵もの淋しい心を以て、箱王の童髪を切り、言葉の上だけでは『千代までも榮えるやうに』と祝ふのであるが、いつとは知れず流れ出る涙がとゞまらないのである。

【六】

十郎「一體人間の生き死にして行く道は、三界六道などといつて色々あるが、結局心の迷ひは晴れず、その六道を廻り廻つてゐるのだ。そして、いづれも因果應報の理に外れるものはないのだが、その中でも最も恩愛の離れ難いのは、親子兄弟の仲で、これは皆前世からの宿緣によるものだ。

殊に人の親心ほど愛の深いものはなく、和歌にも『人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな』といひ、空飛ぶ鶴は空が月影で明るい時でも、子を思ふ爲には心が闇になつて、聲をかはして鳴くといふことだ。

ところが、自分達はその愛の深い親に先立たれて、後に殘り、たゞ物思ひにのみ

○龍門原上の土—和漢朗詠集白樂天の句「龍門原上土、埋レ骨不レ埋レ名」を引いた。龍門は邊塞の地名。
○後名の嘲り—死後の汚名
○千里を驅ける虎—諺に「人は名を惜しみ、虎は毛を惜しむ」といふが、出所未詳。
○弓取—武士。
○明鏡　明經又は妙經の誤りか。
○身は一代名は末代—古諺
○電光朝露—命のはかない喩。慈恩傳に「何爲二電光朝露少時之身一作二阿僧企耶長時苦種一」
○石の火—燧石から出る火。命のはかない喩。萬善同歸集に「無常迅速、念々遷移、石火風燈、逝波殘照」

シテ「名をや埋まん苔の下
地「朽つるは浮世の。習ひかな
(居クセ)
地クセ「龍門原上の。土に身はなるとも。骸の跡を思へただ。惜しみても惜しむべきは後名の嘲り。されば大國に千里を驅ける虎は。一毛を惜しみて吹き來る風を含みてその身をかへて死すとかや。日本の弓取は。その名を末代の家に惜しみ。一命を輕んずるも。これ皆明鏡に本文を思ふ心なり。身は一代名は末代。理や世の中は電光朝露石の火のあるにもあらぬ草の露。消ゆる境は夢なれや
シテ「今のわれ等が有樣を
地「思ふも憂き命の。惜しからぬ身なれども。本望を遂ぐるまでと。頼む便りや兄弟。主從とも

時を過して、悲しみの涙に雨のやうに流れ落ち、いつ心の晴れる時もなく、いつも闇の夜の思ひをして、名を顯すこともなく、徒らに苔の下に朽ち果ててしまふとは、實に情ない世の中だ。

いや〳〵、この身はたとひ邊塞の士と化しても、死後の名を思はなければならない。何を措いても考へなければならないのは、死後の汚名だ。だから、外國の一日に千里を走る虎は、死後に殘るべき一本の毛をも大切にして、吹き來る風に毛を奪はれる時は、命を捨ててこれを防ぐといふことだ。それからまた、わが日本の武士が末代まで殘る家名を重んじて、一命を輕んずるのも、皆經書の敎を思ふ心から出たものなのだ。いかにもその通り「身は一代限り、名は末代まで殘る」もので、この世の中は、電の光か朝の露か乃至は燧石を打つ火のやうな極めて短いもので、生きてゐると思ふ間もなく死んでしまふ、まるで夢のやうなものなのだ。

現に今の自分達の有樣を考へて見ても、生き甲斐のない命で、死んで惜しくない身であるが、たゞ本望を遂げるまでは生

○初元結—元服して初めて髻を結ぶこと。

【七】

○失念—忘れる。

にすごすごと。髪をはやして祝言の。言の葉添ふる初元結。行方はめでたかるべしや。親孝行もかくばかり。さこそは草の蔭にわれ等を守り給ふらん

【七】

ワキ橋懸に出で、

ワキ「いかに能力

狂言「御前に候

ワキ「祐成に申すべき事のあるをはつたと失念してあるぞ。追つついて申さうずる間。汝は先へ行き候ひて。いづくまで御出でありたるぞ見て來り候へ

狂言「心得申して候。はや抜群に御出であらうものを。未だこれに御座候。いかに案内申し候

ツレ「誰にて渡り候ぞ

狂言「別當これへ參られ候。この由御申しあつて給はり候へ

ツレ「さらばその由申し上げうするにて候。(シテに)

きてゐたいと思ふのだ。そしてこの爲に、兄弟主從が寄つて、もの珍しく童髮を切り、祝言の言葉を述べて、初元結を結ぶのであるから、きつとこの末はめでたいことであらう。親孝行の爲にこのやうにするのだから、亡き父上も草葉の蔭で私達を守つて下さることだらう」

【七】

橋懸は箱根別當の坊で、

別當「おい能力、祐成にいはなければならない事があつたのを、ころりと忘れてゐた。追つかけて行つていひたいと思ふから、お前は先へ行つて、何處まで行かれたか見て來てくれい」

能力「畏りました。(舞臺に來て團三郎に)申し、お取次を願ひます」

團三「どなたです」

能力「別當がこちらへお見えになります。どうぞさう申し上げて下さい」

團三「では申し上げませう。(十郎に)申し上

○なんぼう—いかほど。非常に。

いかに申し上げ候。別當のこれまで御出でにて候

シテ「なに別當のこれまで御出でと申すか。此方へ御出であれと申し候へ

ツレ「畏つて候。（狂言に）こなたへ御出であれとの御事にて候

狂言「畏つて候。（ワキに）こなたへ御出であれとの御事にて候

ワキ舞臺に入る。

シテ「さてこれまでの御出では何事にて候ぞ

ワキ「さん候これまで參る事餘の儀にあらず。箱王殿の御髪を。愚僧はやし申さん爲に參りて候

シテ「その事にて候。箱王申し候は。このまま古里へ歸り候はば。母にて候者定めて元服は叶ふまじきと申し候はんずる間。この路次にて髪をはやせと申し候程に。唯今これにて某がはやし申して候。御覽候へなんぼう見事の男になりて候

げます。別當がここへお出でになります」

十郎「なんだと、別當がここへお出でになるといふのか。どうぞこちらへお通り下さいと申せ」

團三「畏りました。（能力に）こちらへお通り下さいとの事です」

能力「畏りました。（別當に）こちらへお通り下さいとの事でございます」

別當、十郎等の居る所へ通る。

十郎「して、ここへお出で下さつたのは、何の御用でございます」

別當「さやう、こちらへ參つたのは別の用でもありません、箱王殿の童髪を私が切つてあげようと思つて、その爲に參つたのです」

十郎「その事でございますが、實は箱王が申しますには、このままで故鄕へ歸つたならば、母がきつと元服してはいけないと申されるでせうから、この途中で童髮を切つてくれと、かう申しますので、唯今ここで私が切つてやつたのです。御覽下さい、大變立派な男になりました」

○重代の太刀―代々相傳して來た太刀。
○伊豆權現―箱根の南にあり、走湯山權現ともいふ。
○圓居―丸くうちとけて坐ること。
○烏帽子櫻―櫻の種類であらう。元服の縁でいつた。
【八】
○菊の名の曾我―袖中抄に「そがぎく。黄菊なり、そがは承和をいひなしたる也。承和の帝黄なる色を好み給ひければ、黄なる色をば承和色といふ」とあり、そが菊は黄菊の異名であるから承和を曾我にいひかけた。

ワキ「それこそめでたき御事にて候へ。いでいで元服を祝はんと。別當に傳はる重代の太刀。伊豆權現の力を副へ。思ふ本望遂げ給へと。箱王殿に『奉る
地『やがて祝ひの御酒一つ。やがて祝ひの御酒一つ。勸め申せや人々と同じくともに圓居して酒宴をこそは始めけれ
シテ「咲く頃の。梢時めく折にきて
地『烏帽子櫻の。花を見ん
【八】
ワキ「いかに祐成。めでたき折なれば一さし御舞ひ候へ
地『烏帽子櫻の。花を見ん（シテ立ち）
〔男舞〕
シテ『菊の名の。曾我の昔を。思ひ出でて
地『萬代祝ふ心こそあれ。心こそあれ心こそあれ

別當「それはめでたいことでした。それでは元服のお祝ひをしませう。これは別當に代々傳へて來た相傳の太刀で、箱根權現は申すに及ばず、伊豆權現のお力添へを戴いて、立派に本望を遂げられるやうにと、この太刀を箱王殿にお上げしませう」
十郎「さあお祝ひのお酒を一つ差上げよ」と、皆一同寄り集つて酒宴を始めた。
十郎「咲く頃の梢時めく折にきて、烏帽子櫻の花を見ん」
（梢に花の咲き揃ふ眞盛り時に來て、烏帽子櫻の花を見よう）と謠ふ。
【八】
別當「十郎殿、これはめでたい折だから、一つ舞をお舞ひなさい」
十郎「……烏帽子櫻の花を見ん」（と謠ひ）
〔男舞〕
を舞ひ、
十郎「菊の名の曾我の昔を思ひ出でて、萬代祝ふ心こそあれ」
（そがといへば黄菊の異名であるから、この名のめ

シテ『心言葉は人の情

地『心言葉は人の情。徒らに朽ちぬ。身は惜しむべし名は殘りある世の。跡の世語り夢ならば覺めなん現とも白眞弓。引きはかへさじ引きはかへさじ富士の高嶺に必ず名を上げて。今の世語りと思しめさるべし。これこそ名殘の酒宴の戯れこれこそ名殘の酒宴の戯れ。師弟の情ぞ。ありがたき

と舞ひ納む。

でたさに、昔の盛りであつた時を思ひ出して、行末をめでたく祝はう」と謡ひ舞ひ、

十郎「このやうに心祝ひの言葉を申すのも弟を思ふ人情からでございます。何はともあれ、人の身の徒らに朽ち果てるのは殘念なことで、名をば末代まで語り傳へたいものでございます。この世は夢とも現とも分らないやうなものですが、私どもは必ず富士の高嶺に高名を立てて、この世の語り草と致すものと思しめし下さい。いやこれはお別れの酒宴に常談を申したまでです。何よりも師僧のお情はありがたいことでございます」

といつて、酒宴を終つた態で退場

○現とも白眞弓―現とも知らずといひかけた。

○引きはかへさじ―弓の縁語。

〔考　異〕

古謡本　（觀世流元祿八年本）

【一】シテ「これ（元か樣に候者）は曾我の……シテサシ「一樹の蔭に……箱王殿を呼び下し（元男になし）……シテ「急ぎ候程に……いかに團三郎（元ナシ）急ぎ別當に（元の御坊へ）參り（元て）某登山仕り（元か罷登）たる由……　【二】ツレ「いかにこの內（元御坊）へ……ツレ「（元唯今）祐成の御登山にて候（元其由御申候へ）……ワキ「なにと祐成の御登山（元にて有）と申すか。……ワキ「（元頓て御目に懸らふするにて有そ）此方へと申せ（元候へ）……ツレ「心得申し候かうから御通りあれとの御事にて候（元ナシ）。ワキ「いかに祐成（元や）こなたへ御入り（元出）候へ。さて唯今は何の爲の……にて候ぞ（元の御登山は何事にて御入候そ）シテ「さん候……元服せさせばやと存じ……仕りて候（元ん爲に參りて候）。ワキ「なに（元と）箱王殿を……ワキ「これは……大方殿より出家になし申せ……承り候ぞ（元仰合さるゝ子細候へは。祐成は

御存知有ましく候。思ひもよらぬ事にて候」。シテ「（元さん候）仰せ尤もにて……申され候（元へし）ただ……ワキ「いや大方殿の御意……にても候はず（元御一人にても御座なく候）故河津殿……　【三】ワキ「言語道斷（元ナシ）祐成にくどき立てられ申してそぞろに（元ナシ）……箱王殿の御心中を存ぜず候程に（元何とか思召れ候はん此方へ）呼び出だし……シテ「かゝる祝着……さらば（元急ひて）箱王を……ワキ（「元心得申候）いかに能力祐成殿の御登山にてあるぞ（元ナシ）箱王殿（元に）此方へ（元御出あれ）と申し候へ……ワキ「御覽候へ……シテ「仰せの如く……成人仕りて候（元ナシ）。ワキ「いかに箱王殿……御身を元服せさせ……箱王殿は何と（元箱王殿を男になし申。本望をも達し度由仰られ候間。愚僧ははや領掌申て候か。扨御心には如何）思しめされ……ワキ「さてははや（元ナシ）箱王殿の御心中も……聞え申して候（元も同御心にて御座候）いかに祐成（元御）心を……弟子ともなし（元さため）……地「行末を祈る……心（元情）はともに……

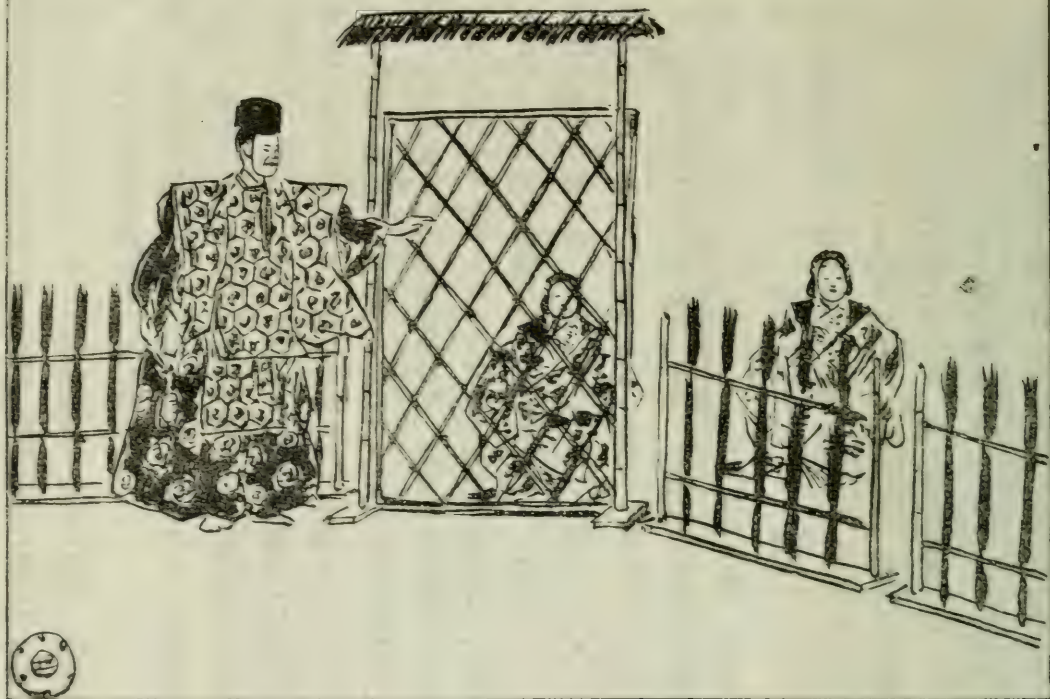
【五】シテ「げにげにこれは……但し（元ナシ）いかに團三郎（元箱王此路次にて髪をはやせと申はいかゝ有へきぞ）。ツレ「げにげに……苦しう（元御座）候べきめでたく唯（元ナシ）この……シテ「さては汝も……はやさうずるにて候（元いかに箱王殿から來り候へ）何か

【六】地「朽つるは浮世の習ひ（元袂）かな……　【七】ワキ「祐成に申すべき事のある（元候ひし）を……いづくまで……見て來り候へ（元何方まで御出候ぞ留申候へ）……ツレ「誰にて渡り候ぞ（元ナシ）……ツレ「さらばその由申し上げうずるにて候（元ナシ）……シテ「なに別當の……こなたへ御出で（元入）あれと……ツレ「畏って候（元急ひて）こなたへ御出であれとの御事にて候（元御座候へ）……シテ「さてこれまでの御出では何事（元は何の爲に御出）にて候ぞ……シテ「その事にて候……御覽候へなんぼう見事の男になりて候（元ナシ）

【八】ワキ「いかに祐成……御舞ひ候へ（元シテ「畏つて候。さらはそと舞ふするにて候）……地「心言葉は人の……これこそ名殘（元悅）の酒宴の戯れこれこそ名殘（元悅）の……

小督（こがう）

觀（寶春剛喜）

解説

【能柄】 四番目　二段劇能

【人物】 **ワキ** 高倉院勅使、**前シテ** 彈正大弼仲國、
狂言 嵯峨宿主、**ツレ** 小督局、**トモ** 同侍女、
後シテ 彈正大弼仲國

【所】 **第一段** 京都　仲國私宅
第二段 嵯峨　小督假住居

【時】 高倉天皇御宇　八月十五夜

【異稱】 「仲國」ともいつた。

【作者】 能本作者註文、二百十番謡目錄ともに金春禪竹の作とし、その孫の禪鳳習道目錄第三冊にもこの曲名が見え、言經卿記文祿四年四月一日の條に本曲註釋のことが出てゐる。

【梗槪】 高倉天皇の御寵愛を辱うしてゐた小督局は、中宮が平清盛の息女であるので、これを憚つて隱れてしまつた。帝は深く歎かせ給ひ、小督が嵯峨野邊にゐることを聞し召して、彈正大弼仲國にその在家を

尋ねさせ給うた。折柄八月十五夜、仲國は特に賜はつた御寮の馬に乘り、かなたこなたを尋ね、想夫戀の曲を彈く琴の音によつて、その在家を尋ねあてた。そして帝の御書を小督に渡し、小督からの御返事を乞ひ受けた。仲國は名殘を惜しむ酒宴に舞を舞つて小督を慰め、やがて小督に見送られて都に歸つた。

【出典】 平家物語卷六「小督の事」に據つたもので、文章も原文をそのまゝ襲用した箇所が少くない。左にその主要部分を掲げると、

中宮の御方より小督と申す女房を參らせらる。そもこの女房と申すは、櫻町の中納言重範卿の女、禁中一の美人、ならびなき琴の上手にてぞまし〳〵ける。冷泉の大納言隆房卿未だ少將なりし時、見そめたりし女房なり。……されども今は君へ召され參らせて、せん方もなく悲しくて、飽かぬ別の涙にや袖しほたれてほしあへず。……入道相國この由を傳へ聞き給ひて、中宮と申すも御女、冷泉の少將も亦婿なり。小督の殿に二人の婿をとられては、世の中よかるまじ。いかにもして小督の殿を召し出して失はんとぞ宣ひける。小督の殿この由を聞き給ひて、我身の上は兎にも角にもなりなん、君の御爲御心苦しと思はれければ、或夜内裡を紛れ出でて、行方も知れずぞ失せられける。主上御歎き斜ならず、晝は夜の大殿にのみ入らせ給ひて、御涙に沈ませおはします。夜は南殿に出御なりて、月の光を御覽じてぞ慰ませまし〳〵ける。……比は八月十日餘の事なれば、さしも隈なき空なれども、主上は御涙に曇らせ給ひて、月の光もおぼろにして御覽ぜられける。やゝ深更に及びて、「人やある人やある」と召されけれども、御いらへ申す者もなし。やゝありて彈正の大弼仲國、その夜しも御宿直に參りて、遙かに遠う候ひけるが、「仲國」と御いらへ申す。「汝近う參れ、仰せ下さるべき旨あり」と仰せければ、何事やらんと思ひ、御前近うぞ參じたる。……「まことや小督は嵯峨の邊、片折戸とかやしたる内にありと申す者のあるぞとよ。あるじが名をば知らずとも、尋ねて參らせてんや」と仰せければ、……仲國つく〴〵物を案ずるに、まことや小督の殿は、琴彈き給ひしぞかし。この月のあかさに君の御事思ひ出で參らせて、琴彈き給はぬことはよもあらじ、内裏にて琴彈き給ひし時、仲國笛の役に召され參らせしかば、その琴の音は、何處にても聞き知らんずるものを、嵯峨の在家幾程かあらん、打廻りて尋ねんに、などか聞き出さであるべきと思ひ、「さ候はば、あるじが名は知らずとも、尋ね參らせ候べき、……御書賜はりて參り候はん」と申しければ、主上げにもとて、やがて御書遊ばしてぞ下されける。「寮の御馬に騎りて行け」と仰せければ、仲國寮の御馬賜はりて、明月に鞭を揚げ、西をさしてぞ歩ませける。小鹿鳴くこの山里と詠じけん嵯峨のあたりの秋の頃、さこそ哀にも覺えけめ。片折戸したる家を見つけては、この内にもやおはすら

んと、控へ〳〵聞きけれども、琴彈く所はなかりけり。……いかゞせんと案じ煩ふ。まことや法輪は程近ければ、月の光に誘はれて、參り給へることもやと、そなたへ向きてぞあこがれける。龜山のあたり近く、松のある方に幽に琴ぞ聞えける。峯の嵐か松風か、尋ぬる人の琴の音か、おぼつかなくは思へども、駒を早めて行く程に、片折戸したる內に琴をぞ彈きすまされたる。……樂は何ぞと聞きければ、夫を想ひて戀ふといふ樂なりけり。……門をほと〳〵と叩けば、琴をば彈き止み給ひぬ。「是は內裏より仲國が御使に參りて候、あけさせ給へ」とて、叩けども〳〵咎むる者もなかりけり。……やゝありて、內より人の出づる音しけり。嬉しと思ひて待つ所に、錠をはづし門を細目にあけ、いたいけしたる小女房の、顏ばかりさし出でて「是はさやうに內裏より御使など賜はるべき所にても候はず、若し門違へにてぞ候らん」といひければ、仲國返事せば、門たてられ錠さゝれなんずとや思ひけん、是非なく押し開けてぞ入りにける。妻戶の際なる緣にゐて「何とてかやうの所に御渡り候やらん、君は御故に思し召し沈ませ給ひて、御命も既に危くこそ見えさせまし〳〵候へ、かやうに申さば、上の空とや思し召され候らん、御文を賜はりて參りて候」とて、取出て奉る……小督の殿げにもとや思はれけん、自ら返事たまひけり。……やゝありて仲國……供に召具したる馬部吉上など止め置き、其屋を守護させ、わが身は寮の御馬に打乘りて、內裏へ歸り參りたれば、夜はほのぼのとぞ明けにける。

【概評】 平語物の通例として、本曲も大體原文に從つてゐるが、前段に於て主上の代りに勅使を登場させたのは、能作者の謹愼深い心掛けから出たものであらう。後段に於てシテに舞を舞はせるのは、能の常套手段であるが、その導因をツレ小督の感激と惜別とに求めたのは、原文の小督が只管出家をのみ念としてゐるのに比べて、新しい解釋を下したもので、その爲に舞臺效果も著しく精彩のあるものとなつたやうに思はれる。

その脚色に、幽靈物の形をとらず現在物としたことも、「千手」などと同樣、觀衆の興味を深からしめる所以で、殊に「千手」など平語物はとかく餘り原文に據り過ぎて、語り物の形骸を脫しない憾みがあるのに比べて、この曲はよく戲曲的體裁を整へた所に、作者の手腕を認めなければならないと思ふ。

【一】 第一段
舞臺は初め御所の內で、ワキ高倉院の臣下登場。

【二】 名乘笛にて、ワキ勅使、洞烏帽子・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて文を懷中して名乘座に出で、

【三】 ○高倉の院―仁安三年（一一六八）御卽位、治承四年

ワキ「これは高倉の院に仕へ奉る臣下なり。さても小督の局と申して。君の御寵愛の御座候。中宮は又正しき相國の御息女なれば。世の憚りを思しめしけるか。小督の局暮に失せ給ひて候。君の御歎き限りなし。晝は夜の大殿に入り給ひ。夜は又南殿の床に明かさせ給ひ候ところに。小督の局の御行方。嵯峨野の方に御座候由聞しめし及ばれ。急ぎ彈正の大弼仲國を召して。小督の局の御行方を。尋ねて參れとの宣旨に任せ。唯今仲國が私宅へと急ぎ候

といひて橋懸一の松に出で幕に向ひ、

【二】

ワキ「いかに仲國のわたり候か

シテ源仲國、直面・翁烏帽子・襟白・着附厚板・單狩衣・大口・腰帶・扇の裝束にて三の松に出で、

シテ「誰にて渡り候ぞ

ワキ「これは宣旨にて候（シテ辭儀）。さても小督の局

勅使「自分は高倉院にお仕へしてゐる臣下です。さて小督局といつて、わが君の御寵愛遊ばす方があるが、中宮が歴とした太政大臣平清盛の御息女であるので、その權勢を怖れられた爲か、小督局は夕暮に紛れて行方不明になられたのです。それで、わが君の御歎きは限りもなく、晝は御寢所にお入りになつて、たゞ獨りお悲しみになり、夜はまた紫宸殿にお出ましになつて、月を眺めてお明かしになつたが、小督局が嵯峨野の方に居られるといふことをお聞き遊ばし、急いで彈正大弼仲國にいひつけて、小督局の行方を尋ねさせよと仰せ下されたので、唯今仲國の私宅へ急いで行くのです」

と見物人に事件の概略を紹介す。

【二】

舞臺は仲國の私宅。幕の方がその門口、勅使は仲國の私宅に着いた態で幕に向ひ、

勅使「もうし仲國は居られるか」

シテ彈正大弼仲國幕より出て、

仲國「どなたです」

勅使「わが君の仰せですぞ」

仲國畏まる。

（一八四〇）安德天皇に御讓位。翌年崩御、寶算二十一。

○小督の局―平家物語巻六「小督の事」に、小督は櫻町中納言重範の女で、初め平清盛の女婿冷泉少將隆房と契を結んだが高倉院に召されて寵幸を專らにしたので清盛の怒りに觸れて、嵯峨に隱れた。そして仲國に見出されて再び宮中に歸つたが、清盛の爲に尼にされ再び放たれた。時に年二十三その後嵯峨野の奥に住んだといふ。

○中宮―もと三后の總稱。轉じて皇后と同樣の意に申す。こゝの中宮は清盛の女德子、後の建禮門院。

○相國―太政大臣の唐名。平清盛を指す。

○世の憚り―權勢者に對する恐れをいふ。

○失せ給ひて候―行方不明になられた。

○夜の大殿―御寢所。

○南殿―紫宸殿の別名。

○嵯峨野―山城國葛野郡、京都の西郊。

○彈正の大弼―彈正臺の次官。彈正臺は非違を糺彈する役所。

○仲國―源光遠の子。金春流はその官を大膳大夫としてゐる。

【三】

○片折戸―門の戸の片開きの粗末なものをいふ。

の御行方。嵯峨野の方に御座候由聞しめし及ばせ給ひ。急ぎ尋ね出でこの御書を與へよとの宣旨にて候

「急ぎ尋ね出で」といひながら文を懐中より出してシテに渡す。シテこれを受けて、

シテ「宣旨畏つて承り候。（面を上げ）さて嵯峨にてはいかやうなる所とか申し候

ワキ「嵯峨にては唯片折戸したる所とこそ聞しめされて候へ

シテ「さやうの賤が家には片折戸と申すものの候。（正面に向き）今夜は八月十五夜にて候間。琴彈き給はぬ事あらじ。小督の局の御調めをば。よく聞き知りて候間。御心安く思しめせと（ワキに辭儀し）。『委しく申し上げければ

ワキ奏聞する心にて舞臺に向き辭儀して、

ワキ「この由奏聞申しければ。御感の餘り忝くも。

勅使「さて小督局が嵯峨野の方に居られるといふ事をお聞き遊ばされて、急いで尋ね出し、この御書を與へよとの仰せ付けです」

仲國「仰せ事謹んで承りました。して、嵯峨野ではどのやうな所に居られるのでせうか」

勅使「嵯峨では唯片折戸のある所とだけお聞き遊ばしたのです」

仲國「あのやうな田舎の家には片折戸と申すものがございます。おゝ今夜は丁度八月十五夜ですから、琴をお弾きになるに違ひなからう。私は小督局の琴のお調子をよく承知してゐますから、必ず尋ね出します。どうか御安心遊ばしますやうに」とよく申しあげると、勅使はこの由奏上して、

勅使「この事を君に奏上したので、帝には

○寮のお馬―寮は禁中の左馬寮、右馬寮をいふ。御料の御馬といふ意。
○やがて出づるや―仲國の出ると月の出るとを兼ねていふ。
○秋の夜の月毛の駒よ―源氏物語明石巻の歌「秋の夜の月毛の駒よわが戀ふる雲居にかけれ時の間も見む」を借りて綴つた。月毛の駒は白に桃色の毛の交つた馬
【三】
○上﨟―身分の高い女房、貴婦人。
○一樹の蔭に宿り―平家物語卷七に「一樹の蔭に宿るも前世の契り淺からず、同じ流れをむすぶも他生の緣なほ深し」說法明眼論に「宿二一樹下一、汲二一河流一、一夜同宿、一日夫妻……皆是先世結緣」

寮のお馬を給はるなり

と立ち扇にて馬をシテに渡す形をす。シテ辭儀して、

シテ『時の面目畏つて

地上歌『やがて出づるや秋の夜の（二人とも舞臺に入り）。やがて出づるや秋の夜の。月毛の駒よ心して。雲居に翔れ時の間も。急ぐ心の、行方かな　急ぐ心の行方かな

とシテ仕手柱際にて正面に開き嵯峨野へ行く心にて中入。ワキも續いて幕に入る。

【三】

後見片折戸に柴垣の作物を脇正面に出す。

ツレ小督局、面連面・鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・唐織着流・扇の裝束、トモ侍女、ツレと同樣の裝束にて脇座へ行き下に居る。狂言宿の主、美男鬘・着附箔小袖・女帶の裝束にて名乘座に立ち、

狂言「妾はこの家の主にて候。この程都より女性上﨟にお宿を申し候が。承り候へば琴の上手の由申し候間。琴を所望申さばやと思ひ候。（ツレに辭儀して）いかに申し候。見苦しきお宿を申し面目なく候。扨今夜は八月十五夜明月にて候間。夜もすがら琴をお調めあつて。妾にも御聞かせ候へや

といひて引く。

ツレサシ『げにや一樹の蔭に宿り。一河の流れを汲む

叡感の餘り御料の御馬を賜はつたのです」

と馬を仲國に渡す態。

仲國「ありがたい面目でございます。恐れ畏りました」

と直にこの秋の月夜を幸ひ、月毛の馬に打乘つて、『一刻をも急ぐ自分の心持を察して、馬もよく驅けつてくれ』と急いで出掛けるのである。

シテ仲國嵯峨へ行く態で退場、ワキ・勅使も續いて退場。

【三】

第二段

舞臺は嵯峨野、小督の假住居。ツレ小督局、トモ侍女と共に登場。狂言宿の女主が小督に琴を勸める。

小督「ほんとに諺に『同じ木蔭に雨宿りを

○あからさま―假初。暫く。○軒の草忍ぶたよりに―軒の草は忍草の序、忍草を忍ぶにいひかけ、辛い思ひを忍び慰むたよりに、賤の女を相手にして過すといふ。○飽かぬは人の心かな―飽かず忘れられないのは、戀し奉る帝の御事である意。○かきなす―搔き鳴らす。○琴のおのづから―琴の緒を假名遣の掛詞とした。○秋風にたぐへば―琴の音が秋風に似通うてゐるから○秋や恨むる―秋を「飽き」にかけ、人に飽かれたと恨むのかといふ。○何をかくねる―くねるはすねること。古今集序―女郎花の一時をくねるにも歌をいひてぞなぐさめける」を借りた。○憂き世のさがの身―さがは性質の意で、辛い憂き世の性質に支配せられてゐる身をいふ。その「さが」に地名の嵯峨をいひかけた。○人に語るな―古今集僧正遍昭の歌「名にめでて折れるばかりぞ女郎花われおちにきと人に語るな」の詞を借りた。
【四】
○三五夜中の新月の色―和漢朗詠集白樂天の詩句―三

む事も。皆これ他生の縁ぞかし。ツレトモ『あからさまなる事ながら。馴れて程經る軒の草。忍ぶたよりに賤の女の。目に觸れなるる。世の習ひ。飽かぬは人の心かな

地下歌『いざいざさらば琴の音に立てても忍ぶこの思ひ。上歌『せめてやしばし慰むと。せめてや暫し慰むと。かきなす琴のおのづから。秋風にたぐへば鳴く蟲の聲も悲しみの。秋や恨むる戀や憂き。何をかくねる女郎花。われも憂き世のさがの身ぞ。人に語るなこの有樣も恥かしや

【四】 一聲の囃子にて、後ジテ源仲國、前と同じ裝束にて狩衣の肩を上げ文を懷中し鞭を持ち、馬を鞭つ心にて一の松に出で、

後ジテサシ『あら面白の折からやな。三五夜中の新月の色。二千里の外も遠からぬ。叡慮畏き勅を受けて。心も勇む駒の足並。夜の歩みぞ心せよ。(右の方に向き)牡鹿鳴く。この山里と詠めける

し、同じ河の水を汲むのも、皆此世ならぬ前世からの因縁事だ」といふ通り、ほんの暫くのつもりのこの假住居も、住み馴れて時が經つに從うて、思ひを慰める便りにもと思つて、賤しい女達を見馴れるやうになつたのも、これも世の習ひといふものであらうか。でも、やはりいつまで經つてもお忘れすることの出來ないのは、わが大君の御情です。さうだ、それでは琴でも彈いて、この戀しい思ひを慰めませう。せめては、暫くでもこの思ひが慰むであらうかと思つて、琴を彈くと、その音が秋風に似通うてゐて、蟲が愈々悲しさうに啼くこと。あの啼くのは、秋が來て人に飽かれたといつて恨むのであらうか、それとも戀が辛くて悲しんでゐるのであらうか。さういへば、女郎花も何やらすねてゐるやうだが、自分もこの浮世に辛い思ひをしてゐる身上なのです。いやいやこんなことは誰にもいつてくれるな。こんな有樣を人に見られたならば、ほんとに恥かしいことです―

と獨言をいつて、君を慕ひ奉つてゐる體。

【四】

場面は小督假住居の近く。後ジテ仲國馬に乘つて尋ねて來た體で登場。

仲國「あゝほんとに面白い月夜だ。昔の人

五夜中新月色、二千里外故人心—を引き、月の眺めより轉じて、叡慮を畏み奉り、勇み立つて行くといふ意に用ゐた。新月は始めて山からさし出た月。
○牡鹿鳴くこの山里—夫木抄藤原其俊の歌—牡鹿なくこの山里のさがなれば悲しかりける秋の夕暮」を指す。但しこの句は解說に掲げた平家物語の文を引いたので盛衰記には—我ならぬ在原業平が、男鹿鳴くその山里と詠じけん、嵯峨のあたりの秋の比」と記して居る。
○澄み渡る—心も月も澄むといふを、片折戸の内に住むの意にいひかけた。
○賤が家居の假なれど—賤しい者の住家で、いかにも假作りのあばら屋で、小督の住家とは思はれないが。
○控へ控へ—手綱を控へて幾度も馬を留め。
○あくがれ　面白さに浮かれ出ること。
○法輪—法輪寺。嵯峨渡月橋の南、嵐山の東部にある。
○峯の嵐か松風か—まだはつきりと琴の音であるかどうか聞き分けられない心持。後撰集齋宮女御の歌「琴の音に峯の松風通ふらしいづ

地「嵯峨野の方の秋の空(と舞臺を見渡し)。さこそ心も澄み渡る片折戸をしるべにて。明月に鞭をあげて駒を早め急がん(と鞭をうちて詰足し)

シテ「賤が家居の假なれど

地「もしやと思ひ此處彼處に(と橋懸を小廻りし)。駒を驅け寄せ驅け寄せて控へ控へ聞けども琴彈く人はなかりけり(と三の松にて耳を澄まし)。月にやあくがれ出で給ふと(一の松へ出で)。法輪に參れば琴こそ聞え來にけれ(と舞臺際にて耳を澄まし)。峯の嵐か松風かそれかあらぬか。尋ぬる人の琴の音か樂は。何ぞと聞きたれば。夫を想ひて。戀ふる名の想夫戀なるぞ嬉しき

と常座に立ち、

シテ「疑ひもなき小督の局の御調めにて候。やがて案内を申さうずるにて候

鞭を後見に渡して戸口に立ち、

はこの月を眺めて『三五夜中の新月の色、二千里外の故人の心』と詠んだのだ、自分は恐れ多い勅命を果したいと思へば、たとへ二千里を距つた所でも遠いとは思はない、氣は勇み立つて、馬までが勇み立つてゐるのだ。でも、夜中を走つて行くのだ、馬もよく氣をつけてくれよ。

歌にも『牡鹿鳴くこの山里の嵯峨なれば』と詠まれた所だから、この嵯峨野のあたりは秋の空が澄み渡つて、心まで澄み清まりさうだ。さあ片折戸のある家を目印にして、この明月に鞭をうつて馬を急がせて行かう。

このあたりの家は如何にもお粗末な假家で、小督の住家とも思はれないが、もしやと思つて　あちらこちらて馬を驅け寄せて足を留め、耳をすまして聞くが、琴を彈いてゐる人はない。或はこの月夜に誘はれて外へ出られたかも知れないと思つて、この法輪寺に來ると、果して琴の音が聞えて來た。いや琴の音ではなくて、峯の嵐かそれとも松風であるのか知らん。やつぱりわが尋ねる方の琴の音か。何の曲を彈いて居られるのかと、よく聞けば、夫を戀ひ慕ふ想夫戀の曲だ。これは嬉しいことだ」

(と次第に小督の住家に近づいて來た爲。)

仲國「確かに小督局の琴の調だ。早速お伺ひしよう」

(と舞臺の片折戸の外に立つて、

れのをよりしらべそめけん」を借りた。
○樂―樂曲。
○想夫戀―唐樂の曲名。もと相府蓮と書き、晋の大臣天倹が家に蓮を植ゑて愛した時の樂であると、徒然草にもいつてゐるが、音の相通から想夫戀の字を充て、戀慕の曲と見倣したのである。
○やがて―早速。

【五】
○心得て―用心して。
○なかなかに―却つて。
○樞―戸臍であるが、こゝではたゞ戸の意。
○現なや―現なしやの略で夢のやうだの意。「や」は感動の詞。
○人目づつみも―人目を包みかくすの「つゝみ」を堤にいひかけ、溢れ出る涙が堤を洩れ出る意につゞけ、涙の玉を玉琴にいひかけた。
○殿上の御遊―御所に於ける管絃の御遊。

【五】
シテ「いかにこの戸あけさせ給へ
ツレ（トモに）「誰そや門に人音のするは心得て聞き候へ
トモ「なかなかにとかく忍ばば惡しかりなんと。まづこの樞を押し開く
といひながら立ちて戸を開く。
シテ「門閉されては叶ふまじと。樞を抑へ（と左手にて戸を抑へ）。『これは宣旨の御使。仲國これまで參りたり。その由申し給ふべし
ツレ（シテへ）『現なやかかる卑しき賤が家に。何の宣旨の候べき。門違へにてましますか
シテ「いやいかに包ませ給ふとも。人目づつみも洩れ出づる。『袖の涙の玉琴の。調めは隱れなきものを
ツレ『げに恥かしや仲國は。殿上の御遊の折々は

【五】
仲國「もうし、この戸を開けて下さい」
小督侍女に向ひ、
小督「誰やら門口に人聲がするよ、よく氣をつけてお聞きなさい」
侍女「聞き流してゐては、却つてよくありますまい」
と侍女が戸を開ける。
仲國「この門を締められては大變だ」
と侍女の開けた扉を抑へて、
仲國「自分は帝の仰せを蒙つた勅使として仲國がこゝまで參つたのです。この事を御主人に申して下さい」
小督「まあこれは夢であらうか。このやうな粗末な田舍家にどうして宣旨が下りませう。お門違ひではありませんか」
仲國「いや如何にお隱しになつても駄目です。悲しい思ひはいかに我慢をしても涙に溢れ出るやうに、今の琴のお調子があなたと間違ひやうがないのです」
小督「ほんとにお恥かしい、仲國とは、御所で管絃の御遊を遊ばした折々に……」

○笛仕れ―笛の役を勤めよ
○馴れし雲居の―雲居は禁中の意と空の意とを兼ねた御所に住み馴れて見た月と今見る空の月と何の變りもないとの意。
○人も訪ひ來て―人は御所にあつた頃親しかつた仲國を指す。
○あひにあふ―仲國に逢ふを、絲竹の合ふにいひかけた。
○絲竹―絃樂と管樂即ち琴と笛。
○夜の聲―絲の縁で綴るを夜にいひかけ、夜の聲を夜の人聲の意に轉じて、密かにとつゞけた。
○中垣の―隔ての縁で中垣を出し、垣の縁で葎を出した。
○片敷の袖ふれて―片袖を下に敷いて、その葎に觸れさせて、寢ようとの意。
○所を知るも嵯峨の山―後撰集に「仁和の帝（光孝天皇）嵯峨(天皇)の御時の例にて、芹川に行幸し給ひける日」と詞書した在原行平の歌「さがの山みゆきたえにし芹川や千代の古道跡はありけり」に據つたもので御ち嵯峨の地は嵯峨天皇以來暫く行幸がなかつたが、

シテ「笛仕れと召し出だされて
ツレ「馴れし雲居の月も變らず
シテツレ「人も訪ひ來てあひにあふ。その絲竹の夜の聲
地「密かに傳へ申せとの、勅諚をば何とさは。隔て給ふや中垣の。葎が下によしさらば（シテ戸の外に安坐す）。今宵は片敷きの袖ふれて月に明かさん
トモ「密かに傳へ申せ」に戸を閉ぢてもとの座に著く。
地上歌「所を知るも嵯峨の山。所を知るも嵯峨の山。御幸絶えにし跡ながら。千代の古道たどり來し行方も君の惠みぞと。深き情の色香をも。知る人のみぞ花鳥の。音にだに立てよ東屋の。主はいさ知らず。調めは隱れよもあらじ（と奥を見込む）
【六】
トモ（ツレに）仲國御目にかからざらん程は歸るま

仲國「私も笛の役を致すやうに召し出されまして……」
小督「今見る月もあの御所で眺めた月と變りがたく、そしてその頃親しかつた方のお訪ねを受けて、こゝでお會ひをすれば、あの頃の管絃の夜遊のことが……」
仲國「わが君から密かにお傳へせよと仰せ事を承つて來ましたのに、何故そのやうにお隔てになるのです。いやお隔てになつても構はない、私はこの葎の生ひ茂つた所に假寢をして、今宵一夜月を眺めて明かしませう。
この嵯峨の地といへば、昔も「嵯峨の山御幸絶えにし芹川や、千代の古道跡はありけり」とも詠まれて、暫く行幸の絶えてゐたものも、御再擧遊にされた所ぢやありませんか。たとひ一時御中が絶えたにもせよ、もとに復して、千代までも將來變るまいとの、ありがたい帝の思召なのです。あなたはその深い御情の分る方ぢやありませんか。あなた御自身を出されないまでも、せめて琴を彈いて下さい。御主人のあなたが何とお考へになたらうと、琴の調子で分らないことはよもやありますまい。いやさ、それよりはどうか私をお通し下さい」
【六】
侍女、小督に向つて、
侍女「仲國はお目にかゝらない間は、歸ら

光孝天皇の御時行幸遊ばされたやうに、この嵯峨へ仲國が來たのは、一度絶えた御仲をもとに復して、千代までも變るまいとの帝の思召であるとの意。
○千代の古道―嵯峨にあつた道。
○深き情の色香をも―古今集紀友則の歌「君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」を借り、―あなたは帝の深い御情を知る人でないのか」と仲國が小督に詰るのである。
○花鳥の―前掲の歌―梅の花―の縁で花鳥といひ、鳥の縁で「音にだに」とつゞけた。
○音にだに立てよ―主の聲は出さないでも、せめて琴の音をたてよとの意。
○東屋―催馬樂の曲名と小督の住家の意とを兼ね、東屋の曲を彈けといひ、その歌詞「東屋のまやの餘りの雨注ぎ、われ立ちぬれぬ、その殿戸開かせ」によつて、戸を開けよと匂はせたのである。

【六】

じきとて。あの柴垣のもとに露にしをれて御入り候。「勅諚と申し痛はしさといひ。何とか忍ばせ給ふべき。此方へや入れ參らせ候はん

ツレ「げにげにわれもさやうには思へども。「餘りの事の心亂れに。身の置き所も知らねども。さらば此方へと申し候へ

トモ立ちて戶口へ行き、

トモ「さらば此方へ御入り候へ（と戶を開く）

シテ「畏つて候

と立ちて後見座にて狩衣の肩を下し、舞臺の眞中へ出で下に居り辭儀。（トモはもとの座につく）

シテ「勅諚に任せこれまで參りて候。さてもかやうにならせ給ひて後は。玉體衰へ叡慮惱ましく見えさせ給ひて候。せめての御事に御行方を尋ねて參れとの宣旨を蒙り（と扇を開きて文をのせ）。忝くも御書を賜はつてこれまで持ちて參りて候

ないといつて、あの柴垣のところで露にしをたれてお出でになります。帝の仰せ事ではあり、仲國もお氣の毒であり、何もそれほどお隱れになることはありますまい。こちらへお通し致しませう」

小督「いかにも私もさうは思ふのだが、餘り意外な事で、心がどぎまぎして、どうしてよいやら分らないのだけれども、それなら、こちらへとおいひなさい」

侍女仲國に向つて、

侍女「それでは、こちらへお通り下さい」

仲國「承知しました」

仲國柴垣の中へ入つて、舞臺で部屋の中となる。

仲國「帝の仰せによつて、こゝまで參つたのです。さて、あなたがこのやうにお隱れになつて以來は、帝は、御からだがお瘦せになり、御心を御惱ましになつてお出でになるやうにお見上げしてゐます。『せめての事に、行方を尋ねて參れ』と仰せ下され、忝くも御書を戴いて、こゝへ持つて參つたのです。恐れながら御直々

小督

（とツレに文を渡し）。『恐れながら直の御返事を賜はりて。奏し申し候はん（と眞中へ下りシテに辭儀）

ツレ文を手に持ちて、

ツレ『もとよりも辱かりし御惠み。及びなき身の行方までも。頼む心の水莖の。跡さへ深き御情

地『變らぬ影は雲居より。猶殘る身の露の世を。憚りの心にも。とふこそ、涙なりけれ（としをり文を置く）

【七】

地クリ『げにや訪はれてぞ。身に白玉のおのづから。ながらへて憂き年月も。嬉しかりける住居かな

ツレ『たとへを知るも數ならぬ。身には及ばぬ事なれども

地『妹背の道は隔てなき。かの漢王のその昔。甘泉殿の夜の思ひ。堪へぬ心や胸の火の煙に殘る

の御返事を頂戴して、奏聞したいと存じます」

（御書を小督に渡す。小督これを受けて、

小督「誠にありがたい御惠みでございます。私のやうな賤しい者の行方まで御心におかけ遊ばして、このやうな御書を賜はる深い御情。昔に變らぬありがたい御情。御所を離れて、この果敢ない浮世を憚つて暮らしてゐます身にも、昔に變らぬ御情を戴いて、たゞ〳〵涙がこぼれるばかりでございます」

【七】

小督「ほんとに、このやうなお訪ねを受けて、叡慮の忝さが身に知られ、この假住居に情ない月日を永らへてゐました身に、しみ〴〵嬉しく思はれるのでございます。

例へに引くのも、私のやうに賤しい身には及びもないことですが、夫婦の愛には變りのないもので、昔漢の武帝は李夫人に死別して、悲しい思ひに堪へられず、その甘泉殿で反魂香をお燒きになると、その思ひが通じてか、煙の中に夫人の面影が現れたといふことですが、それも束の間

○水莖の跡―筆跡。

○變らぬ影は雲居より―御情の變らぬことを、雲居より洩れ出る月影の變らぬことにいひかけ、月影を君の御情に寄せて、御所を離れたはかない身にも君の御情が變らず殘つてといふのである。

○露の世を―露の如きはかない世に生き殘ることと、その世を憚ることと兩方にかけていふ。

【七】

○身に白玉の―仲國に訪はれて、叡慮の忝さが身に知られるといひかけて、白玉、玉の緒、おのづからとつゞけた。

○たとへを知るも―たとへに引くのも。

○數ならぬ身―賤しい身。

○漢王―前漢の孝武帝を指す。

○甘泉殿の夜の思ひ―甘泉殿は孝武帝の建てた宮殿の名で、武帝が李夫人と死別したことを悲しみ、この宮殿で反魂香を燒かせると、その烟の中に夫人の面影が

現れたといふ故事をいふ。この事「花筐」にも見ゆ。
○なかなかなりし契り―却つて契らなかつた方がよかつたとの意。
○唐帝―玄宗皇帝。
○驪山宮の私語―驪山宮は玄宗が寵姫楊貴妃を住ませた所。私語とは、白樂天の長恨歌に「夜半無ㇾ人私語時、在ㇾ天願爲二比翼鳥一在ㇾ地願爲二連理枝一」とある故事を指す。この事「楊貴妃」に見ゆ。
○漏れし始めを―玄宗楊貴妃の私語が世に漏れた事に小督の私語が露ほどの事から世に漏れた意を含めていふ。
○あだなる露の―私語がふとした事から世に洩れた意と、楊貴妃があだなる露と消えた事とを兼ねていひ、その露より淺茅生を呼び起した。
○淺茅生や袖に朽ちにし―新古今集左衞門督通光の歌「淺茅生や袖に朽ちにし秋の霜忘れぬ夢を吹く嵐かな」を引き、忘れぬ夢を玄宗が方士をして楊貴妃を蓬萊宮に尋ねさせた事に轉じて用ゐた。
○人の國―外國。こゝでは前揭楊貴妃の亡魂の在所蓬萊宮をいふ。

面影も

ツレ「見しは程なき。あはれの色

地「なかなかなりし。契りかな

（居クセ）

地クセ「唐帝の古も。驪山宮の私語。漏れし始めを尋ぬるに。あだなる露の淺茅生や。袖に朽ちにし秋の霜。忘れぬ夢を訪ふ嵐の。風の傳まで身にしめる、心なりけり

ツレ「人の國まで訪ひの

地「あはれを知れば常ならで。なき世を思ひの數に。餘りわりなき戀心。身を碎きてもいやましの。戀慕の亂れなるとかや。これはさすがに同じ世の。賴みも有明の。月の都の外までも。叡慮にかかる御惠みいとも畏き勅なれば。宿はと問はれてなしとはいかが答へん

で、はかない面影に過ぎなかつたのですから、そのやうな悲しい思ひをする位なら、却つて始めから契らない方がましでございます。

唐の玄宗の時にも、驪山宮で楊貴妃と睦しい私語を交はされたが、それが世に漏れたのも一寸した事からでせうが、楊貴妃が果敢ない露と消えられてから、玄宗は悲しい涙に袖も朽ちるばかりで、貴妃の事がお忘れになれず、蓬萊宮にその亡魂をお尋ねになつたといふお心持がしみじみ感じられるのです。

このやうに黄泉の國までお尋ねになつたのは、並々ならぬ御寵愛の爲で、武帝と申し玄宗と申し、死別の悲しさに、戀心が責め來つて、身を碎くほどの苦しい思ひをしても、なほ戀慕の情は增すばかりで、遂に亂れ心におなりになつたものと思はれます。

それに比べますと、私の場合は、死別ではなく、同じ世に生きてゐるので、賴み甲斐もあり、殊にかうして都の外まで御心にかけさせられ、お使を賜はるといふありがたい御惠みに浴しましては、たゞたゞ恐れ多くて、今の住家をお隱しすることが出來ないのでございます」

【八】シテロンギ『これまでなりやさらばとて。直のお返事賜はり御暇申し立ち出づる

「これまでなりや」にツレ扇を開きて文をのす。シテ謡ひながら立ち、文を受取り戸口に下りてツレに辭儀、文を懐中す。

ツレ『月に訪ふ。宿りは假の露の世に。これや限りの御使。思出の名殘ぞと。慕ひて落つる涙かな（としをる）

地『涙もよしや星合の。今は稀なる中なりと

ツレ『終に逢ふ瀬は

地『程あらじ。迎への舟車の。やがてこそ參らめと。いへど名殘の心とて

トモ立ちてシテに酌す。

シテ『酒宴をなして絲竹の（と立ち）

地『聲澄み渡る。月夜かな

シテ『月夜よし

〔男舞〕（破掛り）

シテ引續き次の謡に合せて舞ふ。

【八】仲國「時刻も移りました。それでは御直々の御返事を頂戴して、御暇して出掛けます」

と小督より文を受取る。

小督「月夜にお訪ね戴きましたが、私はこの假住居にいつまで生きてゐますことやら。これが最後の御使かと思ひますと、お名殘が惜しまれて、涙が落ちるばかりでございます」

仲國「その悲しみもすぐ消えませう。今は七夕の星合のやうに、めつたお逢ひになることの出來ない御中ですけれど……」

小督「終にはお逢ひすることが……」

仲國「なに間もありません、お迎への車をもつて、すぐ參りませう」

といつたが、やはり名殘が惜しまれるので、酒宴を催し、この澄み渡つた月夜に、管絃の遊びをするのである、

仲國「おゝよく澄み渡つた月夜です——『月夜よし夜よし……』

と謡つて、

〔男舞〕

を舞ひ、

○なき世を思ひ―武帝・玄宗ともに李夫人・楊貴妃の死別を悲しんだのである。

○同じ世の―小督は死んだのではなく、同じこの世にあることをいふ。

○有明の―頼みもありを有明といひかけ、有明の月、月の都、都の外といひつゞけた。

○いとも畏き勅なれば―紀貫之の女（拾遺集には讀人不知）の歌「勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかが答へん」を引き、都の外まで勅使を賜はる御惠みに對して、身を隱すことは出來ないといふ。

【八】○月―訪ふ宿りは假の―月夜に仲國の訪ねたこの宿は假住居である意を、露のやうな假の世の中といふ意にかけていふ。

○星合―涙を干すを星にいひかけた。星合は牽牛織女の二星が年に一度七月七日の夜天の川で契る事をいふ

○舟車の―逢ふ瀬の縁で舟を出し、舟車とつゞけ車の矢をやがてにいひかけた。

○月夜よし―古今集讀人不知の歌「月夜よし夜よしと人に告げやらばこてふに似たり待たずしもあらず」を引いた。

【九】シテワカ「木枯に。吹き合はすめる。笛の音を
地「ひき留むべき言の葉もなし。言の葉もなし言の葉もなし
シテ「言の葉もなき君の御心
地「我等が身までも物思ひに。立ち舞ふべくもあらぬ心。今は歸りて嬉しさを。何に包まん唐衣ゆたかに袖うち合はせ御暇申し（と眞中にてツレに辭儀し）。急ぐ心も勇める駒に（と立ち）。ゆらりとうち乘り（と馬に乘る形をし）。歸る姿のあとはるばると。小督は見送り仲國は。都へとてこそ。歸りけれ

「小督は見送り」とツレ立ちてシテを見送り、シテ常座にて留拍子を踏む。

【九】仲國「――『木枯に吹き合はすめる笛の音を、ひき留むべき言の葉もなし』
（木枯の風に合はせて妙なる笛を吹いていらつしやるが、あの笛の主をどうしたらお留めすることが出來ようか、私のやうな者には、その術が分らない）
仲國「いや何とも申しあげやうのない帝の御心をお察し申しあげると、私のやうな者まで、どうすることも出來なかつたのですが、今はお目にかゝつて歸るので、この嬉しさを包みきることも出來ないのです」
と仲國は袖を打合はせ、小督にお暇をして、勇み立つ馬にゆらりと打乘つて、都へ歸つて行くと、小督はその歸り行く姿を遠くまで見送り、仲國は都へ歸つた。

シテ仲國都に歸る態で退場。ツレ小督見送つて退場。

【九】○木枯に吹き合はすめる笛の音をひき留むべき言の葉もなし―源氏物語帚木巻木枯の女の歌。これを謠曲ではシテの舞とする便宜上シテ仲國のワカとしてゐるが意味の上からはツレ小督の詞とした方がよいと思ふ。○言の葉もなき―前掲の歌の末句の意を轉じて、御心の御惱みは言葉でいひ表せないといふ。○物思ひに立ち舞ふべくも―源氏物語紅葉賀の巻の歌「物思ふに立ちまふべくもあらぬ身の袖うちふりし心しりきや」を引いた。○嬉しさを何に包まん―古今集讀人不知の歌―嬉しさを何に包まん唐衣袂ゆたかに裁てといはましを」を引いた。

〔考異〕

諸流（五流）

五流の間著しい異同はない。

古謡本（貞享二年本）

【一】ツキ「これは高倉陸に……相國の御息女なれば（貞にて御座候間）　【二】ワキ「これは宣旨にて候（貞ナシ）―　急ぎ尋ね出でこの御書を與へよ（貞て参れ）との……　【四】シテ「疑ひもなき……やがて案内を申さうずるにて候（貞ナシ）　【六】ト「仲國御目に　露にしをれて御入り（貞渡り）候……

なほ貞享本には狂言詞をも記してゐる。

小鍛治

觀（寶　春　剛　喜）

解說

【能柄】五番目　二段劇能

【人物】**ワキツレ**　橘道成、**前ワキ**　小鍛治宗近、**前シテ**　童子（稻荷の神靈）、**狂言**　稻荷山下の者、**後ワキ**　小鍛治宗近　**後シテ**　稻荷明神

【所】**第一段**　宗近私宅、稻荷山　**第二段**　宗近私宅

【時】一條天皇御宇（十一月）

【作者】作者及び演能に關する古記錄は見當らない。

【梗概】一條院には一夜不思議の御夢想を受けさせられ、橘道成を勅使として三條の小鍛治宗近に御劍を打ち奉るやう仰せつけられた。宗近は有力な相鎚の者がないので途方にくれたが、たゞ奇特を賴みにして氏神の稻荷明神に參つて祈ることとした。すると童子が現れ出て、和漢銘劍の威德を述べ、通力の身を變じて力を添へようといつて、夕雲のかゝつた稻荷山に隱れてしまつた。やがて宗近は注連を張つた壇に上り祝詞を捧げると、稻荷明神が出現せられて相鎚を打ち、打ちあげ

た劒を小狐丸と名づけて勅使に捧げ、また稻荷山に歸られた。

【出典】　本曲は著名な技藝傳說として語り傳へられたものであるが、その典據と見るべきものは見當らない。まづこの說話の主人公たる宗近については、一條兼良の尺素往來に

腰刀者、昔在㆓月山・天國・雲同㆒、以後得㆓其名㆒鍛冶、雖㆑有㆓數百人㆒、於㆓其中㆒、信房・舞草・行平・定秀・三條小鍛冶宗近、……一代間達者候。

とあるのが古い記錄で、小狐丸を宗近の作としてゐるのは、語釋「小鍛冶宗近」の條に擧げた本朝鍛冶考で、これにも委しいことは記してゐない。この小狐丸を信西が持つてゐたことは、保元物語卷一「官軍勢揃の事」の條の異本（參考保元物語所引）に、

信西薄墨染の直衣に、小狐と云ふ太刀はき、仰せを奉りて、御前の簀子に候て……（半井本）

信西末座に候す。袖小なる淨衣に、家に傳りたる小狐と云ふむく鞘の太刀をはき、信西宣旨を奉りて義朝を召す。（京師本・杉原本・鎌倉本）

と記してゐるが、小鍛冶の事を結びつけてゐない所を見ると、その頃にはまだこの說話は廣く行はれてゐなかつたものと思はれる。或は能作者が名工小鍛冶宗近と小狐丸とを結びつけ、小狐から稻荷明神を聯想して、こゝに技藝奇瑞說話を組み立てたものでなからうか。

【概評】　謠曲の制作せられた室町時代の文藝の、技藝說話・英雄說話には多くは宗教的靈驗を伴はしめたもので、謠曲にも優れた技藝に對する神佛の感應を說いたものが少くないが、神佛が助けて技藝武功を完成せしめるもの、例へば「田村」の淸水觀音の如き說話は甚だ少い。本曲の如きはその珍しい例で、なほ能作者は本曲に於て、武士の魂とも見るべき刀劒の完成について、稻荷明神の靈驗を說くとともに、その背景として御代の太平を祝言したものであらう。殊にクセの文の如きは、我々の眼から見れば、無用の挿話の如く感じられるが、その當時にあつては、平語の劒卷、舞曲の劒讃歎と同樣、祝言として多大の興味を與へたものであらうと思ふ。

脚色は、登場者の出入から見れば二段であるが、場面の變化から見れば、序齣は別として、第一段が宗近の私宅と稻荷山との二場となつて、第二段宗近の私宅と合はせて三場の形をなしてゐる。現在物は一體に場面の變化が多いもので、本曲の如きは劇としてよく整つてゐる方である。たゞ演能に、キリに「小狐丸を勅使に捧げ申し」とある爲に、これをシテの仕科に演せしめる必要上、ワキヅレの道成を第一段初同の「それのみ賴む心かな」で退場せしめず、最後まで舞臺に留めて置くのは、やゝ不自然な感を起させないでもない。

【一】

○一條の院―寛和二年（一六四六）御即位、寛弘八年（一六七一）崩御、寶算三十二。

○橘の道成―假作の人物であらう。但し「道成寺」に橘道成が道成寺を建立したといつてゐる。

○三條の小鍛冶宗近―本朝鍛冶考に「宗近一條御宇、永延號二三條小鍛冶一少納言入道信西歸丸或小狐丸とも則此作也」とある。解說參照。

【二】

【一】名乘笛にて、ワキヅレ橘道成、洞烏帽子・着附厚板・給狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて名乘座に出で、

ワキヅレ「これは一條の院に仕へ奉る橘の道成にて候。さても今夜帝不思議の御告ましますにより。三條の小鍛冶宗近を召し。御劍を打たせらるべきとの勅諚にて候間。唯今宗近が私宅へと急ぎ候

といひて橋懸一の松へ行き幕に向ひ、

【二】ワキヅレ「いかにこの家の内に宗近があるか

ワキ三條宗近、侍烏帽子・着附厚板・掛直垂・白大口・扇・小刀の裝束にて幕より出で、

ワキ「宗近とは誰にて渡り候ぞ

ワキヅレ「これは一條の院の勅使にてあるぞとよ（ワキ三の松にて辭儀）。さても帝今夜不思議の御告ましますにより。宗近を召し御劍を打たせらるべきとの勅諚なり。急いで仕り候へ

ワキ「宣旨畏つて承り候。（面を上げ）さやうの御劍を

【一】

第一段

舞臺を同じ京都で、ワキヅレ橘道成登場。

道成「自分は一條院にお仕へ申してゐる橘道成です。さて今夜帝には不思議な夢のお告げをお受けになつたので、三條の小鍛冶宗近にいひつけて、御劍を打たせるやうにと仰せ下されたから、唯今宗近の自宅へ急いで行くのです」

と見物人に自己紹介をして、宗近の宅へ行つた態で、舞臺は小鍛冶宗近の家となる。幕の方が門口の態で、

【二】

道成「もうし、宗近は在宅か」

シテ小鍛冶宗近幕より出て、

宗近「宗近とお呼びになるのは、どなたでございます」

道成「自分は一條院の勅使であるぞ。さて帝には今夜不思議な夢のお告げをお受けになつたので、宗近にいひつけて御劍を打たせるやうにと仰せ下されたのだ。急いで致すやうに」

宗近「御仰せありがたく承りましたが、そ

○相鎚—鐵を鍛へる時、鍛へ合せをする相手をいふ。
○領掌—承知。
○御劍の刄の—刄の燒き方に亂れ燒きといふのがあるので、刄の亂れを心の亂れにいひかけた。
○奇特—珍しい不思議な靈驗。

仕るべきには。われに劣らぬもの相鎚を仕りてこそ。御劍も成就候べけれ。これはとかくの御返事を申しかねたるばかりなり（と辭儀）

ワキヅレ「げにげに汝が申すところは理なれども。帝不思議の御告ましませば。頼もしく思ひつつ。はやはや領掌申すべしと。『重ねて宣旨ありければ

ワキ上歌「この上は。とにもかくにも宗近が（と面を上げ）

地「とにもかくにも宗近が。進退ここに谷りて。御劍の刄の亂るる心なりけり。さりながら御政道（ワキ立ち）。直なる今の御代なれば。若しも奇特のありやせん。それのみ頼む、心かなそれのみ頼む心かな

「直ぐなる今の御代」と二人とも舞臺に入り、ワキヅレは脇座に坐し、ワキは名乘座に立ちて、

のやうな御劍を致しますには、私に劣らない者が相鎚を致しましてこそ、御立派に打ち上げられるのでございます。その相鎚を打つ者がございませんので、この儀は否應の御返事を申しあげかねるのでございます」

道成「いかにもそなたのいふことは尤もだが、帝が不思議な御夢想をお受けになつたのだから、頼もしく思つて、早速お受けするがよからう」

と重ねて勅旨を傳へられたので、

宗近「さやう仰せられましては、私も何とも申しあげやうがなく、進退ともに谷まり、たゞ心が亂れるのでございます。しかし、御政道の正しい今の大御代でございますから、或は不思議な瑞驗がありはしないかと、それぱかりを頼みに致すのでございます」

と宗近は勅命を拜して、

【三】ワキ「言語道斷。一大事を仰せ出だされて候ものかな。かやうの御事は神力を頼み申すならではと存じ候。某が氏の神は稻荷の明神なれば。これより直に稻荷に參り。祈誓申さばやと存じ候

といひて眞中へ行きかゝる。

【四】

シテ 童子、面慈童・黑頭・金緞鉢卷・縫白赤・着附縫箔・水衣・腰帶・扇の裝束にて幕より出でながら、

シテ（呼掛）「なうなうあれなるは三條の小鍛冶宗近にて御入り候か

ワキ地謠座前に立ちてシテに向ひ、

ワキ「不思議やなべてならざる御事の。わが名をさして宣ふは。如何なる人にてましますぞ

シテ「雲の上なる帝より。劍を打ちて參らせよと。汝に仰せありしよなう

ワキ「さればこそそれにつけても猶々不思議の御事かな。劍の勅も唯今なるを。早くも知ろし

【三】

宗近 實に思ひも寄らない重大な事を仰せつけられたものだ。このやうな大事には、神の御力をお頼みするより外にない。自分の氏神は稻荷明神だから、これからすぐ稻荷に參詣して、お祈りをしませう」

と獨言をいつて出掛ける途中、偶然に稻荷の社近くきたる。

【四】

シテ稻荷明神、童子の姿で登場。

童子 おういおうい、そこへ行かれるのは三條の小鍛冶宗近ですか」

宗近 これは不思議だ。唯人でない貴いお方が、私の名を指して仰せになりますが、どなた樣でございますか」

童子 畏くも帝から劍を打てと、そなたに仰せつけになつたなあ」

宗近 さう仰しやるにつけて、愈々不思議に思はれます。御劍を打てとの勅命を拜したのも、たつた今ですのに、はや御承知

【三】

○氏の神—氏神、祖先神。稻荷は秦氏の氏神である。

○稻荷の明神—山城國紀伊郡深草、稻荷山にあり、倉稻魂命、素盞嗚命、大市姫命の三神を祀る。

【四】

○なべてならざる御事—普通でない貴い人。

○雲の上—御所を天に譬へて敬つた詞。

めさるる事。返す返すも不審なり

シテ「げにげに不審はさる事なれども。われのみ知ればよそ人までも（と常座に立ち）

ワキ『天に聲あり

シテ『地に響く

地上歌『壁に耳。岩の物いふ世の中に。岩の物いふ世の中に。隠れはあらじ殊になほ。雲の上人の御劔の。光は何か暗からん。唯頼めこの君の。惠みによらば御劔もなどか心に、叶はざるなどかは叶はざるべき

次のクリにシテ眞中へ行き下に居る。ワキも下に居る。

【五】

地クリ『それ漢王三尺の劔。居ながら秦の亂れを治め。又煬帝がけいの劔。周室の光を。奪へり

シテサシ『その後玄宗皇帝の鍾馗大臣も

地『劔の徳に魂魄は。君邊に仕へ奉り

○天に聲あり―「天に口あり壁に耳あり」などいふ古諺によつて、「天に聲があれば地に響く」といひ、地の縁で壁を呼び起した。

○壁に耳―前掲の古諺。平治物語にも「壁に耳天に口といふことあり」と見ゆ。

○岩の物いふ世の中―これも古諺。義經記に「壁に耳岩に口といふことあり」と見ゆ。

○隠れはあらじ―祕密の隠れないことと、光の隠れないことと、兼ねていふ。

【五】

○漢王三尺の劔―和漢朗詠集（後漢書の文）「漢高三尺之劔、坐制諸侯、張良一巻之書、立登師傅」を引いた。漢高は漢の高祖をいふ。

○煬帝―支那隋の天子第二世。周を滅ぼしたのは父の文帝である。

○けいの劔―何か故事があるのであらうと思ふが、分らない。

○玄宗皇帝―支那唐代第六世の天子。〔楊貴妃〕〔咸陽宮〕參照。

○鍾馗大臣―支那終南山の者で、武徳年中進士の試驗に落第して憤死したが、玄宗に綠袍を賜はつて葬られた恩に感じ、その亡靈が寶

なのは、返すくも不思議に思はれます」

地上「なる程不審に思ふのは尤もだが、自分だけ知つてゐるつもりでも、いつの間にか、他所の人までが、天に聲があれば地に響くやうに、諺にも『天に口あり壁に耳あり』とか『岩の物いふ世の中』とかいふやうに、隠れなく知つてしまふものなのだ。殊に雲の上の御劔の御用を承つたのだから、世間に知れない筈もなく、また瑞驗の現れない筈もないのだ。たゞ賴もしく思ふがよい、わが大君の深い御惠みがあるのだから、御劔も思ふやうに打ちあげられない筈はないのだ」

【五】

地ク「一體劔の威徳といふものは實に尊いもので、漢の高祖は僅か三尺の劔で易々と秦の亂世を治め、又隋の煬帝はけいの劔で周の天下を奪つてしまつた。その後唐の玄宗皇帝の時にも、鍾馗大臣は劔の徳によつて、その亡魂が皇帝を守護し奉つたやうなわけで、魍魎鬼神のやうな恐

劒を以て玄宗の爲に病鬼を攘つた。この事〔皇帝〕〔鍾馗〕に作らる。
○魍魎―山川の精。一種の妖鬼。
○景行天皇―紀元七三一年より七九〇年まで御在位。
○みことのりの―「のみこと（尊）の」又は「のみこ（皇子）の」を誤り傳へたのであらう。
○日本武―御名小碓命。日本武は川上梟帥が尊の勇武に感じて奉つた尊號。尊の東征のこと〔草薙〕に作らる
○關の東―近江國逢坂關より東をいふ。
○伊勢や尾張の海面に―伊勢物語に「昔男ありけり。京にありわびて東にいきけるに、伊勢尾張のあはひの海づらを行くに、波のいと白く立つを見て」と記して「いとどしく過ぎゆく方の戀しきに美ましくもかへる波かな」とあるを借りて綴つた。
○血は涿鹿の川となつて―涿鹿は支那上古黃帝が蚩尤と激戰した所。その時血が川の如くに流れたといふが今もそのやうな激戰をしてといふ意。この類句〔籠〕〔賴政〕にも見ゆ。

シテ『魍魎鬼神に至るまで

地『劒の刄の光に恐れてその寇をなす事を得ず

シテ『漢家本朝に於て。劒の威德

地『申すに及ばぬ。奇特とかや

（居クセ）

地クセ『又わが朝のその始め。人皇十二代。景行天皇。みことのりの御名をば日本武と申ししが。東夷を。退治の勅を受け。關の東も遙かなる。東の旅の道すがら。伊勢や尾張の海面に立つ波までも。歸る事よと羨み。いつかわれも歸る波の。衣手にあらめやと。思ひつづけて行く程に

シテ『ここやかしこの戰ひに

地『人馬巖窟に身を碎き。血は涿鹿の川となつて。紅波楯流し數度に及べる夷も兜を脫いで矛を伏せ。皆降參を申しけり。尊の御宇より御狩場

ろしいものでも、劒の刄の光には恐れをなして、仇をすることが出來ないのだ。このやうに、支那でもわが國でも、劒の威德といふものは、申すまでもないあらたかなものなのだ。――

わが國の事をいへば、昔人皇十二代景行天皇の御子日本武尊と申した方が、東國の亂賊を討ち滅ぼすやうにとの勅命をお受けになつた。尊は逢坂關を越えて、遙か東の東國の旅にお出かけになつて、伊勢尾張の海邊で、立つ波を御覽になつて、あの波の岸にたち歸るのが羨ましいことだ、自分はいつ都へ歸ることが出來ようか、などと思ひつゞけながら、旅をお進めになつた。そのうちに、こゝやかしこの戰ひに、亂賊は巖窟で身を碎く苦しみを嘗め、支那上古の涿鹿の戰ひのやうに、死傷した者の血は河のやうに流れて、その血染めの波が楯をも流すほどの激戰を幾度かしたが、遂に亂賊も閉口して矛を伏せ、皆降參したのだ。この御東征の記念として、この時から御狩の御遊

○紅波—血が波の如く流れる形容。
○尊の御字より—尊の東征を記念して、御狩の御遊を朝儀としてお始めになつたといふ意。但しこの事の出所は分らない。
○神無月—十月の異名。
○失せてんげり—「失せてけり」に撥音んを加へたのである。
○戸ざしを忘れ—盗賊の懼れのない太平の象。

な始め給へり。頃は神無月。二十日餘りの事なれば。四方の紅葉も冬枯の遠山にかかる薄雪を。眺めさせ給ひしに

シテ「夷四方を圍みつつ。

地「枯野の草に火をかけ。餘焔頻りに燃え上り。敵攻鼓を打ちかけて。火焔を放ちてかかりければ

シテ「尊は劍を拔いて

と扇を劍の心にて前へ出し、立上りてこれより謠に合せて仕科。

地「尊は劍を拔いて。あたりを拂ひ。忽ちに。焔も立ち退けと。四方の草を。薙ぎ拂へば。劍の精靈嵐となつて。焔も草も。吹き返されて。天に輝き地に充ち滿ちて。猛火は却つて敵を燒けば。數萬騎の夷どもは忽ちここにて失せてんげり。その後。四海治まりて人家戸ざしを忘れしも。そ

の朝儀をお始めになつたのだ。
この激戰は十月二十日頃の事であつたので、四方の紅葉も枯れ散り、冬枯の遠山には薄雪のかゝつてゐるのを、尊が御覽になつていらつしやると、亂賊は尊の四方を取圍んで、枯野の草に火をつけたので、火焔は盛んに燃え上る。亂賊は攻鼓を打つて、愈〻火焔を放つて、尊に攻めかゝつた。尊は劍を拔いて、あたりを薙ぎ拂ひ、「直に火焔も立ち退け」と四方の草を薙ぎ拂はれると、劍の靈は嵐となつて、火焔も草も亂賊の方へ吹き返したので、火焔は天に輝き地に充ち滿ちて、その盛んな火が却つて亂賊を燒くこととなつたので、數萬の亂賊は忽ちにしてこゝで殺されてしまつたのだ。——
その後は天下が泰平で、盗賊の心配もなく、民も安心して夜戸締りをすることを忘れるやうになつたのも、皆この草薙の寶劍の御蔭であるといふことだ。

○草薙―草薙の寶劒を申す以上クセの出典（草薙）の解說に揭ぐ。
○瑞相―めでたい前兆。
○傳ふる家―鍛冶を家業として傳へて來た家柄。
○下向―稲荷の社から自宅へ歸ること。
【六】
○通力―すべてのことに通達した、自由自在な神力。
○夕雲の―といふを夕にいひかけ、夕雲の居るを稲荷山にいひかけた。

の草薙の故とかや。唯今。汝が打つべきその瑞相の御劒も。いかでそれには劣るべき。傳ふる家の宗近よ。心安くも思ひて下向し給へ

とワキへ開きて下に居る。

【六】

ワキ「漢家本朝に於て劒の威徳。時にとつての祝言なり。さてさて御身は如何なる人ぞ・

シテ「よし誰とてもただ頼め。まづまづ勅の御劒を。打つべき壇を飾りつつ。『その時われを待ち給はば（と立ち上り）

地「通力の身を變じ（と仕手柱際へ行き）。通力の身を變じて。必ずその時節に參り會ひて御力を。つけ申すべし待ち給へ と（ワキへ開き）。夕雲の稲荷山。行方も知らず、失せにけり行方も知らず失せにけり

「夕雲の稲荷山」とシテ幕へ走り込みて中入。ワキ立ちて見送り、續いて中入。

今そなたが打つめでたい御劒も、必ずこれに劣らない程のものであらう。刀鍛冶の家業を傳へて來た宗近よ、安心して自宅へ歸られるがよからう」

【六】
宗近「支那又はわが國に於ける劒の威徳を伺ひましたことは、この場合誠にありがたい祝言です。して、あなたはどういふ方なのです」
童子「いや誰であつてもよい。たゞ頼みに思ふがよい。それよりはまづ勅命の御劒を打つべき壇を飾つて、その時自分を待つて居られたなら、神通力で身を變へて、きつとその時刻に參つて御力を添へよう。待つてお出でなさい」
といふや、夕雲のかゝつた稲荷山の中に行方知れず消え失せてしまつた。
シテ童子稲荷山へ隠れる體で退場。ワキ宗近も自宅へ歸る體で退場。

【間】◎稻荷山下に住居する者―觀世以外では「稻荷大明神に仕へ申す末社の神」

◎やう〳〵その時節に―以下「用意仕り候へ」まで、觀世以外では、「誠にかゝるありがたき御神なれば。皆々信仰申され候へ」

【七】

【間】狂言所の者、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。稻荷山下に住居する者にて候。誠に當社大明神と申すは。忝くも王城の鎭守として。靈驗あらたに御座候間。參り下向は夥しき事にて候。さる程に一條の院この程不思議の瑞相ましますにより。三條の小鍛冶宗近に御劍を打たせらるべきとて。橘の道成を勅使として。宣旨の趣仰せつけらるゝ。宗近宣旨承り。かやうの御劍を打ち申すには。我に劣らぬ相鎚なくては叶はじとて。色々辭退申されけれども。綸言汗の如く且は家の面目と存じ。畏つたると御請けを申し。この度の御劍は私に計らひ難し神力を賴まんとて。稻荷明神は氏の神なれば。唯今參詣申され候處に。明神假に童子の姿となり。宗近に行合ひ御詞をかはされ。劍の威徳委しく御物語あり。總じてわが朝に神代より傳はる御劍二つあり。十束の劍叢雲の劍なり。十束の劍は素盞嗚尊出雲の國簸の川上にて。大蛇を從へ給ひし劍なり。又叢雲の劍はかの大蛇の尾にありし劍なり。その後人皇の御代となつて。景行天皇第三の皇子日本武尊。駿河の國浮島が原にて東夷を平らげ給ひ。その時叢雲の劍を草薙の劍と名づけ給ふ。その外漢の高祖の三尺の劍。干將莫耶の劍。漢家本朝の劍の威徳委しく御物語あり。汝も名を得し鍛冶なれば。いづれ劣らぬ御劍を打つべき事賴もしく思ひ。鐵を練へて待つべし。その時明神出現あつて。相鎚を打たせらるべきとの御事にて候。やう〳〵その時節になり候へば。壇の飾りその用意仕り候へ。その分心得候へ〳〵

といひて引く。

【七】後見、一疊臺の前の方に注連を張り、上に鐵床・太刀身・鎚・幣をのせて正面先に出す。

後ワキ三條宗近、風折烏帽子・着附厚板・長絹・白大口・腰帶・扇の裝束にて囃子座前に出で、祝詞の囃子にて臺に上り幣を持ち、

【七】

第二段

舞臺は小鍛冶宗近の宅で、壇には注連繩が張られ、壇上には鐵床、太刀の身、鎚などが用意せられてゐる。

後ワキ小鍛冶宗近參場。

○本尊—神影をいふ。
○幣帛—神に供へるものの總稱。
○伊弉諾伊弉册の—古事記に「二柱の神(諾册の二尊)天の浮橋に立たして、その沼矛(天沼矛)をさし下してかき給へば、鹽こをろこをろにかきなして、引上げ給ふ時に、その矛の末よりしたゞる鹽積りて島となる、これ淤能碁呂島なり」とある故事(この事日本書紀にも見ゆ)を以て、刀劍の起原としたのである。
○南贍—南贍部洲といひ、須彌山四洲の一。轉じて人の住む世界の總稱。
○僧伽陀國—天竺の内にあり、北天竺の一國。
○波斯彌陀尊者—天國の遠祖と見られた人であらうが其の出所が分らない。
○天國—刀鍛冶諸流の元祖で、文武天皇の大寶年中大和國宇多郡に住んでゐた人であるといふ。
○ひつき—天國の後を傳へた刀鍛冶の名か。或は天位の繼承を「天つひつき」と申すので、天國の天の縁で家業傳承の意に混用したのであらうか。寶・春・喜には「ふじと」「ふぢと」とある。
○普天率土の勅命—詩經の

後ワキ『宗近勅に隨つて。卽ち壇にあがりつつ。不淨を隔つる七重の注連。四方に本尊を懸け奉り。幣帛を捧げ。仰ぎ願はくは。宗近時に至つて。人皇六十六代。一條の院の御宇に。その職の譽れを蒙る事。これ私の力にあらず。伊弉諾伊弉册の。天の浮橋を踏み渡り。豐葦原を探り給ひしの。御矛より始まれり。その後南贍僧伽陀國。波斯彌陀尊者よりこの方。天國ひつきの子孫に傳へて今に至れり。願はくは

地『願はくは。宗近私の功名にあらず。普天率土の勅命によれり。さあらば十方恒沙の諸神。唯今の宗近に力を合はせてたび給へとて。幣帛を捧げつつ。天に仰ぎ頭を地につけ(ト面を上下し)。骨髓の丹誠聞き入れ納受。せしめ給へや(ト幣を振り)

ワキ『謹上。再拜

宗近は勅命に隨つて、壇の上にあがり、不淨を隔てる爲に壇に幾重も注連繩を張り、四方に神影を掲げ奉り、色々のお供物を供へて、

宗近「どうか神々樣。私は非常な幸運を得まして、人皇六十六代一條天皇のこの大御代に、刀鍛冶としての名譽を蒙りましたが、これは私自身の力ではございません。抑も刀劍と申すものは、伊弉諾伊弉册の二神が天の浮橋を踏み渡つて、この國土をお探り遊ばした時の御矛から始まりましたもので、その後この現世では北天竺僧伽陀國の波斯彌陀尊者がこの業を始めまして、それより以來、天國の子孫が代々相傳へて今日となつたのでございます。

どうか神々樣。この度のことは私一己の功名ではございません。畏くも一天萬乘の大君の勅命によるのでございます。それでございますから、八百萬の神々樣、唯今の私に力をお合はせ下さいませ。かうして、お供物を奉り、天に仰ぎ地に頭をつけて、お願ひ致しまする私の心からの赤誠をお聞き入れになり、どうかこの願をお叶へ下さいませ。謹みお願ひ申しあ

詞に「普天之下莫レ非ニ王土一、率土之濱莫レ非ニ王臣一」とあるので、これを一天萬乘の意に用ゐたのである。
○十方恒沙の―十方は十方世界。恒沙は天竺の恒河といふ大河の沙。大河の沙の如く數限りなく多い十方世界の諸神といふ。

【八】

○童男―稻荷明神が童男の姿で現れ給うたのである。
○宗近に三拜の膝を屈し―神は相鎚、宗近は主鎚であるから、宗近に敬意を表せられるのである。

○教への鎚―主鎚の者がまづ第一に打下す鎚。

と幣を振りて捧げ、幣を持ちて地謠座前に行き下に居る。（幣は地謠に渡す）

【八】

早笛にて、後ジテ稻荷明神、面小飛出・赤頭・輪冠（狐戴）・金緞鉢卷・襟花色・着附厚板・法被・半切・腰帶の裝束にて鎚を持ちて常座に出で、ワキに向ひ、

地『いかにや宗近勅の劍。打つべき時節は虛空に知れり。賴めや賴め。唯賴め

〔舞働〕

この間にワキ肩をぬぐ。

シテ『童男壇の。上にあがり

地『童男壇の上にあがつて（とシテ壇に上り）。宗近に三拜の膝を屈し（と居立ちてワキへ禮し）。さて御劍の。鐵はと問へば（ワキ壇に來て太刀身を持ち）。宗近も恐悅の心を先として鐵取り出だし（とワキ鎚を持ち）。教への鎚を。はつたと打てば（とワキ太刀を打つ）

シテ『ちやうと打つ（シテも打つ）

げます」

と祝詞を讀む。

【八】

後ジテ稻荷明神登場。

明神「これ宗近、勅命の御劍を打つべき時節が虛空に知れたのだ。賴もしく思ふがよいぞ」

〔舞働〕

に神の勇ましい樣を示し、

童男の姿をした明神は壇の上に上つて、主鎚の宗近に三拜の禮をし、さて、

明神「御劍の鐵は……」

と尋ねると、宗近も喜びに夢中になりながら、鐵を取り出して、第一の鎚をはつたと打つと、明神がちやうと相鎚を打つ。ちやう〳〵と打ち重ねた鎚の音は天地に響いて、盛んな音がする。

【九】

○神體時の弟子なれば—神はこの時宗近の相鎚を打たれたので、弟子といふ。
○小狐—狐を稻荷明神の神使といふ俗説に據つたのである。
○刃は雲を亂したれば—刃を雲の形のやうに亂れ燒きにしたので。
○天の叢雲—寶劍草薙の劍の始めの名。
○これなれや—寶劍にも擬ふべき銘刀であるとの意。
○天下第一の—第一、二つの、御劔、四海、五穀と數字を重ねて、文のあやとした。
○五穀成就—神名帳頭注に「本社倉稻魂神也、此神素盞嗚女也、母大山祇神女大市姫也、倉稻魂神播二百穀一神也、故稱稻荷歟」とあるやうに、稻荷明神は五穀の神として信じられてゐる。
○小狐丸 打上げた刀の名

地「ちやうちやうちやうと打ち重ねたる鎚の音（と交互に打ち）。天地に響きて。おびたたしや
　シテ臺より飛び下り、上下に面を使ふ。

【九】
ワキ「かくて御劔を打ち奉り。表に小鍛冶宗近と打つ（と太刀に一つ打ち）
シテ「神體時の弟子なれば。小狐と裏にあざやかに（と壇へ上り一つ打つ）
地「打ち奉る御劔の。刃は雲を亂したれば。天の叢雲もこれなれや
　「打ち奉る」とワキ太刀身をシテに渡し、シテこれを捋ちて、二人とも壇より下り、ワキは地謠座に坐し、シテは「天の叢雲とも」と太刀身を高く上げ、
シテ「天下第一の
地「天下第一の。二つ銘の御劔にて。四海ををさめ給へば。五穀成就もこの時なれや。卽ち汝が氏の神（と仕手柱際にてワキへ胸ざしし）。稻荷の神體小狐

【九】
かうして御劔を打ち奉つて、宗近は刀の表に小鍛冶宗近と銘を打つ。

明神はこの時は弟子の形であるので、裏に小狐と鮮かに打ち奉る。

この御劔の刀は雲を亂したやうな亂れ燒きであるので、天の叢雲の寶劍にも擬へ奉るべきものである。

明神「これこそ天下第一の名劍で、裏表二つの銘を打つたこの御劔で天下をお治めになれば、五穀も今を盛りに豐かに成就するであらう。即ちこの御劔はそなたの氏神稻荷の神體に擬へて小狐丸と名づけよう」

と、その小狐丸の御劔を勅使に捧げ申

丸を、勅使に捧げ申し（と勅使に太刀を捧げ）。これまでなりといひ捨てて（と辭儀して立上り）。又叢雲に、飛び乗り、また叢雲に（と橋懸へ行き）。飛び乗りて東山。稲荷の峯にぞ歸りける

と幕際へ乗り込み飛び返りて立ち、留拍子を踏む。

同音「では歸るぞ」し、といひすてて、また叢雲に飛び乗つて東山の稲荷の峯に歸つた。

後ジテ稲荷明神稲荷山に歸る體で退場。ワキツレ橘道成御所へ復命の體で退場。

○東山―稲荷山は東山の南端である。

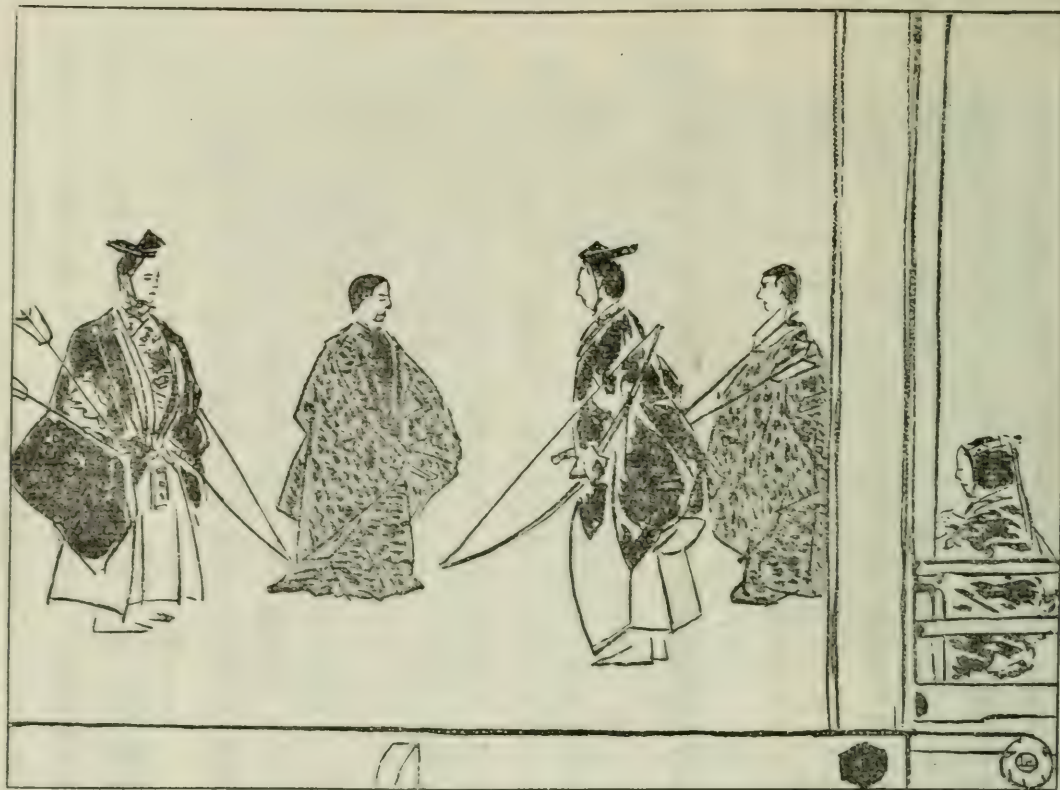
〔考異〕

諸流（五流）

【二】ワキ「宣旨畏つて承り候（寶折節相鎚打つべき者のなく候をば何と仕り候べき。ワキヅレ「不思議の事を申すものかな。その名を得たる汝なるが。相鎚打つべき者のなきとは心得難きいひ事かな。ワキ「これは仰せにて候へども。下懸ニ略寶ニ同ジ）かやうの一大事の……

古諸本（元祿八年本）

【一】ワキヅレ「これは一條の院に……さても（元去程に）今夜帝……御告まします（元御座候）により……唯今宗近が私宅へと急ぎ候（元急宗近を召寄此事を申付はやと存候。いかに誰か有。トモ「御前に候。大臣「三條の小かち宗近が私宅に越。仰付らるへき子細有。急き参内仕れと申付候へ。トモ「畏て候）【二】ワキヅレ「いかにこの家の内に……ワキ「宗近とは……ワキヅレ「これは一條の院の……宗近を召し（元宗近。汝に）御劒を打たせらるべきとの勅諚なり（元にて有そ）……【三】ワキ（元さあらは私宅に歸りて其用意な仕候へし。急て壇を御つかせ候へ）言語道斷一大事を……【四】地クリの前に（元ワキ「近比面白き人に参り合て候物哉。猶々劒の謂御存知仕候はは御物語候へ）

小袖曾我（こそでそが）

觀（寶春剛喜）

解説

【能柄】四番目　一段劇能

【人物】シテ　曾我十郎祐成、ツレ　曾我五郎時致、ツレ　從者團三郎、ツレ　同鬼王、ツレ　曾我の母、狂言　乳母春日局

【所】相模國　曾我館

【時】建久四年五月

【作者】能本作者註文に作者不明として擧げてゐる外、本曲に關する古記錄は見當らない。

【梗概】建久四年五月の中旬、賴朝が富士の裾野で卷狩を催したのを機會に、曾我兄弟は親の敵を討たうと志し、それについても、弟の五郎が母の勘當を受けてゐるので、その宥しを得且暇乞をしたいと思つて、兄弟打揃つて母を訪ねたところ、母は兄十郎には會つて種々歡待したが、弟には「母の命に背いた者は重ねての勘當である」といつて戸を閉ぢて會はない。十郎は「弟を離して自分一人を危險な狩場へ遣らう

とせられる所を見ると、母上は實は私をも愛してゐては下さらないのであらう」といつて立去らうとしたので、母は泣いて弟の勘當を宥した。兄弟は喜んで相舞を舞ひ、それとなく母に最後の別れを告げて、富士の裾野へ勇み立つた。

【出典】　この事は曾我物語卷七「小袖乞の事」乃至「母の勘當宥さるゝ事」（眞字本卷六にも同樣の事を記す）に詳述せられて居る。本曲はこれに據つたものと思はれるので、これを抄出すると、

十郎御前に畏り、扇笏に執り申しけるは「奉公を致し御恩被るべき身にては候はねども、末代の物語に、富士野の御狩の御供に思ひ立ちて候。恐入りたる申事にて候へども、御小袖一つ貸し給はり候へ」と申しければ……秋の野に草盡し縫うたる練貫の小袖一つ、取出してたびにけり。十郎畏つて障子の中にて着替へ、我が小袖をば打ち置きて出てぬ。亡き後の形見にとぞ思ひおきたりける。五郎は不興の身にて、兄が方に空しく泣き居たり。よく／＼物を案ずるに、母の不興を許されずして、死なん事こそ無念なれ、推參して見ばや、生きたる程こそ仰せらるゝとも、死して後悔み給はん事疑なし。思ひ切り申して見んとて、母の方へは出てたれども、さすがに內へは入り得ず、廣緣に畏り、障子を隔てて「そも誰が御子にて候はん、時致にも召替の御小袖一つ賜りて、狩場の晴に祗候はん」。母聞きて「誰そや、來りて小袖一つといふべき子こそ持たね、十郎は只今取りて出でぬ。京の小次郎は奉公の者なり。二宮の女房は又かやうにいふべからず。禪師法師とて乳の中より捨てし子は、叔父養育して越後にあり。又箱王とて惡者のありしは、勘當して行方知れず。是はたゞ、武藏相摸の若殿原の、貧なる姿を笑はんとてかく宣ふと覺えたり。然も留守居の體見苦し。はや門の外へ出て候へ」と、殊の外にぞ宣ひける。時致思ひ切りたる事なれば「その箱王が參りて候へ」「それは誰が許しおきたるぞ。女親とて卑しみ候か、左樣には候まじ。とても斯樣に侮らるゝ身、七代まで不興するぞ、對面思ひもよらず」とぞ言はれける。五郎は許さるる事は叶はずして、結局後の世までと深く勘當せられて、前後を失ひ思ひに忘じ果ててぞ居たりける。……

祐成重ねて申しけるは「一旦の御心を背き法師にならざるは、不孝には似て候へども、父母に志の深き事は法師によるべからず、僧俗の形にもよらず。時致箱根に候ひし時、法華經一部讀み覺え、父の御爲にはや二百六十部讀誦す。每日六萬遍の念佛怠らずして、父に回向申すと承り候へば、大地を戴き給ふ堅牢地神も、地の重き事は候まじ、……父に幼少より後れ、親しき者は身貧に候へば目も懸けず、母ならずして誰か憐み給ふべきに、斯樣に御心強くましませば、立寄る蔭もなきまゝに、乞食とならん事不便に覺え候ぞや」……なほも「宥す」と宣はねば、十郎怒りて見ばやと思ひて、持ちたる扇さつと開き、大きに目を見出し「兎ても角ても生甲斐

なき冠者、ありても何の益あらん、御前に召出し、細首打落して見參に入れん」と、大聲を出して座敷を立つ。……母も驚きさがりつき……「さらば宥す、留り候へ」と宣へば、その時十郎怒を留めて、聲を柔にし座敷にたほり畏り居たりける。……やゝありて、十郎座敷を立ち、「御宥しあるぞ時致、こなたへ參り候へ」。五郎はしをるゝ袖に忍びかね、暫しは出でこそかねたりけれ。暫くありて時致、袖打拂ひ顏おしのごひ出でければ、十郎も嬉しくあはれにて、打傾き居たり。……母打笑みて「それ／＼酒飲ませよ」と……母取寄せ飲み、その盃十郎飲む、その盃五郎三度ほして置きければ、その盃母取上げて、……和殿は箱根に在りし時、舞の上手と聞きしなり、忘れずば舞ひ候へかし」。十郎腰より横笛取出し、平調に音とり「いかに／＼遲し」と責めければ、暫し辭退に及びけるを、十郎はやし立てて待ちければ、五郎扇ひらき、かうこそ謠ひて舞うたりけれ……

幸若舞曲にも「小袖曾我」があるが、これは謠曲以後の制作であらう。

【概評】本曲は大體前揭曾我物語に據つたものであるが、これを物語に比べると、五郎が母を思慕する情は、物語よりも本曲の方が優しく且深く現れて居り、十郎が母の怒りを解く方便として採つた手段も、物語の方は荒々しく弟を殺さうとしてゐるが、これはたゞ母の情の淺いことを恨んで、すご／＼立ち去ることとして居るなど、本曲の方が物語よりも、子の親に對する態度を溫柔謹慎にしてゐるやうに思はれる。

物語にも見え、また本曲の題名ともなつてゐる小袖乞の事が、謠曲の本文から省かれて居る事については、謠曲の創作當時には小袖乞の事があつたのを、後に省略したのであらうといふ說(謠曲解題)と、初めから採り入れなかつたのであらうといふ說(謠曲評釋)と、兩說あるが、その是非を決定すべき證例はない。本曲の原形が兩說のいづれであつたにもせよ、作者は小袖乞と男舞と二つの主題を竝べることは演奏效果上却つて不得策であるを考へ、能として大切な男舞を主にして小袖乞を省略し、本曲の主題を純化したものであらう。曾我傳說を取扱つた現行曲には、本曲の外に、「調伏曾我」「元服曾我」「夜討曾我」「禪師曾我」がある。

【二】

【二】ツレ母、面深井・鬘・鬘帶・襟淺黃・着附摺箔・無色唐織着流。扇の裝束、狂言乳母、美男鬘・着附箔小袖・女帶の裝束にて出で、ツレは脇座、狂言は地謠座前に下に居る。次第の囃子にて、シテ曾我十郎・ツレ曾我五郎、直面・侍烏帽

【一】仁藤に曾我の館。ツレ曾我兄弟の母、狂言春日局を作つて登場するが、またこれは見物人には見えない筈。シテ曾我十郎、ツレ曾我五郎、ツレ團三郎、同

子・襟花色（五郎は紺色）・着附厚板・掛直垂・白大口・腰帯・扇・小刀の裝束にて弓矢を持ち、ツレ團三郎・ツレ鬼王、直面・襟萠黄・着附無地熨斗目・素袍上下・扇・小刀の裝束にて舞臺に入り向合ひて、

シテツレ（四人）次第『命をしかの隱れ里。命をしかの隱れ里富士の裾野を狩らうよ

地取にシテは正面に向き、

シテ「これは曾我の十郎祐成にて候。さても頼朝富士の御狩に御出で候間。われらも罷り出で候。（五郎に向き）又これなる時致は。母にて候者の勘當にて候程に。（正面に直し）申し直し連れて御狩に罷り出でばやと存じ候

シテツレ（四人向合ひ）サシ『時しも頃は建久四年。五月半ばの富士の雪。五月雨雲に降りまぜて。鹿の子斑や群山の。裾野の鹿の星月夜。鎌倉殿の御狩の御遊。げに類ひなき御事かな

十郎（正面に向き）『東八箇國の兵ども。皆御供に參る

王を伴つて登場。館の門口に立つてゐる[illegible]、

兄弟「鹿が命を惜しんで隱れてゐる富士の裾野の卷狩に出かけて、敵を討つてやらう」

こゝで弟を顧つて自分達の目的を述べ、

十郎「私は曾我の十郎祐成です。さて頼朝が富士の卷狩にお出でになるので、私達も出掛けるのです。それについて、この時致は母の勘當を受けてゐるので、そのお宥しを願つて、狩場へ連れて行かうと思ふのです」

こゝで見物人に自己紹介をし、

兄弟「今は建久四年五月の中頃で、富士の雪に五月雨が降りまぜて、鹿の子の斑毛のやうに、雪がむら消えになつてゐる。その山の裾野で、鎌倉將軍頼朝が狩の遊びをせられる樣は、實に他に類例のない豪勢なことだ。

この狩には關東八ケ國の武士が皆御供に參るのであるから、まさか敵の祐經も御

○命をしかの隱れ里—命の惜しきを牡鹿にいひかけた。隱れ里は鹿の隱れ住んでゐる狩場をいふ。敵工藤祐經を鹿に喩へたのである。「隱れ里」寶生・金春には「隱れ家の」とある。

○曾我の十郎祐成—本曲の末に記す。

○時致—祐成の弟。委しくは本曲の末に記す。

○建久四年五月半ば—吾妻鏡建久四年五月十五日の條に「藍澤御狩、事終入二御富士野御旅館一當二南面一立二五間假屋一御家人同連レ軒」とあり、その日は齋日で卷狩はなく、翌十六日から連日卷狩が行はれて、兄弟はその廿八日に敵を討つたのである。

○鹿の子斑や—雪のむら消えを鹿の子の毛の斑なるに喩へ、斑の群々であることを群山にいひかけた。伊勢物語の歌に「時知らぬ山は富士のねいつとてか鹿の子まだらに雪のふるらむ」を胸に置いて綴つた。

○星月夜—鎌倉の枕詞。鹿の星毛にいひかけた。

○鎌倉殿—鎌倉の地に幕府を開いた源頼朝を指す。

○東八箇國—足柄關以東の相摸、武藏、安房、上總、下總、常陸、上野、下野の八ケ國をいふ。

なれば。シテ(四人向合ひ)ツレ〽定めて敵の祐經も。御供申さぬ事あらじ。たとひ討つまでの。事は夏野の鹿なりとも。狙ひて見ばやと大丈夫の。狩人に紛れうち出づる

シテ(四人)ツレ下歌〽人知れぬ大内山の山守も。上歌〽木隠れて。それとは見えじ梓弓。それとは見えじ梓弓。矢頃にならば鹿よりも。祐經を射留めて。名を富士の嶺にあげばやと。思ひ立ちぬる狩衣。たとへば君の御咎め。よしそれとても數ならぬ。身にはなかなか、恐れなし身にはなかなか恐れなし

「身にはなかなか」と謡ひながら舞臺を大廻りして後見座にくつろぎ、弓矢を解き、十郎と五郎とは橋懸に出で、十郎は一の松、五郎は三の松に立ち、

【三】

シテ「これに暫く御待ち候へ。某參りて案内を申さうずるにて候

といひて、シテは舞臺に入り常座に立ち、

供しないことはあるまい。それで、たとひ敵を討ち取ることは出來ないまでも、狙つて見たいものだと思ひ、武士の狩人に紛れて出かけるのだ。――

あの狩場で、人知れず木の間に隠れて狙つてゐたならば、誰も敵討つ者と見咎めはしまい。そして、旨く矢を放つ頃合の所に敵を見つけたならば、鹿などはどうでもよい、敵の祐經を射留めて、名を富士山のやうに高く揚げよう。かう望みを立てゝ出掛けるのだが、不幸にして、たとひ頼朝のお咎めを受けたところで、構ひはしない、自分達のやうな浪人者は、却つて何の恐れもないのだ」

といつて、門口の所で、十郎は五郎に向ひ、

【三】

十郎「こゝに暫く待つてお出で。私が行つてお取次を頼まう」

橋懸が門外の態で、五郎はそこに待つて居り、十郎は中へ入つて、

○祐經―工藤左衛門尉。父祐繼から相續すべき所領を伊東祐親に横領せられたといつて恨み、祐親を狙つてその子河津三郎を殺したのであつた。
○夏野の鹿―討つまでの事はなくともを夏にいひかけた。
○人知れぬ大内山の―千載集源頼政の歌「人知れぬ大内山の山守は木隠れてのみ月を見るかな」を借り、忍び隠れて敵を狙ふ事に喩へた。
○梓弓―矢の枕詞。
○矢頃―矢を放つに適當な距離。
○狩衣―狩人の裝束。衣を着るを君のきにいひかけた。思ひ立つは裁つと同音で衣の縁語。
○君の御咎め―この君は頼朝を指す。
○數ならぬ身には―自分のやうな賤しい者には、却つて恐ろしくないとの意。
【三】

◎いかに案内申し候　以下「こなたへと申し候へ」までのシテ・ツレ・狂言の掛合、刊行會本には記さず、檜本には狂言詞をも記す。光悦本にも狂言をトモとして記す。
○大方殿―貴人の母をいふ大奥様といふ意。
◎心得申して候―光悦本には「畏て候」と記し、檜本には省く。
◎畏つて候御参りの通り―この狂言詞、諸本にはない。
○わざとはよも―わざとはよもや尋ね來るまじ。
○向顔―對面。

シテ「いかに案内申し候
狂言（立ちて）「誰にて御座候ぞ。や。祐成の御参りにて候
シテ「さん候某が參りたる由申し候へ
狂言「畏つて候。大方殿よりの御諚には。祐成の御参りならば申せ。時致の御参りならばな申しそと仰せ出だされて候
シテ「たゞ某が參りたると申し候へ
狂言「心得申して候。（といひて母の前に出で）いかに申し上げ候。祐成の御参りにて候
母「こなたへと申し候へ
狂言「畏つて候。（シテの前に出で）御参りの通り申し上げて候へば。こなたへ御通りあれとの御事にて候。かう〳〵御通り候へ
シテ舞臺の眞中に出で、母に辭儀す。
母「あら珍しや十郎殿。いづくへの序ぞや。母が爲にわざとはよも
シテ「さん候久しく參らず候程に向顔のため。又は富士の御狩と申し候程に

十郎「お頼みします」
狂言春日局出て
春日「どなたでございます。おゝ祐成様がお出でになつたのでございますか」
十郎「さうだ、私が伺つたと母上に申し上げてくれ」
春日「畏りました、奥方様は、祐成様がお出でになれば申せ、時致様がお出でになれば申すなと、仰せつけでございます」
十郎「たゞ自分が參つたとだけ申し上げてくれ」
春日「承知しました。（母に）祐成様がお出でになりました」
母「こちらへと申せ」
春日局十郎を中へ通して、舞臺正面の一室となる。
母「おゝ十郎殿か、これは珍しい、何處へ行く序に來たものか。よもや母の爲めに態々來てくれたのではあるまい」
十郎「はい、長らくお伺ひしなかつたので、お目にかゝりたいと思ひまして、それに又富士の裾野で御狩があるといふ事ですから……」

○いつしか—早くも。

○高間の山の—新古今集讀人不知の歌「よそにのみ見てや止みなん葛城や高間の山の峯の白雲」を借り、近づいて見る事の出來ない喩とした。高間山は大和國吉野の高峯。

○柞のもり—柞の森は山城國の紅葉の名所。同じ母を柞に、森を「守り」にいひかけた。

○御覺えあし垣の—御おぼえは御寵愛。寵愛の惡しきを葦垣にいひかけ、垣の縁で隔てあるとつゞけた。

【三】

○日本一—最上。この時代に用ゐ慣れた語である。

母「さればこそ思ひし事よ君が爲。御狩に出づるついでぞや

シテ「いつしか親子の御戲れ。めづらし顏に羨ましやと

五郎舞臺の方を見て、

五郎「思ひながらも時致は。不興の身なれば物の隙より

地「高間の山の峯の雲よそにのみ見てや止みなん。同じ子に。同じ柞のもりめのと。同じ柞のもりめのと。隔てなくこそ育てしに。さもひきかへて祐成には。いろいろのおもてなし御祝事のお盃。たとへば時致は。後に生まれしばかりなり。正しく同じ子の身にて。御覺えあし垣の隔てあるこそ悲しけれ（五郎しをる）

シテ立ちて一の松に行き五郎に向ひ、

【三】

シテ「日本一の御機嫌にて候。あれへ御參りあつ

母「やつぱり自分の思つてゐた通りだ。鎌倉公の御狩に出かける序に來てくれたのだね」

五郎はこの樣子を覗き見して、

五郎「もうはや親子で常談をいつていらつしやる、ほんとに珍しい羨しいことだ。……と思つても、自分は母上の御憤りを受けてゐる身だから、物の隙間から、高嶺の雲と同樣、餘所から見てゐるよりしやうがないのだ。同じ子に同じ母、乳母まで同じもので、兄弟分け隔てなく育てられたものだのに、自分とは違つて、兄上には色々の饗應をして、お祝事の盃を取り交はして居られる。それだのに自分は、たゞ兄より後に生まれたといふだけで、同じく子の身でありながら、お憎しみを受けて、分け隔てせられるのは、ほんとに悲しいことだ」

【三】

十郎、五郎の傍へ來て、

十郎「母上はこの上もないよい御機嫌だ。そなたもあちらへ來て、春日局に取次を

て。春日の局を以て申され候へ
五郎「某が事は御機嫌いかが計りがたく候間。まづまづ參り候まじ
シテ「唯某に御任せあつて。急いで御參り候へ
入替りて十郎は三の松に立ち、五郎は常座に入り、
五郎「いかに春日の局。時致が參りたる由それそれ申し候へ
狂言五郎に答へず。
五郎「いつしか守乳母まで。心變りし春日野の。飛火の野守。出でてだに見候はぬぞや。(狂言に向ひ)「時致が參りたる由それそれ申し候へ
母「あら不思議や。祐成は唯今來りぬ。九上の禪師は寺にあり。それならで子はなきに。時致といふは誰ぞ。や。今思ひ出だしたり。箱根の寺にありし箱王といひしえせ者か。それならば母が出家になれと申ししを聞かざりし程に勘當せし

お頼みなさい」
五郎「私は母上の御機嫌がどうだか分らないから、まあ參りますまい」
十郎「いや唯私に任せて、すぐお出で」
兄弟ともに舞臺へ入る。
五郎「おい春日局、自分が參つたとお取次しておくれ」
春日局は返事をしないので、
五郎「あゝはや乳母までが心變りをして、出てさへ來ない」
と獨言をいひ、
五郎「自分が參つたと取次いでおくれ」
と繰返していふ。母これを聞いて、
母「これは變だ。祐成は今來たし、九上禪師は寺にゐるし、この外に子はないのに、時致といふのは誰だ。おゝ今思ひ出した。箱根の寺にゐた箱王といふ馬鹿者か。あれなれば、この母が出家になれといつたのに、いひつけを聞かなかつたから勘當したのに、強ひてこゝへ來たからには、なほ重ねて勘當するぞ。伊豆・箱根・富士

○春日野の飛火の野守―春日局を春日野にいひかけ、古今集讀人不知の歌「春日野の飛火の野守出でて見よ今幾日ありて若菜摘みてん」を借り、「出でてだに」とつゞけた。
○九上の禪師―曾我兄弟の弟、委しくは本曲の末に記す。
○箱根の寺―箱根權現社の僧坊。
○箱王―時致の幼名。
○えせ者―「えせ」は似て非なる事、轉じて賤しい笑ふべき事。こゝでは馬鹿者といふ程の意。

○伊豆箱根―伊豆は三島明神、箱根は箱根權現。
○ちかごと―誓ひ言。
○蔀遣戸―蔀は突き上げ戸遣戸は横へ引く戸。
○やる方もなき―どうしようもない。
○うたてや―情なや。
○御簾几帳―今一目見んを御簾にいひかけた。几帳は外から見られないやうに、女の傍に立てる「かけとばり」(上下することの出來る布をかけた衡立のやうなもの)

【四】
○時移りたり―時致の時と字を重ねていふ。
○事よきか―事がうまく成就したか。
○中門―表門と寢殿との間にある門。
○かせき―鹿の異名。鹿の如くに泣く〳〵との意。
○打たれても親の杖―當時の諺であらう。

に。おしてこれまで來れるは。なほ重ねての勘當とや。伊豆箱根富士權現も御覽ぜよ。猶この後も勘當と

五郎「御誓言に蔀遣戸を

地「立て添へられて茫然と。やる方もなきこの身かな。うたてや せめて今一目。御簾几帳も下りたりあら。情なの御事や(としをる)

【四】

シテ「祐成は。かくとも知らで時致が。時移りたり事よきかと(舞臺に向ひ)。中門を見やりつつはや此方へと招けば(と扇にて五郎を招く)

五郎「招かれて山のかせき(としをりながら一の松へ行き)

地「泣く泣く來りたり。打たれても親の杖。なつかしければ去りやらず なつかしければ去りやらず(と五郎下に居る)

シテ「さて御機嫌は何と御座候ぞ

權現も御照覽あれ、なほこの後も必ず勘當するぞ」と堅くいつて、蔀や引戸を閉めきられたので、時致はたゞ茫然として、

五郎「あゝこの身をどうすることも出來ない、情ないことだ、せめて今一目お目にかゝりたいが、御簾も几帳もおりてゐる。あゝ情けないことだ」

【四】

祐成はこのやうな結果であらうとは知らず、

十郎「時致が館へ入つてから大分時間が經つたが、都合よく行つたか知らん」と中門の方を覗いて、時致に、

十郎「早くこちらへお出で」と招くと、時致は招かれて泣く〳〵やつて來たが、諺にも『打たれても親の杖』といふ通り、母がなつかしいので、その場を離れてしまふことも、ようしない。

(五郎[illegible]へ來る。)

十郎「して、母上の御機嫌はどうであつた」

◎いかに誰かある―以下母狂言（トモ）掛合、刊行會本には記さず、楢本（光悦本にも）には載す。但し「その分心得候へや」は謠本に記してゐない。

○同心―協力。

【五】

五郎「以ての外の御機嫌にて。猶重ねての御勘當と仰せ出だされて候

五郎立ちて、シテと入替り、五郎は三の松に、シテ一の松に立つ。

母「いかに誰かある

狂言「御前に候

母「時致が事を申さば。祐成ともに勘當と申し候へ

狂言「畏つて候。（十郎に向き）いかに申し候。時致の御事を御申しあらば。祐成殿ともに御勘當と仰せ出だされて候。その分心得候へや（といひて元の座につく）

シテ（狂言に）「まづ畏つたると申し候へ

シテ（五郎に）「某存ずる子細の候間。この度は同心にて申さうずるにて候

五郎「いやいや某は參り候まじ

シテ「唯御參り候へ

【五】 二人舞臺に入り、シテは眞中に、五郎は仕手柱先に下に居り

五郎「非常なお腹立て、なほ重ねて勘當すると仰しやいました」

舞臺では、母が春日局に、

母「時致の事をいつたら、祐成も一所に勘當するぞといへ」

春日「畏りました」

十郎の傍へ行つて、

春日「もうし、時致樣の事を仰しやると、あなたまで御勘當するぞと仰せでございますぞ」

十郎「とにかく、畏りましたと申し上げてくれ」

こういつて、五郎に、

十郎「自分に考へてゐる事があるから、今度は一所に力を合はせてお願ひしよう」

五郎「いや〳〵私は參りますまい」

十郎「いゝからお出で」

【五】 兄弟打連れて舞臺に入る。十郎母に向ひ、

〇出家の暇を申す―出家する爲に暇を願ひ出る。
〇郞等―家來。
〇身に思ひあり―敵討の念願のあるをいふ。
〇おのれらさへに―汝等までが。時致を指す。
〇河津―父の姓。
〇弘法―佛法を世に弘めること。

母に辭儀して、

シテ「いかに申し候。われらが親の敵の事。世に隱れなく候處に。あまりにたよりなく候間。時致が事を申し直し。連れて御狩に出づべき處に。時致が事を申さば。祐成ともに御勘當と候や。(面を上げ)よくよくこれを案じ見るに。クリ「總じて祐成をもまことは思ひ給はぬぞや

地「たとひ時致出家の暇を申すとも。兄祐成に郞等もなし。しかも身に思ひあり。おのれらさへに見捨つるかと。却つて御叱り候ひてこそ。慈悲の母とも。申すべけれ

シテサシ「それに時致を法師にならぬとの御勘當。たとひ仰せに從ひ。出家仕り候とも

地「われらが事は世に隱れなし。あれ見よ河津が子どもこそ。敵を遁れんとの出家。正しく弘法

十郎「申しあげます。私どもが親の敵を討つべき身上であることは、世間にも知れ渡つてゐますので、あまり便りなく思はれますから、時致の勘當のお宥しを願つて、一所に連れて御狩に出かけようと思つてゐましたところ、時致の事を申したならば、私も一所に御勘當だと仰しやるのでございますか。

よくこの事を考へますと、一體母上はほんとは私をも可愛がつて下さらないのでございませう。たとひ時致が出家したいとお暇を願ひましても、兄祐成には家來もなし、その上、身に敵討の望みを持つてゐるものであるのに、お前までが兄を見捨てるのかと、却つてお叱りになつてこそ慈悲深い母上と申すものでございませう。

それだのに、時致が法師にならないといつて御勘當なさいますが、たとひ母上の仰せに從つて出家しましても、私どもの事は世間に知れ渡つてゐることで、あれを見よ、河津の子供は親の敵が恐ろしくて、それを遁れようと思つて出家したのだ。確かに佛法信仰から出家したのでな

○同宿—同じ寺に居る同學の僧。
○墨衣の—墨衣は僧衣。染まぬの縁で墨を出し、衣の縁で浦といひかけた。
○浦島が子の—浦島子が龍宮より玉手箱を持つて歸つたといふ傳説に據つて、箱根とつゞけた。
○明暮くやし—あけは箱の縁語。浦島子が箱を開けて悔んだといふ傳説を文のあやにしたのである。
○なかなか—却つて。
○俗—在俗の普通人。
○時致は箱根にありし—以下「父河津殿に回向す」まで曾我物語の文を引いた。解説參照。
○法華經—妙法蓮華經八卷釋迦説法の最後に述べた眞實教で、一佛乘の教を説いたもの。
○現世安穩後生善所—法華經藥草喩品の句。この世では安穩に暮らし、來世では極樂に生まれるとの意。
○回向—死者の追福を祈ること。
○この三年—時致が元服して勘當せられたのは十七歲の時である。
○不興—譴り。
○御暇ごひしさ—御暇乞し

の爲ならずと。同宿も思ひ卑しまば。心も染ま
ぬ墨衣の浦島が子の。箱根寺にて。明暮くやし
と思ふならば。なかなか俗には劣るべし

（居クセ）

地クセ『時致は。箱根にありししるしに。法華經一
部讀み覺え。常は讀誦し母上の。現世安穩後生
善所と祈念する。又は毎日に。六萬遍の念佛父
河津殿に回向する。かほどに他念なき身をこの
三年不興蒙る。恩顏を拜せねば御戀しさも一つ
又は。狩場への門出。御暇ごひしさ一方ならぬ
望みなり。大方。治まる御代なれども。狩場や漁
りに。不慮の爭ひあるものを

シテ五郎『その上われらは。狩場に於て例惡しし

地『昔を思ひ伊豆の奥の。赤澤山の狩くらにて。
父も失せさせ給はずや今とても。狩場とあらば

いのだ」と、同じ寺の朋輩も思つて、弟を卑しめたならば、俗となつても心に染まず、箱根寺で朝夕口惜しい思ひをしませう。それでは却つて在俗の身よりも悪からうと思ひます。時致は箱根に居りました甲斐あつて、法華經一部を讀み覺え、始終讀誦して、母上が現世では安穩にお暮らしになり、後生では極樂にお生まれになるやうにと祈念をし、又毎日六萬遍念佛して、父河津殿に回向して居るのです。このやうに親を思ひ佛を信じて餘念のない者が、この三年の間御勘氣を蒙つて、お目にかゝらないのですから、御戀しさも一方ならず、又狩場へ行きますについて御暇乞ひも致したく、かれこれ深い願ひを持つてゐるのでございます。一體にうち治まつた御代ではありますが、狩場や漁獵には兎角意外な爭ひ事のあるもので、殊に私どもは狩場に縁起の惡い者です。昔を思出せば、伊豆の奥の赤澤山の狩で、父上もお亡くなりになつたのではありませんか。今日の場合でも、狩場へ行くと申せば、何故御心におかけ下さらないのです」

たさの意で「戀しさ」にいひかけたのであらう。
○不慮の爭ひ―思ひがけない爭ひ事。
○例惡しし―次に擧げてゐる父の不慮の死を指す。
○伊豆の奥の―思ひ出づを伊豆の奥野にいひかけた。
○赤澤山の狩くらにて―河津三郎が伊豆奥野の狩の歸途、奥野の口、赤澤山の麓、八幡山の境にある切所で、祐經の郎黨大見小藤太、八幡三郎に射殺されたこと、曾我物語巻一に見ゆ。狩くらは狩する場所をいふ。
○伏しまろべばや―このやは疑問の助詞とは見られない、感動の意に用ゐたのであらう。
【六】
○いつしか思ひ子の―早くも母の愛子となる意。

などしも。御心にもかけざると。恨み顔にも兄弟は。泣く泣く立つて出でければ

と兄弟しをりながら橋懸へ行きかゝる。母立ちて、

母「母は聲をあげ。あれ留め給へ人々よ

地「不興をも勘當をも許すぞ許すぞ時致とて泣く泣く出でさせ給へば（と母しをりながら二三足出づ）

シテ五郎「兄弟は嬉し泣きに伏しまろべばや

と兄弟謡ひながら舞臺に駈け入り居立ちてしをる。

地「見る人も思ひやりて泣きゐたりや

と母もとの座に歸り三人ともしをる。

【六】

母「祐成申すによつて。時致が勘當許すにてあるぞ。近う來りて狩場への門出祝ひて御入り候へ

シテ「いかに時致近う參りて。この年月の御物語り申し候へさるにても

地「この程時致が。盡す心にひきかへて。今はいつしか思ひ子の母の情ありがたや。あまりの嬉し

と恨み顔でかういつて、兄弟は泣く泣く立つて出て行くと、母は聲をあげて、

母「皆の者、あれを留めておくれ。腹立ちも勘當も宥すぞ／＼、おい時致―」と泣く／＼出られると、兄弟も嬉し泣きにふし轉ぶので、見る人もその心中を察して泣いてゐた。

一度橋懸へ出かけた兄弟は母の許しを得て喜び舞臺に驅け入る。

【六】

母「祐成が頼むから、時致の勘當を宥してやるぞ。近う來て、狩場の門出を祝つてお出で」

十郎「おい時致、近う來て、この長い年月のお話をせい。……それにしても、これまで時致は悲しい思ひをしてゐたものが、今はそれと大違ひで、はや母上の愛子とせられてゐる、あゝ母上のお情はありがたいことだ。……あまり嬉しいから、

○高き名を—兄弟敵討の名が高く傳はることと、富士山が名も山も高いこととを兼ねていふ。
○雲居—この雲居は文字通り大空の意。
○雪を廻らす—富士の雪を廻雪にいひかけた。廻雪は舞の美しい形容で、張衡觀舞賦に「袖如レ廻レ雪」とある。
○舞のかざし—袖をかざして舞ふこと。
○目を引き—目くばせをする。
○涙も盡きせぬ—涙の盡きないことと名殘の盡きないこととを兼ねていふ。
○をしかの—名殘惜しといひかけた。
○歸る山—越前にある山の名にいひかけた。この句は「山姥」にもある。こゝには縁のない所であるから「山姥」の謠を轉用したものであらうか。
○折を得て—機會を待ち受けて。
○瞋恚の焔—以下數句「富士太鼓」と同文。忿怒の烈しさを焔に喩へ、焔の縁で煙を出し、富士の煙にいひかけて綴つた。
○淸見が關—駿河國庵原郡にある。月を淸く見るといひかけ、關の縁で留めといふ。

さに祐成お酌に立ちてとりどり時致とともに祝言の。謠ふ聲

「あまりの嬉しさに」とシテ扇を開きて立ち母と五郎に酌をし、「謠ふ聲」と五郎も立ちて、これより兄弟竝びて相舞し

シテ五郎「高き名を。雲居にあげて富士の嶺の

地「雪を廻らす。舞のかざし

〔男舞〕（二人相舞）

地「舞のかざしのそのひまに。舞のかざしのそのひまに。兄弟目をひき。これや限りの親子の契りと。思へば涙も盡きせぬ名殘（と母に辭儀をし）。をしかの狩場に遲參やあらんと。暇申して（と立ち）。歸る山の。富士野の御狩の。折を得て。年來の敵。本望を遂げんと。互に思ふ。瞋恚の焔。胸の煙を富士颪に。晴らして月を。淸見が關に。終にはその名を留めなば兄弟親孝行の。ためしにならん。嬉しさよ

私が立つてお酌をしませう」とお酌に立つて、時致と共に祝言の謠を謠ふ。

兄弟「——『高き名を雲居にあげて富士の嶺の……』（高名を富士山のやうに高くあげて……）と謠ひ、

〔男舞〕を兄弟相舞で舞ふ。

かうして美しい舞を舞ふ、その舞の手の隙間に、兄弟は目くばせをして、これが親子最後の別れかと思へば、涙が盡きせず溢れ出て、名殘が深く惜しまれるのであるが、狩場に遲れてはならないと、母に暇乞をして、

兄弟「かうして富士野へ歸り、あの御狩によい機會を狙つて、年頃の敵を討つて本望を遂げ、お互のこの胸の憤りを晴らして、その名を後世に留めたならば、自分達兄弟は親孝行の手本となるのだ、ほんとに嬉しいことだ」

と兄弟勇み立つて退場。

とシテは常座にて、五郎は一の松にて留拍子を踏む。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】シテツレ次第「命をしかの……富士の裾野を狩らうよ（剛ナシ）【六】地「雪を廻らす舞のかざし（春母「いかに面々一さし御舞ひ候へ。[人]「畏つて候。剛母「いかに兄弟一さし御舞ひ候へ。喜母「いかに祐成時致と相舞に一さし御舞ひ候へ）。男舞

古謡本（光悦本）

【二】シテ「これに暫く……某参りて案内を（光ナシ）申さうずるにて候……シテ「さん候久しく……父は（光ナシ）富士の御狩と申し（光仰出され）候程に……【三】シテ「日本一の……春日の局を以て申され（光して御申）候へ……母「あら不思議や……重ねての勘當と（光ぞ）や……【六】シテ「（光畏て候）いかに時致……地「この時致が……母の情ありがたや（光き）……

附記

○曾我の十郎祐成—幼名一萬。伊東祐親の孫で、その五歳の時父河津三郎を工藤祐經に討れた。後母の再緣した曾我祐信に養はれて、その姓を冒し、十郎祐成と名乘つた。この時年廿二。吾妻鏡建久四年五月廿九日の條に「此兄弟者、河津三郎祐泰男也、祐泰去安元二年十月之比、於伊豆奥狩場、不圖中矢殞命、是祐經所爲也、于時祐成五歳、時致三歳也、成人之後、祐經所爲之由聞之、遂宿意、凡此間毎狩倉、相交于御供之輩、伺祐經之隙、如影隨形云々」

○時致—祐成の弟。幼名箱王、この時年二十。箱王は幼時箱根別當に預けられ、法師となる筈であつたが、父の敵を討たん爲に、密かに母に隱れて元服したので、母の憤りに觸れて勘當せられたのである。この事曾我物語卷四に委しく見え、〔元服曾我〕に作らる。

○九上の禪師—曾我兄弟の弟。父の死後生まれた子で、河津三郎の弟伊東九郎祐清に養はれ、越後國久上の寺（西蒲原郡國上村）に登せられて伊東禪師といつたこと、曾我物語卷一及び卷十に見ゆ。この人の事〔禪師曾我〕に作らる。禪師は高僧の尊稱。

胡(こ)蝶(てふ)　觀（寶剛）

解說

【能柄】　三番目　複式夢幻能

【人物】　**ワキ**　吉野の僧、**ワキツレ**　同從僧（二人）、**前シテ**　里女（胡蝶）、**狂言**　都の者、**後シテ**　胡蝶の精

【所】　京都　一條大宮

【時】　春（二月）

【作者】　能本作者註文、二百十番謠目錄ともに觀世小次郞の作とす。言繼卿記天文十四年三月廿一日の條に本曲演能のことが見えてゐる。

【梗概】　吉野の僧が花の都へ來て、一條大宮のある古宮の御階の下に美しく咲いてゐる梅を見てゐると、人の居さうもない軒端から、一人の女性が現れ出て、詞をかけたので、不審に思ひ、その名を尋ねると、「自分は實は胡蝶で、春夏秋の花に戲れ遊ぶが、早春の梅花に緣のないのが恨めしい。お僧の法華經讀誦によつて成佛したいと思つて詞をかけた。この夜の夢に二度お目にかゝらう」といつて消え失せる。僧が

花の木蔭に假寢してゐると、果して胡蝶の精が現れて、「法華經の功力によつて成佛し、源氏物語の「胡蝶にも誘はれなまし」といふ歌のやうに、梅の花にも隔てたきものとなつた」と喜び、喜びの舞を舞ひ、歌舞菩薩のやうな面影を殘して、霞の中に消え失せる。

【出典】　これといふ典據は見當らない。所謂精魂物の一として、謡曲作者の新しく構想したものであらう。文章の綾として、莊子齊物論篇の胡蝶の夢の故事、源氏物語胡蝶の巻の文等を採り入れてゐるが、それは語釋の中に引用することとする。

【概評】　いかにもその樣の華やか、しかし命の果敢ない胡蝶は、華麗と閑寂とを併せて表現しようとする謡曲の主題として、誠に恰好なものであつた。殊に他の精魂物には、「高砂」「合浦」のやうに祝言を主とするか、「遊行柳」のやうに佛德を主とするか、「杜若」「六浦」のやうに和歌、又は「鷺」のやうに傳説文藝を主材とするか、草木鳥獸そのものの本質を離れたものが多いのに、この曲は胡蝶そのものの本質に從つてゐる所が、際立つて秀れてゐる。劇的葛藤を起す導因として、早春の梅を捉へたのも、心憎い手法であつたと思ふ。その他すべてさらり脚色の形式も、シテの呼掛の出は、精魂物に普通の例であり、またこの方がことごとしい感じを與へなくてよい。その他すべてさらりとしてゐて、クセなどにも理窟めいたことがなくてよい。秀れた曲であると思ふ。

【一】

○春立つ空の旅衣—衣の緣語、春(張る)、立つ(裁つ)、日も(紐)を文のあやとした。

○三吉野—三は接頭語。吉野は大和國吉野郡の山地で櫻の名所。

【一】

後見、丸臺に紅梅の立木の作物を正面先に出す。

次第の囃子にて、ワキ僧、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・腰帶・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧二人、ワキと同じ裝束にて舞臺に入り向合ひ、

ワキ・ワキヅレ　次第「春立つ空の旅衣。春立つ空の旅衣　日ものどかなる山路かな

地取にワキは正面に向き、

ワキ「これは和州三吉野の奥に山居の僧にて候。われ名所には住み候へども、未だ花の都を見ず

【一】　前　段

僧等は初め大和國吉野で、ワキ吉野の僧、ワキヅレ從僧を作つて登場。

僧「春になつたから、山路を出て、のどかな旅をしよう」

　次第を謡つて旅の心持を述べ、

僧「私は大和國吉野の奥に山住ひをしてゐる僧です。私はこの吉野といふ櫻の名所には住んでゐますが、また花の都を見

○洛陽—京都。
○高嶺の深雪まだ冴えて—冴えは寒さうなこと。新千載集藤原俊成の歌に「春きぬとみかきが原は霞めどもなほ雪さゆる三吉野の山」
○花遅げなる—新古今集西行法師の歌「よしの山櫻の枝に雪散りて花遅げなる年にもあるかな」の詞を借りた。
○象の山—吉野の内にある。
○三笠山—大和國奈良の春日山。
○楢の葉の—奈良に寄せていふ。
○廣き御影の—君恩の廣大なことを木の葉の茂つた樣に喩へていふ。
○一條大宮—京都の西北部にある。
○由ありげなる—由緒のあるらしい。
○昔忍ぶの忘草—昔を忍ぶを忍草にいひかけた。忍草と忘草とは同じ草の異名であるといふ。
○車寄—牛車を寄せて乘り降りする所。今の玄關。
○御階—寢殿（高貴の邸の正殿）から庭へ下る階段。

候程に。この春思ひ立ち都に上り。洛陽の名所舊跡をも一見せばやと思ひ候

といひて、ワキ・ワキヅレ向合ひ、

ワキ
ワキヅレ 道行「三吉野の。高嶺の深雪まだ冴えて。高嶺の深雪まだ冴えて。花遅げなる春風の吹きくる象の山越えて。霞むそなたや三笠山茂き楢も楢の葉の。廣き御影の道直に。花の都に着きにけり
花の都に着きにけり

ワキ「霞むそなたや」と正面に向きて先へ出でまたもとに歸りて都に著きたる心。道行濟みて正面に向き、

ワキ「急ぎ候間。程なう都に着きて候。この所を人に尋ねて候へば。一條大宮とやらん申し候。心靜かに一見せばやと思ひ候。又これなる所を見れば。由ありげなる古宮の。軒の檜皮も苔むして。「昔忍ぶの忘草。誠に由ある所なり。（作物へ向き）又車寄の邊なる。柴垣の隙より見れば。御階

たことがないので、この春思ひ立つて都に上り、京都の名所舊跡を見物しようと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

僧「吉野の高嶺にはまだ雪があつてうすら寒く、花の咲くのも遅れさうであるが、それでもどことなくのどかな春風の吹いてゐる象山を越えて、春霞のたなびいてゐる三笠山を眺め、奈良を通つて、帝の御仁政のいともありがたい花の都に着いた」

といつてゐるうちに、旅は進んだ態で、舞臺は京都一條大宮となる。

僧「旅を急いだので、間もなく都に着いた。さて、こゝは何處だらうと人に尋ねると、一條大宮だといふことだ。まづこの邊をゆつくり見物しませう（といつてあたりを見まはして）又この所を見ると、由緒のありさうな古い宮がある。あの屋根の檜皮に苔が生えて、古風な樣子、確かに由緒のある所だ。車寄の邊にある柴垣の隙間から見ると、御殿の階段の傍に、立派な梅の花が眞盛りに咲いてゐる。そばへ寄

【三】

○屋づま……家の端。軒端。

のもとに色殊なる梅花の今を盛りと見えて候。
立ち寄り眺めばやと思ひ候

といひて脇座へ行きかゝる。

【二】

シテ里女、面深井・鬘・鬘帯・襟白・着附摺箔・唐織着流・扇の装束にて幕より出でながら、

シテ（呼掛）「なうなう御僧はいづくと思しめして。この梅を眺め給ひ候ぞ

ワキ脇座に立ちてシテに向ひ、

ワキ「不思議やな人ありとも見えぬ屋づまより。女性一人來り給ひ。われに言葉をかけ給ふぞや。さてここをばいづくと申し候ぞ

シテ「さては始めたる御事にてましますかや。まづまづ御身はいづくより來り給へる人なるぞ

（と橋懸へすゝみ）

ワキ「これは和州三吉野の奥に山居の者にて候が。始めて都に上りて候

つて眺めませう」

舞臺には一本の梅の木があるだけであるが、旅僧のこの科白によつて、古風な宮殿があつて、その軒端に美しい梅のあることが想像される。

【二】

旅僧が梅の木へ近づくと、シテ胡蝶の精が里女の姿を裝つて登場。

女「もうしもし、お僧樣はこゝを何處だと思つて、この梅の木を御覽になつていらつしやるのです」

僧「おゝこれは不思議だ、人の居さうにも思はれない家の端から、女が一人出て來て、私に詞をかけられるわ。（といつて女に向ひ）こゝは何處です」

女「それでは、始めてこちらへお出でになつたのでございますか。それよりも、お僧樣はどちらからお出でになつたのでございます」

僧「私は大和國吉野の奥に山住ひをしてゐる者で、今度始めて京へ上つて來たのです」

○大内―内裡。天皇のおはす御所。

○雲の上人―公卿・殿上人。

○住む家櫻色變へて―住む家といひかけて家櫻（山櫻に對する里の櫻）とつゞけた。賤しい樵夫の家にある櫻花とは色がちがつてといふ意。

シテ「さればこそ見馴れ申さぬ御事なり。こゝは又昔より故ある古宮にて。大内も程近く。所からなるこの梅を（と一の松にて作物へ向き）。『雲の上人春ごとに。詩歌管絃の御遊を催し、眺め絶えせぬ花の色。心留めて御覧ぜよ（と舞臺にすゝみ）

ワキ『あら面白や所から。由ある花の名所を。今見る事の嬉しさよ。「さてさて御身は如何なる人ぞ。『御名を名のり給ふべし

シテ「名所の人にてましませば。そなたの名こそ聞かまほしけれ

（と常座に立ちてワキに向く。）

ワキ『名所には住めども心なき。身は山賤の年を經て

シテ『住む家櫻色變へて。これは都の花盛り

ワキ『心をとめて

女「道理で、お見馴れしない方だと思ひました。こゝは昔から由緒のある古い御殿で、御所にも近い所なので、この梅の盛りには、毎春公卿殿上人がこゝで詩歌管絃の御遊をお催しになり、見物人の絶えない、立派な梅なのでございます。よく心を留めて御覧なさいませ」

僧「あゝ面白い。場所柄といひ、由緒のある花の名所を見ることが出來て、ほんとに嬉しいことです。ところで、あなたはどういふ方です。お名前を仰しやつて下さい」

女「あなたこそ名所の方なのですから、お名前を伺ひたうございます」

僧「いや名所には住んでゐますが、何の風雅な心もない、樵夫同樣の暮らしをして年月を送り、田舍櫻を眺めてゐるばかりで……」

女「ええ、都の花はまた格別で、殊に今は花盛りでございますから、よく御覽なさ

○梅が香に—昔を問へば春の月—新古今集藤原家隆の歌を引いた。この下句「答へぬ影ぞ袖に移れる」

○明石の浦に—わが名を何と明かさんといひかけて、明石の浦より海士の子と續けた。

○宿をだに—新古今集讀人知らずの歌「白波の寄する渚に世をつくす海士の子なれば宿も定めず」を引いた。

【二】

○なかなかに—却つて。

○人がましく—人間らしく

○紅の—紅涙と紅梅とを兼ねた。

シテ「色深き

地上歌「梅が香に、昔を問へば春の月。答へぬ影もわが袖に、移る匂ひも年を經る古宮の軒端苔むして、昔戀しきわが名をば。何と明石の浦に住む。海士の子なれば宿をだに定めなき身は、恥かしや定めなき身は恥かしや

（とシテ面を伏す）

【二】

ワキ「なほなほこの宮の謂れ。又御身の名をも委しく御物語り候へ

シテ「さのみ包むもなかなかに。人がましくや思しめされんさりながら。眞はわれは人間にあらず。われ草木の花に心を染め。梢に遊ぶ身にしあれども。深き望みのある身なり。などやらん昔より。梅花に縁なき事を歎き。「來る春毎に悲しみの。涙の色も。紅の。梅花に縁なきこの身

いませ。しかし、私は古歌に——「梅が香に昔を問へば春の月、答へぬ影ぞ袖にうつれる」（梅の花に昔の事を尋ねると、梅の花は何も答へないで、たゞ月影が袖にうつつてゐる）とありますやうに、何のお答へも出來ない、匂ひもなく年寄つて行き、たゞ昔戀しい思ひをしてゐますもので、何とも名前の申しあげやうもない、いはゞ海士の子のやうな、住家さへ定まらない、お恥かしいものでございます」

【二】

僧「いやいや、さういはずに、この宮の由緒も、あなたのお名前も委しく聞かして下さい」

女「あまり隱し立てを致しますと、却つて人並の人間らしく思し召すでございませうか、私はほんとは人間ではないのでございます。私は草木の花に思ひを入れて、梢から梢へと遊び廻つてゐる者ですが、なほ深い望みを持つてゐるのでございます。と申しますのは、どういふ譯か、私は昔から梅の花に縁がないので、それが悲しくて、春毎に梅の花に縁のないのを

○花に馴れ行くあだし身は―古今和歌六帖の「百千鳥花に馴れ行くあだし身ははかなきほどに羨まれつゝ」を引いた。

○胡蝶の夢の―莊子齊物論篇に「昔者莊周夢爲二胡蝶一、栩々然胡蝶也、自喩適レ志與不レ知レ周也、俄然覺則蘧々然周、不レ知周之夢爲二胡蝶一與、胡蝶之夢爲レ周與一

○妙なる法の蓮華の花―妙法蓮華の文字を引き延べ、花の臺と續けた。花の臺は極樂の蓮華臺。

○官位も影高き―官職位階の高いのを、日影の高い意にいひかけて、その緣で光と續けた。

○光源氏の古―源氏物語胡蝶の卷に、光源氏が童に胡蝶の舞をさせて遊んだ事を記してゐるので、胡蝶の緣でこゝに引いた。

○御舟に飾る金銀の―舞樂を奏せられる御舟の飾りの金銀を金銀の瓶にいひかけた。胡蝶の卷に「東の釣殿にこなたの若き人々集めさせ給ふ。龍頭鷁首を唐のよそひに、ことごとしうしつらひて、楫とり棹さす童部、みな髮ゆひて、唐土だたせて、さる大きなる池の中にさし出でたれば、まことの

なり

（としをりながら眞中に出で下に居る。ワキも下に居る。）

地クリ「げにや色に染み。花に馴れ行くあだし身は。はかなきものを花に飛ぶ。胡蝶の夢の。戯れなり

シテサシ「されば春夏秋を經て

地「草木の花に戯るゝ。胡蝶と生まれて花にのみ。契りを結ぶ身にしあれども。梅花に緣なき身を歎き。姿を變へて御僧に言葉を交はし奉り

シテ「妙なる法の。蓮葉の

地「花の臺を。賴むなり

（居クセ）

地「傳へ聞く唐土の。莊子があだに見し夢の。胡蝶の姿現なき浮世の中ぞあはれなる。定めなき世といひながら。官位も影高き。光源氏の古も。胡蝶の舞人色々の。御舟に飾る金銀の。瓶にさ

悲んで、涙を流してゐるのでございます。

ほんとに、色好みな、花に戯れ歩く徒ら者は果敢ないもので、譬へに胡蝶の夢のやうだといはれてゐますが、私はその譬に引かれる、花に飛び歩いてゐる胡蝶なのでございます。

私は胡蝶と生まれましたお蔭で、春から夏秋へかけて、草木の花に緣の深い者ですが、たゞ梅の花に緣のないのが悲しくて、このやうに姿を變へて、お僧樣に詞をかはし、法華經の功德によつて、極樂往生の出來ますやうにと、お願ひ致すのでございます。―

胡蝶と申せば、支那の莊子は夢で胡蝶となつて舞ひ遊んだと傳へられ、夢のやうな浮世の、行末の定められない譬に引かれてゐますが、又一面、昔官位の高い光源氏は、童に胡蝶の舞をさせるのに、御舟には金銀を飾り、金の瓶には山吹をさして、その舟の中でお舞はせになり、御簾

知らぬ國にきたらむ心地して、あはれに面白く、見馴らはぬ女房などは思ふ―同じ巻に「鳥蝶にさうぞきわけたる童部八人、容貌など殊に整へさせ給ひて、鳥には銀の花瓶に櫻をさし、蝶は金の瓶に山吹を、同じき花の房もいかめしう、世になき匂ひを盡させ給へり。南の御前の山際より漕ぎ出でて御前に出づるほど、風吹きて瓶の櫻少しうち散りまがふ」

○襲の衣を懸け給ふ―同じ巻に、舞樂の終つた後―宮のすけをはじめて、さるべき上人ども、ろくとりつゞきて童部にたぶ。鳥には櫻の細長、蝶には山吹襲たまはる」

○花園の胡蝶をさへや下草に秋待つ蟲は疎く見るらん―同じ巻に出てゐる紫上(源氏の北方)が秋好中宮に贈つた歌。紫上は春を好み、中宮は名の如く秋を好まれるので、中宮を秋待つ蟲に喩へて詠んだのである。

○夕暮の―昔語をいふといひかけた。

【間】

す山吹の。襲の衣を懸け給ふ

シテ『花園の。胡蝶をさへや下草に

地『秋待つ蟲は。疎く見るらんと詠め來し。昔語を夕暮の（とシテ立ち）。月もさし入る宮のうち。人目稀なる木の下に（と作物を見やり）。宿らせ給へわが姿（とワキへ向き）。夢に必ず見ゆべしと。夕の空に消えて夢の如くなりにけり夢の如くになりにけり

と常座にて開き、靜かに中入。

美しい衣を賜はりました。その時——
『花園の胡蝶をさへや下草に、秋待つ蟲は疎く見るらん』
（秋のお好きなあなたは、春のものといへば、花に戯れる胡蝶までも嫌ひなのですか）
とお詠みになつて……。おや、このやうな昔語を申してゐますうちに、月が出て參りました。この宮の内の人目の少い木蔭にお泊まりなさいませ。必ずお僧樣の夢に現れて、私の姿をお見せ致しませう」といつて、夕暮の空に、夢のやうに消えてしまつた。

【間】　狂言所の者、着附段熨斗目・長上下・腰帶・扇・小刀の裝束にて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。都一條のあたりに住居する者にて候。今日は一條大宮へ出で心を慰めばやと存ずる。（ワキを見て）いや是なる御僧はいづ方より御出でなされ候ぞ

ワキ「これは和州三吉野の奥に山居する僧にて候。御身はこのあたりの人にて渡り候か

狂言「なか〳〵この邊の者にて候

ワキ「左樣にて候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「畏つて候。（眞中に出で下に居てワキに向ひ）さて御尋ねなされたきとは。いかやうなる御用にて候ぞ

ワキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。この宮の御事。又これなる梅花につき樣々子細あるべし。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

○近頃にて候—近頃にない喜ばしいことだ。

○奇特—不思議な靈妙なこと。

狂言「是は思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこのあたりに住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候へども。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「まづこの所をば一條大宮と申し候。又これなる古宮は。いにしへ光源氏御遊ありたる所と承り候。御庭には草木數を盡し。池水には高麗唐土の舟を浮かめ。見事さ申すも愚かに御座ある由承り候。又御階の下の梅は。常の梅に變り色香勝れて咲き亂れ。蝶などの宿をなし見事に御座候間。源氏御寵愛淺からず御座ありたると申す。又胡蝶と申すものは。春夏秋を送るものなれば。千草萬木に戯れをなし候へども。梅は早春に咲くものなれば。胡蝶梅花に緣なき事を悲しみ候處に。草木心なしとは申せども。心も御座あるにや。一歳(ひととせ)この梅いつもより遲く咲き申す間。胡蝶喜びの氣色にて。花に飛び移り戯れをなし申す風情。面白く御座ありたると申す。左樣の事を紫の上の御歌に。花園の胡蝶をさへや下草に。秋待つ蟲は疎く見るらんと。かやうに詠み給ひたると申す。然れどもこの梅その後はいつもの如く咲き候へば。胡蝶愈々思ひ深く。梅花に緣なき事を悲しみ候へども。更に望み叶ひ申さず候。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。われ名所には住み候へども。花の都を見ず候間。名所舊跡一見のため遙々參りて候。最初この宮に立ち寄り梅花を眺め候處に。いづくともなく女性一人來り。この宮の御事。梅花の子細懇に語られ候間。いかなる人ぞと尋ねて候へば。眞は胡蝶の精なるが梅花に緣なき事を歎き。佛果に至り梅花に馴れる事を願ふ身なり。再び夢に見ゆべしといひもあへず。そのまゝ姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。扨は御僧貴くましますにより。胡蝶の精魂女となりて現

【四】○あだし世の―和歌を引いたやうであるが出所が分らない。世を夜にいひかけた。○衣かたしく―片方の袖を下に敷いて寢ること。
【五】○妙典―一乘妙典の略。妙法蓮華經をいふ。○功力―功德の力。○有情非情も隔てなく―「有情非情、非情は草木。「草木國土悉皆成佛」の經文に據る。○深き恨み―花の色深き、といひかけた。この恨みは梅花に戯れたいといふ執着をさす。

れ出で。梅花に緣なき輪廻を免れたく存じ。詞を交はしたると存じ候間。暫く御逗留なされ。重ねて不思議を御覽あれかしと存じ候

ワキ「近頃不思議なる事にて候間。暫く逗留申し。ありがたき御經を讀誦し。重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「御用の事も候はば重ねて仰せ候へ

ワキ「賴み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【四】
ワキ　ワキヅレ上歌〈待謠〉「あだし世の。夢待つ春のうたた寢に。賴むかひなき契りぞと。思ひながらも法の聲。立つるや花の下臥に。衣かたしく、木蔭かな衣かたしく木蔭かな

【五】
一聲の囃子にて、後ジテ胡蝶の精、面深井・黑垂・天冠〈胡蝶挿す〉・襟白・着附摺箔・紫長絹・腰卷・扇の裝束にて常座に出で、

後ジテサシ「ありがたやこの妙典の功力に引かれ。有情非情も隔てなく。佛果に至る花の色。深き恨みを晴らしつつ。梅花に戯れ匂ひに交はる。

後段

【四】
（僧）この世が夢のやうな果敢ない頼み難いものであるのに、まして、春の夜のうたゝ寢の夢に胡蝶が現れてくるなどといふことは、あてにならないことだとは思ふが、讀經をして、この花の木蔭に衣の片袖を敷いて假寢をしよう」

さいつて假寢してゐる心。

【五】
この夢に現れる心で、後ジテ胡蝶の精が登場

（胡蝶）ありがたうございます。この法華經の功德の力によつて、生類も草木も一樣に成佛することが出來、私も望み通りに、梅の花に戯れることが出來まして、深い執着を晴らし、誠にありがたうございます。私、その梅の花に戯れ遊ぶ胡蝶の精

胡蝶の精魂現れたり（とワキへ向く）
ワキ『有明の月も照り添ふ花の上に。さも美しき胡蝶の姿の。現れ給ふはありつる人か
シテ「人とはいかで夕暮に。交はす言葉の花の色。『隔てぬ梅に飛び翔りて（と作物へ二三足出て）。胡蝶にも。誘はれなまし。心ありて
地「八重山吹も隔てぬ梅の。花に飛びかふ胡蝶の舞の袂も匂ふ氣色かな

〔中舞〕

引續き次の謠に合せて舞ふ。

【六】

地『四季折々の花盛り。四季折々の花盛り。梢に心をかけまくも。かしこき宮の所から。しめの内野も。程近く。野花黄蝶春風を領し。花前に蝶舞ふ紛々たる。雪を廻らす舞の袖。かへすがへすも。面白や

○胡蝶にも誘はれなまし―胡蝶の巻、前出紫上の「花園の」の歌に對する秋好中宮の返歌「胡蝶にも誘はれなまし心ありて八重山吹も隔てざりせば」を引いた。

【六】

○かけまくも―心をかけると、言葉にかけると。
○しめの内野―しめ野は御狩場で諸人の入るを禁ぜられた所。内野は京都西山の麓にある。
○野花黄蝶―三體詩王建の綺岫宮の詩句「野花黄蝶領二春風一」を引いた。野の花や蝶が春風をわがもの顔にしてゐるとの意。
○花前に蝶舞ふ―百聯抄解の詩句「花前蝶舞紛々雪、柳上鶯飛片々金」を引いた。
○雪を廻らす―舞の巧みなことの形容。文選に「飄々兮若二流風廻雪一」
○かへすがへすも―袖を翻すといひかけた。

魂が現れて來たのでございます」
僧「有明の月の照り映えた花の上に、いかにも美しい胡蝶の姿をした人のお見えになるのは、以前にお會ひした人なのですか」
胡蝶「どうしてまた人と仰しやるのです。私はあの夕暮に申しあげました通り、望みが叶つて、このやうに梅の花に隔てなく飛びかけることが出來るのでございます。あの『花園の』の歌の返しに――
『胡蝶にも誘はれなまし心ありて、八重山吹も隔てざりせば』
（あなたの方にお隔てがなくば、私も胡蝶の舞を見たいと思つてゐるのです）
と詠まれましたやうに、今は梅の花と隔てのない間柄となつて、この花に舞ひ遊ぶのでございます」

〔中舞〕

に胡蝶が梅の花の間を舞ひ遊ぶ様を示す。

【六】

胡蝶「かうして、四季折々の花盛りに、わけても梅の梢で、殊に恐れ多くも、御禁野に近いこの宮で、春風をわがもの顔にして、ひら〳〵と舞ひ戯れるのは、返す返すも面白うございます。――

シテ「春夏秋の。花も盡きて
地「春夏秋の花も盡きて。霜を帶びたる。白菊の。花折り殘す。枝を廻り。廻り廻るや小車の（と作物を廻り）。法に引かれて佛果に至る。胡蝶も歌舞の菩薩の舞の。姿を殘すや春の夜の。明け行く雲に。羽根うち交はし。明け行く雲に。羽根うち交はして。霞に紛れて。失せにけり
と常座にて輕く留拍子を踏む。

このやうに舞ひ戲れて、春から夏、秋の末、花もなくなつた後まで、霜のかゝつた殘菊に舞ひ遊び、十分の樂しみを盡して、佛法の功德により成佛することが出來ました」
と胡蝶は歌舞菩薩の面影を殘して、春の夜の明け行く空に、羽根をひら／＼と飜して、霞に紛れて見えなくなつた。

○花折り殘す―菊の盛りも過ぎて殘菊の頃となるまで遊び戲れるとの意。
○廻り―蝶の飛び廻るを車の廻るに轉じた。
○小車の法―車に乘るを法にいひかけた。佛法に導かれて成佛することを、車に乘つて火宅を出るに喩へた法華經譬喩品の寓話に據つて「小車の」を「法に引かれ」の序としたのである。
○法に引かれて―法華經の功德によつて。引かれては車の緣語。
○歌舞の菩薩―歌舞を奏して如來を讃美し、往生の人を歡樂せしめる菩薩。

〔考　異〕

諸　流（觀寶剛）

【一】ワキ「急ぎ候間……由ありげなる古宮の（寶剛に星霜つもり互に松生ひ）……

古諸本（元祿二年本）

【一】ワキ「急ぎ候間（元程に）……この所を人に尋ねて候へば（元ナシ）……由ありげなる古宮の（元星霜積りかはらに松生）軒の……又（元御）車寄の……　【二】ワキ「これは和州……始めて都に上りて候（元爰にきたりたり）

戀重荷（こひのおもに）　觀

解説

【能柄】　四番目　複式劇能

【人物】　**ツレ**　女御、**ワキ**　白河院臣下、**狂言**　同從者、
前シテ　山科莊司、**後シテ**　同亡靈

【所】　京都　御所内

【時】　白河院御宇　（九月）

【作者】　世子六十以後申樂談儀、能本作者註文、二百十番謠目錄共に世阿彌の作としてゐるが、世阿彌の能作書に「戀の重荷昔綾の太鼓也」と記してゐるから、古曲を世阿彌が改作したのである。申樂談儀にはまた
戀の重荷の能に、「思の煙の立ち別れ」は靜に渡る拍子のかゝりなるべし。此能は色ある櫻に柳の亂れたるやうにすべし。
といつてゐる。糺河原勸進申樂記に寬正五年四月七日、親元日記に寬正六年二月廿八日これを演じたことが見えてゐる。

【梗概】　白河院の御宇、御苑の菊守をしてゐる山科莊司が女御を見そめ奉つて、及びもない戀に惱んだ。女御はこれを思ひあきらめさせる方

便として外を錦繡で包んだ戀の重荷を作つて、これを持つてお庭を百度も千度も廻つたならば、姿を拜ませようと、臣下をして傳へしめ給うた。戀に盲目となつた莊司はこの重荷を持ちかねて精根を盡し、遂に死んでしまつた。莊司の怨靈は一度は女御を深く恨み奉つたが、やがて心解けて、その千代の御榮えを守り奉つた。

【出典】別段典據といふべきものはないが、もし强ひて求めれば、平判官康頼の寶物集に、

皇后の網人にあはんと契り給ふ事は、天竺に網人あり　名を術婆迦といふ。魚を持ちて王宮に到るに、思はざる程に術婆迦后を見奉りて、後煩惱の思ひさむる時なく、歎き悲しみて病の床を起きず。術婆迦が母この事を怪しみて故を問ひければ、術婆迦隱すといへども、終に母に語る。是を聞きて思ひを止めん爲に王宮に詣りて、向の方にたゝずみけるに、后怪しみて故を問ひ給ふに、網人が母事の次第を語り申す。后是を哀と思召して、五百兩の車をかざりて社頭へ參り、網人にあはんと契り給ふ事なり。

とあるのに暗示を得たものであらうか。――この寶物集の說話にやゝ似たものに、お伽草子の「和泉式部」がある。

【概評】本曲は前に述べたやうに、古曲「綾の太鼓」を改作したもので、同一系統のものに「綾鼓」がある。いづれも賤しい老人が高貴の御方を戀し奉つたもので、賤しい女が天皇を慕ひ奉つた「花筐」とともに、懸隔の甚しい戀を描いたもので、謠曲數百番中他に例の少い構想である。たゞこゝに注意したいのは、賤夫の戀の對象に女御を指したことで、今日の我々から見れば、あまりに冒瀆の感に打たれるのであるが、これは必ずしも皇室式微の室町時代相の反映として、皇室を輕く見奉つたものとのみ見ることは出來ない。室町時代の武士、貴族を憧憬の標的とした彼等は、公家貴族が接近し奉つた宮廷を、この世ながらの極樂境と想像し、男子の最高理想は公卿殿上人となること、女子の夢想は天子に直勤し奉ることにあつたのである。それで、室町時代文藝のめでたい解決としては、屢〻この理想・夢想を實現させてゐるのであるが、それは憧憬のあらはれであつて、必ずしも皇室を輕く見奉つたものとはいへないのである。殊に本曲は「綾鼓」が「あら恨めしや、恨めしの女御やとて、戀の淵にぞ入りにける」と恨み死にに終つてゐるのに反し、これは「葉守の神となりて、千代の影を守らん」と結んでゐるなど、皇室尊崇の念が自然に溢れ出てゐるのである。鼓太鼓又は綾鼓を避けて、戀重荷を擇んだのは脚色は「綾鼓」に比べてクセがないだけで、大體同じ形式であるが、戀の難題として、賢明なやり方であつたと思ふ。

【一】

○白河の院―白河天皇（一〇五三―一一二九年）。一〇七二年御即位、一〇八六年御讓位、爾後御院政、一一二九年崩御）を申すが、本曲の事はもとより假作であつて、この天皇の御時にかやうな事跡があつたのではない。「綾鼓」には木の丸殿（天智天皇）の御時として作つてゐる。

○山科の莊司―山科は山城國宇治郡にある村。莊司は中古功臣に賜つた土地即ち莊園の事をその主の命を受けて掌つた者、轉じて園丁の意、こゝでは山科から來る園丁といふ意。

○女御―親王・三公の女の入内せられた方で、未だ皇后の宣下を賜はらない間の稱。

○御前に候―以下狂言詞、謠本の文に從ふ。

【一】

後見、重荷の作物を正面先に置く。

ツレ女御、面連面・鬘・鬘帶・襟白赤・着附摺箔・唐織壺折・緋大口・腰帶・扇の裝束にて出で脇座にて床几にかゝる。

名乘笛にて、ワキ臣下、風折烏帽子・着附厚板・單狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて、着附段熨斗目・長上下・腰帶・扇・小刀の裝束の狂言從者を隨へて出で、名乘座に立ちて、

ワキ「抑もこれは白河の院に仕へ奉る臣下なり。さてもわが君菊を御寵愛あつて。每年數多の菊を植ゑ育てられ候。又ここに山科の莊司とて賤しき者の候いつも菊の下葉を取らせられ候間。申しつけばやと存じ候。又承り候へば。かの者如何なる折にか。忝くも女御の御姿を拜み申し。勿體なくも戀となりたる由承り候間。かの者を召し出だし尋ねばやと存じ候

といひて、狂言に向ひ、

ワキ「いかに誰かある

狂言、ワキの前に出で、

狂言「御前に候

【一】

前　段

舞臺は御所の内、前は御苑に面してゐる態。正面先に重荷があり、つれ女御がまづ登場する。ワキ白河院の臣下、狂言の從者を隨へて登場。

臣下「自分は白河院にお仕へ申してゐる臣下です。さて、帝には菊を御寵愛遊ばされ、每年澤山の菊を植ゑてお育てになるのです。ところで、こゝに山科の莊司といふ下賤な者がゐて、いつもこの男に菊の下葉をお取らせになるのだから、よくこの者にいひつけようと思ふのです。ところがまた、自分の耳にしたことには、その男がどうした機會にやら、忝くも女御樣の御姿をお拜み申して、勿體なくも戀心を起したといふ話だから、その男を呼び出して、事の實否を尋ねようと思ふのです」

三見物人に自己紹介をして、事件の發端を述べて、狂言の從者の方に向き、

臣下「誰かゐないか」

從者「はいお前に居ります」

◎荘司を連れて參りて候―これは諸本にはない。

【二】

○所勞―病氣。

ワキ「山科の荘司に此方へ來れと申し候へ

狂言「畏つて候

ワキは地謡座前に行き下に居る。狂言は一の松へ出で幕に向ひ、

狂言「いかに山科の荘司の渡り候か

シテ山科荘司、面阿古父尉・尉髪・襟淺黄・着附小格子・縷水衣・腰帶・扇の裝束にて幕より出で、

シテ「誰にて渡り候ぞ

狂言「急ぎ御參りあれとの御事にて候

シテ「畏つて候

シテ、狂言と共に舞臺に入る。狂言ワキに向ひ、

狂言「荘司を連れて參りて候

ワキ「過分にて候

といひて狂言は狂言座にくつろぐ。シテは仕手柱際にて下に居りワキに向く。

【二】

ワキ「いかに荘司。何とてこの間は御庭をば清めぬぞ

シテ「さん候この程所勞仕り候ひて。さて怠り申

臣下「山科の荘司にこちらへ來るやうに申しつけよ」

從者「畏りました」

といつて橋懸へ行く。こゝは山科荘司の住家の態で、從者は幕に向ひ、

從者「もうし、山科荘司はお出でですか」

荘司「どなたでございます」

從者「急いで御所へ參れとの仰せです」

荘司「畏りました」

と二人打連れて舞臺に入る。

【二】

臣下「おい荘司、この頃はどうしてお庭掃除をしないのだ」

荘司「はい、この頃はからだの具合が惡う

○色に出でてあるぞ—顏色に表れること。拾遺集平兼盛の歌「忍ぶれど色に出でにけりわが戀はものや思ふと人の問ふまで」を胸に置いて綴つた。
○百度千度廻る—「廻る」を檜本には「めぐる」、刊行會本には「まはる」と書く。
○なんぼう—何程。いかにも。

して候

ワキ「尤もにて候。さて汝は戀をするといふは眞か

シテ「さやうの事をば何とて知ろしめされて候ぞ

ワキ「いやいやはや色に出でてあるぞとよ。さる間この事を忝くも女御聞しめし及ばれ。急ぎこの荷を持ちて御庭を百度千度廻るならば。その間に御姿を拜ませ給ふべきとの御事なり。なんぼうありがたき御諚にてはなきか

シテ「何とこの事を聞しめし及ばれ。その荷を持ちて御庭を百度千度まはれとかや。百度千度とは。百度も千度も持ちて廻らば。その間に御姿を拜まれさせ給ふべきと候や

ワキ「げによく心得てあるぞ。なんぼうありがたき御事にてはなきか

ございますので、それで患つて居りまして……」

臣下「それは是非がない。ところで、お前は戀をしてゐるといふことだが、それは事實か」

莊司「まあ、どうしてそのやうなことを御存じでございます」

臣下「いや聞くまでもないことだ。はやお前の顏色に現れてゐるぞ。それについて、忝くも女御樣がこの事をお聞き遊ばされて、急いでこの荷を持つて、お庭を百度も千度もまはつたならば、その間に御姿を拜ませてやらうとの仰せなのだ。實にありがたい仰せではないか」

莊司「何と仰しやいます。女御樣がこの事をお聞き遊ばされて、その荷を持つて御庭を百度も千度もまはれと仰せられるのでございますか。そのやうに百度も千度も持つて廻つたならば、その間にお姿を拜ませてやらうとの思召なのでございますか」

臣下「いかにもその通りだ。實にありがたい御事ではないか」

○戀の重荷－戀の苦しさを喩へて、戀の重荷といふこと、この頃廣く行はれてゐたのであらう。

○叶はぬ業－力に及ばない事。

○さのみは隔てじ－わが身に似合はしい賤しい業であるから、さほどむつかしくもあるまいとの意。

○戀の持夫－持夫は荷物を持ち運ぶ人夫。戀を荷に喩へていつたもので、狭衣物語にも「戀の持夫をわが身にならひ給へれば」とある。

【三】
○誰踏み初めて－誰が最初に戀といふことをし始めて
○巷に人の迷ふ－巷は多くの道の出合ふ處で行先を迷ひ易いから戀を喩へていつた。

シテ「さらばその荷を御見せ候へ

ワキ「此方へ來り候へ

ワキ・シテとも立ち、ワキ重荷を見て二足詰め、

ワキ「これこそ戀の重荷よ。なんぼう美しき荷にてはなきか

シテ「げにげに美しき荷にて候。たとひ叶はぬ業なりとも。仰せならばさこそあるべけれ。ましてやこれは賤しき業。「さのみは隔てじ名を聞くも

地次第「重荷なりとも逢ふまでの。重荷なりとも逢ふまでの。戀の持夫にならうよ

とシテ重荷の方へ二三足出てこれを見つめ、地取に後見座にくつろぎ兩肩をあぐ。ワキは脇座に歸り下に居る。

【三】

シテ一聲の囃子にて仕手柱際へ出で、

シテ一聲「誰踏み初めて戀の道

地「巷に人の。迷ふらん

荘司「それではその荷をお見せ下さいませ」

臣下「こちらへお出で」

荘司重荷の傍へ行く、[illegible]

荘司「これが戀の重荷だ、いかにも美しい荷ではないか」

荘司「いかにも美しい荷です。たとひ力に叶はない仕事でも、女御様の仰せとあれば、何でも致しませうものを、殊に荷を持つやうなことは、私ども賤しい身には似合はしいことで、さほどむつかしくもありますまい。なるほど名前は重荷と承りましても、戀しい君に逢ふ爲の力業、何の辛いことがあらう。どれ、戀の持夫になりませう」

【三】

荘司は重荷を持つために仕度を整へて、

荘司「一體戀の道といふものは、誰が最初に踏み迷うて、このやうに多勢の人が踏み迷ふやうになつたのであらう」

○名もことわりや—戀の重荷といふ語があるのも尤もなことだ。
○及び難きは高き山—戀の及び難きを高山に、戀の思ひの深きを深海に喩へた。
○わたづみ—海の古語。

【四】
○露のかごとを—露はいさゝか、かごとは怨み言。いさゝか恨みをいふを夕顔にいひかけ、次の句につゞけた。
○夕顔のたそかれ時—源氏物語夕顔卷、源氏が黄昏時に夕顔の宿を訪れた時の歌に「よりてこそそれかとも見めたそかれにほの〴〵見つる花の夕顔」。その後夕顔の歌に「光ありと見し夕顔のうは露はたそかれ時のそら目なりけり」などあるに寄せていふ。
○虎と思へば石にだに—志さへ强ければ、どんなむつかしい事でも成就するといふ故事。漢の李廣といふ者、母が虎に害せられた事を憤つて、石を虎と思つて矢を射たところ、その矢が石に突立つたといふ。この事今昔物語にも見ゆ。

シテ『名もことわりや戀の重荷。（と重荷へ行き）

地『げに持ちかぬる。この身かな

（と重荷を持ちかねてしをりながら二三足下りて坐し、）

シテサシ『それ及び難きは高き山。思ひの深きはわたづみの如し

地『いづれ以てたやすからんや。げに心さへ輕き身の。塵の浮世にながらへて。よしなく物を思ふかな

（としをりながら立ち、仕手柱際へ行く。）

【四】

地ロンギ『思ひや少し慰むと。露のかごとを夕顔の。たそかれ時もはや過ぎぬ。戀の重荷を持つやらん

シテ『重くとも。思ひは捨てじ唐國の。虎と思へば石にだに。立つ矢のあるぞかし。いかにも輕く持たうよ（と作物へ二足詰め）

「莊司」成程、戀の重荷といふ名のついてゐるのは尤もなことだ。戀といふのは、ほんとにわれながら扱ひかねるものだ。わしとしたことが、山のやうに高い地位のお方に思ひをかけたことだ。それにしても、戀しい思ひは海のやうに深いのだ。それて、思ひを遂げることも出來ず、忘れることも出來ないのだ。ほんとに思慮もない賤しい身が、この世に永らへて、つまらない物思ひをすることだ」

【四】

「臣下」少しは氣でも慰むと思つてか、あのやうな恨みがましい愚痴をいつてゐるうちに、はや夕暮時もすぎてしまつた。あれで、戀の重荷が持てるか知ら」

「莊司」どのやうに重くても、あきらめは致しません。支那の話に、虎だと思ひ込んで矢を放てば、石をも射通したといふことです。思ひ込んだ念力の通らないわけはありません。いかにも輕々と持ちあげませう」

（重荷を持ちあげようとしたが、上がらない。）

○荷前の運ぶなる—毎年十二月十陵八墓に幣帛を奉らるゝ事を荷前といひ、その勅使を荷前使といひ、幣帛を納めた箱を荷前の箱といふ。戀の重荷を荷前の箱に喩へて、自分を荷前使に擬へ、箱を運ぶにいひかけたのである。
○戀の奴—戀の爲に心身を追ひ使はれること。萬葉集巻十二に「ますらをのさとき心も今はなし戀の奴に我は死ぬべし」
○亡き世なりと—亡き身となりてもの意。
○よしなや—是非がない。
○唯頼め—新古今集清水觀音の御詠「なほ頼め標茅が原のさしも草われこの世の中にあらん限りは」を引き、原を腹立ちにいひかけた。しかしこれなどは掛詞濫用の悪例である。
○よしなき—甲斐のない。
○菅筵—戀をするといひかけ、菅筵の縁で伏してを呼び起した。
○肩かへて—寝られないまゝに左右に肩をかへて寝返りする意と重荷を擔ふ肩をかへることとを兼ねていふ。
○あはれてふ—古今集讀人不知の歌「あはれてふ言だ

地『持つや荷前の運ぶなる。心ぞ君がためを知る。重くとも心添へて持てや持てや下人
シテ『よしとても。よしとても。この身は輕し徒らに。戀の奴になり果てて。亡き世なりと憂からじ（とまた二足詰め）
地『亡き世になすもよしなやな。げには命ぞ唯頼め（と面を伏せ）
シテ『しめぢが腹立ちや
地『よしなき戀を菅筵。伏して見れども寝らればこそ。苦しや獨寝の。わが手枕の肩かへて（と重荷へかけ行き）。持てども（と重荷を持ちかけ）。持たれぬそも戀は何の重荷ぞ
（と眞中に下りて安坐し、）
シテ『あはれてふ。言だになくは何をさて。戀の亂れの。束ね緒も絶え果てぬ

臣下「さうだ。荷前の御使が幣帛の御荷物を運ぶやうに、たゞわが君の御爲と思つて、たとひ重くても、よく氣をつけて持つがよいぞ」
莊司「えゝ、私の身はつまらないもの、どうなつても構ひは致しません。戀の奴になり果てゝ、死んでしまつても、辛いとは思ひません」
臣下「死んでしまつてはつまらない。やはり命あつての物種だ。からだに氣をつけるがよからう」
莊司「あゝ腹の立つことだ。及びもない戀をして、寝て見ても寝つくことは出來ず、たゞ獨寝に轉々して苦しむばかりだ。今もかうして肩をかへて持つて見るが、重荷はどうしても持ち上がらないのだ。どうして戀の重荷はこのやうに辛いものだらう。
思ふお方から『おゝ可愛い』との言葉をかけて戴くより外に、戀の亂れ心を慰める術はないのに、今はその望みも絶え果てゝしまつた。えゝ構はない、戀ひ死に死んでやらう。この報いがあのお方に來たならば、それこそ自業自得といふもの

地「よしや戀ひ死なん、報はばそれぞ人心（と立上り）

亂れ戀になして思ひ知らせ申さん

と重荷を見つめ、直して幕にかけ入る。

だ。戀の爲に狂ひ死をして、この恨みを思ひ知らせてあげよう」

◎狂ひ死した後、シテ中入。莊司の墓場。

にならば何をかけ戀の亂れのつかね緒にせん」を引く。束緒は物をたばねる苧で、亂れ心を衣の綻びに喩へ、衣の綻びを繕ふやうに、戀の亂れ心を戀しい人から「あはれ」といはれることによつて慰めるとの意。今はその慰めを得る望みも絶え果てたといふのである。

○報はばそれぞ人心―わが怨靈が女御に取りついて仇を報いるならば、それは女御が自ら招かれた自業自得であるとの意。

○亂れ戀になして―自分が戀の爲に亂れた心をそのまま移して、女御の御心をも亂し奉らうとの意。

【間】

◎扨も〳〵―この狂言詞は諸本にない。

【間】 狂言名乘座に出で、

狂言「扨も〳〵唯今莊司の心中思ひやられ。誠に不便なる事にて候。女御を戀ひ奉る事。賤しき身にて及びなき事とは申しながら。この道に限り昔より高下の隔てなく。或は雲の上人を戀ひわび。その身を果し又遁世など致し。我を失うたる例その數多し。それは聞き傳へたるばかりなるが。今の莊司は女御を戀ひ奉り。重荷を得持たずして。立ちどころに空しくなる事。古より戀ひわびたる人の事をも。今見るやうに存じ涙を浮かめて候。もとより戀の思ひのと申すは。色々樣々に身をやつし。その身の衰ふる事も知らず。人目を恥づる事もなきと申すが。莊司もこの程に明けても暮れても女御の御事のみ思ひ。菊畑のお掃除をも致さず。今日御召にて。重荷を持つならば女御の御姿を今一度見え給はんとあれば。莊司ありがたく思ひ。やがて重荷を持たんとするに。たやすく動かねば。愈〻精力を盡し。尤もこの程の疲れにや。空しくなり申して候。いや獨言を申さすとも。莊司が空しくなりたる由申さばやと存ずる

といひてワキの前に出で辭儀して、

狂言「いかに申し候。山科の莊司重荷を持ちかね色々恨み事を申し。終に空しくなり申して候

ワキ「何と莊司が空しくなりたると申すか

狂言「なかなか空しくなり申して候

といひて狂言は引く。

【五】○言語道斷―いひやうもなく驚いた時に發する言葉。瓔珞經に「言語道斷、心行所滅」

【六】

【五】ツレ「言語道斷近頃不便なる事にて候ぞや。總じて戀と申す事は、高き賤しき隔てぬ事にて候へども、さりながら。かの者の戀の心を止めんとの御方便にて。重荷を作つて上を綾羅錦繡を以て美しく包みて。いかにも輕げに見せて持たせなば。かの者思はんには。かほど輕げなる荷なれども。戀の叶ふまじき故に持たれぬぞと心得。戀の心や止まるべきとの御事にて候處に。賤しき者の悲しさは。これを持ち御庭を廻らば。御姿を見えさせ給はん事を悅び。精力を盡し候へども。もとより重荷なれば持たれぬ事を恨み。歎きてかやうに身を失ひ候事。返す返すも不便にこそ候へ。この由を申し上げうずるにて候

といひて眞中に出でツレに向ひ辭儀して、

【六】ワキ「いかに申し上げ候。山科の莊司重荷を持ち

【五】後段

狂言の從者、山科莊司の死んだのを見て、この事をワキ臣下に報告する。

臣下「何だといふ。莊司が死んだといふのか。これは驚いた。ほんとに可哀想なことをした。一體戀といふものは、上下の隔てのないものではあるが、しかし餘りといへば及びもない戀をしかけたものだから、どうかあの者の戀心を思ひあきらめさせてやらうとの御方便から、重荷を作つて、上を綾羅錦繡で美しく包み、いかにも輕さうに見せて、お持たせになつたならば、あの男はこのやうに輕さうな荷であるのに、重くて上がらないといふのは、この戀の叶はぬしるしだと、かう思つて、戀心が止むであらうとの思召であつたのに、賤しい者の悲しさには、この思召を解くことが出來ず、たゞ一途に、これを持つてお庭を廻つたならば、御姿を拜むことが出來ると悅んで、精根を盡して持ちあげようとしたが、もともと重荷だから持ち上げられないのを恨んで、歎き死に、このやうに死んでしまつたのは、返す〴〵も可哀想なことだ。この事を女御樣に申しあげませう」

【六】
臣下女御の前に出て、

臣下「申し上げます。山科の莊司が重荷を

○何か苦しう候べき―何も見苦しいことはありません

○そと―一寸。

○戀よ戀わが中空になすな戀戀には人の死なぬものかは―當時行はれた俗謠であらう。

○御諚―仰せ言。

○報いは常の世の習ひ―因果應報は世の常である。

【七】

かねて、御庭にて空しくなりて候。かやうの賤しき者の一念は恐ろしく候。何か苦しう候べき。そと御出であつて。かの者の姿を一目御覽ぜられ候へ

ツレ・ワキとも立ちて前に出で下に居て重荷を見、

ツレ「戀よ戀。わが中空になすな戀。戀には人の。死なぬものかは。無慙の者の心やな

ワキ「これは餘りに忝き御諚にて候。「はやはや立たせおはしませ

ツレ「いや立たんとすれば磐石に押されて。更に立つべきやうもなし

地「報いは常の世の習ひ

ワキもとの座に歸る。ツレは立てざる心にてその場に居殘る。

【七】

出端の囃子にて、後ジテ山科莊司の靈、面重荷悪尉・白頭・金襴鉢卷・襟花色・着附無色厚板・法被・半切・腰帶の裝束にて鹿背杖をつきて橋懸一の松に出で、

持ちかねて、お庭で死んでしまひましてございます。このやうな賤しい者の一念は恐ろしいものでございます。別段外聞もございませんから、一寸御出でになつて、あの者の姿を一目御覽遊ばされては如何かと存じます」

女御は重荷の前に出て、

女御「あゝ戀、戀は恐ろしいものだ。かるはずみな戀をしてはいけない、戀の爲には人は死ぬことがあるのだ。あゝ可哀想な者だ」

莊司「これは餘りに勿體ない仰せでございます。何はともあれ、早くお立ち遊ばしますやうに」

女御「いや立たうとすると、大きな石に押されて、どうしても立てないのだ」

臣下「あゝ因果應報は世上の習ひで……」

女御は立たうとして立てない心。

【七】

後ジテ山科莊司の靈の登場。

○吉野川岩切り通し―本曲の末に記す。
○一念無量の鬼―思ふ一念が凝つて、無量の怨恨を含む鬼となること。
○言寄せ妻―思ひをかけて言ひよる女。こゝには重荷を持つて歩けば姿を見せようと約束せられた事をいふ。
○空頼め―あてにならない望み。
○浮寢のみ三世の契りの―「石の上にも三年」といふ諺によつて、三世といつたのであらうが、「浮寢のみ」はどういふ意に用ゐたのか解し難い。
○巖の重荷―逢ひ難きを堅きにいひかけ、なほ上の石をうけて巖を出した。
○恨めしや葛の葉の―本曲の末に記す。
○畝火の山の山守―同じく末に記す。
○重荷といふも―重荷といふ事も戀の思ひから出た語であるとの意。「おも」の音を重ねていふ。
○淺間の煙―思ひのひを火にとりなして、信濃國の噴火山淺間山を出し「あさ」の音を重ねて、あさましとつゞけた。
○衆合地獄―末に記す。

後ジテ「吉野川岩切り通し行く水の。音には立てじ戀ひ死にし。一念無量の鬼となるも。唯よしなや誠なき。言寄せ妻の空頼め（と舞臺に入り）

地「げにもよしなき。心かな（とツレへ向き）

シテ「浮寢のみ。三世の契りの滿ちてこそ。石の上にも坐すといふに。われはよしなや逢ひ難き。巖の重荷持たるるものか。あら。恨めしや。葛の葉の

〔立廻〕

シテ「玉襷畝傍の山の山守も

地「さのみ重荷は。持たればこそ

シテ「重荷といふも。思ひなり

地「淺間の煙。あさましの身や（と眞中に出てしをり）。衆合地獄の（杖を力にして坐し）。重き苦しみ。さて懲り給へや懲り給へ

怨靈「和歌に――
「吉野川岩切り通し行く水の音には立てじ戀ひは死ぬとも」
（胸に秘めてゐるが、口に出しては言ふまい）
とあるやうに、切ない戀を胸に秘めてゐたものか、遂に戀ひ死をしたのだ。かうして、思ふ一念が無量の恨みを持つ鬼となつてしまつたのも、唯あてにならない誠のないお言葉を眞に受けた爲だ。ほんとにわれながら淺はかな心であつた。
夫婦の仲も、三世をかけて添ひ遂げられる見込があつてこそ、石の上に坐るやうな困難にも忍べるのだが、自分はとても逢ふことの出來ない戀だのに、その爲に、巖のやうな重い荷が持たれるものか　ああ恨めしい―

〔立廻〕
（恨めしい樣を演出。）

怨靈「畝火山の山守は力業をするのが役であるけれど、これほどの重荷は持ちはしまい。いやかういふ重荷を持たうとしたのも、戀しい思ひからだ。この切ない思ひは淺間山の煙のやうに胸に燃え上がつてゐるのだ。あゝあさましいことだ。その爲に今衆合地獄で重い責苦に惱んでゐるのだ。あなた樣もお懲り遊ばすがよい。

【八】○立ち別れ稻葉の山風―煙立ちをうけて、古今集在原行平の歌「立ち別れいなばの山の峯に生ふる松とし聞かば今歸り來む」の詞を引いて、山風とつゞけ、吹き亂れ、亂れ戀とつゞけた。○姬小松の葉守の神―これまでぞ姬、姬小松の葉、葉守の神といひつゞけた。葉守の神は樹木を守護する神。莊司は御庭守であつたから自分を葉守の神に擬へ、女御を姬小松に喩へたのである。

【八】とツレを見る。ツレ面を伏す。怨靈の恨み解けたる心にて、ツレ脇座に歸りて床几にかゝり、シテも立ちて、

地「思ひの煙立ち別れ。思ひの煙立ち別れ。稻葉の山風吹き亂れ。戀路の闇に迷ふとも。跡弔はばその恨みは霜か雪か霰か（と眞中にて面を拔ひ）。終には跡も消えぬべしや。これまでぞ姬小松の（在手柱際にてツレへ向き）。葉守の神となりて千代の影を、守らんや千代の影をも守らん

「葉守の神と」と杖をすて、返句に留拍子を踏む。

【八】女御に恨み言を述べた後は、心も和らいだ態で、

怨靈「いや私はこのやうに切ない思ひに胸が燃えて、前後の分別もなく、戀路の闇に迷つてゐますけれど、後世をお弔ひ下されば、この恨みも、霜や雪や霰のやうに、終には跡方もなく消えてしまひませう。それではお暇いたします。そして、葉守の神となつて、あなた樣の千代までのお榮えをお守り致しませう」

といつて退場。

〔考　異〕

古謠本　（貞享三年本）

【一】ワキ「抑もこれは……さてもわが君（貞萬の事を御すき候中にも取分）菊を御寵愛あつて（貞にて御座候故御庭に）毎年數多の（貞ナシ）菊を植ゑ（貞ナシ）育てられ……賤しき者の候いつも（貞に此）菊の……取らせられ（貞候當年は未取す）候間申しつけ……勿體なくも貞き戀となり……ワキ「山科の莊司に此方へ（貞ナシ）來れと……シテ「誰にて渡り候ぞ（貞ナシ）。ワキ「畏つて候（貞ナシ）【二】ツレ「尤にて候さて（貞けに）汝は……シテ「さやうの事……知ろしめされ候ぞ（貞扨此事をは誰か御耳に入て候ぞ）……シテ「いやいやはや……女御（貞君）聞しめし……ありがたき御諚にてはなきか（貞有そ）。シテ「何とこの（貞戀の）事を……ツレ「さればこの荷を御見せ候へ（貞お見たう候）……ワキ「これこそ……美しき荷にてはなきか（貞有そ）【四】地ロ……「思ひや少し慰むと（貞ノ）……【五】シテ「音羽山　貞

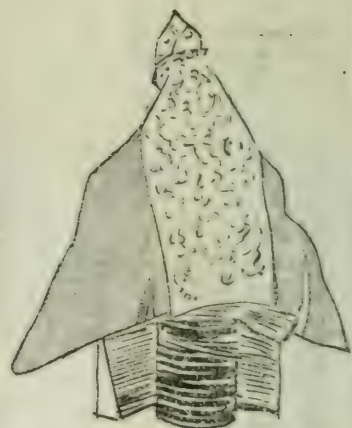
事……總じて(貞此)戀のおもにのことは。彼者の戀の心をとゞめんとの御方便にて候其故はそうして戀と申す(貞いふ)事は高き賤しき隔てぬ(貞によらぬ)事にて候へどもさりながら……御方便にて(貞間)重荷を……いかにも輕げに……かの者思はんには(貞替せ候)かほど(貞まで)輕げなる……(貞此)戀の叶まじき……戀の心や止まるべき(貞らん)との……これを持ち御庭を……重荷なれば(貞ナシ)持たれぬ事を恨み(貞ナシ)歎きて……　【六】ワキ「いかに申し上げ(貞ナシ)候(貞彼)山科の

附記

○吉野川岩切り通し―古今集讀人不知の歌「吉野川岩切り通し行く水の音には立てじ戀ひは死ぬとも」を引いた。上句は序詞で、戀しさに切ない思ひはしてゐるが口には出さないとの意。

○恨めしや葛の葉の―葛の葉は風に吹き返されて裏を見せるものであるから、古來葛の葉の裏見を恨みにいひかけた例が多く、また葛の葉の先は圓く卷いてゐるので、玉卷く葛などといふので、恨めし、葛の葉の玉、玉襷といひつゞけたのである。玉襷は畝傍の枕詞。

○畝傍の山の山守　玉襷が畝傍の枕詞であるのでこの語を出し、山守とつゞけたまでで、故事があるのではない。山守は薪を負うて山を登り下りする、力役を事とする者。

○衆合地獄―八大地獄の第三。殺生・偸盜・邪淫を犯したものの墮ちる地獄。衆多の苦具俱に來て身を逼め、合黨して相害するので衆合といふ。

西行櫻　觀（寳春剛喜）

解説

【能柄】三・四番目　劇的夢幻能

【人物】ワキ　西行法師、狂言　能力、ワキツレ　花見の人々（三・四人）、シテ　老櫻の精（老翁）

【所】京都西山　西行の庵室

【時】鎌倉初期　春（三月）

【作者】能本作者註文、二百十番謠目錄ともに金春禪竹の作として居り禪竹の歌舞髓腦記にも「閑花風、面影褄物、はかたくやさしき體」としてこの曲名を擧げてゐる。粟田口勸進猿樂記に永正二年四月十六日演能のこと、言經卿記に文祿四年三月廿六日註釋のことが見えてゐる。

【梗概】京都西山の西行の庵室では、老木の櫻が今花盛りであるが、西行は自分一人靜かに眺めたい爲に、花見禁制としてゐたところ、京から花見の人人が多勢來たので、西行は「花見ん（京及び下懸には）と群れつつ人の來るのみぞ、あたら櫻のとがにはありける」と詠んだ。

しかし、さすがにそれらの人々をも斷りかねて、一所にうち解けて木蔭に假寢してゐると、この櫻の精が現れ出て、人の來るのは非情の櫻の罪ではない」と辨解し、花の名所などを擧げてうち興じ、舞を舞つて、春の夜を樂しんだが、夜が明ければ、西行の夢は覺めて、櫻の精は消え失せる。

【出典】 これは、玉葉集及び山家集に、

しづかならんと思ひ侍る頃、花見の人々まうで來りければ

といふ詞書で收めてゐる、前掲「花見にと」といふ西行の歌を骨子として創案したものである。謡曲拾葉抄には、

雲玉集に云ふ「西行西山に山居の時、花に人集まり來にければ、『花見にとむれつゝ人の來るのみぞ、あたら櫻のとがにはありける』かく詠みし暮れつかた、花のもとに白髪の老人あらはれて、『罪とがはいかゞあらしの山櫻、なかなる人のわが禪山木を』と返して失せにけり。花の精なるべし」云々、此説にもとづきて、此謡を作るなるべし。

といつてゐるが、もし本曲が雲玉集に據つたものならば、この花の精の返歌を取り入れてゐるのが自然であるのに、その形跡がなく、殊に雲玉集は本曲製作以後の永正十一年四月に出來たものであるから、本曲の原據と見ることは出來ない。

【概評】 和歌を主題とした精魂物であるが、その精魂が櫻であるので、曲を花やかに引立たせる爲にワキの西行以外にワキヅレ花見の人を登場せしめる一面、謡曲に大切な閑寂な情趣を現す爲に、この櫻の精を老翁に扮せしめたのは、作者苦心の存する所であらう。そして、その華麗な詞章とシテの靜寂な演出とは、よく作者所期の效果を收めしめてゐるのであるが、しかし これを一篇の戯曲として見れば、シテの登場前にワキと殆ど同格の地位に進んだワキヅレが忽然として無意義のものとなつてゐること、シテの出現が和歌の詞咎めに因つてゐるに拘らず、その解決が曖昧に終つてゐること、シテが喜びを述べる理由が西行の詠歌にあるのか賓客にあるのか不鮮明であることなど、整備を缺いた憾みがあるのである。

【序】

【序】 後見、上に櫻花を挿し引廻しを掛けたる山の作物を囃子座前に出す。

ワキ西行法師、角帽子・着附無地熨斗目・黒水衣・白大口・腰帶・扇・數珠の裝束にて、狂言師力(能力頭巾・着附縞熨斗目・水衣・括袴・脚半・扇の装束)を随へて舞臺に入り、ワキは脇座にて床几にかゝり、

ワキ「いかに誰かある

狂言、眞中にてワキに辭儀して、

狂言「御前に候

ワキ「存ずる子細のある間。當年は庵室に於て花見禁制と相觸れ候へ

狂言「心得申して候

といひて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。西行の庵室に仕へ申す能力にて候。さても庵室の花春毎に見事にて候間。都より貴賤群集仕り候が。當年は何と思し召し候やらん花見禁制と仰せ出だされて候間。皆々その分心得候へ。〈

といひて笛座の前に坐す。

【二】次第の囃子にて、ワキヅレ花見衆三・四人、着附無地熨斗目・素袍上下・腰帯・扇・小刀の裝束にて舞臺に入り向合ひて、

ワキヅレ（一同）次第「頃待ち得たる櫻狩頃待ち得たる櫻狩山路の春に急がん

地取に重ヅレは正面に向き、

ワキヅレ「かやうに候者は。下京邊に住居仕る者にて候。さてもわれ春になり候へば。ここかしこの花を眺め。さながら山野に日を送り候。昨日は東山地主の櫻を一見仕りて候。今日は又西山

○能力―寺の雜役をする者

【一】○櫻狩―櫻の花見に山又は野へ行くこと。
○下京―京都の三條通より南一帶をいふ。
○東山地主の櫻―東山清水寺の境内にある地主權現の櫻。「田村」參照。
○西山西行の庵室―西山は京都の西方一帶の山地をいふ。西行の庵室は、その家集山家集に「小倉の麓に住みけるに鹿の鳴きけるを聞きて」などあるから、小倉山の麓にあつたのであらう。俗說では、大原野の勝持寺がその跡であるといひ、この寺を西行寺又は花の寺といつてゐる。

【二】舞臺は京都西山の西行の庵室。まづワキ西行法師が狂言の寺男を從へて登場。庵室へ花見に來るものを禁じさせる。そこで、舞臺は一度下京邊に變り、ワキヅレ花見の人達が數人登場し、

花見衆「待ちに待つてゐた春になつたから、急いで花見に出掛けよう。

と次第を謡つてわが心持を述べ、

花見「私どもは下京邊に住んでゐる者です。いつも春になると、あちらこちらの花見に出掛け、全く野山で日を暮らしてしまふのです。昨日は東山清水寺の地主の櫻を見物しましたが、今日は又、西山の西行法師の庵室の花が綺麗だと聞き

〔西行〕―もと鳥羽院北面の武士で、佐藤左衛門尉憲清といつたが、二十三歳の時遁世して圓位と號し、後に西行と改めた。諸國を遊歴し自然を友とした有名な歌人。建久九年二月七十三で寂す。
〔百千鳥囀る春は物毎に〕―古今集讀人知らずの歌を引いた。この下句「改まれどもわれぞふり行く」
○彌生―三月。
○やよ留まりて―彌生の香を重ねて「やよ」といつた。やよは花見の友を呼びかけた感動詞。
○知るも知らぬも―新古今集藤原家隆の歌「この程は知るも知らぬも玉鉾の行きかふ袖は花の香ぞする」を引いた。
◎いかに案内申し候―以下ワキヅレ・狂言掛合の詞、刊行會本にはない。檜本には狂言詞をも記す。(光悦本にもこれを載す)。

西行の庵室の花、盛りなる由承り及び候程に、花見の人々を伴ひ、唯今西山西行の庵室へと急ぎ候

といひて向合ひ、

ワキヅレ(一同)道行「百千鳥。囀る春は物毎に。囀る春は物毎に。あらたまり行く日數經て。頃も彌生の、空なれややよ留まりて花の友。知るも知らぬも諸共に。誰も花なる、心かな誰も花なる心かな

重ヅレは「知るも知らぬも」と正面に向きて先へ出で、またもとへ歸りて西山に着きたる心。重ヅレ正面に向き、

ワキヅレ「急ぎ候程に。これははや西行の庵室に着きて候。暫く皆々御待ち候へ。某案内を申さうずるにて候

二のツレ「然るべう候

一同橋懸へ行き、重ヅレは一の松にて舞臺に向き、

ワキヅレ「いかに案内申し候

ましたので、花見友達を誘ひ合つて、これから西山の西行の庵室へ急いで行くのです」

と見物人に自己紹介をし、

花見「色んな小鳥の囀る春になると、何かにつけて氣分の改まるもので、その春も次第に日が經つて、今は丁度その春の盛りの三月だ。「やあ、そこな花見の人達もここに立ち留まつて、この花を見て行くがよい」などと、知る人も知らぬ人も同じ仲間に入つて、浮かれ氣分になるものだ」

といつてゐる間に、西山に來た態で、舞臺はもとの西行の庵室となる。

花見「道を急いだので、思ひの外早く西行の庵に着いた。(同行の者に向ひ)皆の衆はここに待つてござれ。私が取次を頼んで來ませう」

といつて、庵室へ行き、

花見「お頼みします」

狂言（仕手柱先へ出で）「案内とは誰にて渡り候ぞ

ワキヅレ「さん候これは都方の者にて候が。この御庵室の花。盛りなる由承り及び。遙々これまで參りて候。そと御見せ候へ

狂言「その事にて候。當年は何と思し召し候やらん花見禁制と仰せ出されて候へども。都より遙々御出でにて候へば。御機嫌を以て申し上げうずるにて候。暫くこれに御待ち候へ

ワキヅレ「心得申し候

ワキヅレ一同くつろぎ、狂言はもとの座につく。

【三】

ワキ　サシ「それ春の花は上求本來の梢にあらはれ。秋の月下化冥闇の水に宿る。誰か知る行く水に。三伏の夏もなく。澗底の松の風。一聲の秋を催すこと。草木國土。おのづから。見佛聞法の。結縁たり。さりながら四の時にも勝れたるは花實の折なるべし。「あら面白や候

狂言（立ちて）「いや一段の御機嫌にて候。さらば急いで申し上

○「案内とは誰にて」―檜本には「案内とは」の四字はない。

◎その事にて―以下、檜本には「易き間の御事にて候へども。禁制にて候さりながら。御機嫌を見てそと申して見うずるにて候。暫く御待ち候へ」とある。

【三】

○上求本來の―上に向つて本來の菩提成佛を求めること。花の梢に高く咲く樣を寓意に解したのである。「敎盛」に「春の花の樹頭に上るは上求菩提の機を勸め、秋の月の水底に沈むは下化衆生の相を現ず」とある。

○下化冥闇の―人間界に下つて、心の冥闇な衆生を敎化すること。月が地上を照らす樣をいつたのである。

○水に三伏の夏もなく―和漢朗詠集源英明の詩句「池冷水無三伏夏、松高風有一聲秋」を引いた。

○澗底―谷の底。

○草木國土―「草木國土悉皆成佛」の意を以て綴つた。草木國土は春の花、秋の月、行く水、松の風、すべてを含めていふ。

○見佛聞法―佛を拜み說法を聞くこと。

○四の時―春夏秋冬の四季

○花實の折―花の咲く春、實の結ぶ秋。

寺男「どなたです」

花見「私どもは都の者ですが、この御庵室の花が眞盛りだと伺つて、遙々遠方の所をやつて來たのです。一寸お見せ下さい」

寺男「その事ですが、今年は何とお考へになつたものか、花見は禁制だと仰しやつたのですが、都から遙々お出でになつたのですから、御機嫌のよい折を見計つて申し上げませう、暫くお待ちなさい」

花見「承知しました」（と待つ）

【三】

西行「春の花は菩提成佛を求める敎を示すがやうに、高い梢に咲くし、秋の月は心の暗い衆生を敎化するがやうに、低い水に影を宿すのだ。さうだ、水といへば、夏の眞盛りにも冬と變りなく冷しいものであり、谷底の松風はまたいつも秋らしい氣分を送つてくるものだが、これら、花や水や風や、非情の草木も國土も、一切のものが、佛を拜み說法を聞く緣故となるのだ。とはいふものの、四季の中で勝れてゐるのは、花の咲く春と實の結ぶ秋とで、殊にこの頃の花盛りは實に面白いものだ」

◎いや一段の御機嫌―以下檜本には「日本一の御機嫌にて候やがて申さう。いかに申し候。都よりこの御庭の花を見たき由申して。これまで皆々御出でにて候」とある。

◎さん候庵室の―以下、檜本にはたゞ「さん候」とだけある。

〇われも一人―西行の山家集に小倉閑居の歌として「牡鹿鳴く小倉の山の裾ちかみ唯ひとりすむわが心かな」とあるに據つたのであらう。

◎いかに最前の人の―以下檜本には「いかに方々へ申し候。よき御機嫌に申して候へば。見せ申せとの御事にて候程に。急いでこなたへ御出で候へ」とある。

◎まづ柴垣の戸を―この句諸本にはない。

けばやと存ずる。（ワキの前に出て）いかに申し上げ候。都より若き人々庵室の花見たき由申して參られて候

ワキ「何と都よりと申して、この庵室の花を眺めん爲に。これまで皆々來り給ふと申すか

狂言「さん候庵室の花見禁制の由申して候へども。遙々參り候間見せてくれよとの事にて候。そと御見せあれかしと存じ候

ワキ「凡そ洛陽の花盛り。いづくもといひながら、西行が庵室の花。花も一木われも一人と見るものを。花故ありかを知られんこといかがなれども。これまで遙々來りたる志を。見せではいかで歸すべき。あの柴垣の戸を開き內へ入れ候へ

狂言「畏つて候。（ワキヅレに向ひ）いかに最前の人の渡り候か

ワキヅレ「何事にて候ぞ（ワキヅレ一同立ち）

狂言「御機嫌を以て申し上げ候へば。そと御見せあらうずるとの御事にて候間。かうかう御通り候へ

ワキヅレ「心得申して候（と舞臺へ向く）

狂言「まづ柴垣の戸を明けよう。さらさら

（さ［illegible］に花を眺め［illegible］）

（狂言寺男、この様を見て）

寺男「これは大變なよい御機嫌だや、早速申しあげよう。（さて、西行に向ひ）都の人達がこのお庭の花を見たいといつて參りました」

西行「何ぢや。都からきたといつて、この庵室の花を見に、皆の人がこゝへ參られたのか」

寺男「さやうでございます」

西行「この頃京の花盛りには、何處も此處も雜沓のことであらうが、このわしの庵室の花は、花も一本、人も一人で、心靜かに樂しまうと思つてゐたのに、花の爲にわしの在所の知られるのは面白くもないが、折角ここまで遙々來られたものを、見せずに歸すこともなるまい。あの柴垣の戸を開けて內へお入れ申せ」

（寺男［illegible］、花見衆を呼び寄せ、柴戸を開け、內へ入れる。）

○櫻花咲きにけらしな足引の―古今集紀貫之の歌を引いた。この下句「山のかひより見ゆる白雲」山のかひは山と山との間をいふ。
○飛花落葉を觀じ―世間の無常をさとる意。正徹の「寄花述懐和歌之序」に「それ飛花落葉の春秋は盛者必衰のこの世を觀じ」
○心の花―風雅な心。
○昔の春に歸る―續千載集源兼氏の歌に「隔て行く昔の春の面影にまた立ち歸る花の白雲」
○捨人―世捨人。出家。
○浮世の嵯峨―浮世のさが(性質)へ「嵯峨」(習はし)を地名にいひかけたのである。
○捨ててだに―和歌の體であるが、見當らない。

と扉にて戸を開く形をして切戸より入る。

ワキヅレ一同目附柱の方へ進みながら、

ワキヅレ(一同)「櫻花咲きにけらしな足引の。山のかひより見えしまま。この木のもとに立ち寄れば

と脇正面に竝び下に居る。

ワキ「われは又心ことなる花の本に。飛花落葉を觀じつつひとり心を澄ます處に

ワキヅレ「貴賤群集の色々に。心の花も盛んにて

ワキ「昔の春に歸る有樣

ワキヅレ「隱れ所の山といへども

ワキ「さながら花の

ワキヅレ「都なれば

地上歌「捨人も。花には何と隱れ家の。花には何と隱れ家の。所は嵯峨の奥なれども。春に訪はれて山までも浮世の嵯峨になるものを。げにや捨ててだに。この世の外はなきものをいづくか終の、

花見「歌の詞に、――
『櫻花咲きにけらしな足引の、山のかひより見ゆる白雲』
(山の間から白雲のやうなものの見えるのは、櫻の花が咲いたせいらしい)
とあるやうに、この木もどうやら花盛りのやうに見えましたので、立ち寄つたのです」

と西行の傍へ來る。

西行「わしはまたそなた方とは別な心持で、この美しい花を眺めながら、世間の無常を觀じ、獨りで心を澄ましてゐたのだが……」

花見「世間の者は、貴い人も賤しい者も皆それぞれ花見に浮かれ心になつてゐるのです」

西行「いかにも世間すべてが春氣分に若返つて、世離れた山家までが、やはり花の都の中なので、世捨人も花時にはどこにも隱れ家がないのだ。この所は都から離れた嵯峨の奥だが、春が訪れて來ると、ここまでが世間並な浮世のさがになつてしまふのだ。ほんにさうだ。世を捨てたといつても、やはりこの世間の外に住む所はないのだから、結局世捨人の住家といふやうなものはないのだ」

【三】
○面々—人々。そなた方。
○花見んと群れつつ人の來るのみぞあたら櫻のとがにはありける—西行の歌。但し玉葉集・山家集には初句「花見にと」とある。下懸諸本にも「に」とある。

【四】
○家路忘れて—古今集讀人知らずの歌「この里に旅寢しぬべし櫻花散りのまがひに家路忘れて」を引いた。
○埋木の人知れぬ身と沈めども心の花は殘りけるぞや—謠曲拾葉抄に「西行の歌といへり、何れの集にありや未だ考へず」とある。

住家なるいづくか終の住家なる

【三】
ワキ「いかに面々。これまで遙々來り給ふ志。返す返すも優しうこそ候へさりながら。捨てて住む世の友とては。花ひとりなる木のもとに。身には待たれぬ花の友。少し心の外なれば。『花見んと群れつつ人の來るのみぞ。あたら櫻の。とがにはありける

地『あたら櫻の蔭暮れて。月になる夜の木のもとに(とワキ立ちて少し出で)。家路忘れて諸共に今宵は花の下臥して夜とともに眺め明かさん

「今宵は花の下臥」とワキは脇座に戻りて坐し、ワキヅレ一同も地謠座前に行きて坐す。後見、作物の引廻を下す。

【四】
シテ櫻の精(老翁)、面皺尉・白垂・風折烏帽子・金緞鉢卷・襟淺黄・着附小格子・單狩衣・萠黄大口・腰帶・扇の裝束にて作物の内に居り、

シテ『埋木の人知れぬ身と沈めども。心の花は殘りけるぞや、花見んと群れつつ人の來るのみぞ。

と獨言のやうにいひ、花見衆に向つて、

【三】
西行「皆の衆、遙々の所を花を尋ねて來られた御心は、いかにもお優しい事に思ふが、實をいふと、わしは世間を離れてしまつて、友といへばたゞこの花だけで、花見の友達は望ましうないので、皆の衆が來られたのは、少々心持よくないのだ。いはゞ—

「花見んと群れつつ人の來るのみぞ、あたら櫻のとがにはありける」
(櫻の花は美しくて結構だが、その爲に花見の人の多勢來るのが、花の缺點だ)

と、かう思ひますのぢや。

おゝ、はや日が暮れて、月の光が夜櫻に照り映えて美しいことだ。皆の衆も家に歸ることを忘れて、わしと一所に、今宵は花の木蔭に假寢して、夜中花を眺め明かしませう」

といつて、一同夜を更かして假寢する態。

【四】
シテ櫻の精が老人の姿で現れ出て、

櫻精「世間を離れた、人に知られない者とはなつたが、風雅の心だけは捨てられない。——

『花見んと群れつつ人の來るのみぞ、あ

あたら櫻の。とがにはありける

ワキ、シテに向ひ、

ワキ「不思議やな朽ちたる花の空木より、白髪の老人現れて。」西行が歌を詠ずる有樣、さも不思議なる仁體なり

シテ「これは夢中の翁なるが。今の詠歌の心を猶も。尋ねん爲に來りたり

ワキ「そもや夢中の翁とは。夢に來れる人なるべし。」「それにつきても唯今の。詠歌の心を尋ねんとは。歌に不審のあるやらん

シテ「いや上人の御歌に。何か不審のあるべきなれども。「群れつつ人の來るのみぞ。あたら櫻の。とがにはありける。」「さて櫻のとがは何やらん

ワキ「いやこれは唯浮世を厭ふ山住みなるに、貴賤群集の厭はしき。心を少し詠ずるなり

○空木―中の朽ちて洞のやうになつた老木。

○仁體―人柄。

たら櫻のとがにはありける」――」

と西行の歌を口ずさむ。

西行「これは不思議だ。朽ちた櫻の木の空洞から、白髪の老人が現れて、わしの歌を詠んでゐるのは、實に不思議な人だ」

櫻精「私は夢中の老人だが、今のお歌の心を少しお尋ねしたいと思つて參つたのです」

西行「夢中の翁といふ所を見ると、夢に現れて來た人であらう。それにしても、今の歌の心を尋ねたいとは、歌に何か不審の點があるのであらうか」

櫻精「いや〳〵上人のお歌に何も不審な點のあらう筈はないが、「群れつつ人の來るのみぞ、あたら櫻のとがにはありける」とお詠みになつた、その櫻の罪とは一體どういふわけです」

西行「いやこれはたゞ、世間からうるさくて、山家住ひをしてゐるのに、世間の人々が群集するので、それが煩はしいといふ心持を少し詠んだだけです」

○花もの言はぬ―和漢朗詠集菅原文時の句「誰謂水無レ心、濃艶臨兮波變レ色、誰謂花不レ語、輕漾激兮影動レ脣」を引いた。
○木綿花―ゆふといふ木皮で造つた花。「いふ」といひかけ、花の脣と續けただけで、木綿花の意はない。
○申し開く―辯解する。開くを花の開くと兼ねて用ゐた。

シテ「恐れながらこの御意こそ。少し不審に候へとよ。浮世と見るも山と見るも。唯その人の心にあり。非情無心の草木の。花に浮世のとがはあらじ
ワキ「げにげにこれは理なり。さてさてかやうに理をなす。御身はいかさま花木の精か
シテ「眞は花の精なるが。この身もともに老木の櫻の
ワキ『花もの言はぬ草木なれども
シテ『とがなき謂れを木綿花の
ワキ『影脣を
シテ『動かすなり（と作物より出で）
地「恥かしや老木の。花も少く枝朽ちてあたら櫻の。とがのなき由を申し開く花の。精にて候なり。凡そ心なき草木も。花實の折は忘れめや。草

櫻精「恐れながら、さういふお心持が少し不審に思はれるのです。一體この世の中を浮世と見るのも世離れた山と見るのも、唯その人の心次第のものでせう。非情無心の草木の花に何の罪咎もございますまい」
西行「いかにもこれは御尤もぢや。して、そのやうな理窟をいはれる所を見ると、成程そなたは花木の精ですな」
櫻精「實は花の精ですが、その花と申しても、この姿のやうに年老いた老櫻です」
西行「一體草木の花は物などいはないものだが……」
櫻精　とがのないといふ事を申したさに、脣を動かすのです。御覧の通り、お恥かしい、花も少い枝も朽ちた老木の櫻ではありますが、櫻に咎はないといふ事を辯解する爲に出て來た精魂です。大體草木は心のないものだとは申せ、花の咲き實の結ぶ季節は忘れは致しません。それに『草木國土悉皆成佛』と申す經文もございますので、どうか讀經して救いて成佛致したいのです」

【五】
○値遇―出逢ふ事。
○花檻前に笑んで―百聯抄解の詩句「花笑二檻前一聲未レ聽、鳥啼二林下一涙難レ看」を引いた。
○朝に落花を踏んで―白氏文集三十三「朝踏二落花一相伴出、暮隨二飛鳥一一時歸」を引いた。
○九重に咲けども―九重の都に咲くのであるから、九重の櫻といふべきやうであるが、やはり八重櫻であると戯れていつたのである。
○春を重ぬらん―重ぬは九重八重の縁。
○近衞殿の絲櫻―山州名跡志に「御領辻子在二上立賣南小河東一、此所北方に近衞殿の有二別業一、古絲櫻ありて貴賤賞レ之」
○見渡せば柳櫻をこきまぜて―古今集素性法師の歌を引いた。この下句「都ぞ春の錦なりける」
○千本の櫻―千本は古の朱雀通で今の千本通。千本の地名から吉野の千本櫻に擬へていつたのである。
○雲路や雪に殘るらん―花盛りの頃は雲の中の道を行くやうであり、花の散つた後はまた雪の降りしいたやうであるとの意。
○毘沙門堂―東山永觀堂附

木國土皆成佛の御法なるべし

「凡そ心なき」とシテ仕手柱際に行き下に居てワキへ合掌。ワキも二三足出て下に居り「草木國土皆」とシテへ合掌す。

【五】

シテ「ありがたや上人の御値遇に引かれて。惠みの露あまねく。『花檻前に笑んで聲未だ聞かず。鳥林下に鳴いて涙盡きがたし

地クリ『それ朝に落花を踏んで相。伴つて出づ。夕には飛鳥に隨つて一時に歸る

シテサシ『九重に咲けども花の八重櫻

とシテ大小前に行く。ワキは脇座に歸りて下に居る。

地『幾代の春を重ぬらん

シテ『然るに花の名高きは

地『まづ初花を急ぐなる。近衞殿の絲櫻

シテ次の謠に合せて舞ふ。（舞クセ）

地クセ『見渡せば。柳櫻をこきまぜて。都は春の錦。燦爛たり。千本の櫻を植ゑ置きその色を。所の

【五】
西行が讀經合掌すると、

櫻精「お上人にお出逢ひして、お惠みを受け、誠にありがたうございます。花の事を色々と申せば、詩句には『花は欄干の前に咲いて笑つてゐるが、その笑ひ聲は聞えない。鳥は森の中で啼いてゐるが、その泣く涙は見えない』とか『朝は散つた花を踏みながら友と連れ立つて出掛け、夕暮には鳥の塒に歸るのと一所に家路に着き、一日中野山に遊び暮らす』などと申します。九重の都に咲く花を八重櫻と申すのは、をかしいやうですが、千代を重ねて都の春を飾つて居ります。それから花の名所を申せば、まづ最初に咲くのが近衞殿の絲櫻で、それからどこも花が咲き揃つて、『見渡せば柳櫻をこきまぜて、都ぞ春の錦なりける』といふ、誠に美しい景色になります。吉野の千本櫻を移し植ゑて、それを地名とした千本の花盛りの頃は、雲の中の路を行くやうで、花の散つた後はまた、雪の降りしいたや

近にあつたといふが、今はない。櫻の名所であつたことは、明月記・後愚昧記等に見えてゐる。
○四王天―須彌山の山腹にあるといふ四天で、東を持國天、南を增長天、西を廣目天、北を多聞天といふ。多聞天は毘沙門天王の在る所なので、前句を受けて、天上の榮華といふ意で四王天と續けたのである。
○黑谷―京都東山、法然上人が淨土宗を弘めた所。
○下河原―永觀堂の西。
○遍昭―古今集序の六歌仙の一人。俗名を良岑宗貞といひ、仁明天皇の崩御を悲しんで出家した人。
○華頂山―東山、南禪寺の西南にある。但し遍昭の住んだのは、淸閑寺の東にある花山で、華頂山ではない。
○鷲の御山―釋迦の說法した天竺の靈鷲山。比叡山をこれに擬へたのである。
○鶴の林―涅槃經序品に「一爾時(釋迦寂滅の時)拘尸那城娑羅樹林變白猶如白鶴」とある故事に據り、花を見ても無常の觀を起すといつたのである。東山の雙林寺を鶴の林に擬へてゐる。
○淸水寺　東山にある。(「田村」參照。)

名に見する。千本の花盛り。雲路や雪に殘るらん。毘沙門堂の花盛り。四王天の榮花もこれにはいかでまさるべき。上なる黑谷、下河原。昔遍昭僧正の

シテ「浮世を厭ひし華頂山

地「鷲の御山の花の色。枯れにし。鶴の林まで思ひ知られてあはれなり。淸水寺の地主の花松吹く風の音羽山。ここはまた嵐山。戸無瀨に落つる。瀧つ波までも。花は大井河。井堰に、雪やかかるらん

とクセを舞ひ上げて常座に立ち、

【六】

シテ「すはや數添ふ時の鼓

地「後夜の鐘の音。響ぞ添ふ

シテ「あら名殘惜しの夜遊やな。惜しむべし惜しむべし。得難きは時。逢ひ難きは友なるべし。「春

うです。毘沙門堂の花盛りの美しさは、天上界の榮華もこれ程ではあるまいと思はれるばかり。その外、黑谷の櫻、下河原の櫻、または昔僧正遍昭が出家して住んだ華頂山の櫻など、とりどりに面白く、比叡山の花を見ては釋迦如來說法の靈鷲山を忍び、雙林寺の花を見ては鶴林に釋迦如來寂滅の樣が忍ばれて、無常の觀を起すことです。この外なほ櫻の名所には、淸水寺の地主の櫻、その花を松風の吹き散らす音羽山の景色、或は嵐山の櫻、ここはまた花が多くて、戸無瀨から流れ落ちる大井河に花が散つて、井堰では雪がかかつたやうです」

と花の名所を擧げて舞を舞ふうちに、時は次第に過ぎて行つた態で、

【六】

櫻精「おや、いくつも時の鼓が鳴つて、後夜の鐘も響いてゐる。もはやこの面白い夜遊も終りかと思へば、實に名殘惜しい。ほんとに名殘の惜しいことです。時はまたと得難く、友にもまたと逢ひ難いものだ。「花には淸い香があり、月には淡い影

○音羽山—清水寺のある山 續後拾遺集藤原實兼の歌に「夕されば松吹く風の音羽山あたりも涼し山の下道」
○戸無瀬—大井河の上流。
○大井河—嵐山の下に流れる。花は多しといひかけた。

【六】
○後夜—夜半から明方まで
○春宵一刻値千金—蘇東坡の詩句「春宵一刻直千金、花有二清香一月有レ影」を引く
○鐘をも待たぬ別れ—夜明の鐘の聲をも待たないで早く別れること。新續古今集藤原爲相の歌に「明くるまの鐘をも待たぬつらさかな夜深き鳥の聲に別れて」
○小倉の山陰—西行の庵室のあつた所。外はまだ小暗しといひかけたのである。
○花を踏んでは—白氏文集十三「背レ燭共憐深夜月、踏レ花同惜少年春」を引いた。
○翁さびて—老人らしいといふ意であるが、ここでは人影の消えて寂しくなつた様にいつたのである。

宵一刻値千金。花に清香月に影。春の夜の

〔序舞〕

引續き次の謠に合せて舞ふ。

シテワカ『花の影より。明けそめて

地『鐘をも待たぬ別れこそあれ。別れこそあれ別れこそあれ

シテ『待て暫し待て暫し夜はまだ深きぞ（ワキに向ひ扇にて招き）

地『白むは花の影なりけり（と作物を見て）よそはまだ小倉の山陰に殘る夜櫻の。花の枕の（と袖を卷きて安坐し）

シテ『夢は覺めにけり（と立ち）

地『夢は覺めにけり嵐も雪も散りしくや。花を踏んでは同じく惜しむ少年の春の夜は明けにけりや翁さびて跡もなし翁さびて跡もなし

と常座にて留拍子を踏む。

があり、春宵の一刻は實に千金の價がある」ほんとに大切な時です」

と興に乘じて

〔序舞〕

と舞ひ、

櫻精「この面白い春の夜が、花から明け初めて、早くもお別れしなければならないとは、實に惜しいことだ。……いや待てよ、まだ夜は深いので、白く見えるのは花の影であつた。外はまだ薄暗いのだ。暫くの時をも惜しまう」

といつてゐるうちに、西行の夢は覺めてしまつた。そしてあたりは雪が降つたやうに花が散つて、樂しかつた春の夜は明け、老人らしい影は寂しく消えて跡かたもない。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】ワキヅレ次第「頃待ち得たる櫻狩……春に急がん（下懸花見月／＼。都の春ぞのどけき）。ワキヅレ「かやうに候者は下（下懸こはれ上）京邊に…… 【三】シテ「埋木の人知れぬ身と沈めども（下懸の行方にも）心の……花見ん（下懸に）と……ワキ「不思議やな（寶下懸花の夕影猶添ひてまどろむ隙もなかりつるに）朽ちたる……

古諸本（光悦本）

【一】ワキヅレ「かやうに候者は……さながら山野に日を送り（光愛かしこの花を見廻り）候昨日は…… ワキヅレ「心得申候（光委細承候。さらは是に皆々まち申さうするにて候） 【二】ワキ「凡そ洛陽の……われも一人と見るものを（光いや／＼是は西行か。浮世をいとふ山住なるに）花故ありかをしられん事……見せではいかが（光いかてかむなしく）歸すべき…… 【三】ワキ「いかに面々　捨てゝ住む世の……待たれぬ花の友（光西行か庵室のはな。花も一木われも獨とみるものを。花ゆへ所をあらはす事少し心の外なれば

草子洗小町

觀（寶 春 剛 喜）

解説

【能柄】 三番目　二段劇能

【人物】 **前ワキ** 大伴黒主、**狂言** 同從者、**前シテ** 小野小町、**子方** 天皇、**後シテ** 小野小町、**後ツレ** 壬生忠岑、**後ツレ** 凡河内躬恒、**後ツレ** 官女（二人）、**後ツレ** 紀貫之、**後ワキ** 大伴黒主

【所】 **第一段** 小野小町私宅
第二段 御所　清涼殿

【時】 平安朝初期　四月中旬

【異稱】 略して〔草子洗〕ともいひ、寶生・金剛では〔草子洗〕を本題としてゐる。

【作者】 能本作者註文には世阿彌の作とし、二百十番謡目錄には觀阿彌の作としてゐる。世阿彌十六部集にも屢〻小町の名が見えてゐるが本曲を指したと思はれるものはない。

【梗概】 清涼殿の御歌合に大伴黒主の相手には小野小町と定められたの

て、黒主は到底詠歌では敵し難いと自覺し、小町を陥れて勝を占めようと計り、前日小町の詠歌を立聞きして、これを萬葉集に書き入れ、御歌合の御席で、小町の詠歌は古歌であると讒奏した。小町は殘念に思ひ、紀貫之を經て勅許を仰ぎ、黒主が證據として持ち出した草子を洗つて見ると、入筆であるから黒主の所謂古歌は消えてしまつた。黒主は深く愧ぢて自害しようとしたが、小町がこれを留め、且ありがたい勅諚を蒙つたので、もとの座に直つた。そして小町は人々に勸められて舞を舞ひ、御代を祝ふ。

【出典】古今集の序に擧げられた六歌仙の小野小町及び大伴黒主と、古今集撰者の人々とを御歌合に同列せしめて、黒主の卑劣と小町の寛仁とを描いたものであるが、既にこれらの人々を一堂に會せしめることが時代錯誤であり、シテ小町・ワキ黒主の性格についても、本曲に描いたやうな史傳は見當らない。但し歌合に卑劣な競爭の行はれたことは、諸書に散見し、續古事談第二にも、

土御門右府歌合せられけるに、稹仲つゆつゝまると詠みたりけるを、敵の方難じければ、稹仲萬葉集の歌と云ひて、當座によろしき歌を詠みて證歌に出したりけり。後に彼右府感じ給ひけり。この事を江帥いひけるは、心ばせはあれどもそら事は便なき事なりとぞ。

とある。このやうな歌合の逸話に暗示を得て、謠曲作者の創作したものであらう。

【概評】謠曲には女性を輕侮したものが多い。殊にその小町物は、いづれも彼女の老後零落の有樣か邪淫業の苦患を描いたものばかりであるのに、この曲だけは小町の寛仁を描いて、女性の爲に萬丈の氣焔を擧げてゐるのは、誠に珍しいことである。たゞ善玉の小町に對して、黒主の名が腹黒を聯想させるの故を以て、彼を惡玉としてゐることは、黒主にとつて氣の毒のやうでもあり、また彼を神として取扱つた「志賀」に比べて、餘りに隔りの甚しいことを感ぜしめるのである。さもあれ、本曲の中心思想として「この身皆以てその名ひとりに殘るならば、何かは和歌の友ならん」と說いてゐるのは、作者の風格さへ偲ばれてゆかしく思はれる。

脚色も、第二段の、盛大な御歌合の敍述、小町の歌の詠吟、黒主の抗議、黒主と小町の應酬、證歌の提出、小町の悲觀など、寸隙のない緊張さを示し、小町の歎願勅許によつて、局面は展開して「物洗ひ盡し」に小町の自信を描き、黒主の自責によつて局面は急轉直下しようとして、小町の寛仁を說き、これより一堂和氣靄々　小町の舞、歌道の讚歎を以て曲を結んでゐるのは、誠に勝れた手法だと感歎させられる。たゞシテ・ワキを舞臺に出入せしめるだけで、何等劇的葛藤を起さない第一段は、第二段に比べて甚しく見劣りがする。寧ろ狂言のシヤベリで事件を豫想せしめるか、ワキ名乘だけに留めて、シテを出さない方がよくはなかつたかと思ふ。なほ小町物の現行曲には、この外に「鸚鵡小町」「通小町」「關寺小町」「卒都婆小町」がある。

【一】名乘笛にて、ワキ大伴黒主、風折烏帽子・着附厚板・長絹・白大口・腰帶・扇の裝束、狂言從者、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて出で、ワキは名乘座に立ち、（狂言其後に居り）

ワキ「これは大伴の黒主にて候。さても明日内裏にて御歌合あるべしとて。黒主が相手には小野の小町を御定め候。小町と申すは歌の上手にて。更に相手には叶ひがたく候程に。明日の歌を定めて吟ぜぬ事は候まじ。かの私宅へ忍び入り。歌を聞かばやと存じ候

といひて後見座にくつろぐ。

【二】アシラヒの囃子にて、シテ小野小町、面深井・鬘・鬘帶・襟白・着附摺箔・唐織着流の裝束にて橋懸三の松へ出で、

シテサシ「それ歌の源を尋ぬるに。聖徳太子は救世の提闍。片岡山の製を路生に弘め給ふ。「さても明日内裏にて御歌合あるべきとて。小町が相手には黒主を御定め候ひて。水邊の草といふ題を賜はりたり。面白や水邊の草といふ題に浮かみ

【一】

第一段

舞臺は初め大伴黒主の宅。ワキ大伴黒主、狂言の從者を隨へて登場。

黒主「自分は大伴黒主です。さて明日御所で御歌合を遊ばすについて、自分の相手には小野小町をお定めになりました。小町といへば、歌の上手で、とても自分の相手には叶はないから、定めて小町が明日の歌を吟じることであらうと思ふので、その家へ忍び入つて、歌を聞かうと思ふのです」

と見物人に自己紹介をして、事件の發展を豫告する。

【二】

舞臺は小野小町の住家で、シテ小野小町登場。一室にある態で、

小町「和歌が盛んになつた起りを考へると、かの聖徳太子は衆生の苦患をお救ひになる大悲の菩薩で、片岡山で和歌をお詠みになつて、これを世間にお弘めになつたそれが和歌の興隆する始めでせう。さういへば、明日御所で御歌合を遊ばすについて、私の相手には黒主をお定めになつて、『水邊の草』といふ題を賜はりました。水邊の草とは面白い御題です。この題で、

【一】〇大伴の黒主—六歌仙の一人。近江國滋賀郡大領で、後祀られて黒主明神といふ。この人のこと〔志賀〕に作らる。同曲參照。
〇歌合—和歌を詠む者が左右の組に分れ、判者を立てゝ、詠歌の優劣を評し、勝負を定める一種の歌の遊び。
〇小野の小町—六歌仙の一人。出羽守良實の女で、宮中に召され、一時才色を以て聞えたが、後零落したと傳ふ。この人の事〔鸚鵡小町〕〔通小町〕などに作らる。
〇私宅—小町の住家。

【二】〇聖徳太子—用明天皇の皇子で、推古天皇の皇太子。諱は廐戸皇子。我國の諸制度を改新せられ、殊に佛法を興隆し給うた。
〇救世の提闍—提闍は闡提の誤であらう。闡提は大悲の菩薩が衆生濟度の爲に故意に涅槃に入らないもの。大悲闡提ともいふ。刊行會本觧には大仙の字を充て、佛といふに同じと解して居る。
〇片岡山の製—本曲の末に記す。

○路生―路傍の生物といふ意であらうか。
○蒔かなくに何を種とて―この歌勅撰集にも小町集にも見えない、出所不明。波を田畑の畝に見立てゝ詠んだのである。
○短册―古今集時代にはまだなかつた。
◎いかに誰かある―謡本には「誰かある」を省いて直に「唯今の歌を」とつゞけてゐる。
◎なか〱承りて候―謡本に「さん候承りて候」と載す。
◎蒔かなくに―謡本には「と承りて候」を略して載す
○道の道たるは―老子の第一章に「道可レ道非二常道一、名可レ名非二常名一」とあるを借り、我々の道とする所は萬人不變の恒久の常道ではない、各自その知つてゐる所に本づいてこれを道とするのであるといひ、狂言の從者は自分の境遇に本づいて

て候はいかに。『蒔かなくに何を種とて浮草の。波のうねうね生ひ茂るらん。』この歌をやがて短册にうつしさむらはん

といひてシテ中入。ワキ「さても明日内裏にて」に仕手柱先に出でてシテ謡を聞き居り、シテ中入すると舞臺の眞中に出で、

ワキ「いかに誰かある

狂言ワキの前に出で、

狂言「御前に候

ワキ「唯今の歌を聞いてあるか

狂言「なか〱承りて候

ワキ「何と聞いてあるぞ

狂言「蒔かなくに何を種とて瓜蔓の。畠のうねをまろびころびありくらんと承りて候

ワキ「いやさやうにてはなきぞ。道の道たるは常の道にはあらず。知れるを以て道とす。不得心なる事にて候へども。唯今の歌を萬葉の草子に

このやうな歌が浮かび出ました――『蒔かなくに何を種とて浮草の、波のうねうね生ひ茂るらん』

（浮草は誰も蒔きはしないのに、何を種として、このやうに波の畝に生へ茂るのであらう）

この歌を短册に認めませう」

といつて小町退場。

黒主それを立聞して、自分の宅へ歸つた態で、從者に向ひ、

黒主「おい、今の歌を聞いたか」

從者「はい承りました」

黒主「何と聞いた」

從者「――『蒔かなくに何を種とて瓜蔓の、畠のうねをまろびころびありくらん』とかう聞きました」

黒主「いやさうではない。一體人が自分の道々としてゐることは、萬人不變の道ではなくて、それ〴〵自分の知つてゐる所に從うて、それを道としてゐるのだ。自分はやはり自分の道を踏まなければなら

寫し。帝へ古歌と訴へ申し。明日の御歌合に勝たばやと存じ候

といひてワキ中入。ワキ幕に入ると、狂言名乘座に出で、

【間】
狂言「やれ／＼中々の事かな。總じて頼うだる御方を羨むるではないが。さりとては深い御心掛でござる。明日の御歌合に何卒勝たうずると思し召し。小町の家に忍び歌を吟ずるを聞かせられ。御主の分にては心許ないと思し召し。我等に御尋ね候間。隨分覺えたと存じ申してござれば。むさとした事を申し面目を失うてござる。これにつき思ひ出したる事の候。總じて某ほど不調法な者はないによつて。この間も小謠を一つ習うて。宿で謠うてござれば一段とよう出來てござるによつて。何處ぞで謠はうと存ずる處に。幸ひこの間皆の者が寄り合うて。酒宴の致す所へ參り合ひ。小謠を謠はうと存じて。一つ肴を致さうと申してござれば。某が隣の者が。まづ身共から謠はうというて。某が覺えた謠を先に謠うてござる。同じ謠は謠はれまいと存じて面目を失うてござる。又小袖を染めうと存じ。模樣を工夫致してござれば。等閑なうする者が參り。これはよい模樣ぢやと申して。某より先に染めて着てござる。同じ模樣は如何と存じ無用に致してござる。誠に某ほど愚鈍なものはござらぬ。いや獨言を申さずとも急いで罷り歸らう。皆々御供の用意致され候へ。その分心得候へ／＼

といひて幕に入る。

【三】
次第の囃子にて、子方天皇、初冠・襟白・着附縫箔・單狩衣・指貫・腰帶・扇の裝束、後ジテ小野小町、面深井・鬘・鬘帶。襟白・着附摺箔・唐織壺折・緋大口・腰帶・扇の裝束、ツレ紀貫之・壬生忠岑・凡河内躬恒、風折烏帽子(貫之は小立)・襟淺黄・着附

ない。どうも不心得なことだが已むを得ない。今の歌を萬葉集の草子に認めて、帝へ古歌だとお訴へ申して、明日の御歌合に勝つてやりませう」といつて黒主も退場。

小町の歌を瓜蔓の歌のやうに解したが、自分はそれを正しく聞き取るとともに、これを利用して歌合に對抗する方便とするとの意であらう。
○不得心―不心得。
○萬葉の草子―萬葉集をいふ。仁德天皇から淳仁天皇天平寶字三年まで約四百年間の和歌を集めた我國最初の大歌集であるが、その撰者については異說があつて未だ定まらない。謠曲作者の說は後に出て居る。

【間】
○御主の分にては―御自分がお聞きになつただけでは
○等閑なうする者―疎遠でないもの、親しい者。

【三】

【三】
第二段
舞臺は御所、御歌合の御殿。
子方天皇、シテ小野小町、ツレ凡河内躬恒、同壬

厚板。單狩衣。白大口・腰帶の裝束、ツレ官女二人、面連面・鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・唐織壺折・緋大口・腰帶・扇の裝束、後ワキ大伴黒主、前の裝束の長絹を脱ぎて單狩衣を着け草子を懷中して、子方・シテ・男ツレ・女ツレ・男ツレ・女ツレ・貫之・ワキの順にて出で、子方・男ツレ・貫之は地の方に、シテ・女ツレ・ワキは脇正面の方に竝びて向合ひ、

ツレ・ワキ（一同）次第「めでたき御代の歌合。めでたき御代の歌合。詠じて君を仰がん

地取に、子方は脇座へ行き床几にかゝり、男ツレは地謠座前、貫之・ワキは大小前、シテ・女ツレは脇正面に凹形に竝びて下に居る。男ツレの一人、仕手柱際へ行きて後見より短册をのせたる文臺を受取り、

ツレサシ『時しも頃は卯月半ば。清涼殿の御會なれば。花やかにこそ見えたりけれ

と謠ひながら　文臺を正面先に置きてもとの座に着く。

貫之『かくて人丸赤人の御影を掛け

ツレ・ワキ（一同）『おのおの詠みたる短册を。われもわれもと取り出だし。御影の前にぞ置きたりける

貫之『さて御前の人々には

生忠岑、同官女二人、同紀貫之、ワキ大伴黒主登場。

歌人一同「めでたい御代の御歌合だ。皆々勝れた歌を詠んで、帝の御聖徳を仰ぎ奉らう」

といつて、各自席に着く。

時は四月の中旬で、しかも清涼殿で遊ばす御會であるから、實に花やかな有樣であつた。

かうして、人丸・赤人の肖像を掲げ、それぞれ詠んだ歌の短册を、われもわれもと取り出して、かの肖像の前に置いた。

○淸涼殿―大內裏の主な宮殿の一で、晝御座・夜御殿・朝餉間等があり、常の御寢居である。

○人丸―姓は柿本。持統・文武の二朝に仕へた人で、特に長歌・抒情歌に勝れ、赤人と竝んで萬葉歌人の雙璧と推されてゐる。古今集序に「柿本の人麻呂なん歌の聖なりける。……人麻呂は赤人が上にたゝん事かたく、赤人は人麻呂が下にたたん事かたくなんありける」

○赤人―姓は山部。人麻呂より稍後の人で、聖武天皇に仕へた。短歌・叙景歌に勝れ、殊にその富士の歌は人口に膾炙してゐる。

○御影―肖像の懸軸。

〇河内の躬恒—正しくは凡河内躬恒。延喜天暦時代の歌人で、貫之・友則・忠岑と共に古今和歌集の撰者である。初め御書所に召され、後和泉大椽となつた。
〇紀の貫之—古今集撰者の筆頭で、その序文の筆者。わが國文學の興隆に最も大きな貢獻をした人で、延喜年中御書所預となり、後土佐守に任ぜられ木工權頭に昇り、天慶九年に死んだ。この人のこと「蟻通」に作る。
〇右衛門の府生—六衛府の一たる右衛門府の下官。
〇壬生の忠岑—古今集撰修の當時右衛門府生で、後攝津大椽に昇つた。
〇ひだりみぎり—左右。
〇ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れ行く舟をしぞ思ふ—人丸の御影に書き添へてあつたのであらう。古今集巻九に出で「この歌は或人の云く柿本の人麻呂がなり」と註してゐる。明石はほの〴〵とあかきにいひかけたもの、舟をしぞのしは強めの助詞である。
〇入る月の—隠れ入る舟を月に轉じ、月の淡きを淡路にいひかけた。

（ツレ・ワキ）（一同）「小町を始め河内の躬恒紀の貫之
貫之「右衛門の府生壬生の忠岑
と謡ひながら貫之は文臺の前に出て下に居り、
（ツレ・ワキ）（一同）「ひだりみぎりに着座して
貫之「既に詠をぞ始めける（と少し下りて坐し）。ほのぼのと。明石の浦の。朝霧に。島隠れ行く。舟をしぞ思ふ
地上歌「げに島隠れ入る月の。げに島隠れ入る月の。淡路の繪島國なれや。始めて歌の遊びこそ。心和らぐ道となれ。その歌人の名所も。皆庭上に並み居つつ。君の宣旨を待ちゐたり君の宣旨を待ちゐたり

【四】
子方「いかに貫之
貫之子方に辭儀して、
貫之「御前に候

さて、帝の御前に侍つた人々は、小町を始めとして、凡河内躬恒・紀貫之・右衛門府生壬生忠岑等で、帝の左右に着座して、既に詠歌を始めた。
貫之前へ出て、
貫之「——『ほの〴〵と明石の浦の朝霧に、島隠れ行く舟をしぞ思ふ』
（ほの〴〵と夜の明ける頃、明石の浦の立ちこめた朝霧の中を、向ふの島に隠れて見えなくなつて行く舟が、大變趣深く思はれる）と讀む。
ほんとに舟が島に隠れて行く趣、あの淡路の繪島の趣は興味の深いものであらう。淡路といへば、この國土が開けた始めから行はれたこの和歌の遊びこそ、人の心を和らげる道である。かうして、有名な歌人達は皆御殿に居竝んで、帝の仰せ出をお待ちしてゐた。

【四】
帝「貫之」
貫之「お前に居ります」

○淡路の絵島國なれや—絵島は淡路の中の島名、淡路は諾冊二尊が造り給うたわが國最初の島であるから、人丸の歌は淡路絵島あたりの景を詠んだものであらうといひかけて「始めて歌の遊び」とつゞけたのである。
○心和らぐ道—古今集序に「男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり」
○歌人の名所—和歌の名所を名高い歌人といふ意にかけていふ。
【四】

子方「始めより小町が相手には黒主を定めたり。まづまづ小町が歌を讀み上げ候へ
貫之「畏つて候
　文臺の前に出で下に居て臺の短册を一枚取りて兩手に持ち、
貫之「水邊の草。『蒔かなくに何を種とて浮草の。波のうねうね生ひ茂るらん
　といひて下に置き眞中へ下りて子方に辭儀す。
子方「面白と詠みたる歌や。この歌に勝るはよもあらじ。皆々詠じ候へ
貫之「畏つて候
ワキ「暫く候。（子方に辭儀して）これは古歌にて候
　貫之もとの座に歸る。
子方「何と古歌と申すか
ワキ「さん候
子方「いかに小町。何とて古歌をば申すぞ
　シテ子方に向ひ、

帝「始めから小町の相手には黒主を定めて置いたが、まづ小町の歌を讀み上げよ」
貫之「畏りました。——
『水邊の草。
蒔かなくに何を種とて浮草の、波のうねうね生ひ茂るらん』
　を讀み上ぐ。
帝「面白く詠んだ歌だ。この歌に勝るものは、よもあるまい。皆一所に詠ずるやうに」
貫之「畏りました」
黒主「暫くお待ち下さい」
　と貫之にいつて、天皇に向ひ、
黒主「これは古歌でございます」
帝「何だと、古歌と申すのか」
黒主「さやうでございます」
帝「おい小町、なぜ古歌を申すのだ」

○衣通姫―本曲の末に記す
○和歌の浦わに跡を垂れ―和歌浦に神として現れ。附記參照。
○玉津島の明神―紀伊國和歌浦にあり、衣通姫を祀り、和歌三神の一として崇められる。
○古今―古今和歌集。醍醐天皇の勅命により紀貫之等が撰修して延喜五年四月に出來上つた我國最初の勅撰和歌集。
○萬葉の勅撰―萬葉集は今は勅撰集と認められてゐないが、古今集の眞名序に「平城天子詔二侍臣一令レ撰二萬葉集一」とあるので、作者はこれに從つたのであらう。
○家の集―一人の作歌を輯めたもの。
○奈良の天子の御宇―古今集文屋有季の歌に「貞觀の御時萬葉集はいつばかり作れるぞと問はせ給ひければよみて奉りける」と詞書して、「神無月時雨ふりおける楢の葉の名におふ宮のふることぞこれ」とあり、楢は奈良にかけたので、これも眞名序と同じく平城天皇を指し奉つたものであらう。謠曲作者はこの說に從つた
○撰者は橘の諸兄―本曲の末に記す。

後ジテ『恥かしの勅諚やな。先代の昔はそも知らず。既に衣通姫この道のすたらん事を歎き。和歌の浦わに跡を垂れ給ひ。玉津島の明神よりこの方。皆この道を嗜むなり(ワキへ向き)それに今の歌を古歌と仰せ候は。古今萬葉の勅撰にて候か。又は家の集にてあるやらん。作者は誰にてましますぞ。委しく仰せ候へ

ワキ(シテへ)「仰せの如くその證歌分明ならではいかでか奏し申すべき。草子は萬葉題は夏。水邊の草とは見えたれども。讀人知らずと書きたれば。作者は誰とも存ぜぬなり

シテ「それ萬葉は奈良の天子の御宇。撰者は橘の諸兄。歌の數は七千首に及んで。皆わらはが知らぬ歌はさむらはず。萬葉といふ草子に數多の本の候か覺束なうこそ候へ

小町「恥かしい仰せ事でございます。古い神代の事は存じませんが、私どもの祖先衣通姫がこの歌道の廢れる事を心配して和歌浦に垂跡せられて、玉津島明神と祀られましてよりこの方、代々皆この歌道を嗜んで居るのでございます。(と申して黒主に向ひ)それだのに、今の歌を古歌だと仰しやるのは、古今・萬葉などの勅撰集にあるのでございますか、それとも又家集にでもあるのでせうか。作者はどなたでございます。委しく仰しやつて下さい」

黒主「仰せの通り、その證歌が明らかでなくては、どうしてこのやうな事を奏上致しませう。草子は萬葉集で、題は夏、水邊の草とあつたが、讀人知らずと書いてあるので、作者は誰だか存じません」

小町「萬葉集は平城天皇の御代橘諸兄の撰ばれたもので、歌の數は七千首もありますが、皆私の知らない歌はありません。もしや萬葉といふ草子に色々の異本があるのでございませうか。餘程變てございます」

○歌の數は七千首―鹿持雅澄の萬葉集古義によると、長歌が二百六十二首、短歌が四千百七十三首、旋頭歌が六十一首、合せて四千四百九十六首である。金剛流では「四千三百餘」といふ。
○衣通姫の流なれば―古今集序に「小野の小町は古の衣通姫の流なり、あはれなるやうにて强からず」とあるを引き、自分の歌では哀れで弱いから、歌合に負けることを恐れ、古歌を盜むのも道理だと罵つたのである。
○猿丸太夫の流れ―古今集眞名序に「大伴黒主之歌、古猿丸大夫之貌也」とあるに據つた。猿丸太夫は元慶頃の人であるとも、天武天皇第六皇子弓削王の異名であるともいひ、その傳が分らない。
○猿猴の名を以て―その名の如く心も猿猴のやうに惡賢くて、わが惡名を餘所に立てようとするのか。
○花の蔭ゆく山賤の―古今集序に「大伴の黒主はそのさま賤しくて、いはゞ薪負へる山人の花の蔭に休めるが如し」とあるに據つた。
○富士のなるさの大將―本曲の末に記す。

ワキ「げにげにそれはさる事なれどもさりながら。御身は衣通姫の流なれば。あはれむ歌にて强からねば。古歌を盜むは道理なり
シテ「さてはおことは古の猿丸太夫の流れ。それは猿猴の名を以て。わが名をよそに立てんとや。正しくそれは古歌ならず
ワキ「花の蔭行く山賤の
シテ「その樣賤しき身ならねば。何とて古歌とは見るべきぞ
ワキ「さて詞をたださで誤りしは。富士のなるさの大將や。四病八病三代八部同じ文字
シテ「文字もかほどの誤りは
ワキ「昔も今も
シテ「ありぬべし
地「不思議や上古も末代も。三十一字のそのうち

黒主「いかにも尤もなお話だが、あなたは衣通姫の流を汲んだ人で、哀れな弱い調子だから、歌合に負けることを恐れて、古歌を盜まれるのも無理はありません」
小町「さういへば、あなたは昔の猿丸太夫の流を引いた方だから、その名前の通り、猿のやうな惡智慧を出して、私に惡名を立てようとせられるのでせう、斷じてそれは古歌でありません」
黒主「私は花の蔭を行く山人のやうだといはれて……」
小町「私はそのやうな賤しい者でありませんから、どうしてそれを古歌だなどと思ひませう」
黒主「すると、よく詞を調べないで間違へられたものとすれば、まあ『富士のなるさの大將』のやうなものですな。四病八病といつて、三代集乃至八代集にある古歌と同じ文字を使つては……」
小町「文字もこのやうな間違ひは……」
黒主「恐らく昔も今も」
小町「いや一字や二字のことならばありませう。しかし、不思議な、三十一字の文字が一字も變らず詠まれた例といふもの

に、一字も變らで詠みたる歌、これ萬葉の歌ならば和歌の不思議と思ふべし。さらば證歌を出だせとの（ワキ子方に辭儀）、宣旨度々下りしかば（懷中より草子を取出し）。初めは立春の題なれば（正面先へ出で）。花も盡きぬと引き開く。夏は涼しき浮草の（と草子を開き）、これこそ今の歌なりとて。既に讀まんとさし上ぐれば（草子をさし上げシテの前に置き元の座に歸る）、わが身にあたらぬ歌人さへ。胸に苦しき手を置けり。ましてや小町が心のうち唯轟の橋うち渡りて危き心は隙もなし（シテ面を伏す）

この間に女ツレ立ちて男ツレの上に坐す。

【五】

シテ『恨めしやこの道の。大祖柿本のまうちきみも、小町をば捨てはて給ふか。恨めしやな（としをり）、この歌古歌なりとて。左右の大臣その外の、局々の女房達も（とツレを見渡し）、小町ひとりを見

○四病八病、三代八部―同じく末に記す。
○文字もかほどの誤りは―四病八病にて說かれる程度の同字の誤は、三代集八代集など昔も今もその例があるであらうがとの意。
○初めは立春の題なれば―これより萬葉集を第一巻から讀み檢べる叙述である。萬葉集の最初の歌は立春の題ではないが、古今集が立春から始まり、以後の勅撰集みなこれに倣つて、立春から始めて、春夏秋冬の順を追うてゐるので、こゝにもその心で綴つたのである。
○花も盡きぬ―春の部を讀み終つたのである。
○わが身にあたらぬ―無關係の歌人。列座の人々をいふ。
○轟の橋―胸のとゞろくを奈良の名所轟の橋にかけ、橋を渡る危さを小町の心案じにかけていふ。
【五】
○まうちきみ―まへつきみの音便で、天皇に侍し奉る臣下。轉じて汎く公卿のことをいふ。
○局々の女房―局は女官の居る部屋。女房は女官のこと。

は、昔も今もありは致しません。もしこれが萬葉の歌であつたならば、和歌の一大不思議と思はれます」

帝「それならば證據の歌を出せ」と度々仰せ出されるので、黒主は萬葉の草子を取り出して、その開卷第一は立春の題であるから、この邊にはたいと、繰り擴げて、春の部を終り、夏の部を開いて行つて、夏の涼しい浮草を詠んだ箇所に目を留め、

黒主「これが今の歌でございます」といつて、今や讀まうと草子をさしあげると、この事件には關係のない列座の歌人さへ、胸苦しい思ひをして、胸に手を置いた。まして小町は胸うち轟かせ、實に不安な思ひをした。

【五】

小町「あゝ恨めしいことです。歌道の大祖柿本朝臣も私をお見捨てになつてしまつたのでせうか、あゝ恨めしいことです。この歌を古歌だと思つて、左右の大臣方を始め女房の方々も、私ひとりを御覽になるので、たゞ夢に夢を見るやうな心地

○しどろ—亂雜。

○入筆—書きたし。書き入れ。

○青丹衣の風情—謠曲評釋には「采女根性の所爲よと卑しめ嘲りていへる詞なるべし」といつて居る。青丹の襲とは裏表ともに濃い青色に黄のかゝつた色目で、宇津保物語に「しもづかへは青丹に柳重ね着たり」又枕草子に「御てうづ番の采女、青裾濃の裳・唐衣裙帶ひれなどして」などあるから、青丹衣とは下賤の女の衣をいつたものらしい。しかし評釋の解ではなほ首肯し難いものがある。恐らく、刊行會本の辭解にいつてゐるやうに、青丹衣といふ詞について言ひ爭ひ、終に爭ひ負けたとか、謠曲通解の舊說の如く、恥の上に恥の上塗をするとかいふ、何か故事があるのではなからうか。

○人目さがなや—外聞が惡い。

給へば。夢に夢見る心地して。定かならざる心かな（と草子を見）。この草子を取り上げ見れば（と草子を兩手に持ち）。行の次第もしどろにて。文字の墨つき違ひたり（と草子を下し）「いかさま小町がひとり詠ぜしを黒主立ち聞きし。帝へ古歌と訴へ申さんために。（草子を上げて）「この萬葉に入筆したるとおぼえたり（と草子を下して）。あまりに恥かしうさむらへば（と貫之に向ひ）。淸き流れを掬び上げ。この草子を洗はばやと思ひ候

貫之「小町はさやうに申せども。もし又さなきものならば。青丹衣の風情たるべし

シテ『とにかくに思ひまはせども。やる方もなき悲しさに（と草子を持ちたるまゝしをりながら立ち）

地『泣く泣く立ちてすごすごと。歸る道すがら人目さがなや恥かしや

がして、心もはつきりしない。……でも、この草子を取り上げて見ると、行の具合も亂雜で、文字の墨付も外の歌とは違つてゐる。なる程これは私が獨り詠んでゐたのを、黒主が立ち聞きをして、帝に古歌とお訴へ申す爲に、この萬葉に書き入れたらしい」

（と獨言をいつて、貫之に向ひ、）

小町「餘りに恥かしうございますから、淸い水を汲んで、この草子を洗つて見たいと存じます」

貫之「小町はそのやうにいふが、もしさうでなければ、愈〻不面目になるだらうが」

小町「どう思ひ直して見ても、慰めやうもなく悲しうございます」（と座を立つて）

小町「このやうに泣きながら歸る途中も、外聞の惡い、人目の恥かしいことです」

（といひながら退出して行く。）

【六】

○綸言—天子のお言葉。禮記緇衣篇に「子曰、王言如絲、其出如綸」
○玉襷—襷の美稱。涙の玉といひかけた。

とシテ橋懸へ行く、貫之立ちて仕手柱先へ行き、

【六】貫之「小町暫く御待ち候へ。その由奏聞申さうずるにて候

といひて眞中へ出で子方に辭儀、（シテ一の松にて下に居る）

貫之「いかに奏聞申し候、小町申し候は。唯今の萬葉の草子をよくよく見候へば、行の次第もしどろにて。文字の墨つきも違ひて候程に。草子を洗ひて見たき由申し候

子方「げにげに小町が申す如く。さらば洗ひて見よと申し候へ

貫之「畏つて候

仕手柱先へ行きて、

貫之「いかに小町、勅諚にてあるぞ。急いで草子を洗ひ候へ（といひて元の座に歸る）

シテ「綸言なれば嬉しくて、落つる涙の玉襷結んで肩にうちかけて。既に草子を洗はんと（草子を兩

【六】貫之「小町、暫くお待ちなさい。この事を奏上しませう」

小町もとの座に直る。貫之天皇に向ひ、

貫之「申しあげます。小町が申しますには、唯今の萬葉の草子をよく見ますと、行の具合も亂雜で、文字の墨付も外の處とは違つて居りますので、草子を洗つて見たいと、かう申します」

帝「なるほど小町の申す通り、それでは洗つて見よと申せ」

貫之「畏りました」

小町に向ひ、

貫之「小町、帝の仰せである。すぐ草子をお洗ひなさい」

帝のお言葉であるので、小町は嬉しさに落ちる涙を抑へながら、襷を結んで肩にかけ、いよいよ草子を洗はうとして、

○和歌の浦わの―和歌を和歌浦にいひかけ、浦の縁で藻鹽草とつゞけた。
○藻鹽草―鹽を採る爲に用ゐる海草。
○波よせかけて洗はん―草子を洗ふ有樣を波が海草を洗ふ樣に擬へていつたのである。
○天の川瀨に洗ひしは―以下「さつとかけて洗はん」まで物洗ひ盡しで、七月七日牽牛・織女の二星が天の川で一年に一夜相會ふといふ七夕傳說に據り、その別れの悲しさに淚で袖を潤すことを衣を洗ふといつたのであらう。
○花色衣―美しい衣の意で「山吹の花色衣」―卯花の花色衣」など色々あり、薄い藍色を指すのではない。秋の七日を承けて、秋の七草を思ひ起して花色を出し、花の緣で梅の匂ひとつゞけたのである。
○雁がねの翼は文字の―支那の蘇武が旅雁に託して手紙を故鄕に送つたといふ故事から、歌にも文にも、雁の翼と文字と結びつけていふやうになつた。この句は、雁の翼もその跡を見定めなければ、文意が通じないやうに、この草子も洗つ

手に持ちて立ち）
地次第『和歌の浦わの藻鹽草　和歌の浦わの藻鹽草
波よせかけて洗はん
とシテ當座へ出づ、地取に後見文臺を引く。
シテ『天の川瀨に洗ひしは
地『秋の七日の衣なり
シテ『花色衣の袂には
地『梅の匂ひやまじるらん
地ロンギ『雁がねの、翼は文字の數なれど跡定めねばあらはれず穎川に耳を洗ひしは
シテ『濁れる世を澄ましけり
地『舊苔の鬚を洗ひしは
シテ『川原に解くる薄氷（下を見）
地『春の歌を洗ひては霞の袖を解かうよ
シテ『冬の歌を洗へば冬の歌を洗へば（と目附柱の方へ行き）

小町「和歌浦の藻鹽草を波が洗ふやうに、この草子を洗ひませう」
（と當座へ行きながら、）
小町――
「天の川瀨で洗つたのは、七月七日夏の夜に、年に一度相逢うて、やがて悲しく別れ去る、牽牛・織女の二つの星が、淚に濡れた衣なのだ。
色美しい袂には、衣を洗つた後までも、梅の匂ひが殘るだらう。
空行く雁の翼には、文字の數々あらはすが、飛び行く跡をよく見ねば、文の意味が分らない。（[illegible]）穎川で許由が耳を洗つたのは、濁つた俗事を聞かされた、耳の汚れを清めたのだ。
鬚のやうな年ふる苔を洗つたのは、春の光で解けてくる川原に張つた薄氷。
春の歌を洗つては、水に氷つたこの袖を、春の霞で解かさうよ。
冬の歌を洗ふなら、自分の袂も寒かろが、さぞ寒からう水鳥の、上毛の霜を

て見なければ、事の眞否が判らないといふ意であらう
○潁川に耳を洗ひしは―支那許由の故事。高士傳に「許由耕二潁川之陽一、堯召爲二九州長一、由不レ欲レ聞レ之、洗二耳於潁水濱一」
○舊苔の鬚を洗ひしは―和漢朗詠集都良香の詩句「氣霽風梳二新柳髪一、氷消浪洗二舊苔鬚一」を引いた。
○春の歌を洗ひては―薄氷の、張るを春にいひかけた。古今集紀貫之の歌「袖ひぢて結びし水の氷れるを春立つ今日の風やとくらん」を胸に置いて綴つたのであらう。以下歌集の部類を逐うて述べるのである。
○上毛の霜に洗はん―枕草子に「水鳥はをしいとあはれなり。かたみにゐかはりて、はねの上の霜を拂はん」古今六帖の歌に「はねの上の霜うち拂ふ友をなみをしの獨寢するぞわびしき」
○忍び草の墨消え―忍草は戀を忍ぶを草の名に寄せたもので、忍草といふ文字が消えてとの意。
○忘れ草も亂るる―忘れ草は戀を忘るるを草の名に寄せたもので、草の亂れるを心の亂れるにいひかけたのである。

地「袂も寒き水鳥の。上毛の霜に洗はん上毛の霜に洗はん（正面へ出で）、戀の歌の文字なれば忍び草の墨消え
シテ「涙は袖に降りくれて（としをり）、忍ぶ草も亂るる忘れ草も亂るる
地「釋教の歌の數々は
シテ「蓮の絲ぞ亂るる
地「神祇の歌は榊葉の
シテ「庭火に袖ぞ乾ける（と右へ廻り）
地「時雨に濡れて洗ひしは
シテ「紅葉の錦なりけり（大小前にとまり）
地「住吉の。住吉の（目附柱際へ出で）、久しき松を洗ひては岸に寄する白波をさつとかけて洗はん（と居立ちて扇にて草子を洗ふ形して）洗ひ洗ひて取り上げて（と洗ひて草子を見上げ）て見れば不思議やこはいかに。數

拂つてやろ。――
戀の歌を洗つては、戀歌の文字の「忍び草」「忘れ草」などの文字は消え、涙ばかりが袖に濡れ、心が千々に亂れるよ。
釋教の歌を洗つては、蓮の文字が消え失せて、心が千々に亂れるよ。――
神祇の歌を洗つては、榊の文字に榊葉の、神樂の曲を思ひ出て、涙の袖も庭火にて、乾く思ひがするであらう。
時雨に濡れて洗つたのは、紅葉の錦であつたのだ。――
住吉のあの老松を洗つたのは、岸に寄せくる白波……」――
（ト[illegible]水際に着いたる心。）
小町「おゝ水をさつとかけて洗はう（と草子を洗ふ）。
小町「よく洗つて取り上げて見ると、これ

○蓮の絲ぞ亂るる―釋教の部の歌には佛に縁の深い蓮といふ文字が多い。その文字が消え亂れることを、絲の亂れにかけていふ。○榊葉―神前の榊と、神樂の曲名榊葉とかけて、次の庭火を出す。○庭火―神樂の時神前にたく焚火。○時雨に濡れて―古今集凡河内躬恒の歌「神無月時雨に濡るゝもみぢ葉は、たゞわび人の袂なりけり」に據つた。○住吉の久しき松を―古今集讀人不知の歌「われ見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松幾代經ぬらん」後拾遺集源經信の歌「沖つ風吹きにけらしな住吉の松の下枝を洗ふ白波」に據る。○浮草の―浮草を詠んだ小町の歌は浮草のやうに消えてとの意。○出雲―出雲大社の祭神素盞嗚尊。尊の御詠「八雲立つ出雲八重垣」がわが國最初の和歌である。○住吉―住吉明神。和歌三神の一。○龍顏―こゝでは天子の御前。
【七】
○この身皆以て―名譽をすべてわが身一人に歸せしめ

数のその歌の。作者も題も。文字の形も少しも亂るる事もなく。入筆なれば浮草の（ツキに草子を見せ）。文字は一字も。殘らで消えにけり。ありがたやありがたや（と草子を下げて立ち）。出雲住吉玉津島。人丸赤人の御惠みかと伏し拜み（と正面に向き合掌）。喜びて龍顏にさし上げたりや

と子方の前へ草子を持ちて出で、居立ちて草子を子方に見す。

【七】

ワキ「よくよく物を案ずるに。かほどの恥辱よもあらじ（と立ち）。自害をせんと罷り立つ

と橋懸へ行く。シテ眞中へ出で下に居てワキに向ひ、

シテ「なうなう暫く。『この身皆以てその名ひとりに殘るならば。何かは和歌の友ならん。道を嗜む志。誰もかうこそあるべけれ

子方「いかに黒主

ワキ（辭儀して）「御前に候

は不思議だ。この澤山の歌の、作者も題も文字の形も少しも亂れはしないで、たゞ浮草の歌だけが書き入れなので、文字が一字も殘らず消えてしまつた。あゝありがたい。これも和歌の神々、出雲・住吉・玉津島・人丸・赤人の神々の御惠みであらう」

と伏し拜んで、喜んで帝の御前にさしあげた。

【七】

黒主「よく考へるのに、これほどの恥辱はよもや外にあるまい。自害をしよう」

と座を立つ。

小町「もうし暫くお待ちなさいませ。たゞ自分ひとりですべての名譽を占めてしまふやうでは、倶に和歌の道を語ることが出來ません。歌道に熱心な餘りには誰もこのやうになるものでございます」

帝「おい黒主」

黒主、天皇の御前に出て、

黒主「御前に出ましてございます」

るやうな交際は、歌道の本意でないとの意。

【八】

○みぎん—砌。時節。
○花の打衣—花やかな打衣打衣は婦人の服で、一重又はあこめの上に着る。
○風折烏帽子—上を折りためた烏帽子。
○笏拍子—笏のやうな二つの板を打合せて、樂の拍子をとる一種の樂具。
○春來つては—和漢朗詠集王維の詩句—春來遍是桃花水、不レ辨二仙源一何處尋」を引いた。
○石に障りて—桃花の縁で曲水宴の詩句、和漢朗詠集菅原雅規の「礙レ石遲來心竊待、牽レ流遄過手先遮」を出した。
○花の一枝—手まづ遮る盃といひかけて花に轉じた。
○もも色—前の桃花の桃の音を借り、一枝に對して、百といふ。

子方「道を嗜む者は誰もかうこそあるべけれ。苦しからぬ事座敷へ直り候へ

ワキ「これ又時の面目なれば、宣旨をいかで背くべき(と立ち)。黑主御前に畏る

ともとの座に歸り子方に辭儀。

【八】

地サシ「げにありがたきみぎんかな(シテ仕手柱先へ行き坐す)。小町黑主遺恨なく。小町に舞を奏せよと(貫之子方に辭儀)。おのおの立ちより花の打衣(貫之後見より烏帽子を受けて立ち)。風折烏帽子を着せ申し(貫之シテへ行き)。笏拍子をうち座敷を靜め

と貫之シテに烏帽子を渡す。シテ烏帽子を着る。【物着】済みて貫之もとの座に歸る。シテ立ちて、

シテ「春來つては。遍くこれ桃花の水

地「石に障りて。遲く來れり

シテ「手まづ遮る花の一枝

地「もも色の衣や。重ぬらん

天皇「この道に熱心な餘りには、誰もこのやうになるものだ、苦しうない、もとの座に直るやうに」

黑主「ありがたい仰せでございますから、どうして仰せに背きませう」

と黑主は御前に畏る。

【八】

誠にありがたい折で、小町も黑主も何等遺恨に思ふことはなく、列座の人々が小町に「舞を舞へ」と立ち寄つて、花やかな打衣・風折烏帽子を着せ、笏拍子を打つて、座敷を靜めると、

小町は仕度を整へて、

小町「——

「春が來ると、水といふ水に皆桃の花が浮かんでゐる。
しかし、石が邪魔をして、なか〳〵早く流れて來ない。
やつと流れて來ると、まづ手を出して花の一枝を取る。

シテ「霞立つ（と大小前へ行き）

〔中舞〕

引續き次の謠に合せて舞ふ。

シテワカ「霞立てば。遠山になる。朝ぼらけ

地「日影に見ゆる。松は千代まで松は千代まで、四海の波も。四方の國々も。民の戸ざしも。さささぬ御代こそ。堯舜の嘉例なれ。大和歌の起りは。あらかねの土にして。素盞嗚尊の。守り給へる神國なれば（子方立ちて幕に入る）。花の都の春ものどかに。花の都の春ものどかに。和歌の道こそ。めでたけれ

シテ「子方の幕に入るを見送りて常座にて留拍子を踏む。

○遠山になる朝ぼらけ―霞が棚引くと山が遠くなつたやうに見える明方の景色。引歌かと思ふが分らない。○戸ざしもささぬ―戸も締めぬ。盜賊の恐れのない太平の證。○堯舜―支那太古の聖天子○あらかねの土にして―古今集序に「あらかねの土にしては素盞嗚尊よりぞ起りける」とあるを引いたこあらかねのは土の枕詞。

かうして、色とりどりの花やかな着物を着て、春を樂しむことであらう」

（地謡は句を次々に謡ひ、「中舞」を舞ひ、

小町「春霞が棚引くと、山が遠くなつたやうに見えるが、その明方の美しい日影に見える松のやうに、大君は千代に八千代に御榮え遊ばして、天下は太平、國民も夜戸を締める心配もない、この大御代は、支那の聖天子堯・舜の代にも比ぶべきものだ。さて又和歌の起原はこの世では素盞嗚尊がお始めになつたものであるが、わが國はこの和歌の神がお守りになる神國であるから、花の都の春景色も殊の外のどかで、これにつけても和歌の道はめでたい限りである」

といふ祝言を謡ひながら舞ひ納める。

子方天皇より退場、續いて一同退場。

〔考異〕

諸流（五流）

【四】地「不思議や上古も……危き心は隙もなし（剛かくてこの歌古歌ならば。小町の恥をいかにせん。もしもとなき者ならば。かの黒主がけんぼうの嘘。各恥は深かるべし。これ黒主が萬葉の讀歌。これは小町が題の歌。歌と草子を引合せて。歌をそなに讀み上げけ

る。蒔かなくに何を種とて浮草の。波のうね〳〵生ひ茂るらん。ツレ「御覽候へ(これは古歌にて候はぬか) 【五】貫之「畏つて候……急いで草子を洗ひ候へ(貫下懸立衆「その時御前の人々は。黄金の半挿に水を入れ。白銀の盥取出し。御前にこそ置きたりけれ)

【六】地「げにありがたきみぎん……花の薄衣風烏帽子……シテ「もも色の衣や重ぬらん(瀏すゝめけり)

古謠本 (元祿八年本)

【一】ワキ「これは大伴の……(元彼)小町と申すは……叶ひがたく候程に(元ナシ) 【二】シテナシ「それ歌の……黒主を御定め候ひて(元程に。歌をよまはやと思ひ候。小町には)水邊の草と……短册にうつしさむらはん(元さはやと思ひ候) 【三】ツレナシ「時しも(元殊に)花やかにこそ…… 【四】貫之「畏つて候(元ナシ)。ワキ「暫く候(元ナシ)……シテ「恥かしの勅諚(元仰)やな……家の集(元抄)にこシテ「さてはおことは……猿丸太夫の流(元にこ)…… 【五】シテ「恨めしや……(元みかはの水の)清き流れを掬び…… 【六】貫之(元いかに)小町暫く……子方「げにげに……さらば(元草子を)洗ひて見よ……貫之「畏つて候……急いで草子を洗ひ候へ(元地「其時御前の人人は)金のはんさうに水を入。白銀のたらひ取そへて。小町か前に置たりける)……地ロンギ「雁がねの翼は文字の數なれど(元ノ〳〵)

【七】ワキ「これ又時の……黒主御前に畏る(元ナシ)

附記

○片岡山の製―拾遺集に「聖徳太子片岡の山邊道人の家に坐しけるに、餓ゑたる人道のほとりにふせり、太子の乘り給へる馬とゞまりて行かず。鞭をあげて打ち給へど、しりへ退きてとどまる。太子卽ち馬より下りて、餓ゑたる人のもとに進み給ひて、紫の上の御衣を脫ぎて、餓人の上に覆ひ給ふ。歌をよみて宣はく―と詞書して「しなてるや片岡山に飯に餓ゑて、ふせる旅人あはれ親なし」とあるを指す。製は作に同じ。

○衣通姬―名は弟姬。允恭天皇の妃で、容姿が美しく、艷光が衣を徹したと傳へられてゐる。古今栄雅抄に「光孝天皇御惱ありしに、御齋ある曙に、赤き袴着たる女房御枕に立ちて、「立ちかへり又もこの世に跡垂れん、名もおもしろき和歌の浦波」と、帝の御夢に見えければ、夢中に誰人ぞと問はせ給ふに、衣通姬と答へ給ふによりて、仁和三年九月十三日右大辨源隆行勅使として、若の浦玉津島の社を造立して、信遍上人を以て勸請して崇め奉る、本地聖觀音にておはします」この種の傳說によつて、衣通姬は和歌の神とせられるやうになつた。

○橘の諸兄―葛城王、臣籍に下り姓を賜つて橘といふ。天平寳字元年に七十四で薨ず。萬葉集にはこの以後の作もあつて、全部諸兄の撰んだものでないことは明らかであり、仙覺に諸兄の後を受けて大伴家持が續撰したものであるといひ、契沖は全く大伴家持の私撰であるといつて

ゐるが、榮花物語に「昔高野の女帝の御代、天平勝寶五年には左大臣橘諸兄卿大夫等あつまりて萬葉集を撰ばせ給ふ」とあり、その他古書では諸兄説が有力であつたので、この作者も諸兄説に從つたのであらう。

○富士のなるさの大將｜言葉誤りに就ての故事。鴨長明の無名抄に「徳大寺の左大臣は無明の酒を名も無き酒とよみ給へりしかば、名無しの大將といはれ、五條の三位入道（俊成）はこの道の長者にていますが、されど富士の鳴澤を富士のなるさと詠みて、なるさの入道、名なしの大將とつがひて、人に笑はれ給ひしかば、いみじきこの道の遺恨にて侍りし」とある、富士のなるさの入道と、名なしの大將とを混同して、富士のなるさの大將といつたのである。

○四病八病｜喜撰式に見えた、作歌上忌み嫌ふ樣式法則をいふ。四病とは岸樹病・風燭病・浪船病・落花病をいひ、八病とは同心病・亂思病・瀾蹀病・諸鴻病・花橘病・老楓病・中絶病・後悔病をいふ。

○三代八部｜三代は古今・後撰・拾遺の三勅撰集をいひ、八部とはこの三代集に後拾遺・金葉・詞花・千載・新古今を合せた八代集をいふ。但しこれらの歌集は勿論小町・黑主より後のものである。

逆矛（さかほこ）　觀

解説

【能柄】 脇能　複式夢幻能

【人物】 **ワキ**　當今臣下、**ワキツレ**　同從者（二人）、**前シテ**　老翁（瀧祭神の神靈）、**前ツレ**　若き男、**狂言**　山下の者、**後ツレ**　天女、**後シテ**　瀧祭神

【所】 大和國　龍田山

【時】 九月下旬

【作者】 能本作者註文には世阿彌の作といひ、二百十番謠目錄には宮增の作とす。○看聞日記永享四年三月十五日仙洞御所の演能に本曲の名が見えてゐる。

【梗概】 當代の朝臣が龍田明神へ參詣の途で、祈納の瀧祭に參詣する老翁に出遭ひ、これに案内せられて、寶山に參り、この御山の謂れを尋ねると、老翁は伊弉諾・伊弉冊尊が天祖の御敎によつてこの國土を創成遊ばされた時にお持ちになつた天の御矛を納めた所で、自分はその

守護神瀧祭の神であるといつて山に隱れる。朝臣が奇特の思ひをなして、こゝに假寢してゐると、天女が現れて舞を舞ひ、やがて瀧祭の神が出現して、御矛を讃歎し、御代の太平を祝はれる。

【出典】この瀧祭の神の事は、神皇正統記巻一に、

こゝに天祖國常立尊伊弉諾・伊弉册の二神に勅して宣はく、「豐葦原の千五百秋の瑞穗の地あり、汝往きて知らすべし」とて、即ち天の瓊矛を授け給ふ。（此の矛又は天の逆戈とも天の魔返戈ともいへり。）二神この矛を授かりて、天の浮橋の上にたゝずみて、矛をさし下してかき探り給ひしかば、滄海のみありき。その矛の尖より滴り落つるうしほ凝りて一つの島となる。……又瀧祭の神と申すは龍神なり。その神の（天の逆矛を）預りて地中に納めたりともいふ。一には大倭の龍田神はこの瀧祭と同體にます。この神の預り給へるによりて、天柱國柱といふ御名ありとも云ふ。……靈山にとまりて不動のしるしとなりけむ事や正說なるべからむ。

といひ、應永卅三年七月奥書の「龍田大明神御事」（續群書類從巻四十八）にも、この說を揭げて、

大和龍田神は此瀧祭と同體にます。此神の預り給へる也。仍天柱國柱と云御名ありと云。……寶山にとゞまりて、不動のしるしと成ける事や正說なるべからむ。龍田も寶山ちかき所なれば、龍神を天柱國柱と云へるも、深秘の心あるべきにや云々。

といつて居る。本曲はこの趣の說に據つたものである。

【構想】龍田緣起を取扱つたものには、本曲の外に「龍田」があるが、それはシテを龍田姫として女性的優雅な曲としたのに對し、これには瀧祭神をシテとし、天瓊矛の由來を說く事を主眼としたもので、男性的剛健な曲を作つたのである。劍は武士の魂ともいふべきものであるから、刀劍を主題としたものが、武家時代の謠曲に多いのは、當然のことで、三種神器の寶劍について描いたものに、「大蛇」「草薙」刀劍製作の奇瑞を語つたものに「小鍛冶」などがある。ましてわが國土創成に最も關係の深い天瓊矛は能作者の見逃し難いもので、これを主題として剛健な曲に制作した本曲の如きは、武士的好尚の正系を傳へたものといふべきであらうか。脚色は、神事物の一般的な形式を履んだもので、後段が、出端の地謠で天女の登場となり、天女舞を終つて、後ジテが登場するのも、シテ・ツレ二人の登場する神事物に普通の形である。たゞ後段の御矛讃歎の叙述に「祝詞」の形をとつたのは、本曲の工夫と見るべきものであらう。

【一】

後見、一疊臺に山の作物をのせて大小前に出す。

次第の囃子にて、ワキ臣下、大臣烏帽子・上頭掛・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ從者二人、ワキと同樣の裝束にて舞臺に出で向合ひて、

ワキ・ワキヅレ次第「大和にも織る唐錦。大和にも織る唐錦。龍田の、神に參らん

地取にワキは正面に向き、

ワキ「抑もこれは當今に仕へ奉る臣下なり。さても和州龍田の明神は。靈神にて御座候程に。この度君に御暇を申し。唯今龍田に參詣仕り候

ワキ・ワキヅレ向合ひ、

ワキ・ワキヅレ道行「國々の。末は七つの都路を。末は七つの都路を。夜深く出でて淀舟や立つ旅衣はるばると。なほ雲遠き山城の。井手の下紐末かけし。跡も昔に奈良坂や。龍田の山に着きにけり龍田の山に着きにけり

ワキ「なほ雲遠き山城の」と正面に向きて先へ出でまたもとに歸りて龍田に着きたる心、道行濟みて正面に向き、

【一】前段

(舞臺は初め京都で、ワキ當今の臣下、ワキヅレの從者二人が登場。)

(この次第を謡つて旅の目的を述べ、)

朝臣「わが國でも織るあの唐錦のやうに、紅葉の美しい、龍田明神に參詣しよう」

(この見物人に自己紹介をし、)

朝臣「自分は今上陛下にお仕へ申してゐる臣下です。さて大和國の龍田明神はあらたかな神樣であるから、今度帝の御暇を賜はつて、これから龍田に參詣するのです」

(この旅の順路をいつてゐるうちに、旅程が進んだ體で、舞臺は大和國龍田となる。)

朝臣「都から諸國へ行くのには、道が分れて七道となるのであるが、自分はまた夜の暗いうちに、淀川通ひの舟に乘つて都を出立し、行先遠い思ひをしながら、山城の井手の里では、昔内舍人が少女と帶を取交はして、再會を約束した故事を思ひ出し、やがて奈良坂を越えて龍田山に着いた」

【一】

○大和にも織る唐錦—唐錦は大和錦に對する名稱で、その唐錦も今日本でも織るといつて、錦を裁つを龍田にいひかけ又龍田は紅葉の名所で錦を織つたやうに美しいといはれてゐるので、その意をも兼ねて「大和にも織る唐錦」を龍田の序としたのである。

○龍田の明神—大和國生駒郡立野にあり、龍田坐天御柱國御柱神(風の神)を祀る別に今の龍田町に龍田新宮あり、龍田彦・龍田姫(秋の神)を祀る。「龍田」參照。

○末は七つの都路—都路の末は七道となるとの意。七道は東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海道。

○淀舟や—夜の音を重ねていふ。淀舟は淀川を通ふ舟。

○旅衣—淀舟に乘つて出で立つを裁つにかけて旅衣といひ、衣の緣語張るにかけて遙々とつゞけた。

○山城の—遠き山を國の名にいひかけた。

○井手—山城國綴喜郡木津川の邊にある。

○下紐末かけし跡—大和物語に、昔内舍人であつた男、大和へ下る途中、井手の里

で少女に逢ひ、自分の帯を解いて少女に與へ、これをしるしにして少女の成人した後に再び逢はうと約束した、とある故事を指す。末かけて―は將來の事を約束する意。
○奈良坂―都の方から奈良へ入る北口の坂。昔になるといひかけた。
○龍田の山―龍田神社のある山。

【三】
○龍田川錦織りかく―古今集讀人不知の歌「龍田川錦織りかく神無月時雨の雨をたてぬきにして」を引いた。龍田川は、源を生駒嶽に發し龍田町の西を流れ、下は大和川となる。
○神無月―十月。
○時めきて―盛りになつて
○農職―農を職とする者。
○宮路―神社に參詣する路

ワキ「急ぎ候程に。龍田の山に着きて候。心靜かに社參申さうずるにて候
ワキヅレ「尤も然るべう候
といひて、脇座へ行き下に居る。

【三】
眞一聲の囃子にて、シテ老翁、面小牛尉・尉髪・襟淺黄・着附小格子・水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて榊枝を持ち、ツレ男、直面・襟赤・着附無地熨斗目・縷水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて松明を持ち、ツレを先に立てて橋懸に出で、ツレは一の松、シテは三の松に立ちて向合ひ、

シテ ツレ 一聲「龍田川。錦織りかく神無月。色づく秋の。梢かな
二人とも正面に向き、
ツレ二句「紅葉の色も時めきて。シテ ツレ（向合ひ）「錦を張れる。氣色かな
と謠ひて舞臺に入り、ツレは眞中に、シテは常座に立ち、
シテサシ「これは當社龍田の里に。住みて久しき者なるが。シテ ツレ（向合ひ）「農職ながら昔より。神前に仕へ奉り。名に負ふ龍田の神垣や。宮路を通ひいつとなく賴む願ひも。淺からず。惠みを千代と

シテ瀧祭の神、老翁の姿をして、ツレの若い男とともに登場。

【三】
老翁「龍田川は錦を織つたやうな、美しい十月の秋景色となつて、木々の梢が奇麗に紅葉してゐることだ」
男「紅葉の色も眞盛りになつて、錦を張つたやうな趣だ
さあたりの景色を眺めながら社前に近づき、
老翁「私は龍田明神のお出でになる龍田の里に、永年の間住んでゐるものですが、百姓の身上とはいひながら、昔から明神にお仕へ申し、この有名な龍田の社へ通ひなれて、いつとはなしに次第に深く信仰するやうになり、行末長く神の御惠み

○長月—九月。
○闇の夜の錦—古今集紀貫之の歌「見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり」に據つた。
○神南備の御室の岸や—拾遺集高間草春の歌—神なびの御室の岸や崩るらん龍田の川の水の濁れる—を引いた。神南備は今神南といふ。龍田の西南端で、三室山がその後にある。龍田川のこの邊を流るゝ所を御室の岸といつたのである。
○塵に交はる—和光同塵。神佛が徳光を和らげて世塵に交はり、衆生を濟度すること。
○すぐに御影も—正しく見ゆを御影にいひかけた。
○ここは常磐の—紅葉の色濃きを「ここ」と轉じて、紅葉に對して常磐といひ、永久に色が美しいとの意に用ゐた。
○誓ひも絶えぬ—誓ひは神の誓願利益をいふ。利益の絶えないことを水の絶えないことにかけて、瀧を出した。
○瀧祭—龍田明神の祭。この祭日、本曲には九月廿日あまりといつてゐるが、公事根源には四月七月の四日

祈るなり

シテ ツレ 下歌「頃は長月二十日あまり。紅葉も徒らにただ闇の夜の錦なり。上歌「神南備の。御室の岸や崩るらん。御室の岸や崩るらん。龍田の川の水の色は。濁るとも隔てじな塵に交はる神慮。すぐに御影ももみぢ葉の。ここは常磐の色はえて。誓ひも絶えぬ瀧祭。いただく神の、手向かないただく神の手向かな

「いただく神の」と謡ひながら、シテは眞中に、ツレは笛座前に行きて立つ。

ワキ立ちてシテに向ひ、

【三】

ワキ「いかにこれなる火の光について尋ね申すべき事の候

シテ「こなたの事にて候か何事にて候ぞ

ワキ「これはこの所始めて一見の者なり。寶山への道しるべして給はり候へ

をお祈りしてゐるのです」

と自己紹介をして、

老翁「今は九月の廿日あまりで、紅葉の盛りであるが、これを眺める人がなくては、たゞ闇の夜の錦のやうで、つまらないことだ。和歌には——

『神なびの御室の岸や崩るらん、龍田の川の水の濁れる』

（御室のあたりの岸が崩れたと見えて、龍田川の水がひどく濁つてゐる）

と詠まれてゐるが、たとひ龍田の水に濁つても、神の御光は愈清らかで、衆生利益の爲にこゝに御垂跡遊ばされたのだ。そのありがたい御心を示す證據には、この紅葉は常にいつまでも色が美しくて我々の崇めてゐるあらたかな瀧祭神への手向となつてゐるのだ」

と龍田山近くに着いた態。

【三】

臣下は二人が松明を持つて、こちらへ來たのを見て、

朝臣「もうし、その火の光を持つてゐる人に、一寸お尋ねしたいのですが」

老翁「私の事ですか、何の御用です」

朝臣「自分は始めてこの所を見物する者なのです。寶の山へ案内して下さい」

と見え、緣起には九月十三日とある。

○いただく神の手向―いただくは崇める意。色濃き紅葉が神への手向となるといふのである。

【三】

○火の光―松明の光。

○寶山―龍田山を指す。但し神皇正統記には「龍田も靈山近きところなれば」とあり、寶山は葛城山を指してゐるらしい。

○神さび―神々しく。

○殊勝―文字通り、殊に勝れてゐるとの意。

○寶の御矛―諸册二尊が日本國土御創成の際お持ちになつた天之瓊矛をいふ。

○天祖の詔―日本書紀に「天神謂二伊弉諾尊伊弉册尊一曰、有二豐葦原千五百秋瑞穗之地一、宜二汝行循一之、廼賜二天瓊矛一」とあるを指す。

○末明らかなる―諸册二尊以來行末長く御政道の正しい

シテ「易き間の御事。これこそ夜祭に參る者にて候へ。御道しるべ申し候べし。こなたへ御出で候へ

ワキ「あら嬉しややがて參らうずるにて候

シテ・ワキともに作物へ向き、二三足出で、ツレ作物へ松明をさし、

シテ「なうなうこれこそ寶山にて候へ

ワキ「承り及びたるより神さび殊勝にこそ候へ。又日本第一の寶の御矛を納めしは、この御山の事にて候か

シテ「なかなかの事この所の御事にて候

ワキ「さらばこの山の謂れを御物語り候へ

シテ「委しく語つて聞かせ申し候べし

といひて三人とも下に居る。

地クリ「抑も瀧祭の御神とは卽ち當社の御事なり。昔天祖の詔、末明らかなる御國とかや

老翁「お易い御用です。私たちは夜祭に參詣する者です、御案内申しませう。こちらへお出でなさい」

朝臣「あゝ嬉しい、早速參りませう」

臣下も老翁もやがて龍田山に着いた態で、

老翁「もうし、これが寶の御山です」

朝臣「噂に聞いたよりもなほ神々しくて、誠に結構な所です。それから又、日本第一の寶の、天瓊矛をお納めしたのは、このお山の事ですか」

老翁「さうです、この所です」

朝臣「それでは、この山の謂れを話して下さい」

老翁「委しくお話申しませう」

とくつろいで、

老翁「さて瀧祭の神と申すのは、このお社の事です。わが國は昔天祖が大詔を賜はつてよりこの方、行末長く御政道の正し

○伊弉諾伊弉册—わが國土及び山川草木などを創成遊ばされた夫婦神。國常立尊より數へて天神第七代目とす。
○國常立尊—天地開闢の最初にお生まれになつた神、即ち天神第一代とす。
○豐葦原千五百種の國—日本の古名豐葦原千五百秋瑞穗之國を略して、秋を種に誤つたのであらう。
○よく知るべし—よく治むべし。
○天祖—國常立尊、
○直なる道をあらためん—あらたむはしらべる意。
○天の浮橋—諾册二尊が高天原から出て、この國土を御創成の時、お立ちになつたといふ橋。
○天の逆矛—矛の先を下にし、石突を上にして、逆さまにしてお立てになつたといふ事から出た名。
○瀧祭の明神—龍田明神と御一體。委しくは解說に揭ぐ。

シテサシ『ここに第七代に當つて現れ給ふを。伊弉諾伊弉册と號す
地『時に國常立伊弉諾に託して宣はく。豐葦原千五百種の國あり。汝よく知るべしとて。則ち天の御矛を。授け給ふ

（居クセ）

地クセ『伊弉諾伊弉册は。天祖の御教へ。直なる道をあらためんと。天の浮橋に。二神佇み給ひて。この御矛を海中に。さしおろし給ひしより。御矛をあらためて。天の逆矛と名づけそめ。國富み民を治め得て。二神の始めより今の代までの寶なり。その後國土治まりて。御代平らかになりしかば。瀧祭の明神この御矛を預かりて。所も普しや。この御山に納めて寶の山と號すなり
シテ『抑も御矛の主たりし

い國なのです。この事を委しく申せば、天神第七代としてお現れになつた神を伊弉諾尊・伊弉册尊と申します。この時に天祖國常立尊が伊弉諾尊に詔して仰せられるのには、「この下界に豐葦原千五百秋瑞穗の國がある、お前がよくこれを治めるやうに」と、かう仰しやつて、天の御矛をお授けになりました。——

伊弉諾・伊弉册の二神は、天祖の御教に從つて、正しい政道を施さうと思し召し、天の浮橋にお立ちになつて、この御矛を海中にさし下しになつたので、それよりこの御矛の名を以前と改めて、天逆矛と名づけられました。そしてこの後國は富み民は服して、この二神より今の御代まで、ずつと國の寶となつてゐるのです。さて二神御降臨の後、國は治まり御代は泰平となつたので、瀧祭の明神がこの御矛をお預かりになつて・日本國中所も多い中で、特にこの御山に御矛を納められたので、それでこの御山を寶の山といふのです。さてこの御矛の守護主である、その名ま

○紅葉の八葉―紅葉の一つ一つの葉の端が八つに分れて尖つてゐることをいふ。
○矛の刃先―刃先と葉先と兼ねていふ。
○光さしおろす―光さすをさし下す矛にいひかけた。
○矛の露―諾册二神が天浮橋に立つて、矛で下をかきまはして、お引上げになつた時、矛先から垂つた滴をいふ。
○天地―矛の露、露雨、天地といひかけた。
○身は知らず―見は知らずといひかけた。
【四】○所を分きて―御矛のある所を特に見せ給へとの意。
○むつかし―うるさい。面倒な。
○千早ぶる―神の枕詞。紅葉衣の縁で、女官の装束「ちはや」を「千早ぶる」にいひかけた。
○颯々―風の音と鈴の音との形容。
○ていとう―瀧の音と太鼓の音との形容。
○木綿四手を―我なりといふを木綿にいひかけた。木綿四手は木綿(楮)で作つた布又は紙の幣。
○榊葉―神樂の曲名。榊は

地『名もいさぎよき瀧祭の。神の社はいづくぞと。問へば名を得し龍田山。紅葉の八葉も。即ち矛の刃先より。照らす日影や紅の光さしおろす矛の露。天地すなほなる事も。ここぞ寶身は知らず。國の寶の山高み。よくよく禮し給へや

【四】

地ロンギ『げにや龍田の神の名の。げにや龍田の神の名の。寶の御矛同じくは。所を分きて見せ給へ

シテ『むつかしの旅人や。影恥かしき龍田山の。紅葉衣の千早ぶる神の祭早めんと

地『颯々の鈴の聲(とシテ立ち)ていとうと打つ波の。鼓も同じ瀧祭の。神はわれなりと(ワキへ向き)。木綿四手を靡かし榊葉をうたひ夜に入りて。月の夜聲もすみやかに入ると見えて、失せにけり分け入ると見えて失せにけり

で清らかな瀧祭の神のお社は何處であるかといへば、それはこの名高い龍田山で、この山の紅葉は葉先までが、御矛の刃先から照る日影を受けてか、紅の色が殊に深いのです。わが國が安穩なのも御矛を海中にさし下して、お引上げになつた時、矛先から滴り垂れた露から始まるので、その寶がこの山に納められてあるのです。私はよくも知りませんが、この國の寶を納められた寶の山なのですから、よくよく禮拜なさいませ」

【四】

朝臣「誠にありがたい、この龍田の神のお守りになる寶の御矛の納められた所を、なるべくならば特にお見せ下さい」

老翁「うるさいことをいはれる人だ。この龍田山の紅葉のやうな美しい衣を着て、神のお祭を急ぎ行はうと、さら／＼と鈴を鳴らし、どん／＼と鼓を打つてゐる、祭の主、瀧祭の神は實は自分である」

といつて、幣を動かし『榊』の神樂を謠つて、夜も更けて、月の光も聲の聲も澄み渡る折柄、早くも神殿へ入るやうに見えて、消え失せてしまつた。

シテ老翁作物の山に隱れ[illegible]退場。

神前に供へるものであり、木綿四手も神樂の曲名にあるので、二つをつゞけたのである。
【間】

シテ一月の夜蟬もと右へ廻りて仕手柱先にて開き、作物へ中入。ツレは幕に入る。

重ワキヅレ、ワキの前に出で、

ワキヅレ「御前に候

ワキ「山下の者を呼びて來り候へ

ワキヅレ「畏つて候

といひて仕手柱際へ出で橋懸へ向き、

ワキヅレ「山下の者の渡り候か

狂言山下の者、著附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて橋懸一の松に立ち、

狂言「山下の者と御尋ねある。罷り出で承らばやと存ずる。(ワキヅレに向ひ)山下の者と御尋ねは。いかやうなる御用にて候ぞ

ワキヅレ「ちと御尋ねありたき事の候。こなたへ來り候へ

狂言「畏つて候

ワキヅレ・狂言、ワキの前に出で下に居て、

ワキヅレ「山下の者を召して來りて候

狂言「山下の者御前に候(ワキヅレもとの座につく)

ワキ「御身は山下の人にて御座候へば。當社の御謂れ御存じにて候べし。語つて聞かされ候へ

狂言「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこの所には住居仕り候へども。左樣の事なしくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すもいかゞ

○本地寂光の都より―神の本體である佛が極樂淨土から、神に化現してこの國土に垂跡し給ふ意。

○天に五行の神まします―神皇正統記第一に見ゆ〔淡路〕參照。

にて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「やがて語られ候へ

狂言「さる程に當社明神と申すは。天下に隱れもなき御事にて候。その子細は。本地寂光の都より假に光を和らげ。この國に跡を垂れ君を守り御申し候。扨又あれなる山は天の逆矛を納めたる御山にて候。伊弉諾伊弉冊の尊天の浮橋の上にて御矛を振り下し給ひ。青海原を探し給ひ。その露の滴り固まつて一島となる。これ即ち淡路と名づけ。それより餘の國々も作り給ひ。めでたき御國となり申す。この矛が始まりにて候。又伊弉諾伊弉冊の尊と申すは。天に五行の神まします。木火土の精伊弉諾となり給へば。金水伊弉冊と現じ給へり。それより陰陽分ち萬物出生。國土豐かに民榮え。めでたき御國となり申し候。即ち當社はかの矛の守護神なれば。隱れなき靈神にて候。さて我等の承り及びたるはかくの如くにて御座候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。これは當今に仕へ申す臣下にて候。當社に初めて參詣申し候處。御身以前に老人と若き男來られ候程に。寶山への道しるべ頼み候へば。この所に同道致され候程に。寶の御矛の御事尋ねて候へば。方々御物語の如く懇に語りて後。瀧祭の神はわれなりといひもあへず。社壇に入ると見て姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。さては都よりの御下向を明神嬉しく思し召し。假に現れ御言葉を交はし給ふと存じ候間。暫く御逗留あつて。重ねて奇特を御覽あれかしと存じ候

ワキ「我等もさやうに存じ候間。愈〻信心を致し。重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「御逗留にて候はば重ねて御用仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

【五】
○柞—紅葉する木の名。
○かたしきて—片方の袖を下に敷いて寢ること。

【六】
○樂にひかれて—樂に誘はれて。この類句〔氷室〕にも見ゆ。
○古鳥蘇—高麗樂の曲名。
○ゆるぐ—動き出すこと。

【七】
○和光に出でて—本地瀧祭の神が衆生利益の爲に德光を和らげて、龍田明神として垂跡し給ふ意。

といひて狂言は引く。

【五】
ワキ ワキヅレ 上歌〔待謠〕「御山の。柞の紅葉かたしきて。柞の紅葉かたしきて。ここに假寢の枕より。音樂聞え花降りて。異香薰ずる、不思議さよ異香薰ずる不思議さよ

【六】
出端の囃子にて、後ヅレ天女、面連面・鬘・鬘帶・黑垂・天冠・襟赤・着附摺箔・紫長絹・緋大口・腰帶・扇の裝束にて出で、

地「樂にひかれて古鳥蘇の。舞の袖こそ。ゆるぐなれ

〔天女舞〕
を舞ひ、笛座前に坐す。

【七】
後ジテ瀧祭神、面小べし見・赤頭・唐冠・金襴鉢卷・襟紺・着附厚板・袷狩衣・半切・腰帶・扇の裝束にて矛を持ち、作物の中に床几にかゝり居り、

後ジテ「抑もこれは。天の御矛を守護し奉る。瀧祭の神。和光に出でて龍田の神

地「或は天つ御空の御矛

【五】
ワキ「この御山の紅葉した柞の木蔭に、片袖を下に敷いて、うつら〳〵と居眠つてゐると、このあたりに音樂が聞え、花が降つて、實によい香がする。實に不思議だ」

と夢現に靈威をうける態。

【六】
後ヅレ天女、臣下の夢に現れた態で登場。

天女「神樂の面白さに誘はれて、古鳥蘇の舞を舞ふのだ」

〔天女舞〕
を演ずる。

【七】
後ジテ瀧祭神、御矛を持つて作物の寶の山にあり

神「自分は天の御矛を守護し奉る瀧祭の神で、衆生利益の爲にこの地に垂跡しては龍田明神といふのである。或時は天の御空にあり、また今はこの寶山倶利迦羅嶽にある御矛を、皆の者よく崇め奉れ。

○倶利迦羅御嶽―龍田山の別名。倶利迦羅のこと後にいふ。
○驚かし奉れ―神の御耳を驚かして願ひ事を申すこと。

○本覺眞如の都―佛の本郷極樂淨土をいふ。

○南無や歸命頂禮―南無は梵語Namas、歸命又は頂禮はその漢譯。同じ意味を繰返したのである。
○大日覺王如來―覺王は如來と同義。大日如來は密教の本尊で、大光明遍照ともいふ。こゝには龍田明神の本地とするのである。

シテ『又は寶山倶利迦羅御嶽
地『戴きまつれや
シテ『驚かし奉れや。瀧祭
地『拍手響く山の雲霧晴れ行く日の。光の如くに。天の御矛は、現れたり

と後見作物の引廻しを下す。シテ床几にかゝりたるまゝ祝詞の囃子にて、

シテ『抑も大日本國といつぱ神國たり。神は本覺眞如の都を出でて。和光同塵の御形。最も佛法流布の國たるべしやな。ありがたや
地『南無や歸命頂禮。大日覺王如來
シテ『昔伊弉諾伊弉冊の尊。この御矛を携へて。天の浮橋を。踏み渡り給ひ
地『則ち御矛をさしおろし（シテ作物より出で）。則ち御矛をさしおろし給ひ。青海原を。かき分けかき分け探り給へば（と矛にて探る心）。矛のしただり凝

よくお祈り申せ」と瀧祭に人々の拍手の響き渡る折柄、山の雲霧が晴れて來て、日の光のさし出るがやうに、天の御矛が現れた。
神官「そもそも大日本國は神國であつて、神は極樂淨土を出て、衆生利益の爲にこの國土に垂跡せられたもので、從つて殊に佛法のよく行はれる國である。實にありがたいことだ」
朝臣「おゝありがたい大日如來様」
神「昔伊弉諾・伊弉冊の尊がこの御矛を持つて、天の浮橋をお渡りになり、御矛を下へさし下して、大海をかきまわして、お探りになると、御矛についた雫が凝り固まつて、國となつた。――

○大八洲の國―八島の名は記紀等說を異にしてゐる。神皇正統記には、淡路、四國、筑紫、壹岐、對馬、隱岐、佐渡、秋津洲とす。
○三才―才は物の土臺、要素をいふ。天地人の三要素。
○さながら―すべて、一面に。
【八】
○荒島―出來たまゝで、よく整はない島。
○手風―矛を持つ手から起る風。
○はやて―颶風。
○足引の―この語が山の枕詞となつた解釋として、當時行はれてゐた附會說、太平記卷二十五には「一葦原生茂りて所もなかりしかば、此葦を引捨て給ふに、葦を置きたる所は山となり、引捨てたる跡は河となる」とある。
○石かね―石と金。舊註「岩が根」とあるが、それでは意が通じない。
○あらかねの―荒島の金といふ意であらう。これも附會說である。
○俱利迦羅明王―三摩耶形

り固まつて（正面へ出でゝ）。國となれり
シテ『まづ淡路島
地』紀の國伊勢志摩（左へ廻りゝ）。筑紫四國。總じて八つの國となつて。大八洲の國と名づけ。天地人の三才となる事も。この矛の徳なりあらありがたや
〔舞働〕
引續き次の謠に合せて舞ふ。
【八】
シテ『さて國々は。荒島なれば
地』さて國々は、荒島なれば、さながら嶮しき葦原なりしを。矛の手風。はやてとなつて。葦原をなぎ拂ひ引き捨て置けば。山となりぬ。足引の山といひ。土はさながら石かねなりしを。矛の刃先にあたり碎けば、平らかなるを。あらかねの土といひ。その外東西南北。十方を治め。惡魔

その第一が淡路島で、次に紀國・伊勢志摩・筑紫・四國など合はせて八つの國が出來た。これを大八洲國と名づけ、かうして天地人の三大要素が出來たのも、この御矛の御蔭である。實にありがたいことだ」
〔舞働〕
に御矛を以て二神降臨の樣を示す。
【八】
神靈『さて、かうして出來た國は、まだよく整はない荒島で、あたり一面嶮しい葦原であつたが、御矛をお振りになると、その御手から起る風が疾風となつて、葦原を薙ぎ拂ひ引捨てた。そしてその葦を捨てて置くと山になつた。これを『足（葦）引の山』といふのである。それから又、土は全く岩や金ばかりであつたが、御矛の刃先にあたつて碎けたので、平らかな地となつた。それで、これを『荒金の土』といふのである。その外この御矛を以て東西南北十方世界をお治めになり、惡魔

相を顯した不動明王をいふ不動尊も劍を持ち、龍田明神も御矛を守護せられるので、御一體と見做したのである。同神皇正統記にも御矛の事を記して、「龗山にとまりて不動のしるしとなりけむ事や正說なるべからむ」
○毎日めぐるや　明神が御矛守護の爲に毎日見廻りする意を、日輪が東から西へ廻ることにかけていふ。
○寶の山に―日本の寶、寶の山、山に立つ、龍田といひかけた。

を退け豐葦原の。國治まりて。御矛を守りの倶利迦羅明王。この寶山に（矛を作物の臺へのせ）。納め奉り毎日めぐるや日の本の。寶の山に龍田の神は。寶の山に。龍田の神は。御矛を守りの。神體なり

と常座にて留拍子を踏む。

を退治せられたのであつて、かくして國土の治まつた後は、御矛を守護する倶利迦羅明王の自分は、御矛をこの寶の山に納め奉つて、毎日見廻りをしてゐるので即ちこの寶の山の龍田の神は御矛を守護する神體なのである」

といつて退場。

〔考異〕

古謠本（元祿二年本）

【一】ワキ「抑もこれは當今（元奈良の御門）に仕へ奉る……　【三】ワキ「これはこの所……一見の者なり（元にて候）……シテ「易き間の……こなたへ御出で（元入）候へ……シテ「委しく語つて聞かせ申し候べし（元ナシ）。地クリ「抑も瀧神の御神と（元申）は……地「時に國常立……豐葦原（元に）千五百……地クセ「伊弉諾……民を（元も）治め得て……この御（元ナシ）矛を預りて……　【六】地「樂にひかれて古鳥蘇の舞の袖こそゆるぐなれ（元ナシ）

鷺(さぎ)　観(寳　剛　喜)

解説

【能柄】四番目　一段劇能

【人物】**ツレ**　天皇、**ワキ**　藏人、**ワキツレ**　大臣、**ワキツレ**　同(二人)、**ワキツレ**　輿舁(二人)
シテ　鷺

【所】京都　神泉苑

【時】夏(六月)

【異稱】古く「五位鷺」といつた。

【作者】二百十番謡目録には世阿彌の作としてゐるが、能本作者註文には作者不明の部に入れてゐる。他に古記錄は見當らない。

【梗概】帝が神泉苑に行幸遊ばした時、洲崎にゐる鷺を叡覽になつて、あれを捕へよと仰せられた。仰せを奉じて藏人がそれを捕へようとすると、鷺はぱつと飛び上つたので、藏人は「汝聞けや勅諚ぞ」と呼ばはつた。すると、鷺は飛び下りて藏人の前に伏した。帝は叡感の餘り藏人・鷺ともに五位に叙せられた。鷺は喜んで舞を舞つた。

【出典】このことは、平家物語巻五「朝敵ぞろへの事」に、

延喜の帝神泉苑へ行幸なつて、池の汀に鷺のゐたりけるを、六位を召して「あの鷺取つて參れ」と仰せければ、如何か捕らるべきとは思へども、綸言なれば歩み向ふ。鷺羽づくろひて立たんとす。「宣旨ぞ」と仰すれば、平んで飛び去らず。即ちこれを捕つて參らせたりければ、「汝が宣旨に從ひて參りたるこそ神妙なれ、やがて五位になせ」とて、鷺を五位にぞなされける。「今日より後鷺の中の王たるべし」といふ御札を親ら遊ばいて、首につけてぞ放たせ給ふ。全く是は鷺の御料にあらず、只王威の程を知し召されんが爲なり。

とあるに據つたのである。――源平盛衰記巻十七「藏人取鷺事」にも同樣の記事があるが、五位に叙せられた由は記してゐない。

【概評】本曲は心なき禽獸と雖も君の御威德には服するといふ觀言を述べたもので、その主題に瀟洒たる鷺を捉へたことは、能作者のよい着眼といふべきであらう。たゞその典據が能作者の金科玉條とする平家物語である爲か、現在物劇能の形を採つたことは失敗で、藏人と鷺とでは、科白を以て劇的發展を計ることが出來ず、戲曲といふよりは語り物と見るべきものになつてしまつた。むしろ他の精靈物のやうに、夢幻的な複式能にした方がよかつたと思ふ。

【序】〇延喜の帝＝醍醐天皇。延喜は天皇御在位中の年號。

【一】

【序】　狂言官人、侍烏帽子・着附段熨斗目。掛素袍・括袴・腰帶・扇・小刀の裝束にて名乘座へ出で、

狂言「口開「かやうに候者は。延喜の帝に仕へ申す者にて候。誠にこの君賢王にてましますにより、吹く風枝を鳴らさず民戸さしをせず。萬民豐かなる御代にて候。さるによつて四季折々の御遊びさまざまの御座候。卽ち今日は神泉苑の池の邊へ御幸あつて。御遊あるべきとの御事なり。皆々その分心得候へ。〳〵（といひて引く）

【一】

一聲の囃子にて、ツレ天皇、初冠・襟白・着附縫箔・單狩衣・指貫・込大口・腰帶・扇の裝束、ワキ藏人、侍烏帽子・着附段厚板・掛直垂・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ大臣三人、洞烏帽子・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ輿昇二人、着附厚板・白大口・腰帶・扇の裝束にて、ツレ、輿昇に輿をさゝせ、その次に大臣、最後にワキの順にて舞臺に入

【一】

舞臺は初め御幸、ツレ天皇、ワキ藏人、ワキヅレ大臣三人を随へ、ワキヅレ輿昇の順に並んで登場。これより御幸に出御の體。

○久方の―天の枕詞。轉じて、月、空、光などの枕詞に用ゐる。
○月の都―國の都をたゝへていふ。月の緣で、明らかな政道を月光によそへて綴つた。
○萬機の政―國政。機は樞機の意。
○御遊―詩歌管絃の遊をいふ。
○青陽―春の異名。詩經に「春爲二青陽一」
○日數も積る―日數の積つて冬となる意を、積る雪にいひかけた。
○寒暑時を違へざれば―天下太平の瑞相。
○時を得て―時節の宜しきを得ることと、御遊の盛んなこととを兼ねていふ。
○夕涼み　夏ぞといふといひかけた。
○松の此方の道芝を―一般の人民が路傍に立つて、大宮人を羨む樣をいふ。
○誰踏みならし通ふらん―風雅集法源禪師の歌「ふりにける雪のみ山は跡もなし誰踏みわけて道を知るら ん」を引き、雪の緣で、み雪と同音の御幸を出した。

り、正面に並びて、

ワキ ワキヅレ「一聲「久方の。月の都の明らけき。光も君の。惠みかな

ワキヅレサシ「それ明君の御代のしるし。萬機の政すなほにして。四季折々の御遊までも。捨て給はざる叡慮とかや

ツレ「まづ青陽の春になれば

ワキヅレ「所々の花見の御幸

ツレ「秋は時雨の紅葉狩

ワキヅレ「日數も積る雪見の行幸

ツレ「寒暑時を違へざれば

ワキヅレ「御遊の折も

ツレ「時を得て

ワキ ワキヅレ「今は夏ぞと夕涼み。今は夏ぞと夕涼み。松の此方の道芝を。誰踏みならし通ふらんこれ

御臣一同「御政道が明らかで、都の空まで光り輝くのは、全く帝の御惠みによるのである」

と先づ君德を謳歌し、

大臣「聖天子が御代を治め給ふありがたさには、すべての國政を滯りなく統べさせられ、四季折々の御遊をも、その季節に適へて遊ばす、まことにありがたい大御心である」

天皇「まづ春になると……」

大臣「所々の花見に行幸遊ばされ……」

天皇「秋には時雨に色づいた紅葉の見物に出掛けるし……」

大臣「月日も經つて、冬になれば、雪見に行幸遊ばされ……」

天皇「太平の瑞相で、寒さ暑さが季節通りに來るので……」

大臣「御遊を遊ばす時も……」

天皇「いつも季節に適つた時で……」

御臣一同「今は丁度夏であるので、夕涼を遊ばすと、松並木のこちら側の路傍には、拜觀する者が多勢出てゐるのである。かう

○直なる道―平坦な道路に正しい政道をかけていふ。○雲居の大内や―雲居も大内も皇居のこと。○神泉苑―二條城の南にあつた。天皇御遊覽の爲の地であるから、これも皇居の一部であるとの意で、大内やの句を冠す。

【三】○孤島峙つて―孤島は神泉苑の中島を指す。この句詩を引いたもののやうであるが、出所が分らない。○湖水の波の上―神泉苑を琵琶湖に、中島を竹生島に擬へたのである。○三千世界は眼の前に―都良香が竹生島に詣でた時の詩、「三千世界眼前盡、十二因縁心裏空」（和漢朗詠集に出づ）を引いた。三千世界は一切の世界、十二因縁は過去現在未來に亘る一切の因果關係をいふ。○鷺のゐる池の汀に松ふりて―風雅集藤原定家の歌。この下句―都の外の心地こそすれ―○詩歌の舟を浮かめ―中古天皇の御遊に、詩・歌・管絃の三船を泛べて、技を競はせ給うた故事によつていふ○絲竹―絃と管。音樂。○聲あやをなす―管絃の船といひかけて、樂の聲調に

は妙なる御幸とて。小車の。直なる道を廻らすも同じ雲居の大内や。神泉苑に着きにけり神泉苑に着きにけり

「神泉苑に着きにけり」と謠ひながら一同脇座の方へ行き、ツレは脇座にて床几にかゝり、大臣一同は地謠座前に、ワキは笛座の上に坐す。（輿舁は引く）

【三】

ツレ正面の方に向き、

ツレサシ「面白や孤島峙つて波悠々たるよそほひ。誠に湖水の波の上。三千世界は眼の前に盡きぬ。十二因縁は心の裏に空し。げに面白きけしきかな

地上歌「鷺のゐる。池の汀に松ふりて。都にも似ぬ。住居はおのづからげにめづらかに面白や。或は詩歌の舟を浮かめ。又は絲竹の。聲あやをなす曲水の。手まづ遮る盃も浮かむなり。あら面白の池水やな。あら面白の池

したありがたい行幸なので、御車も平坦な道を輕々と走つてゐるうちにこゝも皇居の一つである神泉苑にお着きになつた。――

と言つてゐるうちに、神泉苑に御着きの態で、[illegible]は神泉苑内にゐる。

【三】

天皇「實に面白い景色だ。御池には中島があつて、波の悠々とゆれてゐる趣は、全く琵琶湖上を見てゐるやうだ。――「三千世界は眼の前に盡きぬ。十二因縁は心の裏に空し」（廣々とした世界が眼前に展開して、一切の世界の事象を忘れてしまふ）と詩に詠ぜられた通り、實に面白い景色だ。――「鷺のゐる池の汀に松ふりて、都の外の心地こそすれ」（鷺の遊び戯れてゐる池の水際には、松樹が立つて、都の外にゐるやうな氣持がする）といふ歌そのまゝな、全く都離れのした趣で、實にめづらしい面白いことだ。この御池で、詩・歌・管絃の三船を泛べて御遊を催し、妙なる樂が奏されるのだ。曲水宴にはこの池から流れて來る水に浮かべた盃をとつて、詩を作るのだ。おゝ盃といへば、盃のやうな月が水に映つてゐる、實に面白い池の景色だ」

移り、聲調の美しい曲を曲水にいひかけた。
○曲水—曲水宴。三月三日の節會に、御苑の曲つて流れる小川に盃を浮かべ、盃が自分の前に流れて來ると取上げて、詩歌を詠んで酒を飲む御宴。
○手まづ遮る—和漢朗詠集曲水宴を詠んだ菅原雅規の詩句「巖レ石遲來心竊待、牽レ流遄過手先遮」を引いた。
○盃—曲水宴を思出して、水上の月を盃に喩へたのである。
【三】
○洲崎—池にさし出た洲。
○藏人—天子の御側近く仕へ奉る官人。位は普通六位。

水や

【三】シテ鷺、直面・白垂・天冠（鷺戴）・金緞鉢卷・襟白・着附白綾・白綾壺折・白大口・腰帶・扇の裝束にて、地上歌「或は詩歌の舟」のあたりにて幕を出で、靜かに進みて一の松に留まる。

ツレこれを見やりて重ワキヅレに向ひ、

ツレ「いかに誰かある

重ワキヅレ、ツレに辭儀して、

ワキヅレ「御前に候

ツレ「あの洲崎の鷺をりから面白う候。誰にても取りて參れと申し候へ

ワキヅレ「畏つて候

もとの座に歸りて立ちワキに向ひ、

ワキヅレ「いかに藏人

ワキ眞中に出で辭儀して、

ワキ「御前に候

ワキヅレ「あの洲崎の鷺をりから面白う思し召され候間。取りて參らせよとの宣旨にて候

ワキ「宣旨畏つて承り候さりながら。（シテへ向き）か

と舞臺の景色を賞歎する。

【三】その間にシテ鷺が登場する。天皇これを叡覽あつて、

天皇「誰か近う」

大臣「はいお前に居ります」

天皇「あの洲崎に居る鷺が面白い。誰でもよいから取つて來いと申せ」

大臣「畏りました」

藏人に向ひ、

大臣「藏人、あの洲崎の鷺を面白く思し召したので、取つて參れとの仰せである」

藏人「仰せ謹んで承りました。しかしあれ

○普天の下―詩經小雅に「普天之下莫レ非二王土一、率土之濱莫レ非二王臣一」

○手を空しうして―なす術がなくて。

れは鳥類飛行の翅。（正面に向き）いかがはせんと休らへば

ワキヅレ「よしやいづくも普天の下。率土のうちは王地ぞと

ワキ「思ふ心を便りにて（と立ち）

ワキヅレ「次第次第に（といひて坐す）

ワキ「蘆間の蔭に（と橋懸一の松へ行き）

地「狙ひより狙ひよりて。岩間の陰より取らんとすれば（ワキシテに手を掛けかゝる）。この鷺驚き羽風を立てて（とシテ幕際に行き）。ばつとあがれば力なく。手を空しうして。仰ぎつつ走り行きて。汝よ聞け勅諚ぞや（とワキ扇にてシテを招き）。勅諚ぞと。呼ばはりかくれば。この鷺たち歸つてもとの方に飛び下り（シテワキの前に來て下に居る）。羽を垂れ地に伏せば。抱きとり叡覽に入れ（ワキシテを後よりかゝへて舞

は飛行自在の翅を持つた鳥でございますから、如何致したものでございませう」と暫く躊躇してゐると、

大臣「いや大丈夫だ、この地といふ地、國の端々まで皆王地―、王威に服さないものはないから……」

藏人「それを頼みにしまして……」と、次第々々に蘆間の蔭に狙ひよつて岩間の陰から取らうとすると、この鷺は驚いて、羽音を立てて、ぱつと飛び上つたので、藏人は如何ともすることが出來ず、手の出しやうもなくて、たゞ鷺の飛んで行く空を仰いで走り寄り、

藏人「鷺よ、よく聞け、帝の仰せであるぞ」と呼びかけると、この鷺は立ち歸つて、もとの所に飛び下り、翼を垂れ地に伏した。藏人はこれを抱きとつて、帝の叡覽に供へたので、皆の者が、「實にわが君の御威德はありがたいことだ、頼もしいことだ」と感じ入つた。誠に佛法王法の正しく行はれるありがたい大

【四】

○さぎの藏人—鷺を捕へた藏人。或は前をさぎと濁つたのでなからうか。

○爵を賜ひ—五位に叙せられることを叙爵といふ。爵は即ち五位のこと。藏人は四年の任期を經て五位に叙せられるのが通則である。

○共になさるる—藏人も鷺もともに五位に叙せられるのである。

○松も磯馴るる—鷺も松も御苑の洲崎に樂しみ馴れてゐること。

霊に入り）。げに忝き王威の恵み（シテ眞中に、ワキその後に坐し）。ありがたや頼もしやと。皆人感じけり（ワキもとの座に歸り坐す）。げにや佛法王法の。かしこき時の例とて。飛ぶ鳥までも地に落ちて。叡慮に叶ふ、ありがたや叡慮に叶ふありがたや

【四】

地『猶々君の御恵み。仰ぐ心もいやましに。御酒を勸めて諸人の。舞樂を奏し面々に。さぎの藏人（ワキシテの右へ出てツレへ辭儀）。召し出だされて様々の。御感のあまり爵を賜び（ワキもとの座に着き）。ともになさるる五位の鷺。さも嬉しげに立ち舞ふや

とシテ立ちて仕手柱際へ行き、

シテ『洲崎の鷺の。羽を垂れて

地『松も磯馴るる。氣色かな

〔舞〕（亂）

シテ『畏き恵みは。君道の（とツレへ向き）

御代なので、飛ぶ鳥までが地に落ちて、帝の大御心に適へ奉るといふのは、實にありがたいことである。

【四】

かうして、大君の大御恵を仰ぎ奉る心は愈深くなり、めでたさの餘り、皆々酒を勸めて舞樂を奏するのである。帝にも叡感の餘り、鷺を捕へた藏人を召し出しになつて、五位の位を賜はり、鷺にも亦五位を授けられると、鷺にさも嬉しさうに舞を舞ふのである。

藩——

「洲崎の鷺の羽を垂れて、松も磯馴るゝ氣色かな」

（洲崎の鷺も大君の御恵澤に狎し、羽を垂れ、庭の松も大平の御代を樂しんでゐる、まことにめでたい趣である）と謠ひ、

〔舞〕

を舞ひ、

【五】 ○忝き宣命―五位に敍せられる宣命をいふ。

地「畏き恵みは。君道の。四海に翔る。翅まで。靡かぬ方も。なかりければ。まして鳥類畜類も（シテ眞中にてツレに向き坐し）。王威の恩德のがれぬ身ぞとて。勅に從ふこの鷺は。神妙神妙放せや放せと重ねて宣旨を下されければ（ワキ、ツレに辭儀）。げに忝き宣命を含めて（とワキ立ちシテを放つ形）放せばこの鷺。心嬉しく飛びあがり（シテ橋懸へ行き）。心嬉しく飛びあがりて。行方も知らずぞなりにける

とシテ三の松にて留拍子を踏む。ツレ以下登場の時と同じ順にて幕に入る。

【五】 鷺「わが大君のありがたい大御惠は、國の端々まで、空を翔る鳥にまでも、遍く賜はるのでございますから、人間は勿論のこと、鳥類畜類までも、大君の御恩德を蒙らないものはございません」といふと、天皇「このやうに勅命に從ふのは、實に感心だ、放してやれ」と繰返して仰せ出されたので、藏人が鷺に五位の位を賜つたありがたい宣命をいひ聞かせて、放してやると、この鷺はさも嬉しげに飛び上つて、どこへやら行つてしまつた。

シテ鷺、飛び去る態で退場。

〔考異〕

諸流（觀寶剛喜）

著しい異同はない。

古謠本（貞享三年本）

【二】 地上歌「鷺のゐる……松ふりて池の汀に松ふりて（貞立てく）……地「狙ひより……仰ぎつつ走り行き（貞あゆみ寄）て……抱きとり龍顏に入れ（貞かけ）……叡慮に叶ふ（貞をあふぐ）ありがたや 【三】 ツレ「あの洲崎の……誰にても（貞ナシ）取りて參れと申し（貞らせ）候へ 【四】 地「猶々君の……仰ぐ心もいやましに（貞みちみてる）……諸人の舞（貞き）樂を奏し……シテ「畏き恵みは君道（貞てう）の。地「畏き恵みは君道の（貞く）

櫻川

觀（寶 春 剛 喜）

解說

【能柄】 四番目 二段劇能

【人物】 ワキツレ（男）人商人、前シテ 櫻子の母、子方 櫻子、ワキ 磯邊寺住僧、ワキツレ 同從僧（二人）、ワキツレ 里人、後シテ 櫻子の母（狂女）

【所】 第一段 日向國 櫻の馬場
第二段 常陸國 櫻川

【時】 春（三月）

【作者】 能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作といひ、世子六十以後申樂談儀にもこの曲名が見えてゐる。言繼卿記に天文元年四月三十日本曲演能のことが見えてゐる。

【梗概】 日向國櫻の馬場の櫻子は、母のみじめな生活を見かねて、東國から來た人商人に身を賣り、その身代金を殘して、國を立ち去つた。母は人商人に託したわが子の遺書を見て、驚き悲しみ、狂氣のやうになつてその跡を追つた。今はそれから三年經つ。櫻子は常陸國磯邊寺に弟子入りをしてゐて、今日しも櫻川の花見に伴はれて行つた。そこへ抄ひ網を持つて絶えず散る花を抄つてゐる狂女が出て

來た。寺僧はこの狂女に物狂を演ぜしめて、櫻子の母であることを知り、母子を引き合はせた。母子は喜んで、ともに佛道に入る。

【出典】母子別離の世話巷說を取扱つたもので、典據と見るべきものはない。常陸國磯部村の稻村神社に櫻兒物語があり、その序文が謠曲評釋に掲載せられ、また同社藏の古文書にも、

後花園帝の永享六戊午の年の春、五十戸神主祐行鎌倉に參りて、將軍持氏公に櫻兒物語一部を奉る。之を京將軍の同朋觀世音阿彌に命じて、櫻川謠曲を作らしむ。

とあるさうであるが、本曲は音阿彌以前、世阿彌の作で、この物語は謠曲以後に出來たものである。

【概評】母子別離の悲哀を描いた狂女物には、本曲の外に「三井寺」「隅田川」などがあり、いづれも名所と結びつけて、能作者に所謂「更に本說もなき事を新作にして、名所舊跡の縁に作りなして、一座見風の曲感」をなしてゐる。本曲と形式内容ともに相似てゐるのは、「三井寺」であつて、一は佛縁に頼つて月夜の鐘を文のあやとし、これは神名に頼つて櫻の花を曲の彩りとしてゐる。ともに物狂を演じた後に再會するのであるが、その物狂に本曲がたゞ「櫻盡し」を述べ立てるのは「三井寺」の狂女が理窟を說くよりも優雅でよい。たゞ本曲の第二段の初めに、ワキが「おことの國里はいづくの人ぞ」と尋ねて、シテに委しく身上を語らせて置きながら、物狂の後、ロンギに「言の葉聞けば不思議やな、もしも筑紫の人やらん」と尋ねてゐるのは、重複で煩はしい。むしろ初めの一齣を省いた方がよかつたと思ふ。

第一段

【一】舞臺は日向國櫻の川場で、ワキヅレ人商人登場。

人商人「私は東國の方から出て來た、人の子を賣り買ひする者です。私は永らく都に居りましたが、この度は九州日向國に下つて來たのです。そして昨日の夕暮に小さな子を買ひ取りました。ところで、その子が「この手紙と身を賣つた代金と

【一】ワキヅレ（男）人商人、着附熨斗目・素袍上下・扇・小刀の裝束にて文を懷中して名乘座に出で、

男「かやうに候者は、東國方の人商人にて候。われ久しく都に候ひしが、この度は筑紫日向に罷り下りて候。又昨日の暮ほどに幼き人を買ひ取りて候。かの人申され候は。この文と身の代と

【一】
○人商人—人の子を賣買する者。
○身の代—身を賣つた代金

○櫻の馬場―全曲を櫻花で粧ふ爲に、日向國の地名として假作したもの。
○櫻子―右同樣の目的で假作した兒の名。

【二】

○代物―代金。
○かまへて――きつと。確かに。
○見うずる―見んとするの略、見ようと思ふ。

を。櫻の馬場の西にて櫻子の母と尋ねて。確かに屆けよと仰せ候程に。唯今櫻子の母の方へと急ぎ候

といひて橋懸へ出で、一の松にて、

男「このあたりにてありげに候。まづまづ案内を申さばやと存じ候

幕に向ひ、

【二】

男「いかに案内申し候。櫻子の母の渡り候か

シテ櫻子の母、面深井・鬘・鬘帶・摺淺黃・着附摺箔・無色唐織の裝束にて橋懸三の松へ出で、

シテ「誰にて渡り候ぞ

男「さん候櫻子の御方より御文の候(と文を懷より出し)。又この代物を確かに屆け申せと仰せ候程に。これまで持ちて參りて候。かまへて確かに屆け申すにて候

と文をシテに渡す。

シテ「あら思ひよらずや。まづまづ文を見うずる

を、櫻の馬場の西で、櫻子の母と尋ねて、確かに渡してくれ」と、かういはれるので、唯今急いで櫻子の母の家へ行くところです」

と見物人に自己紹介をして事件の發展を豫告し、やがて櫻子の母の家に着いた態で、

人商人「この邊らしい。まづ尋ねて見ませう」

と幕に向ひ、

【二】

人商人「もうしお尋ねします。櫻子の母御がお出でですか」

橋懸が櫻子の母の家の態で、こゝで櫻子の母登場。

母「どなたでございます」

人商人「はい櫻子樣からの御手紙でございます。又この代金を確かに屆けてくれと仰しやつたので、こゝへ持つて參りました。確かにお屆け申しますよ」

と手紙と代金とを母に渡して、やがて退場。

母はその手紙を手にして、

母「まあ思ひがけないことだ」とにかく手

○さてもさても―以下「東の方へ下り候」まで櫻子の手紙の文。

○今の人―人商人を指す。

○これを出離の―以下「名殘こそ惜しう候へ」まで手紙の續き。出離は迷妄の世界を離れること。

○御樣をもかへ―髪を剃つて出家すること。

○伏屋の草の戸―伏屋は倒れかゝりさうなむさくるしい家。草の戸は粗末な戸。獨り伏すを伏屋に、戸の開くを明かし暮らしにいひかけた。

○木華開耶姫―大山祇神の女、彦火瓊々杵尊の后、彦火々出見尊の御母。木花は櫻の意で、これもやはり櫻花の緣で出したのであるが實際にも日向國宮崎郡木花に木花神社があり、木華開耶姫を祀る。

にて候

と文を開き、（ワキヅレ切戸より入る、）

シテ『さてもさてもこの年月の御有樣。見るもあまりの悲しさに。「人商人に身を賣りて。東の方へ下り候。（正面の方に向き）なうその子は賣るまじき子にて候ものを。や。あら悲しや。はや今の人も行き方知らずなりて候はいかに。（文を見て）「これを出離の緣として。御樣をもかへ給ふべし。唯返す返すも御名殘こそ惜しう候へ

地下歌『名殘惜しくは何しにか添はで母には別るらん（としをり、文を疊みて懐中し）。上歌『ひとり伏屋の草の戸の。ひとり伏屋の草の戸の。明かし暮らして、憂き時も子を見ればこそ慰むに。さりとてはわが頼む（と一の松へ出で）。神も木華開耶姫の。御氏子なるものを櫻子とめてたび給へ（と正面に向き

紙を見ませう。——

『「さてもこの永い年月の間の母上の御有樣、あまり悲しくて、もつと見てゐられないので、人商人に身を賣つて、東の方へ參ります……」

紙を讀みさして）

もうしその子は賣つてはならない子ですのに……」

（と人商人を呼びかけたが、既にその姿が見えないので、）

母「あゝ悲しい、もはや今の人もどこへ行つたやら分らなくなつてしまつた、困つたことだ。——

（また手紙に目をとめて、）

『……これを佛道に入る機緣として、どうぞ御出家下さいませ。たゞ返すゞゞも御名殘惜しう存じます』——

（讀み終り、）

名殘が惜しいなら、何故一所にゐないで、この母に別れてしまつたのだ。この粗末な家に明かし暮らして、辛い思ひをしてゐる時でも、わが子を見ればこそ慰めともなるのに。……あゝ、あんまりだ。どうか日頃信心してゐます木華開耶姫の神樣、あの子はあなたの御氏子なのでございます。どうかあの櫻子を引き留めて

○住みうかれたる—住み憂くなつた。

【三】

○磯邊寺—常陸國西茨城郡東那珂村にあつた神宮寺。

合掌し）。さなきだに住みうかれたる古里の（と舞臺へ進み）。今は何にか明暮を。堪へて住むべき身ならねば（常座にてしをり）。わが子の行方尋ねんと。泣く泣く迷ひ出でて行く泣く泣く迷ひ出でて行く

としをりて幕に向ひ、靜かに中入。

【三】ワキヅレ里人、着附熨斗目・素袍上下・扇・小刀の裝束にて出で笛座前へ行きて下に居る。次第の囃子にて、子方櫻子、襟赤・着附縫箔・兒袴・扇の裝束、ワキ磯部寺住僧、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・白大口・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧二人、ワキと同様の裝束にて舞臺に入り向合ひて、

ワキ ワキヅレ 次第「頃待ち得たる櫻狩頃待ち得たる櫻狩山路の春に急がん

地取に子方とワキとは正面に向き、

ワキ「これは常陸の國磯邊寺の住僧にて候（子方を見て）又これに渡り候幼き人は。いづくとも知らず愚僧を頼む由仰せ候程に。師弟の契約をなし

下さいませ。……さうだ、何事がなくてさへ辛い情ない思ひをしてゐるこの故里だ。今は何を慰めにして、明暮、ここに我慢して住んでゐる必要があらう。わが子の行方を尋ねに、どこまでも出かけませう」

と泣きながら、どこといふあてもなく出て行くのであつた。

シテ母、迷ひ行く態で退場。

【三】

第二段

舞臺は前の常陸國磯邊寺で、ワキ磯邊寺の住僧、ワキヅレ從僧とこれに、子方櫻子を伴つて登場。

僧「樂しみにしてゐた櫻見物のよい時節となつた。急いで山邊の春景色を見に行かう」

三人舞臺を廻つて、外常の目的を達て、

僧「私は常陸國磯邊寺の住僧です。又こゝに居られる幼い子は、どこの人かも知らなかつたが、私に頼むといはれるので、師弟の契りを結んだのです。そしてこの邊に櫻川といつて花の名所があり、

○櫻川―拾葉抄には、筑波山から流れ出る川で、上をみなの川といひ下をみなの川といふといつてゐる。今西茨城郡北那珂村の鏡池から出て霞浦に入る川を櫻川といつてゐる。

○筑波山このもかのもの―古今集讀人不知の歌「筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君が御蔭にます蔭はなし」を引いて「このもかのも(此方彼方)の花盛り」といふ爲の文のあやとした。

○雲の林―櫻を雲に喩へていふ。

○緑の空もうつろふ―青天の空も花の色に變るとの意

【四】

申して候。又このあたりに櫻川とて花の名所の候。今を盛りの由申し候程に。幼き人を伴ひ。唯今櫻川へと急ぎ候

　といひてワキヅレと向合ひ、

ワキ ワキヅレ「上歌」筑波山。このもかのもの花盛り。このもかのもの花盛り。雲の林の蔭茂き。緑の空もうつろふや松の葉色も春めきて。嵐も浮かむ花の波。櫻川にも着きにけり櫻川にも着きにけり

　ワキ「嵐も浮かむ花の」と正面に向きて二三足出で、またもとに歸り、上歌濟みて子方に向ひ、

ワキ「まづかう御座候へ

　といひて、一同脇座へ行く。(ワキは立ちたるまゝ、子方・ワキヅレは坐す)

【四】

　ワキヅレ里人名乘座に立ちてワキに向ひ、

里人「いかに申し候。何とて遲く御出で候ぞ待ち申して候

ワキ「さん候皆々御供申し候程に。さて遲なはり

今が花盛りだといふことなので、この幼い子を連れて、これから櫻川へ急いで行くのです。

　と見物人に自己紹介をし、

僧「あちらもこちらも、どこもかも櫻の花盛りで、雲の林を作つたやうで、天の青空まで、お花色に變つて、松の葉も春らしくなつて來たことだ。……おゝこのやうにいつてゐるうちに、風に散つた花が波に浮いてゐる、この美しい櫻川に着いた」

　といつてゐるうちに櫻川へ着いた態で、[illegible]川となる。

【四】

　ワキヅレ里人、住僧を待ち受けてゐた態で、[illegible]へ出で、

里人「お僧様、どうしてお出でが遲かつたのです、隨分お待ち申して居りました」

僧「いや皆の者がお供をしたので、それ

○女物狂―狂女。
○抄ひ網―箕に柄をつけたやうな形のもので、魚を抄ひ捕る網。叉手といふ。
○けしからず―並々でない。甚だ。

【五】

て候。(正面に向き)あら見事や候。花は今を盛りと見えて候

里人「なかなかの事花は今が盛りにて候。又ここに面白き事の候。女物狂の候が。美しき抄ひ網を持ちて。櫻川に流るる花を抄ひ候が。けしからず面白う狂ひ候。これに暫く御座候ひて。この物狂を幼き人にも見せ參らせられ候へ

ワキ「さらばその物狂を此方へ召され候へ

里人「心得申し候

ワキ下に居り、里人は幕に向ひ、

里人「やあやあかの物狂に。いつもの如く抄ひ網を持ちて。此方へ來れと申し候へ

といひて笛座の上に坐す。

【五】

一聲の囃子にて、後ジテ櫻子の母、面深井・鬘・鬘帯・襟淺黄・箔附摺箔・淺黄水衣・無色縫箔腰卷・腰帶・扇の裝束にて抄網を持ちて橋懸一の松に出で、

後ジテ「いかにあれなる道行人。櫻川には花の散

で遲くなつたのです」

あたりの景色を見て、

僧「おゝ見事なことだ。花は今が丁度眞盛りらしい」

里人「はい、花は今が眞盛りでございます。それから又、こゝに面白い事がございます。女の氣違ひですが、美しい抄ひ網を持つて、櫻川に流れる花を抄つてゐますが、馬鹿に面白い狂ひ舞を致します。ここに暫くお出でになつて、この物狂を幼い方にもお見せなさいませ」

僧「それでは、その狂女をこちらへ呼んで下さい」

里人「承知しました」

里人幕の方に向き、他の里人にいふやうにして、

里人「おういおい、あの狂女にいつものやうに抄ひ網を持つて、こちらへ來いといつてくれ」

皆々狂女を待つてゐる態。

【五】

後ジテ櫻子の母狂氣の體で、四ッ手網を持つて登場。

狂女「もうし、そちらへ行く方、櫻川では花が散つてゐますか。……なに、花がもう盛り過ぎになつたのですと、あゝ悲しい、

○散りがた―花の眞盛りが過ぎて、散り初めた頃。
○行く事やすき―月日の早く經つ春といひかけて、春の水と續け、水が花を誘つて行くといつたのである。
○花散れる水のまにまにとめくれば―古今集清原深養父の歌を引いた。下句「山には春もなくなりにけり」。「とめくれば」は尋ねて行くといふ意。景樹はよく心を注ぎ目を留むる意であるといつてゐる。
○花にや疎く雪の色・途中で暫くでも休んで行つたならば、落花の跡になつて、花に無情であると疎み恨まれるであらうといひ「行き」を雪にいひかけた。
○櫻花散りにし―古今集紀貫之の歌―櫻花散りぬる風の名殘には水なき空に波ぞ立ちける―を引いた。
○思ひも深き―雪の深きにかけていふ。
○散るは涙の―花の雪の散るを涙の散るにいひかけ、涙の流れるを櫻川に寄せていふ。
○さも思ひ子―さしも深く思ひしを思ひ子にいひかけた。「さも」はあれほど「思ひ子」は可愛く思ふ子といふ意。

り候か。なに散りがたになりたるとや。悲しや
なさなきだに。行く事やすき春の水の。流るる
花をや誘ふらん。『花散れる水のまにまにとめ
くれば（網を下げて舞臺に進み）。山にも春はなくなり
にけりと聞く時は。少しなりとも休らはば。花
にや疎く雪の色（と常座に立ち）。櫻花

〔カケリ〕

シテ『櫻花。散りにし風の名殘には（少し出で）
地『水なき空に。波ぞ立つ（と眺め渡し）
シテ『思ひも深き花の雪
地『散るは涙の。川やらん（とたへ廻りて常座に立ち）
シテサシ『これに出でたる物狂の。故郷は筑紫日向
の者。さも思ひ子を失ひて。思ひ亂るる心筑紫
の。海山越えて箱崎の。波立ち出でて須磨の浦。
又は駿河の海過ぎて常陸とかやまで下り來ぬ。

さうでなくてさへ、春は時が經ち易いのに、あの流れ行く水が花を誘つて、一層散るのを急がせてゐるのであらう。――「花散れる水のまにまにとめくれば、山にも春はなくなりにけり」（花が散つて流れてゐる川筋に沿うて、川上の方へ花を見に來ると、山の方でも花は散つてしまつてもはや春の趣がなくなつてしまつた）といはれたやうに、途中で暫くでも休んでゐては、その間に花が散つてしまつて、花に恨まれることであらう。さあ早くあの雪景色のやうた櫻花を見に行きませう」

〔カケリ〕（に狂女の櫻花を慕ふ様を示し、）

狂女「櫻の花を風が散らした跡は、空では水のない所に波が立つてゐるやうであり、地では私の深い物思ひのやうに深く、雪が積つたやうであり、川に流れて行く様は、私の悲しみの涙を流してゐるやうだ」

（といひながら、櫻子や作物の間の方へ廻りき、）

狂女「この氣違ひ女の私は、故郷は九州日向國ですが、かはいい子どもの行方が分らなくなつたので、心が亂れて、悲しい思ひをしながら、九州の海山を越えて、箱崎からまた船に乘り、須磨の浦や駿河の

げにや親子の道ならずは。遙けき旅を。如何にせん。（右の方に向き）ここに又名に流れたる櫻川とて。さも面白き名所あり。「別れし子の名も櫻子なれば（と正面に向き）。形見といひ折柄といひ。名もなつかしき櫻川に

地下歌「散り浮く花の雪を汲みて。みづから、花衣の春の、形見殘さん。上歌「花鳥の、立ち別れつつ親と子の。立ち別れつつ親と子の。行方も知らで天ざかる、鄙の長路に衰へば。たとひ逢ふとも親と子の面忘れせばいかならん。うたてや暫しこそ。冬ごもりして見えずとも。今は春べなるものをわが子の花はなど咲かぬわが子の花はなど咲かぬ（としをる）

【六】　ワキ立ちて正面に向き、

ワキ「この物狂の事にてありげに候。立ち寄りて

○心筑紫の―心の限り思ひを盡すといふを地名の筑紫にいひかけた。
○箱崎―筑前國にあり、松の名所。「唐船」參照。
○須磨の浦又は駿河の海―源氏物語常夏卷の歌「常陸なる駿河の海の須磨の浦波立ち出でよ箱崎の松」を引いて道行の文とした。
○名に流れたる―有名なとの意。夫木抄藤原其家の歌に「風吹けば波も幾重の櫻川名に流れたる水の春かな」
○花衣の春の形見―花衣は花やかな衣。衣の緣語「張る」を春に轉じた。
○花鳥の―櫻の花と春の鳥「立ち別れ」の序に用ゐたもの。
○天ざかる―鄙の枕詞。
○鄙の長路に衰へば―古今集小野篁の歌「思ひきや鄙の長路に衰へて海士の繩たぎいさりせんとは」の詞を借りた。
○面忘れ―顏を見忘れること。
○冬ごもりして見えずとも―古今集序の引歌「難波津に咲くや木の花冬籠り今を春べと咲くや木の花」を引き、櫻子を花に寄せて歎く。
【六】

海を通つて、常陸とかいふ國までやつて來たのです。ほんとに親子の情愛でなくては、このやうな遠い旅がどうして出來ませう。

常陸へ來ると、こゝに有名な櫻川といふ花の名所がある。別れた子の名前も櫻子だから、その思出でもあり又花時でもあるから、このなつかしい櫻川で、水に散り浮く花びらを抄うて、自分ひとり春の思出にしませう。――

親と子とが離れ離れになつて、どこにゐるやら行方も知らず、このやうな田舍の長旅をして衰へてしまつては、たとひ親子が逢つても、親子が顏を見忘れてゐたらば、まあどうしよう。あゝ情ないことだ。木の花は、暫くの間こそ冬籠りして見えないけれど、春になれば、今のこのやうに咲くものを、わが子の櫻子は春になつても、何故出て來てくれないのだ」

【六】　仕僧狂女を見て、

僧「先程の話の女はこの狂女の事らしい、

○おこと—そなた。
○忘れ形見—夫の死後生まれた子。
○綠子—幼兒。
○渇仰—深く信心すること

尋ねばやと思ひ候。(シテに向ひ)いかにこれなる狂女。おことの國里はいづくの人ぞ
シテ「これは遥かの筑紫の者にて候
ワキ「それは何とてかやうに狂亂とはなりたるぞ
シテ「さん候唯一人ある忘れ形見の綠子に生きて離れて候程に。思ひが亂れて候
ワキ「あら痛はしや候。又見申せば美しき抄ひ網を持ち。流るる花を抄ひ、あまつさへ渇仰の氣色見え給ひて候は。何と申したる事にて候ぞ
シテ「さん候わが古里の御神をば。木華開耶姫と申して。御神體は櫻木にて御入り候。されば別れしわが子もその御氏子なれば。櫻子と名づけ育てしかば。『神の御名も開耶姫。尋ぬる子の名も櫻子にて。(右の方に向き)又この川も櫻川の。名

傍へ行つて尋ねて見ませう」
（と狂女に向ひ、）
僧「おいこゝな狂女、そなたの郷里はどこだ」
狂女「私は遠い九州の者です」
僧「そして、どうしてこのやうに氣が狂つたのだ」
狂女「はい、たゞ一人の、夫の忘れ形見の子と生き別れになりましたので、それで心が亂れたのです」
僧「おゝ氣の毒なことだ。又見れば美しい抄ひ網を持つて、水に流れる花をすくひ、なほ信心さへしてゐる樣に見えるが、それはどうしたことなのだ」
狂女「はい、私の故郷の神樣は木華開耶姫と申して、御神體は櫻の木でございます。それで別れた子も、その御氏子なので、櫻子と名をつけて育てゝゐたのです。このやうに、神樣の御名も木華開耶姫、尋ねるわが子の名も櫻子で、又この川の名も櫻川なので、なつかしく思はれ、花の散るのをも粗末にしまいと思つて、かう

○花のちりを―「散り」を塵にいひかけた。
○あだにもせじ―粗末にしまい。
○遠きにつきての―遠國にある爲に名歌の譽れを得たとの意。
○貫之―紀貫之、古今集の撰者でその序の筆者。「蟻通」參照。
○常よりも春べになれば櫻川波の花こそ間なく寄すらめ―後撰集紀貫之の歌。その詞書に「櫻川といふ所ありときゝて」とある。この櫻川は實は近江國蒲生郡の櫻川を指したものであらう。
○花の雪も貫之も―雪の音を重ね、雪も降る、貫之も古き名といひかけた。
○櫻川瀬々の白波繁ければ霞うながす信太の浮島―引歌らしいが出所は分らない。「うながす」は「うなぐ」(頂に掛ける)の延言で、霞うながすは霞のかゝつてゐるとの意。「霞ぞ流す」の誤りではない。

なつかしき。花のちりを。あだにもせじと思ふなり（とワキに向く）

ワキ「謂れを聞けば面白や。げに何事も縁はありけり。さばかり遠き筑紫より。この東路の櫻川まで。下り給ふも縁よなう

シテ「まづこの川の名に負ふ事。遠きにつきての名譽あり。かの貫之が歌は如何に

ワキ「げにげに昔の貫之も。遙けき花の都より

シテ『未だ見もせぬ常陸の國に

ワキ『名も櫻川

シテ『ありと聞きて

地上歌『常よりも。春べになれば櫻川。春べになれば櫻川。波の花こそ（と前へ出で）。間なく寄すらめと詠みたれば花の雪も貫之も古き名のみ残る世の。櫻川。瀬々の白波繁ければ（と眺め）。霞うな

してゐるのです」

但「わけを聞けば、成程面白いことだ。實際何事も前世の宿縁だ。あのやうな遠い九州から、この東國の櫻川まで下つて來られたといふのも、やはり宿縁ですよ」

狂女「遠いと申せば、この川が有名な事について、遠國である爲に名歌の譽れを得たことがあります。あの貫之の歌がさうではありませんか」

但「いかにも、昔の貫之も遠い花の都から……」

狂女「まだ見たことのない常陸の國に、櫻川といふ名の川があると聞いて――

『常よりも春べになれば櫻川、波の花こそ間なく寄すらめ』

（どこの川でも、川波がいつも花のやうに寄して見えるが、櫻の多い櫻川では、春になると、ほんとの花が散り浮かぶので、眞實の花の絶間もなく流れることであらう）

と詠んだので、昔の貫之の名も永く後世まで殘つたのです。さう〳〵――

『櫻川瀬々の白波繁ければ、霞うながす信太の浮島』

がす（と右へ廻り）。信太の浮島の浮かめ浮かめ水の花げに面白き（と眞中へ出て網をかたげ）、河瀨かなげに面白き河瀨かな

と網を下して川を見渡し、網を下げて橋懸一の松にくつろぐ。

ワキシテを見送りて里人に向ひ、

【七】

ワキ「いかに申し候。この物狂は面白う狂ふと仰せ候が。今日は何とて狂ひ候はぬぞ

里人立ちて、

里人「さん候狂はするやうが候。櫻川に花の散ると申し候へば狂ひ候程に。狂はせて御目にかけうずるにて候

ワキ「急いで御狂はせ候へ

里人「心得申し候。（正面に向き）あら笑止や。俄かに山颪のして櫻川に花の散り候よ

シテ一の松に立ちて、

シテ「よしなき事を夕山風の。奥なる花を誘ふご

（櫻川には一面白波がたつてゐるので、信田の浮島のあたりは一面霞で包まれてゐる）と詠まれたやうに、水に花の浮かんだ河瀨の景色がほんとに面白い」

と景色に見惚れてゐる態。

【七】

旅僧は里人に向つて、

僧「もうし、この狂女は面白う狂ひ舞をすると仰しやつたが、今日はどうして狂はないのです」

里人「はい、狂はせるのには、方法があります。櫻川に花が散ると申しますと、狂ひますから、狂はせてお目にかけませう」

僧「すぐ狂はせて下さい」

里人「承知しました」

里人、景色を見るやうにして、狂女に

里人「あゝ困つたことだ。俄かに山風が吹いて來て、櫻川に花が散るわ」

狂女「つまらない事をいふ人だ。おゝ夕山

○信太の浮島―常陸國稻敷郡霞浦の湖中にある島。今浮島村といふ。

【七】

○狂はするやう―狂はす手段。

○笑止や―困つたことだ。

○夕山風の―つまらない事をいふを夕にいひかけた。

○誘ふごさめれ―誘ふにこそあるめれの約言。

さめれ。流れぬ先に花抄はん（と舞臺へ入る）

里人もとの座に坐す。

ワキ『げにげに見れば山颪の。木々の梢に吹き落ちて

シテ常座に立ち、

シテ『花の水嵩は白妙の

ワキ『波かと見れば上より散る

シテ『櫻か

ワキ『雪か

シテ『波か

ワキ『花かと

シテ『浮き立つ雲の

ワキ『川風に

地次第『散ればぞ波も櫻川。散ればぞ波も櫻川。流るる花を抄はん

地取にワキは下に居り、シテは網を後見に渡して扇を手に持ち、

○花の水嵩—花の散り重なつた水。

○散ればぞ波も櫻川—散れば波にも花が咲くといふを櫻川にいひかけた。

風が吹いて、奥の花を誘ふのであらう。さあ花の流れない前に抄ひませう」

僧「なる程、見ると山風が木々の梢に吹いて來て……」

狂女「花の散り重なつた水は眞白で……」

僧「波かと思へば、上から散るので……」

狂女「櫻だか……」

僧「雪だか……」

狂女「波だか……」

僧「花だか……」

狂女「分らない様をして、浮き立つ雲のやうに、川風で花が散ると、この櫻川は波まで花が咲いたやうだ。さあ流れる花をすくひませう」

といふうちに、狂女は舞ふ心持になり、

シテ『花の下に。歸らん事を忘れ水の
地『雪を受けたる。花の袖
〔イロヘ〕を舞ひて、大小前に立ち、

【八】
シテクリ『それ水流花落ちて春。とこしなへにあり
地『月すさましく風高うして鶴歸らず
シテサシ『岸花紅に水を照らし。洞樹緑に風を含む
地『山花開けて錦に似たり。澗水たたへて藍の如し
シテ『面白や思はずここにうかれ來て
地『名もなつかしみ櫻川の。一樹の蔭一河の流れ。汲みて知る名も所からあひにあひなば櫻子の。これ又他生の緣なるべし
シテ次の謠に合せて舞ふ。(舞クセ)
地クセ『げにや年を經て。花の鏡となる水は。散りかかるをや。曇るといふらん。まこと散りぬれ

○花の下に歸らん―和漢朗詠集白樂天の句「花下忘レ歸因ニ美景一、樽前勸レ醉是春風一」を引き、忘れ水にいひかけた。
○忘れ水の―忘れ水は草深い野邊に見えつ隱れつして流れる小川をいふが、こゝにはたゞ水の意に用ゐた。
【八】○水流花落ちて―以下―鶴歸らず―まで詩句であらうが、出所が分らない。水流は―水流れ―を讀み誤つたのであらう。
○岸花紅に水を照らし―謠曲拾葉抄に―舊抄に杜子美の詩なり云々―といつてゐるが、未だ原文を見當てない。
○山花開けて―碧巖集第八十二則―僧問ニ大龍一、色身敗壞、如何是堅固法身、龍曰、山花開似レ錦、澗水湛如レ藍―を引いた。
○一樹の蔭一河の流れ―前句の櫻・川の文字を受けて、「一樹の蔭に宿り一河の流を汲むも他生の緣」といふ古語を引き、汲みて知ると續けた。說法明眼論に「宿ニ一樹下一、汲ニ一河流一、一夜同宿：皆是先世結緣」
○年を經て花の鏡となる水は散りかかるをや曇るといふらん―古今集伊勢の歌。

狂女「櫻の花の面白さ、家に歸る氣もしない。袖に雪の降つたやう、櫻の花が散りかかる。」と謠ひ、
〔イロヘ〕を舞ひ、

【八】
狂女「花は散つてもその花が、流れる水に落ち浮かび、春の趣を殘してゐる。」
「月の光は淋しくて、風は烈しく吹いて來て、鶴の姿は見えもせぬ。」
「岸邊に咲いた紅い花、奇麗な水に影映し、岩間の木には風吹いて、あたりは翠に匂うてゐる。」
「山には花が咲き亂れ、あだかも錦を敷いたやう、谷には水がこんこんと、たたへて藍を流すやう。」と謠ひ、
狂女「ほんとに面白いことだ。思ひがけなくもこのやうな所へやつて來たが、こゝは名もなつかしい櫻川で、「一樹の蔭に宿るも一河の流れを汲むも他生の緣」といふやうに、こゝの花を抄つてゐて、櫻子の名に緣のあるこの所で、わが子に會ふことが出來たならば、それこそ前世の宿緣といふものであらう」と、[illegible]を鳴らして、
狂女「さうさう―」
「年を經て花の鏡となる水は、散りかかるをや曇るといふらん」

○散りぬれば―本曲の末に記す。
○梢よりあだに―同じく末に記す。
○いさ白波の―いさ知らずを白波にいひかけた。
○さきだたぬ―本曲の末に記す。
○百千鳥花に―同じく末に記す。
○思ひ渡りし―渡るは川の縁語。
○常陸帶の―末に記す。
○かごとばかり―少しばかり。下の「水をせき」の限定語に用ゐた。
○花の柵―本曲の末に記す
○かけまくも―言にかけて申すのも勿體ない。
○風もよぎて―末に記す。
○花によるべの水―よるべの水とは神前の瓶に入れた水で、神のこゝに立ち寄り給ふといふ意であるが、こゝにはたゞ散る花に寄る水といふ意。

ば。後は芥になる花と。思ひ知る身もさていかに。われも夢なるを花のみと見るぞはかなき。されば梢より。あだに散りぬる花なれば。落ちても水のあはれとはいさ白波の花にのみ。馴れしも今はさきだたぬ悔の八千度百千鳥。花に馴れ行くあだし身は。はかなき程に羨まれて。霞をあはれみ露をかなしめる心なり

シテ『さるにても。名にのみ聞きて遙々と

地『思ひ渡りし櫻川の。波かけて常陸帶の。かごとばかりに散る花を。あだになさじと水をせき雪をたたへて浮波の。花の柵かけまくも。かたじけなしやこれとても。木華開耶姫の御神木の花なれば。風もよぎて吹き水も影を濁すなと。袂をひたし裳裾をしをらかして。花によるべの。水せきとめて、櫻川になさうよ

(ほんとの鏡は座がかゝつて曇るのであるが、毎年毎年花の爲に鏡となる水は、その花の散りかゝるのを、水鏡の曇りといふのであらうか)

といふ詠があるが、さういへば、花は果敢ないもので、散つてしまへば、すぐ塵芥となるのだといふ事は知つてゐても、さて自分達人間の命も夢のやうな果敢ないものだといふ事に氣がつかず、たゞ果敢ないのは花だけだと思つてゐるのは、誠にあさはかなことだ。かうして、――

『枝よりもあだに散りにし花なれば、落ちても水の泡とこそなれ』

(枝からも果敢なく散つてしまつた櫻花の事であるから、下へ落ちてももろい水の泡となるのだ)

といふ花の運命が、やがてわが身上であることに、一向氣がつかず、たゞ花の面白さをのみ樂しんでゐては、後になつて、どのやうに後悔しても致し方がないのだが、やはり――

『百千鳥花に馴れ行くあだし身は、はかなき程に羨まれぬる』

(春の百囀れ遊ぶ小鳥が、花に戲れて樂しんでゐるのは、ほんとの暫くの間で、誠に果敢ないものであるのに、それが羨まれる)

といふ歌のやうに、身上の果敢なさを忘れて、花や霞や露や、目の前の面白さにうち興じてゐることだ。

【九】◎あたら櫻の—このシテ謡より「わが櫻子ぞ戀しき」までを網の段といふ。○あたら櫻のとが—玉葉集西行の歌「花見にと群れつゝ人の來るのみぞあたら櫻の咎にはありける」を轉用した。「西行櫻」參照。○花も憂し風もつらし—雲玉集の歌に「花も憂し嵐もつらしもろともに散ればぞ誘ふ誘へばぞ散る」○花かづら—花で作つた髮飾。新勅撰集二條院讃岐の歌「百敷や大宮人の玉鬘かけてぞなびく青柳の絲」の玉鬘を櫻花の縁で花鬘にかへて引いた。○青柳の絲櫻—青柳の絲を絲櫻にいひかけた。○霞の間には樺櫻—源氏物語野分の巻に「霞の間より面白き樺櫻の咲き亂れたるを見る心地す」とあるを引いた。樺櫻は一重櫻の一種である。○雲と見しは—古今集序の「春のあした吉野山の櫻は人麻呂が目には雲かとのみなむ覺えける」を引いた。○三吉野の川淀—川淀は水の淀んだ所。新古今集湯原王の歌に「吉野なる菜摘の川の川淀に鴨ぞなくなる山陰にして」

とクセを舞ひ上げて扇を懐中し、また後見より網を受取り、網を持ち次の謡に合せて舞ふ。

【九】
シテ『あたら櫻の
地『あたら櫻の。とがは散るぞ恨みなる。花も憂し風もつらし。散ればぞ誘ふ
シテ『誘へばぞ散る花かづら
地『かけてのみ詠めしは
シテ『なほ青柳の絲櫻
地『霞の間には
シテ『樺櫻
地『雲と見しは
シテ『三吉野の
地『三吉野の。三吉野の。川淀瀧つ波の。花を抄はば若し。國栖魚やかからまし。又は櫻魚と。聞くもなつかしや。いづれも白妙の。花も櫻も。雪も

それにしても、たゞ名前を聞いてゐたゞけで、遠い／＼所だと思つてゐた、この櫻川へやつて來たことだが、少しばかりでも、この散る花を粗末にしまいと思つて、水を塞きとめて、花で網を作らうとしてゐるのだ。申すも勿體ないことだが、これもやはり木華開耶姫の御神木の花であるから、この花の爲には風も避けて吹くやうに、花の影の映る水も濁るなと思つて、袂や裳裾を濡らして、花へ寄つてくる水を塞きとめ、川一面櫻の花にしたいと思ふ」
といひ、網を持つて、

【九】
狂女「——
「櫻の花もたゞ一つ、散ることだけは恨めしい。花の散るのが情ない、風の吹くのが情ない、花が散るから風が吹く、風が誘へば花が散る。
『昔の人が櫻花、髮にかけて眺めたは、青柳に似た絲櫻、霞の間には樺櫻、雲の如くに見えるのは吉野の山の櫻花。
『吉野といへば三吉野の、川の淀みに浮かぶ花、抄へば若しや國栖魚か、花と一所にかゝらうか。
『鮎の異名が櫻魚、櫻といへばなつかし

○國栖魚―吉野川の川上國栖のあたりでとる鮎をいふ〔國栖〕參照。
○櫻魚―櫻時にとれる小鮎をいふ。常陸地方では若さぎを櫻魚といふから、或はこゝでは若鷺の方を指したものか。

【一〇】

○不知火の―いさや知らぬを、筑紫の枕詞不知火にいひかけた。

波も皆がらに。抄ひ集め持ちたれども。これは木々の花まことは。わが尋ぬる。櫻子ぞ戀しき
わが櫻子ぞ戀しき

「抄ひ集め」と網に抄ふ形をし、「これは木々の花」と網をすて、「櫻子ぞ戀しき」と常座に坐してしをる。

【一〇】

地ロンギ『いかにやいかに狂人の。言の葉聞けば不思議やな。もしも筑紫の人やらん

シテ『今までは。誰ともいさや不知火の。筑紫人かとのたまふは何のお爲に問ひ給ふ

地『何をか今は包むべき。親子の契り朽ちもせぬ。花櫻子ぞ御覽ぜよ

とワキ立ちて子方を立たせ少し前へ出す。

シテ『櫻子と。櫻子と。聞けば夢かと見も分かずいづれわが子なるらん（ワキ下に居る）

地『三年の日數程古りて。別れも遠き親と子の

シテ『もとの姿は變れども

い。

『あれもこれもとなつかしく、花も櫻も雫・波も、みんな抄つて集めたが、これらはいづれも木々の花。まこと私の戀しいは、私の尋ねる櫻子だ。あゝ櫻子はなぜ見えぬ』――」

ここ諷ひながら舞ふ。所謂狂ひ舞である。住僧は狂女に向つて、

【一〇】

僧「この狂女の言葉を聞いてゐると、どうも變だ。もしや九州の人ではありませんか」

狂女「今までは誰とも知らない方が、私に九州の者かとお尋ねになるのは、一體何のお爲なのです」

僧「今は何を隱さう。親子の絲は盡きないものだ。これが櫻子だ。御覽なさい」

ここ櫻子を前へ出す。

狂女「櫻子、櫻子と聞くと、夢のやうで見分けがつきません、どれが私の子なのでせう。……おゝ、三年の永い年月が間別れてゐて、親も子も、もとの姿は變つてしまつたが、流石見馴れてゐた顏だつた。――

地「さすが見馴れし面だてを

シテ「よくよく見れば

とシテ立ちて扇にて子方を招きながら子方の方へ行き、

地「櫻子の。花の顏ばせの。こは子なりけり鶯の。あふ時も鳴く音こそ嬉しき、涙なりけれ

と子方を抱へてしをる。

【二】

地(キリ)「かくて伴ひ立ち歸り(と子方を連れて常座へ行き。)かくて伴ひ立ち歸り。母をも助け樣變へて。佛果の緣となりにけり(子方の幕に入るを見送り)。二世安樂の緣深き。親子の道ぞありがたき親子の道ぞありがたき

と留拍子を踏む。

よく見れば、櫻子の美しい面かたちそのまゝだ。おゝわが子であつた。あゝわが子に逢つて、嬉しくて、先立つものは嬉し涙です」

【二】

かうして親子連れ立つて歸り、櫻子は母に勸めて剃髮させ、後生成佛の緣を結んだ。かうして、現世・後世をかけて安樂の身となつた、親子の關係は誠にめでたいことである。

子方櫻子、後ジテその母、うち連れて歸る趣の場。

○こは子なりけり―今鏡うちぎきの巻に、「菩提寺といふ寺に、ある僧坊の池の蓮に、鳥の子を生みたりけるを取りて、籠に入れて飼ひける程に、鶯の籠より入りて物くゝめなどしければ、鶯の子なりと知りにけれど子は大きにて親にも似ざりければ、怪しく思ひける程に、子のやうやうおとなしくなりて、ほとゝぎすと鳴きければ、昔よりいひ傳へたる古き言まことなりと思ひて或人よめる」と記して「親の親ぞ今は床しき時鳥、はや鶯の子は子なりけり」とある歌を引いた。

○あふ時も―鶯の音「あう」をいひかけた。

【二】

○佛果の緣―出家して成佛すべき緣を結んだことをいふ。

○二世安樂―現世のみならず後世までの安樂。

〔考異〕

諸流(五流)

【一】シテ「さても……行き方知らずなりて候は如何に(寶・春・喜猶々文を見うずるにて候)……里人「なかなかの事……ワキ「さらば……里人「やあやあ……此方へ來れと申し候へ(寶・下懸ナシ)

【四】里人「いかに申し候……ワキ「さん候……

【七】ワキ「いかに申し候……里人「さ

ん候……ツキ「急いで……聖人」心得申し候（寳下懸ナシ）

古諸本　（貞享二年本）

異同がない。

附　記

○散りぬれば後は芥に―古今集僧正遍昭の歌「散りぬれば後は芥になる花を思ひ知らずもまどふ蝶かな」を引いた。

○梢よりあだに散りぬる―古今集菅野高世の歌「枝よりもあだに散りにし花なれば落ちても水の泡とこそなれ」を引き、泡をあはれにいひかけた。

○さきだたぬ悔の八千度―古今集閑院の歌「先だたぬ悔の八千度かなしきは流るる水の歸り來ぬなり」を引き、八千度より百千鳥を呼び起した。

○百千鳥花に馴れ行く―古今六帖の歌「百千鳥花に馴れ行くあだし身ははかなき程に羨まれぬる」を引いた。「はかなき程に」は春の頃群れ遊ぶ小鳥が花に戯れて樂しんでゐるのは、ほんの暫くの間で、誠に果敢ないものであるのに、これが羨まれるとの意。

○霞をあはれみ露をかなしめる―古今集序に「鳥を羨み霞をあはれみ露をかなしむ心言葉、多くさまざまになりにけり」とあるを引き、目前の樂しみに興ずるとの意に用ゐた。

○常陸帶の―新古今集讀人不知の歌に「東路の道の果なる常陸帶かごとばかりも逢はんとぞ思ふ」とあり、「かごと」の序に用ゐたのである。常陸帶とは、鹿島明神の祭に、帶を二つ持つて行つて神前に掛け、その結ばり方によつて夫婦の緣を占ふをいふ。

○花の柵―柵は水流をせく爲に、杭を打竝べて横に竹木を結んだもので、こゝには落花が多く浮かんで、水をせき留めたことをいふ。千載集能因法師の歌「櫻ちる水の面にはせきとむる花のしがらみ掛くべかりけり」を引き、流れに花の柵を掛くをも掛けなくもにいひかけたのである。

○風もよぎて吹き―古今集藤原好風の歌「春風は花のあたりをよぎて吹け心づからや移ろふと見ん」に據つて綴つた。よそでは吹けて。

實盛

觀（寶　春　剛　喜）

解　說

【能柄】　二番目　複式夢幻能

【人物】　狂言　所の者、　ワキ　僧（他阿彌上人）、　ワキツレ　從僧（二人）、　前シテ　老翁（齋藤實盛の靈）、　後シテ　齋藤實盛

【所】　加賀國　篠原

【時】　室町初期　（八月）

【異稱】　「眞盛」とも書き、「篠原」又は「篠原眞盛」ともいつた。

【作者】　世子六十以後申樂談儀に世阿彌の作として擧げて居り、能作書にもこの曲名が見え、能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作とす。糺河原勸進猿樂記に寛正五年四月十日、蔭涼軒日錄に寛正六年九月二十七日、兩者とも音阿彌が本曲を演じたこと、言繼卿記に文祿四年三月廿六日本曲を註釋したことが見えてゐる。

【梗概】　齋藤實盛が討死して二百餘年後、ある僧（多阿彌上人といふ）が加賀國篠原で、念佛說法してゐると、餘人には姿の見えない一老翁が毎日聽聞に來るので、僧が不審に思ふと、老翁は遂に自分は實盛の亡靈であると打明けて、池の邊に消え失せる。僧は奇特の思ひ

をして、實盛の首を洗つた池の邊に出て、夜もすがら念佛廻向すると、實盛の靈が現れて、錦の直垂を着てこの故鄕の篠原の戰に出て、鬢髮を墨で染めて奮鬪し、遂に手塚太郎に討ち取られた懺悔物語をする。

【出典】この事は平家物語に出て居り、殊に後段の詞章は卷七「實盛最後の事」と殆と同文であるから、煩を厭はずその文を引いて、比較の便宜とすれば、

手塚が郎黨主を討たせまじと、中に隔り、齋藤別當に押し竝べてむづと組む。齋藤別當「あつぱれおのれは日本一の剛の者と、くんでうすよなうれ」とて、わが乘つたりける鞍の前輪に押しつけて、些とも働かさず、首かき切りて捨てゝげる。手塚の太郎郎黨が討たるゝを見て、弓手に廻り合ひ、鎧の草摺引きあげて、二刀刺し、弱る所を組んで伏す。齋藤別當心は猛う思へども、軍にはし疲れぬ、手は負うつ、その上老武者ではあり、手塚が下になりにける。手塚の太郎馳せ來る郎黨に首とらせ、（謠曲では、文が前後して、以上は結末のロンギに出てゐる）、木曾殿の御前に參り畏つて、「光盛こそ奇異の曲者と組んで討つて參りて候へ、侍かと見候へば錦の直垂を着て候。又大將軍かと見候へば續く勢も候はず、名のれ／＼と責め候ひつれども、遂に名のり候はず、聲は坂東聲にて候ひつる」と申しければ、木曾殿「あつぱれ是は齋藤別當にてありござんなれ、それならんには、義仲が上野へ越えたりし時、をさな目に見しかば、白髮の糟生なりしぞかし、今ははや七十にも餘り、白髮にこそなりぬらんに、鬢鬚の黑いこそ怪しけれ、樋口の次郎兼光は年頃馴れ遊んで見知りたるらん、樋口召せ」とて召されけり。樋口の次郎たゞ一目見て、「あなむざん齋藤別當にて候ひけり」とて涙を流す。木曾殿「それならんには、はや七十にも餘り、白髮にこそなりぬらんに、鬢鬚の黑きはいかに」と宣へば、やゝあつて樋口の次郎涙を抑へて申しけるは、「さ候へば、その樣を申し上げんと仕り候が、餘りにあはれに覺え候ひて、まづ不覺の涙のこぼれ候ひけるぞや。されば弓矢取りは、いさゝかの所にても、思ひ出の詞をばかねて番ひ置くべき事にて候ひけるぞや。齋藤別當常は兼光に會うて物語し候ひしは、六十に餘りて軍の陣へ向はん時は、鬢鬚を黑う染めて、若やがうと思ふなり、その故は、もし若殿原に爭うて、先を驅けんも大人げなし、又老武者とて、人の侮られんも口惜しかるべしと申し候ひしが、誠に染めて候ひけるぞや。洗はせて御覽候へ」と申しければ、木曾殿「さもあるらん」とて、洗はせて御覽ずれば、白髮にこそなりにけれ。又齋藤別當錦の直垂を着ける事も、最後の暇申しに、大臣殿へ參つて、「かう申せば、實盛が身一つにては候はねども、……今度北國へ罷り下り候はば、定めて討死仕り候べし、實盛もとは越前の國の者にて候ひしが、近年御領につけられて、武藏國長井に居住仕り候ひき。事のたとへの

候ぞかし、故郷へは錦を着て歸ると申すことの候へば、何か苦しう候べき、錦の直垂を御免候へかし」と申しければ、大臣殿「やさしうも申したりけるものかな」とて、錦の直垂を御免ありけるとぞ聞えし。昔の朱買臣は錦の袂を會稽山に飜し、今の齋藤別當實盛は、その名を北國の巷に揚ぐとかや。朽ちもせぬ空しき名のみ止めおいて、屍は越路の末の塵となるこそあはれなれ。

本曲の前段、實盛の亡靈が老翁となつて現れ、僧に廻向を頼むのは、複式能普通の手法であるが、間狂言の詞によれば、この僧は遊行上人十四代の後他阿彌上人である。そして　謠曲拾葉抄には時宗緣起を抄出して、

加州江沼郡篠原といふ砂原に、實盛が首洗の池とて大きなる池あり。その上を手塚山といふ。昔この所實盛光盛組み討ちの場なり。所の人大剛の人の舊跡とて、土器を以て塚をつく。その後、相摸の國藤澤他阿彌上人（元祖より十四代目）巡國の節、この所を通られしに、實盛の魂魄出でて、上人に逢ひて修羅道の苦患遁れ難きことを語つて、跡を弔ひ給へといひて見えず。上人感涙を流し、この所に七日逗留して別時の大念佛を初め給ふ。その因緣に依つて、代々他阿彌上人廻國の時は、いつとてもこの篠原の砂原に假屋を立て、七日の間別時の大念佛、今の世までもあることなり。

と記してゐる。しかしこの緣起は明らかに謠曲の制作せられた應永より以後のもので、謠曲の本文にも他阿彌云々の事は出てゐないが、このワキ僧は普通の旅僧とは脚色を異にして居り、且「二百餘歳は經れども」と實盛歿後二百餘年の事としてゐるのを見れば、謠曲の制作よりはやゝ以前に、時宗緣起所傳の如き事件又は傳說が生まれて、謠曲作者はそれに據つて本曲を作つたものであらう。

【概評】平家物語を題材とした修羅物の謠曲は少くないが、大抵複式夢幻能の類型を履んでゐるのに反し、本曲は狂言の口開、ワキのサシから初まつて、ワキ僧說法の間に前ジテが登場するといふ特種な形式をとつてゐる。そして前ジテの眞人物告白の樣式も「昔長井の齋藤別當實盛は」と他人事のやうに語り起してゐるなど、流石應永の新作と肯かれる節が多い。しかし、後段第七節に、クリ・サシの後、長い語を挿んで然る後クセに移つてゐるのは、甚だ煩はしく、且語の、實盛の墨染めにした鬢鬚を洗ふ史話は、著名な興味の多い說話ではあるが、實盛自身の語り草には適してゐない。寧ろ、前段に「この御前の池水にて鬢鬚をも洗ひしとなり」といつただけで、後段のこの史話はあつさりと省いて置く方がよかつたやうに思ふ。脚色の類型を破ることは望ましいことであり、また世阿彌の作にはこの方面の工夫の行屆いたものが多いのであるが、語とクセとを並べるのは異例とはいつても、望ましい異例ではない。或は原作には語のなかつたものを、後人が附け加へたのではないかと疑ふのである。

【序】〇他阿彌―多阿彌とも書く。この人のこと解說の時宗緣起參照。

【一】〇西方は十萬億土―西方は極樂世界を指す。阿彌陀經に「從レ是西方過二十萬億佛土一有二世界一、名曰二極樂一」
〇己心の彌陀の國―阿彌陀佛も淨土もわが心の中にあるもので、この所も阿彌陀の極樂世界であるとの意。大原談儀に「極樂不レ遠而構二萬億刹之西一、彌陀在二己心一而現二一座蓮華臺之形一」
〇稱名―南無阿彌陀佛と彌陀の名を稱へること。
〇法の場―說法する所。
〇攝取不捨―阿彌陀佛がすべての衆生を淨土に迎へ取つて、誰をも見捨てないこと。觀無量壽經に「一一光明遍照二十方世界一、念佛衆生攝取不レ捨一」

【序】囃子方座に着くと、ワキ僧、角帽子・着附小格子・水衣・白大口。腰帶・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧二人、着附無地熨斗目の外ワキと同樣の裝束にて舞臺に入り、ワキは脇座にて床几にかゝり、ワキヅレはその次に下に居る。狂言所の者、着附縞熨斗目。狂言上下・腰帶・扇の裝束にて名乘座に出で、

狂言（口開）「かやうに候者は。篠原の里に住居する者にて候。ここに遊行十四代の流れ他阿彌上人。この所に御座ありて。毎日ありがたき說法の御座候が。日中の前後に獨言を仰せ候間。篠原の面々不思議なりとの申し事にて候。某は御側近く參る者なれば。不審なし申せとの事にて候。今日も日中過ぎに參り。この事を尋ね申さばやと存ずる。今日も上人の獨言を仰せ候はゞ。こなたへ知らせて給はり候へ。その分心得候へ。〳〵

といひて狂言座につく。

【一】ワキ・ワキヅレその場にて、

ワキサシ「それ西方は十萬億土。遠く生まるる道ながら。ここも己心の彌陀の國。貴賤群集の稱名の聲

ワキヅレ（二人）「日々夜々の法の場

ワキ「げにも誠に攝取不捨の

ワキヅレ「誓ひに誰か

【序】前段

舞臺に[illegible]。狂言所の者が登場して、「遊行上人より十四代目の他阿彌上人が當地に來て、說法して居られるが、日中に獨り言をいはれるので、皆の者が不思議に思つてゐる」と、まづ本曲の序詞を述べる。

【一】さてワキ僧（他阿彌上人）がワキヅレ從僧を從へて登場。

僧「西方極樂淨土は、遠い十萬億里の彼方にあるのだが、悟りを開けば、そのやうな遠くに求める必要はない。そのありがたい極樂、阿彌陀如來の國が、それ〴〵自分の心の中にあるのだ。このやうに日夜々、貴い者も賤しい者も說法場へ群集して、念佛を稱へれば、阿彌陀如來が『衆生を一人殘らず淨土へ迎へ取つてやらう』と仰せられた御誓願に、誰も漏れることはないのだ。

○獨りなほ—「獨りなほ佛の御名を尋ね見んおのおの歸る法の庭人」といふ古歌を引いたのであらう。この歌〔誓願寺〕〔佛原〕にも見え一遍上人の詠であるといふ。説法聽聞の人々が歸つた後までも、なほ獨り居殘つて念佛を申さうとの意。
○知るも知らぬも—法の道を知る人も知らない人も佛に導かれて。
○誓ひの網—彌陀が衆生を漏れなく救ふとの誓願を網に喩へた語。
○知る人も—前の「知るも知らぬも」は衆生の側よりいひ、これは佛の側よりいふ。
○彼の國—西方淨土。
○法の船—法を乘りにいひかけた。
○浮かむもやすき—船の海に浮かぶと、衆生の極樂に浮かび生まれると、二意に兼ねて用ゐた。
【三】
○笙歌遙かに聞ゆ—大江定基(寂昭)臨終の詩句「笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前」を引いた。笙歌は音樂の聲、聖衆は佛菩薩、落日は淨土のある西方。
○紫雲—佛の國に立つ雲。瑞雲。
○寄りもつかずは—波の縁

ワキ『殘るべき

ワキ ワキヅレ 上歌『獨りなほ。佛の御名を尋ねみん。おのおの歸る法の場。知るも知らぬも心引く誓ひの網に漏るべきや、知る人も。知らぬ人をも渡さばや彼の國へ行く法の船浮かむもやすき。道とかや浮かむもやすき道とかや

【三】

シテ老翁、面朝倉尉・尉髪・襟淺黃・着附無地熨斗目・絓水衣・腰帶・數珠の裝束にて、ワキ上歌の「彼の國へ行く」あたりにて幕を出で、靜かに橋懸一の松に立ち、上歌終ると、

シテサシ『笙歌遙かに聞ゆ孤雲の上。聖衆來迎す落日の前。あらたふとや今日も又紫雲の立つて候ぞや(と舞臺に向ひ合掌し)。『鐘の音念佛の聲の聞え候。さては聽聞も今なるべし。さなきだに立居苦しき老の波の。寄りもつかずは法の場に。よそながらもや聽聞せん。『一念稱名の聲のうちには。

皆の者が家へ歸つた後まで、自分は居殘つて念佛を稱へようと、かう思ふのがよい。いやいやそのやうにしないでも、佛法を知つてゐても知らないでも、阿彌陀如來が救つてやらうと仰せられた御誓願に誰も漏れはしないのだ。自分の知つてゐるものも、知らない者も、皆極樂へ渡してやらうと仰せられるのだ。なんと容易に成佛の出來る道てはないか」

と説法する。

【三】

前シテ齋藤別當實盛の亡靈、老翁の姿で登場。説法場に近づく心で、

老翁「妙なる音樂が雲の上に聞えて、夕日の入る西の方から佛菩薩がお迎へ下さるのだ。(説法場の方を見て)あゝ尊いことだ。今日もあのやうにありがたい紫雲が立つてゐる。おゝ鐘の音や念佛の聲が聞える。さうだ、聽聞をするのに、今が丁度よい時だ。さうはいふものの、このやうに立居さへ不自由な足では説法場へ寄りつくことが出來まいが、他所ながらでも聽聞しよう。「一度念佛すれば、佛は光明を遍く照らして、淨土へ迎へ取つてや

で、寄り藻（波に打寄せられた藻）といひかけた。老人の足で、なかなか說法の場に寄りつけないとの意。○一念稱名―一聲の念佛。○老眼の通路―老眼の曇つて說法場へ通ふ路の明かでない意と、迷ひの心が離れないで成佛出來ない意と、兼ねて用ゐた。○ここを去る事遠かるまじや―說法場の遠くないことと、極樂世界はわが心にあつて遠くないことと兼ねていふ。觀無量壽經に「爾時世尊告二韋提希一、汝不レ知阿彌陀佛去レ此不レ遠」と。【三】○天ざかる―鄙の枕詞。○人がまし―人間竝らしい。○彌陀の來迎―人の死ぬ時佛が來て淨土へ迎へ取ること。○かしこうぞ―かしこくぞの音便。よくこそ。○盲龜の浮木優曇華の花―極めて稀な、容易ならぬ事の喩。優曇華は三千年に一度花を開くといふ。法華經妙莊嚴王品に「佛難レ得レ値、如二優曇波羅華一、又如三一眼龜値二浮木孔一」○老の幸ひ身に越え―新葉集序に「老の幸望みに越え喜びの涙袂にあまれり」○この身ながら―この身の

攝取の光明曇らねども。老眼の通路猶以て明らかならず。よしよし少しは遲くとも（と舞臺に進み）。ここを去ること遠かるまじや南無阿彌陀佛

（と常座にてワキに向ひ下に居て合掌す。）

【三】ワキ「いかに翁。さても毎日の稱名に怠ることなし。されば志の者と見る處に。おことの姿餘人の見る事なし。誰に向つて何事を申すぞと皆人不審しあへり。今日はおことの名を名のり候へ

シテ「これは思ひもよらぬ仰せかな。もとより所は天ざかる。鄙人なれば人がましやな名もあらばこそ名のりもせめ。唯上人の御下向。偏に彌陀の來迎なれば。『かしこうぞ長生して。』この稱名の時節の逢ふ事。『盲龜の浮木優曇華の。花待ち得たる心地して。老の幸ひ身に越え。悅びの涙袂にあまる。さればこの身ながら。安樂國に

らう」と仰せられるが、このやうな老人の曇つた眼では通うて行く道先も見えず、迷うた心では成佛も出來ない。いやいやたとへ早くは行けなくとも、たゆまず進めば、やがては行き着くことも出來るのだ。決してさう遠い所ではないのだから。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」

といつて說法場に着く。

【三】僧「（僧はこの老人を見て、）お、御老人、よく毎日怠らずに念佛せられることだ。さぞ信心の深い人だと思ふが、そなたの姿が外の者には見えないので、わしがそなたと話をするのを、一體誰に向つて何をいふのだらうと、皆の人が不審がつてゐるのだ。今日はそなたの名をお名乘りなされ」

老翁「これは思ひも寄らぬことを仰せられる。もとより田舍者で、人並の名もないのに、名前など申しあげられもしませぬ。たゞ上人が御下向遊ばしたのは、全く阿彌陀如來がお迎へ下さるのと同じことなので、まあよくこそ長生きをして、この念佛の時に逢ふことが出來たものだと、盲目の龜が大海で浮木を見つけたやうな、三千年に一度しか咲かない優曇華の花を見たやうな心地がしまして、老人の仕合この上もなく、嬉し涙に咽んでゐるのでございます。かうなれば、この身こ

まゝで。
○安樂國―極樂淨土のこと無量壽經に「無レ有二三途苦難之名一、但有二自然快樂之音一」是故其國名曰二安樂一」
○輪廻妄執の閻浮―輪廻は衆生が生死の迷界六道に車輪の如く轉々して行くこと。妄執は執着の心の深いこと。閻浮はこの現世。
○懺悔の廻心―懺悔はわが罪を告白すること。廻心は心を變へて邪より正に移ること。
○なかなかの事―然り。室町時代の通用語。
○長井―武藏國大里郡の莊名。今の淺草邊といふ。
○齋藤別當實盛―鎭守府將軍藤原利仁の後裔で、世々越前國に居たが、實盛の時に武藏國長井に移り、義朝に仕へた。後平宗盛に仕へ、維盛に從つて義仲と戰ひ、壽永二年五月二十一日加賀國篠原で討死した。行年七十三。
○篠原―加賀國江沼郡にある。

生まるるかと。無比の歡喜をなす處に。輪廻妄執の閻浮の名を。又更めて名のらん事。口惜しうこそ候へとよ（と面を伏す）

ワキ「げにげに翁の申す所理至極せりさりながら。一つは懺悔の廻心ともなるべし。唯おことが名を名のり候へ

シテ「さては名のらでは叶ひ候まじきか

ワキ「なかなかの事急いで名のり候へ

シテ「さらば御前なる人を除けられ候へ。近う參りて名のり候べし

ワキ「もとより翁の姿餘人の見ることはなけれども。所望ならば人をば除くべし。近う寄りて名のり候へ

シテ立ちて眞中へ出で下に居て、

シテ「昔長井の齋藤別當實盛は。この篠原の合戰

のまゝ、極樂に生まれることが出來ようかと、大悦びをしてゐるのでございます。それだのに、輪廻の生死に苦しむ、迷妄執着の強いこの娑婆の時の名を、今更名乘れと仰せられるのは、あまりに口惜しうございます」

僧「いかにも御老人のいはれることは尤も至極だが、一つには罪を懺悔して心を悔い改める便りともならうから、是非名をお名乘りなされ」

老翁「それでは、名乘らないではいけませんかな」

僧「さうです、すぐお名乘りなされ」

老翁「では、上人の御前に居る人達を除けて下さい。近う參つて名乘りませう」

僧「もとより老人の姿は外の人には見えないのだが、お望みならば人を除けませう。近う寄つてお名乘りなされ」

そこで人々は除けられ、老翁は近く〈寄つた體で、

老翁「昔長井の齋藤別當實盛は、この篠原

○深山木のその梢とは見えざりし―下句「櫻は花にあらはれにけり」詞花集源頼政の歌を引いて、この老人が實盛であることを仄めかした。

○魂、魄―禮記に「魂氣歸ニ

に討たれぬ。聞しめし及ばれてこそ候らめ

ワキ「それは平家の侍弓取つての名將。そのいくさ物語は無益。唯おことの名を名のり候へ

シテ「いやさればこそその實盛は。この御前なる池水にて鬢鬚をも洗はれしとなり。さればその執心殘りけるか。今もこのあたりの人には幻の如く見ゆると申し候

ワキ「さて今も人に見え候か

シテ『深山木のその梢とは見えざりし。櫻は花に顯れたる。老木をそれと御覽ぜよ

ワキ『不思議やさては實盛の。昔を聞きつる物語。人の上ぞと思ひしに。身の上なりける不思議さよ。「さてはおことは實盛の。その幽靈にてましますか

シテ「われ實盛が幽靈なるが。魂は冥途にありな

の合戰に討たれたのですが、お聞き及びでございませうな」

僧「その實盛といふのは、平家の侍の中でも、勝れた勇士であつたが、その軍物語は今は無用だ。それよりもそなたの名をお名乘りなされ」

老翁「いやその事です、その實盛はこのお前の池の水で鬢鬚を洗はれたとの事です。それで、ここに執心が殘つたものか、今でもこのあたりの人には幻のやうに見えるとの事です」

僧「おゝそれでは今も人に見えますか」

老翁――「深山木のその梢とは見えざりし、櫻は花に顯れにけり」と申す歌のやうに、老人の姿をしてゐるのが、その實盛たとお察し下さい」

僧「これは不思議だ、實盛の昔物語を聞いて餘所事と思つてゐたのに、さてはこちらの事であつたのか。それでは、そなたが實盛の幽靈なのですか」

老翁「いかにも實盛の幽靈です。討死の後、

于天一、形魄歸二于地一」とあるので、冥途を天に擬し、地をこの世に擬したのである。
○二百餘歳ー本曲の事件を實盛歿後二百餘年、卽ち應永頃の事件とした。狂言口開の詞によれば、このワキ僧は遊行上人より十四代後の他阿彌上人で、凡そ年代は符合する。
○池のあだ波よるとなくー波の寄るを、夜にいひかけた。
○思ひをのみ篠原のー思ひをのみしてを地名にいひかけた。
○翁さび人な咎めそー伊勢物語の歌「翁さび人な咎めそ狩衣けふばかりとぞ田鶴も鳴くなる」の上句を引き、老人がかりそめに現れ出たのを咎め給ふなといふ。翁さびは老人らしいとの意で、草葉の霜の置きといひかけた。かりそめは歌の第三句狩衣の音から轉じたのである。

がら。魄はこの世に留まりて
ワキ『猶執心の閻浮の世に
シテ「二百餘歳の程は經れども
ワキ『浮かみもやらで篠原の
シテ『池のあだ波よるとなく。
ワキ『晝ともわかで心の闇の
シテ『夢ともなく
ワキ『現ともなき
シテ『思ひをのみ
シテ上歌『篠原の。草葉の霜の翁さび
地『草葉の霜の翁さび。人な咎めそかりそめに。現れ出でたる實盛が。名を洩らし給ふなよ（と居立ち）。亡き世語も恥かしとて（と立ち）、御前を立ち去りて。行くかと見れば篠原の池のほとりにて姿は幻となりて、失せにけり幻となりて失せに

魂は冥途に歸りましたが、魄はこの世に留まり、やはりこの憂き世に執心が殘つて、二百年餘りを經た今日までも、まだ成佛が出來ないで、この篠原の池のあたりに、夜となく晝となく、夢ともなく現ともなく、思ひ迷つてゐるのでございます。草葉の蔭から「このやうな老人姿で、一寸現れたのですが、實盛だと申すことを、他の人にお漏らし下さるな。人の噂に殘るのも恥かしいことです」

といつて、上人の前を立ち去つて行くかと思ふと、篠原の池の邊で姿は幻となつて消えてしまつた。

前ジテ老翁消え去る態にて退場。

けり

「行くかと見れば」と仕手柱際へ行き「池のほとりにて」と正面へ三四足出で、「幻となりて」と後へ下り、謠終りて靜かに中入。

【間】　狂言、仕手柱先へ出で、
眞中に出でワキに向ひ下に居て、

狂言「何と御上人の獨言を仰せられたると申すか。されば不審を申さばやと存ずる

狂言「今日は遲なはり申して候

ワキ「何とて怠られて候ぞ

狂言「尤も早々參り申したく候へども。用の事多く遲なはり申して候。さて御上人へ不審申したき事の候。毎日日中の前後に獨言を仰せ候間。篠原の面々不審なりと申し事にて候。某は御側近く參るものなれば。不審をなし申せとの事にて候。何と申したる御事にて候ぞ

ワキ「何と日中の稱名の折節。愚僧が獨言を申すと篠原の面々不審と候や

狂言「なか〳〵の事にて候

ワキ「それにつき尋ねたき事の候。思ひもよらぬ申し事にて候へども。古この篠原の合戰に。長井の齋藤別當實盛の果て給ひたる樣體。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「是は思ひもよらぬ事を御尋ねにて候。左樣の事委しくは存ぜず候が。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「さる程に長井の齋藤別當實盛と申したる人は。北國方の人にて御座ありたるが。中頃源氏へ參

【間】

○申し事にて候―皆の者が話し合ひ、噂をしてゐることです。

○拔群―非常に。甚だ。

○そでない―「さうでない」の訛。

○亡心―亡靈。

○踊念佛―念佛をどりに同じ。

り給ひ。武藏の長井の莊を賜はり。長井の齋藤別當と御名乘りありたると申す。石橋山合戰の時とやらん。又平家へ參り給ふ。この篠原の合戰は二百年には拔群あまりたると申す。然るに平家は木曾義仲を討ち取り。それより頼朝を亡ぼさんとて。その勢十萬餘騎を北國へさし下す。木曾殿は五萬騎にて出で合ひ。色々合戰ありたると申すが。實盛は拔群の老武者にて鬢鬚白く候間。若々しく出で立ち討死せんと。鬢鬚を墨にて染め。具足の札(さね)をなめしにて拵へ。咽喉輪(のどわ)にはさいかちを持ちて作り給ひ候は。一段の若武者に見えたると申す。然るにこの所の合戰に。平家方負け軍(いくさ)になり候間。實盛はよき敵もがなと控へ給ふ處に。木曾殿の兵に早き者がつうと寄つて。耳の下よりかき落し。その首を木曾殿の御前にて。由緒ありさうな首ぢやとあつて。色々と詮議ありしに。實盛の首と申す者もあり。そでないと申す者もあり。兎角濯がせて御覽候へとて。この篠原の池水にて濯がせて御覽あれば。正身の齋藤別當の首にて候間。弓取は誰もかやうの嗜みにてありたきとて。皆々涙を流されたると申す。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。この程日中の稱名の折節。いづくともなく老人一人來られ候程に。いかなる人ぞと尋ねて候へば。古の軍物語候ひて。實盛の幽靈といひもあへず。池のほとりにて姿を見失うて候よ

狂言「さては日中の前後に獨言を仰せ候も。實盛の御亡心現れ給ふと存じ候間。實盛の御跡を御弔ひあれかしと存じ候

ワキ「我等もさやうに存じ候間。池のほとりに立ち越え。臨時の踊(をどり)念佛を以て。かの御跡を弔ひ申さうずるにて候間。この由篠原の面々へ相觸れ候へ

狂言「心得申して候

仕手柱先に出で、

狂言「皆々承り候へ。實盛の御跡御弔ひの爲。御上人篠原の池のほとりにて。臨時の踊念佛を御弔ひなされ候間。篠原の面々皆々參られ候へ。その分心得候へ〳〵。

ワキに向ひ、

狂言「相觸れ申して候

ワキ「近頃にて候

狂言切戸より引く。

ワキ床几を外しその場に立ちて、

【四】

ワキ「いざや別時の稱名にて。かの幽靈を弔はんと

と謠ひながら、ワキヅレと共に眞中へ出で向合ひて、

ワキ ワキヅレ上歌（待謠）「篠原の。池のほとりの法の水。池のほとりの法の水。深くぞ頼む稱名の聲澄み渡る弔ひの。初夜より後夜に至るまで。心も西へ行く月の光とともに曇りなき。鉦を鳴らして夜もすがら

ワキ「夜もすがら」と正面に向き下に居り合掌して、（ワキヅレは地謠座前に歸る）

【四】　後段

僧「さあ別時の念佛をして、あの實盛の幽靈の廻向をしよう」

といつて、篠原の池の邊で法事をして、阿彌陀如來を深く頼み奉り、念佛の聲を上げ、夕暮から明方まで、月の光ばかりか心まで西方淨土へ誘はれて行くやうな心持になつて、夜通し鉦を鳴らして、

【四】

○別時の稱名—如法念佛ともいふ。一定の日を限つて特別の念佛勤行をすること。

○法の水—池邊の念佛によそへていふ。次の「深く」「澄み渡る」は水の緣語。

○初夜、後夜—一晝夜を六時に分けて念佛す。晝は晨朝、日中、日歿の三、夜は初夜、中夜、後夜の三で、初夜は今の午後八時、後夜は午前四時に當る。

○心も西へ行く—月ばかりでなく、心も西方淨土へ誘はれて行く。

【五】
○輪廻の古里―生死流轉する迷界、六道。殊にこの娑婆世界を指していふ。
○歡喜の心―往生要集に「永越二過苦海一、初往二生淨土一、爾時歡喜心不レ可二以レ言宣一」
○不退の所―再び迷界へ退轉することのない極樂世界往生要集に「一處是不退、永免二三途八難之畏一、壽亦無量、終無二生老病死之苦一」
○無量壽佛―阿彌陀佛の譯語。命は無量といひかけた。
○念々相續する人は―一念(極めて短い時間)毎に即ち絕えず念佛を續ける人は、一念佛毎に極樂往生を得べき功德を積むとの意。
○南無といつぱ即ちこれ歸命―南無は梵語Namasで、その漢譯が歸命である。歸命とは歸命敬禮で、身命を歸投して、佛に敬禮し救濟を求むること。「いつぱ」はいへばの促音便。
○阿彌陀といつぱ―阿彌陀佛は衆生をして往生に至るべき修行を助け給ふ佛で、即ち南無は願、阿彌陀佛は行で、願行一致して往生を遂げるとの意。善導の觀經玄義に「言二南無一者即是歸命、亦是發願廻向之義、言二阿彌陀佛一者即是其行、以二

ワキ『南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

と稱名終りて脇座へ寄り下に居る。

【五】 出端の囃子にて、後ジテ齋藤實盛「面朝倉尉・梨打烏帽子・白垂・白鉢卷・襟淺黃・着附段厚板・法被・半切・腰帶・扇・太刀の裝束にて出で常座に立ち、

後ジテ『極樂世界に行きぬれば、永く苦界を越え過ぎて。輪廻の古里隔たりぬ(と幕の方を見)。歡喜の心いくばくぞや。所は不退の所。命は無量壽佛となう(とワキへ向き)。賴もしや。念々相續する人は

(と正面へ出で)

地『念々毎に。往生す

シテ『南無といつぱ

地『即ちこれ歸命

シテ『阿彌陀といつぱ

地『その行この義をもつての故に

シテ『必ず(と左へ大廻りし)。往生を得べしとなり

僧「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」と稱名念佛する。

【五】 後ジテ齋藤實盛、僧の夢に現れる態で登場。

實盛「自分は極樂世界に行つたので、全くこの苦しい世界を離れ、輪廻生死の迷界から隔たつてしまつた。この上もない悅ばしいことだ。今居る所は極樂世界で、命は限りない。あゝ阿彌陀如來はありがたいものだ。佛は『常に絕えず念佛する者は、一度の稱名毎に極樂往生が出來る』と仰せられ、又『南無といふのは歸命といふ意味で、願ひの心を表し、阿彌陀といふのは、この願ひを入れて衆生をして往生を遂げしめる修行を助け給ふ意である。かういふわけであるから、南無阿彌陀佛と唱へれば、願と行とが一致して、必ず極樂往生が出來る』と仰せられた。誠にありがたいことだ」

斯義ニ故必得ニ往生一」

【六】

○ありつる―先程ゐた。

○心の池と―後撰集讀人不知の歌「小山田の苗代水はたえぬとも心の池のいひは放たじ」を借り、心の池のをいひ難きの序とした。

○修羅の苦患―修羅道に墮ちて戰ふ苦しみ。

地『ありがたや（と常座にてワキへ合掌）

【六】

ワキ『不思議やな白みあひたる池の面に。幽かに浮かみよる者を。見ればありつる翁なるが。甲冑を帶する不思議さよ

シテ『埋木の人知れぬ身と沈めども。心の池といひがたき。修羅の苦患の數々を。浮かめてたばせ給へとよ

ワキ『これ程にまのあたりなる姿言葉を。餘人は更に見も聞きもせで

シテ「唯上人のみ明らかに

ワキ『見るや姿も殘りの雪の

シテ『鬢鬚白き老武者なれども

ワキ『そのいでたちは花やかなる

シテ『粧ひ殊に曇りなき

ワキ『月の光

【六】

僧は夢現に其の姿を認めて、

僧「夜の白んで來た池の面に、浮かび上つて來る者を見ると、前に見た老人だが、甲冑を裝うてゐるのが不思議だ」

實盛「死んで人にも知られないものとなつてしまつたが、何ともいひやうのない修羅道の戰に色々苦しんでゐるのです。どうぞ成佛させて下さい」

僧「これほど眼の前にはつきり姿が見え、言葉まで交はしてゐるのに、外の者には見えも聞えもしないのが不思議だ」

實盛「たゞ上人にだけ明らかにお會ひするのです」

僧「見ればその姿は消え殘つた雪のやうで……」

實盛「鬢鬚の白い老武者ですが……」

僧「その裝束は花やかた出で立ちで……」

實盛「月の光や燈火の影でお分りになる通

○夜の錦―後に引く朱買臣の故事に「夜の錦」といふ語があるので、錦の直垂に冠した。
○錦の直垂―錦で作つた鎧直垂。鎧直垂は鎧の下に着る衣。
○萌黄匂ひの鎧―萌黄の絲で段々に色の薄くなるやうにおどした鎧。
○今の身にては―死んだ後の今では。
○何か寶の池の―何の寶になるべきといふのを寶の池にいひかけた。寶の池は極樂淨土にある八功德池。
○黄金の言葉―佛の言葉を尊んでいふ。「多くせば」は經文を多く唱へればとの意
【七】
○一念彌陀佛卽滅無量罪―一度念佛すれば直に無量の罪をも滅すとの意。慧心僧都の佛心法要に往生本緣經から引いてゐる。
○廻向發願心―わが善根を佛に廻向して極樂に生まれる事を願ふ心。
○さても篠原の合戰破れしかば―以下平家物語の文に據る。原文は解說に掲げた。

シテ『燈火の影

地上歌『闇からぬ。夜の錦の直垂に。夜の錦の直垂に。萌黄匂ひの鎧着て。黄金作りの太刀刀。今の身にては、それとても。何か寶の。池の蓮の臺こそ寶なるべけれ。げにや疑はぬ。法の教へは朽ちもせぬ。黄金の言葉多くせば。などかは至らざるべきなどかは至らざるべき

【七】

シテクリ『それ一念彌陀佛卽滅無量罪

と謠ひながら眞中へ行き床几にかゝる。

地『卽ち廻向發願心。心を殘す。ことなかれ

シテサシ『時至つて今宵逢ひ難き御法を受け

地『慚愧懺悔の物語、猶も昔を忘れかねて。忍ぶに似たる篠原の、草の蔭野の露と消えし有樣語り申すべし

シテ(語)『さても。篠原の合戰破れしかば。源氏の

り、錦の直垂に、萌黄匂ひの鎧を着、黄金作りの太刀刀を佩いて居りますが、死んだ後の今の身には、これは何の役にも立たないのです。それよりも極樂往生が何より望ましいことなのです、いやその成佛も疑ひのないことだ。佛法はいつの世にも衰へることはなく、ありがたい佛の御言葉を幾度も唱へて居れば、成佛の出來ない筈はないのだ」

と自ら念佛のありがたさを悟つた心で、

【七】

實盛「さうだ、佛は仰せられた。「一度南無阿彌陀佛と稱へれば、數限りのない罪も忽ちに消え失せてしまふ。それ故、わが善根を佛に廻向して、往生を願ふ心を忘れるな」と。わしは今宵その時が來て、このやうにありがたい御敎へを受けたのだ。――

お上人、罪を愧ぢて懺悔の物語を申しませう。何だか昔を忘れかねて、討死の思出話をするやうですが……。

さてあの時、味方の軍は篠原の合戰に破

○手塚の太郎光盛—信濃國諏訪の住人、木曾義仲の臣。壽永三年正月近江國勢田で討死した。
○木曾殿—義仲。「木曾」「巴」など參照。
○曲者—一癖ある者。普通とは違つたえら物。
○つづく勢—附隨する部下の兵。
○坂東聲—關東訛りの聲。
○樋口の次郎—名は兼光。今井兼平の兄。後義經に捕はれて斬られた。
○あなづられん—侮られん

方に手塚の太郎光盛、木曾殿の御前に參りて申すやう。光盛こそ奇異の曲者と組んで首とつて候へ。大將かと見ればつづく勢もなし。又侍かと思へば錦の直垂を着たり。名のれ名のれと責むれども終に名のらず。聲は坂東聲にて候と申す。木曾殿あつぱれ。長井の齋藤別當實盛にてやあるらん。然らば鬢鬚の白髪たるべきが。黒きこそ不審なれ。樋口の次郎は見知りたるらんとて召されしかば。樋口參り唯一目見て（と下を見）。涙をはらはらと流いて。『あなむざんやな。齋藤別當にて候ひけるぞや。實盛常に申ししは。六十に餘つて軍をせば。若殿原と爭ひて。先をかけんも大人氣なし。又老武者とて人々に。あなづられんも口惜しかるべし。鬢鬚を墨に染め。若やぎ討死すべき由。常々申し候ひしが眞に染

れたのですが、源氏方の手塚太郎光盛と申す者が、木曾義仲殿の御前へ參つて申すには『私はえらいしたゝか者と組みあつて、首を討ち取りました。それが大將かと思ふに、部下として續いて來る者もなし、普通の武士かと思へば、錦の直垂を着て居りまする。名乘れ〳〵と責めたのですが、終に名乘りませぬ。聲は關東訛りでございました』と申します。木曾殿『おゝそれでは、長井の齋藤別當であらう。しかしそれだとすれば、鬢髮が白髮でなければならないのに、黒いのが不審だ。さうだ、樋口次郎は見知つてゐるだらう』といつて、樋口をお召しになると、樋口は御前に參りたゞ一目見て、涙をはらはらと流し、『あゝ氣の毒なことだ。これは齋藤別當實盛でございます。實盛がいつも申しますには、六十歳を超えて軍をしては、若い人達と競爭して先驅けするのも大人げなし、又老武者だといつて人々に侮られるのも口惜しい。鬢髮を墨に染め、若作りにして討死するのだと、かう申して居りましたが、ほんとに染めて居ります。洗はせて御覽なさいませ』と申しました。——

○氣晴れては―和漢朗詠集都良香の詩句「氣霽風梳二新柳髪一、氷消浪洗二舊苔鬚一」を引いた。原詩では新柳舊苔を髪鬚に喩へたのであるがこゝでは逆に新柳舊苔を髪鬚の形容に用ゐた。

○弓取―武士。

○宗盛公―平淸盛の次子。

めて候。洗はせて御覽候へと（扇を開き）。申しもあへず首を持ち（床几より下り首を持ち上ぐる心にて扇に左手を添へ）

地「御前を立つてあたりなる（立ちて正面先へ出で）。この池波の岸に臨みて。水の緑も影うつる（下を見）。柳の絲の枝垂れて

地上歌「氣霽れては。風新柳の髪を梳り。氷消えては。波舊苔の。鬚を洗ひて見れば（膝をつき扇にて鬢鬚を洗ふ形）。墨は流れ落ちてもとの。白髪となりにけり（と立ち）。げに名を惜しむ弓取は（常座へ行き）。誰もかくこそあるべけれや（扇を打合せ）。あらやさしやとて皆感涙をぞ流しける（とあたりを見渡す）

これより謡に合せて舞ふ。（舞クセ）

地クセ「又實盛が。錦の直垂を着ること私ならぬ望みなり。實盛。都を出でし時。宗盛公に申すや

そして早速、その首を持つて木曾殿の御前を立ち、この池の岸へ來て、柳の木蔭で、美しく見えた髪、澤山あつた鬢を洗つて見ると、墨は流れ落ちて、もと通りの白髪となつたので「誠に名を惜しむ武士は誰もかくありたいものだ、優しい心掛だ」といつて、皆感涙に咽んだのでした。――

さて又、この實盛が錦の直垂を着ましたのは、わが望み一つで勝手にしたのではありません。私が都を出ます時、宗盛公

○故郷へは錦を着て―後に引く朱買臣の故事。漢書項羽傳にも「富貴不レ歸ニ故郷一、如ニ衣レ錦夜行一」
○御領に附けられて―宗盛の御領所長井庄を預けられて。
○もみぢ葉を分けつつ行けば錦着て家に歸ると人や見るらん―後撰集秋、讀人知らずの歌。
○朱買臣―前漢武帝の代の人。初め貧困で、薪を賣つて食を求め、薪を擔ひながら讀書してゐたので、その妻もこれを恥ぢて自ら求めて去つた。後次第に重く用ゐられて遂に會稽の太守となつた。その時武帝に「富貴不レ歸ニ故郷一、如ニ衣レ錦夜行一」と勸められて、故郷呉國に入ると、もとの妻これを見て深く愧ぢ縊死したといふ。前漢書六十四卷に委しく見えてゐる。
○有明の―名は末代に殘りてありをいひかけた。

【八】

う。故郷へは錦を着て。歸るといへる本文あり。實盛生國は。越前の者にて候ひしが。近年。御領に附けられて。武藏の長井に居住仕り候ひき。この度北國に。罷り下りて候はば。定めて。討死仕るべし。老後の思出これに過ぎじ御免あれと望みしかば。赤地の錦の直垂を下し賜はりぬ

シテ「然れば古歌にももみぢ葉を

地「分けつつ行けば錦着て。家に歸ると。人や見るらんと詠みしもこの本文の心なり。されば古の。朱買臣は。錦の袂を會稽山に飜し。今の實盛は名を北國の巷にあげ。隱れなかりし弓取の。名は末代に有明の。月の夜すがら懺悔物語申さん

と舞ひ上げて常座にてワキに向く。

【八】 ワキシテに向ひ、

地ロンギ「げにや懺悔の物語。心の水の底淸く。濁

に申しあげますには、「格言にも錦を着て故郷へ歸ると申します。私の生國は越前でございますが、近年御領所をお預りして、武藏國長井庄に居住致したのでございます。今度北國へ下りましたならば、定めて討死致す事でございませう。故郷へ歸る老後の思出に、これに上越すものはございません。どうぞ御許し下さいませ」と、かうお願ひ申しましたので、赤地の錦の直垂を賜つたのです。古歌にも「もみぢ葉を分けつつ行けば錦着て家に歸ると人や見るらん」と申すのも、この心を下に置いて詠んだものです。かうして、昔支那の朱買臣は會稽の太守となつて、錦を着て故郷に誇り、今この實盛は故郷の北國に武功を立てて、名を末代に殘したのです。この月の夜、夜中なほも懺悔の物語を申しませう」

【八】 僧「いかにも、そのやうに懺悔物語をし

○ここに木曾と―再びこゝに來てを木曾義仲にいひかけた。
○たくみしを―企てたのに

○主を討たせじ―主は手塚太郎を指す。

○ぐんでうずよ―平家物語の原文に據つたものであるが、この解釋については、「組んで討つよ」―組んで失すよ」「軍上手よ」「組んで落すよ」「組まんとするよ」など、古來諸説あつて決し難いが、ここでは「組んで失すよ」と解した方が適當であらうと思ふ。
○鞍の前輪―鞍の前の山形に高くなつてゐる所をいふ
○弓手―左手。

りを残し給ふなよ

シテ『その執心の修羅の道。めぐりめぐりて又ここに木曾と組まんとたくみしを。手塚めに隔てられし（扇を横にして形を示し）。無念は今にあり

地『續くつはもの誰々と。名のる中にもまづ進む（と敵を見る心にて目附柱の方を見）

シテ『手塚の太郎光盛

地『郎等は主を討たせじと

シテ『かけ隔たりて實盛と

地『押しならべて組む處を

シテ『あつぱれ。おのれは日本一の。剛の者と。ぐんでうずよとて。鞍の。前輪に押しつけて（兩手を擴げて角へ行き）。首かき切つて。捨ててンげり（扇にて首をかき切る形）

地『その後手塚の太郎。實盛が弓手にまはりて。

て、悟りの道に入り、迷ひの心をお離れなされ」

實盛「おゝかうしてゐるうちに、又しても修羅道の苦しみが迫つて來ました。（＝修羅道の苦に責められる心で）おゝ木曾と組討ちしようと思つたのに、手塚の奴に隔てられたのが、今だに殘念だ。――あの時、續いて來る者が誰々と名乘る中にも、手塚太郎光盛が先づ進み出たが、またその郎等がわが主人を討たしてはならぬと、更に手塚との中を隔てて、この實盛と組み討つて來た。『おゝ天晴れの奴だ。日本一の剛の者と組討ちをして死なうとするのか』と、鞍の前輪に押しつけて、その郎等の首をかき切つて捨てた。――

その後、手塚太郎がこの實盛の左側に廻

○草摺―鎧の腰のまはりに垂れた部分。
○二匹が間に―二人の乘つた馬の間に。
○枯木の―枯木の如く。
○落ち合ひて―落ち重なつて。
○影も形も南無―影も形もなしといひかけた。

草摺をたたみあげて。二刀さす處をむずと組んで二匹が間に。どうと落ちけるが（兩手を組みて膝をつき）

シテ「老武者の悲しさは

地「軍にはしつかれたり（と立ち）。風にちぢめる。枯木の力も折れて。手塚が下に。なる處を（安坐し）。郎等は落ち合ひて（居立ちて橋懸を見）。終に首をば搔き落されて（扇にて形をし）。篠原の。土となつて。影も形もなき跡の影も形も南無阿彌陀佛（と立ち）。弔ひてたび給へ跡弔ひてたび給へ

（と常座にてワキへ合掌し、直して留拍子を踏む。）

り、草摺を上へあげて、二刀刺してかかつたので、直樣取組んで、二人は馬と馬との間にどうと落ちたが、老武者の悲しさに、はや戰にし疲れ、風に折れる枯木のやうに、手塚の下に組み伏せられた。

そこへまた郎等が來合はせて、終に首をかき落し、篠原の土となつて、影も形もなくなつたのです。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。どうぞ私の後世を弔つて下さい―

（といつて退場。）

〔考異〕

諸流（五流）

【二】シテ「笙歌遙かに……紫雲の立ちて候ぞや（寶下懸いかに人々日中の稱名は始まりて候か）……さては聽聞も今なるべし（下懸ナシ）

【四】ワキ「いざや別時の稱名にてかの幽靈を弔はんと（下懸ナシ）　【六】ワキ「不思議やな白みあひたる……　地ー歌　闇からぬ……などかは至らざるべき（剛ナシ）　【七】（下懸ワキ「見申せば猶も輪廻の姿なり。その執心をふり捨てて。彌陀即滅の臺に至り給ふべし）シテクリ

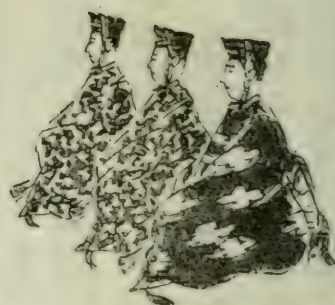
「それ一念彌陀佛……シテ「さても……然らば鬢髭の白髪たるべきが（寶下懸それならば義仲が上野にて見し時鬢髭の霞字なりし程に。今は定めて白髪たるべきが）黒きこそ不審なれ……

古謠本　（光悦本）

【一】ワキサシ「それ西方は……貴賤群集の稱名の聲（光ナシ）……　【三】ワキ「いかに翁……餘人の（光目に）見る事なし……

【七】シテ「さても篠原の……曲者と組んで首とつて（光参て）候へ

佐保山　春

解説

【能柄】　脇能　複式夢幻能

【人物】　ワキ　藤原俊家、**ワキツレ**　同從者（三人）、
前シテ　里女（佐保山姫靈）、**前ツレ**　同侍女、
狂言　所の者、**後シテ**　佐保山姫

【所】　大和國　佐保山

【時】　平安末期　二月初中の日

【作者】　能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作としてゐる。
金春禪竹の歌舞髓腦記などにも本曲のことを記してゐる（後に揭げる）

【梗概】　藤原俊家が春日に參詣して、かなたの佐保山に白雲のやうにかかつてゐるものを見て、不審に思ひ、山に登つて見ると、女が「裁ち縫はぬ衣」を晒してゐるのであつた。この女といふのは實は佐保姫で、やがて眞の姿を現して舞を舞ひ、御代を壽ぐ。

【出典】　佐保姫は秋を司る龍田姫に對し、春を司る神として、古くから歌に詠まれてゐるので、これに關する和歌などを集めて春の曲を作つ

たもので、世阿彌の能作書に所謂「名所舊跡の縁に作りなして、一座見風の曲感」をなしたものであつて、別に重だつた典據といふほどのものはない。

【概評】金春禪竹の歌舞髓腦記に、寵深花風の例として本曲を擧げ「にほひあるすがた」として、

後もうし昔もつらしさくら花、うつろふ空の春の山かぜ

といふ歌を掲げ、また五音三曲集にも、祝言第四行體曲味皮味の例として、本曲の前ジテサシ「面白や名所は樣々」から、上歌の終「空や雲までにほふらん」まで（現行曲と同一文句）を掲げてゐるのを見ると、今は金春流に殘つてゐるだけであるが、昔は餘程尊重されたものらしい。

さて本曲が春の女神を主題としてゐるのに對し、秋の女神を題としたものに〔龍田〕がある。兩者とも春秋の和歌を主な材料としたもので、更にこれを祝言物として神德を讃へる爲に、本曲では春日明神を、かの曲では瀧祭の神を說いてゐる。材料の多寡からいへば、本曲は〔龍田〕よりも遙かに少くて、物足りなく感じさせるのであるが、謠曲の通弊ともいふべき、ワキとシテとの難詰問答の比較的少いことは、春の曲といふ點から見て、すがすがしく感じさせてよい。

【一】前段

舞臺は初め京間で、ワキ藤原俊家ワキヅレの從者を隨へて登場。

次第の囃子にて、ワキ藤原俊家、大臣烏帽子・上頭掛・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ從者三人、ワキと同樣の裝束にて舞臺に入り向合ひて、

ワキ・ワキヅレ次第「立つ旅衣春とてや。立つ旅衣春とてや、心ものどけ、かるらん

地取にワキは正面に向ひ、

ワキ「抑もこれは藤原の俊家とはわが事なり。さても和州春日の明神は。氏の神にて御座候程に。

と次第を謠つて、春の心持を述べ、

俊家「春の旅に出かける爲か、心も何となくのんびりすることだ」

俊家「自分は藤原俊家です。さて大和國春日の明神は、わが氏神だから、この春帶にお暇を賜はつて、これから春日明神に

【一】○立つ旅衣―立つを裁つにかけて、旅衣を出し、衣の縁語張るにかけて春を出した。

○藤原の俊家―道長の孫、賴宗の子。大宮右大臣と呼ばる。古今著聞集に「大宮右大臣殿上人の時、南殿の櫻さかりなる頃、上伏よりまだ裝束をも改めずして、御階のもとにて一人花をながめられたり。霞みわたれる大内山の春の曙の世に知らず心澄みければ、高欄に

よりかゝりて、扇を拍子に打ちて、櫻人の曲を數遍歌はれけるに……」と櫻を愛したことが見えてゐるので、本曲のワキとしたのであらう。
○和州—大和國。
○春日の明神—奈良にあり藤原氏の遠祖天兒屋根命を祀る。「春日龍神」參照。
○天の戸の—天を海に見做し、海の水門などに準へて、天の門といひ、これをまた天の戸とも書くので、戸の開くを明け行くにかけて續けたのである。
○衣かりがねこし方を—衣を借るを雁にいひかけ、雁は春になれば北へ歸るのでその北國の越路を來し方にいひかけたのである。
○よそに南の—よそに見るを南にいひかけた。南の都は奈良をいふ。
○春日の里—今の奈良市。

この春君に御暇を申し。唯今春日の明神に參詣仕り候

ワキ・ワキヅレ向合ひ、

ワキ・ワキヅレ 道行「天の戸の明け行く空の、朝日影。明け行く空の朝日影。霞をわけて白雲の、衣かりがね、こし方を。よそに南の都路や。春日の里に着きにけり。春日の里に着きにけり

ワキ「よそに南の」と正面に向き先へ出でてまたもとへ歸り春日に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

ワキ「さてもわれ春日參詣申し。四方の景色を眺むる處に。あの佐保山の上に當つて見え候は雲にて候やらん

重ワキヅレ正面を見て、

ワキヅレ「いやこれはただ衣を干したるやうに見えて候

ワキ「兎に角に不審に存じ候程に。近く見ばやと

參詣するのです」

と見物人に自己紹介をし、

僧家「ほの〴〵と空が明けて來て、朝日の光がさし出て、霞が一面にたなびいてゐる中を出立して、白雲の空を北へさして歸つて行く雁とは反對に、南の方へと進んで行くうちに、奈良の都春日の里に着いた」

といつてゐるうちに、旅僧は進んで、舞臺は春日の里となる。

僧家「さて自分が春日明神に參詣して、あたりの景色を眺めてゐると、あの佐保山の上の方に何やら見えるが、あれは雲だらうか」

從者「いえあれは衣を乾してゐるやうに見えます」

僧家「とにかく不思議だから、近くに行つ

○佐保山―大和國添上郡にあり、春日山の西北につゞく。

【二】

○日に磨き―新續古今集藤原實継の歌「日にみがき月にざさらす白玉の亂れて落つる布引の瀧」を少し變へて引いた。

○佐保山姫―佐保山の女神春を司る女神として古くから歌に詠まれて來た。

○誓ひ―衆生を利益しようとの神佛の誓願をいふ。

○天の兒屋根―天照大神天岩戸隱れの時、功を立て天孫降臨の時、隨うてこの國土に降つた神で、春日の祭神。

○時もあひあふ―時節も春の日で、神の名の春日の文字と相通ずるとの意。

○東を知るも―知るは支配する意。四季を東西南北に當て「春は東方に配す」ので、これを常陸の鹿島明神が東國を支配すとの意にかけていつたのである。

○鹿島野―春日野の異名。常陸の鹿島にかけていふ。春日四座の一柱武甕槌命は鹿島明神である。

○緑も同じ―春日明神と鹿島明神と同一體であるとの意を、若草がすべて緑色であるとの意にかけていふ。

思ひ候。皆々佐保山にのぼり給へ

といひて一同脇座へ行き下に居る、

【二】

眞一聲の囃子にて、シテ里女、面増・鬘・鬘帯・襟白・着附摺箔・唐織着流・扇の裝束、ツレ侍女、面小面・鬘・鬘帯・襟赤・着附摺箔・唐織着流の裝束にて橋懸に出で、ツレは一の松、シテは三の松にて向合ひ、

シテ ツレ 一聲「日に磨き。風にさらせる玉衣の。春の日影も。匂ふなり

二人とも正面に向き、

ツレ 二句「佐保山姫の雲の袖。シテ ツレ（向合ひ）「緑も靡く。氣色かな

といひて舞臺に入り、ツレは眞中に、シテは常座に立ちて、

シテ サシ「面白や名所は樣々多けれども。わきて誓ひも影高き。天の兒屋根の神代より。誓ひの末も明らけき。月に照り添ふ春の日の。御影を四方に春日山廣き惠みのありがたさよ。殊更に時もあひあふ春の色。東を知るも鹿島野や、緑も同じ若草の。山は南の。都の空。曇らぬ神の。時

て見よう。さあ皆佐保山にお登りなさい」

從家來等佐保山に登つた態で、舞臺は佐保山となる。

【二】

前ジテ佐保山姫の神靈里女の姿で、ツレの侍女を伴つて登場。

里女「このやうに日で磨き風で晒した玉衣で、春の日影も匂ふやうです」

侍女「佐保山姫の雲の袖の色で、あたり一面緑になつた趣でございます」

里女「あゝ面白い景色だ。名所はあちらこちらに澤山あるが、殊にこの所は神の御利益が深く、この神を天兒屋根命と申しあげた神代よりこの方、今日に至るまで、御神德があらたかで、春の日のやうた輝い御光をこの春日山から四方へ廣くお惠み下さるのは、ほんとにありがたいことです。殊に今は神の御名の文字通りな春の日で、東國にお鎭まりになる、この神と御一體の鹿島明神と同じ名の鹿島野か

○若草の山—春日山の北につゞく三笠山をいふ。
○袖白妙の露かけて—衣の袖の袖括りの紐のつゆを天より降る露にかけていふ。
○玉かづら—繰るの枕詞、轉じて「來る」の枕詞とす。
○年の緒—月日の長いことを緒に喩へていふ。
○霞の衣緯薄き—古今集在原行平の歌「春の着る霞の衣ぬきを薄み山風にこそ亂るべらなれ」を借りた。ぬきは横絲。
○うらなる—衣の裏といひかけた。

【三】

○よしありて—由緒があつて。

代かな

シテツレ下歌「こゝはとりわき佐保山の。その山姫の衣ほす。袖白妙の露かけて。上歌「玉かづら來る年の緒の春毎に。來る年の緒の春毎に。霞の衣緯薄き。絲の亂れも天つ日の、のどけき色に、染めなして。猶白衣のうらなる。空や雲間に、匂ふらん、空や雲間に匂ふらん

「空や雲間に」と謠ひながら入替り、シテは眞中に、ツレは脇正面に立つ。

ワキ立ちてシテに向ひ、

【三】

ワキ「われ佐保山に登りて見れば。女性數多來り給ひ。これなる衣を晒せるけしき見えたり。そも御身はこの佐保山に住む人か

シテ「さん候これはこの佐保山のあたりに住む女にて候。又これなる衣は所から。よしありて晒せる衣なり。立ち寄りてよくよく御覽候へ

ら、あの若草山のあたりまで、すべて綠の色に萌え立ち、奈良の都一面のどかな春景色で、ほんとに神德のあらたかな大御代です。

同じ奈良のうちでも、とりわけこの佐保山は山姫が白妙の衣をお乾しになつたので、その袖の露のお蔭で、毎年々々春になると、霞の薄衣がたなびき、そよ吹く風がその衣の絲を亂し、日の光がこれをのどやかな色に染めなして、如何にも美しく、この白衣の匂ひで空までが薫るやうです」

このやうた事をいひながら、衣を晒してゐる態。

藤原俊家はこれを見て、

【三】

俊家「佐保山へ來て見ると、多勢の女が來て、この衣を晒して居られるやうだ」

と獨言をいつて女に向ひ、

俊家「一體あなたはこの山に住んでゐる人ですか」

里女「はい、私どもはこの佐保山のあたりに住んでゐる女です。又この衣は佐保山に由緒があつて晒してゐるのです。傍へ寄つてよく御覽なさいませ」

○銀色輝き―元祿本には「金色かゝやき」とある。
○裁ち縫はぬ衣着し人もなきものをなに山姫の布晒すらむ―古今集伊勢の歌。裁ち縫はぬ衣とは所謂天衣無縫で、仙人の着る衣。この歌は詞書に「龍門にまうでて瀧のもとにてよめる」とあり、實は瀧を詠んだのである。
○なき世の例は―縫ふ事のなきを世に例のなきにいひかけた。
○いさ白衣の―いさ知らずを白衣にいひかけた。
○羽袖―輕やかな袖。

ワキ「げにげにこれなる衣を寄りて見れば。銀色輝き異香薫じ。誠に妙なる白衣の。よくよく見れば縫目もなし。さてこれは何と申す衣にて候ぞ

シテ「げによく御覧じとがめて候。これは人間の織り衣にあらずある歌に。『裁ち縫はぬ衣着し人もなきものを。「なに山姫の布晒すらんと。かやうに詠みしもこの衣なり

ツレ『もとより山に住人の。人間の交はりなき故に。かかる衣も世の常ならず

シテ『その上仙人の衣をば。シテツレ『裁つこともなく縫ふことも。なき世の例は稀にだに。いさ白衣の羽袖の色。妙なりと御覧候へとよ

ワキ『げに裁ち縫はぬ衣の事。「仙人の衣と聞きしなり。さては仙郷にや入りぬらむ。然らば御身

僕家「なるほど傍に寄つてこの衣を見ると、銀色に輝き、不思議な匂ひが漂つて、實に立派な衣だ。そしてよく見ると、縫目もない。一體これは何といふ衣です」

里女「おゝよくお氣がつきました。これは人間の織る衣ではありません。ある歌に「裁ち縫はぬ衣着し人もなきものを、なに山姫の布晒すらん」（無縫の天衣を着た仙人も今はゐないのに、山姫はどうしようと思つて、無縫の布を晒してゐるのであらう）と詠んだのも、この衣のことなのです」

侍女「もと〳〵山に住む人々で、人間と交はりをする者でありませんから、このやうな衣も世間並のものとは違ひます」

里女「その上仙人の衣をば「裁つこともなく縫ふこともなし」と申しまして、このやうなものは滅多に世の中にあるものではありませんから、結構なものだと思つて、よく御覧なさいませ」

僕家「いかにも、仙人の衣は裁ちも縫ひもしないものだと聞いてゐました。すると、自分は仙郷へ入つたのであらうか、そし

○佐保姫の霞の衣と―新後拾遺集權中納言爲重の歌「佐保姫の霞の衣おりかけてほす空高き天の香具山」を指したものか。

○絲ノ綠はへて―綠の絲を伸ばして。綠の絲とは草木の綠を喩へていつたのである。

○裁つ事はなどかなかるべき　風が霞を吹き散らす喩。

○嵐に靡く―織る事もあらじを嵐にいひかけた。

も仙女やらむ

シテ「いや仙鄕まではなけれども。所は佐保の山邊なれば。もし佐保姫とや申すべき

ワキ「不思議やさては佐保姫の。霞の衣と詠みたれば。この裁ち縫はぬ薄衣ももしは霞の衣やらむ

シテツレ「いや裁ち縫はぬ衣干せばとて

ワキ「さては霞の衣かとは

シテツレ「あら謂れなの、御言葉や

地（上歌）「裁ち縫はぬ衣干せばとて。佐保姫の。衣干せばとて佐保姫の。袖も綠の絲はへて。縫ふ事はなくとも。霞の衣ならば。裁つ事はなどかなかるべき。これは裁ちもせず縫ひもせず。まして絲もて織る事も。嵐に靡く羽衣の。袖も褄もにほやかに、うららなる日に晒すなり、うら

て又あなたは仙女なのでせうか」

里女「いえ仙鄕と申すほどではありませんが、こゝは佐保山ですから、私のことを佐保姫とでも申しませうか」

僧「これは不思議だ。さては『佐保姫の霞の衣……』といふ歌もあることだから、この裁ち縫ひのしてゐない薄衣は、もしや霞の衣なのでせうか」

里女「いえ、裁ち縫ひのしてない衣を干してゐるからと申して……」

僧「だから霞の衣であらうかと申すのは……」

里女「それは理由のないことです。裁ち縫ひをしない衣を干してゐればとて、霞の衣だとは申せません。佐保姫の衣の袖は綠の絲を伸ばして縫はないにしても、霞の衣であつたならば、風の剪刀で裁たないことはありますまい。この衣は裁ちもしなければ、縫ひもしないもので、まして絲で縫つたものではありません。たゞ風になびく羽衣で、袖も褄も匂やかなものので、それをこののどかな日に晒してゐるのです。……では、こののどかな日に衣を晒しませう」

【四】

○森羅萬象—天地間に森立羅列してゐる一切の現象。あらゆる事物。

○千秋萬德の—千秋は千年の意。

○誰が爲の錦なればか秋霧の佐保の山邊をたち隱すらん—古今集紀友則の歌。

らなる日にや、晒さむ

ツレ「佐保姫の」に地謠座前に行きて下に居る。

シテ地謠濟みて眞中に出で下に居り、(ワキも下に居る)

【四】

地クリ『それ天地開闢の昔より。山海草木に至るまで。萬物悉く成佛して。皆靈驗の。神所たり

シテサシ『とりわき四季を司ること

地『まづ春を守る神といつぱ。この山姫の神德として。草木森羅萬象まで。御影の綠充ち滿てり

シテ『然れば所の名にし負ふ

地『佐保の山河の惠み深く。千秋萬德の春を得て。佐保山姫と顯れ給ふ

(居クセ)

地クセ『誰が爲の、錦なればか秋霧の。佐保の山邊を、たち隱すらんと、ながめけるもこの山の。妙なる秋の景色なり。かやうに治まれる四つの時、いく年々を送りけん。花の春。紅葉の秋の夕時

と使家との對話を中止して、衣を晒し、晒しなが ら次のやうに語る態。

【四】

里女「一體この世にあるもの、山海草木に至るまで一切、この世の開けた始めから成佛したもので、即ちどこもかしこも皆あらたかな神のお出でになる所なのです。

しかし、その中でも一年の四季を司るのは、まづ春を守る神と申せば、この山姫で、その神德によつて、草も木もすべての物が綠の色に充ち滿ちるのです。かうして、この佐保山の如く高い、また佐保川の如く深いお惠みを以て、千年萬年變りない結構な春をお與へになるので、それで、春の神は佐保山姫としてお顯れになつたのです。たゞ春ばかりではありません。——

『誰が爲の錦なればか秋霧の、佐保の山邊をたち隱すらん』

(この佐保山の紅葉の景色は錦のやうに美しいのであるが、それを秋霧は誰に見せようと思つて、自分達には見せ惜しみをするのであらう)

と詠まれたのも、この山の美しい秋景色をいつたものです。このやうに、平穩な四季を幾度繰返して、永い年を經て來たことでせう。花の春、紅葉の秋、古い昔

雨。古きを守るためしまでも。仰ぐや青丹よし、奈良の世々ぞ、久しき。殊更この山は。春の日影もよそならで。慈悲萬行の神徳の。弘き誓ひの海山も、皆安全の國とかや

シテ『抑も葦原の國つ神

地『世々に普き誓ひにも。御名は殊に久方の。天の兒屋根のその昔。この秋津洲の主として、皇孫をいつき給ひしより。八洲に治まる時つ風、四海に立たむ波の聲、萬歳をよばふ三笠山。御影もさすや河竹の。佐保の山邊の春の色、萬山ものどかなりけり

【五】

地ロンギ『げにや誓ひも、のどかなる。げにや誓ひものどかなる。佐保の山姫あらたなる言葉をかはす嬉しさよ

シテ『暫く待たせ給ふべし。とても山路のおつい

○古きを守る―時雨の降るを古きにいひかけた。
○青丹よし―奈良の枕詞。「あふ」と「あを」と音を重ねた。
○春の日影もよそならで―春日明神に寄せていふ。
○慈悲萬行―春日明神の菩薩號。「春日龍神」參照。
○蘆原の國つ神―蘆原の國は日本の異稱。
○久方の―天の枕詞。御名は久しといひかけた。
○皇孫をいつき給ひし―天兒屋根命が天孫降臨の時、尊に隨うてこの國土に降り中臣連等の祖となつたことをいふ。「いつき」は崇敬奉仕すること。
○八洲―日本の異稱。
○時つ風―滿潮の時に吹く風。治まる時といひかく。
○御影もさすや―さすやは棹の縁語。
○河竹の―棹の序。棹を佐保にいひかけたのである。
○萬山ものどか―佐保山から春景色が立ち始まつて、萬山に到り及ぶとの意。
【五】

の聖代まで思ひ出されて、奈良の都はめでたい限りなのです。殊にこの佐保山は春の日影はのどかで、春日明神とは傍近く、この明神慈悲萬行菩薩の御神徳はすべての衆生に遍く垂れられ、日本國中何處も皆安穩なのでございます。――

さて日本の神々は何時の代如何なる所にも御神徳を垂れ給ふのでありますが、この春日明神は昔天兒屋根命と申された時、天孫がこの日本國の主として御降臨の際、供奉してこの土に降られ、それより以來、日本國中うち治まつて、四海に波風は立たず、民の喜んで萬歳を叫ぶ聲は、三笠山に響き渡り、まづ佐保山に春景色が滿ち／＼て、それからすべての山に及ぼし、何處ものどかた春となるのでございます」

【五】

俊家「この御神徳の高い所で、のどかた佐保山姫からあらたかなお言葉を伺ふのは、ほんとに嬉しいことです」

里女「暫くお待ちなさいませ。山へお登り

○さをなぐるまの―佐保をいひかけた。時間の極めて短い喩に用ゐた語。呉竹集に「何事も思ひ捨てたる身ぞ安きさをなぐるまの夢の夜なれば」。「さ」は矢のこと。
○夕霞の―といふを夕にいひかけた。
○衣手―袖のこと。
【間】
◎この間のワキ詞、高安流に據る。

でに。佐保山の神祭り、月の夜遊を始めん
地『月の夜遊と聞くよりも。東の嶺に光さし
シテ『南を見れば春日野の
地『三笠の森に花降りて
シテ『ここにたなびく
地『山の名の、さをなぐるまの夢の夜の。程を待たせ給へやと（シテ立ち）。夕霞の衣手に、立ち隠れつつ失せにけり、立ち隠れ失せにけるとかや
と右へ廻りて常座にて開き靜かに中入。

になつたよいお序です。この月夜に、佐保山の神祭の神樂を始めませう」
僊家「月夜の神遊と伺ふやはや、東の山に光がさし出て……」
里女「南を見ると、春日野の三笠の森に花が降つて、こゝに靡いて來ます。ほんの暫く、夜になるまでお待ちなさいませ」
といふや、霞の袖に隱れて見えなくなつてしまつた。どうやら隱れてしまつたらしい。

【間】
ワキ（重ワキヅレに）「いかに誰かある
ワキヅレ「御前に候
ワキ「所の者を召して參り候へ
ワキヅレ「畏つて候
といひて立ち仕手柱際に出で、
ワキヅレ「所の人の渡り候か
狂言所の者、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて橋懸一の松に立ち、
狂言「所の者と御尋ねある。罷り出で承らばやと存ずる。（ワキヅレに向ひ）所の者と御尋ねは。いかやうなる御用にて候ぞ

ワキヅレ「ちと人の物を御不審ありたき由仰せ候間。近う來りて給はり候へ

狂言「畏つて候

といひて、二人ともワキの前に出で、

ワキヅレ「所の者を召して來りて候

狂言「所の者御前にて候

ワキヅレもとの座につく。

ワキ「所の人にて候はゞ。佐保姫の御事又霞の衣の謂れ。この所にて申しならはしたる通り語つて聞かされ候へ

狂言「是は思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこの邊に住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すもいかゞにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候。まづこの山を佐保山と申す子細は。この山の奧に仙境の御座候が。かやうに春ものどかなる時は。この山の峯に於て衣を竿にかけ晒さるると申し候。總じて衣は竿に掛けて晒すものなれば。この山を佐保山と申し習はし候。さればその衣は裁ち目もなく縫ひ目もなく。天氣よき時他所より見れば。霞とも見え雲とも見え。或は布を晒したる樣にも見え申し候。近寄り御覽ずれば。光り輝き異香薫じ。誠に奇特なる衣にて候。かやうの事を伊勢とやらんの御歌に。裁ち縫はぬ衣着し人もなきものを。なに山姫の布晒すらんと詠ませられたると申す。この歌は古今集にも入りたると承り候。又一說には。春日大明神この山へ御影向なされ候折節。天人天降り給ふにより。この山の衣は天の羽衣にて御座あるなどとも申し傳へ候。卽ち衣を干し給ふ天人の名を佐保姫と申す由承り候。卽ち佐保姬は四季を司りて守り給ふ。まづ春は佐保姫夏は生田姫。秋は立田姫冬は慈悲萬行の守護し給ふ中にも。佐保姫は春を守り給ふにより。

○この山を佐保山と—佐保を竿に取做したのである。

○伊勢—伊勢守藤原繼蔭の女、七條后の女房で、宇多帝に寵せられた。當代第一の女流歌人。

花も餘の所より見事に候。誠に人間の眼には見え申さねども。この山には常に奇特あまた御座ある由申し候が。委しき事は存ぜず候。扨唯今は何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に承り候ものかな。これは藤原の俊家なるが。氏の神なれば春日へ參詣申す折節。この佐保山に當つて白雲たなびきたる樣に候間。怪しみこれまで來り候處に。女性あまた布晒す氣色の見えて候程に。不審をなし候へば。それにつき霞の衣の子細又佐保姫の御事懇に承り。その後夢の夜のほどを待てといひもあへず。衣手に立ち隱れ見失ひて候よ

狂言「これは奇特なる事を承り候。扨は都より御下向を佐保姫嬉しく思し召し。假に現れ御詞を交はし給ふと存じ候間。暫く御逗留あつて。重ねて奇特を御覽あれかしと存じ候

ワキ「餘り不審なる事にて候程に暫く逗留申し。重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「御用の事も候はゞ重ねて仰せ候へ

ワキ「賴み申し候

狂言「心得申して候

　といひて狂言は引く。

【六】

ワキ／ワキヅレ 待謠「佐保山の柞の綠かたしきて。柞の綠かたしきて。ここに假寢の枕より。音樂聞え花降りて、月春の夜ぞありがたき、月春の夜ぞありがたき

【七】

出端の囃子にて、後ジテ佐保山姫、面増・黒垂・天冠・襟白・着附摺箔・舞衣・色大口・腰帶・扇の裝束にて橋懸一の松に出で、

【六】　後段

俊家「この佐保山の柞の綠の木蔭に横になつて、うたゝ寢をしてゐると、この枕元に音樂が聞え、花が降つて、月が燿々と輝いてゐる。ほんとにありがたいことだ」

【七】　俊家が夢現の心地でゐる所へ、後ジテ佐保山姫登場。

【六】○柞の綠―柞は紅葉の頃を愛でる木であるが、こゝには春であるから綠といつた佐保山にこの木を詠み合せた歌が多い。
○かたしきて―片袖を下に敷いて寢ること。

【七】○春日野の飛火の野守―古今集讀人不知の歌「春日野の飛火の野守出でて見よ今幾日ありて若菜摘みてん」

を引いた。飛火野は春日野のうちにある。
○影さす月の―「さす」は笠の縁語。
○藤山―春日山をいふ。
○若紫の―藤をいふ。
○二月の初申―二月と十一月の初申が春日神社恒例の祭日。
○峯どよむまで―參詣人が群集して、その聲が峯一面に響き渡るまで。
○戴きまつれや―神德を戴き仰ぐ事を、舞の袖を頭に戴く事にいひかけた。
○袖もかざしの―舞の袖をかざす事を頭飾のかざしにいひかけた。
○玉かづら―玉を緒に貫いて頭の飾りとするもの。
○かけてぞ祈る―蔓を頭にかけてを神にかけてといひかけた。
○水屋の御影―春日山の一峯。春日山は本宮の峯一名浮雲の峯、水屋の峯一名羽買の峯、高峯一名香山の三峯より成り立つ。
○山かづら―山の葛などを蔓にかけること。舞人が飾りに用ゐるのである。
【八】
○月の夜聲―月夜に神樂歌をうたふ聲。
○時の鼓も―神樂の鼓の縁

後ジテ『春日野の飛火の野守出でて見よ。影さす月の三笠山。うき雲かかる藤山の。若紫の名にし負ふ。木々の梢ものどかなる。春の日影ののどけさよ

地『二月の。初申なれや。春日山

シテ『峯どよむまで。戴きまつれや、佐保姫の袖もかざしの玉かづら

地『かけてぞ祈る春日野の

シテ『若草の山。水屋の御影

地『緑も惠みも立ち立つ雲の（と舞臺に入り）、羽袖を返すや。山かづら

と常座に立ち、

〔眞序舞〕

【八】

地（ロンギ）『神樂の鼓、春を得て。神樂の鼓春を得て。月の夜聲も澄み渡る心をのぶるありがたや

山姫「春日野の飛火野の野守も出て見るがよい。月の照り渡つた三笠山、雲のかゝつた春日山、有名な若紫の藤、その他の木木の梢まで春の日影を受けて、いかにものどかな趣だ。――

今日は二月初申の日で、春日祭の日だ。參詣の人々がこの峯一杯に響き渡るばかり多勢來て、よく信心するがよい」

と佐保姫は舞の袖をかざし、玉蔓を頭にかけ、人々の信心するこの春日野、若草山、水屋の峯、すべてが緑の色に掩はれてゐる中で、雲の羽袖を飜して舞ふのである。

〔眞序舞〕を舞ふ。

【八】
伶家「神樂の鼓は音も高く、この春の月夜に奏せられる神樂歌は聲も澄み渡つて、心ものび〳〵するほんとにありがたいこ

で、時刻を報ずる鼓を出し、時刻の數をうつ意で、數々とつゞけた。
○さをの歌—佐保と音の似た棹の歌、棹歌。棹歌は舟歌をいふ。
○天の探女—天女の名。萬葉集角麻呂の歌に「久方の天の探女が岩舟のはてし高津はあせにけるかも」とある傳說から出たもの。〔岩船〕參照。
○月の御船の—月を船に喩へていふのである。拾遺集人麻呂の歌に「空の海に雲の波立ち月の船星の林に漕ぎかへる見ゆ」
○水馴棹—棹を佐保にいひかけた。
○雨塊を動かさで—太平の瑞相。王充の論衡に「太平之世、五日一風、十日一雨、風不レ鳴レ條、雨不レ破レ塊。」
○さよ姫の—佐保姫の誤であらう。元祿本には佐保姫とある。

シテ次の謠に合せて舞ふ。

シテ「こや佐保姫の小夜神樂。時の鼓も數々に。神歌の一節、さをの歌とやいひてまし
地「それは遊女の謠ふなる。聲も妙なり天少女
シテ「天の探女が古を
地「思ひ出づるや
シテ「久方の
地「月の御船の水馴棹、山姫の袖。返す霞の薄衣、裁ち縫はねども白絲の。來る春なれや永き日に。雨塊を動かさで。世を守るさよ姫の。めでたきためしなるべしや、めでたきためしなるべし

と常座にて留拍子を踏む。

とだ」
山姫「これが佐保姫の小夜神樂だ。かうして幾つも／＼神樂の一節づつ謠つてゐると、舟遊の棹歌のやうだ」
從者「棹歌は遊女の謠ふものですが、これは天少女の美しいお歌で……」
山姫「さういへば、天の探女の故事が思ひ出されることだ」
かうして、佐保姫は月の御船の棹歌を謠つて、舞を舞ふ。その舞衣は霞の薄衣で、裁ちも縫ひもしてないが、時が到れば春永の日が來るやうにして、天下は無爲にしてうち治まるのも、この佐保姫が世を守る神德によることと、實にめでたく思はれる。

後ジテ佐保姫舞ひ納めて退場。

〔考異〕

古謠本（觀世流元祿八年本）

【一】ワキ「抑もこれは……氏の神にて御座候程にこの春君に……春日の明神に參詣（元間參詣申さばやと存。唯今和州に下向）仕候　道行「天の戶の……朝日影明け行く空の朝日影（元ほらけ／＼）。ワキ「さてもわれ……ワキヅレ「いやこれは……ワキ「兎に角……不審に存じ候程に

近く(元急候程に。是ははや春日の社に付て候。又あのさほ山に何とやらん衣のやうに見えて候。立越)見ばやと思ひ候皆々佐保山に登り給へ(元ナシ)

【二】シテサシ「面白や……春の日の御影を四方に(元ナシ)春日山……春の色(元日の)東を……

【三】ワキ「われ佐保山に登りて見れば女性数多来り給ひこれ(元四方の氣色をなかむる處に。いとなまめきたる女性。妙)なる衣を……そも御身はこの佐保山に住む人か(元いかなる人ぞ)。シテ「さん候これはこの佐保山……又これなる衣は(元是は)所から……立ち寄りて(元ナシ)よくよく……ワキ「げにげにこれなる(元此)衣を……銀(元金)色輝き……さてこれは何と申す衣にて候ぞ(元こはそもいかなる衣やらん)。シテ「げによく御覽じとがめて候(元さん候)これは……シテ「その上(元然れは)仙人の……御身も(元は)仙女やらん(元にてしましますか)。シテ「いや仙郷(元女)までは……佐保の山邊(元人)なれば……シテ「いや(元そも)裁ち縫はぬ……ワキ「さては(元ナシ)霞の衣かと(元尋ねし)は……

【七】後ジテ「春日野の……うき(元す)雲かかる……地「緑も恵みも……立ち(元春)立つ雲の……

【八】シテ「こや佐保姫の小夜神樂時の鼓も(元の)……地「月の御船の……世を守るさよ(元佐保)姫のめでたきためしなるべしやめでたきためしなるべし(元〈〜)

三笑（さんせう）　觀（寶　喜）

解　説

【能柄】　四番目　一段劇能

【人物】　狂言　門前の者、シテ　慧遠禪師、ツレ　陶淵明
　　　　ツレ　陸修靜

【所　】　支那　廬山

【時　】　晉・宋の頃　（十一月）

【作者】　作者に關する記錄は見當らないが、言經卿記文祿四年四月三日の條に註釋のことが見えてゐる。

【梗槪】　晉の慧遠は廬山の下に白蓮社を結び、十八賢などと共に佛道を修め、世に隱れて虎溪より外へは出なかつたが、今日しも陶淵明・陸修靜が訪ねて來て、一所に瀑布の瀧を賞し、酒宴を催すと、慧遠は酒の醉ひに足もとが怪しくなつて、よろめきながら橋を渡つたので、淵陸の二人が附添つて行くうちに、思はず虎溪の外へ出てしまつた。そして二人に「禁足は破らせ給ふか」といはれて、初めて氣がつき、三人一度にどつと笑つた。

【出典】支那の古畫に虎溪三笑圖といふものがあり、この事は、述異記にも、

晋僧慧遠住二東林一、毎送レ客不レ過二虎溪一、一日與二陶潜・陸修靜一相攜共語、不レ覺踰レ之、三人大笑。

とあり、世に傳唱されてゐるので、この故事を題材としたのである。

【概評】虎溪の三笑は畫題として適當なものであるが、事件を展開させることが主である戯曲の題材には採りにくいものであらうと思ふ。謠曲作者はこの種の材料をも敢て棄てないのであるが、さうした曲には、やゝともすれば佛法の教理などを說いて、理に墮ちたものが多い。然るに本曲は唐曹松の天台瀑布の詩を借りて、どこまでも風雅に終始したのは、勝れた手法であるといへよう。クセの文は戯曲としては稍妥當を缺いてゐるが、これは謠曲文の一般的形式に從つたもので、已むを得ないことであらう。殊に實際の演出に當つては、三人の物語らしく聞えて、別段不都合な感じを起させない。

脚色の形式は、劇能の形を採つた爲、殊にシテ・ツレ三人の間に甚しい輕重をつけないやうにした爲に、普通の組織とは餘程變つてゐる。從つて他の曲のやうに、毎にシテを中心として觀ることは出來ないが、絶えず三人鼎座の一畫面を見てゐるやうな感じを與へるのが、この主題に適はしい、よい行き方であつたと思ふ。

【序】後見、藁屋の作物に引廻をかけて脇座に出す。

狂言門前の者、面登髭・官人頭巾・着附熨斗目・縷水衣・括袴・腰帶の裝束にて杖をつきて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。晋の國廬山の麓西林寺門前に住居申す者にて候。扨も賴み奉る御坊は。楚國遠法大師の御子にて御座候ひしが。五歳の御時豊干禪師の御弟子になり給ひ。悟りを開き給ひ。池水に白蓮多く植ゑ給ひ。その傍に草庵の結び給ひて白蓮社と名づく。朝暮賢士と遊びて西方の淨土を修し給ふ。とりわき陶淵明陸修靜と申す御方と一日の御參會にて候。今日は御參會あらうずる間。瀑布の瀧の邊を淸め。用意を致さばやと存ずる。皆々その分心得候へ。〈

といひて幕に入る。

【一】シテ慧遠禪師、面阿古父尉・白垂・唐帽子・襟白・着附小格子・

【序】◎かやうに候者は—この間語、和泉流による。

【一】

【一】舞臺は支那の廬山で、シテ慧遠、庵の内に居り、

○慧遠—本曲の末に記す。○廬山—江西省潯陽郡にある。○隱山—隱れて居る山で、廬山を指す。○白蓮社、十八の賢—本曲の末に記す。○西方を修し—元祿外謠には「西方を念じ」とあり、その後の謠本には「誦し」とある。西方極樂淨土に生まれるやうに念誦する意。○六字を禮し—南無阿彌陀佛の六字の名號を拜禮すること。○流れを枕とし—末尾に記す。○坐禪—禪宗で行ふ作法で靜坐して悟道を求めること。○西に傾く—西方淨土と同じ方角に月が傾くといふのを、曉の景色にかけていふ。○洞煙谷雲—谷間の雲。○瀑布の瀧—布を晒すやうに見える瀧。○白妙に—瀧の白い事を夜の白らむことにかけていふ【三】○雲無心にして—陶淵明の歸去來辭の句「雲無レ心而出レ岫、鳥倦レ飛而知レ還」を引いた。岫は山のほらあな。謠曲の第二句は原詩句を思ひ誤つたのであらう。

水衣・掛絡・腰帶の裝束にて經を手に持ち作物の中に下に居り、後見引廻を下して、

シテサシ『晉の慧遠廬山のもとに居して。三十餘年隱山を出でず。白蓮社を結び竝に十八の賢あり。その外數百人世を捨て。榮を忘れて共に西方を修し。六字を禮してこの草庵に遊止す

上歌 地下歌『かくて流れを枕とし岩に口を漱ぎて。坐禪の行住坐臥の行ひに。行住坐臥の行ひに。坐禪の床を洩る月も西に傾く折節は。洞煙谷雲の内よりも。瀑布の瀧の白妙に。曙の山の姿。たとへん方ぞなかりける

【三】

一聲の囃子にて、ツレ陶淵明、面朝倉尉・尉髮・淵明帽子・着附小格子・水衣・腰帶・唐團扇の裝束、ツレ陸修靜、面朝倉尉・尉髮・大褄沙羅・着附無地熨斗目・水衣・腰帶・唐團扇の裝束にて橋懸に出で正面に向き、

淵明修靜 一聲『雲無心にして以て岫を出で。鳥飛ぶが如くに倦んで。還る事をや。知らすらん

慧遠「自分は晉の慧遠で、廬山の下に住み、三十餘年の間山から出たことがなく、同志の者と白蓮社を結んで、その仲間の者所謂十八賢人を初めとし、その外數百人の者が、皆世間を捨て、名利を忘れて、ともぐ〳〵西方淨土を念誦し、六字の名號を禮拜して、この庵にのどやかに暮らしてゐるのだ。

かうして、所謂『流を枕とし岩に口を漱ぐ』やうに、一切俗事を打忘れて、二六時中佛法を修行してゐると、坐禪の場に洩れ入る月の西に傾くのを見ては、西方淨土を想ひ起し、谷間に起る雲、瀑布の瀧の白妙のやうに落ちる樣、明方の山の姿など、何とも譬へやうのない、心よい感じを與へることだ」

三國言をいつてゐる。

【三】

ツレ陶淵明、ツレ陸修靜、慧遠の庵を訪れる體で登場。

二人「雲は何のこだわりもなく呑氣さうに山の洞から出て行く、鳥は飛び疲れると自分の好きなまゝに塒に歸つて行く。いかにものんびりした心持だ。

○霜降月―十一月。○散るもみぢ葉にうつろひて、―紅葉の落葉が散り敷いて、草の色も紅に見えるとの意。うつろふは色の照り映えること。（白菊の花はさながら―白菊の花が霜の爲に色が變つて紅くなつて、却つて美しいとの意。○八入―八入とは幾度も染め重ねることで、濃い紅をいふ。【三】○陶淵明―晋の人。字は元亮。彭澤の令となつたが、五斗米の爲に身を屈するを潔しとせず、歸去來辭を賦して官を辭した。宋文帝元嘉四年六十三で死す。○陸修靜―呉郡の人。神仙を慕つた道士で、宋文帝の爲に道を講じた。元徽五年七十二で死す。○書を以て―經卷を手に持つて。○三千世界は眼に盡き―和漢朗詠集都良香の詩句「三千世界眼中盡、十二因縁心裏空」を引いた。三千世界は佛説にいふ一切の世界。十二因縁は過去・現在・未來を通じての一切の因果關係。○際もなしは空しと同じ意。俗塵を離れた仙境を述べたのである。

淵明修靜上歌「頃もはや。霜降月の曙に。霜降月の曙に。野山の草の色もはや散るもみぢ葉にうつろひて。枯野になれど白菊の。花はさながら紅の。八入に見ゆる、けしきかな八入に見ゆるけしきかな

淵明舞臺に向ひ、

【三】

淵明「いかにこの草庵に慧遠禪師の渡り候か。陶淵明陸修靜これまで參りて候

シテ「その時禪師は白蓮社を出で（と作物を出でツレに向ひ）。書を以て淵明を招きければ（經にてツレを招く）

淵明修靜『二人はともに拜をなし

地上歌「廬山のさかしき石橋を（とツレ舞臺に進み）。心静かに渡りつつ。巖に腰をかけ。瀑布を眺め給へり。三千世界は眼に盡き。十二因縁は。心のうちに際もなし

今はもう十一月で、野山の草は枯れて枯野の姿となつたのであるが、もみぢ葉が散り敷いて、却つて美しい色となり、白菊の花も霜で眞紅に染まつて、ほんとによい景色だ」

とあたりの景色を賞しながら庵に着き、

【三】

淵明「もうし、慧遠禪師はこの庵にお出でですか。陶淵明と陸修靜とが參りました」

その時慧遠禪師は白蓮社を出て、經卷を手に持つて陶淵明を招くと、淵明・修靜の二人は拜禮をして、廬山の險しい石橋を靜かに渡り、巖に腰をかけて、瀑布を眺められた。

淵明修靜「見渡す限り如何にも廣々とした景色で、世間の俗事をすつかり打忘れられてしまふことだ」

と景色を賞して、慧遠に向ひ、

と陶淵明は脇正面に、陸修靜は大小前に下に居り、シテも作物の前に坐す。

【四】

淵明「いかに慧遠禪師に申すべき事の候

シテ「何事にて候ぞ

淵明「さて廬山に至らざらん者は。これ僧にあらずと申し候よなう

シテ「げにげにさやうに申し候

淵明「さてさて瀑布といふ事は。如何なる謂れのあるやらん

シテ「いやいや異なる事はなし。萬仭名を得て瀑布といふ

修靜『日香爐を照らして紫煙をなす

シテ「遠く見れば織るが如くにして天台に掛く

淵明『寶尺を疑ふ事をやめよ度りがたし

シテ『直に金刀の剪裁し易きを恐る

【四】

淵明「慧遠禪師、一寸申したい事が……」

慧遠「何です」

淵明「この廬山に來ない者は、僧たる資格がないといつて居るさうですな」

慧遠「いかにもさういつてゐます」

淵明「ところで、この瀧を瀑布といふのは、どういふわけがあるのです」

慧遠「いや別段變つた事はありません、非常に高い所から流れ落ちるので、布を晒したやうだといふので、瀑布といふのです」

三人とも瀧を眺める態で、

修靜「日が瀧を照らす樣は、香爐から紫の煙が立ち上るやうだ」

慧遠「遠くから見ると、布を織るやうな姿で、高い山にかゝつてゐる」

淵明「よい物尺で度れば、布を度るやうに度れさうに思はれる」

慧遠「さうだ、よい刃物で剪れば、すぐ剪れさうに思はれる」

【四】

○僧にあらず—僧といふ資格がない。

◎げにげにさやうに—刊行會本には「げにさやうに」とある。

○萬仭名を得て—非常に高い瀧であるところから、瀑布といふ名がついたとの意。この語は曹松の詩句から出たもので、原詩は後に揭ぐ。仭は長さの名稱。

○日香爐を照らして—李太白の望廬山瀑布水の詩「日照二香爐一生二紫煙一、遙看瀑布懸二前川一、飛流直下三千丈、疑是銀河落二九天一」を引いた。

○遠く見れば織るが如く—唐の曹松の天台瀑布の詩「萬仭得レ名云二瀑布一、遠看如レ織掛二天台一、休レ疑寶尺難二量度一、直恐金刀易二剪裁一、噴向二林梢一成二夏雪一、傾二來石上一作二春雷一、欲レ知便是銀河水、墮二落人間一合二卻迴一」を引いた。

○天台—天台山。支那浙江省台州府にあり、佛法興隆の地。

○寶尺—立派な物さし。

○金刀—銳利な刀。

○春雷をなす―春の雷のやうに大きな響を立てる。
○銀河―天の河。
○人間に墮落して―原詩は銀河の水が天上界より人間界に落ち、天上界に歸つては復人間界に落ちるとの意。謠曲は原詩を引き誤つたのである。
○三國無雙―支那天竺日本に類のない。
○琴詩酒の友―風雅の友をいふ。詩句に「和漢朗詠集白樂天の詩に―琴詩酒友皆拋レ我、雪月花時最憶レ君」
【五】
○抑もこの淵明と申すは―以下クセの一節は「昔をいざや語らん」を承けて、陶淵明・陸修靜が自分の閲歴を叙べる心持であるが、(慧遠の閲歴は最初に獨り語してゐる)クセの文の通例として叙事文の形をとつて居り、ツレ二人の科白とは見難い。クセは普通シテの語と解すべきものであるが、それでは本曲の心持と離れるやうに思ふ。それで通譯には地の文として譯すことにした。
○彭澤の令―彭澤は江西省の地名。令はその縣の長官。
○印を解いて―退官の意。支那では拜官の時に官印を受けて之を帶し、退官の時

修靜『噴いて林梢に向つて夏雪をなし
シテ『傾き來つて石上に春雷をなす
淵明『知らんと欲すこれ銀河の水なることを
シテ『人間に墮落して
修靜『合して
シテ『却つて
淵明『廻る
地『三國無雙のこの瀧を。今まで拜せぬ心こそおろかなりけれ。もとより琴詩酒の友なれば。心靜かに昔をいざや語らん

シテ「もとより琴詩酒の」と經を後見に渡して唐團扇を持ち、陸修靜立ちてシテと陶淵明に酌をしてもとの座に歸る。

【五】
地クセ『抑もこの。淵明と申すは。彭澤の令となる。官にある事。八十餘日。印を解いて去るとかや。日夜に酒を愛し。松菊を翫ぶ。菊を東籬の下に採つて。南山を見る事も。君に忠ある故とかや

修靜「飛沫が林の中に飛んで、夏でも雪が降るやうだ」
慧遠「下に落ちて、石に打當る時は雷のやうに轟く」
淵明「これは空の天の河の水が流れ落ちるのではないかと思はれる」
慧遠「天上から下界に落ち、また下界から天上へ昇つては落ちるのだ。……いやこの世界一の瀧を今までさほどに思はなかつたのは、迂濶であつた。――さうだ、御同様趣味の友だから、こゝでゆつくり昔話でもしよう」

三人は酒盛をして打語らふ態。

【五】
さてこの陶淵明といふ人は、彭澤の令となつたが、在官僅かに八十餘日で官を辭して歸つた。そして日夜酒を愛し、松や菊を好んで、東の垣根に菊を植ゑたり、南の山を眺めたりして樂しんでゐたが、これも二君に仕へないといふ忠節の心から出たものであるといふことだ。

にはその紐を解いて返す。
○松菊を翫ぶ―歸去來辭に「僮僕歡迎、稚子侯レ門、三徑就レ荒、松菊猶存、携レ幼入レ室、有レ酒盈レ樽」とあるに據る。
○菊を東籬の下に採つて―陶淵明の詩「結二廬在一人境一、而無二車馬喧一、問レ君何能爾、心遠地自偏、採二菊東籬下一、悠然見二南山一」を引いた。
○君に忠ある―淵明が官を辭したのを、晉の遺臣として、宋の代になつて二君に事へることを恥ぢたものと解したのであらう。
○宋の明帝―宋の第六世皇帝。
○仙の法―神仙の方術。
○陸道士―道士は仙術を行ふ者をいふ。
○簡寂觀―陸修靜の住んだ廬山の館。
○虎溪―廬山にある溪の名。廬山記に「慧遠法師送レ客過二虎溪一虎輙鳴」と。こゝには廬山十八賢の事をいふ。
【六】
○菊の白露積り積つて―拾遺集清原元輔の歌「わが宿の菊の白露今日毎に幾世つもりて淵となるらん」の想を取つた。
○不老不死の藥の水―昔南陽酈縣の谷間に菊があり、

シテ『又陸修靜は
地『宋の明帝の御時に仙の法を學んで。陸道士と申すとか。後には當山の簡寂觀に。隱居してましませり。この人々は天下にも竝ぶ方もなき事なれば。廬山の虎溪にも。劣らぬ光なりけり。

淵明「この人々は天下にも」と立ちてシテと修靜とに酌をしてもとの座に歸る。

【六】
シテ『菊の白露積り積つて。不老不死の藥の泉。よも盡きじ
地『幾萬代も。限らじな

とツレ二人立ちてこれより謠に合せて舞ふ。

地『さす盃の廻る夜も。さす盃の廻る夜も。明くれば暮るるも白菊の。花を肴に立ち舞ふ袂酒狂の舞とや。人の見ん
〔樂〕

初めツレ二人にて舞ひ、中途よりシテ立ちて三人にて相舞。

又陸修靜は宋の明帝の時、神仙の法術を學んだので、陸道士といふとの事である。そして後にはこの山の簡寂觀に隱居して居られた。

この人々は天下にも竝びのない勝れた人で、廬山の十八賢にも劣らない人々であつた。

このやうな經歴を語り合ひ、互に尊敬の心を持つて打語らふ態。

【六】
慧遠「菊の白露が積つて出來たこの不老不死の藥、いくら飲んでも、盡きることはあるまい。誠にめでたい限りだ。――からして、盃を汲み交はして、夜もしらしらと明けるまで、白菊の花を肴にして酒盛を續け、舞を舞つて居れば、他の人は『あれは酒狂の舞だ』といふことだらう」

〔樂〕
うち興じて陶淵明・陸修靜が舞ひ、慧遠も中に入つて三人相舞をする。

その露の流れを汲む者は皆命を延ばしたといふ故事に據る。「菊慈童」參照。
○盃の廻る夜―盃の廻ると夜の廻ると兼ねていふ。
○白菊の―暮るゝを知らずを白菊にいひかけた。
○泥々―老人の歩行で、足もとが危く、よろ〳〵すること。
○淵陸左右に介錯し―陶淵明と陸修靜とが左右から慧遠に付添つて世話する意。
○禁足―慧遠は毎に客を虎溪まで見送り、それより外へは出なかつた事をいふ。
○三笑の昔―虎溪三笑の故事。解説に掲げた。

シテ『萬代を
地『萬代を。萬代を。松は久しき例なり。松は久しき例なり
シテ『年を老松も緑は若木の姫小松
地『四季にも同じ。葉色の常磐木の。松菊を愛し（とシテ正面先に出て見渡し）。かなたこなたへ足もとは泥々泥々と（シテよろ〳〵と中へ下り）、苔むす橋を。よろめき給へば淵陸左右に（ツレ二人シテの肩に手をかけて橋懸へ連れ出し）。介錯し給ひて虎溪を遥かに出で給へば。淵明禪師にさて禁足は。破らせ給ふかと一度にどつと。手をうち笑つて。三笑の昔と。なりにけり

「一度にどつと」と、三人とも橋懸にて團扇と手と打合せて、笑ふ心を示し、直して、シテ・修靜・淵明の順にて幕に入る。

慧遠「松は千代萬代までも榮えるめでたいしるしだ。年を寄つた老松でも、緑の色は若木の姫小松のやうに生々として、四季ともに葉色が變らない」
などといつて、松や菊を賞しながら、あちらへふら〳〵、こちらへふら〳〵と、危い足もとで、苔の生えた橋をよろ〳〵と渡られると、陶淵明と陸修靜とが左右から慧遠に付添つて、いつの間にやら、虎溪より遥か遠くまで出てしまはれたので、陶淵明が慧遠禪師に『おゝ禁足を破られたのか』といつて、三人一度にどつと笑はれた。
かうして、虎溪三笑の故事が出來たのである。

三人笑つて、曲を終る。

〔考異〕

諸　流　（觀寶喜）

著しい異同がない。

古諸本　（元祿八年本）

【一】シテサシ「晉の慧遠……西方を修（元念）し六字を禮して（元ナシ）……　【二】淵明一聲「雲無心にして……還る事をや知らす（元りぬ）らん……　【四】シテ「直に（元たゝ）金刀の剪裁し……　修靜「噴いて林梢に向つて夏雪をなし（元となる）……　【五】地クセ「抑も……官にある事（元を）八十餘日……　地「宋の明帝の……陸道士と申すとか（元なり）……　【五】地「萬代を萬代を（元と）松は……　シテ「年を（元も）老松も（元の）……地「四季にも同じ……泥々泥々（元泥々）と……淵明（元惠遠）禪師にさて……

附　記

○慧遠—支那晉の代の高僧。姓は賈、雁門婁煩の人で、二十一歳の時大悟して、儒道九流を斥け、廬山西林側に寺を建て佛道を修めた。年八十三で寂す。

○白蓮社—同志結社の名。寺中に池を掘つて白蓮を植ゑて樂しんだので、この名を稱す。

○十八の賢—慧遠・慧永・慧持・道生・曇順・僧叡・曇恒・道昺・曇詵・道敬・曇明・曇賢・劉桂之・張野・周續之・張詮・宗炳・雷次宗の同志。

○流れを枕とし—晉書に、孫楚といふ人が隱居しようとして、王濟に「われ石に枕し流に漱がん」といはうとしていひ誤り、「石に漱ぎ流に枕せん」といつた。王濟がこれを咎めると、孫楚は辯解して、「流に枕すとは其耳を洗はんと欲してなり石に漱ぐとは其齒を厲かんと欲してなり」といつたといふ故事により、世俗を離れて悠々自適する意に用ゐたのである。

志（し）賀（が）　觀（寶剛）

解説

【能柄】　脇能　複式夢幻能

【人物】　**ワキ**　當今臣下、**ワキツレ**　同従者（二人）、**前シテ**　老樵夫（大伴黒主の靈）、**前ツレ**　樵夫、**狂言**　山下の者、**後シテ**　志賀明神（黒主）

【所】　近江國　志賀山

【時】　春（三月）

【異稱】　古く〔黒主〕といひ、また〔志賀黒主〕ともいつた。

【作者】　能本作者註文（曲名黒主）、二百十番謡目錄（曲名志賀）ともに世阿彌の作とす。言繼卿記弘治二年二月十二日の條に黒主の曲名が出てゐる。世阿彌の能作書に「男體には業平・黒主・源氏、如レ此遊士」とあるのも、本曲を指したものであらうか。

【梗概】　當今の臣下が志賀の山櫻を見に行くと、山中で薪に櫻を折り添へて負うてゐる老樵夫が花の木蔭に休んでゐるのに出會つた。臣下はこの様子に心を引かれて詞をかけると、老樵夫は大伴黒主の故事など

の歌物語をして、自分がその黒主であると仄めかして消え去る。黒主は今は志賀の山神として祀られてゐるのであつて、かの臣下が花の木蔭に假寢してゐると、この神靈が現れ出て、大御代を祝ひ、舞を舞ふ。

【出典】大伴黒主は古今集の序に、

大伴黒主はそのさまいやし。いはば薪負へる山人の花の蔭に休めるが如し。

と評されて、六歌仙の一人に數へられ、志賀明神に祀られてゐたので、これをシテとし、古今集序の文を主な材料として、和歌の德を叙べ、祝言の意を表したのである。

【概評】能作者は、歌道を說くことが神德を稱へることと同じやうに、祝言の意に叶ふものであると考へてゐたもので、本曲も亦その一例である。そしてこの種の曲の主人公が大抵歌人であるのは當然のことであるが、本曲の主人公黒主は「草子洗小町」では奸計をめぐらす惡人として描かれてゐるのであるから、兩者を對比すると、その隔りの甚しいのに驚かされるのである。今このやうな相反した二つの構想の生まれた動機を考へると、「草子洗」ではその名の黒が罪惡を聯想させたのであるが、本曲では古今集序の「山人の花の蔭に休めるが如し」といふ評語が風雅な情景を聯想せしめ、世阿彌が花傳書に「木こり、草刈、炭燒、鹽汲なんどの、風情にもなりつべきわざをば、こまかに似すべき」といつた趣旨に適つてゐるので、春の山を背景として樵人姿の黒主に歌道を說かしめることとしたのである。

脚色の形式は、ワキの次第・名乘・道行・着セリフ、シテ・ツレの一聲・二句・下歌・上歌、ワキ・シテの問答・地謠、クリ・サシ・クセ・ロンギ・で中入となり、ワキ上歌の待謠、後ジテのサシ・一聲・地で舞となり、ロンギで曲を結んだもので、複式夢幻能の典型に近いものである。

【一】前段

舞臺は初め京都で、ワキ當今の臣下、ワキヅレの從者を隨へて登場。

朝臣「ありがたい御聖代で、この三月花見月の都の山の景色はまことにのどかなこ

【一】次第の囃子にて、ワキ臣下、大臣烏帽子・上頭掛・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帯・扇の裝束、ワキヅレ從者二人、ワキと同樣の裝束にて舞臺に入り向合ひ、

ワキ ワキヅレ 次第「道ある御代の花見月。道ある御代の花

【一】○道ある御代—政の道の正しい意に旅立つ道の平らかなことを兼ねていふ。○花見月—三月。

○志賀―近江國滋賀郡。天智天皇の都大津宮のあつた地。

○音羽山今朝越え來れば―風の音を音羽にいひかけ、古今集紀友則の歌「音羽山今朝越え來れば時鳥梢はるかに今ぞ鳴くなる」の詞を借りた。音羽山は山城國宇治郡にあり、逢坂山の南に續く。

○志賀の山越―京都から近江に越える昔の山道。

○湖遠き眺め―琵琶湖が遠く見渡されること。

○志賀の山―滋賀郡滋賀村にある山。北比叡より長等山に續く。

【二】

見月。都の山ぞのどけき

次第三返の後、ワキは正面に向き、

ワキ「抑もこれは當今に仕へ奉る臣下なり。さても江州志賀の山櫻。今を盛りなる由承り及び候程に。唯今志賀の山路へと急ぎ候

といひてワキヅレと向合ひ、

ワキ ワキヅレ「道行」春の色。たなびく雲の朝ぼらけ。たなびく雲の朝ぼらけ。のどけき風の音羽山今朝越え來ればこれぞこの。名に負ふ志賀の山越や。湖遠き、眺めかな湖遠き眺めかな

ワキ「名に負ふ志賀の」と正面に向きて先へ出でまたもとへ歸りて志賀に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。江州志賀の山に着きて候。暫くこの所に候ひて花を眺めうずるにて候

ワキヅレ「尤も然るべう候

といひて脇座に行き下に居る。ツレはその次に坐す。

【二】

眞一聲の囃子にて、シテ老樵夫、面朝倉尉・尉髮・襟淺黄・着附小格子・茶絓水衣・腰帶・扇の裝束にて櫻を附けたる柴を負

とだ」

と次第を謡つてのどかな春をたゝへ、

朝臣「自分は今上陛下にお仕へ申してゐる臣下ですが、近江の志賀の山櫻が今が花盛りだと聞いたので、唯今志賀の山へ急いで出掛けるのです」

と見物人に自己紹介をし、

朝臣「いかにも春らしいほがらかな雲のたなびいてゐる朝方、吹く風ものどかな音羽山を越えると、はやこゝは名高い志賀の山越で、琵琶湖の景色が遠くまで見渡されることだ」

といつてゐるうちに、志賀山に着いた態で、舞臺は志賀山となる。

朝臣「道を急いだので、はや近江の志賀山に着きました。暫くこの所で花を眺めませう」

といつて花を眺める態。

【二】

シテ大伴黒主の霊も樵夫の姿で、ツレの若い樵夫と共に、櫻の枝をつけた薪を背うて作物へ向かう

ひ杖をつき、ツレ男、直面・襟赤・着附無地熨斗目・縷水衣・腰帯・扇の装束にて橋懸へ出で、ツレは一の松、シテは三の松に立ちて向合ひ、

シテツレ一聲『さゝ波や、志賀の都の名をとめて。昔ながらの。山櫻

二人とも正面に向き、

ツレ二句『春に馴れてや心なき。シテツレ（向合ひ）『身にも情の。殘るらん

と謠ひて舞臺に入り、ツレは眞中にシテは常座に立ち、

シテツレサシ『山路に日暮れぬ樵歌牧笛の聲。シテツレ（向合ひ）『人間萬事樣々の。世を渡り行く身の有樣。物毎に遮る眼の前。光の陰をや送るらん

シテツレ下歌『あまりに山を遠く來て雲又跡を立ち隔て。上歌『入りつる方も白波の。入りつる方も白波の。谷の川音、雨とのみ聞えて松の風もなし。げにや謬つて半日の客たりしも。今身の上に、知られたり今身の上に知られたり

歸り來る態で、

老樵「志賀の都の面影をしのばせて、昔と同じやうに山櫻が美しく咲いてゐることだ」

樵夫「自分達のやうなわけの分らない者でも、このやうな美しい景色を見馴れてゐる爲か、何となく風雅な心持になることだ」

老樵「山路を歩いてゐるうちに日が暮れて、たゞ木こりの歌や草刈笛の聲が聞えるばかりだ。一體人間の世渡りの道は色々あるが、結局誰も彼も自分の眼の前に現れてくる仕事をして、月日を送つてゐるのだらう。

おゝ隨分山の奥深く來て、向ふの方は雲に隔てられて見えず、入つて來た道も分らない。たゞ谷川の水音が雨のやうに聞えるが、勿論雨は降らず、松吹く風の音もない、誠に靜かな境界で、時の過ぎるのも氣がつかない。昔山路に迷うて仙境に入り、半日ほどゐたつもりで、永い年月を過してしまつたといふ故事も、しみじ

○さゝ波や志賀の都の―千載集に讀人不知として入れられた平忠度の歌「さゝ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな」を引いた。さゝ波は志賀附近の古名。志賀の都は天智天皇の都大津宮。昔ながらを長等山に通はせた。

○山路に日暮れぬ―和漢朗詠集紀齊名の暮春遊覽賦序「山路日暮、滿レ耳者樵歌牧笛之聲、澗戸鳥歸、遮レ眼者竹烟松霧之色」を引いた。樵歌は木こりの歌、牧笛は草刈の笛。

○光の陰―光陰。月日。

○あまりに山を遠く來て―和漢朗詠集紀齊名の愁賦「山遠雲埋二行人跡一、松寒風破二旅人夢一」を引いた。

○入りつる方も白波の―分け入つて來た方角も知らずといふを白波にいひかけた。

○松の風もなし―谷川の水音だけで、雨もなく風もないとの意。

○謬つて半日の客たりしも―和漢朗詠集大江朝綱の句

「謬入二仙家一雖レ爲二半日之客一、恐歸二舊里一纔逢二七世之孫一」を引いた。景色の面白さに時の移るのを忘れる意

【三】

○道のべのたよりの櫻折り添へて薪や重き春の山人——雲玉集に大伴黒主の歌として收む。

○黒主——姓は大伴。六歌仙の一人。仁明帝から醍醐帝頃の人で、近江滋賀郡の大領であり、又園城寺の地主であつた。後世志賀明神に祀らる。

○その様賤しき山賤の——古

「今身の上に」と謠ひながらシテ・ツレ入替り、シテは眞中に、ツレは脇正面に立つ。

ワキ立ちてシテに向ひ、

【三】

ワキ「不思議やなこれなる山賤を見れば。重かるべき薪になほ花の枝を折り添へ。休む所も花の蔭なり。これは心ありて休むか。唯薪の重さに休み候か

シテ「仰せ畏つて承り候ひぬ。まづ薪に花を折ることは。『道のべのたよりの櫻折り添へて。』薪や重き春の山人と。歌人も御不審ありし上。今更何とか答へ申さん

ツレ『又奥深き山路なれば。松も檜原も多けれども。とりわき花の蔭に休むを

シテ「ただ薪の重さに休むかとの。仰せは面白なきよなう

シテツレ『さりながらかの黒主が歌の如く。その様賤

みと味はれることだ」

と暫く休んであたりを眺めてゐる態。臣下これを見て、

【三】

朝臣「これは不思議だ。この樵夫を見ると、重さうな薪に、なほ花の枝を折り添へて、休んでゐる所も花の木蔭だ。これは妙だ」

と老樵夫に向ひ、

朝臣「こゝにはわざと休んでゐるのか、それともたゞ薪が重くて休んでゐるだけなのか」

老樵「お詞よく承りましてございます。まづ薪に花を折り添へますことにつきましては、——

『道のべのたよりの櫻折り添へて、薪や重き春の山人』

（春には樵夫も山を歩く途すがらの慰みに、花を折つて薪にさし添へるので、他の時よりは一層薪が重いことだらう）

と歌人がお疑ひになりました通り、全くその通りで、この外に何もお答へする言葉がございません」

樵夫「しかし、このやうな奥深い山路では、松も檜もいろ〳〵澤山あるのに、殊更櫻の花の蔭に休んでゐますのを……」

老樵「たゞ薪が重い爲に休むのであらうとの思召には、殘念に存ぜられます。しかし、

今集序に黒主を評して「その樣賤し、いはゞ薪を負へる山人の花の蔭に休めるが如し」とあるを指す。
○上﨟―家柄の勝れた女官轉じて位の高い人をいふ。
○勝るをも羨まざれ云々―古諺。この句〔敦盛〕にもある。
○古歌の喩へ―貫之が古今集序に黒主の歌を樵夫に喩へた評語。
○心を寄する―和歌に心を寄せる。歌道に熱心なこと。寄するは波の縁語。
○和歌の浦わの―老も若やぐ心で和歌にいひかけ、續後拾遺集平貞直の歌「かひもなき和歌の浦わの藻鹽草かき置くまでを思出にせん」を引き「かき置く」を「かく喩へ」に轉じた。

しき山賤の。薪を負ひて花の蔭に。休む姿はげにも又。その身に應ぜぬふるまひなり。許し給へや上﨟たち
ワキ「こはいかに勝るをも羨まざれ。劣るをも賤しむなとの。古人の掟は眞なりけり優しくも。古歌の喩への心をもつて。『今の返答申したり
シテ「いやいや古歌の喩へとやらんも。さらさら知らぬ身なれども。賤しき身にも思ひよりて
ワキ『かの大伴の黒主が。心を寄する老の波
シテ『和歌の浦わの藻鹽草
ワキ『かく喩へ置く世語りの
シテ『それは黒主
ワキ『これは眞に
シテ『樣も賤しき
ワキ『山賤の

かの黒主の和歌と同樣、身分の賤しい樵夫が薪を負うて、花の蔭に休んでゐる姿は、いかにも不似合なものでございます。さぞお見苦しうございませうが、どうぞお許し下さいませ」
朝臣「これは驚いた。『勝るをも羨まざれ、劣るをも卑むな』と昔の人がいはれた通り、賤しい者だといつて馬鹿には出來ない。よくも風雅な、古歌を批評した喩への言葉で、今の返答をしたことだ」
老樵「いえ〳〵、古歌を喩へた言葉とやらも、全く存じない者でございますが、私のやうな賤しい者にも、そのやうな事を思ひ當りまして……」
朝臣「あの大伴黒主の歌の姿を思ひ寄ることの老人は……」
老樵「和歌には色々の姿がございます中で……」
朝臣「このやうな喩へ言葉で世に語り傳へられた人は……」
老樵「それは黒主でございますが、私は又も賤しい全くの樵夫でございまして、身に不似合なことでございますが、どうぞお許し下さいませ。同じ休むならば、一層のこと昔の思出に、花の蔭で休みたい

○貫之―古今集撰者の一人でその序の筆者。委しくは〔蟻通〕にいふ。
○言葉の玉の―玉の緒を、おのづからにいひかけた。
○古今の―古今集の語を引き延べた。

【四】
○延喜の聖代―延喜は醍醐天皇の年號。
○古今の詠歌を撰み―古今集の撰修をいふ。古今集は紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑が撰んで、延喜五年奏進したのである。
○二聖―奈良朝の歌人。柿本人麻呂と山部赤人。
○六歌仙―古今集序にその歌を批評した平安初期の歌人で、僧正遍昭・在原業平・文屋康秀・喜撰法師・小野小町・大伴黒主をいふ。
○その外の人々は―古今集序に、所謂二聖六歌仙の歌を批評した次に「この外の人々、その名聞ゆる野邊に生ふる葛のはひ廣ごり林に繁き木の葉の如く多かれど」とあるを引いた。
○色に染み行く歌人の―同じ序に「今の世の中色につき、人の心花になりけるより、あだなる歌はかなきことのみ出でくれば、色好み

地『身には應ぜぬことなれど。許させ給へ都人。とても思出に花の蔭に休まん。げにや今までも。筆を遺して貫之が。言葉の玉のおのづから。古今の、道とかや古今の道とかや

【四】

シテ眞中にて下に居り負柴を下す。ワキも下に居る。ツレは前の地謡の初めに笛座の上に行きて坐す。

地クリ『それ賢かつし時代を尋ぬるに。延喜の聖代の古。國を惠み民を撫でて萬機の政を。治め給ふ

シテサシ『然ればその御時に至つて。和歌の道盛んにして。古今の詠歌を撰み

地『二聖六歌仙を始めとして。その外の人々は。野邊の葛のはひ廣ごり林に繁き木の葉の露の。色に染み行く歌人の心は花になるとかや

シテ『げに埋木の人知れぬ

地『ことわざまでの。情とかや

と存じます。……いや全く今日までも貫之の文が語り傳へられますのは、文字通り古今の道に叶つたものでございませう」

【四】

老樵「聖天子のましました大御代のことをしのび上げますと、昔醍醐天皇は國民を愛撫遊ばされ、萬機の御政治を正しくお執り遊ばされました。それで、この御代に至つて、和歌の道が盛んになりまして、古今の和歌をお撰みになりましたもので、その詠歌は人麻呂・赤人の二聖及び六歌仙の人々を始めとして、その外多くの人々、譬へば野邊にはひ廣ごる蔓のやうに、又は林に生ひ茂る木の葉のやうに、數多い歌人の、物事に深く感じて詠まれた『心の花』と申すべきものださうでございます。否、埋木のやうに人知れず詠まれたものも、情あるものを採られたとの事でございます。――

の家に埋木の人知れぬ事となりて」とあるを引いた。
○ことわざ―言葉の業。
○難波津淺香山の―同じ序に「難波津の歌はみかどのおほんはじめなり、淺香山の言の葉は采女の戲れより詠みて」とあり、その古註に「難波津にさくやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」「淺香山影さへ見ゆる山の井の淺き心をわが思はなくに」の歌を掲げてあるのを指す。
○淺くは誰か思ひ草の―前の歌の詞を借りて、誰も歌道を粗略に思はないといひ、思はんを思ひ草にいひかけ草の緣で露霜を出した。
○露往き霜來る―秋去り冬來る意で、年月の移り變ること。文選の吳都賦に「露往霜來、日月其除」。續古今集序に「露往き霜來る折節は、心のうちに催し」
○濱の眞砂より―古今集序「濱の眞砂の數多く積りぬれば」を引いた。
○敷島の道―和歌の道。
○三十一文字の神―玉傳祕抄に「抑も歌に文字を三十一字と極むることは、三十一神のおはします故なり。かの神達各一字づつを守護し給ふ者なり尤も作者を守護

（居クセ）

地クセ「そもそも。難波津淺香山の。影見えし山の井の。淺くは誰か思ひ草の。露往き霜來る色なれや。濱の眞砂より。數多き言の葉の。心の花の色香までも。妙なりや敷島の道ある、御代の翫び。然れば三十一文字の。神も守護し給ひて。無見頂相の如來も。感應垂れ給へば。君も安全に。萬民時を樂しみて。都鄙圓滿の雲の下四海八洲の外までも。波の聲萬歲の響は。のどけかりけり

シテ「今すめらぎの御代久に

地「萬の政の。道すぐに渡る日の。東南に雲收まり西北に風靜かにて。言葉の林榮ゆくや花も常磐の山松の。巷に謠ふ聲までもこれ和歌の詠に漏るべしや。天地を動かし鬼神も、感をなすと

一體「難波津」や「淺香山」の歌が詠まれましてよりこの方、誰一人歌道を粗略に思ふものはなく、年月の移り變るにつれて、愈々盛んになりまして、濱の眞砂よりもなほ數多く詠まれました詠歌が、皆四季の勝れた立派なものでございます。かうして和歌はありがたい大御代の遊びごととなりましたので、三十一文字の一字一字について、それ〴〵神樣が御守護遊ばされ、三十一字の佛當にない無見頂相の如來まで、和歌を御納受遊ばすので、和歌の德によつて、帝も御安泰であり、國民も皆泰平の御代を樂しんで、都も田舍もどこもかも、日本國中安穩で、帝の萬歲を祝し奉る聲は四方に響き渡り、まことにのどかなことでございます。殊に唯今の大御代は、すべての御政治を正しく遊ばされ、天下泰平で、和歌の道は愈々盛んに幾久しく榮えて、千代を壽く松風の聲、悦びをのべる民の聲まで、皆和歌となつてゐまして、その力強さは天地をも動かし、鬼神をも感ぜしめるばかりでございます。」

りて安存せしむる故なり」
○無見頂相の如來も―鵄鷲記に「歌の三十一字はこれ如來の無見頂の相を除きて三十一尊に讃嘆する功德あり」。無見頂相は佛の三十二相の一で、佛の頂が高くて見ることの出來ない相。和歌はこの一相を除いて、三十一相を和歌の三十一字に充てたものであるといふ。
○感應―感は衆生が佛菩薩の力を感じること、應は佛菩薩が衆生の願に應ずること。
○都鄙圓滿の―都鄙遠近を圓滿にいひかけた。
○東南に雲收まり―泰平の瑞相。この語「吳服」にも出てゐるが出典は分らない。
○言葉の林―和歌の道。
○花も常磐の山松の―言葉の花が常磐に榮えるといひかけて常磐の山松と續けた
○天地を動かし―古今集序の「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」を引いた。

〔五〕
○この山の神―志賀明神。
○薪負ふ友もなく―大伴を承けて、友もなくといふ。
○志賀の宮路―志賀の宮へ

かや……

〔五〕
地ロンギ『げにや異なる山賤の。げにや異なる山賤の。家路いづくの末ならん。ゆかしき心なるべし

シテ『今は何をか包むべき。その古は大伴の。黑主といはれしが。時代とてこの山の。神とも人や見るらん

地『そもこの山の神ぞとは。不思議やさては大伴の

シテ『それは黑主が家の名の

地『大伴か

シテ『われはただ

地『薪負ふ友もなくてひとり。山路の花の蔭に長休みしつる恥かしやと(立ち)。夕の雲に立ち隠れて志賀の。宮路に歸りけり志賀の宮路に歸りけ

〔五〕
朝臣「實に樣子の變つた樵夫だが、その家はどこなのだらう。ほんとにゆかしい心持がする」

老樵「今は何を隱さう。昔は大伴の黑主といはれたが、時代を經た今日では、人はこの山の神と思ふかも知れない」

朝臣「これは變だ。この山の神だとは不思議なことだ。すると、あなたは大伴の……」

老樵「大伴といへば、黑主の氏だが……」

朝臣「いやあなたはその大伴か」

老樵「いえ私はたゞ薪を負うて友達とてもなく、たゞ獨り山路を歩き、花の蔭に長休みをしたものです。お恥かしいことです」

といつて、夕雲に隱れて、志賀の宮に歸つた。

シテ老樵大志賀宮に歸る心で退場。

通ふ路。志賀の宮は志賀明神で、滋賀郡辛崎の邊にあり、大伴黒主を祀る。無名抄に「志賀郡に大道より少し入りて山ぎはに、黒主の明神と申す神います。これは昔の黒主が神になれるなり」

【間】

り　　と右へ廻りて仕手柱際にて開き靜かに中入。ツレも續いて入る。

【間】
ワキ「いかに誰かある
　　重ワキヅレ、ワキの前に出で。
ワキヅレ「御前に候
ワキ「山下の者呼びて來り候へ
ワキヅレ「畏つて候
　　といひて仕手柱際へ出で、
ワキヅレ「山下の人の渡り候か
　　狂言山下の者、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて、橋懸一の松に立ち、
狂言「山下の者と御尋ねある。罷り出でて承らばやと存ずる。（ワキヅレに向ひ）山下の者と御尋ねは。いかやうなる御用にて候ぞ
ワキヅレ「ちと物を尋ねたき由仰せ候。近う來つて給はり候へ
狂言「心得申して候
　　ワキヅレ・狂言、ワキの前へ出で下に居て、
ワキヅレ「山下の者を召して來りて候
狂言「山下の者御前に候（ワキヅレもとの座に歸る）
ワキ（狂言に）「これは當今に仕へ奉る臣下なるが。この所始めて一見の事にて候。當社の御謂れ又志賀の山櫻の事。語つて聞かされ候へ
狂言「これは思ひもよらぬ事を御尋ねなされ候ものかな。我等もこの所には住み候へども。左樣の事

○たゞ詞―歌の對。散文。

委しくは存せず候さりながら。凡そ承りたる通り御物語り申さうずるにて候
ワキ「やがて語られ候へ
狂言「さる程に志賀の都と申すは。人皇十三代成務天皇の御宇に御開きあり。その後天智天皇この所に住み給ふ。さるによつて天智天皇を近江の御門と申し奉り候。また大伴の黒主と申すは。貞觀の頃より延喜に至るまでの歌人の由承り候。然れども貫之古今の序に。大伴の黒主の歌は。その様賤しく譬へをとるに。薪を負へる山賤の。花の蔭に休らうが如しと書かれたると申す。それを如何にと申すに。黒主の歌に。思ひ出でて戀しき時は初雁の。鳴きて渡ると人は知らずやと御座候。この歌の上の句は幽玄なれども。下の句の鳴きて渡ると人は知らずと申すは。賤しかるべきとの御事にて候。又鏡山いざ立ち寄りて見て行かん。年經ぬる身は老いやしぬるとと御座候御歌の。いざ立ち寄りて見て行かんと申すが。たゞ詞のやうにて御座あると承り候。又黒主を志賀の明神に祝ひたるとも申し候。總じて長良の山と申すも志賀の山と申すも。同じ御事にて候。この山櫻は餘の眺めに變り。花の盛りは申すに及ばず。散りがたになり候ても。今道峠の山颪に。花を海へ吹き入るる景色。たゞさながら雲か花かと疑はれ。見事さなか〳〵申すも愚かに御座候。まづ我等の承りたるは。かくの如くにて御座候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候
ワキ「懇に語られ候ものかな。方々以前に老人と若き男の。薪に花を折りそへ持ちて來られ候程に。則ち詞を交はして候へば。さま〴〵歌物語候ひて。大伴の黒主の事を身の上のやうに申され。山路をさして入り給ふと見て。姿を見失うて候よ
狂言「是は奇特なる事を仰せ候ものかな。總じてこのあたりに左樣に心ある老人は御座なく候が。當社明神にて御座あらうずると存じ候。それをいかにと申すに。この所の花を御賞翫なされ。御出で候事を嬉しく思し召し。假に山賤と現じ。御物語ありたると存じ候間。暫く御逗留あつて。重ねて

奇特を御覧あれかしと存じ候

ワキ「愈、信心を致し重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「御用の事候はゞ重ねて仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

　といひて狂言は引く。

　ワキ・ワキヅレ舞臺の眞中へ行き向合ひて、

【六】

ワキ
ワキヅレ上歌(待謠)「いざ今日は。春の山邊に交りなん。暮れなばなげの花の蔭。月に詠じて天の原。時の調子にうつりくる。舞歌の聲こそ。あらたなれ舞歌の聲こそあらたなれ

　と謠ひながらもとの座に歸り下に居る。

【七】

出端の囃子にて、後ジテ大伴黒主、面邯鄲男・黒垂・透冠・金鍛鉢卷・襟淺黄・着附紅白段厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて出で橋懸一の松に立ち、

後ジテサシ『雪ならば幾度袖を拂はまし。花の吹雪の志賀の山。越えても同じ花園の。里も春めく

【六】

○いざ今日は春の山邊に―古今集素性法師の歌「いざ今日は春の山邊に交りなん暮れなばなげの花の蔭かは」を引いた。

○なげの花の蔭―なくなるべき花の蔭。此下に反語の「かは」が略されてゐるので、日は暮れても、花の蔭はなくなりはしないとの意。

○月に詠じて―諸本詠の字を用ゐてゐるが、映の字が正しいので「うつりくる」はこの意を承けてゐるのでなからうか。

○天の原―神靈影向の前に天上より音樂の聞えてくる心。

○時の調子―その季節に適はしい樂の調子。

【七】

○雪ならば幾度袖を拂はまし花の吹雪の志賀の山越―この句〔三井寺〕にもあり、引歌であらうと思ふが、出所が分らない。

○花園の里―千載集祝部成仲の歌に「さゝ波や志賀の花園見る度に昔の人の心をぞ…る―とあり、天智天皇御遊覽の御園であつたといふ。

後段

【六】

朝臣「さあ今日は春の山邊で夜を明かさう。日が暮れたところで、花の蔭はたくなりはしないのだから……と思つてこゝにうたゝ寢をしてゐると、花の蔭が月に映つて、天上界から春らしい調子の、舞歌の聲が聞えてくる。實にあらたかなことだ」

【七】

後ジテ志賀明神、影向の態で登場。

明神「これが雪であつたならば、幾度も袖を拂はなければなるまいと思はれるほど、落花が吹雪のやうに散り亂れて、志賀の山越のあたりは實に見事な眺めだ。いやこゝばかりではない、向ふの花園の里も春らしい趣で、志賀辛崎の松風まで

○辛崎―滋賀郡滋賀村。その老松は近江八景の一。
○千聲―千代の聲。
○鏡山―近江國蒲生郡。
○年經ぬる身は―古今集大伴黒主の歌「鏡山いざ立ちよりて見て行かん年經ぬる身は老いやしぬると」を引いた。
○それは老が身―その歌は黒主が老年の時に詠んだものであるとの意。
○これは志賀の神―今こゝに現れ出たのは、神となつた黒主であるとの意。
○白木綿―楮で作つた幣。幣の縁で「かけまくも」と續けた。
【八】
○薪の斧の―晋の王質が薪を伐る爲に山に入り、仙人の碁に見とれて、持つてゐた斧の柄ちるのも知らなかつたといふ故事により「永き日」の序とし、日の縁で「和光」を出した。
○和光―神佛が德光を和らげ、俗塵に交はること。老子に「和二其光一同二其塵一」
○塵に交はる雪ならば―和光同塵の語を受け落花を雪に喩へていふ。
○踏む跡までも心せよ―徒然草に「泉には手足をさしひたして、雪にはおり立ち

近江の海の。志賀辛崎の松風までも。千聲の春の。のどけさよ
シテ一聲「海越しに。見えてぞ向ふ鏡山
地「年經ぬる身は老が身の
シテ「それは老が身。これは志賀の
地「神の白木綿かけまくも（と舞臺に進み）忝しや。神樂の舞
と仕手柱際に立ち、
〔神舞〕
【八】
地ロンギ「不思議なりつる山人の。不思議なりつる山人の。薪の斧の永き日も。殘る和光のあらたさよ
シテ次の謡に合せて舞ふ。
シテ「げに惜しむべし君が代の。のどけき色や春の花の。塵に。交はる雪ならば。踏む跡までも心

が、千代に八千代にと音を立てゝ、まことにのどかな春景色だ。おゝ琵琶湖を隔てゝ向ふには鏡山が見える。あの山については――「鏡山いざ立ちよりて見て行かん、年經ぬる身は老いやしぬると」（鏡山といへば鏡のやうに姿が見えるだらう。大分永い年月を經たのだから、隨分年を寄つたことだらうから、一寸あそこへ立寄つて、自分の姿を見て行かう）と歌を詠んだが、それは昔黒主といはれた老年時代のことで、今こゝに現れたのは、忝くも志賀の明神である。では神樂の舞を舞はう」
〔神舞〕を舞ふ。
【八】
地「これは不思議だ。先程薪を負うて居られた不思議な樵夫が、今明神としてこゝに影向遊ばされたのだ。實にありがたいことだ」
シテ「おゝこの大御代ののどかな春景色を十分に味ふがよい。落花が塵に交はる雪のやうに地面に散り敷いたならば、それを猥りに踏みつけないやうに氣をつけるがよい」

せよ
地『げに心して春の風。聲も添ふなり御神樂の
シテ『小忌の衣の色はへて
地『花は梢の白和幣
シテ『松は立枝の
地『青和幣。かくるやかへるや、梓弓春の。山邊を越えくれば道もさりあへず散る花の。雲の羽袖を返しつつ紅の御袴の、そばをとり。拍子を揃へて神かぐらげに面白き、奏でかなげに面白き奏でかな

と常座にて留拍子を踏む。

といつて神舞をせられると、まことに春の風までがその心持になつて、樂の音に調子を合はせ、御神樂の舞の御衣は花の色に光り映え、その花は梢にかけられた白和幣となり、松は立枝にかけられた青和幣となる。かうして山一面に道も通れないほど花の散り敷いた中で、輕やかな袖を飜し、紅の御袴のかどを御手にとつて、拍子を揃へてお舞ひになる御神樂は、實に面白いありがたいものである。

後ジテ志賀明神舞ひ納めて退場。

て跡つけなと、萬づのもの。よそながら見ることなし」
○小忌の衣―神事節會に祭官舞人が裝束の上に着る青摺の單。
○白和幣―穀の皮で作つた白い幣。
○青和幣―麻で作つた青い幣。
○かくるや―和幣を榊などに懸けること。音を重ねて「かへるや」と續けた。
○かへるや―舞の袖の飜ること。弓の弦の「かへる」にかけて梓弓とつゞけた。
○梓弓春の山邊を―古今集紀貫之の歌「梓弓春の山邊を越えくれば道もさりあへず花ぞ散りける」を引いた。梓弓は春の枕詞。
○雲の羽袖―花の雲、雲の端、羽袖とつゞけた。
○そばを取り―袴のかどを手に持つて引上げること。

〔考異〕

諸流（觀寶剛）
著しい異同はない。

古諸本（光悦本）
【一】ワキ「急ぎ候程に……眺めうずるにて候（光ナシ）　【三】ワキ「不思議やな（光ナシ）これなる山賤を……薪になほ（光ナシ）花の……
これは心（光の）ありて休むか唯（光又）……休み候（光む）か　【四】地クセ「そもそも……妙なり（光れ）や敷島の……

七騎落（しちきおち）　観（寶 春 剛 喜）

解説

【能柄】　四番目　二段劇能

【人物】　ツレ　源頼朝、シテ　土肥實平、ツレ　新開次郎、ツレ　土屋三郎、ツレ　田代信綱、ツレ　土佐坊、子方　土肥遠平、ツレ　岡崎義實、後ワキ　和田義盛、狂言　船頭、後子方　土肥遠平

【所】　第一段　相摸灣の海岸
第二段　同じく沖合より海岸へ

【時】　治承四年八月

【作者】　能本作者註文に作者不明とす。親元日記に文明十五年三月十二日本曲演能の事が見え、禪鳳習道目録第三册に、

一切の能に仕合を本にする能ありと云、七騎落、盛久、小督、千壽、熊野などの事也。

と記してゐる。

【梗概】　源頼朝が石橋山の合戰に敗れ、船に乗つて安房上總の方へ逃げ落ちようとした時、主從八騎であつたので、祖父及び父の不吉な先例

を忌んで、實平に一人船から下すやうに命じた。實平は人を擇ぶのに苦心した末、遂にわが子遠平を陸に殘すこととした。既に陸には大勢の敵が見えたので、遠平の命はないものと覺悟してゐたところ、沖合で和田義盛の船が賴朝の船を求めて漕ぎ寄せてくるのに出會ひ、遠平は助けられてこの船中にゐたので、一同喜んで酒宴を催す。

【出典】源賴朝七騎落の事は、平家物語卷五「大場が早馬の事」曾我物語卷二「賴朝七騎落の事」にも記してゐるが、いづれも記事が簡單で、本曲の典據となつたのは、源平盛衰記卷二十一及卷二十二の記事であるらしい。まづ七騎落の人々については、「兵衛佐殿臥木ノ事」に、

兵衛佐に相從ひて山に籠りける者は、土肥次郎實平・同男遠平・新開次郎忠氏・土屋三郎宗遠・岡崎四郎義實・藤九郎盛長也。兵衛佐は軍兵ちり〴〵になりて、臥木の天河に隱れ入りにけり。……田代冠者は矢種既につきぬ。佐殿今は遙に落ち延び給ひぬらんと思ひければ、木より飛び下りて、跡目に附いて落ち給ひ、同じ臥木の天河にぞ入りにける。

といひ、なほ「小道地藏堂」の條に、

異說に云く、兵衛佐臥木に隱れんとし給ひける時は、土肥次郎實平・子息遠平・新開荒太郎實重・土屋三郎宗遠・岡崎四郎義實・土肥が小舍人に七郎丸と云ふ冠者、佐殿共に七人也。

といつてゐる。八騎落の凶例は記してゐないが、七騎落の吉例については、前掲「兵衛佐臥木」の項に、

其中に藤九郎盛長申しけるは、盛長承り傳へ侍り、昔後朱雀院の御宇天喜年中に、御先祖伊豫守殿、貞任宗任を責められけるに、官兵多く討れて落ち給ひけるに、僅に七騎にて籠り給ひけり。王事靡ㇾ監、終に逆賊を亡して四海を靡し給ひけり。今日の御有樣、昔に相違なし、吉例なりと申しければ、兵衛佐憑もしく覺しめして、八幡大菩薩をぞ心の内には念じ給ひけり。

和田義盛の船と沖合に廻り合つた事は、「佐殿漕二合三浦一事」に、

漕げや急げとて、安房國洲の崎を志して落行きける程に……三浦の輩は軍將を奉ㇾ尋とて、船を海上に浮べて、安房上總あやしき浦浦漕ぎ廻りけるに、佐殿の船も三浦が船も、互にあやしく思うて、沖中に間近く漕ぎ合ひける。若又敵にもやと思ひければ、彼も此も矢たばね解き、弓の弦しめして用心せり。佐殿をば船底に隱し、上に柴を積みて、岡崎ばかりさしあらはれて乘つたり。三浦船を漕ぎ近付きて、岡崎と見てければ、「いかにやいかに、いづら佐殿は」と問へば、「誰も君を尋ね奉る、三浦にもやと思ひ奉りつるに、

さては何國に御座すらん」といへば、三浦涙を流しつゝ「あな心うや、君の御向後の覺束なくてこそ、老いたる父をも振捨てゝ、敵に後を見せて尋ね進らするに、甲斐なき事の悲しさよ、兼てかくとだに知りたらば、衣笠の城に引籠り、大介と一所にて打死すべかりける者を」とて、各袖を絞りけり。佐殿は新臣にて此事を聞き給ひ、いとほしや世になき我をあれ程に思ふらん事の嬉しさよ、心づくしに遲く出てて恨みられじと思し召ければ、新臣より這ひ出て「頼朝爰にあり」と仰せければ「大將軍是に御渡りありけりや、大介宣ひつる事露違はず」とて、三浦手を合せて悦びけり。さても岡崎は石橋の合戰に與一が討たれし事を語つて泣く。三浦は小坪衣笠の軍の事、大介が申しし事、老いたる父を捨置く事ども語りて泣く。一人は若きを先立てゝ袖をぬらし、一人は老いたるを見捨てて袂を絞る。これらを本として本曲を構想したものであらう。

とある。

【概評】 武士の忠誠と恩愛とを描いたもので、これとやゝ似た曲に「仲光」があるが、それは主君の勘氣を受けた若君を助ける爲に、わが子を斬つた悲劇であるが、これは主君の武運を開く爲に、わが子を見棄てて、運よくも再會することが出來たのであるから、前者に比べて規模が大きく且めでたい曲となつてゐるのである。そしてこの事件の大體は前述の通り先進文藝に見えてゐるが、劇としての大切な葛藤、源氏の武運を開く爲に同志の一人を見殺すこと、その爲にわが子を見殺しにしなければならなかつたこと、死んだものと諦めてゐたわが子に再會することなどは、いづれも能作者自身の創案で、これあるが故に、忠誠も恩愛も鮮かに描き出されたのであるから、作者の手腕は平凡なものと看過すことは出來ない。場面の運び方も、前後二段ともその宜しきを得、人物の出入、事件の推移もなだらかに進展してゐる。

【一】

第一段

舞臺は相模國の某處。

石橋山で敗れて逃げた頼朝で、ツレ梶原景時、ツレ土肥實平、ツレ新開、土屋、田代、土佐坊、ツレ土肥遠平、ツレ岡崎義實等登場。

【二】

次第の囃子にて、ツレ源頼朝、梨打烏帽子・白鉢卷・襟白・着附厚板・法被・半切・腰帶・扇・太刀の裝束にて弓矢を持ち、シテ土肥實平、梨打烏帽子・白鉢卷・襟花色・着附厚板・法被・半切・腰帶・扇・太刀の裝束、ツレ新開次郎・土屋三郎・田代信綱、梨打烏帽子・白鉢卷・襟紺・着附厚板・側次・白大口・腰帶・扇・太刀の裝束、ツレ土佐坊 長絹頭巾・襟紺・着附縷箔厚板・側

【三】

○身は捨小舟—敗軍の身を波間に漕ぎ捨てられた小舟に喩へていふ。舟の縁で、恨みを浦、かひなきを櫂にいひかけた。
○兵衛の佐頼朝—源義朝の三男。平治亂に父義朝が敗亡して、頼朝は十三歳で清盛の爲に伊豆に流された。兵衛佐とは源氏敗亡の以前に從五位下右兵衛權佐に任ぜられたからの名。
○石橋山の合戰—石橋山は相摸國足柄下郡石橋村にあり、治承四年八月廿三日頼朝、平家の大庭三郎景親・股野五郎景久等とこの山に戰つて敗れた。寶生及下懸諸本には「土肥の杉山の合戰」とある。
○開かばや—開くとは逃げるといふことを忌んでいひかへた武士詞。
○土肥の次郎—名は實平。宗平の子で、相摸國土肥庄の人。

次・水衣・半切・腰帶・扇・太刀の裝束、子方土肥遠平、梨打烏帽子・白鉢卷・襟赤・着附厚板・側次・白大口・腰帶・扇・太刀の裝束、ツレ岡崎義實、梨打烏帽子・白鉢卷・襟紺・着附無地厚板・法被・半切・腰帶・扇・太刀の裝束にて出で、舞臺に入り向合ひ、

シテツレ（一同）次第「身は捨小舟恨みても。身は捨小舟恨みてもかひなきや浮世なるらん

地取に頼朝は正面に向き、

頼朝「これは兵衛の佐頼朝とはわが事なり。さても昨日石橋山の合戰に味方うち負け。餘りに無勢にて候程に。一先安房上總の方へ開かばやと存じ候

といひてシテへ向き、

頼朝「いかに土肥の次郎

シテ、頼朝の前に手を突きて、

シテ「御前に候

頼朝「餘りに味方無勢にある間。一先安房上總の方へ開かうずるにてあるぞ。急いで船の事を申

實平等一同「自分達は運命にすてられた、捨小舟のやうなもので、いかに不運を歎いても、どうすることも出來ない身上なのだ」

と次第を謡つて、自分達の心持を述べ、

頼朝「自分は兵衛佐源頼朝であるが、昨日石橋山の合戰に、味方はうち負け、軍勢が餘り少くて、到底敵對することが出來ないから、一先安房上總の方へ逃げのびようと思ふのだ」

と事件の經過を見物人に紹介して、さてシテ實平に向ひ、

頼朝「土肥次郎」

實平「はい」

頼朝「味方の軍勢が餘り少いから、一先安房上總の方へ逃げのびようと思ふのだ。急いで船の用意をいひつけてくれ」

しつけ候へ

シテ「畏つて候、とくより御船の事を申しつけて候。急いで召されうずるにて候

頼朝脇座へ行きて床几にかゝり、他のツレ及び子方は地謡座より囃子座へかけて弓形に並び下に居り、シテは後見座にくつろぎたる後、眞中に出で下に居る。一同船中にある心。

【三】

頼朝「いかに實平

シテ「御前に候

頼朝「唯今船中に供したる人數はいかほどあるぞ

シテ「さん候唯七騎御座候

頼朝「さては頼朝までは八騎よな。きつと思ひ出だしたる事あり。祖父爲義鎭西へ開きし時も主從八騎。父義朝江州へ落ち給ひしも主從八騎。思へば不吉の例なり。實平計らひて船より一人おろし候へ

實平「畏りました。御船の用意に疾くに申しつけて置きました。すぐにお召しなされませ」

一同船に乘つた態。

【三】

頼朝「おい實平」

實平「はい」

頼朝「今船中に供をしてゐる人數は幾人だ」

實平「はい、たゞの七騎でございます」

頼朝「それでは自分を加へて八人だな。……うん、さうだ、思ひ出したことがある。祖父の爲義が九州へ落ちのびられた時も主從八騎であつたし、父の義朝が近江へ逃げられた時も主從八騎であつた。思へば不吉な例だ。實平、お前の計らひでこの船から一人おろしてくれい」

【三】○七騎—その名は後に出る。源平盛衰記とは少し違つてゐる。解説參照。○祖父爲義—保元物語巻二「爲義降參の事」に「(爲義)それより東國へ下らんとしけるが、運や盡きたりけむ、忽ちに重病を受けて心身苦痛せられければ、氏神八幡大菩薩にも離され給ひけりとて、郎黨どもゝ落失せて、僅かに子どもの外十八人ばかりぞ殘りける」とあるを指すか。○鎭西—九州を云ふ。前文の故事を引いたものとすれば、寶生流に「奥州へ開きし時も」とある方が正しい。○父義朝—平治物語巻二「義朝落ニ著青墓ニ事」に「義朝の一所に落ちられけるは嫡子惡源太義平・次男中宮太夫進朝長・三男右兵衞佐頼朝・佐渡式部大輔重成・平賀四郎義宣・乳母子鎌田兵衞政家・金王丸、僅かに八騎なり」

○せがひ—背櫂。船棚ともいひ、船の兩舷に渡した板で、舟子が踏んで漕ぎ又は棹さす所。
○田代殿—田代冠者信綱。頼朝伊豆配流の初めから附いてゐた人。
○新開の次郎—名は忠氏。實平の甥。
○土屋の三郎—名は宗遠。實平の弟。
○土佐坊—名は昌俊。〔正尊〕參照。
○義實—岡崎四郎。
○龍門原上の土に—和漢朗詠集白樂天の詩句「龍門原上土、埋レ骨不レ埋レ名」に據つた。龍門は邊塞の地名。

實平「畏つて候」『實平仰せ承り（と目附柱際へ行き）。船のせがいに立ちあがり。御供の人數を見渡せば（とツレを見渡し）。まづ一番には田代殿
地「さて二番には新開の次郎
シテ『又三番には土屋の三郎
地「四番は土佐坊五番には（と正面に向き）
シテ「實平候六番には（と子方に向き）
子方「同じき遠平
シテ『艫板には
義實『義實あり
地「この人々は君のため（と正面に向き）。この人々は君のため。龍門原上の土に屍をば曝すとも。惜しかるまじき命かな。いづれを選み出ださんと（ツレを見渡し）。さしもの實平思ひかね。赤面したるばかりなり赤面したるばかりなり

實平「畏りました」
と實平は主君の仰せを承つて船棚に立つて、
實平「かうしてお供の人々を見渡すと、まづ一番には田代殿が居られる。それから二番には新開の次郎、三番には土屋の三郎、四番には土佐坊、五番には自分が居るし、六番には遠平が居り、艫板の方には義實が居られる。これらの人々は主君の爲には、野邊に屍を曝しても命を惜しまない、忠義の人達ばかりだ」
と、さすがの實平も誰を擇び出しておろせばよいか、當惑するの外なかつた。

【三】

○一の老體―吾妻鏡正治二年六月の條に「岡崎四郎平義實法師年八十九」とあるから、この時は六十九歳である。

とたら〳〵と下り下に居る。

【三】

頼朝「いかに實平。何とて遲きぞ急いでおろし候へ

シテ「畏つて候。（義實に）いかに岡崎殿に申し候。急いで御船より御下り候へ

義實「何と某に御船より下りよと候や

シテ「なかなかの事

義實「暫く。この御供のうちに。某一の老體にて候程に。かひがひしく御用にも立つまじき者と御覽じ限られて。かやうに承り候な。その儀に於ては御船よりは下り候まじ

シテ「いやいやさやうの儀にてはなく候。艫板に召されて候程に。陸の近さに申し候

義實「いや所詮この船中に。命二つ持ちたらんずる者を御船よりおろされ候へ

【三】

頼朝「おい實平、何をぐづ〳〵してゐるのだ。早くおろせ」

實平「畏りました」

岡崎義實に向ひ、

實平「岡崎殿、すぐこの御船から下りて下さい」

義實「何だと、わしにこの御船から下りよといはれるのか」

實平「さうです」

義實「一寸待つてくれ。この御供の人々の中で、わしが一番老人だから、滿足な御用にも立つまいと見限つて、それで、そのやうなことをいはれるのか。さういふわけならば、わしは斷じてこの御船から下りまい」

實平「いや〳〵そのやうなわけではない。艫板の方に居られるので、陸に近いから、さう申すのです」

義實「いや何彼の議論はいらぬ。この船の中で、命を二つ持つてゐる者を、御船からおろされるがよからう」

シテ「これは不思議なる事を承り候ものかな。それ人は生ずるより死するまで。命をば一つこそ持ちて候へ。二つ持ちたる謂れの候か

義實「さん候。某も昨日までは命を二つ持ちて候を。はや一つの命をばわが君に參らせ上げて候

シテ「さてその謂れは候

義實「その事にて候。昨日石橋山の合戰に。子にて候佐那田の餘一義忠は。副將軍を賜はり。股野と組んで討たれぬ。されば親子は一體二つの命ならずや。見申せば土肥殿こそ。この御船に親子一所に渡られ候へ。御分殘つて遠平をおろすか。遠平を殘して御分おるるか。親子のうち一人おりられ候へ

シテ「尤もにて候。餘りの道理に物なのたまひそ。

實平「これは奇妙なことをいはれるものだ。一體人間は生まれるから死ぬまで、命を一つ持つてゐるだけだ。それだのに、二つ持つといふ理窟がござるか」

義實「いやある。わしも昨日までは命を二つ持つてゐたが、もはや一つの命はわが君にさし上げたのだ」

實平「して、そのわけは……」

義實「そのことだ。昨日石橋山の合戰に、わが子の佐那田餘一義忠は味方の副將軍を承り、股野と組み合つて討たれたのだ。親子は一體で、即ち二つの命ではござらぬか。わしはその一つを失うたのだ。今見れば、土肥殿、そなたこそこの御船に親子一所に居られるのだ。だから、そなたが殘つて遠平をおろすか、遠平を殘してそなたが下りるか、親子のうちで一人下りられたがよからう」

實平「いかにも尤もだ。道理至極で、この上は何もいうて下さるな」

○佐那田の與一義忠―元祿外謠及び下懸三流には盛衰記と同じく義貞とあるが、吾妻鏡(長門本にも)には義忠とあるから、この方が正しい。佐那田餘一討死の事は盛衰記卷二十「石橋山合戰事」に見ゆ。この時年廿五。

○股野―五郎景久。大場景親の弟。

○御分―御身。そなた。

○物なのたまひそ―この上いつてくれるなとの意。

○人手には掛けまじいぞ—人の手を煩はさず、自分が手討にしてやらうとの意。

(子方に向ひ)いかに遠平。君よりの御諚にてあるぞ。急いで御船より下り候へ

子方「何と御船より下りよと仰せ候か

シテ「なかなかの事急いで下り候へ

子方「遠平幼く候とも。君の御大事に立たん事。誰にか劣り候べき。御船よりは下りまじく候

シテ「こざかしき事を申す者かな。君の御爲父が命にてはなきか。急いで御船より下り候へ

子方「いやいや君の御爲父の命をば背くとも。御船よりは下りまじく候

シテ「言語道斷の事を申すものかな。君の御爲父が命をば背くとも下りまじきと申すか(と立ち)。その儀ならば人手には掛けまじいぞ

(と刀の柄に手をかけて子方へ進みかゝる。)

義實「暫く(と扇にてシテをとめ)。これは君の御門出な

(わが子遠平に向ひ、)

實平「遠平、わが君の仰せだ。すぐこの御船からおりよ」

遠平「なに、この御船から下りよと仰しやるのですか」

實平「さうだ、すぐ下りよ」

遠平「私は年こそ小さうございますが、わが君の大事の御用に立つことは、誰にも劣りは致しません。私は御船から下りません」

實平「小生意氣なことをいふ奴だ。わが君の御爲に父がいひつけるのではないか。すぐ御船から下りよ」

遠平「いえ〱、わが君の御爲ですから、父上のいひつけに背いても、御船から下りることは出來ません」

實平「以ての外の事をいふ奴ぢや。君の御爲に、父のいひつけに背いても下りないと申すのか。よし、それならば人手には掛けず、わしが成敗してやらう」

(と刀に手をかけて、遠平を斬らうとする。)

義實「お待ちなされ、これはわが君のめでたい御門出であるのに、實平、そなたは

○かまへて―必ず。

○尋常に―武士らしくとの意。

るに。誤りたるか實平

シテ「いづくまでも某が誤りて候。所詮下りまじきと申す者をおろさんより。某御船より下りようずるにて候

と仕手柱際へ行く。子方立ちて、

子方「いかに申し候。さらば某御船より下り候べし

シテ「何と下りようずると申すか。げにげに今こそ某が子にて候へ

と子方へ行きその肩に兩手を添へて橋懸へ連れ行き、一の松にて正面の方を遠く見やりて、子方に向ひ、

シテ「あれを見よ敵大勢うち出でたり。かまへて某が子と名のつて。尋常に討死せよ。名殘こそ惜しけれ。『かくてわが子をおろし置き(とシテは舞臺へ歸り)。實平お船に參りけり

と子方のゐたる跡へ坐す。子方は二の松まで行きて舞臺へ向く。

心得違ひをしたのか」

實平は居直つて、

義平「どこまでも自分が間違つてゐたのだ。つまり下りまいとする者を下さうとするよりは、自分が御船から下りるのがよいのだ」

と船より下りかける態。

遠平「もうし父上、それならば私が御船から下りませう」

實平「何だと、お前が下りようといふのか。おゝ、それでこそわが子だ」

と船より下し、陸の方を見て、

實平「あれを見よ、向ふに敵が多勢出て來たわ。必ずわが子と名乘つて、立派に討死せい。名殘惜しいことだが」と、かうして實平はわが子を陸に下して置いて、自分はまた御船に參つた。

○ゆゆしく―雄々しく。

○松浦佐用姫―宣化天皇の時、大伴狭手彦が新羅に渡るのを悲しんで、その妻九州松浦の佐用姫が山に登り船の行方を慕ひ、いつまでもその場を動かなかつたとの故事。

【四】
○契りほどなき―親子の緣の短いことを船足の早いことにいひかけた。

○心して―同情して。

○なかなか―却つて。

地『ゆゆしく見ゆる實平かなと。互の心を思ひやり。親子の別れいたはしや

子方『父の別れは申すに及ばず。君を始め參らせて。皆人々に御名殘こそ惜しう候へ（としをる）

地上歌『かの松浦佐用姫が。かの松浦佐用姫が。唐土船を慕ひ佗びて。渚にひれ伏しし有樣も。今遠平が親と子の。別れに變らじと。皆涙をぞ流しける

【四】
子方ロンギ『契りほどなき早船を。暫しとだにもいひあへず跡を見送りたたずめば

地『はや遠ざかる浦の波。立ち別れ行く有樣を

子方『餘の人々は心して

地『あはれみあへる

子方『船のうちに

地『實平はひたすらに。弱氣を見えじとて。なか

これを見て、船中の人々は「實平はいかにも武士らしい雄々しい心掛けだ」と、その心持を察して、親子の別れに同情した。

遠平は船の方を見返って、

遠平「父上とお別れする悲しさは申すまでもないこと、わが君を始め奉り、皆の方方とお別れするのが、お名殘惜しうございます」（と泣く）

まことに、昔松浦佐用姫が支那へ渡る夫の船を戀ひ慕つて、濱邊にふしまろんで泣いた有樣も、今遠平親子の別れと變りあるまいと、皆同情の涙を流した。

【四】
親子の緣が薄く、暫しの名殘を惜しむ暇もなく、船は沖合さして漕いで行くので、遠平が見送つて立つてゐると、次第に遠ざかつて行く船中でも、餘の人々は親子の別離に同情してゐたが、たゞ實平だけは强ひて女々しい樣子を見せまいと思つて、却つてわが子遠平の方を顧みもしないで、心强い樣を裝うてゐる。

この時子方幕へ入る。船が次第に遠ざかつて行く態である。

なかかへりみおきもせで（とシテは正面に向き居り、ツレ一同子方を見送り）。心強くも行く跡に（子方幕に入る）。敵大勢見えたりすはや遠平は討たるるとて（頼朝のみ幕へ向き）。頼朝もあはれみ陸を見給へばさすがげに。恩愛の、契りも唯今を限りぞ、と思ひ實平は（シテ幕に向き）。磯邊に向ひ人知れず。心のままならばあはれ遠平と一所に。討死せばやとあこがれて（シテ居立ち）。飛び立つばかりに思ひ子の別れぞあはれなりける別れぞあはれなりける（シテ正面に向きて面を伏す）

【五】

後見、舟の作物を橋懸に出す。

一聲の囃子にて、ワキ和田義盛、梨打烏帽子・白鉢巻・着附厚板・法被・白大口・腰帯・扇の裝束にて弓矢を持ちて舟に乗り、狂言舟夫、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帯・扇の裝束にて舟の艫に乗りて棹を取り、

ワキ一聲「弓張月の西の空。行方定めぬ。船路かな

狂言「沖なる波の音までも。鬨の聲かと。恐ろしや

○あこがれ—思ひ焦がれること。上の「人知れず」はこの語の副詞。

○思ひ子—愛する子。飛び立つばかりの思ひといひかけた。

【五】

○弓張月—上弦又は下弦の月。

○行方定めぬ—身の行末の不安定なことを、行方の定まらぬ舟によそへていふ。西の空行く、行方定めぬといひつゞけた。

◎沖なる波の—この狂言詞諸本にある。

すると、かなた陸の方に敵が多勢見えるーさあ大變だ、遠平が討たれるぞーと、頼朝も可哀想に思つて、陸の方を御覧になると、實平も流石に親子恩愛の契りも今を限りに絶え果てることかと思へば、思はず濱邊の方に向ひ、人知れず心の中に「もしわが思ふまゝになるならば、遠平と一所に討死したい」と、わが子が慕はれ、飛び立つ思ひをするのは、まことにあはれなことであつた。

【五】　第二段

舞臺は相模灣の沖合。

ワキ和田義盛、狂言船頭に舟を漕がせて來た體で登場。

義盛「武事に從つたものの、この末どうなることか、はかない思ひをしながら、西の方へと船旅をしてゐることだ」

船頭「沖の波打つ音までが鬨の聲のやうに

○御座船―頼朝の乗つてゐる船を尊んでいつたのである。

◎畏つて候―この狂言詞も諸本にある。

ワキ（舞臺を見て）「あれに見えたるが御座船にてありげに候。（狂言に）急いで船を漕ぎ候へ

狂言「畏つて候

と舟を漕ぐ。シテ立ちて橋懸の舟を見やり義實に辭儀して、

シテ「いかに申し候。あれに兵船一艘見えて候。まづこなたより詞をかけうずるにて候

義實「然るべう候

シテ仕手柱際へ行き橋懸へ向き、

シテ「いかにあれなる船は誰が召されたる御船にて候ぞ

ワキ「われもそなたの船影を。怪しく思ひ休らふなり。そも誰人の船やらん

シテ「これは土肥の次郎實平が乗りたる船候よ

ワキ「何と土肥殿の御船と候や

シテ「なかなかの事。さてその御船は誰が召されたる御船にて候ぞ

思はれて、恐ろしいことだ」

といひながら、次第に頼朝の船の方へ漕いで來る。

義盛頼朝の船を見つけて、

義盛「あれに見えるのが、わが君の御座船のやうだ。急いで船を漕いでくれ」

船頭「畏りました」

頼朝の船でも、義盛の船を見つけて、

實平「岡崎殿、あそこに兵船が一艘見えます。まづこちらから言葉をかけませうか」

義實「それがよろしからう」

實平、義盛の船に向ひ、

實平「おうい、その船はどなたのお乗りになつてゐる御船です」

義盛「こちらでも、そなたの船影を變だと思つて休んでゐるのだ。一體誰の船だ」

實平「これは土肥次郎實平の乗つてゐる船ですよ」

義實「なに、土肥殿の御船だといはれるのか」

實平「さうです。して、その御船は誰が乗つて居られる御船です」

○和田の小太郎―三浦義宗の子。

○たばかつて―欺いて。

○浮かれ船―行方を定めず漂つてゐる船。

ワキ「これこそ和田の小太郎義盛が乗りたる船候よ

シテ「さては和田殿の御船にて候か

ワキ「なかなかの事。内々申し通ぜし如く。御味方に參らん爲にこれまで參じて候。さて君はその御船に御座候か

シテ義實の前に出で、

シテ「和田は内々申し合はせたる事の候間。唯今參りて候さりながら。まづたばかつて心を見うずるにて候

義實「尤もにて候

シテまた仕手柱際へ出で、

シテ「いかに和田殿へ申し候。これまでの御參りめでたう候さりながら。面目もなき事の候。昨日の暮ほどよりわが君を見失ひ申し。かやうに浮かれ船となりて尋ね申し候よ

義盛「これが和田小太郎義盛の乗つてゐる船ですよ」

實平「それでは、和田殿の御船なのですか」

義盛「さうです、内々申し通じてゐたやうに、御味方に加はる爲に、こゝまでやつて來たのです。して、わが君はその御船にお出でですか」

實平、義實に向ひ、

實平「和田は内々申し合はせて置いた事があるので、唯今これへ參りました。しかし、まづ欺いて、彼の心底を見てみませう」

義實「それがよからう」

實平、義盛の方に向ひ、

實平「おうい和田殿、これまでお出でになつて結構でした。しかし、面目もないことだが、昨日の暮の頃からわが君を見失うて、このやうな浮舟となつて、わが君を探してゐるのですよ」

○味方—今まで屬してゐた平家。

ワキ「何と君はその御船に御座なきと候や
シテ「さん候
ワキ「言語道斷の事にて候ものかな。われ味方を忍び出で。月日とも賴み奉る賴朝には離れ申し（弓矢を投げすて）。この上は命ありても何かせん。いでいで自害に及ばんと。腰の刀に手をかくる
（と居立ちて自害せんとす）
シテ「ああ暫く。君はこの船に御座候
ワキ「何と君はその御船に御座候とや（と直し）
シテ「なかなかの事
ワキ「さて何とてかやうには承り候ぞ
シテ「これは戲れ事にて候。幸ひ陸近う候程に。その船をも寄せられ候へ。御船をも寄せ候ひて。陸にて御對面あらうずるにて候
ワキ「心得申し候。さらばやがて陸へ參らうずる

義盛「何だと、その御船にはお出でにならないといはれるのか」
實平「さうです」
義盛「これは意外千萬だ。自分は味方の平家から忍んで免れて來たのに、この後月日とも賴み奉らうと思ふ賴朝にお離れしては、もはや生きてゐても何の甲斐もない。では自害しよう」
と腰の刀に手をかける。
實平「あゝ暫くお待ち下さい。實はわが君はこの船にお出でになるのです」
義盛「何といはれる、わが君はその御船にお出でになるといはれるのか」
實平「さうです」
義盛「それならば、何故さうといつて下さらなかつたのです」
實平「先程のは冗談です。幸ひ陸に近いから、その船をも陸へお寄せなされい。この御船をも寄せて、陸で御對面になることとしませう」
義盛「承知しました。それではすぐ陸へ參

【六】

○心をつくさせられ—心を痛めさせられる。心配させられる。

にて候

といひて、シテは眞中に、ワキは脇正面にて下に居る。

狂言「土肥殿〳〵。ざれ事も時によるものに候

といひて舟を持ちて幕に入る。

【六】

シテ(ワキに)「いかに申し候御前にて候

ワキ(頼朝に辭儀して)「わが君を見奉りて。今は安堵仕りて候

シテ「げにげに尤もにて候

ワキ(シテに)「いかに土肥殿に申し候

シテ「何事にて候ぞ

ワキ「この御供の中に。何とて御子息遠平は御入り候はぬぞ

シテ「その事にて候。さる謂れあつて陸に殘し置きて候

ワキ「とくよりかくと申したくは候ひつれども。以前某に心をつくさせられ候その返報に。今ま

りませう」

と二つの船を岸に寄せた態で、舞臺は落着となる。

【六】

實平「和田殿、わが君の御前ですぞ」

義盛、頼朝に辭儀をして、

義盛「わが君をお見上げして、やつと安心しました」

實平「いかにも御尤もです」

義盛「時に土肥殿」

實平「何です」

義盛「この御供の中に、どうして御子息の遠平がお出でにならないのです」

實平「そのことです、實は少しわけがあつて、陸に殘して置いたのです」

義盛「いや實は自分が早くこの事を知らせたかつたのだが、先程自分に心配をさせられたから、その仕返しに、今まで默つ

○引出物―贈り物。

○仙家に入りし身―和漢朗詠集大江朝綱の句「謬入二仙家一雖レ爲二半日之客一恐歸二舊里一纔逢二七世之孫一」を引いた。前半は王質が石室中に童子の圍棋を見て、斧の柄が朽ちるまで時の過ぎるのを知らなかつたといふ故事。後半は劉晨・阮肇が天台山に藥を採りに行つて仙女に會ひ、七代を經て歸つたといふ故事。

【七】

ではかくとも申さぬなり。いで土肥殿に引出物申さんと（立ち）。隱し置きたる船底より。遠平を引き立て見せければ

（と仕手柱際へ行き、切戸より入りて後見座にくつろげる子方を連れて眞中へ出し、もとの座に坐す。）

シテ「その時實平あきれつつ（と立ち）

地「夢か現かこは如何にとて（と子方を兩手に抱へ）。覺えず抱きつき泣きゐたり（としをり、シテはもとの座に、子方は笛座前に坐す）。たとへば。仙家に入りし身の半日の程に立ち歸り。七世の孫に逢ふ事の譬へも今に、知られたり譬へも今に知られたり

【七】

シテ「いかに義盛に申し候。さてこの者をば何として召し連れられて候ぞ

ワキ「さん候これまで伴ひ申したるいはれを。御前にて申し上げうずるにて候

シテ「急いで御物語り候へ

てゐたのだ。では、土肥殿、そなたに贈り物を致さう」

といつて、隱して置いた船底から遠平を引出して、實平に見せると、實平は驚き呆れて「これはほんとであらうか、夢であらうか」と、思はずわが子に抱きついて泣いてゐた。昔、仙人の住家へ行つたものが、半日程のつもりで永い年月を過し、わが家に歸ると、會つたのが七世の孫であつたといふ話も、このやうであらうかと思はれるばかりであつた。

【七】

實平はや、あつて、われに返つた心持で、

實平「義盛殿、して、この子をどうしてお連れ下さつたのです」

義盛「さやう、こゝまで連れて来た次第を、わが君の御前で申しあげませう」

實平「早速お話し下さい」

ワキ〔詞〕さても昨日石橋山の合戰破れしかば。大庭が手勢君を討ち奉らんと。大勢渚にうち出でたりしに。某も一所にうつて出でしが。汀を見れば。引きかねたる若武者一騎ひかへたり。某駒かけよせて見れば御子息遠平なり。急ぎ馬より飛んで下り。生捕る體にもてなし船底に乘せ申し。これまで伴ひ參りたり。なんぼう土肥殿に義盛は忠の者にて候ぞ

シテ〔 〕かかるありがたき事こそ候はね。唯今の御物語を聞き候ひて落涙仕りて候を。（ツレを見渡して）さぞ人々の不覺の涙とや思しめさるらんさりながら

地〔 〕嬉し泣きの涙は。嬉し泣きの涙は何かつつまん唐衣。日も夕暮になりぬれば。月の盃とりどりに

義盛「さて、昨日石橋山の合戰に源氏が破れたので、敵の大庭の軍勢は勢ひに乘じて、わが君を討ち奉らうと思つて、多勢で濱邊にうち出て來たのです。その時自分も大庭と一所にうち出たのですが、濱邊を見ると、逃げ損ねた若武者が一人立つてゐる。自分は馬を驅け寄せて見ると、御子息の遠平であつたのです。それで、急いで馬から飛んで下り、生捕る風を裝うて、船底に乘せて、こゝまで連れて來たのです。どうです、自分は土肥殿に對して、隨分忠義な者でせうがな」

實平「このやうなありがたいことはありません。唯今のお話を聞いて涙を落したのだが、皆の方々はさぞ女々しい涙だとお思ひになるでせう。しかしこの嬉し泣きの涙はとう隱しやうもないのです」と、やがて日も暮れて、月が空に出れば、主從ともに悦びの酒宴を催すのである。

○大庭が手勢―大庭景親直屬の軍勢。

○なんぼう―いかほど、隨分。

○忠の者―戲れを帶びていつたのである。

○不覺の涙―女々しい涙。

○何かつつまん唐衣―古今集讀人不知の歌「嬉しさを何に包まん唐衣袂ゆたかに裁てといはましを」を引いた。

○日も夕暮―衣の緣語紐をいひかけた。

○月の盃―夕暮を承けて月を出した。月は盃の形の形容。

○とりどりに―それ〴〵。盃を取るといひかけた。

○そと—一寸。

【八】

○たなごころに治め給へる—政權を掌中に治める意。

○弓矢の家—武士の家。道に入るを射るにいひかけて弓の字を呼び起したのである。

とシテ立ちて頼朝に酌をし、

シテ「主從ともに悦びの（とワキに酌をし）

地「心嬉しき酒宴かな（ともとの座に着く）

ワキ「いかに實平。餘りにめでたき折なれば一さし御舞ひ候へ（といひて大小前に坐す）

シテ「さらばそと舞はうずるにて候

地「心嬉しき。酒宴かな（とシテ立ち）

〔男舞〕

【八】

地（キリ）「かくて時日を廻らさず。かくて時日を廻さず。國々の兵馳せ參ずれば（シテ正面を見渡し）。程なく御勢二十萬騎になり給ひつつ（頼朝に辭儀し）たなごころに。治め給へることの君の御代の（頼朝立ちて橋懸へ行き）。めでたき始めも實平正しき忠勤の道に入る實平正しき忠勤の道にいる弓矢の家こそ。久しけれ

と常座にて頼朝を見送りて留拍子を踏む。

義盛「實平殿、實にめでたい折だから、一つ舞をお舞ひなされい」

實平「それでは、少し舞ひませう。——」

「心嬉しき酒宴かな—」と言ひ、

〔男舞〕を舞ふ、

【八】かうして、時を移さず諸國の武士が馳せ參じたので、間もなく總勢二十萬騎となつて、頼朝が天下を掌中に治めることとなつたが、かく頼朝の天下となつためでたい發端も、實平が正しい忠勤を勵んだことから起るのであつて、その武名は千載に傳へられるのである。

一同めでたく退場。

〔考異〕

諸流（五流）

【五】ワキ「心得申し候……陸へ参らうずるにて候（春賴朝「いかに小太郎。是まで來りたる志。近頃神妙なり。いかに實平。小太郎に酒を勸め候へ。シテ「畏つて候。いかに小太郎殿。是は御意にて候。一つたべられ候へ）【六】地「夢か現か……泣きゐたりたとへば仙家に入りし身の。半日の程に立ち歸り。七世の孫に逢ふ事の。實へも今に知られたり〳〵（寶・下懸ナシ）

この外。シテ・ワキ等の詞、諸流の間異同が少くない。

古謠本（元祿八年本）

【一】賴朝「これは……開かばやと存じ（元思ひ）候　【三】義實「暫く（元候）この御供の……下り候まじ（元るまじく候）……義實「その事にて候……佐那田の餘一義忠（元眞）は……親子は一體（元一所一所は）二つの……土肥殿こそこの御船に（元ナシ）親子一所に渡らせ（元ナシ）候へ……親子のうち（元に）一人……子方「いやいや……父の命をば（元には）背くとも……義實「暫く（元候）これは……シテ「いづくまでも……下りよう（元れう）ずる……子方「いかに申し候さらば某（元ナシ）……下り候べし（元やうするにて候）シテ「何と……今こそ某（元實平）が子にて……尋常に討死せよ（元し。名を後代にあけ候へ）名殘こそ惜しけれ（元惜さは限りもなきぞ）……　【五】義實「然るべう候（元急て御尋有らふするにて候）……シテ「これは（元社）土肥の次郎……シテ「なかなかの事……さてその御（元ナシ）船は……ワキ「なかなかの事内々申し通（元談）ぜし如く……ワキ「言語道斷……賴朝には離れ申し（元す）……シテ「これは戲れ事……御（元座）船をも寄せ……

【六】ワキ「畏つて候。わが君を見（元拜）奉りて……ワキ「この御供の……遠平は御入り（元座）候はぬぞ……　【七】ワキ「さても……若武者一騎（元渚に）ひかへたり……シテ「さらばそと舞はうずるにて候（元畏て候）……　【八】地「かくて……たなごころに（元て）治め……

自然居士　觀（寶 春 剛 喜）

解說

【能柄】　四番目　一段劇能

【人物】　**狂言**　雲居寺門前の者、**シテ**　自然居士、**子方**　女兒、**ワキ**　人商人、**ワキツレ**　人商人

【所】　**前半**　京都雲居寺、**後半**　近江國大津湖畔

【時】　鎌倉時代（無季）

【作者】　世子六十以後申樂談儀に觀阿彌の作とし、同書及び花傳書に觀阿彌が演出して名聲を博したことを記してゐる。觀阿彌の作であることは疑ひないが、能作書に「自然居士古今あり」と記してゐるのを見れば、古作があつて觀阿彌がこれを改作したものであらう。二百十番謡目錄にも觀阿彌の作としてゐるが、能本作者註文には世阿彌の作とし、「觀阿の作といふ說あり」と記してゐる。勿論これは一說として擧げてゐる方が正しい。看聞日記に永享四年三月十四日仙洞御所で、糺河原勸進猿樂記に寛正五年四月七日、粟田口勸進猿樂記に永正二年四月十六日演ぜられた事などが出てゐる。言經卿記文祿四年三月廿九日の與

に註釋のことが見えてゐる。

【梗概】 自然居士が京都雲居寺造營の爲に說法をしてゐると、一少女が兩親の追善の爲に、身を賣つて得た小袖を添へて、諷誦文を居士に捧げた。そこへ人商人が來て、この少女を引き立てて行つたので、居士は說法を中止してこれを追驅け、大津の湖岸から將に舟を漕ぎ出さうとする人商人を引き留めた。人商人はもとより容易に少女を返さうとしなかつたが、居士は曲舞や簓や羯鼓などを演じて、その心を和らげ、遂に少女を取戾して京に歸る。

【出典】 これといふ典據は見當らない。恐らく鎌倉時代の中頃に自然居士といふ遊藝に達した說經者のあつたことが傳へられてゐたので、能樂の特色たる諸種の民間演藝を演出する便宜のため、これを主人公として、更に當時その例の少くなかつた人買ひの事件をこれに絡ませて、劇的脚色を施したものであらう。

【概評】 現行謠曲中最古作の一で、歷史的に見て珍重すべきものであるばかりでなく、それ自體の構想脚色からいつても、後の曲の追隨を許さない特色を持つてゐる。登場人物の個々について觀れば、まづ子方が自ら進んで人商人に身を賣るものには「櫻川」があるが、それは母の貧を助けたい爲に身を賣つたとはいふものの、これが爲に却つて母を狂亂せしめてゐて、淺慮の譏りを免かれないが、これは父もなく母もない孤子が身を捨てて兩親の追善を計るのであるから、いかにも悲慘で、物狂の謠曲に出てくる父又は母を失つたとの子方よりも深酷で寧ろ陰慘である。次にワキの人商人は、やはり「櫻川」にも人商人がワキヅレとして登場するが、たゞ子方の母に遺書を託されてゐるだけで、一曲の中途で消えてゐるのに反し、これは後半に於て愈々その人商人らしい本性を暴露して、シテの自然居士と最後まで對抗し、十分に劇的職能を發揮してゐるのである。殊に本曲のシテ自然居士について見れば、本曲創作の動機としては、所謂遊狂で、歌舞を演せしめるに都合のよい人物として捉へて來たものであらうが、シテをして歌舞を演せしめるのに、これほど妥當な有效な理由を持つたものは外にない。多くの物狂の舞は、寧ろ人情に反した不自然を犯して演せしめてゐるのであり、本曲のシテと同樣な遊狂喝食僧を主人公とした「花月」「東岸居士」などにしても、一は多くの狂女物と同樣な不自然に陷つて居り、他は不自然に陷らないまでも、その日常生活を示しただけで、劇的必然性を缺いて居るが、本曲のシテは少女の危急を救はんが爲に、難行苦行の心を持つて、次から次へと舞ひ續けてゐるのであるから、その演舞が極めて緊張してゐるのである。

脚色の形式からいつても、どの人物の登場にも次第・一聲などの囃子を用ゐず、舞臺は二場に分れてゐながらシテを中入せしめないで

一段能としてゐるなど、實に思ひ切つた手法を用ゐてゐるのであるが、しかもその推移が甚だ滑らかで、終始間隙のない舞臺面を作つてゐるのは、驚歎に値ひすると思ふ。

◎諸本には「かやうに候者は。東山雲居寺のあたりに住居する者にて候。ここに自然居士と申す喝食の御座候が。一七日說法を御演べ候。今日結願にて御座候。皆々參りて聽聞申し候へ」とある。

【一】

○雲居寺―もと承和四年參議菅野眞道が桓武天皇の御爲に建立したもの。中古荒廢したのを、崇德天皇の天治元年瞻西上人が再興したが、後また廢寺となつた。東山の高臺寺はその舊跡であるといふ。

○造營の札―雲居寺造營の寄附金の札。

○夕の空の―雲の序。

○月待つ程の―前句の「夕の空」を承けていふ。月の出るまでの間。金葉集藤原基俊の歌に「夏の夜の月待つ程の手すさみに岩もる清水いく結びしつ」

○說法一座―一席の說教。

○導師―本曲の末に記す。

○高座―說法の時に上る高い座牀。

【序】　狂言雲居寺門前の者、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて名乘座に出で、

狂言(口開)「かやうに候者は。雲居寺門前に住居する者にて候。こゝに自然居士と申して說經者の御座候が。雲居寺造營のため七日の說法を御演べ候。今日滿參にて聽衆も群集仕り候。急ぎ居士を呼び出だし。說法を演べさせ申さばやと存ずる

といひて幕に向ひ、

狂言「いかに居士へ申し候。聽衆も群集仕り候間。急ぎ御出であつて。說法を御演べ候へや

といひて狂言座にくつろぐ。

【一】

シテ自然居士、面喝食・喝食鬘・襟白・着附白綾・黑水衣・白大口・掛絡・腰帶・扇・數珠の裝束にて橋懸へ出で一の松に立ちて、

シテ「雲居寺造營の札召され候へ

といひて舞臺に入ると、狂言床几を大小前に持ち出し、

狂言「まづこれへ御腰を召され候へ

シテ床几にかゝり、

シテ「夕の空の雲居寺。月待つ程の慰めに。說法一座演べんとて。導師高座に上り。發願の鉦うち鳴らし。(合掌して)謹み敬つて白す一代教主釋迦

【一】

舞臺は京都雲居寺。

シテ自然居士橋懸へ登場。寺の門前の體で、

居士「雲居寺造營のため御寄進下されい」

といひながら雲居寺へ入つた心で、

居士「やがて月の出るまでの慰みに、一席說教をしよう」

といつて、導師として說法の高座に上り、發願文を讀む合圖の鉦を鳴らし、

佛前に合掌する心で、

居士「謹み敬つて、この世にありがたい教

牟尼寳號。三世の諸佛十方の薩埵に申して白さく。總神分に般若心經

といひて手を下す。

【三】

子方女兒、髪・鬘帶・襟赤・着附摺箔・唐織着流の装束にて、小袖と文とを持ちて出で橋懸一の松に立つ。狂言舞臺よりこれを見て、

狂言「あらいたはしやこれなる幼き子の諷誦を奉られて候。こなたへ給はり候へ

といひて橋懸へ出で子方の文と小袖を受取り。

狂言「さらばこなたへ御出で候へ

と子方を目附柱際へ連れ來り下に居る。

シテ「や。これは諷誦を御上げ候か

狂言「なか〳〵の事諷誦を御上げ候。御覽候へ

と文をシテへ渡し小袖を前に置きて狂言座にくつろぐ。

シテ文を開きて、

シテ「敬つて白す受くる諷誦の事。三寳衆僧の御布施一裹。右志す所は。二親精靈頓證佛果のため。身の代衣一襲。三寳に供養し奉る。（手を下し）かの西天の貧女が。一衣を僧に供ぜしは。身の

○[illegible]顧の鈕　末に記す。
○寳號—如來の名號を讚美した詞。
○三世の諸佛—過去・現在・未來の三世にわたるあらゆる佛。
○十方の薩埵、總神分に般若心經　末に記す。
【三】
○諷誦—梵語伽陀 Gatha の譯語であるが、廣く經文讀誦の意にも用ゐる。こゝには請諷誦文（略して諷誦文）のことで、死者追善のために施物を供へて僧に諷誦を請ふ文を指す。
◎なか〳〵の事—諸本に「げにこれは美しき小袖にて候。急いでこの諷誦文を御覽候へ」とある。
○敬つて白す—以下「同じ臺に生まれん」までが諷誦文。
○受くる諷誦の事—諷誦を申し受くる事。
○三寳—佛・法・僧の三。
○御布施一裹—布施は衣服金錢等の財物を施與する事一裹は一包み。
○二親精靈頓證佛果—父母の靈魂をして速かに成佛得脱の果報を得しめ給へとの意。
○身の代衣—原義は蓑代衣で、雪の時に蓑の代りに着

へをお開き遊ばされた釋迦如來を始め奉り、すべての佛陀・菩薩に申し上げます。こゝにあらゆる佛神の守護を仰ぎたく、般若心經を讀誦致します」

【三】

そこへ子方女兒が文と小袖とを持つて登場。門前の者がこれを見つけて説教場へ連れて來て、その文と小袖を自然居士の前に出す。居士はその文を見て、

居士「やあ、これには諷誦文をお上げなさるのか」

ここの文を開いて讀む。

居士「——

「謹んで諷誦を願ひあげます。ここに御佛及びお僧にお布施として小袖一襲をさし上げます。これを以て、亡くなりました父母の靈魂が速かに極樂往生の果報を得ますやうに、お願ひ申しあげます。この爲に、ここに身賣りして得ました着物を一襲、佛に捧げます。

昔かの天竺の貧女は、唯一枚しか持つてゐない着物を僧に贈つて、その善根

る上衣であるが、こゝでは「身の代衣」に通はせて、わが身を賣つて得た衣の意。
○西天の貧女が―賢愚經に出てゐる話で、昔天竺の檀膩伽といふ貧女が、夫婦の間に唯一枚の衣を持つて居り、夫が外出した時は女は裸となり、女が外出した時は夫が裸となつた。然るに僧が來た時、この一枚の衣を惜しまず僧に與へたので、その功德により、夫は舍衞國の大長者と生まれ、貧女は長者の娘と生まれたといふ。
○逆緣―こゝでは逆修結緣の意で、生前に三寶供養をして、逆じめ死後の爲に佛緣を結んで置くこと。
○恨めしき―衣の緣語裏にいひかけた。新續古今集藤原實遠の歌に「いとどうきみのしろ衣恨みてもかひなく積る花の白雪」
○先考先妣―死んだ父を先考といひ、死んだ母を先妣といふ。
○同じ臺に―同じく極樂の蓮華臺に。
【三】
○人商人―人買ひ。他人の子女を買ひ取り又は誘拐して賣買する者。

後の世の逆緣。今の貧女は親のため（と文を見）

地上謠「身の代衣恨めしき。身の代衣恨めしき。浮世の中をとく出でて。先考先妣諸共に。同じ臺に生まれんと讀み上げ給ふ自然居士墨染の袖を濡らせば。數の聽衆も色々の袖を濡らさぬ、人はなし袖を濡らさぬ人はなし

「同じ臺に生まれん」と文を戴き、「讀み上げ結ふ」と文を二つに折りて捨て、「墨染の袖を濡らせば」としをる。

【三】

ワキ人商人、着附段熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束、ワキヅレ人商人、ワキと同樣の裝束にて橋懸へ出で、ワキは一の松、ワキヅレは三の松に立ち、

ワキ「かやうに候者は。東國方の人商人にて候。われこの度都に上り。數多人を買ひ取りて候。又十四五ばかりなる女を買ひ取りて候が。昨日少しの間暇を乞ひて候程にやりて候が。未だ歸らず候

といひてワキヅレに向ひ、

により、死んだ後よい果報を得ましたが、今この貧女はわが爲ではなく親の爲にお願ひ致すのでございます。そして私も、身を賣られなければならないやうなこの浮世を一時も早く離れて、死んだ兩親と一所に極樂淨土に生まれることが出來ますするやうにお願ひ申し上げます――」と讀み上げて、自然居士が同情の淚に袖を濡らすと、數多の聽衆も皆袖を濡らさないものはなかつた。

【三】

極樂雲居寺の門前へ、ワキ・ワキヅレ二人の人商人が登場して、

人商「わし達は東國の方から出て來た人商人です。今度都に上つて、多勢人を買ひ取つたことです。その中に十四五歲ばかりの女を買ひ取つたのですが、昨日少しの間暇をくれといつたので、やつたところ、未だに歸つて來ないのです」

と見物人に自己紹介して事件の經過を述べ、さて同輩の人商人に向つて、

○追善—死者が冥途で福利を得るやうに、後から追つて善事を修すること。死者の爲に佛事を營むこと。

◎やるまいぞ—この一句、謠本にも記す。

ワキ「なう渡り候か。昨日の幼き者は。親の追善とやらん申して候ひつる程に。說法の座敷にあらうずると存じ候。自然居士の雲居寺に御座候程に。立ち越え見うずるにて候

ワキヅレ「然るべう候

ワキ舞臺を見て、

ワキ「や。さればこそこれに候。(ワキヅレに)なう急いで連れて御入り候へ

ワキヅレ「心得申して候

ワキ・ワキヅレ入替りて、ワキヅレが先に舞臺に入り、子方に手をかけ、

ワキヅレ「立てとこそ

狂言立ちて、

狂言「やるまいぞ

ワキ刀に手をかけて、

ワキ「用がある

狂言「用があるともやるまいぞ

ワキ「用がある

人商「おい、居るか。昨日の幼い者は親の追善たとかいつてゐたから、說法の場所に居ることだらうと思ふのだ。自然居士が雲居寺に居られるから、あそこへ行つて見ようぢやないか」

同輩「それがよからう」

二人は門内に入つた心で、

人商「やあ、やつぱりこゝに居るわ。(同輩に)お前、すぐ連れてお出で」

二人は說敎場へ入つて、同輩の人商人が女兒を引き立てようとする。

門前の者「この女兒はやらないぞ」

人商「いや用があるのだ」

と刀に手をかけて[illegible]す。門前の者その場に恐れて女兒を人商人に渡す。人商人二人は女兒を連れ去る。

門前の者、自然居士にこの事を告げる。

◎用があらば—諸本に「用があらば連れて行け」とある。

【四】

◎いかに居士へ申し候—この句、諸本にも記す。

◎唯今のをさな子を—諸本に「唯今諷誦を上げて候女を。あらけなき男の來り候て追つ立てて行き候程に。やるまじきと申し候へば。用があると申し候程にやりて候」とある。

○曲もなや—面白くもないことだ。

○様ありげ—事情がありさうな。

○僻事—間違つた事。

○なり候まじ—成功しまい取返すことが出來まいとの意。

狂言「用があらば連れて行かうまでよ

ワキ・ワキヅレ子方と共に後見座にくつろぐ。

【四】

狂言「言語道斷の事ぢや。今のをさな子は子細があると見えた。急いで居士へ申さう。（シテの前へ出で）いかに居士へ申し候

シテ「何事にて候ぞ

狂言「唯今のをさな子を。あらけなき男が二人して引き立て參る程に。やるまいぞと申し候へば。用があると申す故。用があらば連れて行かうまでよと申し候が。いかやうなる事にて御座あらうずるぞ

シテ「あら曲もなや候。始めよりかの女は様ありげに見えて候。その上諷誦を上げ候にも。唯小袖とも書かず。身の代衣と書いて候よりちと不審に候ひしが。居士が推量申すは。かの者は親の追善の爲に。わが身をこの小袖に代へて諷誦を上げたると思ひ候（と小袖を見）。さあらば唯今の者は人商人にて候べし。かれは道理こなたは僻事にて候程に。御身のとどめたる分にてはな

【四】

居士「あゝ悪いことが出來た。あの女は始めから子細がありさうに見えた。その上、諷誦の文にも、『唯小袖とは書かないで、身賣りした着物』と書いてあつたので、少し變に思つてゐたのだ。私の思ふには、あの女は親の追善がしたさに、自分の身を賣つて小袖に代へ、それを諷誦文に添へて上げたのだ。さうだとすれば、今の者は人商人であらう。そして兎に角向ふには理窟があり、こちらには理がないのだから、そなたが留めただけでは返してはくれますまい」

◎さやうの者ならば―諸本に「一人商人ならば東國方へ下り候べし。大津松本へ某走り行きとどめうずるにて候」とある。

◎さやう候はば―諸本に「いやそれは今日までの御說法が無になり候べし」とある。

○願以此功德―法華經化城喩品に出てゐる經文。「願はくはこの功德を以て普く一切に及ぼし、我等衆生と皆共に佛道を成ぜん」と訓讀す。佛道から修行と續けた。

り候まじ

狂言「さやうの者ならば。大津松本のあたりへ參らうずるにて候間。某追つかけとめ申さうずるにて候

シテ「暫く。御出で候分にてはなり候まじ。居士この小袖を持ちて行き。かの女に代へて連れて歸らうずるにて候

狂言「さやう候はば。今日の說法が無にならうずるは如何に

シテ「いやいや說法は百日千日聞し召されても。善惡の二つを辨へんためぞかし。今の女は善人。商人は惡人。善惡の二道ここに極まつて候はいかに。今日の說法はこれまでなり。（合掌して）願以此功德普及於一切。我等與衆生皆共成

狂言は小袖をたゝみてシテの肩へ掛く。

シテ橋懸へ行き二の松邊にて、

シテ「佛道修行のためなれば

地「身を捨て人を助くべし

門前の者「それならば大津松本のあたりへ行つたことと思ひますから、私が追つかけて行つて留めませう」

居士「いやお待ちなさい、そなたが行かれただけでは、とても取り返せまい。私がこの小袖を持つて行つて、あの女に代へて連れて歸りませう」

門前の者「でも、それでは今日の說法が駄目になりませう」

居士「いや／＼さうではない。說法をば百日聞くも千日聞くも、たゞ善と惡との二つを辨別する爲なのだ。そして、今の女は善人で、あの人商人は惡人だ。善惡の差別の、これほどはつきりしたものはない。これは捨て置かれない。今日の說法はこれで終らう。――どうかこの功德が一切のものに行き渡り、われ等も衆生も皆佛道に入ることが出來ますやうに――」

と經文を讀んで雲居寺を出發し、

居士「これも佛道修行の爲だから、身を捨てても人を助けよう」

と大津の方へ行く。

【五】○いさや白波の—いさや知らずを盜賊の意の白波にいひかけ、波の緣で舟路と續けた。
○舟なくとても—人商人の舟を追ふべき舟がこちらになくても、わが說く佛道に心を留めて止まれよとの意。
○山田矢橋—ともに近江國栗太郡にあり、大津へ渡舟の通つた所。
○人買舟—人買人の乘つてゐる舟。
○事ざうよ—事候よの略。

【五】

シテの橋懸へ行くを見計らひ、ワキは右肩を脫ぎてワキヅレ・子方と共に脇座へ出で、子方を二人の間に坐せしめ、ワキは棹を持ちて船中の心にて、

ワキ ワキヅレ「今出でて。そこともいさや白波の。この舟路をや。急ぐらん

シテ『舟なくとても說く法の(と舞臺を見)

地『道に心を。とめよかし(扇にてワキを招き)

シテ「なうなうその御舟へ物申さう

と舞臺に入り仕手柱先にてワキへ向く。

ワキ「これは山田矢橋の渡舟にてもなきものを。何しに招かせ給ふらん

シテ「われも旅人にあらざれば。渡りの舟とも申さばこそ。その御舟へ物申さう

ワキ「さてこの舟をば何舟と御覽じて候ぞ

シテ「その人買舟の事ざうよ

ワキ「ああ音高し何と何と

【五】舞臺は大津松本の湖岸。ワキ・ワキヅレの人商人は再び子方女兒と共に舞臺に出て、湖岸から舟を漕ぎ出したところの態で

人商「ここを出て、何處へ行くといふ當てもなく、舟を急いで漕ぎ出さう」

自然居士は大津に着き、人商人の舟を見つけて、

居士「あの舟を追つかける舟はなくとも、わが說く佛道に心を留めて止まれよ」

と舟を招き、

居士「おういおい、そのお舟に話がある」

人商「これは山田や矢橋の渡舟でもないのに、何の用でお呼びなさるのだ」

居士「わしは旅人ではないか。渡舟に用があるのではない。そのお舟に用があるのだ」

人商「それでは、この舟をどういふ舟だとお思ひなさるのだ」

居士「何舟でもない、その人買舟を呼んでゐるのだ」

人商「あゝ聲が高い、何といはれるのだ」

○白波の音高し―人や知らんを白波にいひかけ、波の音を人聲の音にいひかけた

○唐艪―唐風に造つた艪。

○一入二入―水上の霞を一入二入といふ用例は見當らない。或は一霞を一入の意にも用ゐるので、一霞をうけて一入といつたものか。或は一汐二汐かとも思はれるが、この用例も見當らない。

○自然居士―和泉國の人で初め法相を學び、後南禪寺開山の大明國師の敎を受け東山雲居寺でその弟子東岸居士と共に髮も剃らず衣も着けず、俗體のまゝで高座に上つて說法をし、又その間に種々の歌舞を演じて、愚昧の者を佛道に導くことに努めたといふ。

○さまされ―荒らされ。

シテ「道理道理。餘所にも人や白波の。音高しとは道理なり。ひとかいと申しつるは。その舟漕ぐ櫂の事ざうよ（と棹を見る）

ワキツレ「艪には唐艪といふものあり。ひとかいといふ櫂はなきに

シテ「水の煙の霞をば。一霞二霞。一入二入なんどといへば。『今漕ぎ初むる舟なれば。一櫂舟とは僻事か

ワキ「げに面白くも述べられたり。さてさて何の用やらん

シテ「これは自然居士と申す說經者にて候が。說法の場さまされ申す。恨み申しに來りたり

ワキ「說法には道理を演べ給ふ。われらに僻事なきものを

シテ「御僻事とも申さばこそとにかくに。もとの

居士「なる程尤もだ。餘所で人が聞いてゐるかも知れないのだから、聲が高いと咎められるのは尤もだ。ひとかいといつたのは、その舟を漕ぐ櫂の事を申したのです」

同輩「艪には唐艪といふものがあるが、ひとかいといふ櫂はないが……」

居士「水煙の霞を一霞二霞といひ、また一入二入なとといふのだから、今漕ぎ出した舟をさして一櫂舟といふのに、間違ひがあらうか」

人商「成程面白い事をいはれた。ところで、御用といふのは何です」

居士「わしは自然居士といふ說經者だが、說法の席を荒らされた不平を申しに來たのだ」

人商「說法には道理なことをお演へなさるので、御尤もなことと思つてゐるだけで、別段その說法に反對した覺えもないが」

居士「いや反對されたとも申しはせぬ。とにかくこの小袖はお返しする」

【六】〇不便の者や——氣の毒なものだ。

小袖は參らする（と小袖を投ぐるやうにしてワキへ渡し）。舟に離れて叶はじと。裳裾を波に浸しつつ。舷に取りつき引き停む（とづか〳〵とワキへ近づく）

ワキ「あら腹立ちやさりながら。法衣に恐れて得は打たず。これも汝が科ぞとて。艪櫂をもつてさんざんに打つ（と棹にて子方を打つ）

シテ「打たれて聲の出でざるは。若し空しくやなりつらん

ワキ「何しに空しくなるべきと

シテ『引き立て見れば

　と子方の側へ行き引き立てて居立つ。

ワキ「身には繩

地「口には綿の轡をはめ。泣けども聲が。出でばこそ

【六】

シテ「あら不便の者や。やがて連れて歸らうずる

と小袖を投げ返し、舟から離れてはならないと、自然居士は裳裾を波に濡らしながら、舷に取りついて、舟を引き留める。

人商「あゝ腹の立つことだ」とはいふものの、法衣を恐れて、自然居士をよう打つことはせず、

人商「これも貴樣のせいだ」と艪櫂をもつて、女兒をさん〴〵に打擲する。

居士「おゝあの女兒が打たれても、聲の出ないのは、もしや死んだのではなからうか」

人商「なに死ぬ筈があるものか」と（いふものの、自然居士は不審に思つて）、女兒を引き立てて見ると、身體は繩で縛り、口には綿の轡をはめてあるのだから、泣いても聲の出る筈がないのである。

【六】

居士、女兒に向ひ「

居士「あゝ可愛想な兒ぢや。すぐ連れて歸

ぞ心安く思ひ候へ

と子方を下に居らせて、シテは眞中へ行く。

ワキ「なう自然居士舟より御下り候へ

シテ「この者を賜はり候へ。小袖を召され候上は御損も候まじ

ワキ「參らせたくは候へどもここに笑止が候

シテ「何事にて候ぞ

ワキ「さん候われらが中に大法の候。それをいかにと申すに。人を買ひ取つて再び返さぬ法にて候程に。得參らせ候まじ

シテ「委細承り候。又われらが中にも堅き大法の候。かやうに身を徒らになす者に行き逢ひ。若し助け得ねば。再び庵室へ歸らぬ法にて候程に。其方の法をも破るまじ。又此方の法をも破られ申すまじ。所詮この者と連れて奥陸奥の國へは

つてやるから、安心するがよい」

人商「おい自然居士、舟から下りなさい」

居士「この者を下さい。小袖をお取りになれば、御損もあるまい」

人商「上げたいのだが、こゝに困つたことがあるのだ」

居士「それは何事だ」

人商「わしらの仲間うちに嚴しい規則があるのだ。それといふのは、一旦人を買ひ取つた上は、二度と返さないといふ規則なのだ。だから、お返しするわけには參らぬ」

居士「よく分りました。又わしらの仲間にも嚴しい規則があるのだ。それは、このやうなひどい目にかゝつた者に出逢つた以上は、もしこれを助けることが出來なければ、二度とわが庵室へ歸らないといふ規則だ。だから、そなたの方の規則も破るまいし、又こちらの規則も破られまい。つまり、この者と一所にゐて、たとひ奥陸奥のやうな遠國へ行かうとも、舟

○笑止—困つたこと。

○大法—嚴重な規則。

○身を徒らになす者—身を賣られて行く者。

○拷訴—罪人を拷問にすること。そのやうに苛酷な目に逢はさうとの意。
○捨身の行—佛道の爲に身命を捨てて顧みないこと。法華經提婆達多品に「是菩薩捨二身命一處。爲二衆生一故也」
○ふつつと—決して。

○もてあつかうて—持て餘して。

【七】

下るとも。舟よりは下りまじく候
ワキ「舟より御下りなくは拷訴を致さう
シテ「拷訴といつぱ捨身の行
ワキ「命を取らう
シテ「命をとるともふつつと下りまじい（と手を打合せて安坐す）
ワキ「なにと命を取るともふつつと下りまじいと候や
シテ「なかなかの事
ワキ「いやこの自然居士にもてあつかうて候よ
（と棹を捨てて囃子座前へ行き、ワキヅレと向合ひ下に居て、

【七】

ワキ「なう渡り候か
ワキヅレ「何事にて候ぞ
ワキ「さてこれは何と仕り候べき
ワキヅレ「これはお返しなうては叶ひ候まじ。よく

から下りることはしますまい」
人商「舟から下りなければ、ひどい目に逢はせるぞ」
居士「そのひどい目が、わしには身を捨てて佛に仕へる修行となるのだ」
人商「命をとるぞ」
居士「命をとられても、決して下りはしないのだ」
人商「なんといふ、命をとられても決して舟から下りないといふのか」
居士「その通りだ」
人商「いやこの強情な自然居士にはもて餘した」

【七】

そこで、同輩の人商人に向ひ、
人商「おい、居るか」
同輩「何だ」
人商「これはどうしたものだらう」
同輩「これは返さなくては仕方あるまい。

○人に買ひかねて―人を買ふことに窮して。

○聊爾には―かりそめには迂濶には。

よく物を案じ候に。奧より人商人の都に上り人に買ひかねて。自然居士と申す說經者を買ひ取り下りたるなんどと申し候はば。一大事にて候程に。お返しなうては叶ひ候まじ

ワキ「われらもさやうに存じ候さりながら。ただ返せば無念に候程に。色々になぶつて返さうずるにて候

ワキヅレ「尤も然るべう候．

二人くつろぎ肩を直して仕手柱先へ出で、

ワキ「なうなう自然居士急いで舟より御上り候へ．

シテ「いやいや聊爾には下りまじく候

ワキ「何の聊爾の候べき唯御上り候へ

シテ立上りワキを見て、

シテ「ああ船頭殿のお顏の色こそ直つて候へ。

ワキ「いやちつとも直り候まじ．

よく考へて見るのに、陸奥から人商人が都に上つて來て、滿足な人間も買ふことが出來ないで、自然居士といふ說經者を買ひ取つて來たなどといはれては、わしらの一大事だから、返さなければ仕方あるまい」

人商「わしもさう思ふが、たゞ返すのは殘念だから、色々となぶつてから返してやらう」

同輩「それがよからう」

と相談して、自然居士に向ひ、

人商「もし／＼自然居士、急いで舟からお上りなさい」

居士「いや、うつかりとは下りられない」

人商「なに大丈夫だ、まあお上りなさい」

居士「あゝ船頭殿（人商人）の御機嫌が直つたやうだ」

人商「いや少しも直りはしないのだ。とこ

といひて地謡座の前へ行き、ワキヅレを顧みて、

ワキ「又これなる人の申され候は。今度始めて都へ上りて候が。自然居士の舞の事を承り及びて候。一さし舞うて御見せあれと申され候

シテ「總じて居士は舞舞うたる事はなく候

ワキ「それは御僞りにて候。一年今の如く說法御演べ候ひし時。いで聽衆の眠り覺まさんと。高座の上にて一さし御舞ひありし事。奥までもその聞え候程に。一さし御舞ひ候へ

シテ「おうそれは狂言綺語にて候程に。さやうの事も候べし。舞を舞ひ候はばこの者を賜はり候べきか

ワキ「まづ御舞を見て。その時の仕儀によつて參らせ候べし。これに烏帽子の候。これを召して御舞ひ候へ

ワキ後見より烏帽子を受取り扇にのせてシテに渡しもとの

うて、「この男〔同輩〕がいふのには、今度始めて都へ上つたが、自然居士が舞がお上手だと伺つて、一さし舞つて見せて貰ひたいと、かう申すのです」

居士「一體わしは舞など舞つたことはないのだ」

人商「いやそれは僞です。いつであつたか、丁度今度のやうに說法をお演べになつた節に「とうれ、一つ聽衆の眠りを覺まさう」といつて、高座の上で一さしお舞ひになつた事は、陸奥まで評判たつたのです。是非一つお舞ひ下さい」

居士「おゝ成程、說法方便の戲れ事たから、そのやうなこともあつたらう。では、舞を舞つたらば、この者を下さるか」

人商「まづ舞を見て、その時の樣子によつてお返ししよう。これに烏帽子がある。これを着てお舞ひなされ」

○狂言綺語―戲れごとを以て佛法を說くこと。和漢朗詠集白樂天の句に「願以今生世俗文字之業、狂言綺語之誤、飜爲當來世々讚佛乘之因、轉法輪之緣」に據つた。

○仕儀―次第。模樣。

【八】

座に歸りて下に居る。

シテ笛座前にくつろぎ【物着】烏帽子を着けて常座へ出で、

シテ「よくよく物を案ずるに。終にはこの者を賜はらんずれども。唯返せば損なり。居士を色々になぶつて恥を與へうと候な。餘りにそれはつれなう候

ワキ「何のつれなう候べき

シテ『志賀辛崎の一つ松

地『つれなき人の。心かな

〔中舞〕

を舞ひて大小前へ行き、

【九】

シテクリ『抑も舟の起りを尋ぬるに。水上黄帝の御宇より事起つて

地『流れ貨狄が謀より出でたり

シテサシ『ここに又蚩尤といへる逆臣あり

地『かれを亡ぼさんとし給ふに。烏江といふ海を

【八】

自然居士は人商人から渡された烏帽子を着て、

居士「よく考へて見るのに、これは結局はこの兒を返して下さるのだが、唯返すのは損だから、わしを色々なぶつて恥を與へようとせられるのでせう。それは餘り情ないことです」

人商「何の情ないことがあらう」

居士「──

『連れのないのは、志賀辛崎の一つ松、情ないのは人心』

と謠つて、

〔中舞〕

を舞ひ、更に次のやうな曲舞を謠ひながら舞ふ。

【九】

居士「さて船の起原を調べると、最初は黄帝の御代から始まつて、貨狄といふ臣の考案したものだ。詳しくいへば、この時、蚩尤といふ逆臣があつて、黄帝はこれを亡ぼしたいと思はれたが、烏江といふ海を隔ててゐるので、攻め討つ術がない。

【八】

○つれなう候―情ない。

○志賀辛崎の一つ松―近江國滋賀郡下坂本村にあり、近江八景の一。一つ松で連れ立つものがないので、つれなきの序に用ゐた。

【九】

○抑も舟の起りを尋ぬるに―以下クセの全文と大體同じ文を曾我物語卷八「船の始まりの事」に、千葉介の詞として記してゐるが、本曲は古作で物語の文を引いたものとは斷ぜられない。恐らく兩者とも當時行はれてゐた曲舞の文を取入れたものであらう。〔藤榮〕のクセもこれと同文である。

○水上―起原。

○黄帝―支那上古の天子。姓は公孫、名は軒轅、五帝の一である。

○貨狄―黄帝の臣。康熙辭典所引の世本に「共鼓・貨狄作レ船、黄帝臣、雲笈云、帝見二浮葉一方爲レ船、二臣助爲二船檝一」

○蚩尤―姓は姜、炎帝の裔。兵亂を好み暴虐を肆にしたので、黄帝諸侯を帥ゐて涿鹿の野に戰ひ、之を擒にした。

○烏江―項羽の自害した所(「項羽」參照)であるが、黄

帝が戰つたことは支那史籍に見當らない。

○ささがにの—蜘蛛の枕詞又はその異稱。絲を「い」とはかなく」にいひかけた。

○公にすすむ—船の字の旁は公で、「きみ」と讀み得るが、篇の舟を「すゝむ」と讀む例は見當らない。

○舟を一葉と—李商隱の詩に「萬里風波一葉舟」蘇東坡の赤壁賦に「駕二一葉之輕舟一」などある。

○天子の御顏を—こゝには適しない。「龍榮」のやうに「天子の御船を龍舸」とあつたのを誤つたのであらう。

隔てて。攻むべき樣もなかりしに

シテこれより謠に合せて舞ふ。(舞クセ)

地クセ「黃帝の臣下に。貨狄といへる士卒あり。ある時貨狄庭上の。池の面を見渡せば。折節秋の末なるに。寒き嵐に散る柳の一葉水に浮かみしに。又蜘蛛といふ蟲。これも虛空に落ちけるがその一葉の上に乘りつつ。次第次第にささがにのいとはかなくも柳の葉を。吹きくる風に誘はれ。汀によりし秋霧の。立ちくる蜘蛛の振舞げにもと思ひ初めしより。工みて舟を造れり。黃帝これに召されて烏江を漕ぎ渡りて蚩尤を易く亡ぼし。御代を治め給ふ事。一萬八千歲とかや

シテ「然れば船のせんの字を

地「公にすすむと書きたり。さて又天子の御顏を

ところが、黃帝の臣下に貨狄といふものがあり、ある時、貨狄が庭の池の面を見渡すと、丁度秋の末であつたが、寒い風に吹かれて、柳の葉が散つて一枚水の上に浮かんだ。又蜘蛛といふ蟲が、これも空から落ちたが、その葉の上に乘つて、はかない柳の葉が風に誘はれて、次第次第に汀に寄りくるにつれて、うまく岸に上り着いた。この蜘蛛のやり方を見て、なるほどと思ひ、工夫して船を造つたのであつた。さて黃帝はこの舟に乘つて烏江を漕ぎ渡り、蚩尤も容易に亡ぼし、一萬八千年の御代を治められたといふことだ。——

それで、ふねの船の字を、公にすゝむと書くのだ。さて又、天子の御顏を龍顏と申し上げ、舟を一葉といふことも、この

○龍頭鷁首―一は龍の頭、一は鷁（水鳥）の首を彫刻したものを舳につけた舟で、平安朝時代の遊宴にこの舟で舞樂を奏したことが源氏物語などに見えてゐる。必ずしも天子乘御の船に限らない。

【一〇】

○簓―竹の先を細かに割つて造り、割らない竹と擦り合はせて拍子を取るもの。古く榮華物語にも「佐々良といふものつき、樣々の舞あやしの男ども歌謠ふ」とあり、鎌倉室町時代に民間藝術として流行したもの。

○こくか―拾葉抄に「或は云ふ、こつかは谷下と書く」、古堂云ふ、谷下は山伏の谷行石こづめの修行の心なり」といふ。（「谷行」參照。）

◎それ簓の起りを―以下末尾までを簓の段といふ。

○簓の起りを尋ぬるに―この説何に據つたのか分らない。

龍頷と名づけ奉り。舟を一葉と、いふ事この御宇より始まれり。又君の御座船を。龍頭鷁首と申すもこの御代より起れり

とクセを舞ひ上ぐ。

【一〇】

ワキ「いかに申し候。われらが舟を龍頭鷁首と御祝ひ候事過分に存じ候。とてもの事に簓を擦つて御見せ候へ

シテ「さらば竹をたまはり候へ

ワキ「折節船中に竹が候はぬよ

シテ「苦しからず候。かの佛の難行苦行し給ひしも。一切の衆生を助けんためぞかし。居士も亦その如く。身をこくかに砕きても。かの者を助けんためなり

と子方を見やり、これより扇と數珠を簓の代りとし謠に合せて舞ふ。（簓の段）

シテ「それ簓の起りを尋ぬるに。東山にある御僧

御代から始まつたことで、天子の御座船を龍頭鷁首と申し上げることも、この御代から起つたのである」

と舞ひ納める。

【一〇】

人商「居士殿、わしらの舟を龍頭鷁首に比べてお祝ひ下さる事は、誠に恭い。お序だから、簓を擦つて見せて下さい」

居士「それでは竹を下さい」

人商「折悪しく船中に竹がありませぬ」

居士「それでは構ひません。佛が難行苦行遊ばしたのも、一切の衆生をお助けになる爲なのだ。私もそのやうに、たとひ谷底に落ちて身を砕いても構はない。あの兒を助ける爲だ」

と扇と數珠を簓の代りにして次のやうな謠を謠ひながら舞ふ。

居士「――

「簓の起りを調べると、東山の御僧が、

○簓の骸―簓の竹を割つた方のものをいふ。

○百八の數珠―通例數珠の珠は百八箇聯ねてある。

○手を摩る―左右の手を摩り合はせて憫みを乞ふこと。

【二】

○羯鼓―腰につけて打つ鼓

○波の音―もとより鼓はなしといひかけた。

の。扇の上に木の葉のかかりしを（と扇を開き）。持ちたる數珠にて。さらりさらりと拂ひしより。さゝらといふ事始まりたり。居士も亦その如く。簓の骸には百八の數珠。簓の竹には扇の骨。おつとり合はせこれを擦る。「所は志賀の浦なれば

地「ささ波やささ波や。志賀辛崎の。松の上葉をさらりさらりと簓のまねを。數珠にてすれば。ささらより猶。手をも摩るもの。今は助けて。たび給へ

（と合掌してワキに向き下に居る。）

【二】

ワキ「手を摩るなどと承り候程に參らせ候べし。とてもの事に羯鼓を打つて御見せ候へ

（シテ立ちて笛座前にくつろぎ【物着】羯鼓をつけ水衣の肩を上げて正面に向きて立ち、）

地「もとより鼓は波の音

扇に木の葉のかゝつたを、手に持つ數珠で、さら〳〵と拂つたのが、簓といふ事の始まりだ。この居士も亦そのやうに、數珠を簓の骸に代へて、扇の骨を簓の竹として、おつとり合はせてこれを擦る。――

「所は志賀の浦なれば、うち寄す波のそのやうに、また辛崎の松の葉の、葉ずれの音のそのやうに、さらり〳〵と數珠にて摺れば、簓の眞似といふよりも、手を摩るやうになるものだ。手を摩りお頼み申すから、どうぞ助けて下されや」――」

（と謡つて人商人を拜む。）

【二】

人商「手を摩つて頼むなどといはれるから、お上げしようが、序のこと今一つ羯鼓を打つて見せて下さい」

（自然居士はまた羯鼓をつけて、）

〔羯鼓〕を舞ひ、續いて次の謡に合せ羯鼓を打ちて舞ふ。

地『もとより鼓は波の音。寄せては岸を。どうとは打ち。雨雲迷ふ鳴神の。とどろとどろと鳴る時は。降り來る雨ははらはらはらはらと。小笹の竹の。簓を擦り。池の氷のとうとうと。鼓を又打ち簓をなほ擦り。狂言ながらも法の道。今は菩提の。岸に寄せ來る。船の内より。ていとうとうち連れて、ともに都に上りけり

「岸に寄せ來る」と撥をすて烏帽子を脱ぎ、羯鼓をとりて子方を引立て、子方は直に橋懸へ行き、シテは常座にて留拍子を踏む。

○小笹の竹の—雨が小笹に降りかゝる音をいつて、さらの竹の事にいひ續けた。
○池の氷のとうとうと—和漢朗詠集菅原篤茂の句「池凍東頭風渡解、窓梅北面雪封寒」を引いて、東頭を鼓の擬聲に轉じた。
○菩提の岸—悟道に入ることを譬へて菩提の岸といふを、湖の岸に取りなしていふ。
○ていとうとうち連れ—ていとうは鼓の音。鼓を打つといひかけて、うち連れてと續けた。

〔羯鼓〕を舞ひ、次のやうに謡ひつゝ羯鼓を打つて舞ふ。

居士——「所が丁度濱なれば、鼓はなくても構はない、岸打つ波がどうと打つ。雨雲かかる空ならば、雲間に迷ふ雷が、とゞろ/\と鳴り渡り、早くも雨が降り出せば、小笹にあたる雨音が、はらはらと音立てて、簓を擦ると變りなく、池に氷の張る時は、氷の音がとう/\と、鼓のやうに響くのだ。かうした自然の成行で、鼓を打つたり簓擦り、戯れ事交りに御佛の、敎への道に導いて、今は菩提の岸に着く——と岸邊に寄せた船の中で、ていとうと鼓を打つて、遂に女兒を引き取り、うち連れて京に上つた。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】シテ登場前に、（春ワキ二人）「これは東國方の人商人にて候。われこの程は都に候ひて。幼き者を一人買ひ取つて候が。片時の暇と申して出で候ひつるが。未だ歸らず候。承り候へば。東山雲居寺に自然居士の説法の由申し候。もし左樣の所へ行きてや候らん。罷り出

で尋ねばやと存じ候。（闘喜も略同ジ）。シテ「雲居寺造營の札召され候へ（寳「今日の居士が說法滿參とふれてあるか。下懸「雲居寺造營の居士が說法。今日結願と觸れてあるか）。シテ「夕の空の雲居寺。月待つ程の慰めに說法一座演べんとて（下懸既に時刻になりしかば、導師高座に…… 【三】ワキ「かやうに候者は……立ち越え見うずるにて候。ワキヅレ「然るべう候（下懸ナシ） 【六】ワキ「舟なくとても下懸を得たりと）とく法の、進道に心を留めよかし（下懸迷はぬ心かな）…… 【九】シテクリ「の前に（寳ワキ「僞りに舞が舞うて見足らず候よ。シテ「さあらば船の起りを語つて聞かせ候べし。下懸略寳ニ同ジ）。シテクリ「抑も舟の起りを……地「流れ貨狄が計より出でたり（寳下懸ナシ） 【一一】ワキ「手を摩る……鞨鼓を打つて御見せ候へ（寳闘喜シテ「散々に御なぶり候程に。この上はふつつとなぶられ候まじ。ワキ「この上は案內なしに連れて御入り候へ。喜シテ「この上はともかくもなぶられ候べし）

古謠本（光悅本）

【二】シテ「敬つて白す……身の後の世の逆緣（光善）…… 【三】ワキ「かやうに候者は……われ（光ナシ）この度……ワキ「や（光ナシ）さればこそ…… 【四】シテ「あら曲もなや……居士が推量申す（光仕候）は……さあらば（光扨は）唯今の者は……シテ「暫く（光候）御出で候……シテ「いやいや……善惡の二つを辨へんためぞかし（光ナシ） 【五】シテ「なうなうその（光あれなる）御舟へ……シテ「打たれて……空しくなりつ（光ぬ）らん…… 【六】シテ「あら不便の……やがて（光ナシ）連れて……シテ「委細承り候……其方の法をも破る（光り申）まじ…… 【七】ワキヅレ「これは御返し……一大事（光いかさ）にて候程に……ワキ「われらも……色々になぶつて（光其後）返さう……シテ「いやいや聊爾には……ワキ「何の……唯御上り候へ（光ナシ）……ワキ「それは御僞り……その（光ナシ）聞え（光て）候程に……シテ「おうそれは……賜はり候べきか（光へ）……

附記

（導師）―唱導師の略。教法を唱へ衆生を引導する義。又法會佛事に首座を勸める僧の意。法華經涌出品に「是四菩薩、於二其衆中一、最爲二上首唱導之師一」

（發願の鉦）―法會の時、導師が發願文（施主の願ふ事を記した表白文）を讀む時に打つ合圖の鉦。

（十方の薩埵）―十方は東西南北四維上下の世界をいふ。薩埵は菩提薩埵の略で、通常菩薩といふ。佛陀の次位にあるもの。

（神、神分に般若心經）―神分とは神祇に法施を分與する義で、法會の前、施主の守護を願ふ爲に、その初めに大小神祇を勸請して法樂の爲に

般若心經を讀みあげることを、總神分般若心經、略して神分心經といふ。般若心經は摩訶般若波羅蜜多心經の略で、經文も最も簡短であるが功德の甚深なものであるといふ。

猩々（しやうじやう）　觀（寶 春 剛 喜）

解說

【能柄】五番目祝言能　一段劇能

【人物】ワキ　かうふう、シテ　猩々

【所】支那　潯陽江の邊

【時】（九月）

【作者】能本作者註文・二百十番謠目錄ともに世阿彌の作とす。飯尾宅御成記に寛正七年二月二十五日觀世又三郎の演じたことが見えてゐる。

【梗概】支那かね金山の麓に住むかうふうといふ者は親孝行であつた故に、不思議な夢を見て、酒を賣り、次第に富貴の身となつた。又ここに市毎に來て酒を飲む者があり、その名を尋ねると、海中に棲む猩々だといふことなので、かうふうは潯陽の江のほとりに出て、猩々の浮かび出るのを待つてゐた。すると、果して猩々が出て來て、酒を飲み舞を舞ひ、かうふうの心の素直なことを賞して、汲めども盡きず飲めども變らない酒の泉を與へる。

【出典】 猩々が孝子に福德を授けたといふことは、庭訓往來註（庭訓抄）の市町之興行の註に、

大唐には周の國の傍に、羊嘩の市といふを禹風の建て始めし也。かの禹風は常に酒を造りて估りけり。正直無法の者にて、終に利潤を取らず。然る處に、細々夜々紛れて人來りて酒を買ふ事あり、彼が姿を見るに、常の人にあらず、貌紅にかしげて、さすがうるはしう見えたり。衣裳も人にたぐへず、頭はおどろの如し。又酒を飲む事限りなし。或時禹風問て曰く、「汝は何くより來るぞ、名に如何と云ふぞ」と問ひければ、「今は何をか愼むべし。吾は大海のほとりに住む猩々也」と云ふ。「明日の暮ほどに潯陽の江のほとりに御座ませ、今一度我本體を顯して、御目に懸けん」と云ふかと見れば、その主は掻消す樣に失せにけり。禹風興醒めて茫然として居たりけり。明日の暮ほどになりしかば、彼の敎の如く潯陽の江の邊にて見るに、……一の化生の者出現す。……浪の間近くよれるを見れば、大なる瓶を抱いて上る。この瓶を濱邊に居え置き、至極詠ひ舞うて酒を飲む。その後この瓶を禹風に得させたり。又持ちたりし篠をもとらせたり。猩々の云ふ「今こそ本體を見え申したれ、相構へておそれ給ふべからず、この壺を取りて家に歸り給ひて、明日より酒を賣らせ給ふべし。その壺にこのさゝの葉を門のほとりに立て給へ、暇申してさらば」とて、海中に分けて入りにける。禹風は壺を抱いて家に歸り、さゝの葉を門にさして、明日より酒を賣らんと拵へけり。やう〳〵夜明けて壺の內を見れば、何もなかりし壺に酒清々と湛へたり。是を取りて人に估れども盡きず、この酒を飲む人は齡をのべ病を治すと也。天のこんづと云ふ酒是なり。年月積り行くとも盡くる事なし。然れば禹風樂しみ榮え、羊嘩の市と云ひ賑ひけり。

これを以て直に本曲の出典とすることは出來ないが、これは本曲から出たのではなく、古くこの趣の說話があつて、本曲も庭訓抄もそれに據つたのでなからうかと思ふのである。しかし、それが何書であるかは分らない。

【總評】 この曲はもとは後に擧げるやうに複式夢幻能であつたものを、曲柄がめでたいものである爲に、「岩船」「金札」などと同樣、その前半を省略した簡單な祝言物としてしまつたものであるらしい。從つてたゞめでたいものであるといふだけで、その脚色などに就て嚴密な批評を受けるべき筋合のものでもないが、かういふ祝言物を構想した徑路を考へて見ると、まづめでたいものの材料として酒を思ひつき、酒に緣故の深いものとして猩々を出し、猩々をしてめでたい酒を與へしめることとしたのであらうが、その授けられるものとして、親に孝なる者を捉へて來たのは、謠曲作者の道念から出た、新しい工夫として注意すべきものであらう。類曲に「大瓶猩々」がある。

【參考】 本曲の原形に近いと思はれるものに「一番猩々」があり、丸岡文庫所藏の元文二年寫本に傳へられてゐた。この原本は先年の大震火災に燒失したが、謠曲界十一卷六號に揭げられたものによれば、ワキ名乘の末尾が「面色は更に替らず候程に、今日も來り候はば、如何成者ぞと名を尋ねばやと存候」とあり、次に、

シテ一聲「わたづみの。そこ共しらぬ波間より。顯はれ出る。氣色哉。サシ「秋の水みなぎり落て舟の去事すみやかなり。夜の雲納まりつきて。月の行衞に明そむる。潯陽の江の假枕。浮ね定めぬ此身かな。「いかに高風に申べき事の候ワキ「何事にて候ぞシテ「いつもの者が參りて候。又酒の候かワキ「中々の事高風の酒。いつくよりも出來て候よシテ「更ば給はり候へワキ「暫く候。御身此程高風が酒を買取。數盃めぐれ共面色替らず。氣色とこしなへなり。おことが名を名乘候へ。名乘ずば酒を賣間敷候シテ「不思議の事を宣ふもの哉。市のならひになす業を。浮名にかふる事やあるワキ「何か浮名は辰の市の。交はりならば靜そはじシテ「よし靜そはじ更ばとて。歸らんとすれば菊の酒ワキ「取とめ難き盃のシテ「石にさはるかまてしばしワキ「行も行かれぬシテ「秋の水同「流にひかるゝ盃の。とらじとすれば。手先さへぎる去とては酒をたび給へと。もたひの邊の竹葉又橋の本のしやうびも理や增り草千代萬代と祈らんシテサシ「されば佛もなく衆生もなけれども同「しばらく有無の隔て有て。あるひは人間又は畜類。樣ざま六つの道とかやシテ「去年我は人間とやいはん同「又は何共白波の。海中に住んで幾ばくとなき。猩々といへる者なり同「所は用津川。湊へも程近し。彼太子の賓客白樂天、〳〵。ほうじゆてきくわと詠めける潯陽の江と聞し名も。此川の江のほとり。東の舟西の舟。何れもとまり果ずして。南陽けんの。菊水も是なれや。河流を汲むとても。實につきせじや此泉。賣らせ給へや市人去りとては賣らせ給へや同「今ぞ其名は白菊の。〳〵、酒の盃廻る日の。時も移るとすゝめけりシテ「嬉敷かなや盃の。影恥かしや今よりは。餘所目たつらん市人の。いつしかとこそ見るべけれ恥かしの姿や同「早市人も立去りぬ。急ぎて汲めや盃のシテ「光りさしそふ夕日影同「受てはのみシテ「呑ては汲み同「見きも殘りて暮るる日の。歸る名殘のあまりにや。又歸り此酒の。樽うちいだき其儘に。川波に入にけり河瀨の波に入にけり

とあり、その後へ「潯陽の江のほとりにて」云々が待謠として續いてゐる。

【一】

【二】 名乘笛にて、ワキからうふう、着附厚板・側次・白大口・腰帶・扇の裝束にて出で、名乘座に立ちて、

【三】 舞臺は支那揚子の里で、ワキからうふう登場して、

○かね金山―江蘇省楊子江の沿岸に金山と稱する山がある。この附近に多く黃金を產したといふので、富貴となるかうふうの住所をこの地に選んだのであらう。金山を「かねきんざん」と呼んだのは、同音の別字と區別する爲で、例へば徑山を「こみちきんざん」といひ、金山を「かねきんざん」と兩點訓みにしたのである。○楊子の里―金山の對岸に揚州といふ所があるが、ここでは楊子江沿岸の里といふ意で用ゐたのであらう。○かうふう―解說に擧げた、禹風の訛か。檜本には高鳳、刊行會本には高風の字を充ててゐる。光悅本にはこの名を出してゐない。○時去り時來り―貧乏な時が去り、富貴となるべき時が來る。○市毎に―市の立つ毎に。○猩々―人面獸身、よく言語を發し、酒を好む動物。禮記に「猩々能言、不ㇾ離二禽獸一」海中に棲むといつたのは謠曲作者の創意である。○潯陽の江―今の江西省九江府の北方、楊子江の尋水を合する附近。白樂天の琵琶行で名高い所である。○菊をたたへて―菊の酒を

ワキ「これは唐土かね金山の麓。楊子の里にかうふうと申す民にて候。さてもわれ親に孝あるにより。ある夜不思議の夢を見る。楊子の市に出でて酒を賣るならば。富貴の身となるべしと。教へのままになす業の。時去り時來りけるにや。次第次第に富貴の身となりて候。又ここに不思議なる事の候。市毎に來り酒を飮む者の候が。盃の數は重なれども。面色は更に變らず候程に。餘りに不審に存じ。名を尋ねて候へば。海中に棲む猩々とかや申し候程に。今日は潯陽の江に出でて。かの猩々を待たばやと存じ候

ツキ上歌『潯陽の江のほとりにて。潯陽の江のほとりにて。菊をたたへて夜もすがら。月の前にも友待つや。又傾くる盃の。影をたたへて。待ちゐたり影をたたへて待ちゐたり

かうふう「私は支那かね金山の麓の、楊子といふ所に住んでゐるかうふうといふ者です。さて私は親に孝行なので、ある夜不思議な夢を見ました。その夢といふのは、楊子の市に出て酒を賣れば、富貴の身となるだらうといふので、私はその夢の教への通りに酒を賣つてゐると、貧乏な運が去つて、富貴の果報が來たものか、次第々々に富貴になりました。今一つ不思議なことは、市の立つ毎にやつて來て、酒を飮む者がありますが、いくら飮んでも少しも顏色が變らないので、餘り不思議なことと思ひ、その名を尋ねると、海中に棲む猩々だとか申しますので、今日は潯陽の江へ出て、その猩々の出てくるのを待たうと思ふのです」

と見物人に自己紹介をして、事件の概略を語り、やがて潯陽江岸に着いた態で、舞臺は潯陽の江邊となり、

かう「潯陽の江の邊へ來て、菊水の酒を壺に一杯湛へ、夜中、月前に酒を飮みながら、わが友猩々の來るのを待つてゐるのだ」

と猩々の來るのを待つてゐる。

壺に一杯入れて。「讃へて」の意を兼ねて用ゐたのである。
〇傾くる—月と盃とにかけていふ。
〇影をたたへて—盃に月影をうつし湛へて。
【三】
〇老いせぬや—不老の藥であると聞いてゐる菊の水との意。古今集源興風の歌に「露ながら折りてかざさん菊の花老いせぬ秋の久しかるべく」
〇菊の水—聞くを菊にいひかけた。菊の水は、周穆王の時童子といふ仙人が酈縣の山中で菊の下水をすゝつて、七百年の間童顏を保つたといふ故事。「菊慈童」(三枕慈童)參照。
〇浮かみ出でて—盃の浮かぶのを猩々の江上に浮かび出ることにいひかけた。
〇御酒と聞く—「見き」といひかけた。
〇名もことわりや—解し難い。或は「みき」を三季にかけ、一年の第三季である秋の意にとつたのであらうか。
〇寒からじ—秋風が吹いても、酒の爲に身が溫つて、寒くない。
〇着せ綿—九月九日重陽の節の前夜、菊の花に綿を着

と謠ひながら脇座に行きて下に居る。

【三】下端の囃子にて、シテ猩々、面猩々・赤頭・赤地金緞鉢卷・襟赤・着附赤地箔・赤地唐織壺折・緋大口・腰帶・扇の裝束にて舞臺に入り、常座に立ち、

地「老いせぬや。老いせぬや。藥の名をも菊の水。盃も浮かみ出でて友に逢ふぞ嬉しきこの友に逢ふぞ嬉しき(と脇正面に向き沖を見、)

シテ「御酒と聞く

地「御酒と聞く。名もことわりや秋風の

シテ「吹けども吹けども(と招き扇をし)

地「更に身には寒からじ

シテ「ことわりや白菊の(左へ大廻りして眞中に出で)

地「ことわりや白菊の。着せ綿を溫めて酒をいざや酌まうよ

シテ「客人も御覽ずらん(とワキへ向き)

地「月星は隈もなき(面をつかひて月を見る心)

【三】シテ猩々、海中から浮かび出る心持で登場。かう
かうこれを言つて、

から「不老の藥だと聞いてゐる、この菊水の酒を飲んでゐると、盃に月影が浮かぶやうに、海中からわが友猩々が浮かび出て來た。この友に逢ふことが出來て實にうれしい」

猩々「酒、酒といへば實に結構なもので、これを飲めば、寒い秋風が吹いて來ても、からだは少しも寒くない。その名前も着せ綿に緣のある白菊の酒を溫めて、酒を飲まう。——

あなたも御覽の通り、空には月や星が殘る隈もなく輝いて、いかにも美しいこの潯陽の江の邊で、酒宴を催し、猩々舞を

せ、その花の香と露を移した綿を、老いを拭ひ齢を延ばす祝儀に用ゐた。この綿を着せ綿といふ。白菊の酒を着せ綿に見立てたのである。

○葦の葉の―葦の葉のさやさやと立てる音を笛の音に見立てたのである。同じく波の音を鼓に、浦風を舞樂の調に見立てた。

【三】

⊙泉―盡きせず湧き出る菊の水。

○竹の葉―酒の異名。

○かれ立つ―枯れた蘆を足にいひかけた。

シテ『所は潯陽の（正面に出で）

地『江のうちの酒盛

シテ『猩々舞を舞はうよ（仕手柱際へ行き）

地『葦の葉の笛を吹き。波の鼓どうと打ち（と拍子を踏み）

シテ『聲澄み渡る浦風の

地『秋の調めや。殘るらん

〔中舞〕

を舞ひてワキに向ひ、

【三】

シテ『ありがたや御身心すなほなるにより。この壺に泉をたたへ。唯今返し與ふるなり（と眞中に坐してワキに壺を渡す心）。よも盡きじ（と立上り）

地『よも盡きじ。萬代までの竹の葉の酒。酌めども盡きず。飮めどもかはらぬ秋の夜の盃（扇を盃の心にて前へ出し）。影も傾く入江にかれたつ。足もと

舞つて見せよう。――

折柄秋風に音を立てる蘆の葉は笛に見立てよう、波の音は鼓に擬へよう。澄み渡る浦風は秋風樂と眺めよう」といつて、

〔中舞〕

を舞ひ、

【三】

猩々「そなたは誠にめづらしい心のすなほな人だから、この壺にいくら汲んでも盡きない酒を入れて、返してやるのだ」

（と壺をかうふうに與へて、）

猩々「この酒はいくら汲んでもいつまで飮んでも盡きることはなからう」

と、酒を酌みかはして飮んでゐるうちに、秋の夜は更けて行つて、月も傾くにつれて、猩々は足もともよろ〳〵として醉臥に寢てしまつた。――と思つ

たかうふうの夢は、覺めても消える夢ではなくて、ほんとにこの汲んでも盡きない酒の壺が夢の後まで殘つて、長く家の繁昌して行つたのは、誠にめでたいことである。

はよろよろと（たら／＼と後に下り）。醉に臥したる枕の夢の（下に居て扇を枕にし）。覺むると思へば泉はそのまゝ（と立上り）。盡きせぬ宿こそ。めでたけれ

と常座にて留拍子を踏む。

○枕の夢の―盧生が邯鄲の枕をして、五十年の榮華を夢みたといふ故事に寄せていふ。「邯鄲」參照。○覺むると思へば―盧生の榮華は夢の覺めると共に消えてしまつたが、これは夢の覺めた後までも、泉の壺が消えないで、榮華が長く續いたとの意。

〔考　異〕

諸　流（五　流）

【一】ワキ「これは唐土……楊子の里に（春住居する）かうふうと……或夜不思議の夢を……潯陽の江に出でて（春夢中に告げて曰く。是より楊子の市に出で。世わたる業をなすべしと。教へのまゝになす業の。事去り時來りけるにや。次第々々に富貴の身と罷りなりて候。又酒をつくりて賣り候處に。いづくとも知らぬ者來り。某が酒を買ひ飲み候が。數盃めぐれども面色かはらず。とこしへに候程に。名を尋ねて候へば。海中にすむ猩々と名乘り。壺をいただきて海中に入りて候程に。今日は名酒の數をつくし）かの猩々を……

古謠本（光悅本）

【一】ワキ「これは唐土……かうふうと申す民（光住居仕る者）にて候さても（光ナシ）われ……富貴の身（光家）となるべし……時（光年）去り……又ここに不思議の……市毎に來り（光いつくともしらすわかき男のきたり。某か）酒を飲む者の（光み）候が……變らず候程に（光間）……海中に棲む猩々とかや（光中ものなり。潯陽の江にいて酒をたゝへてまつならは。必きたるへきよし）申し候程に今日は……かの猩々を待た（光酒をすゝめ）ばやと……　【二】地「江（光ゑひ）のうちの酒盛……

正尊（しやうぞん）

觀（寶剛喜）

解説

【能柄】四・五番目　二段劇能

【人物】**ツレ**　源義經、**子方**　靜御前、**ツレ**　江田源三、**ツレ**　熊井太郎、**ワキ**　武藏坊辨慶、**前シテ**　土佐坊正尊、**狂言**　義經の侍女、**後シテ**　土佐坊正尊、**後ツレ**　姉和光景、**立衆**　正尊の郎等（三四人）

【所】京都　源義經館

【時】文治元年九月

【異稱】〔正存〕〔昌俊〕とも書き、古く〔土佐正存〕ともいつた。

【作者】能本作者註文・二百十番謡目錄ともに觀世彌次郎の作とす。言繼卿記に天文廿三年三月十二日〔土佐正存〕を演じた事が見えてゐる。

【梗概】梶原の讒言によつて賴朝と不和になつた義經を狙ひ討つ爲に、土佐坊正尊が鎌倉から都へ上つて來た。辨慶は義經の命を承けて、その旅宿を訪ね、强ひて堀河邸へ連れ歸り、義經の面前で、事の實否を糺した。正尊は當座を免れる爲に、起請文を書いて、義經に對する忠

誠を誓つた。しかし辨慶はこれに油斷しないで、正尊の旅宿の態を探らせると、果して夜討の用意をしてゐたので、これを義經に告げて、靜等とともに敵を待ち受け、正尊が郎等を從へて討ち寄せて來たのを迎へ討つて、正尊を縛りあげてしまふ。

【出典】　源義經が土佐坊に襲はれたことは、吾妻鏡にも、文治元年十月十七日の條に、

丙寅、土佐坊昌俊、先日依レ含二關東嚴命一、相二具水尾谷十郎已下六十餘騎軍士一、襲二伊豫大夫判官義經六條室町亭一、于レ時豫州方壯士等、逍二遙西河邊一之間、所二殘留一之家人、雖レ不レ幾、相二具左藤四郎兵衞尉忠信等一、自開二門戶一、懸出責戰、行家傳二聞此事一、自二後面一來加、相共防戰、仍小時、昌俊退散、豫州家人等走散求レ之。

とあり、平家物語卷十二「土佐坊斬られの事」に、

さる程に、判官には鎌倉殿より大名十人附けられけるが、內々御不審を蒙り給ふと聞えしかば、心を合せて一人づつ皆下りはてにけり。兄弟なる上、殊に父子の契をして、一の谷壇の浦に至るまで、平家を攻め亡ぼし、內侍所しるしの御箱、事故なく都へ返し入れ奉り、一天を鎭め四海を澄ます勳賞行はるべき所に、何の子細あつてか、かゝる聞えのありけんと、上一人より下萬民に至るまで、人皆不審をなす。その故は、この春津の國渡邊にて、逆艪立てう立てじの論をして、大に欺かれしことを、梶原遺恨に思ひ、常は讒言して、終に失ひけるとぞ、後には聞えし。……

九月廿九日、土佐坊都へ上りたりけれども、次の日まで判官殿へは參らず。判官土佐坊が上つたる由を聞し召して、武藏坊辨慶を以て召されければ、やがて連れてぞ參りたる。判官「如何に土佐坊、鎌倉殿より御文はなきか」と宣へば、「別の御事も候はぬ間、御文をば參らせられず候、御詞で申せと仰せ候ひつるは、當時都に別の子細の候はぬは、さて渡らせ給ふ御故なり。相構へてよく／＼守護せさせ給へと申せとこそ仰せ候ひつれ」と申しければ、判官「よもさはあらじ、義經討ちに上りたる御使なり。大名ともさし上せば、宇治勢多の橋をも引き、京都の騷ぎともなりて、中々惡しかりなんず、和僧上つて物詣するやうで、たばかつて討てと仰せつけられたな」と宣へば、土佐坊大に驚き「何によりてか只今さる御事の候べき、是は聊か宿願の子細候ひて、熊野參詣の爲に罷り上りて候」と申しければ、その時判官「景時が讒言によつて、鎌倉中へだに入れられずして、追ひ上せられし事は如何に」土佐坊「その御事は如何まし／＼候やらん、知り參らせぬ候、昌俊に於ては全く御腹黑く思ひ奉らぬ候、一向不忠なき由の起請文を書き進すべき」由を申す。……土佐坊一旦の害を遁れんが爲に、居ながら七枚の起請を書き、或は燒きて飮み、或は社の寶殿にこめなどして、や

がて歸り、大番衆の者共催し集めて、その夜やがて寄せんとす。判官は磯の禪師といふ白拍子が女、靜といふ女を寵愛せられけり。靜傍を片時も立ち去ることなし。靜申しけるは「大路は皆武者にて候なる、御内より催しのなからんに、是ほどまで大番衆の者ともが騷ぐべきことや候べき、如何樣にも是は晝の起請法師が仕業と覺え候、人を遣して見せ候はゞや」とて……はした者を一人見せに遣す。やがて走り歸りて「……大幕の中にはもの共鎧着、甲の緒をしめ、矢かき負ひ、弓押し張り、只今寄せんと出で立ち候、少しも物詣の氣色は見え候はず」と申しければ、判官さればこそとて、太刀取出で給へば、靜着背長取つて投げ懸け奉る。たかひもばかりして出で給へば、馬に鞍置いて、中門の口に引立てたり。判官これに打乘り、門開けよとて開けさせ、今や／＼と待ち給ふ所に、夜半ばかりに、土佐坊ひた甲四五十騎、總門の前に押寄せて、鬨をどつとぞ作りける。……さる程に、伊勢の三郎義盛、奥州の佐藤四郎兵衞忠信、江田の源三、熊井太郎、武藏坊辨慶なといふ、一騎當千の兵とも、御内に夜討入つたりとて、あそこの宿所、こゝの屋形より馳せ來る程に、判官程なく六七十騎になり給ひぬ。土佐坊心は猛う寄せたれども、助かる者は少く、討たるゝ者そ多かりける。土佐坊叶はじとや思ひけん、稀有にして鞍馬の奥へ引き退く。鞍馬は判官の故山なりければ、彼所の法師搦め取つて、判官殿へ遣す。

とあり、これを謠曲に比べると、謠曲では、土佐坊の名が正尊とあり、起請文の文句があり、土佐坊の宿所を見させるのが辨慶であり、土佐坊の部下に姉和光景といふ者が出てゐるだけで、甚だよく似てゐるばかりでなく、文句も平家物語と同じものが多い。本曲は明かに平家物語に據つたものと思はれる。――源平盛衰記卷四十六「土佐坊上洛の事」長門本平家物語卷十九「土佐坊夜討並頭被切事」義經記卷四「土佐坊義經の討手に上る事」にも同樣の記事があるが、やはり起請文の文句はなく、平家物語よりは謠曲に遠いやうに思はれる。幸若舞曲「堀河夜討」は最も謠曲に近く、土佐坊の名も正尊（言繼卿記には「土佐正俊」とある）とあり、起請文の文句も出てゐるが、兩者制作の前後は容易に定められない。

【概評】前述の通り、本曲は殆ど全く平家物語に據つたものであるが、原文の叙事體を手際よく戲曲に脚色したもので、平家物語を離れて能作者の工夫した諸點、起請文の文句を出したこと、辨慶が初めから義經に伴隨してゐて、土佐坊の宿所を探らせたことなど、よく舞臺的效果を擧げ得たものと思はれる。

【一】
〇西塔―比叡山三塔の一。
〇武藏坊辨慶―義經記に義經郎等の隨一として描かれた。同書卷一に、熊野別當辨せうの嫡子で、幼名を鬼若といつたが、比叡山の學頭西塔櫻本僧正に預けられ「昔この山に惡を好む者あり、西塔の武藏坊とぞ申しける。廿一にて惡をしそめて、六十一にて死にけるが、端座合掌して往生を遂げたると聞く。われもその名をついて呼ばれたらば、剛になる事もあらめ、西塔の武藏坊といふべし。實名は父の別當は辨せうと名のり、その師匠はくわん慶なれば辨せうの辨とくわん慶の慶とを取つて辨慶とぞ名乘りける」とある。
〇判官殿―源義經を指す。義經は檢非違使判官であつたから、かく呼ばれた。
〇鎌倉殿―鎌倉に幕府を開いた源賴朝を指す。
〇大名―鎌倉時代に、將軍の家臣で領地の大きい守護地頭に與へた號。以下ツキ名乘の文平家物語卷十二に據つた。
〇下り果てて候―鎌倉へ行つてしまつた。
〇去年―壽永三年。
〇木曾義仲―源義賢の第二

【一】
ツレ源義經、直面・風折烏帽子・襟淺黃・着附厚板・長絹・白大口・腰帶・扇・小刀の裝束、子方靜御前、鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・唐織壺折・緋大口・腰帶・扇・太刀の裝束、ツレ江田源三・熊井太郎、侍烏帽子・襟紺・着附厚板・掛直垂・白大口・腰帶・扇・小刀の裝束にて出で脇座より地謠座へかけて坐し、義經は床几にかゝる。
名乘笛にて、ワキ武藏坊辨慶、兜巾・篠懸・襟花色・着附厚板・縞水衣・側次・白大口・腰帶・扇・刺高數珠の裝束にて名乘座に出で、

ワキ「これは西塔の武藏坊辨慶にて候。さてもわが君判官殿は。鎌倉殿より大名十人附け申されて候へども。內々御中不和になり給ふにより。心を合はせて一人づつ皆下りはてて候。さても去年の正月木曾義仲を追討せしよりこの方。度々平家を攻め落し。この春亡ぼし果てて候。一天を鎭め四海を澄ます勸賞行はるべき處に。渡邊にて梶原が逆艪の意見を承引し給はざりし遺恨により。わが君を讒奏申し。御兄弟の御中

【一】
第一段
舞臺は京都源義經の館。まづツレ源義經、子方靜御前、ツレ江田源三、ツレ熊井太郎が登場するが、これは見物人には見えない態。

ワキ武藏坊辨慶登場して、

辨慶「私は西塔の武藏坊辨慶です。さてわが御主人判官義經殿には鎌倉の賴朝殿から十人の大名を部下としてお附けになつてあつたのですが、御兄弟の御中が惡くなられたので、義經殿に附いてゐては損だと內々しめし合はせて、一人一人と皆鎌倉へ下つてしまつたのです。一體昨年の正月に木曾義仲を追ひ討たれてよりこの方、度々平家を攻め落して、この春全くこれを亡ぼしてしまはれたのですから天下を一統平定した功賞を行はるべき筈であるのに、以前屋島へ攻め入る時、攝津國渡邊で、梶原景時が逆艪の用意をしようと申し出た意見をお用ゐにならなかつたので、それを遺恨に持ち、わが君のことを賴朝殿に讒言したので、御兄弟の御

子。乳母の夫中原兼遠に木曾で育てられたから、木曾と稱す。以仁王の令旨をうけて平家を討ち、京都に入つたが、從弟範頼・義經等に襲はれて、粟津原に戰死した。この事〔兼平〕〔巴〕に作られる。
○この春―文治元年三月平家を壇の浦に討ち亡ぼした。
○一天を鎭め四海を澄ます―ともに天下を統一平定する意。一天・四海と對にして文を飾つたのである。
○渡邊―今の大坂市天滿橋邊。
○梶原―頼朝の臣、名は景時。その子景季の事〔箙〕に作られる。
○逆艪の意見―逆艪とは船を後へ漕ぎ返すやうに艪を立てる事。攝津國渡邊より屋島へ攻め渡る時、景時は船に逆艪の用意をしようとの意見を述べたが、義經は卑怯な振舞だといつて斥けた。この事平家物語巻十一に見ゆ。
○土佐正尊―吾妻鏡・平家物語・源平盛衰記などには土佐房昌俊とある。昌俊は平家討伐の時には範頼の下に從つて働いた。
○昨日―平家物語には九月

不和になり給ひて候。又鎌倉より土佐正尊と申す者。昨日都へ上りて候が。これはわが君を狙ひ申さんためと聞しめされ。急ぎ召し連れ参れとの御諚にて候程に。唯今土佐が旅宿へと急ぎ候

といひて橋懸一の松へ出で幕に向ひ、

【三】ワキ「いかに案内申し候。判官殿より御使に武藏が参じて候」正尊はこの屋の内に御入り候か

シテ土佐坊正尊、直面・角帽子・襟花色・着附無色厚板・絓水衣・白大口・腰帯・扇・小刀の装束にて出で橋懸三の松にて、

シテ「武藏殿かやあら珍しや。まづ此方へ御入り候へ

ワキ「承り候。まづ以て御上りめでたう候。これは君よりの御使にて候（シテ辭儀）。上洛の由聞し召し及ばれ。何とて御伺候は候はぬぞ。鎌倉殿の御意も聞し召されたく候間。急いで御参りあれ

中が悪くなられたのです。そして又、鎌倉からは土佐坊正尊と申す者が、昨日都へ上つて來ましたが、これはわが君を狙ひ討たう爲であるといふ事をお聞きになつて、自分に急いで正尊を召連れて參れと仰せられたので、唯今土佐坊の旅宿へ急いで參るのです」

と見物人に事件の概略を紹介する。

【三】橋懸の方が正尊の旅宿で、辨慶は正尊の宿に着いた態で幕に向ひ、

辨慶「お頼みします。判官義經殿の御使に武藏が參りました。正尊はこの宿のうちにお出でですか」

シテ土佐坊正尊幕より出で、

正尊「武藏殿ですか、これは珍しい。まづこちらへお入り下さい」

辨慶「ありがたう。まづ何よりも都にお上りになつておめでたう。さて自分はわが君の御使に參つたのです。わが君には貴殿御上洛の由お聞きになり、何故御機嫌伺ひに參らないのだ、鎌倉頼朝殿の仰せ事もお聞きになりたいから、すぐ參るや

廿九日に京へ上つたとあり盛衰記には同日鎌倉を立つて十月十一日に京着したとあり、吾妻鏡・玉葉・百錬抄に十月十七日夜義經の邸を襲つたと記してゐる。
○御諚―仰せ。
○土佐が旅宿―源平盛衰記平家物語長門本ともに佐女牛町に宿をとつたとある。
【三】
○御伺候―御機嫌伺に參邸すること。
○御意―仰せ。
○熊野參詣―熊野は紀伊國にあり山伏の殊に信仰する神社。盛衰記・長門本には南都七大寺參詣とあり、義經記には熊野參詣とある。
○路次―途中。
○違例―病氣。義經記に「路次より風の心ちあしく候」とある。
○是非をいはせぬ―かれこれとくづくいはせぬ。

との御事にて候
シテ「さん候宿願の子細候ひて。熊野參詣の爲にふと罷り上りて候。昨日京着仕り候へども。路次より違例仕り散々の事にて候程に。今まで遲なはり申して候
ワキ「委細承り候。仰せはさる事なれども。唯今御供申せとの御事にて候
シテ「畏つては候へども。今少し養生を加へ。必ず伺候申し候べし
ワキ「いやいや片時も早く國の御事をば聞し召されたく思し召せば。唯々御供申さんと（シテへ行き兩手をシテの肩にかける）
シテ『是非をいはせぬ武藏殿に
ワキ『さしも剛なる
シテ『土佐坊も

うにとの仰せですぞ」
正尊「はい、實はかねての願ひ事があつて、熊野參詣の爲に、ふいと思ひついて京に上つたのです。昨日京に著いたのですが、旅の途中病氣に罹り、散々の目に遭つたので、それで今まで遲なはつたのです」
辨慶「よく分りました。貴殿の仰せも尤もであるが、唯今すぐ連れて參れと仰せられるのです」
正尊「畏りましたが、今少し養生を致して、必ずお伺ひ致します」
辨慶「いや〱一刻も早く國の御事をお聞きになりたいと思し召すのだから、是非ともお供しよう」
正尊「さう武藏殿のやうに、有無をいはせず引き立てられては……」
辨慶「いかに剛膽な土佐坊でも……」
正尊「拒むことが出來ない

○否にはあらず稲舟の―古今集東歌「最上川のぼれば下る稲舟の否にはあらずこの月ばかり」の詞を借り、否むことは出來ないでといつて、上れば下るとつゞけたのである。
○上れば下る事も―京に上れば生きて再び鎌倉に下る事はいさ知らずとの意。
○あらましごと―豫期した事。義經を討つてめでたく鎌倉へ歸らうと思つてゐた事。
○露の身の―短い人生を露に喩へていふ。消えては露の縁語。
【三】の縁語。

地上歌「否にはあらず稲舟の（二人とも立ち）。否にはあらず稲舟の。上れば下る事もいさ。あらましごとも徒らに（舞臺に入り）。なるともよしや露の身の。消えて名のみを、殘さばや消えて名のみを殘さばや

【三】

とシテ仕手柱先に立つ。ワキ舞臺の眞中に出て義經に辭儀して、

ワキ「いかに申し上げ候。土佐正尊を召し連れて參りて候

義經「此方へと申し候へ

ワキ「畏つて候。（シテに向ひ）此方へ參られ候へ

といひて靜御前の次に坐す。シテ眞中に坐して義經に辭儀す。

義經「いかに土佐坊珍しや。さて何の爲に上りてあるぞ。鎌倉殿より御文はなきか

シテ「さん候さしたる御事も御座なく候間。御文

正尊「これでは折角都に上つても、再び鎌倉へ歸ることが出來ないだらう。旨く功を立てようと思つてゐた豫期も無になつたのか。えゝ構ふものか、どうせ人の命は短いものだ。死んで名を殘さう」

三曲言をいつて、辨慶に伴はれて舞臺に入る。舞臺はもとの義經の館で、この時始めて義經等が見物人に見える態。辨慶は義經に向ひ、

【三】

辨慶「申し上げます。土佐正尊を召し連れて參りました」

義經「こちらへ參るやうに申せ」

辨慶「畏りました」

正尊に向ひ、

辨慶「こちらへ參られい」

正尊進み出て、義經に向ひ、

義經「おゝ土佐坊、久しぶりだな。して何の爲に都に上つて來たのだ。鎌倉殿からの御手紙はないか」

正尊「はい、これと申す御大事もないので、

○別の子細―別に變つた事

○御渡り候故―義經が京都に居て守護して居られるから。

○かまへて―屹度。必ずよく注意して。

○宇治勢田の橋―宇治橋は山城國宇治に架けた宇治川の橋で、大和に行く要路。勢田橋は近江國勢田川に架けた長橋で、關東より京に入る要路。

○たばかつて―欺いて。

○和僧―和は我の意。相手を親しむ意で用ゐる接頭語

○手なみ―腕前。

○君―義經を指す。

は參らず候。詞に申せと候ひしは。都に別の子細なく候事。偏に御渡り候故と思し召し候。かまへてよく守護させ給へとこそ御諚候ひつれ

義經「よもさはあらじ。義經討ちに上りたる御使とこそ覺えたれ

ワキ（義經に辭儀して）「御諚の如く。大名どもをさし上せられ候はば。宇治勢田の橋をも引き。都鄙の騒ぎとなつては惡しかりなんと思し召し。（シテに向ひ）土佐坊上つて物詣でするやうにて。たばかつて討ち申せとこそ仰せつけられ候ひつらめ。和僧に於てはこの法師。手なみの程を見すべきなり

シテ（ワキに）「あら勿體なや。たとひ人の讒言により。君こそ仰せ出ださるるとも。さすがに武略の武藏殿。さはあるまじきと申されてこそ。御

御書面はございませんが、口上で申せとの仰せには、都に別段變つた事のないのは、全く義經殿がお出でになつて御守護なさるからだ、とかう思し召して、なほよく注意して御守護になるやうにと、このやうな仰せでございました」

義經「よもやさうではあるまい。義經を討ちに上つた御使だと思ふぞ」

辨慶「わが君の仰せの通り、仰山に諸大名をさし上されては、宇治や勢田の橋を引き外したりして、全國の騷亂となつてはよくないと思し召して、土佐坊に、京に上つて神詣でをするやうに裝うて、欺し討にして、義經殿を討てと、かう仰せつけられたのであらう。貴樣位はこの辨慶が腕前を見せてやらうぞ」

正尊「おゝ勿體ないことを仰せられます。たとひ人の讒言によつて、義經殿がこのやうに仰せ出されようとも、さすが武勇智略に勝れた武藏殿、貴殿がそのやうな

○ものいひさがなき事—口ぎたなく言ひそしる噂。兄弟不和であると悪評を立てられる事。○鎌倉へも入れられず—文治元年五月義經が宗盛父子を護送して鎌倉に赴いたが、景時の讒言によつて腰越より追ひ返された事をいふ。○緩怠—職務怠漫。こゝには自分は關係してゐないとの意。○起請文—神に誓つて書く約束書。○文者—文筆に達した者。◎御前に於て讀み上ぐる—「辨慶にこそは渡しけれ」とも謠ふ。
【四】○梵天—大梵天王の略。色界十八天の一である大梵天にあつて、娑婆世界を支配す。○帝釋—能天主と譯す。須彌山の頂上忉利天の天主で喜見城に居り、四天王及び他の三十二天を領し、佛法歸依の人を護る。○四大天王—帝釋天王の臣で四方にあつて佛法を護る。東方は提頭頼吒天王、南方は毗留勒叉天王、西方は毗留博叉天王、北方は毘沙門天王。○閻魔法王—地獄の主で、衆生の罪を監視する。○五道の冥官—閻魔法王の臣で、地獄にゐて、餓鬼・畜生・修羅・天・人の五道の衆生の罪を裁判するもの。

兄弟の御中に。ものいひさがなき事あるまじけれ。まづ靜まつて事のわけを。委しく聞き給へ武藏坊。（義經に辭儀して）これは御諚にて候へども。

何によつて唯今さる御事の候べき。いささか宿願の事の候間。熊野參詣の爲に罷り上りて候

義經「梶原が讒奏により。義經を鎌倉へも入れられず。道より追ひ返されし事は如何に

シテ「その事はいかが御座候やらん。身に於ては全く緩怠あらざる趣。起請文に書き表し。「唯今御目に懸くべしと

地上歌『當座の席を遁れんと。當座の席を遁れんと。土佐は聞うる文者にて。自筆にこれを書きつけ御前に於て讀み上ぐる

シテ地上歌に立ち—土佐は聞うる—と常座に行きて後見より文を受取り、目附柱に近く進みて坐し文を開きて、

【四】シテ「敬つて白す起請文の事。上は梵天帝釋。四大

事はありますまいと申しあげられてこそ御兄弟の御中が不和だなどといふ悪い噂も起らないだらう。まづ心を靜めて事の次第をよくお聞きなされい、武藏殿—

（と辨慶にいつて義經に向ひ）

正尊「これは仰せでございますが、どうして唯今さやうの事がございませう。私は少し願ひ事がございまして、熊野參詣の爲に上つただけのことでございます—

義經「それならば、梶原の讒言によつて、この義經を鎌倉へもお入れにならず、途中から追ひ返されたのは、どうしたことだ—

正尊「その事はどうしたわけでございませう。私自身は決してさやうな心でございませぬ。この事を唯今起請文に書いてお目にかけませう—

と、その場を誤魔化さうと思つて、土佐坊はもと〳〵文筆の達者であるので、自筆で起請文を書きつけ、これを義經の前で讀みあげた。

【四】

正尊「——

「謹んで神佛に誓ひを立てゝ申し上げま

天王閻魔法王五道の冥官泰山府君。下界の地には。伊勢天照大神を始め奉り伊豆箱根。富士淺間。熊野三所。金峯山。王城の鎮守稻荷祇園賀茂貴船。八幡三所。松の尾平野。總じて日本國の。大小の神祇冥道請じ驚かし。奉る。殊には氏の神。全く正尊討手に罷り上る事なし。この事僞りこれあらば。この誓言の。御罰を當り。來世は阿鼻に墮罪せられんものなり仍つて。起請文かくの如し文治元年九月日正尊と。讀み上げたり

と讀み終りて拜す。ワキ立ちてシテの文を受取り義經に見す。

【五】地「もとより虛言とは思へども。文を揮うて書いたる。器用を感じ思し召し。御盃を下さるる（ワキ文を二つに折りて笛座前に坐し文を後見に渡す）。打節御前に。磯の禪師が女に。靜といへる白拍子（子方立ち）。今

す。天上界に於ては、梵天王、帝釋、四大天王、閻魔法王、五道の冥官、泰山府君、またこの下界に於ては、伊勢天照大神を始め奉り、伊豆三島明神、箱根權現、富士淺間權現、熊野三所權現、金峯山藏王權現、京都近傍の神々には、稻荷、祇園、賀茂、貴船、男山八幡三柱の神、松尾、平野、すべて日本全國のありとあらゆる天神地祇及び冥土の領主達に申し上げ、殊にはわが祖先の神に誓つて申し上げます。この正尊は決して義經殿を討つ討手として京に上つたのではありません。もしこの事が僞りであれば、この誓ひを破つた御罰に當つて、來世には無間地獄に墮されて浮びません、眞實を證する爲に、この通りの起請文を作ります。
文治元年九月日　正尊」――
と書いた。

【五】勿論虛言だとは思はれたが、義經は筆を揮つて書いたこの器用に感心せられて、御盃を下された。折柄義經の御前に磯の禪師の女の靜といふ白拍子がゐて、今樣を謠ひ、お酌

○泰山府君―閻魔王の書記で、人の善惡を記錄す。
○伊豆―伊豆國田方郡三島町の三島神社。
○箱根―相摸國足柄下郡の箱根權現。
○富士淺間―駿河國富士郡大宮町の淺間神社。
○熊野三所―紀伊國東牟婁郡の熊野坐神社。三所とは本宮、新宮、那智をいふ。
○金峯山―大和國吉野郡の吉野山で、藏王權現を指す。
○王城の鎭守―王城は京都をいふ。以下擧げる京都近傍の神々をいふ。
○稻荷―山城國紀伊郡伏見町の稻荷神社。
○祇園―京都東山祇園の八坂神社（牛頭天王社）
○賀茂―山城國愛宕郡にあり、鴨山の麓にあるを上賀茂といひ、糺の森にあるを下賀茂といふ。
○貴船―同郡にある貴船神社。
○八幡三所―同國綴喜郡の男山八幡宮。三所とはその祭神八幡大神（應神天皇）大帶姫命（神功皇后）、比咩大神（玉依媛）をいふ。
○松の尾―同國葛野郡松尾山麓の松尾神社。
○平野―同郡大北山村の平野神社。
○神祇―天神地祇。
○冥道―閻魔法王の住む冥界。
○氏の神―祖先神。

○阿鼻―梵語阿鼻至 Avīci の略。無間と譯す。八大地獄の一で、極惡人の墮ちる最底最苦の所。
○文治元年九月日―平家物語に據つたのであらう。
○讀み上げたり―「讀み上げたるは。身の毛もよだちて書いたりけり」とも謠ふ。
【五】
○磯の禪師―都にもてはやされた白拍子の名。もと阿波國磯の者で、少納言通憲入道信西に今樣舞を敎へられたといふ。
○靜―義經の愛妾。この人の事〔二人靜〕〔吉野靜〕に作らる。
○白拍子―舞女。平家物語卷一に「白拍子の始まりける事は、昔鳥羽の院の御宇に、島の千歳・若の前、彼等二人が舞ひ出したりけるなり。始は水干に立烏帽子白鞘卷をさして舞ひければ男舞とぞ申しける。然るを中比より烏帽子刀をのけられて、水干ばかり用ゐたり、さてこそ白拍子とは名づけけれ」
○今樣―平安朝末期から鎌倉時代にかけて流行した一種の謠ひ物。多くは七五調四句の歌である。
○花筐―舞姬の頭飾にする

様を謡ひつつ。お酌に立ちて花筐（とシテに酌をし）。舞の袖かかる姿ぞ類ひなき（と大小前に坐し）。

と子方立ちて、

〔中舞〕

子方「君が代は。千代に一度。ゐる塵の

地「白雲かかる山となるまで。山となるまで山となるまで

子方「變らぬ契りを頼む中の

地「變らぬ契りを頼む中の。隔てぬ心は神ぞ知るらんよくよく申せと靜に諫められ（と子方日附柱際に坐してシテに向ひ、シテ立つともとの座に坐す）。土佐坊御前を罷り歸れば。君も御寢所に。入らせ給へば各各退出申しけり

シテ「土佐坊御前を罷り歸れば」と義經に辭儀して立ち橋懸一の松へ行きて少し考へ、幕にかけ入る。シテ一の松へ行くと一同その場にてくつろぐ。

に立ち、類ひのない美しい姿で舞を舞つた。

〔中舞〕

靜御前舞を舞ふ。

靜「——「君が代は千代に一度ゐる塵の、白雲かゝる山となるまで」

（千年に一度置く塵が、積り積つて、白雲のかゝる高山となるには、どれほど永い歳月を要するか知れないが、君の御榮えは、それほどに久しくお續きになるやうに）と祝言の歌を歌つて、

靜「義經殿には御兄弟の深い契りを頼みに思し召して　頼朝殿に少しの隔て心も持つてお出でにならないのです。それは神様がよく御存じです。よくこの事を頼朝に申しあげて下さい」

と靜に諫められて、土佐坊は義經の御前を下り、わが宿所に歸ると、義經も亦寢所に入られた。

前シテ正尊わが宿所に歸る態で退場。

【間】　ワキ立ちて、

ワキ「いかに誰かある

狂言義經の侍女、美男鬘・着附箔小袖・女帶の裝束にてワキの前に出で、

狂言「御前に候

ワキ「汝はこざかしきものにてある間。これより正尊の宿所へ參り。誠に物詣でする體にてあるか。又それにてもなきか見て參れ

狂言「畏つて候

ワキもとの座にくつろぐ。狂言名乘座に立ちて、

狂言「扨も〳〵迷惑な事を仰せつけられて候。土佐が宿所の樣體を見て參れとの御事にて候。その故は。正尊この程御物詣とて參られしを。堀川にては討手と思し召し。正尊の方へ人を遣され候處に。正尊は道より風邪の心地とて參らず候間。武藏殿御出でありて是非とも連れて御出であり。義經の御前にて色々御尋ね候へども。正尊は熊野詣でと申し。この事僞りと思し召すならば起請文を書かんとて。恐ろしき起請文を書き候間。もとより僞りとは思し召せども。御盃を下されその儘退散申して候が。何とも心許なく思し召し。最前二人の禿(かむろ)を正尊が宿へ見せに遣はされ候へども。未だ歸らず候間。又妾に見て參れとの御事にて候。まづ急いで參らう。(一の松へ行き)誠に武藏殿の思し召すは。女には心をつくすまじいとあつて。妾に仰せつけられてござる。何かといふ内に正尊の宿所でござる。(正面に向き)何やらひそ〳〵とすると思へばとゞめいて。なう恐ろしや〳〵。幕の内には鞍置き馬をするならべ。弓を張り靫をつけ。唯今にも討つて出る體ぢや。やあ〳〵何といふ。最前の禿も二人とも切つてある。恐ろしや〳〵。急いで歸りこの由申し上げう

ワキの前へ出で膝をつきて、

もの。かゝるの序に用ゐた。
○君が代は千代に一度ゐる塵の白雲かかる山となるまで—後拾遺集大江嘉言の歌但し原歌第三句「置く塵の」とある。
○契り—頼朝義經兄弟の契り。
○隔てぬ心—兄頼朝に對して異心のないこと。

【間】
○こざかしき—小賢い。
○心をつくす—氣をつける
○とゞめいて—轟いて。

狂言「いかに申し上げ候。正尊の宿を見申して候へば。幕の内には鞍置き馬をする並べ。弓を張り靫をつけ。唯今にても討つて出る體にて候。その上最前の禿も一人とも切つて捨てたると申し候。御用心なされ候へ

といひて切戸より入る。

【六】　ワキ眞中へ出で義經に辭儀して、

ワキ「いかに申し上げ候。唯今土佐が宿所を見せに遣はし候處に。幕の内には矢を負ひ弓を張り。兵ども皆物の具をし。唯今打つ立つ氣色見えて。更に物詣での氣色は見えぬ由申し候

義經「もとより覺悟の前なれば。何程の事のあるべきぞと

ワキ「そのままやがて御座を立ち（義經立ち）

子方「靜は着背長參らする（と子方義經に太刀を渡す）

地上歌「義經これを召されつつ。義經これを召されつつ。御佩刀を取つて靜々と中門の廊に出で給ひ（義經仕手柱際へ出で幕に向ひ）。門を開かせ諸共に。

【六】

○物の具をし―武裝を整へること。

○着背長―大將の着る鎧。

○御佩刀―貴人佩用の太刀を敬つていふ語。

○中門の廊―中門は表門と寢殿との間にある門。その左右の廊下を中門の廊といふ。

【六】

第二段

辨慶は狂言義經の侍女から、正尊が武裝を整へてゐるその報告を聞いて、義經に向ひ、

辨慶「申しあげます。唯今土佐正尊の宿所を見せにやりましたところ、幕をうち廻して、その中に矢を負ひ弓を張つた武士どもが皆武裝を整へて、今にも打つて出る樣子に見えて、全く神詣の樣とは見えないと申します」

義經「もと／＼覺悟してゐることだ。なにも大したことはありはしない」

と、そのまゝすぐに御座を立つて、靜が着背長をさしあげると、義經はこれをお召しになり、御太刀を持つて、靜々と中門の廊下に出られ、門を開かせて、家來の者どもと一所に、攻め來る軍勢をお待ちになる。

【七】

○白波とよそにや聞かん―白波は盜賊の異稱。他所の者はたゞの盜賊と思ふであらうがとの意。
○わたづみの―わたづみは海。白波の縁でこの語を出し、次の深きを呼び起した。
○九郎大夫―大夫は五位の通稱。義經は義朝の第九子で、五位であつたから、かくいふ。
○疾う疾う―疾く〳〵の音便。
○御腹召されよ―切腹せられよ。

寄せ來る勢を待ち給ふ寄せ來る勢を待ち給ふ

義經もとの座に歸りて、一同戰の仕度。義經とワキは肩を脱ぎて、義經は太刀を、ワキは長刀を持ち、ツレは掛直垂を脱ぎて白鉢卷をす。

【七】

一聲の囃子にて、後ジテ土佐坊正尊、直面・袈裟頭巾・襟花色・着附段厚板・法被・半切・腰帶・小刀の裝束にて長刀を持ち後ヅレ姉和光景、白鉢卷・襟紺・着附厚板・側次・白大口・腰帶・太刀の裝束、立衆正尊の郎等（三四人）、白鉢卷・襟紺・着附厚板・白大口・腰帶・太刀の裝束にて出で、橋懸に立ち竝び、

後ジテ立衆 一聲「白波と。よそにや聞かんわたづみの。深き心は。あるものを

シテ舞臺際に進み、

シテ「その時正尊駒靜々と打ち寄せて。大音上げて名のるやう「抑もこれは。鎌倉殿の御使。土佐の正尊とはわが事なり。「九郎大夫判官殿の。討手の大將給はつたり。『疾う疾う御腹召されよと。大音上げてぞ呼ばはりける

義經等一同シテに向ひ、

地上歌「味方の勢はこれを見て。味方の勢はこれ

【七】

後ジテ土佐坊正尊、後ヅレ姉和光景、立衆正尊の郎等を從へて登場。

一同「自分達は深い謀があつて出掛けるのだが、知らぬ者はたゞの夜盜と思ふことであらう」

その時正尊は馬をしづ〳〵と義經の館にうち寄せて、大きな聲を上げて、

正尊「自分は鎌倉頼朝殿の御使土佐正尊で九郎大夫判官義經殿を討ち取る軍勢の大將を仰せつかつたものだ。さあ早く切腹せられよ」

と呼ばはつた。

義經の方の軍勢はこれを見て、あの土

○江田の源三熊井太郎―ともに義經の從臣。
○寄手―攻め寄せて來る軍勢。
○渡り合ひ―切り合ふこと

【八】
○表―正面。
○虛起請―僞つて書いた起請文。
○器量の人體―腕前のありさうな人柄。
○ものそのものにあらねども―人の數に入るほどのものではないが。
○姉和の平次光景―假作の人物か。

を見て。あの土佐坊を。討ち取らんと。われもわれもと進む中に。江田の源三熊井太郎。辨慶を先として。門外に切つて出づれば寄手の兵渡り合ひ。喚き叫んで。戰うたり

【八】
シテ橋懸にて床几にかゝり、ワキ眞中に出で橋懸に向ひ、

ワキ「その時辨慶表に進み。いかに土佐坊確かに聞け。さても書きつる虛起請の。罰を忽ち與ふべし。いざ一太刀と呼ばはれば

姉和「大將討たせてかなはじと。好む打物ひつさげて。辨慶を目懸けてかかりければ（と太刀拔きて仕手柱先へ出で）

ワキ「あつぱれ器量の人體かな。さて汝は誰そと尋ぬれば

姉和「ものそのものにあらねども。正尊が內に名を得たる。陸奧の國の住人に。姉和の平次光景

佐坊を討ち取らうと、われも〳〵と進み出た中にも、江田源三、熊井太郎等は辨慶を先に立てて門外に斬つて出ると、敵の武士も斬り合つて、大聲立てて互に戰つた。

【八】
その時辨慶は正面に進んで、

辨慶「こら土佐坊、よく聞け、先程書いた虛起請の罰をすぐ樣與へてやらう。さあ一太刀を受けよ」

と呼ばはると、姉和光景がわが大將を討たれては大變だと、好みの太刀を提げて、辨慶を目がけて斬つてかゝるので、

辨慶「おゝあつぱれ、腕前のありさうな人柄だが、一體お前は誰だ」

と尋ねると、

姉和「いや人の數に入るほどの者でもないが、正尊の部下として名を得た、陸奧國の住人姉和平次光景だ」

○志をば報ぜん―好意に報いよう。折角名乘つて來たのだから、相手になつてやらう。

○込む長刀―突き込んで來る長刀。

○何かはたまらん―どうして持ち堪へられよう。

○幹竹割―幹竹（まだけ）を割るやうに、上から下へ眞二つに割ること。

【九】

○宗徒の―重立つた。

なりと。大音上げてぞ名のりける

ワキ「げにゆゆしくも名のるものかな。さては汝は土佐が郎等。われには不足の者なれども。志をば報ぜんと

地「長刀やがて取り直し。長刀やがて取り直し。無慙や汝。手にかけんと。込む長刀を打ち拂ひ。受け流せば又とり直し。ちやうと打てば。はつたと合はせ。重ねて打つに。打ちこまれて。何かはたまらん幹竹割に二つになつてぞ失せにける

とワキと姉和と舞臺にて切組み、姉和は殺されたる態にて切戸より入る。

【九】

地「正尊これを見るよりも（床几を離れて舞臺に入り）。正尊これを見るよりも。宗徒の郎等數輩討たせて。今は叶はじと馬より下り立ち亂れ入るを。義經打物とり直し給ひ。隙間をあらせず戰ひ給へば

と大きな聲で名乘つた。

辨慶「おゝよく人並な名乘りをあげたな。するとお前は土佐坊の家來か。おれの相手には不足な者だが、折角向つて來たのだから、相手になつてやらう」

と、すぐ長刀を取り直し、

辨慶「可哀想だが、お前をおれの手にかけて殺してやらう」

と、姉和の突込む長刀を打拂ふ。辨慶に受け流されて姉和が又長刀をとり直しちやうと打つてかゝると、辨慶ははつたと長刀を打合はせて、重ねて打込んだので、姉和はどうすることも出來ず、竹を二つに割つたやうに、眞二つに打割られて殺されてしまつた。

【九】

正尊はこれを見るや、わが重な家來を四五人まで討たれて、これでは叶はないと、馬から下りて、多勢の中へ割つて入ると、義經は太刀を取直されて、隙間もなく戰はれ、靜も共々切り拂ひ切り拂ひ戰ふ。正尊はとても叶はない

○引き立ちけるを―逃げかけたのを。

静も諸共に切り掃ひ切り掃ふ正尊叶はじと引き立ちけるを。辨慶追つ詰め戰ひけるが。押し並べむずと組みえいやと投げ伏せ、大勢取りこめ繩打ちかけて。悦び勇み。囚人を引かせ。御門の内にぞ入り給ふ

義經と静とはその場にてシテと戰ひ、ワキは舞臺を立廻りてシテと切組み、「えいやと投げ伏せ」とシテを倒し、ツレ江田・熊井、シテに繩をかけたる態にて引立て幕に入る。ワキ仕手柱際にて留拍子を踏み、義經を先に立てて幕に入る。

と思つて、逃げかけた所を、辨慶が追ひつめて戰ひ、押し並んでむずと組みうち、えいやと投げ伏せて、大勢で生捕りにし、繩をかけて、悦び勇んでこの囚人の正尊を引かせ、義經は御門の内に入られた。

〔考異〕

諸流（觀寶剛喜）

寶生流は次に掲げる元祿本に略同じ。金剛・喜多流も少しづつの異同は幾個所もある。

古謠本（元祿八年本）

【一】ワキ「これは……十人附け申されて（元ナシ）……一人づつ皆（元悉）下り……さても去年の正月……御兄弟の御中不和になり給ひて候（元ナシ）又鎌倉より土佐…… 【二】ワキ「いかに案内……正尊はこの屋の内に御入り候か（元ナシ）。シテ「武藏殿か（元ナシ）……まづ（元ナシ）此方へ御入り（元出）候へ。ワキ「承り候……上洛（元御上り）の由聞し召し……鎌倉殿の御意（元事）も聞し召されたく候間（元度との御事にて）……シテ「さん候……熊野參詣の爲にふと（元ナシ）……（元一）昨日京着……路次（元道）より違例（元風氣）仕り……「委細承り候仰せ（元御精氣）はさる事……御供申せとの御事にて候（元間。急ひで御參りあらふずるにて候。）……罷つては候へども今少し（元一兩日は）養生を加へ必ず（元重ねて）何候…… ワキ「いやいや（元ナシ）片時も早く（元ナシ）……聞し召されたく思し召す（元度との

御事なれば……　【三】義經「此方へと申し（元召）候へ。ワキ「畏つて候此方へ參られ（元御參）候へ――シテ「さん候　御（元ナシ）文は參らず候（元御）詞に……思し召し候（元間柄）かまへて……ワキ「御諚の如く……都鄙の騷ぎ（元障）と（元も）なつては……物語でする（元の）やうにてたばかつて（元ナシ）討ち申せとこそ仰せつけられ候ひつらめ（元らん）……この法師手なみ（元容貌手柄）の程……シテ「あら勿體なや……委しく聞き給へ（元聞けや）武藏坊……さる事の（元御座）候べきいささか（元我古き）宿願の事の（元ナシ）で……義經「既に讀奏……道より（元見參をたにし給はて）追ひ返され（元上せられ）し事……シテ「その事はいかが御座候（元ナシ）やらん……【四】シテ「數へて白す……總じて日本國（元ナシ）の……　【六】ワキ「いかに（元靜に）申し上げ（元ナシ）候唯今（元先に御申候ことく）禿を二人）土佐か宿所を見せに遣はし候處に（元餘り遲く歸り候程に。女は苦しかるましきと存て。はしたもの一人さらぬ體にて見せにつかはし候へは。彼女歸りて申樣。禿とおほしき者は正尊か門にきりふせられて候。宿所にはくら置馬ひしとひつ立。大幕の内には……弓を張り兵（元る者）ども皆物の具をし（元具足して）唯今打つ立つ氣色見えて更に（元よせんと出立候すこしも）物詣での……由（元をこそ）申し候（元へ）　【七】シテ「その時……鎌倉（元の二位）殿の御使土佐（元坊）正尊……大音上げて（元御殿もひゝけと呼ばかりける（元り）……

【八】姉和「大將討たせて叶はじと（元いそき馬よりとんでおり）好む打物ひつさげ（元かいこむ）て……懸かりければ（元る）……姉和「そのもの……平次光景（元八十五人かちから）なりと……　【九】地「正尊これを……靜も諸共に切り拂ひ切り拂ふ（元ナシ）正尊叶はじ……えいやと投げ伏せ（元をしつけけるを）……繩打ちかけて（元義經の御前にひつすへければ）悅び勇み……

石橋（しやくけう） 觀（寶 金 剛 喜）

解說

【能柄】 五番目 複式夢幻能

【人物】 ワキ 寂昭法師、前シテ 童子、狂言 文殊菩薩の從者、後シテ 獅子

【所】 支那 清涼山麓

【時】 平安盛期 四月

【異稱】 古く「獅子」といつたらしい。

【作者】 二百十番謠目錄に元雅の作といふ。能本作者註文に世阿彌の作として擧げてゐる「獅子」、親元日記に寬正六年三月九日音阿彌が演じたとある「獅子」は本曲のことであらうか。言繼卿記文祿四年四月二日の條に註釋のことが見えてゐる。

【梗概】 大江定基出家して寂昭法師と號し、入唐渡天して佛跡を拜み廻り、清涼山に來て石橋を渡らうとすると、一人の樵夫が出て、この橋は昔の高僧すら難行苦行した後に初めて渡る橋で、容易に渡るべきものでたいと讃め、橋の謂れなど語り、向ひは文殊の淨土で今に奇特が

現れるだらう、暫くお待ちなされ」といつて立ち去る。果してその言の如く、暫くすると、牡丹の花を分けて獅子が現れ、雄壯華麗な獅子舞を演じて見せる。

【出典】　この獅子の舞はもと古くわが國に渡來した唐樂の一種であるが、爾來神社佛閣で屢〻演せられ、鎌倉時代以降民間演藝の流行するにつれ、この方面にも採り入れられ、室町初期、猿樂や田樂に演じてゐたことは、世子六十以後申樂談儀に、

獅子舞は河内の榎並(猿樂)に德壽とてあり、神變獅子也。增阿(田樂)稚兒にて鹿苑院(義滿)の御前にて舞ひし、面白かりし也。

とある。本曲はこの舞を中心としたもので、これを一篇の後段とし、前段の戲曲的構想としては、獅子は文殊菩薩にお仕へしてゐるものであるから、この菩薩を借りて、一曲の莊重味を加へ、舞臺としては文殊の淨土淸涼山を採つたもので、このやうな脚色を考案するについては、風流の「聲聞師詣二淸涼山一事」に暗示を得たものでなからうかと思はれる。――この風流の詞章は高野辰之博士の日本歌謠史(歌舞音曲考說にも)に揭載せられ、本書にも總說に轉載して置いたから、こゝには省略する。――そして、風流ではワキに相當する人物は片田舍から出た旅僧であるが、本曲では、十訓抄に、この淸涼山で「笙歌遙聞孤雲上」といふ有名な詩を作つたと傳へられてゐる寂昭法師をワキとし、なほ獅子の出現に適はしい物凄い光景を描き出す爲に、天台山の石橋をこの淸涼山に採り入れたのではなからうか。尤もこの風流の制作時代が分らず、それに「寂昭法師も彼山に詣し、樣々の奇特を見候」といつてゐるから、或は謠曲(石橋)の方が先に出來たものかとも疑はれる。さうすれば、本曲は十訓抄に暗示を得た外、殆ど能作者の創作したものと推測せられるのである。

【槪評】　本曲は前述の通り能作者の工夫した所が多く、その前段の構想は極めて妥當有效のものであるが、後段が、風流のやうに文殊菩薩が獅子に乘つて出るのではなく、たゞ獅子だけが登場するので、前後の連絡が甚だ不十分である。なほ題名となつた石橋の描寫も、ワキ・シテの掛合及び初同の所と、クセの文と、二箇所續いて出てゐて、それが殆ど同一の文であるのは拙い。

【一】
○大江の定基―齊光の子。匡衡と從兄弟。もと詩文に勝れてゐたが、永延二年出家して寂昭と號し、慧心僧

【一】
名乘笛にて、ワキ寂昭法師、金緞角帽子・着附白綾・紫水衣・白大口・掛絡・腰帶・扇・數珠の裝束にて舞臺の眞中に出で、

ワキ「これは大江の定基といはれし寂昭法師に

【一】　前段
舞臺は支那淸涼山の麓、すぐ傍へ石橋がある體。
ワキ寂昭法師登場。

寂昭「私は俗名を大江定基といつた寂昭法

都に師事した。長保四年宋に渡り、圓通大師の號を授かり、長元七年杭州で寂した。年七十三。

○入唐渡天—入唐は支那へ行くこと。渡天は天竺（印度）に渡ること。

○淸凉山—支那山西省代州五臺縣にある五臺山の別名支那佛教の一大靈地とせらる。

○石橋—これは實は天台山にあり、元亨釋書圓珍（智證大師）傳にも「下二華頂一傍レ溪行至二石橋一、橋如二虹梁一、其下萬丈、水聲如レ雷」とあるが、それを淸凉山に取做したのである。

【二】

○雪をも運ぶ—雪のやうな落花をいふ。

○山路に日暮れぬ—和漢朗詠集紀齊名の句「山路日暮、滿レ耳者樵歌牧笛之聲、澗戸鳥歸、遮レ眼者竹煙松霧之色」を引いた。

○光の陰—光陰、月日。

○餘りに山を遠く來て—和漢朗詠集紀齊名の句「山遠雲埋二行客之跡一、松寒風破二旅人之夢一」に據つて、山中の景を叙べた。

○白波の—知らずを白波にいひかけ、波の縁で谷の川と續けた。

て候。われ入唐渡天し。始めて彼方此方を拜み廻り。唯今淸凉山に參り候。これに見えたるが石橋にてありげに候。暫く人を待ち委しく尋ね。この橋を渡らばやと存じ候

といひて脇座へ行き下に居る。

【二】

一聲の囃子にて、シテ童子、面慈童・黑頭・金緞鉢卷・襟淺黃・着附縫箔・水衣・腰帶・扇の裝束にて舞臺に入り常座に立ちて、

シテ一聲「松風の。花を薪に吹き添へて。雪をも運ぶ。山路かな

シテサシ「山路に日暮れぬ樵歌牧笛の聲。人間萬事様々の。世を渡り行く身の有樣。物每に遮る眼の前。光の陰をや送るらん

シテ下歌「餘りに山を遠く來て雲又跡を立ち隔て。

上歌「入りつる方も白波の。入りつる方も白波の。谷の川音、雨とのみ聞えて松の風もなし。げにや謬つて半日の客たりしも。今身の上に、知ら

師です。私は支那天竺に渡つて、珍しい所をあちらこちら參拜して廻り、唯今淸凉山に參つたのです。おゝ、こゝに見えるのが、有名な石橋らしい。暫くこゝで人の來るのを待つてゐて、よく様子を尋ねて、それからこの橋を渡りませう」

と、人を待つ態で脇座へ行く。

【二】

シテ童子、かなたの山路から石橋の方へ進んでくる態で、幕より出で、

童子「松風が花びらを薪の上に吹き散らして、山路を歸る樵夫の姿は、薪と一所に落花の雪を背負つてゐるやうだ。山路を歩くうちに日は暮れて、あたりに聞えるものは、樵夫の歌か牧童の笛の音ばかりだ。一體、人間の世渡りの道は種種様々あるが、要するに、たゞ眼前の一色に心を動かして、その日その日を暮らしてゐるに過ぎないといふものだらう。いや、何かといつてゐるうちに、遠い山路を歩いて來て、後も先も雲に閉ぢこめられて、どこへ來たやら、方角さへ分らない。たゞ谷川の水音が雨のやうに聞えるだけだが、これとても眞の雨ではないので、山中は實に靜かで、松風も吹いて

れたり今身の上に知られたり

ワキ立ちてシテに向ひ、

【三】

ワキ「いかにこれなる山人に尋ぬべき事の候

シテ「何事を御尋ね候ぞ

ワキ「これなるは承り及びたる石橋にて候か

シテ「さん候これこそ石橋にて候へ。向ひは文殊の浄土清涼山。よくよく御拜み候へ

ワキ「さては石橋にて候ひけるぞや。さあらば身命を佛力にまかせて。この橋を渡らばやと思ひ候（と二足つめ）

シテ「暫く候。そのかみ名を得給ひし高僧達も。難行苦行捨身の行にて。ここにて月日を送りてこそ。橋をば渡り給ひしに。『獅子は小蟲を食はんとても。まづ勢ひをなすとこそ聞け。わが法力のあればとて。行く事かたき石の橋を。たやす

は來ない、なる程、昔の人が『道に迷つて仙人の住家に入り、半日ほどたつても、永い年月を過してしまふ』といつたのも、このやうな境界をいつたのであらうと、今自分の經驗で想像が出來た」

といつてゐるうちに、石橋の傍へ來た態で舞臺に入る。寂照法師、童子の姿を見て、

【三】

寂照「もうし山の方、一寸お尋ねします」

童子「何のお尋ねでございます」

寂照「こゝにあるのが、有名な石橋ですか」

童子「さうです、これが石橋です。それから向ふに見えるのが、文殊菩薩のお住みになる浄土世界の清涼山です。よく御參拜なさいませ」

寂照「やつぱり石橋たつたのですね。それでは生死を佛の御心に任せて、この橋を渡つて見ませう」

童子「一寸お待ちなさい。その昔世に聞えた高僧でも、この橋を渡る前には、この所で永い間、難行苦行を重ね、捨身の修行を積んで、その後初めて橋をお渡りになつたものです。諺にも『獅子は小蟲を喰ふ時にも十分準備をして、全力を注ぐ』と申します。たとひ自分に法力があるからといつて、このむづかしい石橋を、何

○雨とのみ聞えて―川の水音が雨のやうに聞えるが、ほんとの雨が降らないばかりでなく、松風の音もしないとの意。

○謬つて半日の客たりしも―和漢朗詠集大江朝綱の句「謬入ニ仙家一雖ニ半日之客一、恐歸ニ舊里一纔逢ニ七世之孫一」を引いた。この句の前半は晋の王質が山に木を伐りに行つて、仙童の碁を圍むのを見て、手に持つた斧の柄の朽ちるまで、時の移るのを知らなかつたといふ故事。後半は漢の劉晨・阮肇の二人が天台山に藥を採りに入つて、仙女に遭ひ歌舞の遊びをして、わが家に歸つた時には既に七代を經てゐたといふ故事をいふ。

【三】

○文殊―菩薩の名、文殊師利 Manjusri の略。普賢菩薩と一對で、釋尊の左側に侍り智慧を司る。右手に智劍を持ち、左手に青蓮華を持ち、獅子に乘る。華嚴經菩薩住處品に清涼山に在つて一萬の菩薩と倶に常に說法を爲すといふ。

○獅子は小蟲を食はんとても―諺。

○行く事かたき―難きを堅きにいひかけて石と續けた

く思ひ渡らんとや。あら危しの御事や
ワキ「謂れを聞けばありがたや。唯世の常の行人
は。左右なう渡らぬ橋よなう
シテ「御覽候へこの瀧波の。雲より落ちて數千丈
（と正面の上を見上げ）。瀧壺までは霧深うして（と下を見）。
身の毛もよだつ谷深み
ワキ「巖峨々たる岩石に
シテ「僅かにかかる石の橋
ワキ「苔は滑りて足もたまらず
シテ「渡れば目も昏れ
ワキ「心もはや
地上歌「上の空なる石の橋（シテ眞中に出で）。上の空なる石の橋。まづ御覽ぜよ橋もとに（と二三足正面に出で）。歩み臨めばこの橋の（と見渡し）。面は尺にも足らずして（と開き）。下は泥梨も白波の。虚空を渡る

○行人―佛道修行者。
○左右なう―譯もなく。
○足もたまらず―足が留まらない。踏みしめてゐることが出來ない。
○目も昏れ―目もくらみ。
○上の空なる―心も空に飛んで落ちつかない意と、橋が空中に高く架つてゐる意と兼ねていふ。
○泥梨―奈落 Naraka に同じ。地獄のこと。
○白波の―地獄なるやも知られずといひかけた。

でもないやうに思つて、お渡りなさらうとするのは、とんでもない、ほんとに危いことです」
旅僧「謂れを聞けば、いかにも尊いことです。それでは世間普通の修行者では、容易に渡れない橋なのですね」
童子「御覽なさい、この瀧は高い雲の上から數千丈の谷底へ落ち、瀧壺のあたりには霧が深くたちこめて、身の毛もよだつばかりの恐ろしい谷なのです。この谷間の大きな岩に、やつとのことで、この石橋が架つてゐるだけで、その石には苔が滑かに生えて、足がすべつてさゝへられず、渡らうとすれば、目がくらみ魂も飛んでしまつて、まるで虚空に架けた橋のやうです。――
も少し橋のそばへ寄つて、見て御覽なさい。橋の廣さは一尺にも足らず、下は地獄かも知れません。全く虚空を渡るやうで、危くて、目もくらみ氣も遠くなつて、並大抵の修行者では、こゝを渡らうなど

○おぼろげの―竝大抵の。

【四】

○天の浮橋―伊弉諾伊弉册の二神が國土創成の爲に高天原からお降りになつた時お渡りになつた、天と地との間に懸かつてゐたといふ橋。古事記・日本書紀に出てゐる。

○水波の難―溺死の危難。

○おのれと―自然に。

如くなり（と見上げ）。危しや目も昏れ心も。消え消えとなりにけり（とたら〳〵と下りて常座へ行き）。おぼろけの行人は。思ひもよらぬ御事（とワキに向く）

【四】

ワキ「なほなほ橋のいはれ御物語り候へ

シテ眞中へ行き下に居る。ワキも脇座に坐す。

地クリ『それ天地開闢のこの方。雨露を降して國土を渡る。これ卽ち天の。浮橋ともいへり

シテ『そのほか國土世界に於て。橋の名所様々にして

地『水波の難を遁れ。萬民富める世を渡るも。卽ち橋の德とかや

（居クセ）

地クセ『然るにこの。石橋と申すは人間の。渡せる橋にあらず。おのれと出現して。つづける石の橋なれば石橋と名を名づけたり。その面僅かに。尺よりは狹うして。苔甚だ滑かなり。その長さ

とは、思ひも寄らないことです。

【四】

旅僧「橋の謂れを、なほ委しく話して下さい」

童子「まづ橋と申せば、天地開闢の初め、國土御經營の爲に、天からこの國土へお渡りになつた橋が第一で、これを天の浮橋とも申します。その外、橋には到る所に色々名高いものがありますが、いづれも溺死の難を遁かれしめ、萬民に豐かな生活をさせるのが、卽ち橋の德です。――

ところで、この石橋といふものは、人間が架けた橋ではなく、自然に出來たもので、岩と岩とが續いて出來た石の橋なので、石橋といふ名がついてゐるのです。そして、その廣さは一尺よりも狹く、石の上には滑かな苔が一面に生えてゐます。巾は狹いが、長さは三丈に餘り、谷の深

○そくばく—そこばく（若干）に同じ。谷の深い程度といふ意。
○瀧の絲—瀧の水を絲に喩へたのである。
○雨塊を動かせり—王充の論衡に「風不レ鳴レ條、雨不レ破レ塊」とあるを逆に用ゐたのである。
○虹をなせる姿—杜牧の阿房宮賦に「長橋臥レ波、未レ雲何龍、複道行レ空、不レ霽何虹」とある。
○足すさましく—足が震へて落ちつかないこと。
○神變佛力—不可思議な佛力。
○笙歌の花降りて—妙なる音樂と共に天上より花の降り下ること。寂昭の辭世の句「笙歌遥聞孤雲上、聖衆來迎落日前」を胸に置いて綴つた。
○笙笛琴箜篌—箜篌はくだら琴。法華經方便品に、妙なる音樂の名を擧げて「簫笛琴箜篌、琵琶鐃銅鈸」とある。
○影向—佛菩薩が衆生にその姿を現すこと。
【五】

三丈餘。谷のそくばく深き事。千丈餘に及べり。上には瀧の絲。雲より懸りて。下は泥梨も白波の。音は嵐に響き合ひて。山河震動し。雨塊を動かせり。橋のけしきを見渡せば。雲に聳ゆる粧ひの。たとへば夕陽の雨の後に虹をなせる姿又弓を引ける形なり

シテ『遥かに臨んで谷を見れば

地『足すさましく肝消え。進んで渡る人もなし。神變佛力にあらずは誰かこの橋を渡るべき。向ひは文殊の淨土にて常に笙歌の花降りて（と立ちて正面を見込み）。笙笛琴箜篌夕日の雲に聞え來（と西の方橋懸を見）。目前の奇特あらたなり。暫く待たせ給へや（とツキへ開き）。影向の時節も今幾程によも過ぎじ

（と靜かに中入。）

【五】・後見一疊臺を二つ正面先に持ち出し並べて置く。一の臺には

さは千丈以上もあります。上には瀧が雲間から懸り、その下は地獄かと思はれるばかりで、水の音は嵐の音と響きあつて、山も河も震動し、天地をも動かす勢ひです。

この橋の景色を見渡すと、高く雲に聳える様は、譬へば夕日が雨の降つた後に虹を作つたやうであり、又譬へば弓を引いたやうな形をしてゐるのです。遠く下の谷底を見ると、足は震ひ上り氣は遠くなつて、恐ろしくて、誰一人渡るものはありません。全く、神變不可思議な佛力を具へたものでなければ、とてもこの橋を渡ることは出來ないのです。

しかし、向ふに見えるのは、文殊菩薩のお住みになる淨土で、妙なる音樂とともに絶えず美しい花が降り、笙・笛・琴・箜篌の妙音が夕日のさす雲間から聞えて來て、眼の前にあらたかな奇蹟を拜することが出來るのです。

暫くお待ちなさい。間もなく菩薩樣が御來現遊ばすことでせうから」

といつて退場する。

【五】

○本曲の間狂言、大藏流にはなく、和泉流のものも索め得なかつた。

○獅子―雅樂唐樂の曲名。後廣く民間演藝に用ゐられた。

○團亂旋―これも唐樂の曲名。獅子に對して虎といひかけ、同音のこの曲名を出したのである。

○牡丹―牡丹は百花の王として、百獸の王獅子の對にいひ慣はしたものである。

○たいきんりきん―大筋力の訛りであらう。大筋力は非常に體力の強いこと。

○獅子頭―獅子舞に用ゐる獅子の頭に形どつた被りもの。

○牡丹芳―白氏文集に「牡丹芳、牡丹芳、黃金蘂綻紅玉房」とあるを引き、蘂を瑞に通はせて、獅子王の現れたことを祝つたのである。牡丹芳は牡丹かうばしと訓む。

○獅子の座―佛は人中の獅子であるから、佛の坐所を獅子座といふ。こゝには文字通りの獅子の座と、この獅子が佛德を具へたものである意とを兼ねていふ。

○直りけれ―直るとは本の座に歸ること。

紅牡丹、他の臺には白牡丹の作花を一本づつ臺の角に挿す。亂序。露の拍子の囃子にて、後ジテ獅子、面獅子口・赤頭・金緞鉢卷・襟紺・着附段厚板・法被・赤地半切・腰帶の裝束にて出で、

〔獅子〕

を舞ひて下に居り、

地「獅子團亂旋の舞樂のみぎん。獅子團亂旋の舞樂のみぎん（と立ち上り）。牡丹の花房にほひ充ち滿ち（と臺に足をかけて白牡丹を見込み）、たいきんりきんの獅子頭（と大小前へ行きて頭を振り）。打てや囃せや牡丹芳（と囃子方を見やり）。芳丹芳（と臺へ飛上り）。黃金の蘂。現れて。花に戲れ枝に伏し轉び（と紅花へあしらひて安坐し）。げにも上なき獅子王の勢ひ（と後へ飛下り）、靡かぬ草木もなき時なれや。萬歲千秋と舞ひ納め。萬歲千秋と舞ひ納めて。獅子の座にこそ。直りけれ

と舞ひ納む。

後　段

後ジテ獅子、文[illegible]、[illegible]を示す心で、

〔獅子〕

の舞を演じる。

かうして、獅子が團亂旋の舞樂を奏してゐると、牡丹の花は香はしい匂ひに充ち滿ちる。勢ひのよい獅子の舞を、打てや囃せよと、愈〻面白く舞ひ遊ぶと、牡丹の花は愈〻咲き匂ひ、その蘂は黃金の色を現して、瑞兆を示す。獅子はこの香はしい花に戲れ枝に伏し轉び、いかにも百獸の王にふさはし勢ひをして舞ひ奏で、天下泰平のめでたさを萬歲千秋樂に舞ひ納めて、もとの座に歸つた。

〔考異〕

諸流（五流）

著しい異同はない。

古謡本（元祿八年本）

【三】シテ「暫く候……橋をば（元ナシ）渡り給ひしに……　【四】ワキ「なほなほ橋のいはれ（元委）御物語り……

舍利

觀・寶 春 剛 喜

解說

【能柄】　五番目　複式劇能

【人物】　ワキ　出雲僧、狂言　泉涌寺能力、前シテ　里人（足疾鬼の靈）、後シテ　足疾鬼、後ツレ　韋駄天

【所　】　第一段　京都泉涌寺

第二段　天上界

【時　】　（無季）

【作者】　能本作者註文・二百十番謡目錄ともに世阿彌の作とす。蔭凉軒日錄に寛正五年十一月十日仙洞御所で、粟田口勸進猿樂記に永正二年四月十六日勸進猿樂の三日目に本曲を演じたこと等が見えてゐる。

【梗概】　出雲國美保關の僧が都に上つて泉涌寺に參り、寺男に賴んで佛舍利を拜んでゐると、足疾鬼の執心が里人の姿を裝つて來り、僧と一所に舍利を拜し、佛舍利の謂れを語つた。そのうちに、一天俄かにかき曇つて、今まで里人と見えた面色は鬼と變り、忽ち舍利を奪つて立ち去つた。寺男は驚いて僧と共に佛力を祈ると、やがて韋駄天が現れ出て足疾鬼を追ひつめ、遂に佛舍利を取り返す。

【出典】　佛舍利を足疾鬼が奪ひ取らうとした事は、太平記卷八「谷堂炎上事」に、

叉淨住寺と申すは、戒法流布の地、律宗作業の砌也。釋尊御入滅の刻、金棺未だ閉ぢざる時、捷疾鬼と云ふ鬼神、潜に雙林の下に近づいて、御牙を一つ引缺いて是をとる。四衆の佛弟子驚き見て、是を留めんとし給ひけるに、片時が間に四萬由旬を飛越えて、須彌の半四王天へ逃げ上る。韋駄天追攻め奪ひ取り、是を得て、其後漢土の道宣律師に與へらる。自ㇾ爾以來相承して、我朝に渡せしを、嵯峨天皇の御宇に、始めて此寺に安置し奉らる。偉いなるかな大聖世尊滅後二千三百餘年の已後、佛肉猶留まつて、廣く天下に流布する事普し。

この種の傳說は佛舍利を安置した諸寺に行はれたものと見え、泉涌寺についても、後の書であるが、都名所圖會同寺の條に、

舍利殿の本尊は佛牙の舍利なり。二重の金塔に安置す。抑も此佛牙の由來を尋ぬるに、佛涅槃に入り給ふ御時、羅刹足疾鬼ひまを窺ひて佛牙を掠め奪ひたりしを、韋駄天降伏を加へ取りとゞめ、晝夜に敬ひて身を放し給はず。而して佛滅後一千六百餘年を經て、大唐の白蓮寺道宣律師戒行薫修の威德冥感にも通じけるにや、韋駄天かたちを顯し、三歸八戒を受け得て、其報恩に此佛牙を授け給へり。それより人間に傳はり白蓮寺に納め、金閣の寶函に祕し置けり。日本に渡り給ふ事は、當山中興の開基俊芿法師の末弟湛海、我師の宋國に渡りし芳跡を慕ひて白蓮寺に詣し、赤栴檀を供じて佛牙を恭禮し、信仰の餘り竊かに舍利を懇望の由述べけれども叶はずして、空しく本朝に歸りしが、猶志願やむ事なく、重ねて入唐し、……萬里渡海の本懷は偏に佛牙の求請にあり、二度來朝の素願しかしながら舍利の利益を思ふ旨具に述べければ、忽ち佛牙の付屬をゆるしけり。歡喜の涙を押へて歸帆の纜を解き、事故なく彼御舍利を本朝に移し、當寺の本尊と崇め奉る。

とある。本曲は卽ち泉涌寺の佛舍利を主材とし、釋尊入滅の時の出來事を現在にして脚色したのである。

【概評】一般複式能の後段も、往時の事件を再現するのであるが、それは後ジテの仕形話として演ぜられ、ワキの夢幻界に現出するのであるが、これは「舍利殿に臨み昔の如く」再現するのに、劇的效果を擧げる爲に後ヅレ韋駄天をも登場せしめて、現在物の形をとることとした。從つて第一段に於ても現在物の形をとつて、本事件が釋尊入滅の時ではなく、泉涌寺で起ることとしたのである。かういふ脚色は謠曲としては異例であるが、五番目物として童話的興味をそゝるのには、效果が多いやうに思はれる。

【一】
○美保の關―出雲國八束郡にあり、古關のあつた海驛。本曲のワキ僧をこの所の出とした因縁は分らない。
○朝立つや―旅に立つを雲の立つにいひかけた。
○空行く雲の美保の―僧のことを雲水の身といふから雲の身を美保にいひかけ、關の縁で留まるとつゞけた。
○泉涌寺―下京區今熊野町にあり、もと弘法大師の創建したもので、初め法輪寺次に仙遊寺といつた。後鳥羽上皇の勅願により再興せられ、寺の麓から靈泉が涌き出るので、泉涌寺と改められた。
○十六羅漢―法住記には正法を守護する十六の阿羅漢として、賓度羅跋囉惰闍、迦諾迦伐蹉、迦諾迦跋釐惰闍、蘇頻陀、諾距羅、跋陀羅、迦哩迦、伐闍羅弗多羅、戍博迦、半托迦、那伽犀那、羅怙羅、因掲陀、伐那婆斯、阿氏多、注荼半托迦の十六尊者を擧ぐ。また阿彌陀經會座の十六羅漢、舍利弗、摩訶目連、摩訶迦葉、摩訶迦旃延、摩訶俱絺羅、離

【一】後見一疊臺を正面先に出し、火焔玉臺を載せたる舍利をその上に置く。

名乘笛にて、ワキ僧、角帽子・着附無地熨斗目・茶水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて名乘座に出で、

ワキ「これは出雲の國美保の關より出でたる僧にて候。われ未だ都を見ず候程に。この度思ひ立ち洛陽の佛閣一見せばやと思ひ候

ワキ道行「朝立つや。空行く雲の美保の關。空行く雲の美保の關。心はとまる古里の跡の名殘も重なりて。都に早く、着きにけり都に早く着きにけり

「心はとまる」と右の方に向き二三足出でまたもとに歸りて都に着きたる態。道行濟みて正面に向き、

ワキ「日を重ねて急ぎ候間。程なく都に着きて候。まづ承り及びたる東山泉涌寺へ參り。大唐より渡されたる十六羅漢。又佛舍利をも拜み申さばやと存じ候。（左の方に向き）これなる寺を泉涌寺と

【一】

第一段

舞臺に初め出雲國美保の關、ワキ出雲の僧が登場。

旅僧「私は出雲國美保の關から出て來た僧です。私はまだ都を見たことがないので、今度思ひ立つて、京都の寺々を見物しようと思ふのです」

と旅人に自己紹介をし、

旅僧「朝まだ空に雲の立ちこめてゐる時に美保の關を出て、旅立ちをすると、自分のやうな雲水の身にもやはり故郷の方に心殘りがするのであるが、そのやうに故郷の名殘を惜しんでゐるうちに、はや都に着いた」

旅の心持を述べてゐる間に、舞臺は京都となる。

旅僧「幾日も道中を急いで旅を續けたので、思ひの外早く都に着いた。まづ第一に評判に聞いてゐた東山の泉涌寺に參詣して、支那から渡來した十六羅漢や佛舍利を拜みませう」

舞臺は泉涌寺となり、正面に佛舍利殿が設かれてある。

旅僧「おゝこの寺が泉涌寺であるらしい。

婆多、周利槃陀伽、難陀、阿難陀、羅睺羅、憍梵波提、賓頭盧頗羅墮、迦留陀夷、摩訶劫賓那、薄拘羅、阿㝹樓陀をいふ。
○佛舍利―釋迦如來の遺骨泉涌寺佛殿の後方の二重の金塔に納む。
【二】
◎いかに誰か御入り候―刊行舍本には「いかに誰か渡り候」とある。
◎何事を御尋ね候ぞ―以下この節の狂言詞、諸本の文に從ふ。
○聊爾―粗忽。輕々しく。

申すげに候。寺中の人に委しく案内をも尋ねばやと思ひ候

といひて舞臺際に出で橋懸に向ひ、

【二】

ワキ「いかに誰か御入り候

狂言能力、能力頭巾・着附無地熨斗目・水衣・括袴・脚半・扇の裝束にて橋懸一の松に立ち、

狂言「何事を御尋ね候ぞ

ワキ「これは遙かの田舍より上りたる僧にて候。當寺の御事を承り及び遙々參りて候。大唐より渡りたる十六羅漢。又佛舍利をも拜み申したく候

狂言「げに〳〵聞し召し及ばれて御參り候か。聊爾に拜み申す事叶はず候。但し今日かの御舍利の御出である日にて候。われら當番にて唯今戸を明け申さんとて。鍵を持ちてまかり出で候。まづこの舍利を御拜みあつて。その後山門に登りて。十六羅漢をも拜ませ申し候べし。こなたへ御出で候へ

ワキ「心得申し候

狂言舞臺の眞中に出で扉を開きて扉を開く形をして、

寺の人に委しく尋ねませう」

と寺の前に立つて、

【二】

旅僧「もうしどなたかお出でですか」

狂言泉涌寺の僧が出て、

寺僧「何の御用でございます」

旅僧「私は遠い田舍から上京した僧ですが、當寺の御事を承つて、遙々參詣したのです。支那から渡來した十六羅漢や佛舍利を拜みたいと思ふのです」

寺僧「なる程、話に聞いてお參りになつたのですか。めつたに拜む事は出來ないのですが、今日はその御舍利のお出ましになる日で、私がその當番で、唯今戸を開けようと思つて、鍵を持つて來たのです。まづこの御舍利をお拜みになつて、それから山門に登つて、十六羅漢もお拜ませしませう。こちらへお出でなさい」

○から／＼―戸の開く擬音。

○事として―何から何まですべて。

○足疾鬼―梵語羅刹の譯名捷疾鬼ともいふ。空を飛び地を行くことの極めて捷い惡鬼。

○韋駄天―四天王三十二將中の首で、佛法を守護する神。足疾鬼を追驅けて佛舍利を取戻したので、よく走る神として知られてゐる。

○現住―現在の世に殘り留まつた。

○牙舍利―佛舍利に同じ。

○御相好―御姿。

○一心頂禮萬德圓滿―舍利禮文の初句。

○今も在世の心地して―末世の今日に於ても釋迦如來の在世に逢ふ心地がして。

【三】

狂言「から／＼さつと御戸を開き申して候。よく／＼御拜み候へ

ワキ「あらありがたや候。さらば御供申し候べし

（ワキ眞中に出で下に居て正面に向き、狂言はワキと入替りて引く）

ワキサシ「げにや事として何か都のおろかなるべきなれども。殊更靈驗あらたなる。佛舍利を拜み申す事の貴さよ。これなん足疾鬼が奪ひしを。韋駄天取り返し給ひし。現住奇特の牙舍利の御相好。感涙肝に銘ずるぞや。（合掌して）一心頂禮萬德圓滿釋迦如來（といひて直す）

地上歌「ありがたや。今も在世の心地して。今も在世の心地して。まのあたりなる佛舍利を。拜する事のありがたさを。何にたとへん墨染の袖をも濡らす、氣色かな袖をも濡らす氣色かな

【三】

ワキ「今も在世の心地して」に脇座の次に行きて坐す。

シテ里人、面三日月・黒頭・金襴鉢卷・紺花色・着附無地熨斗

寺僧（佛舍利殿の前に出て、）「から／＼／＼、さつと、御戸を開きました。よく／＼お拜みなさいませ」

旅僧「ありがたう、それではお供しませう」

（と佛舍利殿の中へ入つた態で、）

旅僧「いかにも、都にあるものは何一つ仇おろそかなものもあらう筈もないが、殊に靈驗あらたかな佛舍利を拜むことの出來るのは、實に貴いことだ。これが昔足疾鬼の奪つたのを韋駄天が取り返されたもので、今眼の前にそのあらたかな佛舍利の御姿を拜して、感激の餘り涙がこぼれるばかりだ――

「一心になつて、すべての德を具備し給ふ釋迦如來に敬禮し奉る」

（と合掌して、）

地謠「あゝ、ありがたいことだ。末世の今日でもなほ、釋尊が御在世遊ばすやうな心地がして、このやうに眼前に佛舍利を拜む貴さを何に喩へれば、この心持がいひ現せよう。たゞ衣の袖を感涙に濡らすばかりだ」

目・縷水衣・腰帶・扇の裝束にて前の地上歌にて幕を出で高一杯にて常座に立ち、

シテ『ありがたや佛在世の御時は。法の御聲を耳に觸れ。聞法値遇の結縁に。一劫をも浮かむこの身ながら。二世安樂の心を得るに。後五の時代の今更に。猶執心の見佛の緣。嬉しかりける。時節かな

【四】ワキ「われ佛前に觀念し。寥々とある折節に。御法を貴む聲すなり。（シテに向ひ）いかなる人にてましますぞ

シテ「これはこの寺のあたりに住む者なるが。妙なる法の御聲を受けて。ここに立ち寄るばかりなり

ワキ「よし誰とてもその望み。佛舍利を拜まん爲ならば。同じ心ぞわれも旅人

シテ『來るもよそ人

【三】

その間に見物衆、里人の者で[illegible]静かに参拝

里人「ありがたいことだ。釋尊御在世の時には、御説法のお聲を耳に聞き觸れて、直接釋尊にお逢ひして説法を聽聞した因縁で、永い間成佛することの出來る身となり、現世來世にかけて安樂を得ることとなつたのだが、佛法衰微の極に達した今日、またも執心の餘り、釋尊にお目にかゝる機會を得たのは、ほんとに嬉しいことだ」

【四】

旅僧「自分が佛前に勤行して、あたりはもの淋しい有様であるのに、佛法を讃歎する聲のするのは變だ」

と獨言して、里人に氣がつき、これに向つて、

旅僧「あなたはどういふ方です」

里人「私はこの寺の近所に住んでゐる者ですが、ありがたい御讀經の御聲を聞いて、立ち寄つただけのことです」

旅僧「いやどなたであらうとも構はない。佛舍利を拜みたいといふお望みなれば、私と同じ心です。私も元來旅人……」

里人「今來た私も見ず知らずの者ですが」

〇聞法値遇―直接佛に逢つて說法を聞くこと。

〇一劫―劫は極めて永い時間であるが、時は更に永く永劫に續くので、こゝに一劫とはその一期間をいつたのである。

〇二世安樂―現世・未來世を通じて安樂を得ること。

〇後五の時代―釋迦入滅後佛法の次第に衰微して行く時期を五百年づつ五期に分ち、その最終の五百年即ち釋迦入滅後二千年より二千五百年までを後五の時代といふ。即ち佛法の最も衰へた時代である。

〇見佛―まのあたり佛を拜すること。今佛舍利を拜することを指していつたのである。

【四】

〇觀念―道理又は佛體を觀察思念すること。佛の道を考へ悟ること。

〇寥々―寂しい貌。

○東山の末―泉涌寺は東山の南端にあるからいふ。
○月雪の古き寺―月にも雪にもよい所であるといひかけて、雪の降るを古きに轉じた。
○さえかへり―強く冴えること。

○佛法あれば世法あり―佛法の出世間法と凡俗の世間法、煩惱の迷と菩提の悟、佛と衆生、善と惡、正反對なものであるが、絕對の高處から觀れば、結局無差別であるとの意。この類句「車僧」「山姥」に見ゆ。

○西天―天竺、印度。
○日域―日本。
○久方の―月の枕詞。
○月の都―帝都の美稱。
○山陰―山つゞき。東山の末にある泉涌寺を指す。

ワキ「所も亦

シテ ワキ『都のほとり東山の。末に續ける峯なれや

地上歌「月雪の。古き寺井は水澄みて。古き寺井は水澄みて。庭の松風さえかへり。更け行く鐘の聲までも。心耳を澄ます夜もすがら。げに聞けや峯の松。谷の水音澄み渡る嵐や法を、唱ふらん嵐や法を唱ふらん

シテ舞臺の眞中へ出で作物に向ひて下に居り、

地クリ「それ佛法あれば世法あり。煩惱あれば菩提あり。佛あれば衆生もあり。善惡又不二なるべし

シテサシ「然るに後五百歳の佛法。既に末世の折を得て

地「西天唐土日域に。時至つて久方の。月の都の山陰に。佛法流布のしるしとて。佛骨を納め奉

旅僧「それが偶然同じ心でこの所に……」

甲人「こゝは都に近い東山の南の端にある山で、月にも雪にも景色のよい所で、古い寺の井戸はいつも水が澄みきつて、庭の松風も冴え渡り、更け行く夜に響く鐘の聲までが、聞く者の心を澄ませるやうです。おゝお聞きなさい、終夜吹き渡る峯の松風や、澄み渡つた谷川の水音や、風の音までが御經を唱へてゐるやうです」

甲人「一體この世の中には、佛法の出世間法もあれば凡夫の世間法もあり、煩惱の迷ひもあれば菩提の悟りもあり、悟りきつた佛もあれば迷ひに苦しむ衆生もあるが、よく考へて見れば、一切無差別で善もなく惡もない、すべて同じことなのです。――

それにしても、釋尊入滅後二千年を經て、佛法がもはや衰微した末世に、印度から支那を經てこの日本に佛法の榮える時機が來て、この都の東山に佛法流布のしるしとして佛骨を納め奉ることとなつたも

○佛法東漸—佛法が印度から支那・日本へと次第に東方の國に行はれて行くことをいふ。
○三如來—釋迦、藥師、阿彌陀をいふ。嵯峨清涼寺の釋迦如來、京都因幡堂の藥師如來、信濃善光寺の阿彌陀如來はいづれも天竺で造られ支那を經て日本に渡來したものであるから、これを三國傳來の三如來といふ。
○四菩薩—觀音、勢至、普賢、文殊をいふ。觀音と勢至は阿彌陀如來の脇士、普賢と文殊は釋迦如來の脇士である。
○常在靈山—法華經如來壽量品に「於二阿僧祇劫一常在二靈鷲山及餘諸住處一」とあるので、常在を靈山の枕詞のやうにいひ做したのである。靈山は釋迦が法華經を說いた靈鷲山をいふ。
○秋の空—釋迦の說法を秋の空の澄み渡つた樣に喩へたのである。
○二月に臨んで—釋迦が二月十五日に入滅したことをいふ。
○泥洹雙樹—泥洹は涅槃と同じく入滅の意。雙樹は釋迦の入滅した跋提河畔の娑羅雙樹林をいふ。
○鷲の御山—靈鷲山。

り
シテ「げに目前の。妙光の影
地「この御舍利に。しくはなし
（居クセ）
地クセ「然るに。佛法東漸とて。三如來四菩薩も。皆日域に地を占めて。衆生を濟度し給へり。常在靈山の秋の空。わづかに二月に臨んで魂を消し。泥洹雙樹の苔の庭遺跡を聞いて腸を斷つ。ありがたや佛舍利の。御寺ぞ在世なりける。げにや鷲の御山も。在世のみぎんにこそ草木も法の色を見せ。皆佛身を得たりしに
シテ「今はさみしくすさましき
地「月ばかりこそ昔なれ。孤山の松の間には。よそよそ白毫の秋の月を禮すとか。蒼海の波の上に。僅かに四諦の曉の雲を引く空の。さみしさ

ので、眼前にありがたい佛の御光を仰ぐのに、この御舍利ほど貴いものはないのです。
かうして、佛法は次第に東方に傳つて來て、釋迦・藥師・阿彌陀の三如來、觀音・勢至・普賢・文殊の四菩薩も皆この日本の地にお出でになつて、衆生をお救ひになるのです。ありがたい法華經の說法を遊ばした靈鷲山の事を思ふと、秋の空のやうに心が澄み渡り、二月のなかば釋尊の入滅に遭つては魂も消え入る思ひをなし、跋提河畔の娑羅雙樹林で寂滅遊ばしたあの遺蹟の事を聞くと腸を斷つやうな悲しみを感じるのです。それにしても、この佛舍利のお出でになるお寺は釋尊御在世の時と同じ心持がせられて、ほんとにありがたいことです。さうだ、靈鷲山といつたところで、釋尊御在世の時こそ、草木までが佛法の教を受けて、成佛することが出來たのだが、入滅後の今日では、たゞ淋しく荒んでしまつて、月だけが昔ながらの姿を留めてゐるばかりで、その孤山の松の間にほの見える月の光に、佛の白毫を偲んで、それを禮拜するに過ぎないのだ。あの地に僅かに殘つてゐるのは、

○よそよそ―よそながら。
○白毫―佛三十二相の一で白く渦巻いた眉間の毛をいふ。秋の月を佛の白毫に思ひ做したのである。
○四諦―苦・集・滅・道の四をいふ。苦は生死の苦、集はその原因となる業煩惱、滅は苦集の滅してしまつた悟境、道はその悟道に達する爲の修行。これは小乘の教理で大乘の道ではない。
○それは上見ぬ方―實際にはまだ見ない所であるとの意。鷲は上空を飛ぶものであるから、「上見ぬ鷲」（一田村、參照）といふ諺があるので、鷲をうけて、この語を出したのである。
【五】
○疾鬼―足疾鬼。
○舍利殿―佛舍利を安置した所。
○金冠を見せ―金冠は、前掲太平記の文に見えた金棺で釋迦入滅の時の棺、寶座はその棺を置いた場所、昔釋迦入滅の時佛舍利を奪つた樣をそのまゝ再現する意であらう。

さぞな鷲の御山。それは上見ぬ方ぞかし。こゝはまさに目前の。佛舍利を拜する御寺ぞ、貴かりける

【五】　ワキ正面の方に向き、

ワキ「不思議やな俄かに晴れたる空かき曇り。堂前に輝く稻光。（シテへ向き）こはそも如何なる事やらん

シテ「今は何をか包むべき。その古の疾鬼が執心。（作物に向き）なほこの舍利に望みあり。許し給へやお僧達（とワキに向く）

ワキ「こはそも見れば不思議やな。面色變り鬼となりて

シテ「舍利殿に臨み昔の如く（と居立ち）

ワキ「金冠を見せ

シテ「寶座をなして（と立ち）

小乘の四諦の教で、譬へば大海の波の上から朝方の雲が離れて行くやうな有樣で、實に淋しい有樣なのだ。いやその靈鷲山は自分達には實際には知らないのですが、こゝに現在眼の前に佛舍利を拜むことが出來るので、このお寺は實に貴い所です」

【五】（かういつてゐるうちに、あたりの氣色が一變した體で、）

旅僧「これは不思議だ、今まで晴れてゐた空が俄かにかき曇り、御堂の前には電光が閃く。これは一體どうしたことであらう」

里人「今は何を隱さう。昔の足疾鬼の執心が離れず、今もこの舍利が欲しいのです。お僧、どうぞお許し下さい」

旅僧「これは實に不思議だ」

と見てゐるうちに、今までの顏は變つて鬼となり、舍利殿に上つて、釋尊の金棺そそのあたりの樣を昔入滅の時と同じやうに作り做して、栴檀や沈の妙なる香を焼いた佛前に雲煙を立て、電の光を放つて、その光に紛れて、もともと足疾鬼は足の早い鬼であるから、

地「栴檀沈瑞香（橋懸へ行き）。栴檀沈瑞香の。上に立ちのぼる雲煙を立てて（上を見廻し）。稲妻の。光に飛び紛れて（舞臺に入り）。もとより。足疾鬼とは。足疾き鬼なれば（拍子を踏み）。舍利殿に飛び上りくるくるくると（臺へ飛上りて廻り）。見る人の目をくらめて（見廻し）。その紛れに牙舍利を取つて（舍利を見て下に居り）。天井を蹴破り虚空に飛んであがると見えしが行方も知らず、失せにけり行方も知らず失せにけり

「天井を蹴破り」と舍利臺をこわして玉臺を持ち幕に驅け入る。

くる／＼と見てゐる人の目をくらまして、その隙に、佛舍利を奪ひ取り、天井を蹴破つて、空に飛び上るやうに見えたが、そのまゝ行方知れずになつてしまつた。

前ジテ里人實は足疾鬼佛舍利を奪つて退場。

【間】　狂言耳を掩ひころげながら橋懸へ出で、

狂言「あゝ悲しや／＼。ゆり直せ／＼。桑原／＼

一の松にて立ち、

狂言「扨も／＼鳴つたり／＼。今のは何であらうぞ。地震か雷か。何にもせよ先づお舍利へ參り。胸のたくめきを直さう

舞臺へ入り舍利臺を見て、

狂言「やあ南無三寶。お舍利がお見えない。何としたものであらうぞ。それ／＼最前行衞も知らぬ御

○栴檀沈瑞香―栴檀や沈の立派な香、佛前に燒く香で、その香の立ち上るを雲煙の序としたのである。

○くらめて―くらまして、眩惑させて。

【間】

○ゆり直せ―地震が止むやうにとの意。

○桑原―地震、雷などの恐ろしい時に發する語。

○たくめき―動悸。

○南無三寶―驚いて發する感動詞。三寶は佛・法・僧。

○心得—自分の一存。

○妄語—出たらべな言葉。

○なんぼう—いかほど。甚だ。

○雙林—釋迦の死んだ所。跋提河畔の娑羅雙林。

僧が。拜ませてくれいと申すによつて。心得を以て拜ませてござるが。定めて彼奴が取つたものであらう。何方へ逃げたか知らぬ。（ワキを見て）是に居らるゝ。いかにお僧。お舍利をば何と召され候ぞ

ワキ「愚僧は存ぜず候

狂言「いや〳〵聊爾に拜ませねども。某が心得を以て拜ませてあるに。今更知らぬと仰しやつても。某が知らせ申さう（と握拳を振上げる）

ワキ「いや〳〵妄語は申さず候。それにつき思ひ合はする事の候。まづ近う御入り候へ

狂言「心得申して候

といひて眞中に出で坐す。

ワキ「その事にて候。最前佛舍利を拜し心を澄ます處に。いづくともなく童子の如くなる者一人來り。佛舍利の御事懇に語り。何とやらん氣色變りて見え候程に。不審をなして候へば。古の足疾鬼の執心といひもあへず。舍利殿に臨み佛舍利を取り。天井を蹴破ると見て姿を見失うて候が。なんぼう不思議なる事にては候はぬか

狂言「げに〳〵天井が破れて候。左樣の事とも知らずお僧を疑ひ面目なく候。御免候へ

ワキ「いや〳〵苦しからず候。それにつき佛舍利の御事委しく語つて御聞かせ候へ

狂言「これは思ひも寄らぬ事を御尋ねなされ候ものかな。我等も當寺には住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。凡そ承りたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「總じて當寺の佛舍利のありがたきと申す子細は。釋尊御入滅の御時。足疾鬼と申す外道。雙林に近づき釋尊の向歯を引きかいて虛空に失せしを。韋駄天と申して足の早き御佛の御座候が。鬼を追ひ詰め御舍利を取り返し給ふ。總じて韋駄天と申すは毘沙門の弟にて候が。爪はぢきする内に三千世

○打磬―樂器の一。堅い石をへの字形に刻み、架にかけて打ち鳴らすもの。

【六】

界を驅け給ふ。されば世界の佛達に佛供を進むるに。佛前に佛供を供へ打磬（うちならし）を二つ打つ時。寺を出て世界の佛達に佛供を參れと觸れをなし。二つ目の打ちならしには。はや本寺へ歸り給ふ程の早き御佛なれば。いかに足疾鬼が早きとても叶ひ申さず。その儘御舍利を取り返し帝釋へ御渡しあり。帝釋御寵愛ありて。その後終南山道仙律師と申す御方の御座候が。これへ御渡しあり。それよりこの國に渡り當寺に納まり。今の世の佛在世はこの寺にて候。某の存ずるは。古の足疾鬼の執心來り。御舍利を取つて失せたると存じ候。是は何と仕るべきぞ御僧も御思案あつて給はり候へ

ワキ「懇に御物語り候ものかな。我等の存じ候は。昔も今も佛力神力に變る事はあるまじく候間。急ぎ韋駄天へ祈誓を御かけ候へ

狂言「げに〳〵尤もにて候。時刻移しては叶ふまじ。急ぎ韋駄天へ祈誓申さう。御僧も力を添へて給はり候へ

ワキ「心得申し候

狂言舍利殿に向き數珠を手にかけて、

狂言「げに〳〵昔も今も佛力神力の變る事夢々あるべからず。〽一心頂禮萬德圓滿。釋迦如來信心。舍利を急ぎ韋駄天取り返し。再び當寺の寶となし給へ。南無韋駄天〳〵

と幕に向ひ合掌して狂言座にくつろぎ後引く。

【六】

イロへの囃子にて、後ジテ足疾鬼、面顰・赤頭・金緞鉢卷・襟花色・着附厚板・法被・赤地半切・腰帶の裝束にて、舍利を兩手に持ちて幕より驅け出で、仕手柱際にて幕の方を見返し、直して脇座へ行きて立つ。

早笛にて、後ヅレ韋駄天、面天神・黑垂・輪冠・色鉢卷・襟淺黃・着附厚板・側次・白大口・腰帶・打杖の裝束にて走り出で常座に立ちて、

【六】

第二段

舞臺は天上界。
後ジテ足疾鬼、下界から佛舍利を奪つて來た態で登場。續いて、後ヅレ韋駄天これを追ひ驅けて來た態で登場。

○外道―佛法以外の道を修める者。
○在世の昔―釋迦入滅の時佛舎利を奪つたことをいふ
○欲界色界無色界―一切衆生の生死輪廻する三種の世界即ち三界をいふ。欲界は名利飲食等の諸欲を持つ衆生の住んでゐる世界、色界は欲望を離れた清麗な身體と宮殿とのある世界。無色界は形をも超越した心靈の住む世界。
○化天―樂變化天の略か。樂變化天は欲界六天の一で、都率天の上にある。
○耶摩天―欲界六天の第三天で、兜率天の下位にある。
○他化自在天―欲界六天の最上で、樂變化天の上にある。
○三十三天―欲界六天の第二忉利天の別名で、帝釋天がこゝにゐて、他の三十二天を統領するので、總稱して三十三天といふ。
○帝釋天―前掲忉利天の天主のゐる所で、三十二天の中央に位す。
○梵王天―色界四禪天の初禪天にある三天の一、大梵王天をいふ。
○下界―下欲界、人界。

ツレ「抑もこれは。この寺を守護し奉る。韋駄天とはわが事なり。「こゝに足疾鬼といふ外道。在世の昔の執心殘つて。又この舎利を取つて行く。『いづくまでかは遁すべき。その牙舎利。置いて行け

後ジテ『いや叶ふまじとよこの佛舎利は。誰も望みの。あるものを

地『欲界色界無色界

〔舞働〕

シテとツレ、佛舎利を奪ひあひて爭ふ形。

地『欲界色界無色界。化天耶摩天他化自在天。三十三天攀ぢ上りて。帝釋天まで追ひあぐれば。梵王天より出であひ給ひて。もとの下界に。追つ下す

〔イロヘ〕

シテ『左へ行くも

韋駄「自分はこの泉涌寺を守護し奉る韋駄天である。こゝに足疾鬼といふ外道奴が、釋尊御入滅の時佛舎利を奪はうとした執心が未だに殘つて、又してもこの佛舎利を取つて行つたが、何處までも遁して置きはしないぞ」

といつて、足疾鬼に向ひ、

韋駄「さあ、その御舎利をこゝに置いて行け」

足疾「いや、やることは出來ない。この佛舎利は誰でも欲しいのだ」

〔舞働〕

に足疾鬼は逃げ走り、韋駄天は追駆ける。

かうして、欲界、色界、無色界、所擇ばず飛んで行き、樂變化天、耶摩天、他化自在天、三十三天に攀ぢ上り、遂に帝釋天まで追ひあげられたところを、韋駄天は梵王天に廻つて、足疾鬼と打合ひ、これを人界に追ひ下された。

〔イロヘ〕

に韋駄天が追ひかける様を示し、

足疾鬼は左へ行つても右へ行つても、

地「右へ行くも。前後も天地も塞がりて。疾鬼は虚空にくるくるくると。渦巻い廻るを。韋駄天立ちより寶棒にて。疾鬼を大地に打ち伏せて（とツレシテを打つ）。首を踏まへて牙舍利はいかに。出だせや出だせと責められて。泣く泣く舍利を指し上ぐれば（とシテ舍利をツレに渡す）。韋駄天舍利を取り給へば（ツレ幕に入る）。さばかり今までは。足疾き鬼の。いつしか今は。足弱車の力も盡き。心も茫茫と起きあがりてこそ。失せにけれ

シテ、ツレを追駆けて幕際へ行き袖をかづきて留む。

前も後もすべて塞がつてしまつたので、たゞ空中をくる〱と渦巻いて廻つてゐると、韋駄天が傍へ寄つて、寶棒で足疾鬼を大地にうち伏せ、首を踏まへて、

（韋駄）佛舍利はどうした、さあ出せ出せと責められるので、足疾鬼は泣く〱佛舍利をさし上げると、韋駄天が佛舍利をお取りになる。

かうして、今まではあれほど足の早かつた鬼も今ははや足も弱り力も盡き、心もぼうとして、漸くに起き上つて遁げて行つてしまつた。

○寶棒―佛の持つ棒を尊んでいふ語。

○足弱車―車輪が弱くて進みの遅い車。足の弱つたことにかけていふ。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】（下懸ワキ次第「旅の衣の遙々と。〱。都にいざや急がん）ワキ「これは出雲の國……

古謠本（元祿八年本）

【一】ワキ「これは出雲の……洛陽の佛閣一見せ（元仕ら）ばやと……ワキ「日を重ねて……寺中の人に（元を求て）委しく案内をも尋ねばやと思ひ候（元承候へし）

【二】ワキ「あら ありがたや候さらば（元嬉しや）御供申し（元参り）候べし。サシ「げにや現住（元けんてう）奇特の……

【七】後ジテ「いや叶ふまじ……この佛（元ナシ）舍利は……

春榮（しゆんえい）

觀（寶春剛喜）

解説

【能柄】　四番目　一段劇能

【人物】　子方　增尾春榮、ワキ　高橋權頭、狂言　同從者、
　　　　シテ　增尾種直、トモ　同從者、ワキツレ　早打

【所】　伊豆國三島　高橋權頭館

【時】　（八月）

【作者】　能本作者註文に世阿彌の作としてゐる外、他に古記錄には見當らない。

【梗概】　高橋權頭は宇治橋の合戰に數多の敵を生捕つたが、その中に春榮といふ可憐な子があつた。春榮の兄增尾太郎種直は弟のやがて誅せられるといふ事を聞いて、自分もその數に加はらうと思ひ、武藏から伊豆の三島、高橋の館へ訪ねて來た。しかし春榮はその心を知つて、兄でない家人だといひ張つて會はうとしなかつたが、兄が思ひ餘つて自害しようとしたので、遂に兄弟の名乘りをあげた。やがて鎌倉から早打が來たので、高橋は已むを得ず春榮を殺さうとしたが、この早打

は實は助命の早打であつたので、一同大に喜び、春榮は高橋に望まれてその養子となり、種直は祝言の舞を舞ひ、かくて親子兄弟うち連れて鎌倉へ參る。

【出典】典據らしいものは見當らない。

【概評】謠曲の現在物のうち、親子の情愛・男女の戀愛を取扱つた純世話物には、世話巷說を題材としたものが多いが、武士の義理を描いた時代物風のものは、修羅物と同樣、大抵軍記物の類に據つてゐて、世話巷說に據つたもの、乃至作者の自ら創作した曲は甚だ少い。本曲はその尠いものの一で、なほその主題についても、他の類曲は多くは君臣父子の忠孝を說いてゐるのに、本曲には兄弟の友情を描いてゐるのは、これ亦他に殆ど見當らない珍しい例である。脚色も劇として最も發達した形で、その推移も大體滑らかに行つてゐるが、謠曲としては登場者の科白が餘りに多くて、且つその內容は同樣の事を幾度か繰返してゐて、單調平板に陷り、能樂の象徵的興趣に乏しい。一篇の分量は他の曲に比べて甚だ多いものであるが、結局能樂は普通の劇とは趣の異つたもので、普通の劇に近づくことは、能樂の特色を失ふ危險があるといふことを示した一好例でなからうかと思ふ。

【一】鎌倉に伊豆國三島、高橋權頭の館。

子方増尾春榮丸登場。次でワキ高橋權頭狂言の從者を從へて登場。

高橋「自分は高橋權頭です。さてこの度宇治橋の合戰に、味方が勝利を占め、數へ盡せない程の分捕功名を立て、自分の手にも多數の捕虜を捉へたが、その中に、春榮殿といふ少い人を生捕りにしまし

【一】子方増尾春榮、襟赤・着附縫箔・稚兒袴・腰帶・扇の裝束にて文を懷中し、脇座へ行きて下に居る。名乘笛にて、ワキ高橋權頭、梨打烏帽子・白鉢卷・着附厚板・直垂上下・込大口・小刀・扇の裝束にて、狂言從者(着附縞熨斗目・狂言上下・小刀・扇の裝束)を隨へて名乘座へ出で、

ワキ「これは高橋權の頭にて候。さてもこの度宇治橋の合戰に味方うち勝ち。分捕功名數を盡す。某が手にも囚人數多候中にも。春榮殿と申

【一】

○高橋權の頭—作者の假作した名であらう。寶・春・喜にはその名を家次とす。

○宇治橋の合戰—宇治橋は山城國宇治川に架けた橋。元曆元年正月源範賴・義經と木曾義仲との戰を指した

ものであらうか。
○春榮―假作の人物であらう。

【三】

○散らぬ先にと―春榮のはかない命を花に喩へて、自分の到着しない前に殺されてしまひはしないかと危ぶむ意。

す幼き人を生捕り申して候。この由を申し上げて候へば。近き程に誅し申せとの御事にて候間。春榮殿へこの由を申さばやと存じ候

といひて、狂言の方に向き、

ワキ「いかに誰かある

狂言「御前に候

ワキ「春榮殿は大事の囚人にてある間。番をよく仕り候へ

狂言「畏つて候

ワキ「又囚人のゆかりなど尋ね來り候とも。對面はかたく禁制の由申し候へ

狂言「心得申して候

【三】

ワキ脇座の次に坐し、狂言その次に坐す。

次第の囃子にて、シテ增尾種直、直面・襟淺黃・着附段熨斗目・掛素袍・白大口・腰帶・小刀・扇の裝束にて男笠を被り守を首にかけ、トモ種直從者、襟花色・着附無地熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束にて太刀を持ちて橋懸に出で、シテ一の松、トモ三の松にて向合ひ、

シテトモ次第「散らぬさきにと尋ね行く。散らぬさきにと尋ね行く。花をや風の誘ふらん

地取にシテは笠を脫ぎて正面の方に向き、

た。この事を鎌倉へ申しあげると、近いうちに殺せと仰せ出されたので、その事を春榮殿に話さうと思ふのです」

と見物人に自己紹介をして、事件の經過を述べる

【三】

橋懸は武藏國で、シテ增尾種直、トモ小太郎を從へて出で、

種直「どうか殺されない前に會ひたいと思つて出掛けるのであるが、風が花を散らすやうに、もはや殺されてゐはしないか知らん」

と次第に自分の心持をいひ、

シテ「これは武藏の國の住人。增尾の太郎種直にて候。さても宇治橋の合戰に弓手の肩を射させ。その矢を拔かんと少し傍に引き退き候間に。弟にて候春榮深入りし。やみやみと生捕られて候。承り候へば。生捕いづれも近き程に誅せらるる由申し候間。某も囚人の數に入らばやと存じ。唯今春榮がありかへと急ぎ候

といひて笠を被りトモと向合ひ、

シテ トモ 道行「住み馴れし。都の空は雲居にて。都の空は雲居にて。朝立ち添ふる旅衣。日も重なりて行く程に。名にのみ聞きし伊豆の國府。三島の里に着きにけり三島の里に着きにけり

シテ「名にのみ聞きし」と正面の方に向きて二三足出で、またもとに歸りて三島に着きたる心。道行濟みて笠を脫ぎ正面に向き、

シテ「急ぎ候程に。伊豆の三島に着きて候。(トモに向ひ)この所にて囚人の奉行をば。高橋とやらん申

種直「私は武藏國の住人で、增尾太郎種直といふ者です。さて宇治橋の合戰に、私は左の肩を射られて、その矢を拔かうと思つて、少し傍に退いてゐる間に、弟の春榮が敵の陣地に深入りをして、むざむざと生捕りにせられたのです。そして噂に聞けば、生捕りになつた者は皆近いうちに殺されるといふ事であるから、私もその捕虜の仲間に加つて、春榮と生死を共にしたいと思ひ、唯今春榮の居る所へ急いで出掛けるのです」

と見物人に事情を紹介し、

種直「住み馴れた都を跡にして、毎朝々々旅の宿を出掛けては日數を重ねてゐるうちに、噂にだけ聞いてゐた三島の里に着いた」

といつてゐるうちに、三島に着いた態で、

種直「旅を急いだので、はや伊豆の三島に着きました」

といつて、從者小太郎に向ひ、

種直「この所で生捕り人を管理する役人を

○增尾の太郎―假作の人物であらう。
○弓手―左の方。
○射させ―射られとの意で受身を忌んで使役の形でものをいふ武士詞である。
○深入りし―敵の陣中に深く入り。
○やみやみと―むざむざと、わけもなく。
○雲居―天上に喩へて禁中又は帝都をいふ。
○朝立ち添ふる―毎朝旅宿を立出る日數が重なるとの意。立つは衣の緣語裁つにいひかけたのである。
○日も重なりて―「日も」も衣の緣語紐にいひかけたのである。
○國府―昔國司の役所のあつた所をいふ。
○三島―田方郡にあり、伊豆の國府であつた。
○奉行―委しくは公事奉行人といひ、上の命を受けて公事を執り行ふ者。

【三】

○何の御用にて—以下この節の狂言詞、諸本の文に從ふ。
○頼みたる人—主人。
○苦しからぬ者—不審の者ではない。
○ゆかり—縁故。
○そと—一寸。

し候。尋ねて對面申したき由申し候へ

トモ「畏つて候

シテと入替り、シテは三の松へ行き、トモは舞臺際に出でて、

【三】

トモ「いかに案内申し候

狂言舞臺の眞中へ出で、

狂言「案内とは誰にて渡り候ぞ

トモ「囚人の奉行高橋殿と申すは何處に御座候ぞ

狂言「何の御用にて候ぞ。頼みたる人の事にて候

トモ「いや苦しからぬ者にて候。これは春榮殿のゆかりの者にて候。高橋殿へそと御目にかかりたき事の候ひてこれまで參りて候。その由をよく御心得あつて御申し候へ

狂言「心得申し候。囚人のゆかりの人は固く禁制にて候へども。春榮殿の御事は。頼み候人別して痛はり申され候間。その由を申して見候べし。暫く御待ち候へ

高橋とかいふのだ。その人が尋ねて、對面したいと申してくれ」

小太郎「畏りました」

【三】

舞臺に入り、

小太「お頼みします。生捕り人の管理をしてお出でになる高橋殿といふ方はどちらでございませう」

從者「何の御用です。その高橋殿といふのは私の御主人ですが……」

小太「いや不審なものではありません。こちらは春榮殿の縁故の者です。高橋殿に一寸お目にかゝりたい事がありまして、こちらへ參つたのです。どうかその事をよく汲み取つてお取次を下さい」

從者「承知しました。生捕りの縁故の者は職事に禁ぜられてゐるのですが、春榮殿の事は、御主人が特に不便に思つて可愛がつて居られるのですから、その由申して見ませう。暫くお待ち下さい」

◎さん候―この句、謠本にはない。

○痛はり―氣の毒に思つて可愛がること。

○大法―公の大切な法度。

トモ「心得申し候

狂言ワキの前に出で、

狂言「いかに申し候。春榮殿のゆかりと申して若き男の來り候ひしが。御目にかかりたき由申し候間。固く御禁制にて候へども。春榮殿の御事にて候間申し入れて見うずる由申して候

ワキ「何と春榮殿のゆかりの人と申して。某に對面ありたき由申すか

狂言「さん候

ワキ「汝の知る如く。囚人のゆかりに對面は禁制にて候へども。春榮殿の御事は別して痛はり申し候間。そと對面申さうずるにて候。さりながら大法の事にて候間。太刀刀を預かり候へ

狂言「畏つて候

狂言トモの前に出で、

狂言「いかに申し候。唯今の通りを申して候へば。固く禁制にて候へども。春榮殿のゆかりの御事にて候程に。そと御目にかからうずると申され候。さらば太刀刀を賜はり候へ

トモ「心得申し候

小太「承知しました」

家來、高橋に向ひ、

家來「申しあげます。春榮殿の縁故の者だと申して、若い男が參りまして、お目にかゝりたいと申しますから、嚴しい御禁制ではあるが、春榮殿の事だから、申しあげて見ようと申しました」

高橋「なんだと、春榮殿の縁故の者が自分に對面したいといはれると申すのか。お前の知つてゐる通り、生捕り人の縁故の者に會ふことは禁制であるが、春榮殿の事は特に不便に思つてゐるのであるから、一寸對面しよう。しかし、嚴しい御法度だから、その者の太刀刀を預かるやうに」

從者「畏りました」

種直の從者小太郎に向ひ、

從者「もうし、唯今の通りを申しましたら、嚴しい禁制ではあるが、春榮殿の縁故の方だから、一寸お目にかゝらうと申されました。それでは太刀刀をこちらへお預かりしませう」

小太「承知しました」

◎さらばかう―以下狂言詞諸本にはない。

【四】

トモ一の松にてシテに辭儀して、

トモ「尋ね申して候へば。春榮殿のゆかりならば。高橋別して痛はり申し候間。對面申さうずる由申され候。さりながら大法にて候程に。太刀刀禁制の由申し候

シテ「さらば太刀刀を參らせ候べし

シテ下に居て刀をトモに渡す。トモ受取りて狂言に、

トモ「さらば太刀刀を參らせうずるにて候（と刀を渡す）

狂言「さらばかう御通り候へ

シテ常座に立つ。トモ後見座にくつろぎ、狂言はもとの座につく。

【四】

ワキ立ちてシテに向ひ、

ワキ「春榮殿のゆかりと仰せ候はいづくに渡り候ぞ

シテ「さん候これに候

ワキ「これは春榮殿の爲には何にて渡り候ぞ

種直に向ひ、

小太「尋ねましたところ、その家来の取次に、「春榮殿の御縁故ならば、高橋が別して大事にしてあるのだから、對面しようと申されるが、重い御法度だから太刀刀を持つことは禁制だ」と、かう申します」

種直「それでは太刀刀をお預けするやうに」

種直太刀を高橋の家来に預け、橋懸に入る。

【四】

高橋「春榮殿の縁故の方と仰しやるのには、どこに居られるのだ」

種直「はい、こゝに居ります」

高橋「あなたは春榮殿とどういふ御關係です」

○ゆゆしく—雄々しく、殊勝な。

○舍兄—家兄。

シテ「これは春榮が兄に。增尾の太郎種直と申す者にて候が。今度宇治橋の合戰に弓手の肩を射させ。その矢を拔かんと少し傍に引き退き候間に。弟にて候春榮深入りし生捕られて候間。餘りに見捨て難く候へば。某も一所に誅せられん爲に。遙々これまで參りて候。春榮に引き合はせて給はり候へ

ワキ「委細承り候。これまでの御出で誠にゆゆしく候。やがてその由を春榮殿へ申し候べし暫く御待ち候へ

シテ「心得申し候

ワキ子方の前へ出で下に居て、

ワキ「いかに春榮殿へ申し候。御身の御舍兄に。增尾の太郎種直と御名乘りあつて。これまで御出でにて候。急いで御對面候へ

種直「私は春榮の兄で、增尾太郎種直と申しますが、今度宇治橋の合戰に左の肩を射られて、その矢を拔かうと、少し傍に退いてゐる間に、弟の春榮が敵陣に深入りをして生捕りになりましたので、餘りに可哀想で見棄てゝ置くことが出來ず、私も弟と一所に殺されたいと思つて、遠方の所をこちらへ參つたのです。どうか春榮にお引き合はせ下さい」

高橋「委細承知しました。遠方の所をこゝまでお出でになつたのは、ほんとに殊勝な事です。早速その事を春榮殿に申しませう。暫くお待ち下さい」

種直「承知しました」

高橋、春榮に向ひ、

高橋「春榮殿、そなたの兄御增尾太郎種直と名乘つて、こゝまでお出でになりました。すぐお會ひなさい」

○重手―重い傷。
○存命不定―生きてゐるか死んだか分らない。
○譜代―代々。
○家人―家來。

子方「これは眞しからず候。兄にて候ものは。宇治橋の合戰にて重手負ひ。存命不定とこそ承り候ひつれ

ワキ「あら不思議や。正しく御舍兄と仰せ候ものを。さりながら物の隙よりそと御覽候へ

といひて立ち、子方を少し前に立たせ、扇を開きてその間よりシテを覗かせ、直に二人とも元の座に歸りて、

子方「不思議の事にて候。譜代召しつかひ候家人にて候間。急ぎ追つ返して給はり候へ

ワキ「さては眞に家人にて候か。さあらばやがて追つ返し候べし

といひて立ちシテに向ひ、

ワキ「いかに以前の人の渡り候か

シテ「これに候

ワキ「仰せの通りを申して候へば。物の隙より御覽候ひて。兄にてはなし。譜代召しつかはるる

春榮「これはほんとらしく思はれません。私の兄は宇治橋の合戰に重傷を負うて、生死不明になつたと聞いて居ります」

高橋「これは不思議だ。確かに兄御と仰しやつたのだが。しかし、念の爲に隙間からそつと見て御覽なさい」

春榮、物の隙間から種直を見た態で、

春榮「これは不思議な事です。あれは私の家の譜代の家來ですから、すぐ追つ返して下さい」

高橋「すると、ほんとに家來なのですか。それならばすぐ追つ返しませう」

といつて、種直に向ひ、

高橋「もうし、先程の人は居られるか」

種直「こゝに居ります」

高橋「あなたのいはれた通りを春榮殿に申すと、物の隙間から御覽になつて、あれは私の兄ではない、家に召仕つた譜代の

○聊爾—粗忽、失禮。

○勝劣—是非、眞僞。

○たばかつて—欺いて。

【五】

○あらあらと申し—亂暴にいつて。

○不便—氣の毒。

家人なれば。急ぎ追つ返し申せとの御事にて候。何とて聊爾なる事をば承り候ぞ

シテ「暫く。まづ御心を靜めて聞し召され候へ。家人の身として兄と名乘り。一所に誅せらるる事の候べきか。いかやうにも御沙汰候ひて。引き合はせられて給はり候へ。某對面して。家人か兄かの勝劣を見せ申し候べし

ワキ「げにげにこれは尤もにて候。さらば某たばかつて呼び出だし候べし。その時御袖にすがられて委しく仰せ候へ

シテ「心得申し候。さらばこれに待ち申し候べし

【五】 ワキ手方の前に行き下に居て、

ワキ「いかに春榮殿に申し候。唯今の者をばあらあらと申し追つ返して候さりながら。かの者の心中餘りに不便に候間。後姿をそと御覽候へ此

家來だから、すぐ追つ返してくれ」といはれます。あなたは何故そのやうな失禮な事をいはれるのです」

種直「一寸お待ち下さい、まづ御心を靜めてお聞き下さい。もし家來の身分であつたならば、どうして兄と名乘つて一所に殺されるやうな事をしませう。何とかお取計らひ下さいまして、春榮に會はせて下さい。私が會つて、家來であるか兄であるか、どちらがほんとであるかお目にかけませう」

高橋「いかにも御尤もです。それでは私が欺いて呼び出しませう。その時春榮殿の御袖を留めて、委しくお話しなさい」

種直「承知しました。それではこゝに待つて居ります」

【五】 高橋、春榮に向ひ、

高橋「春榮殿、唯今の者を荒々しくいつて追つ返しましたが、かの者の心中が餘り氣の毒ですから、後姿を一寸御覽なさい、こちらへお出でなさい」

ト春榮を前へ出す。種直その端を見つて、

方へ渡り候へ

と子方を立たせてシテの前へやり、ワキはもの座に立つ。子方シテの前へ行きそのまゝ元の座に歸らんとするを、シテ子方の袖をとらへて、

シテ「いかに春榮。何とて某をば家人とは申すぞ。さても今度宇治橋の合戰に弓手の肩を射させ。その矢を拔かんとて少し傍に引き退き候隙に。御身は深入りし生捕られたり。その際の先途をも見屆けざれば。家人といふこと弟ながらも恥かしうこそ候へさりながら。一所に誅せられん爲に。これまで遙々來りたるに。何とてさやうには申すぞ

子方「いかに汝は三世の好みを思ひ。これまで遙々來りたる志。返す返すもやさしけれさりながら。汝は古里に歸り母御に申すべきやうは。春榮こそ誅せられ候へ。逆さまなる御弔ひにこそ

種直「おい春榮、何故自分を家來といふのだ。さて今度宇治の合戰に左の肩を射られ、その矢を拔かうと思つて、少し傍に退いてゐる隙に、そなたは敵陣に深入りして生捕られたのだ。その時の成行も見屆けなかつたのは、自分の不行屆で、その爲に自分を家來といふのは、弟ながらも氣恥かしく思ふ。しかし、そなたと一所に殺されたいと思つて、遙々こゝまで來たのに、どうしてそのやうな事を申すのだ」

春榮「おい、お前が主從三世の緣を思つて、こゝまで遠方の所を來てくれた親切は、くれぐ\も嬉しいが、お前は故郷へ歸つて、母上に、春榮が殺されました、逆さまながらどうぞ御回向下さいませと、よく申しあげてくれ」

○先途—成行。結果。

○三世の好み—主從の因緣をいふ。古諺に「親子は一世、夫婦は二世、主從は三世」

○逆さまなる御弔ひ—年の若い者が生き殘つて追善するのが普通であるのに、逆に母が子の爲に法事をすること。

○深山木のその梢とは見えざりし櫻は花に顯れにけり—詞花集、源三位頼政の歌。○くだすとも—朽たすを下すといひ誤つたのであらう。朽たすは殊更惡くいふこと。

○時を得て—前の春の歌をうけて、夏の季節を出し、時候がよくて、早くも夏になれば、すべての木の葉が生ひ茂つて、櫻も紅葉も見分けられないといふ意。○山皆染むる梢—次に秋の季節を出し、更に冬の景をいひつゞけて、文のあやとした。梢の字、竇・春・剛には時雨とある。○一千年の色—和漢朗詠集源順の詩句「十八公榮霜後露、一千年色雪中深」を轉用した。○殷のやうか—出所不明。○秦のかくい—これも分らない。

預かり候べけれとよくよく申し候へ

シテ「猶も家人と申すか。深山木のその梢とは見えざりし。櫻は花に顯れにけり。何と家人とくだすとも。終には隱れよもあらじ

子方「時を得て早くも育つ夏木立。その木をそれと見るべきか。はやとく歸れと叱りけり

シテ「山皆染むる梢にも。松は變らぬ習ひぞかし

子方「一千年の色とても。雪には暫し隱るるなり

シテ「これを物に喩ふれば。殷のやうかは父を討ち

子方「秦のかくいは師匠をうつ

シテ「今の增尾の春榮は

子方「現在の兄を家人といふ

シテ「これは逆罪たるべきに

子方「眞は深き孝行なり

種直「まだ自分を家來といふのか。――『深山木のその梢とは見えざりし、櫻は花に顯れにけり』（深山の木で、何の木だか分らなかつたものが、花が咲いたので、櫻だといふことが分つた）といふ歌のやうに、如何に家來だといひなしても、よもや何時までも隱し切ることは出來まいぞ」

春榮「いやその櫻でも、時候がよくて、早く夏になつて、木葉が生ひ茂ると、櫻の木とも見分けがつかなくなるのだ。早く歸れ」

と叱つた。

種直「いやさうではない。秋になつて山の木々は皆紅葉しても、松の綠は春と變りがないやうなものだ」

春榮「その松にしても、一千年變りのない綠の色も、雪がかゝれば暫くは隱れるのだ」

種直「お前のやり方は、例へば殷のやうかが父を討つたやうなものだ」

春榮「さうだ、秦のかくいは師匠を討つた」

種直「今の增尾春榮は現在の兄を家來といふのだ。これは惡逆の罪であるのに」

春榮「いやほんとは孝行の深い心からだ」

【六】

○忠が不忠―諺。

シテ「いやとにかくに命を捨つるまで。種直これにて腹切らん（と目附柱近く走り出て下に居り）。や。刀は参らせつ。御芳志に刀を賜はり候へ

と立ちて仕手柱際へ行く。子方シテの袖を捉へて、

子方「ならなら暫くこはいかに

といひて舞臺の眞中にて下に居り、

地「命を助け申さんとてこそ。家人とは申しつれ。忠が不忠になりけるか赦させ給へ（と手を合せ）、兄御前赦させ給へ兄御前（と直す）。上歌「種直も春榮も（子方脇座に歸り、シテ眞中に行きて共に坐し）。種直も春榮も。囚人守護の兵も。互の心を思ひやり。げに持つべきは兄弟なりとて。共に袂を濡らしけり共に袂を濡らしけり（と二人しをる）

【六】

ワキ「言語道斷。御兄弟の御心中を感じ申し。我等も落涙仕りて候。（シテに）いかに種直に申し候。某

種直「いや何は兎もあれ命を棄てるまでだ。……自分はこゝで腹を切らう……おや、刀をお預けしてしまつた。

（高橋の家來の所へ行つて、

種直「どうか御親切をもつて、刀を私に下さい」

（春榮、種直の袖を捉へて、

春榮「もうし暫くお待ち下さい。これはどうしたことであらう。命をお助けしたいと思つてこそ家來だと申したのです。これでは『忠が不忠』になつたのか、どうか兄上御免下さい」

種直も春榮も生捕り人を護衛してゐる武士達も、兄弟の心持を察して、いかにも持つべきものは兄弟だ―と、皆感涙に袂を濡らした。

【六】

高橋「實に驚き入つた。御兄弟の御心中に感服して、自分達も涙を落しました。ところで種直殿、私は春榮殿を可愛く思ふ

○面ざし—顏つき。
○申し受け—貰ひ受け。
○遺蹟—跡目。家督。
○何ともなや—何としやうもない困つたことだ。
○早打—急使。
○箱根を越さぬ先に—箱根は相摸國箱根山の險道。早打が三島を出で鎌倉に歸る途中、まだ箱根を越さない前に。時間の短い喩。早くとの意。
○目錄—囚人の姓名を目錄に記して鎌倉に差出してあるからとの意。

春榮殿を痛はり申すこと餘の儀にあらず。某子を一人持ちて候を。宇治橋の合戰に討たせて候が。（子方を見て）この春榮殿の面ざし少しも違はず候間。あつぱれ御命も助かり給ひ候へかし。某申し受け遺跡を繼がせ申したきとの念願にて候。や（と立ちて幕に向き）。何と申すぞ。これは眞にてあるか。あら何ともなや（と下に居り）。唯今申しつる事も徒事にて候。（シテへ）又鎌倉より早打立つて。箱根を越さぬ先に。囚人を皆誅し申せと仰せ出だされて候。（子方へ）御痛はしながら力なき事。春榮殿も御最期の御用意をさせ申され候へ

（シテへ）又種直は急いで古里へ御歸り候へ

シテ「暫く候。春榮が事は幼き者の事にて候間。春榮を助け。某を誅して給はり候へ

ワキ「仰せはさる事にて候へども。はや目錄にて

のは外でもありません、實は私は一人子を持つてゐましたが、宇治橋の合戰に討たれたのです、そしてこの春榮殿の顏つきがわが子と少しも違はないので、どうか旨くお命も助かるとよい、私が貰ひ受けて、跡目を相續させたいと、かう思つてゐるのです。……

おや、何といふ。これはほんとか。あゝ困つたことだ。唯今申した事も無になつてしまつた。また鎌倉から急使が來て、使のまだ箱根をも越さない前に早く、生捕りの者を皆殺してしまへと仰せ出されたのです。（春榮に）お氣の毒だが致し方がない、春榮殿も御最期の用意をなさい。それから又（と種直に）貴殿は急いで故郷へお歸りなさい」

建直「暫くお待ち下さい。春榮は年の少い者ですから、春榮を助けて、私を殺して下さい」

高橋「お詞は御尤もですが、既に生捕り人の名前は目錄にして、鎌倉へお目にかけ

○ひらに私を以て—ひらには是非といふ意。寶・剛・喜には「公の私を以て」とある

【七】

○小太郎—增尾種直の從者

○おこと—汝。

御目にかけて候間。なかなか叶ひ申すまじく候

シテ「仰せはさる事にて候へども。ひらに私を以て春榮を助け。某を誅して給はり候へ

ワキ「これは尤もにて候へども。なかなかさやうにはなるまじく候

シテ「さては力なき事。これまで遙々來り候ひて。春榮が最期を見捨て歸る事はあるまじく候間。某をも一所に誅して給はり候へ

ワキ「それはともかくもにて候

【七】

シテ(子方に)いかに春榮。古里へ形見を贈り候へ。

(トモに)いかに小太郎

トモ目附柱近くへ出でシテに向ひ蹲儀。

シテ「おことは國に歸り母御に申すべきやうは。春榮が最期の有樣餘りに見捨て難く候程に。諸共に誅せられ候。逆さまなる御弔ひにこそ預か

であるのですから、なか〳〵さういふわけには行きません」

種直「仰せは御尤もですが、是非とも内々春榮を助けて、私を代りに殺して下さい」

高橋「これは御尤もですが、なか〳〵さうは出來ません」

種直「それでは已むを得ません、これまで遠方の所を遙々と來て、春榮の最期を見棄てゝ歸ることは出來ませんから、私も一所に殺して下さい」

高橋「それは御隨意です」

【七】

種直「おい春榮、故郷へ形見を贈るやうに」

といつて春榮小太郎に向ふ。

種直「おい小太郎、お前は國に歸つて母上に、「春榮の最期の有樣が餘りに可哀想で見棄てることが出來なかつたので、私も一所に殺されました。逆さま事ながら御回向下さいませ」と、よく申しあげてくれ。それから、この守は自分が母上から戴いた守り佛の觀世音で、私の形見とし

○烏羽玉の―黑の枕詞。
○一筋を千筋と―髮が多くなつて、一筋が千筋にもなれとの意。
○撫でさせ給ひ―髮―後撰集僧正遍昭の歌に「初めて頭おろし侍りける時ものに書きつけ侍りける」と詞書して「たらちめはかゝれとてしも烏羽玉のわが黑髮を撫でずやありけん」とあるを胸に置いて綴つた。
○定めなや―老少不定の世をいふ。

り候べけれとよくよく申し候へ（と守を取出して）。〃

ドキ「これなる守は種直が。母御の方より賜はりたる。守佛の觀世音。種直が形見に御覽候へと。よくよく申し候へ（と守をトモに渡す）

子方（文を取出して）「これなる文は春榮が。最期の文にて候なり。又形見には烏羽玉の。わが黑髮の裾を切り。さばかり明暮一筋を。千筋と撫でさせ給ひし髮を。春榮が形見に參らする（とトモに渡す）

トモ子方の文を受け扇にのせて目附柱近く下に居る。

シテ「あら定めなやさるにても。われこそ殘りて御跡を。弔ふべきにさはなくて。成人の子をば先立てて

地「歎き給はん母上の御心のうち思ひやられて痛はしや

トモは次のクリに守と文を懷中して後見座へ下り樂屋に入る。

て御覽下さいませと、よく申しあげてくれ」

春榮「この手紙が私の最後の手紙でございます。又形見として、私の黑髮の先を切つて、あのやうに明暮、一筋の髮が千筋にもなるやうにと撫でて戴きました、その髮を私の形見にさし上げます」

と書いた文を小太郎に渡す。

種直「あゝ老少不定の世の中とはいひながら、自分が後に殘つて、母上の後生を弔ふのが本意であるのに、それとは反對に、折角成人した子を先立てゝ、お歎きになる母上の御心中をお察しすると、ほんとにお氣の毒だ」

【八】
○生きとし生けるもの―古今集序に「生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける」とあるを借りた。
○かなし―愛する。
○十二因緣―衆生が三界に迷ふ因緣となる、無明、行、識、名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老死。
○二十五有―衆生の生死輪廻する三界を更に細く分けた二十五種の世界で、欲界に四惡趣、四洲、六欲天の十四有、色界に四禪天、大梵天、淨居天、無想天の七有、無色界に四空處の四有、以上二十五有あるといふ。
○流轉―水の流れるがやうに生死轉々すること。
○生々―幾度も生まれかはつては生まれる世。
○又自他ならん―誰も彼も皆同じである。人は皆親子の愛に引かれるとの意。
○羊鹿牛車―法華經譬喩品に、佛が方便を以て衆生を苦界から救ひ出す喩とした三種の車。「葵上」の「三つの車」の語釋參照。
○火宅―同書に「三界無レ安猶如ニ火宅ニ」
○煩惱業苦―煩惱と罪業と苦患と。煩惱から罪業を作り、惡業の結果苦患を受けて、これを離脱し得ないこ

【八】
地クリ『げにや生きとし生けるものいづれか父母をかなしまざる。必ず一世に限るべからず。代々以て父母の。數々なり

シテサシ『それ十二因緣より。二十五有の沈淪。生じては死し死しては生じ

地『流轉に廻ること生々の親子皆以て誰か又自他ならん

シテ『然れば羊鹿牛車に乘り

地『火宅の境を出でずして。煩惱業苦の三つの綱に。繫がれ來ぬる。はかなさよ

（居クセ）

地『それ。生死に流轉して。人間界に生まるれば。八つの苦しみ離れず過去因果經を惟みよ。殺の報殺の緣。たとへば車輪の如し。われ人を失へば。かれ又われを害す。世々生涯苦しみの海に

【八】譯 實際、苟も人間と生まれ出た者で、父母の事を思はないものはないのだ。そして、親子の緣は一世だとはいふけれども、親の親、またその親と、連綿として續いてゐるのだ。

人間といふものは、十二種の因緣によつて、二十五種の樣々な世界に沈んで、生まれては死に、死んでは生まれ、水の流れるがやうに廻り廻つてゐるのであるが、いつの世に於ても、誰も彼も皆同じく親子の愛に引かれるのだ。それで、佛の方便の敎を受けても、この苦の世界を離れることが出來ず、煩惱、罪業、苦患の三つに捉はれてゐる身で、誠に果敢ないことだ。——

一體、生死の世界に輪廻して、この人間界に生まれゝば、所謂八苦を免かれることが出來ないのだ。そして過去因果經に記されてあるやうに、人を殺せば、その報いでまた自分も殺されることは、丁度車の輪が廻るやうなものだ。自分が人を殺せば、人がまた自分を殺す、このやう

とを綱に喩へていふ。
○八つの苦み—人間として避け難い苦しみ、生・老、病、死、怨憎會、愛別離・求不得、五陰盛の八苦。
○過去因果經—過去現在因果經の略。宋の求那跋陀羅の譯で、因果の理を說いたもの。
○殺の報殺の緣—人を殺せば、その因緣によつて人に殺される報いのあること。
○御法の舟橋—生死の苦海に沈む衆生を淨土の彼岸に渡す佛法の教を舟と橋とに喩へていふ。
○あづまがた—東國。
○佛法東漸—佛法が西方の印度に起つて、支那・日本へと次第に東方に行はれること。
○有明の月の—ありの音を重ねて有明といひ、有明の月、月の輪・わづかなるといひ續けた。
○わづかなる人界—壽命の短い人間界。
○來迎の夜念佛—西方淨土から阿彌陀佛が迎へに來て下さるのを待つ爲の念佛。
○聲清光に—念佛の聲を清らかに稱へる意か。
○彌陀の國—阿彌陀佛の居給ふ極樂淨土。
○涼しき道—極樂。今こゝ

浮き沈みて。御法の舟橋を。渡りもせぬぞ悲しき。殊更この國は。神國といひながら。又は佛法流布の時。教への法も盛んなり。殊に所はあづまがた。佛法東漸にあり。有明の月の。わづかなる人界急いで來迎の夜念佛聲清光に彌陀の國の。涼しき道ならば唯心の。淨土なるべし

シテ「所を思ふも頼もしや

地「ここは東路の。故郷を去つて伊豆の國府。南無や三島の明神。本地大通智勝佛過去塵點の如くにて。黄泉中有の旅の空。長闇冥の巷までも。我等を照らし給へと。深くぞ祈誓申しける雪の古枝の枯れてただに二度。花や咲きぬらん

地「ここは東路の」にツキ子方を立たせて正面先に坐せしむ。首座に直る心。また「黄泉中有の旅の空」にシテに扇をさす。シテ立ちて子方の右に坐す。ツキ直垂の右肩を脱ぎ太刀を持ちて二人の後に立ち「深くぞ祈誓申しける」に刀の柄に手を掛け將に子方を斬らんとす。

にして、いつの世になつても一生罪苦の世界に浮き沈みして、佛の教に導かれて淨土に行くことの出來ないのは、實に悲しいことだ。しかし、この日本國は特に神國といはれる國であるが、又佛法の世に行はれる時で、佛教が榮えてゐるのだ、殊にこゝは東國で、佛法東漸の方角に當つてゐるのだ。命の短いこの人間界に未練を殘さず、早く阿彌陀佛のお迎へを受けるやうに、念佛を申さう。そして、淸らかな聲を立てゝ、あの極樂淨土のやうな涼しい氣持になれば、西方極樂へ行くまでもなく、この心の中に極樂があるのだ、思へばこの所には三島明神のおはす、賴もしい所だ。自分は故鄕を去つて、關東の伊豆の國府の三島に來てゐるのだ、どうか三島明神樣、明神の御本地大通智勝佛が久遠劫の昔、世界を明らかにお照らしになつたやうに、冥途の旅路、くらやみの世界に迷ふ私どもを、どうかお照らし下さいませ」と、このやうに深くお祈りしたのであるから、枯れた古枝に二度花の咲くやうな奇蹟があるであらう。

で念佛して涼しい心持になれば、極樂淨土を遠い西方に求めないでも、わが心の中にあるとの意。

○伊豆の―故鄕を去つて出づ、といひかけた。

○大通智勝佛―三島明神の本地。法華經に見え、三千塵點劫の昔出世した佛で、彌陀も釋迦もこの後に成佛したものであるといふ。

○塵點―三千塵點劫の略。

○法華經化城喩品に大通智勝佛の出世した久遠劫の昔を喩へた語で、三千大千世界の地種を磨つて墨となし、その墨で、千の國土を過ぎる毎に一つの點を附け、かうして、少しづつ墨が減つて行つて、遂に墨のなくなる程の遙かに遠い昔といふ意

○黄泉―冥途。

○中有―死んだ後、未だ後世に落ちつかないで、魂魄の迷つてゐる間をいふ。

○長闇冥―冥途をいふ。

○雪の古枝の―降るを古にいひかく。千手陀羅尼經に「念彼觀音力、枯木華更開」續詞花集覺延法師の歌「雪ふれば誓ひたのもし初瀬山枯れたる木にも花咲きにけり」

【九】○若宮別當―鎌倉若宮八幡の別當職。假作であらう。

○豐後の禪司・豐後の次郎―同じく假作の人物であらう。

【九】

ワキヅレ早打、着附無地熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束にて文を懷中し、幕より出でながら、

早打「いかに高橋殿。鎌倉よりの早打なり。暫く御待ち候へとよ

ワキ（幕に向ひ）「すは又早打來れるは。遲し斬れとの御使か

と子方を斬らんとす。早打一の松へ出で、

早打「いや若宮別當の申しにより。囚人七人の免狀なり

ワキ太刀をかたげて、

ワキ「さて春榮殿は

早打「七人のうち

ワキ太刀を捨てて舞臺際へ走り出づ。早打文をワキに渡して切戸より入る。ワキ文を受けて名乘座に下に居り、

ワキ「ああ嬉しし嬉ししまづ讀まん。（文を開き）何々

若宮別當の申しにより。囚人七人免狀の事。第一番には別當の御弟豐前の禪師。第二番には豐

【九】

高橋、春榮を斬らうこする所へ、ワキヅレ早打登場、

早打「高橋殿、鎌倉からの急ぎのお使です。暫くお待ちなさい」

高橋「そら又急使が來たのは、『遲い、早く斬れ』とのお使か」

早打「いゝえさうではない、若宮別當の願によつて、囚はれ人七人をお免しになる赦免狀である」

高橋「して春榮殿は……」

早打「その七人のうちだ」

高橋「あゝ嬉しい、實に嬉しいことだ。まづその赦免狀を讀まう」

と早打より赦免狀を受取り、

高橋「何だと――

「若宮別當の願により、囚はれ人七人の罪を赦す。第一番には別當の御弟豐前

後の次郎。第三番には增尾の春榮丸。殘りは先
先讀みても無益（と文を下に置き）。「はや助くるぞ春
榮と

と子方を脇座へ連れ行き地謠座の前に坐す。

地「太刀の下より引き立てて。命助かる兄弟は。
嬉しさもなかなかに。思はぬ程の心かな（シテ立ち
常座へ行き）。今の心は獸の。雲に吠えけん心地し
て。千々の情ありがたき。兄弟の好みこそ誠に
あはれなりけれ

シテ舞臺の眞中へ出で下に居る。

【一〇】

ワキ「いかに誰かある
狂言「御前に候
ワキ「種直に最前の御腰の物を參らせ候へ
狂言「畏つて候

狂言刀を持ちてシテの前に出で、

狂言「扨も〳〵めでたい事かな。さらば刀を參らせうずるにて
候

○獸の雲に吠えけん心地—嬉しさに天に上る心地がするとの意に、古今集壬生忠岑の長歌「これを思へばいにしへも、藥けがせるけだものの雲に吼えけん心ちして—」を引いたのである。この故事は、神仙傳に、淮南王劉安が仙藥を飲んで登仙した事を記して「安臨去時、餘藥器還在中庭、雞犬舐啄之、盡得昇天、故雞鳴天上、犬吠雲中」とあるより出た。

【一〇】

の禪師、第二番には增俊の次郎、第三番には增尾の春榮丸、殘りは兎に角讀まなくてもよい」

と文を下に置いて、

高橋「春榮、命はもはや助かつたぞ」

と、將に殺さうとした兄弟を引き立てる。命の助かつた兄弟は、餘りの嬉しさに却つて何といつてよいやら分らない心持て、たゞ天に上るやうな思ひがした。このやうに深く思ひ合ふ兄弟の友情は、實にあはれであつた。

【一〇】

○一跡―跡目一式。

○重代の太刀―代々に傳へて來た家寶の太刀。
○千秋萬歳の―和漢朗詠集謝偃の詩句「嘉辰令月歡無レ極、萬歳千秋樂未レ央」を引く。
○盃の影も廻るや―盃より月の影を思ひ起し、月の影もめぐる、めぐるや朝日影、朝日影出づ、伊豆の三島といひ續けたのである。
○嘉辰令月―めでたい月日前掲朗詠集の詩句に據る。

（とシテに渡して引く。ワキ直垂を直してシテに向ひ、）

ワキ「いかに種直に申し候。以前も申す如く。春榮殿の御事あつぱれ御命も助かり給ひ候へかし。申し請け某が一跡を繼がせ申したきとの念願叶ひて候。この上は賜はり候へ

シテ「げにこの上は參らせ候べし

ワキ「今日は殊更最上吉日なれば（と太刀を持ちて）。家に傳はる重代の太刀。春榮殿に奉り（と子方に與へ）。

「重ねて千秋萬歳の（と子方とシテに酌をし）

地「猶悅びの盃の。影も廻るや朝日影（と正面に出で舞ひ）。伊豆の三島の、神風も吹き治むべき代の初め幾久しさとも限らじや。嘉辰令月とはこの時をいふぞめでたき（と舞ひ上げて元の座に歸る）。猶々廻る盃の。度重なれば春榮も（と子方立ちてワキとシテに酌をし）お酌に立ちて親と子の。定めを祝ふ祝言の。

高橋「種直殿、先程も申したやうに、どうか春榮殿のお命が助かるとよい、自分が貰ひ受けて、跡目を相續させたいと思つてゐた念願が達しました。この上は春榮殿を私に下さい」

種直「いかにもこの上はさし上げませう」

高橋「今日は殊に最上吉日だから、家に傳はる重代の太刀を春榮殿にあげて、重ねて千年萬年と祝はう」

と太刀を與へ酌をして、

高橋「かうして祝ひの盃を取り交はすのは誠にめでたいことで、伊豆三島明神のあらたかな御神德によつて、これより後限りなく幾久しく榮えることであらう。嘉辰令月とは全くかういふ時をいふのであらう。實にめでたいことだ」

なほも盃が次から次へと度重なつて廻ると、春榮もお酌に立つて、親子の契りを祝つて、千秋萬歳と祝言の舞を舞ふのである。

○千代に八千代に—和漢朗詠集讀人不知の歌「君が代は千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで」を引いた。
○祝ふ心は—さゞれ石の巖を祝ふにいひかけた。
○萬歲樂—雅樂の曲名。
【二】
○一さし—一曲。
○そと—ちよつと。
○東路の秩父の山の松の葉の千代の影添ふ若綠かな—東遊の歌。
○老木も若綠—養父を祝つていふ。
○立つや若竹—養子を祝ふ

千秋萬歲の舞の袖。飜し舞ふとかや（子方元の座に歸る）
シテ『千代に八千代をさゞれ石の
地『祝ふ心は萬歲樂
【二】
ワキ「いかに種直。かかるめでたき折なれば一さし御舞ひ候へ
シテ「さらばそと舞はうずるにて候（と立ち）
地『祝ふ心は萬歲樂
〔男舞〕
を舞ひ、なほ引續き次の謠に合せて舞ふ。
シテワカ『東路の。秩父の山の。松の葉の
地『千代の影添ふ若綠かな。若綠かな若綠かな
シテ『老木も若綠
地『立つや若竹の
シテ『親子の睦み

種直「——
『千代に八千代にさゞれ石の、巖となるまで君が代は、萬歲樂と榮えませ』
と謠ふ。
【二】
高擧「種直殿、實にめでたい時だから、一曲お舞ひ下さい」
種直「それでは一寸舞ひませう。——
『……萬歲樂と榮えませ』
と謠ひ、
〔男舞〕
を舞ひ、
種直「——
『東路の秩父の山の松の葉の、千代の影添ふ若綠かな』
（東國の秩父山の松の葉が、千代までの榮えを示して、若々しい綠の色をしてゐる。そのやうに、あなたも幾久しくお榮えになるでせう）と祝ひの歌を謠ひ、
種直「お年寄も若々しくて、養子も出來、親子の間は睦ましく、又兄弟の仲も睦ましく、どれもこれも睦ましくて、親子兄弟

○利生―衆生を利益すること。

地「又は兄弟かれといひこれといひいづれもいづれも。睦ましく。親子兄弟と榮ふる事も。これ孝行を。守り給ふ。三島の宮の。御利生と伏し拜み。親子兄弟さも睦ましく。うち連れて。鎌倉へこそ參りけれ

「いづれもいづれも睦ましく」にワキ子方を立たせ、子方を前に置きて名乘座に坐し、「御利生と伏し拜み」とシテ正面先に下に居て三人ともに神を拜し、「親子兄弟さも睦ましく」にワキは子方を先に立てて幕に入り、シテは「鎌倉へこそ參りけれ」と常座に留拍子を踏む。

打揃つて榮えるのは、全く孝行をお守り下さる三島明神の御利益によるのです」と明神を伏し拜んで、親子兄弟さも睦ましげにうち連れて、鎌倉へ行つた。

鎌倉に行く態で一同退場。

〔考　異〕

諸　流　（五　流）

【一】ワキ「これは（剛鎌倉殿の御内に）高橋權の頭（寶春喜家次）にて候……生捕り申して候この由を申し上げて候へば……春榮殿へこの由を（剛志見えたる人にて候程に。別して痛はり申し候。因人いざなひ下る程にこれは早。伊豆の三島に着きて候。これより鎌倉へ飛脚を立て。御左右次第にて誅し申さばやと存じ候）【三】子方「これは眞しからず候……存命不定とこそ承り候ひつれ（剛何と某が兄と名乘りこれまで下りたると候や。ワキ「なか／＼の事。子方「總じて某は兄は持たぬにて候）【五】ワキ「いかに春榮……までもこの度宇治橋の合戰に……何とてさやうには申すぞ（剛やがて心得て候。現在の弟をだにも見捨つる程の不覺人なれば。兄と名乘らんも面よごしと思ひさやうに申すか。弟ながらも恥かしうこそ候へ）

古諸本　（貞享二年本）

【一】ワキ「これは高橋權の頭(貞家次)にて候……　【三】トモ「囚人の(貞ナシ)奉行高橋……トモ「いや苦しからぬ……ゆかりの者にて候(貞か)……ワキ「汝の知る(貞存知の)如く囚人のゆかりに對面(貞など)は禁制……對面申さうずるにて候(貞と申候へ)……太刀刀を預かり(貞禁制の由申)候へ……　【四】子方「これは(貞ナシ)苦しからず候……合戰にて(貞ナシ)……子方「不思議や……家人にて候間(貞ナシ)……ワキ「仰せの通りを……家人なれば(貞にて候へ)ば……シテ「暫く……勝劣を見せ申し(貞ナシ)候べし……シテ「心得申し(貞承て)候

【五】シテ「いかに春榮……肩を射させその矢を拔かんとて(貞ナシ)少し……　【六】ワキ「言語道斷……某(貞ナシ)子を一人……違はず候間(貞ナシ)……又種直(貞の事)は急いで……シテ「仰せは……ひらに私を以て春榮を助け某を誅し(貞某を誅し春榮を助け)て給はり……シテ「さては(貞さあらは)力なき事……　【九】早打「いや(貞ナシ)若宮別當の……　【一〇】ワキ「今日は殊更最上吉日なれば(貞にて候間)……　【一一】シテ「さらばそと舞はらずるにて候(貞ナシ)

謠曲大觀總目錄

（曲名の左に括弧のあるものは括弧内の曲を見よ。別卷は索引その他）

首卷

第一卷

第二卷

第三卷

第四卷

第五卷

能樂の演出
能樂の種類
能舞臺
演奏者
能面
能裝束
能作物・能小道具
能樂の演奏

能樂の價値
複式夢幻能の意義
能樂の藝術美
謠曲の思想
狂言との對比
謠曲の影響
謠本・參考書

術語略解

現行曲一覽表

能樂畫譜
能舞臺全景
能面
能裝束
能小道具
能作物
狂言面
狂言裝束
能樂器
現行謠本
古謠本

雨月　右近　歌占　內外詣　善知鳥　采女　鵜祭　梅　梅枝　鱗形　雲林院

え

江口　江島　箙

お

老松　大原御幸　大江山　大社

か

項羽　高野物狂　杜若　景清　柏崎　春日龍神　合浦　葛城　鐵輪　兼平

花月

け

月宮殿（鶴龜）　現在七面　源氏供養　絃上　源太夫　元服曾我

こ

小督　小鍛冶　小袖曾我　胡蝶　戀重荷

さ

西行櫻　草子洗小町　逆矛　鷺　櫻川　實盛　佐保山　三笑

し

志賀　七騎落　自然居士　猩々　正尊　石橋　舍利　春榮

大瓶猩々　第六天　大會　道成寺　唐船　道明寺　當麻　高砂　竹雪　忠信　忠度　龍田　谷行　玉葛　玉井　田村　壇風

ち

竹生島　張良

つ

土蜘蛛　土車　網（羅生門）　經政　妻戸（雷電）　鶴龜

て

定家　調伏曾我

白樂天　羽衣　半蔀　橋辨慶附笛之卷　芭蕉　鉢木　初雪　花筐　班女

ひ

飛雲　檜垣　雲雀山　氷室　百萬

ふ

笛之卷（橋辨慶）　富士山　富士太鼓　二人靜　藤　藤戸　船橋　船辨慶

ほ

佛原

ま

卷絹　枕慈童（觀世以外有慈童）

や

楊貴妃　養老　八島　山姥

ゆ

雪　遊行柳　夕顏　弓八幡　熊野

よ

夜討曾我　吉野靜　吉野天人　賴政　弱法師

ら

雷電　羅生門

り

龍虎　輪藏

ろ

籠太鼓

ゐ

井筒

ゑ

烏帽子折　繪馬

を

小鹽　姨捨　女郎花　大蛇

昭和五年十二月二十日印刷
昭和五年十二月二十五日發行
昭和十七年三月十七日七版發行

謡曲大観第一巻奥付

定價金四圓八拾錢

著者 佐成謙太郎

發行者 東京市神田區錦町一丁目十六番地 三樹彰

印刷者 東京市下谷區二長町一番地 山田三郎太

印刷所 東京市下谷區二長町一番地 凸版印刷株式會社

發行所 東京市神田區錦町一丁目 【振替貯金口座東京四九九一番】 明治書院

電話神田(25) 二一四七番 二一四八番 二一四九番

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

(日本出版文化協會會員番號 134008番)